東九州自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

－ 22 －

塔田琵琶田遺跡第２次

福岡県豊前市久路土所在遺跡の調査

2015

九州歴史資料館

序

福岡県では、平成 19 年度より、東九州自動車道（苅田北九州 IC 以南）に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は平成 23 年度に調査を行った、福岡県豊前市に所在する塔田琵琶田遺跡第 2 次調査の記録です。

塔田琵琶田遺跡群は、細長い微高地上に広がる古墳時代前期・後期・古代の集落跡です。現在の行政上は二つの地区にまたがっており、塔田琵琶田遺跡のほか時末遺跡・西ノ原遺跡の名前でも調査されていますが、本来は同一の大規模な集落を構成していたと考えられます。集落跡の規模は周辺でも特に大きく、南北長 500m、東西幅 100m ほどの範囲にひろがり、450 棟をこえる数の竪穴住居や、掘立柱建物などが存在していたことが明らかになっています。また、この時期の集落からは朝鮮半島から伝わった「L 字状カマド」といわれる特徴的な形のカマドが多く確認されていますが、本遺跡は、正倉院に残る古代の戸籍に、渡来系とされる姓を持つ人々が多く住んでいたことが記録される古代のムラの「炊江郷」比定地に近接していることから、その関係が大いに注目されます。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成 27 年 3 月 31 日

九州歴史資料館

館長　杉光　誠

例　言

1．本書は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県豊前市久路土所在の塔田（トウダ）琵琶（ビワ）田（タ）遺跡第２次調査の調査報告である。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第 22 集にあたる。

2．発掘調査と整理報告は、西日本高速道路株式会社の委託を受けて、九州歴史資料館が実施した。

3．本書に掲載した遺構写真の撮影は小澤佳憲・大森真衣子が、また遺物写真は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は（有）空中写真企画に委託し、ラジコンヘリコプターによる撮影を行った。

4．本書に掲載した遺構図の作成は小澤・大森が行い、発掘作業員が補助した。

5．出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、小池史哲・城門義廣の指導の下に実施した。

6．出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

7．本書に使用した分布図は国土交通省国土地理院発行の 1/25,000 地形図「椎田」・「中津」・「下河内」・「土佐井」を加筆改変したものである。また、本書に使用した調査区位置図は豊前市発行の 1/2,500 基本図を加筆改変したものである。旧地形の復元に際しては、豊前市農林水産課より圃場整備前の地形測量図（「県営農村活性化住環境整備事業黒土西部地区計画平面図５（1/1,000）」）の提供を受けた。

8. 本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。

9. 本書は、「Ⅲ－４　Ⅲ区の調査成果」項の各遺構の説明について大森が原稿を執筆し、小澤が適宜加筆・改編した。また、第Ⅳ章Ⅰ－（１）は（株）古環境研究所に執筆を依頼した。そのほかは小澤が執筆した。全体の編集は小澤が担当した。

表目次

第１表　東九州自動車道中津工事事務所管内における埋蔵文化財発掘調査地点一覧…… 3
第２表　塔田琵琶田遺跡群における既往の調査…… 17
第３表　遺跡出土黒曜石等剥片一覧……172
第４表　放射性炭素年代測定試料および処理……177
第５表　放射性炭素年代測定結果……178
第６表　放射性炭素年代測定結果と共伴遺物の年代観……182
第７表　塔田琵琶田遺跡第２次調査出土竪穴住居跡一覧……186

目　次

Ⅰ　はじめに…… 1
　1　調査の経過…… 1
　2　調査の組織…… 6
Ⅱ　位置と環境…… 7
　1　地理的環境…… 7
　2　歴史的環境…… 9
Ⅲ　調査の報告…… 17
　1　調査の概要…… 17
　2　Ⅰ区の調査成果…… 18
　（1）概要…… 18
　（2）竪穴住居跡…… 18
　（3）掘立柱建物跡…… 92
　（4）土坑…… 93
　（5）土壙墓…… 95
　（6）溝…… 96
　（7）谷状落ち込み…… 96
　（8）性格不明遺構……101
　（9）その他の出土遺物……101
　3　Ⅱ区の調査成果……105
　（1）概要……105
　（2）掘立柱建物跡……105
　（3）谷状落ち込み……105
　（4）その他の出土遺物……116
　4　Ⅲ区の調査成果……117
　（1）概要……117
　（2）竪穴住居跡……118
　（3）土坑……162
　（4）方形竪穴状遺構……164
　（5）谷状落ち込み……165
　（6）その他の出土遺物……166
　5　その他の出土遺物……169
　（1）出土地不明の土器……169
　（2）土器以外の出土遺物……169
Ⅳ　総括……177
　1　遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定……177
　（1）塔田琵琶田遺跡における放射性炭素年代測定……177
　（2）放射性炭素年代測定結果の評価……181
　2　検出遺構の検討……185
　（1）集落動態の概要……185
　（2）古墳時代前期の竪穴住居跡と集落……185
　（3）古墳時代中～後期の竪穴住居跡と集落……186
　（4）カマドの構造……188
　3　まとめ……190

図版目次

図版 1　1　遺跡周辺の環境（南から）　2　遺跡周辺の土地利用（上が北）
図版 2　1　調査地上空から北をのぞむ　2　調査地上空から南をのぞむ
図版 3　1　上空から千束原古墳群をのぞむ（南東から）
2　上空から求菩提山をのぞむ（北東から）
図版 4　1　Ⅰ区（合成、上が北）
図版 5　1　Ⅱ区（合成、上が北）
図版 6　1　Ⅲ区（上が北）　2　Ⅰ区住居集中部（上が西）
図版 7　1　1～4 号竪穴住居跡（南から）　2　1 号竪穴住居跡カマド（南から）
3　1 号竪穴住居跡カマド・煙道（東から）
図版 8　1　2 号竪穴住居跡（東から）　2　2 号竪穴住居跡カマド（東から）
3　2 号竪穴住居跡カマド・煙道（南から）
図版 9　1　3 号竪穴住居跡（東から）　2　3 号竪穴住居跡カマド（東から）
3　4 号竪穴住居跡（東から）
図版 10　1　4 号竪穴住居跡カマド・煙道（南から）　2　5 号竪穴住居跡（南から）
3　5 号竪穴住居跡カマド（南から）
図版 11　1　6 号竪穴住居跡（東から）　2　6 号竪穴住居跡カマド（東から）
3　7 号竪穴住居跡（西から）
図版 12　1　7 号竪穴住居跡カマド（南から）　2　8・17・18 号竪穴住居跡（北西から）
3　9 号竪穴住居跡（東から）
図版 13　1　9 号竪穴住居跡カマド（東から）　2　9 号竪穴住居跡カマド・煙道（南から）
3　9 号竪穴住居跡東半（Ⅰ区補足調査分、西から）
図版 14　1　10 号竪穴住居跡（東から）　2　10 号竪穴住居跡カマド（東から）
3　10 号竪穴住居跡カマド煙道（南から）
図版 15　1　10 号竪穴住居跡下層掘り込み（東から）　2　11 号竪穴住居跡（東から）
3　11 号竪穴住居跡カマド（東から）
図版 16　1　11 号竪穴住居跡カマド（北から）　2　12 号竪穴住居跡（北東から）
3　13～15 号竪穴住居跡（南から）
図版 17　1　16 号竪穴住居跡東半（Ⅰ区補足分、北から）　2　19 号竪穴住居跡（東から）
3　19 号竪穴住居跡カマド（東から）
図版 18　1　20 号竪穴住居跡（東から）　2　22･23 号竪穴住居跡（東から）
3　22 号竪穴住居跡カマド（東から）
図版 19　1　22 号竪穴住居跡床下掘り込み床面工具痕跡（北から）
2　24 号竪穴住居跡（東から）　3　24 号竪穴住居跡カマド（東から）
図版 20　1　25･26 号竪穴住居跡（西から）　2　27･28･40 号竪穴住居跡（西から）
3　27 号竪穴住居跡東半（Ⅰ区補足分、東から）
図版 21　1　29 号竪穴住居跡（東から）　2　29 号竪穴住居跡（Ⅰ区補足分、東から）
3　30 号竪穴住居跡（西から）
図版 22　1　30 号竪穴住居跡カマド（西から）　2　31 号竪穴住居跡（東から）
3　31 号竪穴住居跡カマド（東から）
図版 23　1　32 号竪穴住居跡（東から）　2　32 号竪穴住居跡カマド（東から）
3　32 号竪穴住居跡カマド煙道（南から）
図版 24　1　33 号竪穴住居跡（南から）　2　33 号竪穴住居跡カマド（南から）
3　34 号竪穴住居跡（東から）
図版 25　1　34 号竪穴住居跡カマド（東から）　2　35 号竪穴住居跡（南から）
3　1 号掘立柱建物跡（南から）

図版 26　1　1 号土坑（北東から）　2　2 号土坑（北から）
3　3 号土坑（北から）
図版 27　1　4 号土坑（東から）　2　5 号土坑（南から）
3　6 号土坑（東から）
図版 28　1　SX － 01（南から）　2　SX － 03（南東から）　3　1 号土壙墓（南から）
図版 29　1　42･43 号竪穴住居跡（北から）　2　44･52 号竪穴住居跡（北から）
3　45 号竪穴住居跡（北から）
図版 30　1　46 ～ 48 号竪穴住居跡（東から）　2　46 号竪穴住居跡カマド（西から）
3　47 号竪穴住居跡炉跡（南から）
図版 31　1　49 号竪穴住居跡（北から）　2　50 号竪穴住居跡（北から）
3　51 号竪穴住居跡（西から）
図版 32　1　52 号竪穴住居跡（西から）　2　53 号竪穴住居跡（南から）
3　54 ～ 56 号竪穴住居跡（東から）
図版 33　1　55 号竪穴住居跡カマド（東から）　2　55 号竪穴住居跡カマド煙道（南から）
3　57 号竪穴住居跡（北から）
図版 34　1　59 号竪穴住居跡（南から）　2　59 号竪穴住居跡カマド（南から）
3　60 号竪穴住居跡（東から）
図版 35　1　60 号竪穴住居跡カマド（東から）　2　60 号竪穴住居跡カマド煙道（南から）
3　61･62 号竪穴住居跡（南から）
図版 36　1　61 号竪穴住居跡カマド（東から）　2　61 号竪穴住居跡カマド煙道（西から）
3　62 号竪穴住居跡カマド（南から）
図版 37　1　63 号竪穴住居跡（南から）　2　63 号竪穴住居跡カマド（南から）
3　63 号竪穴住居跡カマド煙道（西から）
図版 38　1　64 号竪穴住居跡（南から）　2　65 号竪穴住居跡（南東から）
3　65 号竪穴住居跡カマド（南東から）
図版 39　1　65 号竪穴住居跡カマド煙道（南西から）　2　67 号竪穴住居跡（南から）
3　67 号竪穴住居跡カマド（南から）
図版 40　1　69 号竪穴住居跡（東から）　2　70･71･73･74 号竪穴住居跡（上が北）
3　70 号竪穴住居跡 ･1 号方形竪穴状遺構（東から）
図版 41　1　70 号竪穴住居跡カマド（東から）　2　70 号竪穴住居跡カマド煙道（南から）
3　2 号方形竪穴状遺構（西から）
図版 42　1　7 号土坑（北から）　2　8 号土坑（北から）　3　10 号土坑（西から）
図版 43　1 号竪穴住居跡出土土器
図版 44　1 号竪穴住居跡出土土器
図版 45　1･2 号竪穴住居跡出土土器
図版 46　3 号竪穴住居跡出土土器
図版 47　3 号竪穴住居跡出土土器
図版 48　3･5 ～ 7･9 号竪穴住居跡出土土器
図版 49　9･10 号竪穴住居跡出土土器
図版 50　10･11 号竪穴住居跡出土土器
図版 51　11･12 号竪穴住居跡出土土器
図版 52　13･14･16･19･20 号竪穴住居跡出土土器
図版 53　20･22 号竪穴住居跡出土土器
図版 54　22･24･27･29 号竪穴住居跡出土土器
図版 55　29 ～ 34 号竪穴住居跡出土土器
図版 56　34･40 号竪穴住居跡 ･1 号溝出土土器
図版 57　Ⅰ区 SX － 02 谷状落ち込み・ピット・検出時その他出土土器

図版 58　Ⅰ区検出時・その他出土土器
図版 59　Ⅱ区 SX － 04 谷状落ち込み出土土器
図版 60　Ⅱ区 SX － 04 谷状落ち込み、42･46･47 号竪穴住居跡出土土器
図版 61　47･51 ～ 53 号竪穴住居跡出土土器
図版 62　53 号竪穴住居跡出土土器
図版 63　53･55 号竪穴住居跡出土土器
図版 64　54･57･59 ～ 63 号竪穴住居跡出土土器
図版 65　62･63･66 号竪穴住居跡出土土器
図版 66　70 号竪穴住居跡出土土器、Ⅲ区遺構集中部検出中出土土器、Ⅲ区検出時・その他出土土器
図版 67　Ⅲ区検出時・その他出土土器、その他の遺跡出土土器・石器・石製品
図版 68　遺跡出土石器・石製品・鉄器
図版 69　遺跡出土鉄器
図版 70　遺跡出土鉄器・鉄滓・青銅器・土製品・玉類

図目次

第 1 図　東九州自動車道の概略と調査地点（中津工事事務所管内分）･･･2
第 2 図　塔田琵琶田遺跡第 2 次調査区位置図（1/5,000）･･･8
第 3 図　圃場整備前の微地形（1/5,000）･･･9
第 4 図　遺跡周辺の歴史的環境（1/50,000）･･･11
第 5 図　塔田琵琶田遺跡第 2 次調査区全体図（1/600）･･･16
第 6 図　塔田琵琶田遺跡第 2 次調査Ⅰ区遺構配置図（1/300）･･･19
第 7 図　1 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）･･･21
第 8 図　1 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）･･･22
第 9 図　1 号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）･･･23
第 10 図　1 号竪穴住居跡出土土器実測図その③（1/3）･･･24
第 11 図　1 号竪穴住居跡出土土器実測図その④（1/3）･･･25
第 12 図　2 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）･･･27
第 13 図　2 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）･･･28
第 14 図　3･4 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）･･･29
第 15 図　3 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）･･･31
第 16 図　3 号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）･･･32
第 17 図　3 号竪穴住居跡出土土器実測図その③（1/3）･･･33
第 18 図　5 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）･･･35
第 19 図　6 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）･･･36
第 20 図　7 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）･･･38
第 21 図　8 号竪穴住居跡実測図（1/60）･･･39
第 22 図　9 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）･･･40
第 23 図　5 ～ 7･9 号竪穴住居跡出土土器実測図（8 は 1/4、他は 1/3）･･･41
第 24 図　10 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）･･･43
第 25 図　10 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）･･･45
第 26 図　10 号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）･･･46
第 27 図　11 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）･･･48
第 28 図　11 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）･･･49
第 29 図　12 号竪穴住居跡実測図（1/60）･･･50
第 30 図　12 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）･･･51
第 31 図　13 ～ 15 号竪穴住居跡実測図（1/60）･･･53

第 32 図　16·17 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 55
第 33 図　13·14·16 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 56
第 34 図　18 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 56
第 35 図　19 号竪穴住居跡·カマド実測図（1/60·1/30）…… 58
第 36 図　19 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 59
第 37 図　20 号竪穴住居跡·カマド実測図（1/60·1/30）…… 61
第 38 図　20 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 62
第 39 図　21 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 63
第 40 図　21 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 64
第 41 図　22·23 号竪穴住居跡·カマド実測図（1/60·1/30）…… 65
第 42 図　22 号竪穴住居跡掘り込み工具痕実測図（1/30）…… 66
第 43 図　22 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 67
第 44 図　24·25 号竪穴住居跡·カマド実測図（1/60·1/30）…… 69
第 45 図　26·27 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 72
第 46 図　23 ～ 27 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 73
第 47 図　28·29·39·40 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 75
第 48 図　28·29 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 76
第 49 図　30·31·38 号竪穴住居跡·カマド実測図（1/60·1/30）…… 78
第 50 図　32 号竪穴住居跡·カマド実測図（1/60·1/30）…… 80
第 51 図　30 ～ 32 号竪穴住居跡出土土器実測図（3 は 1/4、他は 1/3）…… 81
第 52 図　33·34 号竪穴住居跡·カマド実測図（1/60·1/30）…… 83
第 53 図　33 ～ 35 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 85
第 54 図　35·36·41 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 86
第 55 図　37·73·75 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 88
第 56 図　36 ～ 38·40 号竪穴住居跡出土土器実測図（13 は 1/6、他は 1/3）…… 90
第 57 図　1 号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 92
第 58 図　1 ～ 6 号土坑実測図（1/40）…… 94
第 59 図　1 号土壙墓実測図（1/40）…… 95
第 60 図　1 号掘立柱建物跡、1·5·6 号土坑、1 号土壙墓、1 号溝出土土器実測図（10 は 1/4、他は 1/3）
…… 97
第 61 図　SX － 02 谷状落ち込み出土土器実測図その①（1/3）…… 98
第 62 図　SX － 02 谷状落ち込み出土土器実測図その②（16 は 1/6、他は 1/3）…… 99
第 63 図　SX － 03 谷状落ち込み出土土器実測図（1/3）…… 101
第 64 図　SX － 01 実測図（1/40）…… 101
第 65 図　Ⅰ区ピット出土土器実測図（1/3）…… 101
第 66 図　Ⅰ区検出時、その他出土土器実測図（4 は 1/6、他は 1/3）…… 103
第 67 図　塔田琵琶田遺跡第 2 次調査Ⅱ区遺構配置図（1/300）…… 104
第 68 図　2 号掘立柱建物跡実測図（1/40）…… 106
第 69 図　Ⅱ区 SX － 04 谷状落ち込み土層図（1/60）…… 107
第 70 図　Ⅱ区 SX － 04 谷状落ち込み出土土器実測図その①（3 ～ 20 は 1/4、他は 1/3）…… 108
第 71 図　Ⅱ区 SX － 04 谷状落ち込み出土土器実測図その②（1/3）…… 109
第 72 図　Ⅱ区 SX － 04 谷状落ち込み出土土器実測図その③（1/3）…… 110
第 73 図　Ⅱ区 SX － 04 谷状落ち込み出土土器実測図その④（1/3）…… 112
第 74 図　Ⅱ区 SX － 04 谷状落ち込み出土土器実測図その⑤（1/3）…… 113
第 75 図　Ⅱ区 SX － 04 谷状落ち込み出土土器実測図その⑥（1/3）…… 114
第 76 図　Ⅱ区 SX － 04 谷状落ち込み出土土器実測図その⑦（1/3）…… 115
第 77 図　Ⅱ区ピット出土土器実測図（1/3）…… 116
第 78 図　Ⅱ区検出中等出土土器実測図（1/3）…… 116

第 79 図　塔田琵琶田遺跡第 2 次調査Ⅲ区遺構配置図（1/300）…… 117
第 80 図　42 ～ 45･52 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 119
第 81 図　46 ～ 48 号竪穴住居跡実測図（1/60･1/30）…… 121
第 82 図　42･46･47 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 123
第 83 図　49･50･68･76･77 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 124
第 84 図　51･53 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 126
第 85 図　49 ～ 51 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 127
第 86 図　52 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 128
第 87 図　53 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1･2 は 1/4、他は 1/3）…… 129
第 88 図　53 号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）…… 130
第 89 図　53 号竪穴住居跡出土土器実測図その③（1/3）…… 131
第 90 図　53 号竪穴住居跡出土土器実測図その④（1/3）…… 132
第 91 図　54･56 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 134
第 92 図　55 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）…… 135
第 93 図　57･58 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 137
第 94 図　54･55･57･58 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 138
第 95 図　59 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）…… 140
第 96 図　60 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）…… 142
第 97 図　59･60 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 143
第 98 図　61 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）…… 144
第 99 図　62･64 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）…… 146
第 100 図　63 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）…… 147
第 101 図　61 ～ 63 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 148
第 102 図　65･66 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）…… 150
第 103 図　64 ～ 66 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 151
第 104 図　67･69 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）…… 153
第 105 図　70 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）…… 155
第 106 図　68･70 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 156
第 107 図　71･72 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 158
第 108 図　71･72 号竪穴住居跡出土土器実測図（3 は 1/6、他は 1/3）…… 159
第 109 図　70 ～ 72 号竪穴住居跡、1 号方形竪穴状遺構検出時出土遺物実測図（1/3）…… 160
第 110 図　7 ～ 10 号土坑実測図（1/40）…… 163
第 111 図　9･10 号土坑出土土器実測図（1/3）…… 164
第 112 図　1･2 号方形竪穴状遺構実測図（1/60）…… 165
第 113 図　Ⅲ区 SX － 04 谷状落ち込み出土土器実測図（1/3）…… 166
第 114 図　Ⅲ区ピット出土土器実測図（1/3）…… 166
第 115 図　Ⅲ区検出時、その他出土土器実測図（3 は 1/4、他は 1/3）…… 168
第 116 図　その他の遺跡出土土器実測図（1/3）…… 169
第 117 図　遺跡出土石器･石製品実測図その①（1 ～ 14 は 1/1、他は 1/2）…… 170
第 118 図　遺跡出土石器･石製品実測図その②（1/2）…… 173
第 119 図　遺跡出土金属器実測図（24 の実測図･拓本は 1/1、他は 1/2）…… 174
第 120 図　遺跡出土土製品･玉類実測図（1･2 は 1/2、他は 1/1）…… 176
第 121 図　暦年較正結果その①…… 179
第 122 図　暦年較正結果その②…… 180
第 123 図　古墳時代前期の竪穴住居跡…… 185
第 124 図　古墳時代中～後期の竪穴住居跡…… 186
第 125 図　竪穴住居跡の規模…… 188
第 126 図　時期別の竪穴住居跡分布（1/600）…… 189

Ⅰ　はじめに

1　調査の経過

東九州道の概要　東九州道は、福岡県北九州市を起点とし、大分市、延岡市、宮崎市を経由して鹿児島市に至る基幹道路として計画された、延長約 436 キロメートルの高速自動車国道である。

九州における高速道路網は、最も早くに計画された九州縦貫自動車道が、佐賀県鳥栖市より南側において九州島の西寄りを南北に貫いており、九州島中～南部における西側の交通の利便性は早くに向上した。しかしその一方、東に位置する大分・宮崎地方の利便性はさほど改善されなかった。

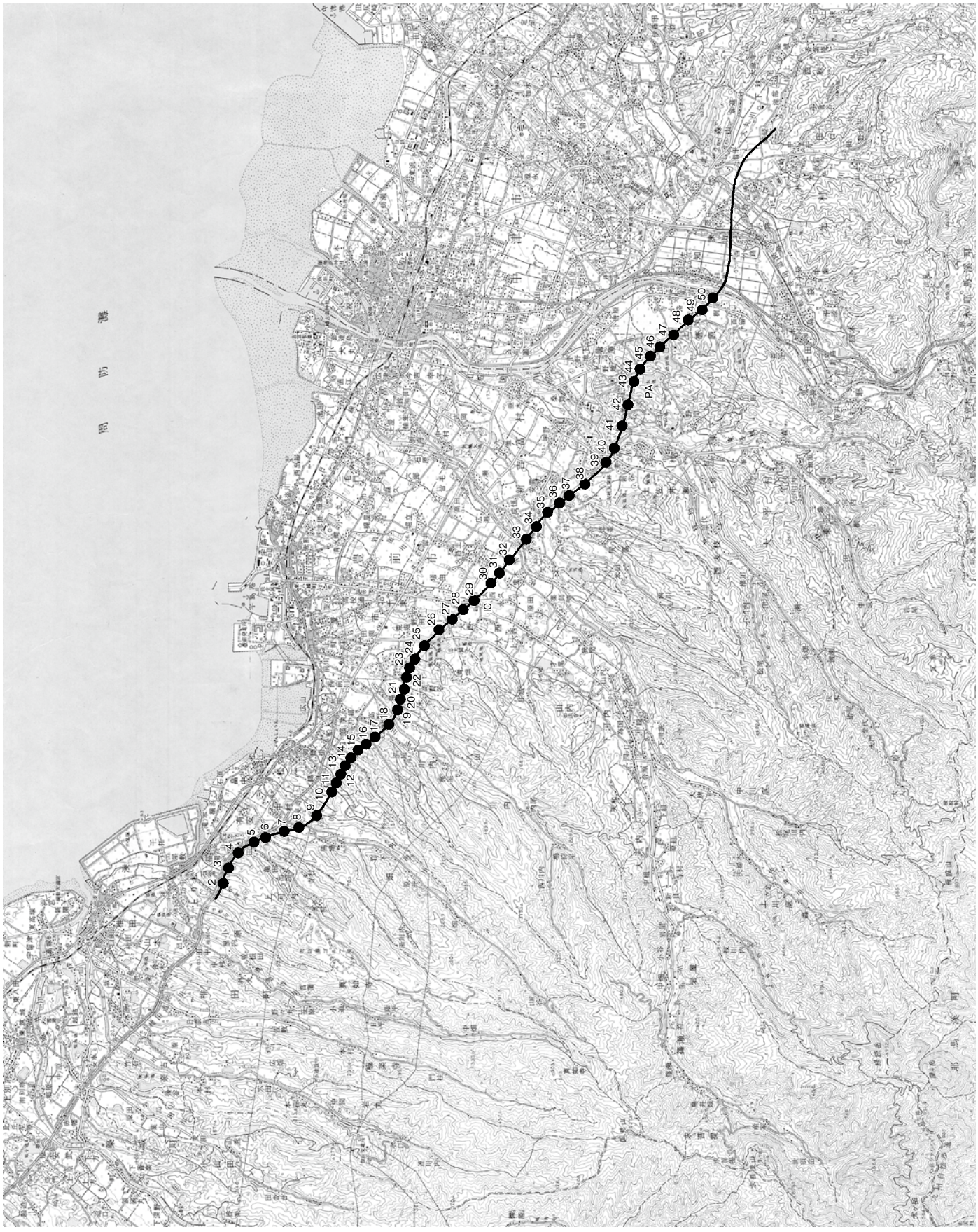
東九州道が開通すれば、九州地方の 8 カ所の基幹都市圏のうち東九州地方に位置する 5 カ所の基幹都市圏の間を相互に結ぶ、東九州地方の高速交通ネットワークが完成することになる。さらに、縦貫道・大分自動車道・宮崎自動車道などと接続することで九州地方全体の広域的な連携が向上し、地域産業及び地域経済の活性化を促し、沿線諸都市の発展等に資することが期待されることから、地域における重要な基幹交通として、全線開通が期待されているところである。

県内における東九州道の工事　福岡県内では、すでに 2006 年には九州縦貫道からの分岐地点である北九州 JCT から、苅田北九州空港 IC までの 8.2 ｋｍが開通している。また苅田北九州空港 IC ～行橋 IC 間も 2014 年 3 月に、行橋 IC ～豊津 IC 間も同年 12 月に開通した。豊津 IC から先は一般国道自動車専用道路として 1993 年 12 月に全線開通した有料の椎田道路（椎田バイパス）と直結しており、県内における残された未開通区間は椎田道路の椎田南 IC 以南のみとなった。椎田南 IC より南側については、大分県宇佐 IC までの区間が残された未開通区間となり、現在西日本高速道路株式会社（以下、NEXCO 西日本とする）九州支社によって、2016 年度末の開通を目指して工事が進められているところである。

東九州道建設に先立つ発掘調査　東九州自動車道の整備計画策定からの文化財調査にかかる経緯については、先行する報告書に詳しく記載されているために本書では割愛することとし、本書で報告する塔田琵琶田遺跡第 2 次調査の着手までの経緯を簡単に見ておきたい。

遺跡の発見と既往の調査　塔田琵琶田遺跡は平成 11 年に圃場整備事業に先立つ試掘確認調査により見つかった。このときは遺跡の最も北側が豊前市教育委員会により調査され、古墳時代前期・後期を中心とする集落遺跡であることが明らかになった（豊前市教委 2011）。このときに周知化した包蔵地の範囲は遺跡の北側 1/4 ほどにすぎず、遺跡はさらに南に広がる可能性が想定されていた。

調査に至る経緯　調査地の南側が東九州自動車道の（仮称）豊前 IC 予定地となり、用地買収が進捗する中、NEXCO 西日本（株）から買収済み用地内の埋蔵文化財の包蔵の有無について確認するよう依頼があり、平成 22 年 2 月 10 ～ 12 日・同 10 月 27･28 日の 2 回にわたり福岡県教育庁総務部文化財保護課が一部用地について試掘調査を行った結果、広い範囲において濃密に埋蔵文化財が包蔵されていることが判明した。両者は発掘調査について協議を行い、平成 23 年度より福岡県文化財保護課の組織改編により文化財の調査部門を所管することになった九州歴史資料館が主担当となって、次年度より発掘調査を開始することで合意した。調査は平成 23 年 4 月 12 日より翌 24 年 3 月 27 日までの約 1 年間にわたって行われ、これを 2 次調査とした。調査は用地買収が終了した範囲より優先的に着手することとなり、まず遺跡北西側のⅠ・Ⅱ区の調査を行うこととなった。また調査中の平成 23 年 10 月 17 ～ 20 日に、新たに用地買収が終了した区画の試掘調査を行い、埋蔵文化財の包蔵を確認し、この範囲を 2 次調査Ⅲ区とした。



第１図　東九州自動車道の概略と調査地点（中津工事事務所管内分）

地点	遺跡名	所在地	対象面積(㎡)	試掘年度	調査面積(㎡)	調査年度	報告年度	既刊報告書番号	備考
2	石堂大石ヶ丸遺跡	築上郡築上町石堂	9027	H21 ～ 23	200	H23	H25	15 集	
3	福間菜切古墳群	築上郡築上町上ノ河内	16644	H21 ～ 23	1000	H22	H25	15 集	
4	頭無古墳群 西一町田遺跡	築上郡築上町上ノ河内	19420	H22				-	遺跡なし
5		築上郡築上町上ノ河内	2840	H21				-	遺跡なし
6	中村西峰尾遺跡	築上郡築上町上ノ河内・豊前市中村	26972	H22	15000	H23･24	H25	15 集	
7	中村山柿遺跡	豊前市中村	16579	H21･22	700	H22	H25	15 集	
8		豊前市中村・馬場	10354	H21				-	遺跡なし
9		豊前市中村・松江	42434	H24				-	
10		豊前市松江	9905	H23				-	遺跡なし
11		豊前市松江	26570	H21･23				-	遺跡なし
12	松江黒部遺跡	豊前市松江・四郎丸	14462	H21	600	H23	H25	15 集	
13		豊前市四郎丸	12986	H21･23				-	遺跡なし
14		豊前市四郎丸	2390	H21				-	遺跡なし
15		豊前市四郎丸	9735	H22				-	遺跡なし
16		豊前市四郎丸	10432	H22				-	遺跡なし
17	川内下野添遺跡	豊前市川内	15972	H21 ～ 23	3600	H22･23	H25	15 集	
18		豊前市川内	16040	H21 ～ 23				-	遺跡なし
19	鳥越下屋敷遺跡	豊前市鳥越	4963	H23･24	760	H24	H26	21 集	
20	大村湯福遺跡	豊前市大村	8762	H23･24	1300	H24	H26	21 集	
21		豊前市大村	0					-	遺跡なし
22		豊前市大村	0					-	遺跡なし
23		豊前市大村	0					-	遺跡なし
24	天地山遺跡	豊前市大村	6777	H20・22				-	遺跡なし
25	大村上野地遺跡 大村シトキ田遺跡	豊前市大村・荒堀	10527	H20･22・23	2600	H23 H24	H25	15 集	 豊前市により調査
26	荒堀山田原遺跡	豊前市荒堀	21821	H21 ～ 24	1000	H22	H25	15 集	
27		豊前市荒堀	9823	H21･22				-	遺跡なし
28		豊前市大西	23122	H21 ～ 23				-	遺跡なし
29	塔田琵琶田遺跡 大西遺跡 西ノ原遺跡 時末遺跡	豊前市大西・永久・塔田・久路土	63733	H21 ～ 24	35000	H23 ～ H25	H26 ～ H27	22 集（本冊） （H27 予定） （H27 予定） （H27 予定）	 一部豊前市により調査 一部豊前市により調査
30	久路土馬踏遺跡	豊前市久路土	9463	H23				-	遺跡なし
31	鬼木溝添遺跡	豊前市鬼木	12636	H23				-	遺跡なし
32	鬼木鉾立遺跡	豊前市鬼木	25256	H21・23	5500	H24	H26	21 集	
33	緒方古墳群 七ッ枝遺跡 春屋敷遺跡 道ノ本遺跡	築上郡上毛町緒方	12456	H20 ～ 23	3500	H20 ～ H22	H24	8 集	上毛町試掘
34	龍毛遺跡	築上郡上毛町緒方	11732	H20･21 ・23･24	5000	H21･24	H24	8 集	上毛町試掘
35	下尻高遺跡 ハカノ本遺跡	築上郡上毛町緒方・尻高	11517	H20･21	7200	H20･21	H24	7 集	
36	安曇山田遺跡	築上郡上毛町安雲	10135	H20	9400	H20			上毛町により調査
37	安曇山田遺跡	築上郡上毛町安雲・宇野	24970	H20･21		H20･21	H24	7 集	〃
38		築上郡上毛町土佐井	22252	H20				-	遺跡なし
39	土佐井西遺跡	築上郡上毛町土佐井	21860	H20 ～ 22	4400	H22･23	H25	16 集	
40	土佐井東遺跡	築上郡上毛町土佐井	13476	H20 ～ 22	600	H23	H25	16 集	一部上毛町により調査
41	土佐井小迫遺跡 唐原山城跡	築上郡上毛町土佐井	7887	H21･22･24	1500	H22･24	H25	16 集	
42	ガサメキ古墳 穴ヶ葉山南遺跡	築上郡上毛町下唐原	33002	H21･22･24	4000	H22・24	H26 H25	23 集 16 集	一部上毛町により調査
43		築上郡上毛町下唐原	25215	H21･22･23				-	遺跡なし
44	大久保楢迫遺跡 （新池南古墳）	築上郡上毛町下唐原	13452	H22	7500	H22	H25	16 集	
45		築上郡上毛町下唐原	11997	H24				-	遺跡なし
46	皿山古墳群	築上郡上毛町下唐原・上唐原	23977	H22 ～ 24	12000	H23･24	H26	23 集	
47	四ッ塚山古墳群	築上郡上毛町上唐原	7193	H22･23	6600	H23		（H27 予定）	
48	鏡迫古墳群	築上郡上毛町上唐原	4577	H25	2000	H25		（H27 予定）	
49	榎町遺跡	築上郡上毛町上唐原	14250	H24	8940	H24・25		（H27 予定）	
50	榎町遺跡	築上郡上毛町上唐原	4735	H23	1050	H24・25		（H27 予定）	一部上毛町により調査

第１表　東九州自動車道中津工事事務所管内における埋蔵文化財発掘調査地点一覧

Ⅰ区の調査の経過　調査は、遺跡の北西側にあたるⅠ区より着手した。調査面積は約2,000㎡で、排土置き場を確保するために中央から南北に分けて反転調査を行った。旧状は水田であり、堆積状況は最上位に耕作土層、その下位に水田床土（粘土質の客土）があり、その直下に黒褐色の粘砂質土層が広がっていた。付近の地名が久路土（黒土）ということからもわかるように基盤土は火山噴出物由来の赤土が黒ボク化したものであり、遺構はこの上面から切り込まれていたが、遺構埋土と土壌化した黒ボク土の区別がつけにくく表土剥ぎはやや難航した。4月12日より重機を用いて表土剥ぎを開始し、月末近い4月28日にようやく南側半分の表土剥ぎを終えることができた。

表土剥ぎに併行して作業員による遺構検出作業を開始した。調査区の半分ほどの遺構検出が終わった4月末より遺構の掘り下げに着手し、調査は比較的順調に進んでいたが、ゴールデンウィーク前後より周辺の水田に水が張られると、調査区内の各所から著しい湧水が発生した。黒ボク土と赤土からなる地山の下位には黄白色砂質土に多くの礫を包含する基盤層があり、調査区の一部では露出もしていたが、この層を通じて水が流入してくるようで、特に1･3～5号住居跡の周辺では掘り下げた遺構の床面から著しい湧水があって調査の進捗に大きな影響が出た。そこで、検出がおおよそ済んだ範囲から遺構にできるだけ影響が出ないように排水用のトレンチを掘削して自動汲み上げポンプを設置し、事態の改善を図った。Ⅰ区の南半部では竪穴住居跡18棟と土坑3基、ほか多くのピットを調査し、調査区の西側では用水路に沿って南北方向に浅い谷状の落ちを検出した。この谷状の落ち地形からは大量の遺物が出土したが、掘削時に著しい湧水に見舞われ、遺物包含土のすべてを掘削することは断念した。6月末には遺構をほぼ完掘して空中写真撮影を行い、その後図化・だめ押し等を経て7月13日にはⅠ区南半部の作業を終了し､7月14日より反転調査に着手した。

Ⅰ区北半部の重機を用いた表土剥ぎは7月26日には終了し、併行して人力による調査を進めた。北半部では湧水に苦労することもなく順調に調査が進み、10月初頭にはほぼ完掘して7日には空中写真撮影を行い、図化・だめ押し等を経て10月13日にはⅠ区の作業をすべて終了して埋め戻しを開始することができた。Ⅰ区では竪穴住居跡43棟（うち多くにカマドが付帯する）、掘立柱建物跡1棟、土坑6基、土壙墓1基、溝1条のほか多くのピットなどを調査した。

Ⅱ区の調査の経過　Ⅱ区はⅠ区の南に隣接する宅地に設定した。この部分はⅠ区の水田面から約2mほど、盛り土による大規模なかさ上げが行われていた。調査に先立ってこの盛り土を除去する必要があり､事業主体であるNEXCO西日本（株）と工事請負業者である（株）奥村組の協力を得て、7月28日より約1月の間をかけてこの盛り土を調査区外に搬出した。その後Ⅰ区北半部の調査と併行してⅡ区北半部の表土剥ぎを9月13日より重機を用いて行い、Ⅰ区北半部の調査終了後すぐにⅡ区北半部の調査に移行した。

Ⅱ区は住宅地造成のための盛り土が行われる前に水田床土や耕作土などの軟弱な地盤が取り除かれていたようで、Ⅰ区の南半部で一部露出していた下層地山の黄白褐色の砂質土と礫の混合層がⅡ区の全面に広く露出していた。この地山はかなり堅固であり､遺構はほとんど残されてなかったが、調査区の西側部分ではⅠ区南半部で検出した谷状の落ちの続きを検出し、遺物の出土もあった。

Ⅱ区北半部は10月14日～20日までの7日間でおおよその調査を終了し、20日に空中写真撮影を行った。その後重機を用いて反転作業を行い、11月29日より南半部の調査に着手した。南半部ではかろうじて残された掘立柱建物跡1棟と北半部で検出された谷状落ち込み（SX－04）を調査した。12月20日には空中写真撮影を行い、だめ押し後埋め戻してⅡ区の調査を終了した。

Ⅰ区補足調査の経過　本地点に建設が計画された東九州道（仮称）豊前 IC の工事については、インターチェンジ本体を高速道路建設事業の中で行う一方、インターチェンジの北側にとりつく予定の進入道路については､県道犀川豊前線バイパス建設事業の中で行うこととなっていた。このため、塔田琵琶田遺跡の要調査範囲は当初から NEXCO 西日本（株）が事業主体となる範囲と福岡県県土整備部が事業主体となる範囲に分けられていた。両者の境界線は、ほとんどが既存の土地区画に則って設定されていたが、第 2 次調査Ⅰ区東側のみは建設される予定の施設の形状に従ってやや不定形に分けられていた。さらに、その分割線の付近には未買収の用地への通行ルートとなっている里道があり、先述のⅠ区の調査においてはこの部分を幅 5 mほど残しておく必要があった。

その後冬には未買収の問題も片付き、残していた里道の範囲を追加で調査することになった。これを 1 次補足調査とする。作業上の問題から、写真撮影・記録保存については隣接する県道整備事業地とあわせておこなうこととなったが、本書ではこのうち、NEXCO 西日本（株）の事業範囲内について､2 次調査Ⅰ区補足としてあわせて報告する。なお､県の事業範囲については 3 次調査とし、平成 27 年度に報告を予定している。

Ⅰ区補足調査はⅡ区の調査に引き続いて行った。先行して 12 月 7 日より重機を用いた表土剥ぎを進め、12 月 12 日より作業員を投入して人力による調査に着手した。すでに西側隣接地をⅠ区として調査を終えており､その成果を援用した結果､遺構面はⅠ区よりも数㎝高くなった。このため、Ⅰ区の調査において検出した遺構のいくつかとは壁の位置などが食い違うようなことにもなった。また、Ⅰ区の調査で大半が調査区外に広がる住居跡の断片をいくつか検出していたが、Ⅰ区補足調査時にはこれにつながる部分を検出できなかった例がいくつかある。ここでは一応これらも住居跡として報告するが、本来住居跡ではなかった可能性もある。

Ⅰ区補足調査では、Ⅰ区調査時に検出した遺構のうち東へと続いていた延長部分を調査するとともに、新たに竪穴住居跡をいくつか発見した。当然、Ⅰ区補足調査範囲よりさらに東に伸びて 3 次調査範囲へと広がる遺構も数多く調査した。これらの遺構についてそれぞれの報告の中で述べると報告が重複するので、Ⅰ区ですでに遺構番号を付していた遺構と、Ⅰ区補足調査で新たに検出したものの遺構の範囲がⅠ区補足調査区の内部で完結しているものについては本書で、またⅠ区補足調査区で新たに検出した遺構のうちその範囲が第 3 次調査区に広がるものについては、第 3 次調査の報告時に取り扱うので注意されたい（詳しくは第 5 図を参照されたい)。

Ⅲ区の調査の経過　Ⅱ区北半部の表土剥ぎが終了した後、10 月 21 日よりⅡ区の東に隣接するⅢ区の調査に着手した。Ⅲ区の旧状は水田であり、基本土層はⅠ区と同じであった。水田床土までを重機で除去し、10 月 27 日より発掘作業員を投入した。

Ⅲ区は西側 1/4 ほどが一段低く造成されていたほかは平坦で、北側では遺構の残存状態は良好であったが、南に行くほどに地山の深部が露出して遺構は浅くなっていた。また西側の一段低い部分はⅡ区から続く谷状落ち部が伸びるほかは遺構はほとんど残されていなかった。Ⅲ区では竪穴住居跡 34 棟、方形竪穴状遺構 2 基、土坑 4 基のほか多くの柱穴を調査し、古墳時代前期の竪穴住居跡から舶載鏡の破鏡が 1 点出土するなどの成果を得た。2 月には大半の遺構が掘り上がり、2 月 10 日に空中写真撮影を行った。その後だめ押しや出土遺物の整理などを行い、3 月 15 日には作業員による現地作業をほぼ終了した。3 月 27 日には重機を用いた埋め戻しも終了し、第 2 次調査のすべてを終了することができた。

2　調査の組織

平成 23 年～ 25 年度（発掘調査）、26 年度（整理報告）に関わる関係者は次の通りである。なお、県の組織改革により、平成 23 年度以降は埋蔵文化財調査業務全般が九州歴史資料館へと移管されている。

	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
西日本高速道路株式会社九州支社				
支社長	本間清輔	本間清輔	本間清輔	本間清輔
中津工事事務所長	上羽坪勲（～6.30）	三瀬博敬	三瀬博敬（～6.30）	宗方鉄生
	三瀬博敬（7.1～）		宗方鉄生（7.1～）	
副所長（技術担当）	森田忠敏（～9.30）	小島二郎	小島二郎	小島二郎
	小島二郎（10.1～）			
副所長（事務担当）	中村重俊	中村重俊	中村重俊	中村重俊
総務課長	宇都良典	門田憲明	門田憲明	門田憲明（～9.30）
				内田伸博（10.1～）
用地課長			岩田勲志（7.1～）	和田　勝
用地第一課長	藤江　正	藤江　正	岩田勲志（～6.30）	
工務課長	渡辺浩延	渡辺浩延（～1.31）	本多正和	本多正和
		本多正和（2.1～）		
豊前工事長	川畑一弘	川畑一弘	川畑一弘	川畑一弘
上毛工事長	當房周三（～6.30）	荒平裕次	荒平裕次	大岡慶巳
	荒平裕次（7.1～）			
九州歴史資料館	**平成 23 年度**	**平成 24 年度**	**平成 25 年度**	**平成 26 年度**
総括				
館長	西谷　正	西谷　正	荒巻俊彦	杉光　誠
副館長	南里正美	篠田隆行	篠田隆行	伊﨑俊秋
総務室長（企画主幹）	円城寺紀子	円城寺紀子	円城寺紀子	塩塚孝憲
文化財調査室長（企画主幹）	飛野博文	飛野博文	飛野博文	飛野博文
文化財調査室長補佐（企画主幹）	吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳
文化財班長（技術主査）	小川泰樹	小川泰樹	小川泰樹	秦　憲二
庶務				
総務班長	塩塚孝憲	長野良博	長野良博	山﨑　彰
庶務担当	近藤一崇			
調査・整理報告				
技術主査	小澤佳憲（調査）	小澤佳憲（報告）	小澤佳憲（報告）	小川泰樹（整理）
				小澤佳憲（報告）
主任技師		城門義廣（整理）	城門義廣（整理）	
臨時調査員	大森真衣子（調査・報告）			

なお、発掘調査にあたっては、地元の方々、調査に参加された方々、豊前市教育委員会の関係者の方々など、多くの方より御協力を賜った。特に、岡山理科大学の亀田修一教授には再三現地に来訪され直接のご指導を賜り、九州大学の辻田淳一郎准教授には出土破鏡についてご教授をいただいた。また豊前市教育委員会の棚田昭仁氏には、発掘作業員の確保にあたってご協力いただいた。ここに記して感謝いたします。

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

立地の概要　本書で報告する塔田琵琶田遺跡は、九州島北東部に位置し、行政区分としては福岡県豊前市に属する。福岡県では、しばしば行橋市・京都郡・築上郡・豊前市からなる県東部地域を、京都郡・築上郡の頭２文字をとって京築地域と呼び、この点からいえば京築地域南部ともいえる。

地形と地質　京築地域は､大分県中津・宇佐地域と一体化して幅のせまい海岸平野を形成している。この海岸平野は、北東は周防灘により遮られ、北は蔵持山－戸城山－障子ヶ岳と伸びて平尾台へと連なる山群、西・南側は英彦山系の支脈で南東に伸びる国見山－経読岳－八面山群と国東半島にそびえる両子山群により画されて一つの地域的なまとまりを形成しているが、その中でもさらにほぼ中央部を国見山から東へと広がる丘陵群によって南北に分断されて大きく２つの平野を形成する。北の京都平野は今川・祓川など、南の中津平野は佐井川・山国川・犬丸川・駅館川・寄藻川といった大小の河川群の開析・堆積作用により形成されたものである。地質的に見ると、北側に位置する京都平野西側の蔵持山・障子ヶ岳・平尾台などの山地の基盤層は石灰岩や花崗岩からなり、一方南側に位置する中津平野の西を画する国見山・経読岳・八面山～国東半島といった山地の主な基盤層は阿蘇火砕流由来岩のほか大野・豊肥・九重火山岩類など、形成時期の異なる火山岩が複雑に入り乱れる。

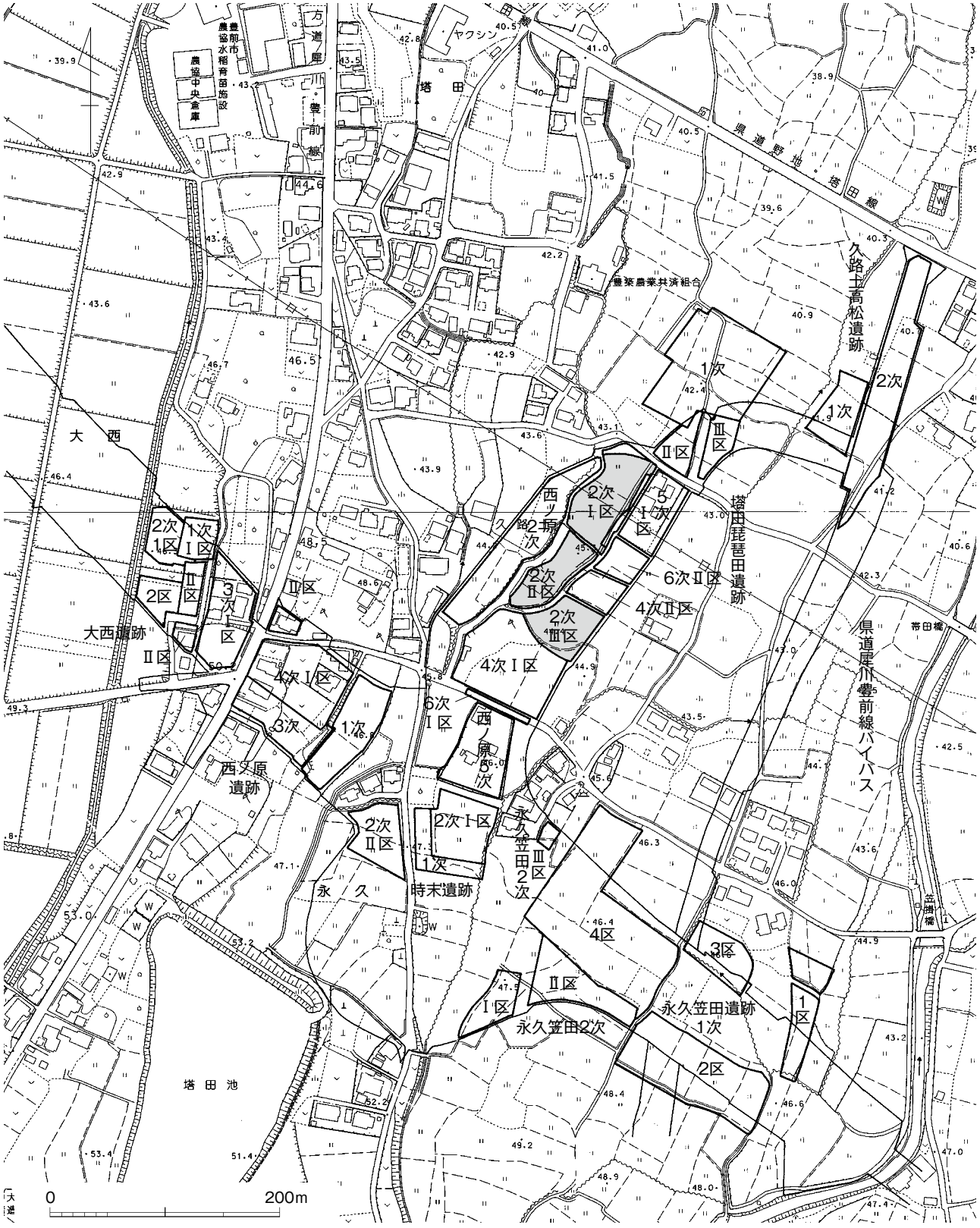
遺跡の立地　塔田琵琶田遺跡は、豊前市の東側に位置する。豊前市は東西でその地形が大きく変化しており、西側は犬ヶ岳－国見山系から北東に向かって流出する何本もの小河川により刻まれた細長い谷と尾根筋が連続する丘陵地帯をなすのに対し、東側では岩岳川・佐井川といった比較的規模の大きな河川の解析・堆積作用により、扇状地が形成されている。

この扇状地帯は比較的広い平野を形成しており、特に圃場整備の進んだ昨今では平坦な土地が広域に広がっているように見える。しかし、その内部には細かい起伏が見られる。最もわかりやすいのは求菩提道（現在の県道 32 号犀川豊前線）が通る千束原台地で、周辺の水田地帯より５ｍほど標高が高い尾根状の台地が南北方向に長く伸び、その東西には谷地形がこれに平行してやはり細長く伸びている。千束原台地の西には大西台地・野田台地・大村台地・荒堀台地などの低台地が同じように南北に伸び、その間には細長い谷が形成されている。これらはいずれも市域東部で観察される谷地形が扇状地堆積物によって埋積して尾根状丘陵頂部との比高差が縮まったものと考えられ、付近における遺跡立地の好適地となっている。

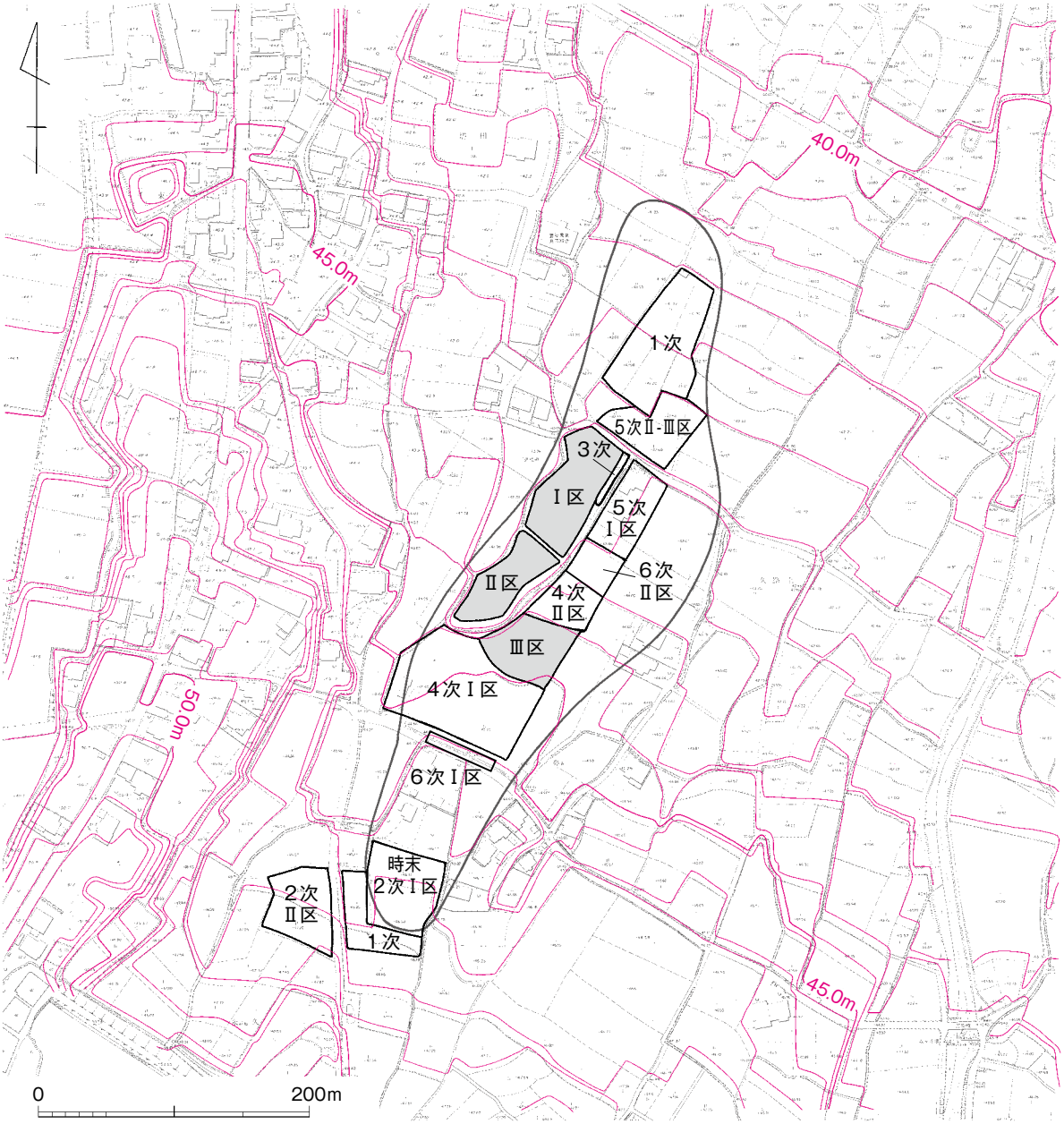
こうした台地のうち、低地との比高差が小さいものは、比較的早くより水田化され、水田区画にその痕跡をとどめていたが、昭和 50 年代より本格化した圃場整備により、こうした水田区画はその大半が失われてしまい、塔田・久路土の付近ではもうほとんど残されていない。しかし、当時の水田区画と標高を復元すると、現在では埋没してしまった平野内の微地形が浮かび上がってくる。この微地形に遺跡の分布を重なり合わせると、古い時代の集落は、埋没しかけた低台地上に多く集落を構えていたことがよく読み取れよう（第３図)。

塔田琵琶田遺跡も同様の立地にある。塔田琵琶田遺跡は千束原台地の西側にこれと併行して伸びる南北に細長い埋没微高地上に立地しており、古墳時代後期には隣接調査地である時末遺跡第 1･2 次調査地、西ノ原遺跡第４次調査地と同一の集落を形成していたと考えられる。

遺跡群の地質　以上の立地条件から、塔田琵琶田遺跡の基盤層は尾根状台地、そして市域東部の尾根状丘陵の基盤層と共通することがわかるだろう。すなわち、遺跡が立地する土地の地質は火山岩由来の赤土であり、内部にしばしば火山弾由来の腐り礫を含む。その上層は土壌化作用によって黒ボク化し、また下層には洪積世に形成された扇状地堆積物である砂礫層が広がっている。遺構は、付近の地名である「久路土（黒土）」の由来となった黒ボク土を切り込んで、しばしば下層の砂礫



第２図　塔田琵琶田遺跡第２次調査区位置図（1/5,000）



第３図　圃場整備前の微地形（1/5,000）

層にまで達している。

調査地の付近では圃場整備などによる削平はしばしば下層の砂礫層にまで及び、場所によっては遺構面に黄白褐色の砂礫層が広く現れている。砂礫層は非常に固く掘削が困難であり、たとえば塔田琵琶田遺跡第２次調査Ⅱ区のように、砂礫層が面的に現れている場所では、遺構はその上位までしか掘られないため削平されてほとんど残されていない。一方、同じくⅠ区北側のように、基盤層の表面が深く潜る場所では黒ボク土と赤土がよく残され、遺構の残存状況は比較的よい。

２　歴史的環境

概要　本書で報告する塔田琵琶田遺跡がある福岡県豊前市は、福岡県の東部に位置し、令制下における旧国では南に隣接する大分県の北部（宇佐郡、現在の中津市・豊後高田市の一部）とともに豊前国を形成していた。豊前国には田川・企救・京都（みやこ）・築城・上三毛（かみつみけ）・下

三毛（しもつみけ）・宇佐の７郡があったことが知られるが、塔田琵琶田遺跡は上三毛郡に所在する。以下、本書では古墳時代以前の歴史についてみていこう。

旧石器時代の遺跡　旧石器時代の遺跡として、豊前市青畑向原遺跡が知られる[(1)]。豊前市西部に展開する丘陵群の最西端部にある天地山丘陵の北に張り出した低丘陵上にあり、計23点の石器群が見つかった。後期旧石器時代前～中期と終末～縄文時代草創期の資料が混在する。このほか豊前市荒堀大保遺跡[(2)]、小石原泉遺跡[(3)]、薬師寺塚原遺跡[(4)]や、上毛町の桑野遺跡・上の熊遺跡[(5)]、金居塚遺跡[(6)]などのほか、築上町越路の越路六郎・越路貴船・越路長様・越路北ヶ崎遺跡などの各遺跡[(7)]が集中する越路台地上で散発的に出土している。

縄文時代の遺跡　豊前市・築上町南部とその周辺においてはこれまで草創期の遺跡はほとんど確認されていない。唯一まとまった資料である築上町本庄大坪遺跡でも、円孔土器が前期の押型文土器と共伴し、その位置づけは確定していない[(8)]。早期～中期の資料も京築地域南部ではまとまった資料がないが、早期では築上町山崎遺跡・同石町遺跡[(9)]、小原岩陰遺跡[(10)]、豊前市では小石原泉遺跡、吉木遺跡とこれに近接する吉木常末遺跡[(11)]などで、また前期では小原岩陰遺跡から前半の轟式、小石原泉遺跡から後半の曽畑式土器がそれぞれわずかながら出土している。中期の資料も、阿高式土器が両遺跡から少量ずつ出土している程度である。

後期に入るとこうした状況は一変し、資料が爆発的に増加する。後期前葉から中葉にかけては築上町山崎遺跡・石町遺跡、坂本下森遺跡[(12)]、豊前市中村・石丸遺跡[(13)]、小石原泉遺跡、狭間宮ノ下遺跡[(14)]など、さらにやや外れるが上毛町土佐井遺跡[(15)]、上唐原遺跡[(16)]など、また後葉～末（西平式～三万田式期）には、築上町松丸Ｄ遺跡[(17)]、上毛町原井三ッ江遺跡[(18)]など、多くの遺跡で住居跡がまとまって検出され、集落を形成しながら定住的な生活を営んでいたことがわかる。遺構を伴わず遺物が少量出土する遺跡も散見され、広範囲に定住しつつ生活圏を広げていったのだろう。

晩期に入ると後期の盛行も一変し、例外を除いてわずかな墓葬や包含層等の断片的な資料が見られるのみとなる（小原岩陰遺跡、中村・石丸遺跡、小石原泉遺跡、久路土幢遺跡[(19)]など）。こうした中で、河原田塔田遺跡[(20)]からは晩期後半刻目突帯文土器でも古相の一群を伴うとされる竪穴住居跡が１棟出土しており注目される。板付Ⅰ式新段階の土器も周辺からわずかに出土しており初期農耕集落の可能性もあるが、一方では黒川式の浅鉢もあって縄文時代の生業を引き継いだ集落とも考えられ、その評価は難しい。

弥生時代の遺跡　早期～前期の資料としては、上述の河原田塔田遺跡以外には小原岩陰遺跡、久路土幢遺跡、久路土芝掛遺跡[(21)]などから土器片が見つかっており、このほか表採資料として永久遺跡・昭和町遺跡・東風ノ風遺跡・開立寺遺跡などが知られる[(22)]。多くは前期後半～末の資料である。

中期になると資料は急激に増加し、まとまった資料も見られるようになる。河原田塔田遺跡では、前期末～中期末頃の集団墓域が調査された。土壙墓中から細型銅剣の切先が出土しており、注目される。西側に隣接する河原田善丸遺跡[(23)]・河原田四ノ坪遺跡[(24)]では、おおよそ同時期と考えられる集落が見つかっており、河原田塔田遺跡の墓域を営んだ人々の居住域と考えられる。鬼ノ木四反田遺跡[(25)]では、中期～後期の大規模な集落が調査された。中期前半の銅鉇、後期の銅鏃・中広形銅戈・小形仿製鏡など銅製品が多く見つかった。

後期にはさらに遺跡数が増し、後期中葉～末にかけては小石原泉遺跡（140棟の竪穴住居からなる大集落）、西ノ原・大西遺跡群[(26)]（環濠を持つ後期中葉～末の大集落）といった地域の拠点的集

1 中村団後遺跡　2 中村ヒバル遺跡　3 灰ノ木古墳　4 黒部古墳群　5 黒峰尾古墳群　6 四郎丸窯跡　7 四郎丸畑原遺跡
8 川内下野添遺跡　9 川内南原遺跡　10 川内楠木遺跡　11 平原城跡　12 平原横穴墓群　13 山田城跡　14 鳥越今井野遺跡
15 鳥越下屋敷遺跡　16 大村湯福遺跡　17 大村天神林遺跡　18 大村道場遺跡　19 大村石畑遺跡　20 大村シトキ田遺跡
21 青畑向原遺跡　22 荒堀中ノ原遺跡　23 荒堀車地遺跡　24 荒堀大保遺跡　25 荒堀雨久保遺跡　26 今市向野遺跡
27 下原遺跡　28 昭和町遺跡　29 吉木穴井遺跡　30 吉木常末遺跡　31 吉木遺跡　32 吉木芦町遺跡　33 市丸遺跡群
34 三毛門放生田遺跡　35 楡生山古墳　36 六郎遺跡群　37 小石原泉遺跡　38 上毛条里遺跡　39 千束原古墳群　40 旭城跡
41 上塔田遺跡　**42 塔田琵琶田遺跡**　43 中大西遺跡　44 大西遺跡　45 西ノ原遺跡　46 永久笠田遺跡　47 永久遺跡
48 上大西遺跡　49 才尾平原遺跡　50 如法寺跡　51 大河内庄屋屋敷遺跡　52 挟間宮ノ下遺跡　53 薬師寺塚原遺跡
54 河原田四ノ坪遺跡　55 河原田善丸遺跡　56 河原田塔田遺跡　57 鬼木四反田遺跡　58 鬼木鉾立遺跡　59 久路土樋掛遺跡
60 久路土鐘鐘田遺跡　61 久路土幢遺跡　62 久路土六田遺跡　63 久路土高松遺跡　64 久路土芝掛遺跡　65 黒土城跡
66 黒土七夕遺跡　67 広瀬城跡　68 高田城跡　69 大ノ瀬官衙遺跡　70 池ノ口遺跡　71 原田遺跡　72 安雲城跡
73 安雲ハタガタ遺跡　74 緒方古墳群　75 七ッ枝遺跡　76 龍毛遺跡　77 ハカノ本遺跡　78 山田窯跡群　79 安雲山田遺跡
80 山田 1 号墳　81 尻高後椀遺跡　82 穴井横穴墓群　83 徳並横穴墓群　84 友枝瓦窯跡　85 土佐井ミソンデ遺跡
86 土佐井小迫遺跡　87 唐原神籠石　88 ガサメキ遺跡　89 宇野台古墳群　90 桑野題古墳群　91 宇野代遺跡　92 上桑野遺跡

第 4 図　遺跡周辺の歴史的環境（1/50,000）

落が成立し、また中村団後遺跡[27]、久路土六田遺跡[28]などの中・小規模の集落も見られるようになる。また、鬼木鉾立遺跡[29]からは銅矛の耳部が出土するなど多様な成果が上げられている。

古墳時代の遺跡（集落） 古墳時代にも多くの遺跡が見つかっている。まず集落遺跡を見よう。前期には弥生時代後期から続いて営まれる集落が多く、西ノ原・大西遺跡群、小石原泉遺跡といった弥生時代後期中葉以降の拠点集落では引き続き古墳時代前期に入っても集落が継続的に営まれる例が多い。また、こうした集落の周辺でも新たな集落が多く分出しており、久路土芝掛遺跡では前期後半の集落に環濠が伴う可能性があり、また本書で報告する塔田琵琶田遺跡[30]では古墳時代前期の竪穴住居跡から後漢鏡の破鏡が出土する[31]など、注目される成果が上がっている。

古墳時代中期の集落遺跡は前代と比べて減少しており、豊前市域では小石原泉遺跡が知られる程度である。この時期の集落遺跡は山国川沿岸域で散見され、池ノ口遺跡[32]で大規模な集落が知られるほか、上唐原遺跡[33]、上唐原了清遺跡[34]、安雲ハタガタ遺跡[35]などでも断片的な資料が確認される。特に池ノ口遺跡や安雲ハタガタ遺跡では5世紀中葉にさかのぼるＬ字状カマドの出土例が知られており[36]、塔田琵琶田遺跡でも数多く調査されたＬ字状カマドの京築地域での出現・拡散について検討する上で貴重な資料となる。

後期に入ると豊前市域でも6世紀を前後する時期から再び集落が多く進出する。塔田琵琶田遺跡では5世紀後半からＬ字状カマドを持つ竪穴住居跡が大半を占める大規模な集落が成立する。西に隣接する西ノ原・大西遺跡群では、やはり5世紀後半～末にＬ字状カマドを持たない集落が進出し、7世紀初頭まで継続して営まれる。小石原泉遺跡でもこの時期に大規模な集落が進出する。このほか、荒堀中ノ原遺跡[37]では6世紀代の掘立柱建物を伴う集落が調査され、また大村石畑遺跡[38]・今市向野遺跡Ｃ地点[39]・吉木穴井遺跡[40]など、小規模な集落も多く進出する。

古墳時代の遺跡（墓地） 集落遺跡が比較的多く見られる一方で、同時期の埋葬施設である古墳は本地域では非常に限られた存在で、特に前～中期古墳は豊前市内ではほとんど確認されていない。北の京都平野では4世紀代の石塚山古墳[41]、5世紀代の御所山古墳[42]・石並古墳[43]などの首長墳が相次いで作られ、同じく豊前中津平野でも南の駅館川流域では赤塚古墳・免ヶ平古墳・福勝寺古墳・車坂古墳・角房古墳などからなる川部・高森古墳群や葛原古墳などが4世紀から5世紀にかけて連綿と作られる[44]状況とは対照的である。ただし、豊前市域とともに地形的なまとまりを形成する山国川流域（築上郡上毛町・吉富町、大分県中津市）では、4世紀から5世紀にかけて能満寺3号墳[45]・西方古墳[46]・楡生山古墳[47]・永添1号墳[48]といった中小の前方後円墳が見られ、両地域に挟まれた小地域勢力の存在を伺うことができよう。

6世紀代に入り各地で群集墳が盛行するようになると、ようやく本地域でも古墳群が造営されるようになる。南の上毛町域は丘陵地帯が多く6世紀から7世紀にかけて多くの群集墳が造営される地域で、金居塚古墳群[49]、穴ヶ葉山古墳群[50]、穴ヶ葉山南古墳群[51]、上ノ熊古墳群[52]、桑野題古墳群[53]、宇野台古墳群[54]、恵良古墳群[55]、大久保楢迫古墳群[56]などがすでに知られていたほか、東九州道建設に先立つ調査で新たに緒方古墳群[57]、ガサメキ古墳群、皿山古墳群、四ッ塚山古墳群[58]などの存在が知られた。北の築上町域南部（旧椎田町域）から豊前市北部にかけても同様に、よく発達した丘陵上に後期群集墳が展開し、築上町域では中原古墳群・石堂古墳群[59]・石堂中後ヶ谷古墳群・福間菜切古墳群・頭無古墳群[60]・山添古墳群など、豊前市域でも黒部古墳群[61]、黒峰尾古墳群、鵜迫古墳群[62]などが知られる。天地山丘陵の東を南北に伸びる尾根状低丘陵であ

る大村台地上でも、やはり東九州道の建設に先立つ調査で後期群集墳の存在が新たに知られた[63]。塔田琵琶田遺跡の西を南北に走る尾根状丘陵である千束原丘陵上にも千束原古墳群が存在していたことが知られる。やはり同時期の群集墳であろうが、残念ながら近世末から近代初頭にかけて相次いで行われた豊前宇島港築港と旭城築城の際に石室の石を利用するために徹底的に破壊されたといい、現在では近くの墓地に古墳合集碑が立つのみである[64]。塔田琵琶田遺跡に居住した集団の奥津城である可能性は高く、残念なことである。

【註】

(1)豊前市教育委員会『青畑向原遺跡･永久遺跡－県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4(豊前市大村･青畑地区及び黒土西部地区）－』豊前市文化財報告書第 12 集、1999 年

(2) 吉留秀敏「京都平野のあけぼの」、行橋市史編纂委員会編『行橋市史（上巻）自然・地理 / 原始・古代』2004 年

(3) 豊前市教育委員会『小石原泉遺跡－豊前東部工業用地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－』豊前市文化財報告書第 11 集、1998 年

(4) 豊前市教育委員会『久路土六田遺跡・薬師寺塚原遺跡－県営農村活性化住環境整備事業黒土西部地区及び黒土西部第二地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』豊前市文化財報告書 第 24 集、2008 年

(5) 福岡県教育委員会『桑野遺跡・上の熊遺跡・小松原遺跡－福岡県築上郡大平村所在遺跡の調査－』一般国道 10 号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 6 集、1997

(6) 福岡県教育委員会『金居塚遺跡Ⅱ－福岡県築上郡大平村所在金居塚遺跡の調査－』一般国道 10 号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 7 集、1997 年

(7) 福岡県教育委員会『越路六郎遺跡・越路貴船遺跡－福岡県築上郡椎田町所在遺跡の調査－』福岡県文化財調査報告書第 161 集、2001 年

福岡県教育委員会『越路長様遺跡・越路鍛冶屋原遺跡・築城小迫遺跡Ⅱ－築上郡椎田町越路・築城町築城所在遺跡の調査－』福岡県文化財調査報告書第 176 集、2003 年

椎田町教育委員会『葛城地域と椎田南地区の遺跡－福岡県築上郡築上町所在の遺跡－』椎田町文化財調査報告第 12 集、2002 年

(8) 小池史哲「豊前地域の縄文土器編年」、行橋市史編纂委員会編『行橋市史（資料編）原始・古代』、2006 年

(9) 福岡県教育委員会『山崎遺跡（Ⅰ） 付　石町遺跡－福岡県築上郡椎田町所在縄文遺跡の調査－』椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告 7、1992 年

(10) 椎田町教育委員会『小原谷－福岡県築上郡椎田町所在遺跡の調査－』椎田町文化財調査報告書第 4 集、1992 年

(11) 福岡県教育委員会『吉木遺跡－京築教育事務所建設地遺跡－』福岡県文化財調査報告書第 83 集、1989 年

小池史哲「豊前地方の縄文時代遺跡　2. 吉木常末遺跡」豊前市史編纂委員会編『豊前市史　考古資料別冊』、1993 年

(12) 前掲註（7）

(13) 福岡県教育委員会『中村・石丸遺跡－福岡県豊前市大字中村字石丸所在縄紋時代遺跡の調査－』一般国道 10 号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第 8 集、1996 年

(14)『狭間宮ノ下遺跡（遺構編）－豊前市大字狭間に所在する縄文時代集落の調査報告－』豊前市文化財調査報告書第 13 集、2000 年

(15) 大平村教育委員会『土佐井地区遺跡－県営圃場整備事業に伴う事前調査－』大平村文化財調査報告書第 5 集、1990 年

(16) 福岡県教育委員会『上唐原遺跡Ⅱ－福岡県築上郡大平村所在上唐原遺跡の調査－』一般国道 10 号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第 5 集、1995 年

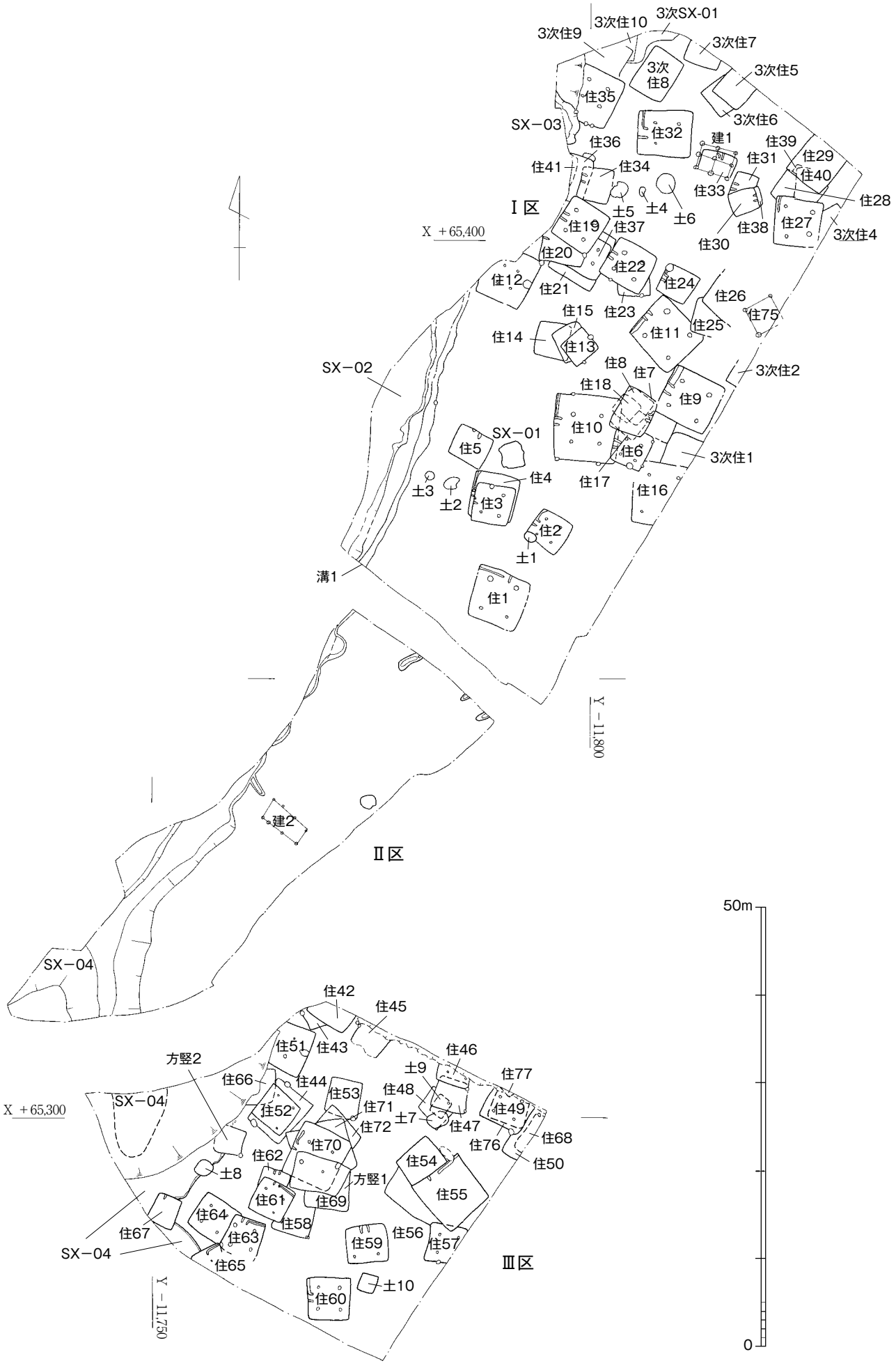
(17) 築城町教育委員会『城井谷－福岡県築上郡築城町所在遺跡群の縄文時代後期集落・古代製鉄跡等の調査－』

築城町文化財調査報告書第 2 集、1992 年
(18) 大平村教育委員会『原井三ッ江遺跡－福岡県築上郡大平村原井所在遺跡の調査－』大平村文化財調査報告書第 5 集、1989 年
(19) 豊前市教育委員会『久路土幢遺跡－県営農村活性化住環境整備事業黒土第Ⅱ地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』豊前市文化財調査報告書第 30 集、2012 年
(20) 豊前市教育委員会『河原田塔田遺跡（河原田遺跡群Ⅲ）－県営農村活性化住環境整備事業黒土整備地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』豊前市文化財報告書第 19 集、2004 年
(21) 九州歴史資料館 2012『久路土芝掛遺跡・久路土高松遺跡－県道犀川豊前線バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告書第 1 集－』福岡県埋蔵文化財調査報告書第 241 集、2013 年
(22)武末純一･丹羽博・高橋章・緒方泉「豊前市の弥生時代遺跡」､豊前市史編纂委員会編『豊前市史　考古資料別冊』､1993 年
(23) 豊前市教育委員会『河原田善丸遺跡（河原田遺跡群Ⅱ）－』豊前市文化財調査報告書第 16 集、2003 年
(24) 豊前市教育委員会『河原田四ノ坪遺跡（河原田遺跡群Ⅰ)･川内南原遺跡－』豊前市文化財調査報告書第 15 集、2002 年
(25) 豊前市教育委員会『鬼木四反田遺跡（遺物編）(河原田遺跡群Ⅴ）－県営農村活性化住環境整備事業黒土西部地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』豊前市文化財調査報告書第 21 集、2006 年
豊前市教育委員会『鬼木四反田遺跡（遺構編）(河原田遺跡群Ⅳ)･鳥越今井野遺跡－県営農村活性化住環境整備事業黒土西部地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』豊前市文化財調査報告書第 20 集、2005 年
(26) 豊前市教育委員会『大西遺跡』豊前市文化財調査報告書第 5 集、1988 年
このほか東九州自動車道の建設に先立って福岡県・豊前市教育委員会により調査が行われている。平成 23･24 年度の九州歴史資料館年報に県調査分の概要が掲載されている。報告書刊行は平成 26･27 年度の予定である。
(27) 福岡県教育委員会『団後遺跡・西一丁田遺跡・炭山遺跡－福岡県豊前市所在遺跡の調査－』一般国道 10 号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第 3 集、1994 年
(28) 豊前市教育委員会『久路土六田遺跡・薬師寺塚原遺跡－県営農村活性化住環境整備事業黒土西部地区及び黒土西部第二地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』豊前市文化財調査報告書第 24 集、2008 年
(29) 未報告だが註（22）文献に実測図が掲載されている。
(30) 豊前市教育委員会『塔田琵琶田遺跡－県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 15（県営農村活性化住環境整備事業黒土第二地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）－』豊前市文化財調査報告書第 29 集、2011 年
このほか東九州道の建設・県道犀川豊前線バイパスの建設に先立って九州歴史資料館により平成 23 ～ 25 年度に発掘調査が行われた。このうち本報では平成 23 年度の調査成果を報告し、残りは平成 27 年度に報告予定である。
(31) 平成 23 年度に東九州自動車道の建設に先立つ調査で 1 点が、また平成 24 年度に県道犀川豊前線の建設に先立つ調査でもう 1 点が出土した。うち 1 点は本報で、またもう 1 点は平成 27 年度に報告予定である。
(32) 福岡県教育委員会『池ノ口遺跡－福岡県築上郡新吉富村所在池ノ口遺跡の調査－』一般国道 10 号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 3 集、1996 年
上毛町教育委員会『垂水地区遺跡群Ⅱ－県営圃場整備事業垂水地区関係埋蔵文化財調査報告 2 －』上毛町文化財調査報告第 10 集、2009 年
(33) 福岡県教育委員会『上唐原遺跡Ⅰ－福岡県築上郡大平村所在上唐原遺跡の調査 1 －』一般国道 10 号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 2 集、1995 年
(34) 福岡県教育委員会『上唐原了清遺跡Ⅱ－福岡県築上郡大平村所在遺跡の調査－』一般河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告 5、2000 年
(35) 上毛町教育委員会『垂水廃寺Ⅱ・宇野地区遺跡群Ⅰ－福岡県築上郡新吉富村所在遺跡群の調査－』新吉富村文化財調査報告書第 12 集、1999 年
(36) 楢崎直子「北部九州における初期カマド・Ｌ字型カマドの導入と展開」､『九州における渡来人の受容と展開』第 8 回九州前方後円墳研究会発表要旨集・資料集、九州前方後円墳研究会、2005 年

(37) 豊前市教育委員会『県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅱ－豊前市横武・千束地区（2）－』豊前市文化財報告書第 6 集、1990 年
(38) 豊前市教育委員会『大村石畑遺跡－県営担い手育成基盤整備事業大村青畑地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 10）－』豊前市文化財調査報告書第 22 集、2007 年
(39) 豊前市教育委員会『今市向野遺跡 C 地点』豊前市文化財調査報告書第 9 集、1997 年
(40) 豊前市教育委員会『吉木穴井遺跡』豊前市文化財調査報告書第 17 集、2003 年
(41) 苅田町教育委員会『石塚山古墳発掘調査概要』苅田町文化財調査報告書第 9 集、1988 年
(42) 苅田町教育委員会『国指定史跡御所山古墳－福岡県京都郡苅田町大字与原所在前方後円墳の調査－』苅田町文化財調査報告書第 40 集、2008 年
(43) 行橋市教育委員会『稲童古墳群－福岡県行橋市稲童所在の稲童古墳群調査報告－』行橋市文化財調査報告書第 32 集、2005 年
(44) 宇佐市『宇佐市史（上巻）』宇佐市史編纂委員会編、1975 年
(45) 大平村教育委員会『能満寺古墳群－福岡県築上郡上毛町大字下唐原所在前期古墳群の調査－』、1994 年
(46) 福岡県教育委員会『金居塚遺跡Ⅰ－福岡県築上郡大平村所在金居塚遺跡の調査－』一般国道 10 号線中津バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 4 集、1996 年
(47) 吉富町教育委員会『楡生山古墳』吉富町文化財調査報告書第 3 集、1991 年
(48) 中津市教育委員会『永添遺跡・中津城跡（御用屋敷跡）・ホヤ池窯跡－中津地区遺跡群発掘調査概報 6 －』中津市文化財調査報告書第 13 集、1984 年
(49) 前掲註（46）。
(50) 大平村教育委員会『穴ヶ葉山古墳群－福岡県築上郡大平村所在古墳群の調査－』大平村文化財調査報告書第 3 集、1985 年
(51) 大平村教育委員会『穴ヶ葉山南古墳群－福岡県築上郡大平村所在古墳群の調査－』大平村文化財調査報告書第 2 集、1984 年
(52) 大平村教育委員会『上ノ熊古墳群－福岡県築上郡大平村下唐原所在古墳群の調査－』大平村文化財調査報告書第 1 集、1978 年
(53) 新吉富村教育委員会『桑野題古墳』新吉富村文化財調査報告書第 4 集、1989 年
(54) 新吉富村教育委員会『宇野台古墳』新吉富村文化財調査報告書第 5 集、1990 年
(55) 上毛町教育委員会『恵良古墳群・今蔵遺跡・縄手遺跡』上毛町文化財調査報告書第 3 集、2006 年
(56) 大平村教育委員会『下唐原大久保楢迫遺跡・下唐原大久保遺跡・下唐原西方遺跡・下唐原龍右衛門遺跡－村道恒久橋・上丸尾線建設に伴う発掘調査報告書－』大平村文化財調査報告書第 11 集、2001 年
(57) 九州歴史資料館『緒方古墳群・七ッ枝遺跡・龍毛遺跡－福岡県築上郡上毛町大字緒方所在遺跡群の調査－』東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告－ 8 －、2013 年
(58) 九州歴史資料館により平成 22 ～ 25 年度に調査された。報告書は平成 25 ～ 27 年度に刊行予定である。
(59) 椎田町教育委員会『椎田町内遺跡等分布地図』椎田町文化財調査報告書第 13 集、2003 年
(60) 椎田町教育委員会『頭無古墳－福岡県築上郡椎田町所在遺跡の調査－　付 . 椎田町文化財一覧』椎田町文化財調査報告書第 1 集、1975 年

福岡県教育委員会『石堂中後ヶ谷古墳群・菜切古墳群・頭無古墳群』椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告(2)、1990 年

九州歴史資料館『石堂大石ケ丸の氷室、福間菜切古墳群 2 次、中村西峰尾遺跡、中村山柿遺跡 2 次、松江黒部遺跡、川内下野添遺跡 1･2 次、大村上野地遺跡、荒堀山田原遺跡－福岡県豊前市・築上郡築上町所在遺跡の調査－』東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告－ 15 －、2013 年
(61) 豊前市教育委員会 1979『黒部古墳群－豊前市松江所在古墳群の調査－』玄洋開発、1979 年
(62) 高橋章・丹羽博・武末純一･緒方泉「豊前市の古墳時代遺跡」豊前市史編纂委員会編『豊前市史　考古資料別冊』、1993 年
(63) 豊前市教育委員会により大村シトキ田遺跡の名で平成 24 年度に調査された。報告書は平成 27 年度に刊行予定である。
(64) 豊前市教育委員会『豊前市内遺跡分布地図』、2000 年



第 5 図　塔田琵琶田遺跡第 2 次調査区全体図（1/600）

Ⅲ　調査の報告

1　調査の概要

調査地点の所在　塔田琵琶田遺跡は、福岡県豊前市塔田から、同久路土にかけて広がっている。このうち第2次調査は、豊前市久路土90 － 1、91 － 1 ～ 3、92 － 1 ～ 3、93 － 1･2、113の各筆を対象として行った。調査対象面積は約5,800㎡、うち実調査面積は3,800㎡であった。

調査地点の周辺環境　調査地点は、豊前市の東に広がる広い穀倉地帯の中央部に位置する。久路土地区とその周囲は条里地割が広く残された土地として知られ（小田1993）、現在も広がる水田としての開発は古代における条里制の施行にさかのぼる。調査地の付近でも圃場整備が行われる以前には部分的に条里地割が残されていたことが字図や圃場整備前の地形図より読み取れる。さらに、水田地割は埋没微地形をも反映しており、これによれば調査地点は南北に細長く伸びる尾根状の微高地の頂部から西側緩斜面にあたる（第3図）。ただし、調査着手直前には圃場整備や宅地造成などの地形改変が行われており、旧地形を完全に覆い隠していた。

遺跡の範囲　本地点は東九州道（仮称）豊前ICの建設予定地にあたる。東九州道の計画路線は久路土地区付近においてはほぼ東西に走っており、従ってインターチェンジの予定地は路線の北側にこれに直交するように南北方向に伸び、長さ約200m、幅約90mほどの略長方形の範囲に占地する。予定地の中には、西側1/3ほどの地点を南北方向に貫いて北に流出する用水路がある。この用水路は旧地形における谷部を流れており、用地付近の微地形はこの用水路を境に東西に大きく分かれる。うち西側は千束原台地の東側緩斜面の端部にあたり、弥生時代後期～古墳時代前期・古墳時代後期の集落跡である西ノ原遺跡の集落の周辺部が広がっていて、豊前市教育委員会により平成22 ～ 23年度に発掘調査が行われた。これに対し用水路東側には千束原台地よりも5 ～ 7mほど標高が低い、東西幅90 ～ 100m、南北長さ500mほどの埋没微高地が伸びており、この細長い微高地上のほぼ全域に古墳時代の集落跡を中心とする遺跡が占地している。この遺跡は、立地環境から見ても遺跡の内容から見ても、同一微高地上に広がる範囲が一体として取り扱われるべきものと考えられるが、その範囲が長大で複数の行政区にまたがるため、発掘調査は北側の大部分を占める「塔田琵琶田遺跡」のほか、南側で「西ノ原遺跡第5次」、「時末遺跡第1･2次（Ⅰ区）」という複数の名称で行われることとなった。本書では、これらがすべて同一の遺跡を調査したものと見なし、「塔田琵琶田遺跡群」という名称で呼ぶこととしたい。なお、微高地の広がる範囲はほぼインターチェンジ（進入路含む）・東九州道本線の予定地内に包摂され、結果として塔田琵琶田遺跡群はその東端を残すほとんどが東九州自動車道の建設により破壊されることとなった。それぞれの調査については第2表にその概要を示したので参照されたい。

遺跡名	調査次数	調査年度	調査原因	調査主体	報告
塔田琵琶田遺跡	第1次	H11	圃場整備	豊前市教育委員会	豊前市報29集
〃	第2次	H23	東九州道建設	九州歴史資料館	本報
〃	第3次	H23	県道犀川豊前線建設	九州歴史資料館	H27年度予定
〃	第4次	H24	東九州道建設	九州歴史資料館	H27年度予定
〃	第5次	H24 ～ 25	県道犀川豊前線建設	九州歴史資料館	H27年度予定
〃	第6次	H25	東九州道建設	九州歴史資料館	H27年度予定
西ノ原遺跡	第5次	H24	東九州道建設	豊前市教育委員会	H26年度予定
時末遺跡	第1次	H23	東九州道建設	九州歴史資料館	H27年度予定
時末遺跡	第2次（Ⅰ区）	H24	東九州道建設	九州歴史資料館	H27年度予定

第2表　塔田琵琶田遺跡群における既往の調査

調査区の設定　以下に報告する塔田琵琶田

遺跡第2次調査においては、Ⅰ～Ⅲ区に調査区を設定した。このうちⅠ区は、インターチェンジの北西側にあたり、旧状は水田であった。調査面積は約2,000㎡である。Ⅱ区はⅠ区の南側に設定した。インターチェンジの中央部西側にあたり、旧状は宅地であった。調査面積は約800㎡をはかる。Ⅲ区はⅡ区の東側に設定した。インターチェンジの中央部東側にあたり、旧状は水田であった。調査面積は約1,000㎡であった（第5図）。

2　Ⅰ区の調査成果

（1）概要

調査区の位置　Ⅰ区は調査範囲の北東側にあたる約1,800㎡の範囲である。塔田琵琶田遺跡の乗る尾根状微高地は大略南北方向に伸びており、その北端部には平成11年度に豊前市教育委員会が調査した第1次調査区、南端部には平成23年度に九州歴史資料館が調査した時末遺跡第1次調査区が位置する。第2次調査Ⅰ区は第1次調査区から南に約90mほどの地点に設定した。塔田琵琶田遺跡の広がりのなかでは北寄りの西半に位置する。

土質　Ⅰ区の旧状は水田であった。このため、土層の最上位には水田耕作土があり、その下層には粘性土からなる水田床土が見られた。この粘性土は地山由来のものではなく、客土で人工的に施されたものである。付近は比較的透水性が高い地質であり、水田の保水性を保つためにこのような客土がしばしば行われるようである。

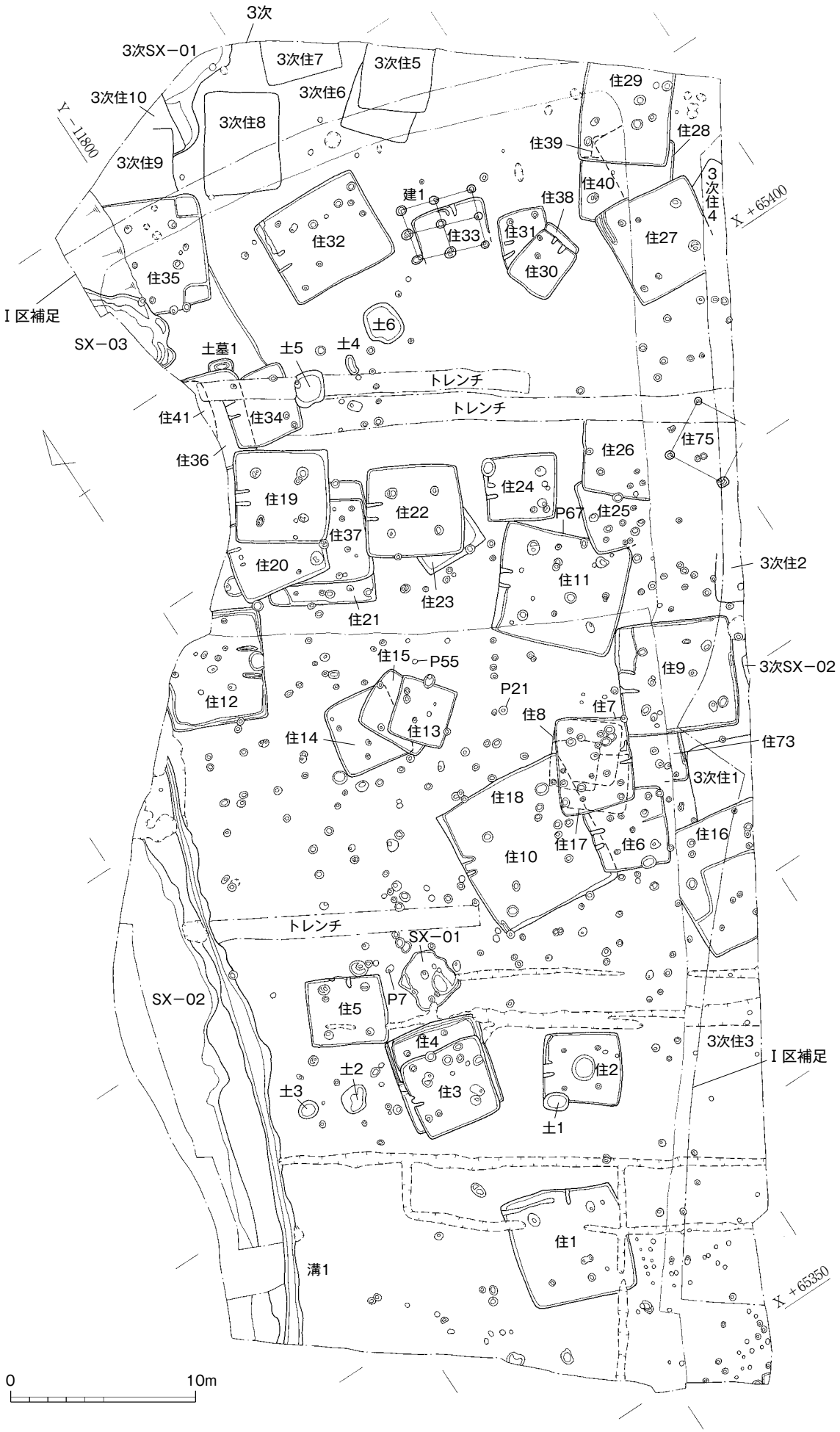
水田床土の下が遺構面である。地山は火山灰堆積層からなり、深部の未風化部分は赤～黄褐色粘砂質土であるが、上層は風化が進行して黒ボク化する。2者の層界は不明瞭で、下層にいくほどに後者から前者へと漸移する。海側にあたる北側ほど水田耕作に伴う削平は浅く、黒ボク土が広がる一方、山側にあたる南側では削平が深部にまで及び下層の粘砂質土が露出する。しかし、この粘砂質土層はそれほど厚みを持っておらず、調査区の北側ではそれすらも削平により失われ、さらに下層にあたる黄～白褐色砂礫土が広く露出する部分が見られる。洪積扇状地の堆積物であってこの地域に広く広がる基盤層である。上層の火山灰堆積土とともにきわめて透水性が高いこの地域の地山の性質を決定づけている。

遺構埋土　遺構の埋土は、黒褐色粘砂質土からなる。遺構面である黒ボク土の上層部分に遺物や有機物などが混入して粘性がやや高まったものであるが、色調は黒ボク土と類似しており、黒ボク土が削平から免れて広く展開する部分では遺構と地山との境界が不明瞭で区別が付けがたい。一方、遺構面が深く削平された部分では下層の色調の明るい土質との区別は明瞭である。

検出遺構　Ⅰ区で検出した主な遺構は、竪穴住居跡43棟、掘立柱建物跡1棟、土坑6基、土壙墓1基、溝1条である。このほか、性格不明の落ち込み遺構1基、多数の柱穴などを調査した。これらの遺構の所属時期は古墳時代前期・後期を主とする。また、調査区の西端では南北方向に伸びる谷状の地形の落ち込み（SX－02･03）を検出した。以下、個別の遺構について詳細を述べていこう。

（2）竪穴住居跡

Ⅰ区からは、計43棟の竪穴住居跡を検出した。いずれも（長）方形プランで、古墳時代前期のものが13棟、古墳時代中～後期（5世紀後半～7世紀初頭）のものが30棟ある。古墳時代後期の



第 6 図　塔田琵琶田遺跡第 2 次調査 I 区遺構配置図（1/300）

ものは、削平や切り合いによって失われたり、一部が調査区外に広がるなどして全体像が不明瞭な 11 棟を除いてすべてにカマドが付く。そのうち、煙道が住居壁に沿ってコーナー部まで伸びる、いわゆる「L 字状カマド」となるものが 13 棟存在する。

竪穴住居跡の床面は地山の比較的深部に位置する砂礫層が露出していることが多く、またその上層でとどまっている場合には黄褐色の粘質土が地山となるがこれが軟質な土壌で、床面を平坦にし、固めるために、しばしば貼床を施す状況が認められた。主柱穴はしばしば貼床下層で検出されたため、完掘状況の写真には写されていないことがある。また、貼床を下げて下層から主柱穴を探すものの、適当なものが見つからない住居跡もしばしばあり困惑させられた。特に、炉跡やカマドも付設されず、主柱穴も見当たらないような竪穴遺構を住居跡としてよいのかどうかやや迷いもあるが、ここでは調査時の判断に従って報告していく。

1 号竪穴住居跡（第 7 図、図版 7）

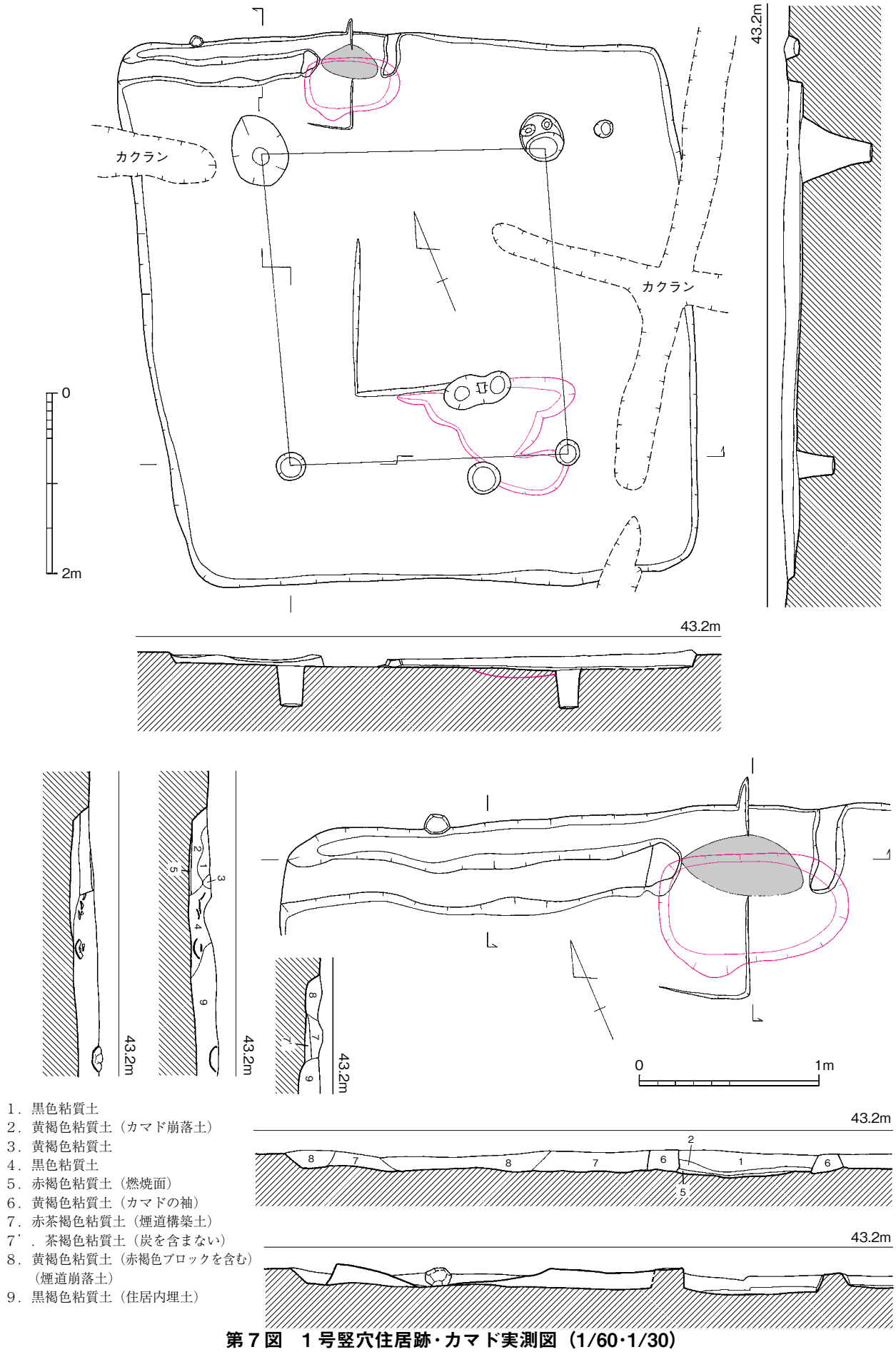
Ⅰ区の南側で検出した住居跡である。北に 2 ～ 4 号住居跡があるが、本住居跡は他の遺構とは切り合わない。平面形態は方形でややゆがみがあり、主軸方位は北北東－南南西にとり、規模は南北長が 5.96m、東西幅は 6.00m をはかる。北壁の中央わずかに西側に内接型の L 字状カマドを付設する。調査中、周囲の水田に水が入った後は住居跡の床面から常時湧水があったため、竪穴部内部から多量の土器の出土があったにもかかわらず十分な記録をとることができなかった。また、主柱穴の検出についても、十分に行うことができたとは言いがたい状況であった。床面には硬くしまった硬化面が中央部付近に残存しており、下層には貼床が施されていた。柱穴は硬化面の上から検出しており、そのうち 4 本を主柱穴として図示した。これも湧水により十分に調査できたかどうか定かではない。埋土は黒褐色粘質土で、壁の残存高は 13㎝である。出土土器から、5 世紀後半に位置づけることができよう。

カマド（第 7 図、図版 7）

北壁の中央やや西寄りの位置に、内接型の L 字状カマドを付設する。煙道は北壁に沿って東壁まで伸びる。煙道の幅は 16㎝、煙道壁の幅は 11㎝を測る。袖は奥壁に垂直につき、長さは約 45㎝が遺存していたが被熱跡変部の位置から考えてもう少し長く伸びていたであろう。袖間の距離は内法で約 75㎝である。支脚石や支脚石が埋め込まれていたピットの痕跡はともに検出されなかった。支脚は石ではなく、土器であった可能性が高い。カマドの内部には被熱により赤変した硬化面が 65㎝× 35㎝の楕円形状に広がっている。カマド内部の埋没状況は、被熱により赤変したカマドの床面の上に崩落したカマドの土、その上に住居埋土とは別の土が堆積している。このような状況は、住居の廃絶に伴い灰・炭等をカマドから掻き出した後に破壊し埋め戻した状況を示すものと考えられる。なお、燃焼部の下層に不定形の浅い掘り込みを検出したが、湧水のため検出面を確定できなかった。深さから見て本カマドに伴うものではない可能性が高い。

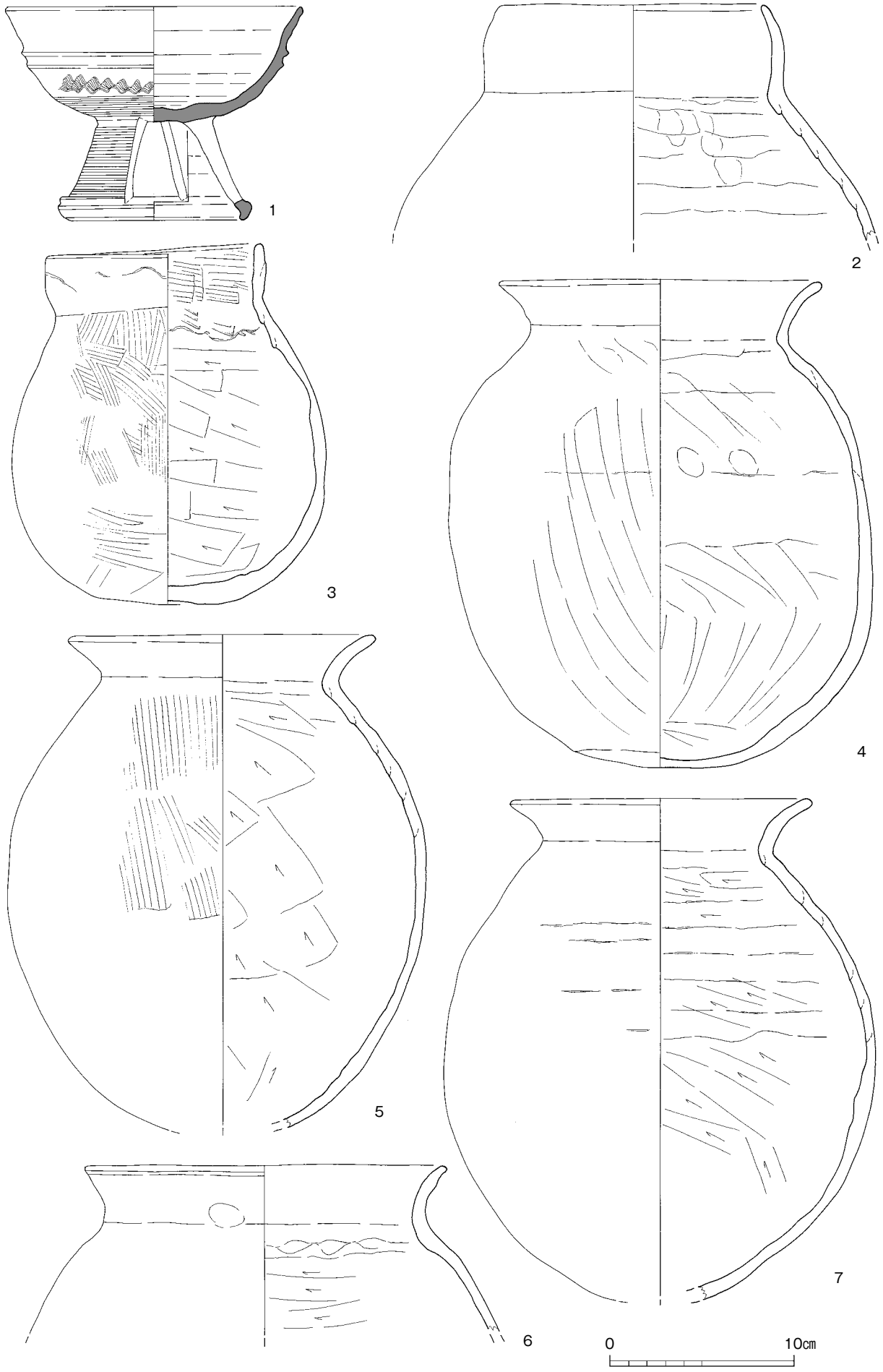
出土遺物（第 8 ～ 11 図、図版 43 ～ 45）

須恵器（1） 1 は高坏である。坏部はやや湾曲する底部からゆるやかに屈曲して斜め上方に立ち上がり、口縁部はわずかに開く。坏胴部外面に 2 条の三角突帯を付し、その下に櫛描波状文を回す。脚部はゆるやかに外湾しながら開き、接地部はわずかに内湾する。端部外面に突帯を 1 条回す。スカシは 4 箇所。小田・長編年Ⅰ－ 3 期の資料か。

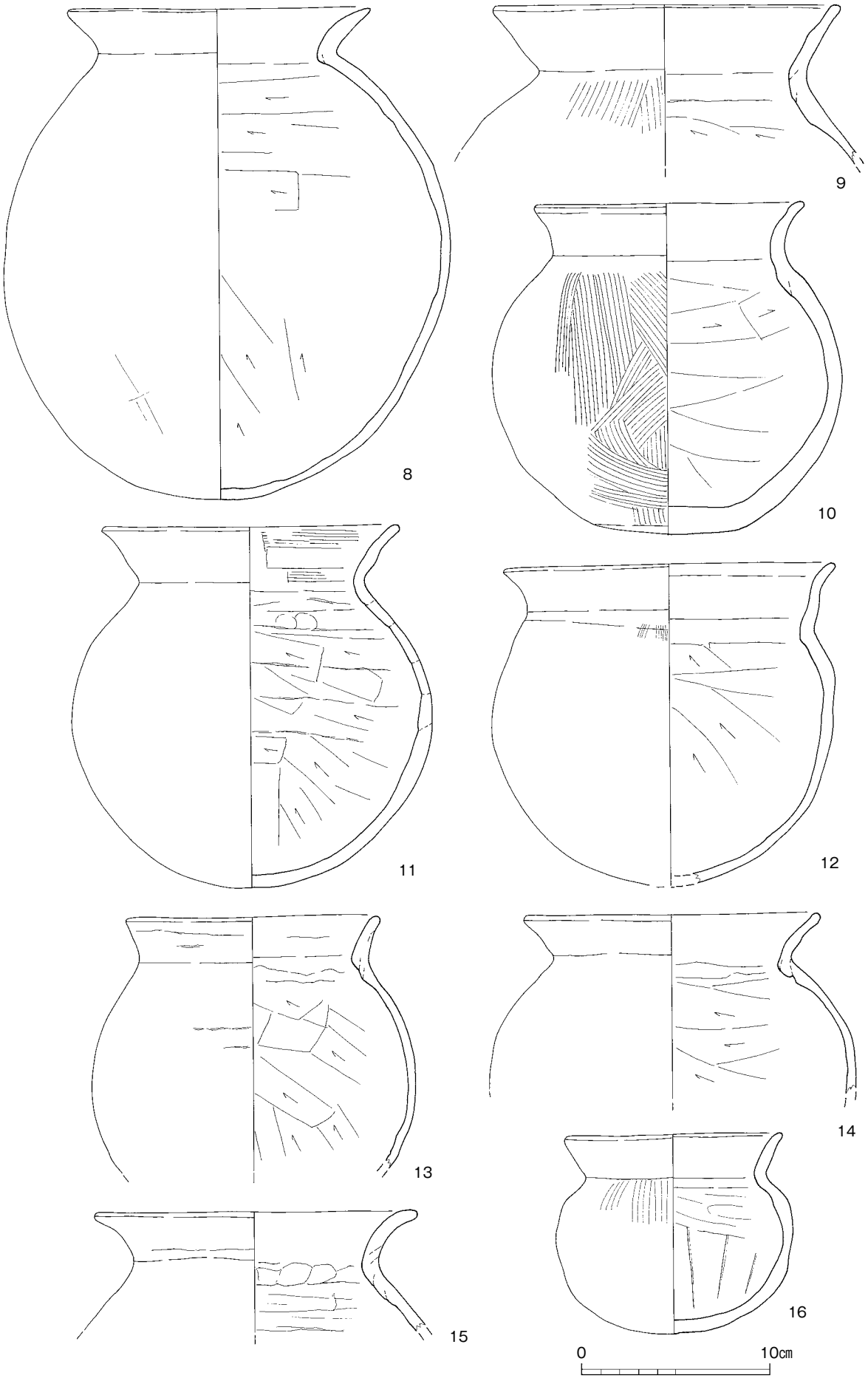


1．黒色粘質土
2．黄褐色粘質土（カマド崩落土）
3．黄褐色粘質土
4．黒色粘質土
5．赤褐色粘質土（燃焼面）
6．黄褐色粘質土（カマドの袖）
7．赤茶褐色粘質土（煙道構築土）
7’．茶褐色粘質土（炭を含まない）
8．黄褐色粘質土（赤褐色ブロックを含む）（煙道崩落土）
9．黒褐色粘質土（住居内埋土）

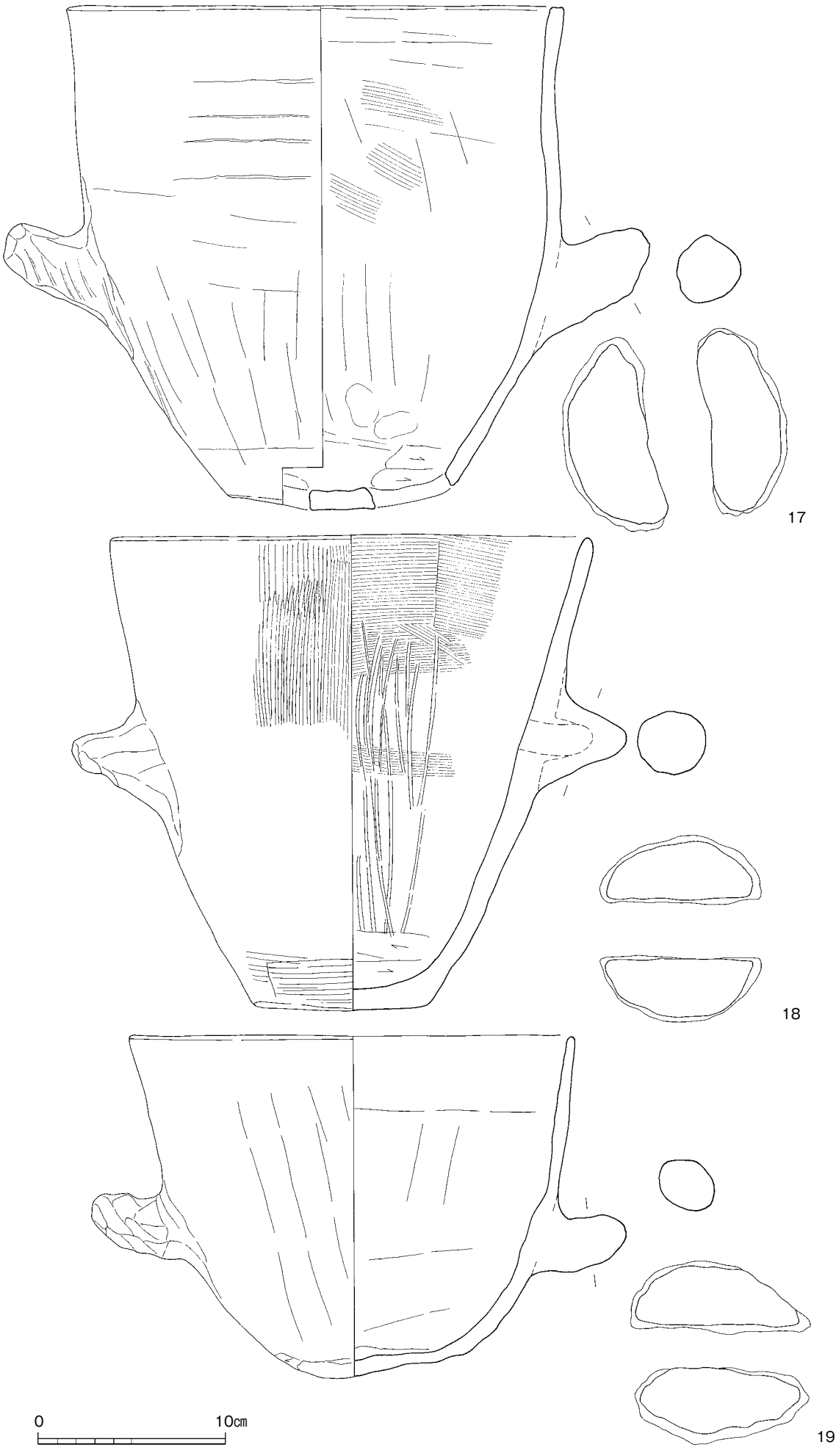
第７図　１号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）



第８図　１号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）

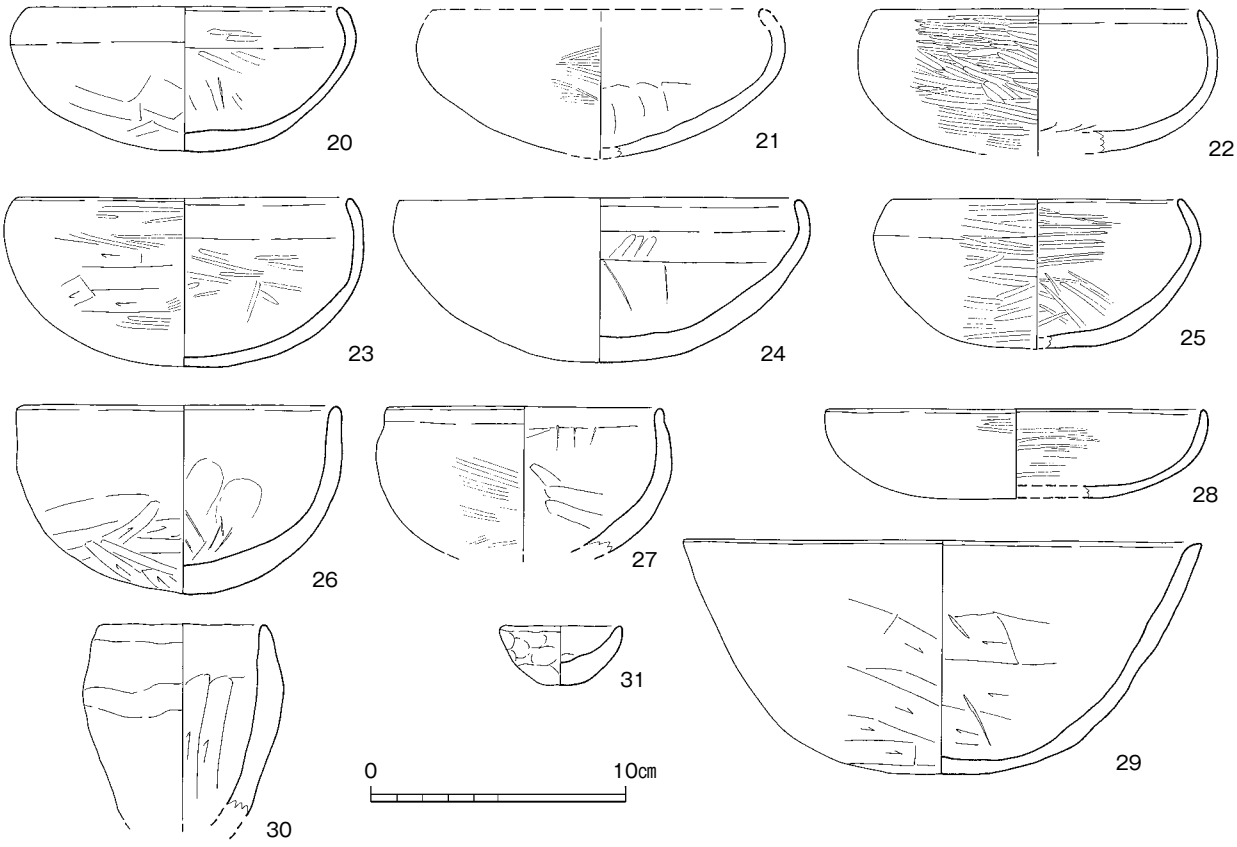


第９図　１号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）



第 10 図　1 号竪穴住居跡出土土器実測図その③（1/3）

土師器（2 ～ 32） 2 は在地系の二重口縁壷の変容か。口縁部はゆるやかに内湾しながらやや内傾気味に立ち、胴部は上半のみが遺存するが球胴状を呈するか。胴部内面には粘土紐の積み上げ痕跡と指頭圧痕が明瞭に残る。外面と口縁部内面はナデ仕上げ。3 は甕形土器に近い形状だが、口縁部が直立してわずかに内湾することから、やはり在地系二重口縁壷の変容とみたい。胴部はやや下膨れで底部は安定感がある。胴部内面はケズリ、外面と口縁部内面にはハケ目、口縁部外面はナデ仕上げ。胴部内面と口縁部外面に粘土紐接合痕跡が認められる。4 ～ 16 は甕である。4 ～ 8 は胴部最大径が 20㎝を超える（と推測される）大型の甕である。口縁部径は 16㎝～ 19㎝で 17㎝～ 18㎝のものが多い。器形は球胴と短く外反する口縁部を持ち、口縁－胴部境は明瞭に屈曲するものが多く 4・5・7・8 が該当する一方 6・9 のように湾曲するものもみられる。口縁部はゆるやかに外湾しながら斜め上方に伸びる。器壁調整は胴部内面がケズリを主体とし、上半にナデ仕上げを施すものがみられる。外面にはしばしばハケ目が残りつつナデ仕上げによりこれを消す。口縁部は内・外面ともにナデ仕上げ。なお、4・5・7 は胴部内面に明瞭な粘土紐接合痕跡を残す点が注目される。10 ～ 15 は胴部最大径が 15 ～ 20㎝の範囲に収まる中型の甕である。口縁部径にはやや幅があり、10 や 13 のように 15㎝以下に収まるものもあれば 12 のように 18㎝近くになるものもある。形状は、球胴から屈曲して短く外反する口縁部をもち､口縁部形態はゆるやかに外湾するものが主体を占める。胴部－口縁部境は湾曲する 10 と明瞭に屈曲するそれ以外とにわかれる。器壁調整は胴部内面がケズリを主体として一部にナデ消しがみられ、外面はハケ目のちナデ仕上げが主体である。口縁部は内・外面ともにナデ仕上げである。16 は小形の甕である。ややつぶれた球形の胴部と、わずかに外湾しながら短く外反する口縁部を持つ。胴部最大径は 13㎝未満である。調整は内面下半が工具を用いた強いナデ、上半は指ナデ、外面はハケ目後ナデ消しである。17 ～ 19 は甑で、完形に復原



第 11 図　1 号竪穴住居跡出土土器実測図その④（1/3）

できる資料である。いずれも底部には半月状の2孔が穿たれ、胴部はわずかに内湾しながら斜め上方に伸びる。口縁部は直線的に伸びる18・19とわずかに外湾する17とに分かれる。把手は胴部中位の対角線上に1対つく。18が平底、19は丸底で、17は中間的様相をもつ。17・18は口径25～27cm、器高25～28cmとほぼ同大で、19はこれより小形である。器壁調整は内・外面ともにハケ目のち丁寧なナデ消しを施すようであるがハケ目痕跡は18を除いてはほとんど看取されない。20～28は碗である。20～25は比較的器形が類似する一群で、やや浅い半球形の胴部と急激に内湾する口縁部をもち、口径は20～23が14.2～14.4cmと比較的まとまるのに対し24はやや大きく16.4cm、25はやや小さく13.0cmをはかる。器壁調整は、内面・外面あるいはその双方にミガキ痕跡が認められる資料が大半を占める中で21のみは外面がハケ目、内面がナデ調整である。26・27は小形でやや深めの碗形土器である。26は口径12.9cm、器高が7.5cmをはかり、27は口径11.8cmをはかる。調整はヘラ状工具を用いた強いナデ痕跡が目につくがミガキといえるほど丁寧なものではない。28は浅い碗形土器である。口径が15.2cmをはかるのに対し器高は3.5cmしかない。内・外面に丁寧な磨きを施す。29は小形の鉢形土器であろうか。丸底からゆるやかに立ち上がり斜め上方に伸びて口縁部にいたる。口径は20.6cmと碗形土器よりも大きい。器壁調整は板状工具による強いナデで、ヘラケズリのように鋭い痕跡を残さない。30は蛸壺である。遺存部分には紐を通す孔はみられない。口径7cm程度の小形の手づくね土器で指ナデ痕跡が明瞭に残る。31は手づくねのミニチュア碗である。以上はおおよそ5世紀後半代に属するものか。

なお、本住居跡埋土中からはほかに第119図16に示した鉄刀子片、同18に示した不明板状鉄片が出土している。

2号竪穴住居跡（第12図、図版8）

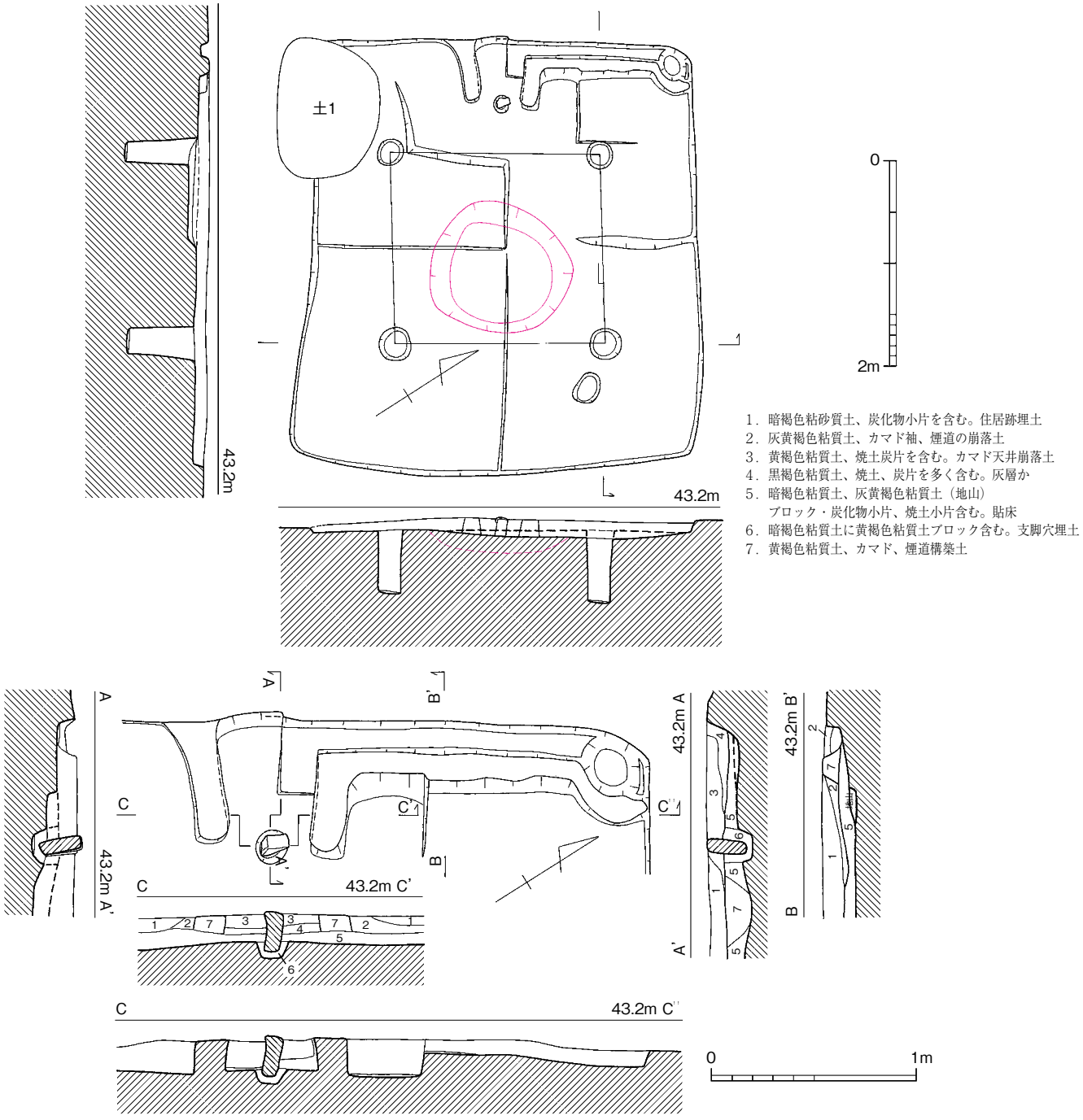
Ⅰ区南寄りで検出した住居跡である。1号土坑と切り合い、本住居跡が先行する。平面形態は略方形で、北西壁にL字状カマドを作り付ける。規模は長さが4.16m、幅が3.66mをはかる。深さは削平が著しく約10cm程度しか残されていない。床面のレベルは本来42.8mのあたりであったと思われ、南西1/4ほどの範囲についてはおおよそ床面を検出することができたが、ほかの範囲では床面（生活面）の下層に貼床が平均厚さ10cm前後施されており、この貼床を住居跡埋土と誤認して掘り下げたので、本来の床面は失われた。本来の床面が残された部分にはわずかに硬化面が認められる。主柱穴は4本が確認されたが、いずれも本来の床面レベルでは確認できず、貼床をある程度飛ばした段階でその存在を認識した。ただし柱痕は残されておらず、本来は貼床上面のレベルで柱抜き跡を認識できたはずである。なお、床面中央部に直径1.2m、深さ約20cmほどの不整円形の掘り込みを確認した。検出面は貼床の上層である。床硬化面が検出面に広がっており、住居としての機能時にはこの土坑は埋没していたことは確実であるが、貼床の上から掘られていることも確かで、住居の建設時に何らかの機能（湿気抜きなど）を期待して掘削された可能性が考えられるが確実ではない。住居跡の埋土中からは土師器が出土しているが床面直上から出土したものはない。出土土器より、おおよそ6世紀前半頃に埋没した住居跡であろう。なお、埋土中から出土した炭化材をC14年代測定にかけたが、上記の年代観とは100年ほどずれる結果となった（後述）。

カマド（第12図、図版8）

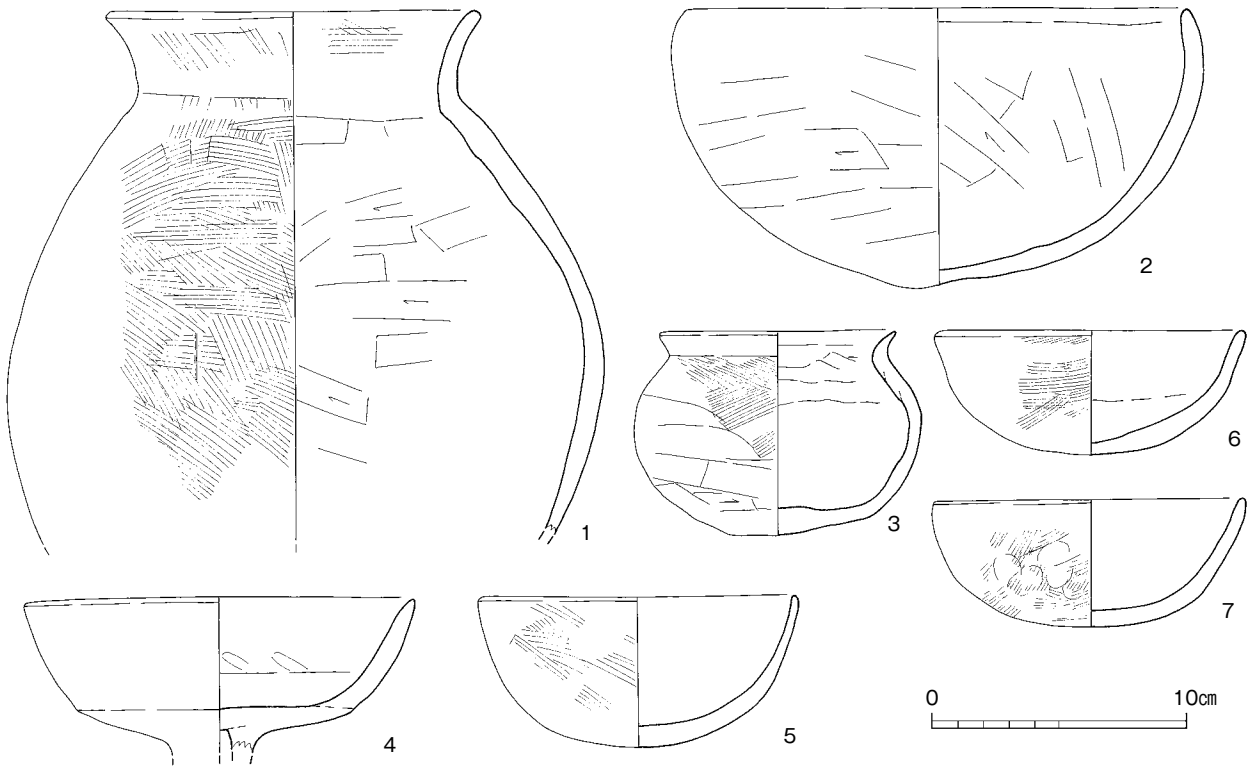
2号住居跡の北西壁にカマドが作り付けられている。カマドの本体は壁のほぼ中央部にあり、壁

に対して袖が直線的に伸びるタイプである。袖は住居壁より約 60cmつきだしており、両袖がほぼ並行に伸びていて袖間の距離は 40cmほどをはかる。袖の先端部中央に支脚石が立っている。支脚石の長さは約 20cmで、うち半分ほどが床に埋まり、10cmほどが床面から突き出していたものとみられる。煙道は壁に沿って右手に伸び、北側コーナー部から立ち上がる。立ち上がり部分には直径 30cm、深さ 15cmほどのピットが掘られる。

カマドの構築土は地山由来の黄褐色粘質土で、カマドの埋土は最下層に灰層があるほかはカマド構築土の崩落と住居跡の埋土（暗褐色粘砂質土）から構成される。カマド崩落土の堆積状況から見て、住居廃棄時のカマド破壊は行われず、自然に埋没した可能性が高いとみられる。



第 12 図　2 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）



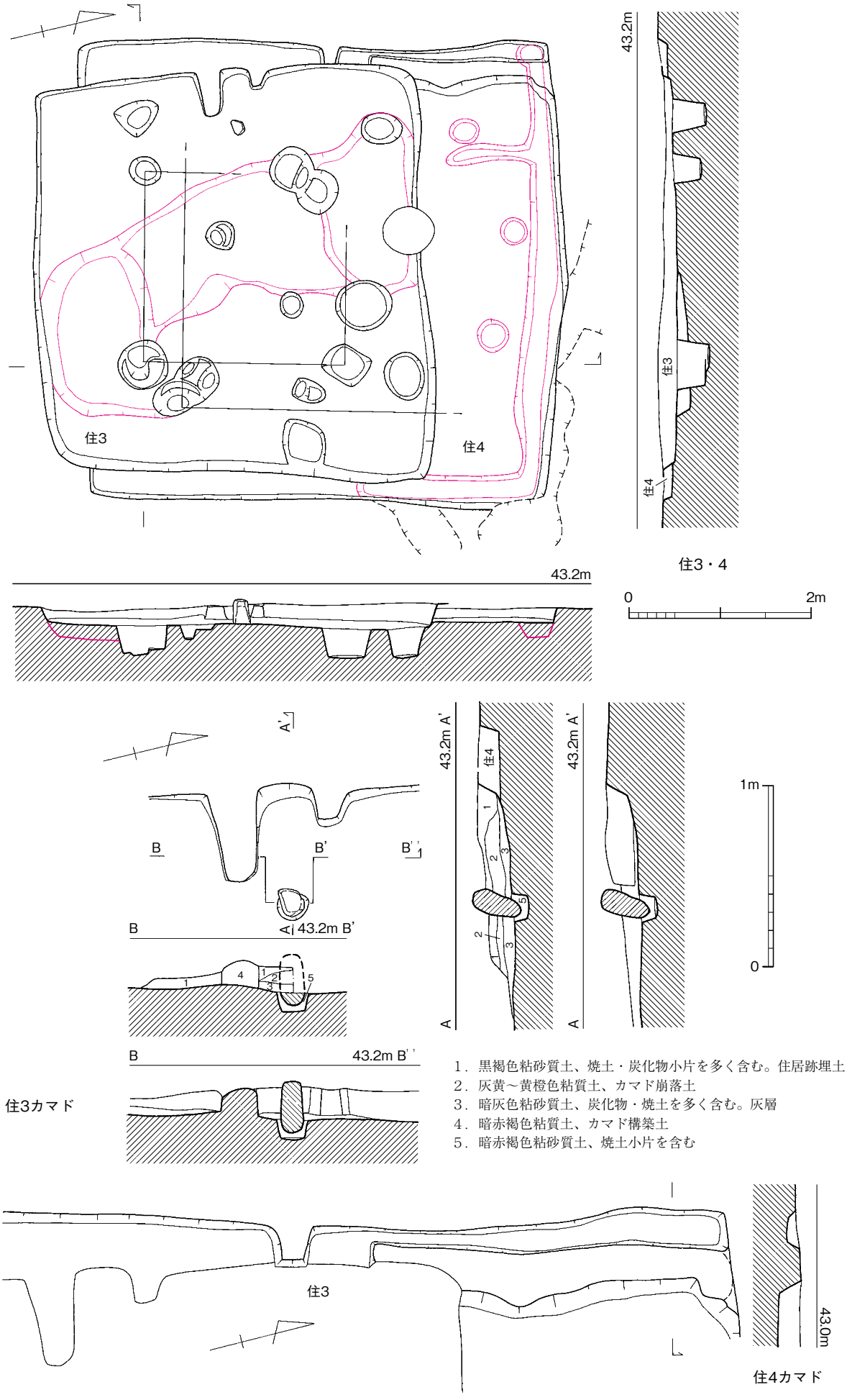
第 13 図　2 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物（第 13 図、図版 45）

土師器（1 ～ 7）　1 は在地系の長胴短頸壷であろう。底部は欠失する。胴部は長胴で頸部は強くくびれ、口縁部は外湾しながら斜め上方に伸びる。胴部内面はケズリ、外面はハケ目仕上げ。2 は半球形の鉢形土器である。丸底の底部からゆるやかに内湾しつつ口縁部にいたる。復原口径 20.0cm。器壁調整は内・外面ともにケズリのち口縁部のみナデ。3 は小形の甕である。ややつぶれた球形の胴部と短く外反する口縁部を持つ。内面は指成形後ナデ仕上げで粘土紐接合痕を良く残す。外面は下半部にケズリ痕跡がよく残り、上半はハケ目調整。口縁部付近のみナデ。4 は高坏の坏部片である。口縁部は斜め上方にまっすぐ伸び、底部は平坦で底－口縁部境はやや緩やかに屈曲し、境界部に粘土帯接合痕跡が認められる。口径は 15.6cmでやや小形である。5 ～ 7 は碗形土器である。いずれも丸底からゆるやかに湾曲しつつ口縁部にいたる器形である。器壁調整はすべて同じで内面がナデ、外面には一部に指頭圧痕を残しつつその上からハケ目調整を施す。これらの土器は 1 号住居跡出土土器群よりも新相を呈し、6 世紀前半に位置づけられよう。

3 号竪穴住居跡（第 14 図、図版 9）

Ⅰ区南側の中央部で検出した住居跡である。4 号住居跡を大きく破壊して作られており、主軸方位は略東西方向である。西辺の中央に内接型のカマドを作り付ける。竪穴部の大きさは東西長が 4.24m、南北幅が 4.20m で、平面形状はほぼ正方形を呈する。残存深さは深いところで 30cmをはかる。床面には多くのピットがあるように図示しているが、調査時に住居の床面から絶え間なく水が湧いており、ピットの有無の検討を十分に行うことができないまま、目に付いたシミを手当たり次第掘るような調査となったためこのように多くのピットができたものであり、この中には深さが 10cm 程度しかないようなものも含まれる。その中で北西部以外の 3 つの主柱穴を検出できたのは僥倖であった。以上のような経緯から、床下掘り込みも正確な形状を調査することはできなかった。埋土



1．黒褐色粘砂質土、焼土・炭化物小片を多く含む。住居跡埋土
2．灰黄～黄橙色粘質土、カマド崩落土
3．暗灰色粘砂質土、炭化物・焼土を多く含む。灰層
4．暗赤褐色粘質土、カマド構築土
5．暗赤褐色粘砂質土、焼土小片を含む

第 14 図　3･4 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）

は黒褐色粘砂質土層で分層できない。上～中層に略完形の土器を多く包含していたが、湧水のため出土位置を記録できなかった。出土土器から、6 世紀前半頃に位置づけられる。

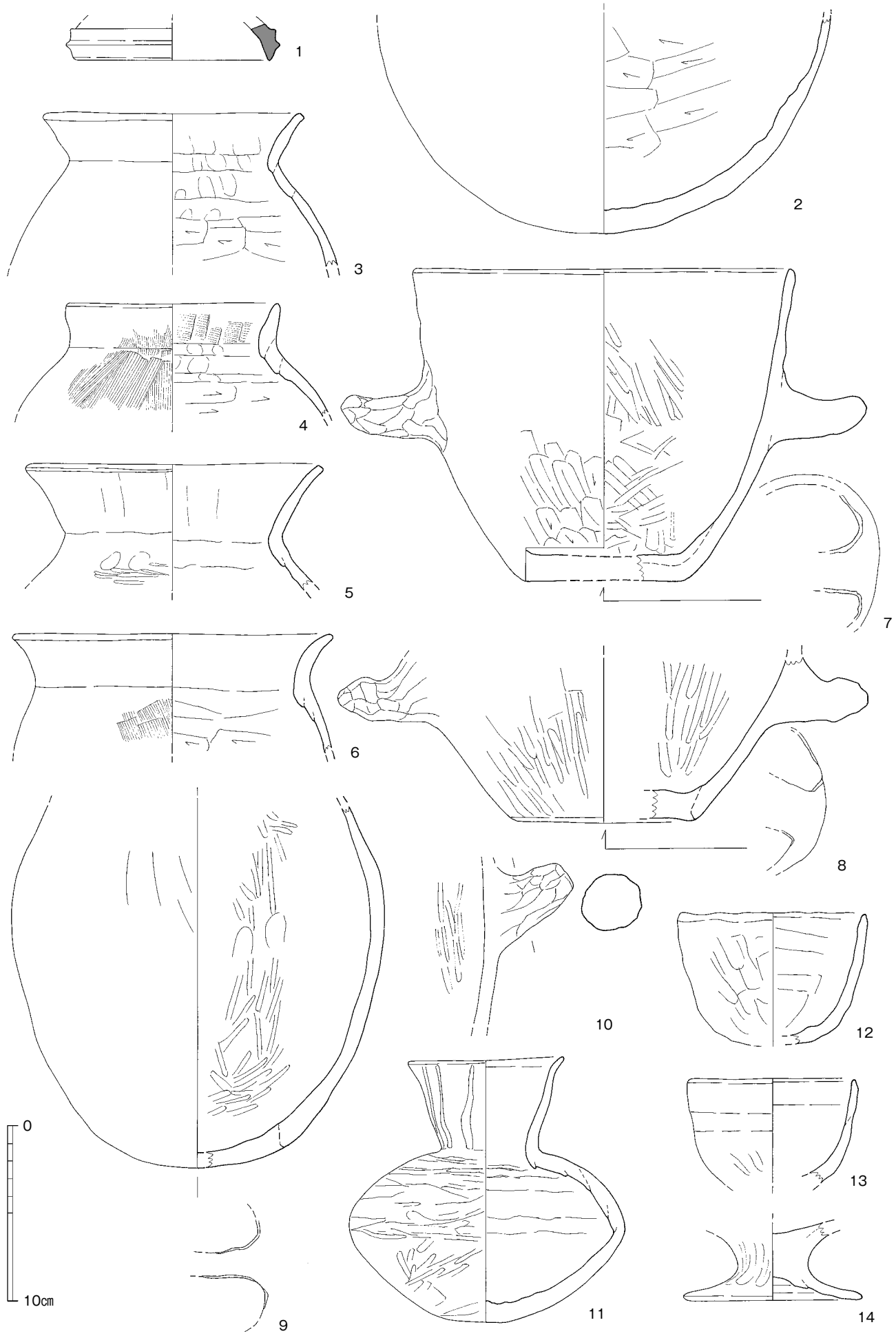
カマド（第 14 図、図版 9）

西壁中央に内接型のカマドを付設する。煙道は見られず、カマド奥壁からそのまま住居外に出るタイプだろう。残りは悪く、左袖が 50cm弱、右袖は 20cm弱残るのみであるが本来は壁と垂直に 80cm以上伸びていたものとみられる。袖間の距離は狭く 30cmほどであろうか。奥壁から 50cmほどのところに支脚石が立てられている。長さ 27cmほどの河原石で、うち 5cm強が地中に埋められ、20cm強が地上に露出する。埋土は最下層に灰層が残り、その直上にカマド崩落土、さらに住居埋土が堆積していることから、住居廃絶時にカマドをそのままつぶして埋め戻していることがわかる。

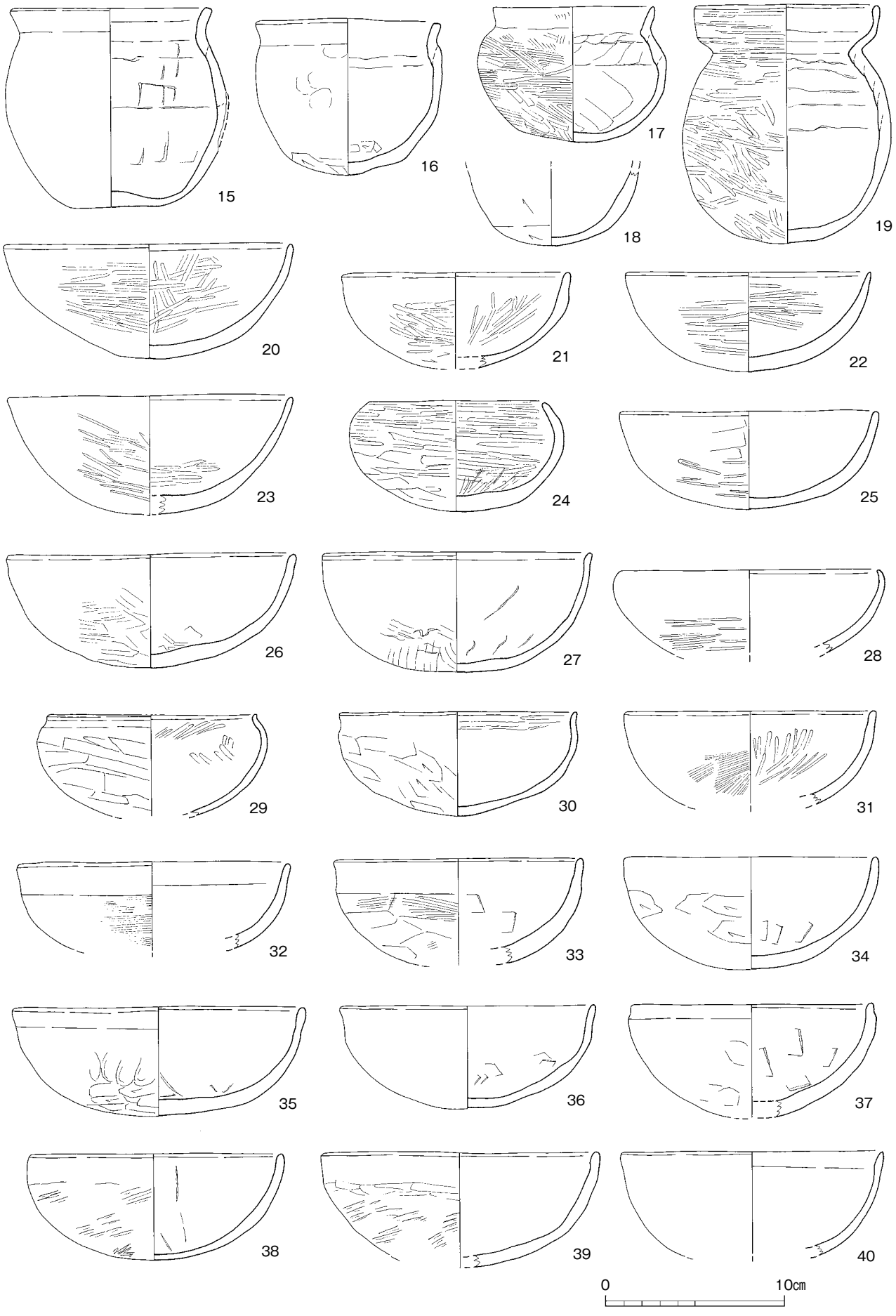
出土遺物（第 15 ～ 17 図、図版 46 ～ 48）

須恵器（1） 1 は高坏の脚部片である。小片で径にはやや自信がないが 13.0cmに復元した。接地部は内側に向かって尖り、外面には２条の三角突帯がつくような形状となる。スカシの下端部までが遺存している。

土師器（2 ～ 60） 2 ～ 6 は甕である。2 は大型の甕の胴部下半のみが残る資料である。胴部最大径は 26cmほどをはかる。器壁調整は外面がナデ仕上げ、内面にはケズリ痕が残る。3 ～ 6 は中型の甕形土器の口縁部から胴部上半までの資料である。口縁部形態にはややバリエーションがあり、やや薄めでまっすぐ開く 3・5 と、頸部付近から口縁端部にかけて外湾しながら徐々に薄くなり端部を丸く収める 4・6 とがみられる。いずれも頸部付近に粘土紐接合痕跡が良く残る。器壁調整は胴部内面が 5 を除きケズリ、外面は 3 を除きハケ目、口縁部付近にはしばしば指頭圧痕を残しつつナデ調整を施す。7 ～ 10 は甑である。7 はほぼ全形を復原できる資料である。底部は平底でおそらく半月形に 2 孔を穿つものであろう。胴部下半はゆるやかに内湾し、中半から口縁部にかけてはまっすぐに斜め上方に伸びる。胴部中位の外側に 2 本の把手を付す。8 もやはり平底で、おそらく半月形の 2 孔を穿つ甑の底部～胴部中位片である。一方の把手が残り、反転復原している。9 は丸底で、やはり 2 孔を穿つものであろう。繭形の胴部を持つやや特徴的な資料である。10 は胴部中位と把手のみが遺存する。器壁調整は比較的よく共通しており、内・外面ともに胴部が板状工具またはヘラを用いた強いナデ・ミガキの痕跡が認められる。11 は小形の丸底壷である。胴部はそろばん玉状で、わずかに外湾しながら斜め上方にやや長く伸びる口縁部がつく。口縁部外面には端部から頸部にまで伸びる暗文状のヘラミガキが放射線状に施される。胴部外面はかなり雑なヘラミガキあるいは強いヘラナデ、内面はナデ仕上げで上半には粘土紐接合痕跡が良く残る。12・13 は小形の碗形土器であろう。丸底で、口縁部にかけて斜めに伸びる。孔径は 10 ～ 11cmと小さい。14 は小形の脚付き鉢であろう。脚部のみが残るが、器壁調整が丁寧なナデ仕上げである。15・16 は小形の甕であろう。15 は口径 11.4cm、胴部最大径 13.2cmをはかり、底部が平底状をなす。16 は口径 10.4cmと一回り小さい。17 は小形の短頸壷であろう。つぶれた球状の胴部から屈曲して短く斜め上方に伸びる口縁部にいたる。胴部外面はハケ目のちミガキ調整、内面には工具を使用したナデ痕跡が認められる。口径 9.2cm、器高 7.6cmと小型である。18 も小形の壷形土器の胴下半～底部片であろうか。19 は小形の二重口縁壷である。二重口縁部はかなり変容して屈曲部が丸みを帯びる。胴部はやや下膨れの球形である。外面全面に丁寧ながらランダム方向のミガキ痕跡が認められ、胴部上半の内面には粘土紐接合痕跡が明瞭に残る。20 ～ 43 は碗形土器である。丸底で、ゆるやかに内湾しなが

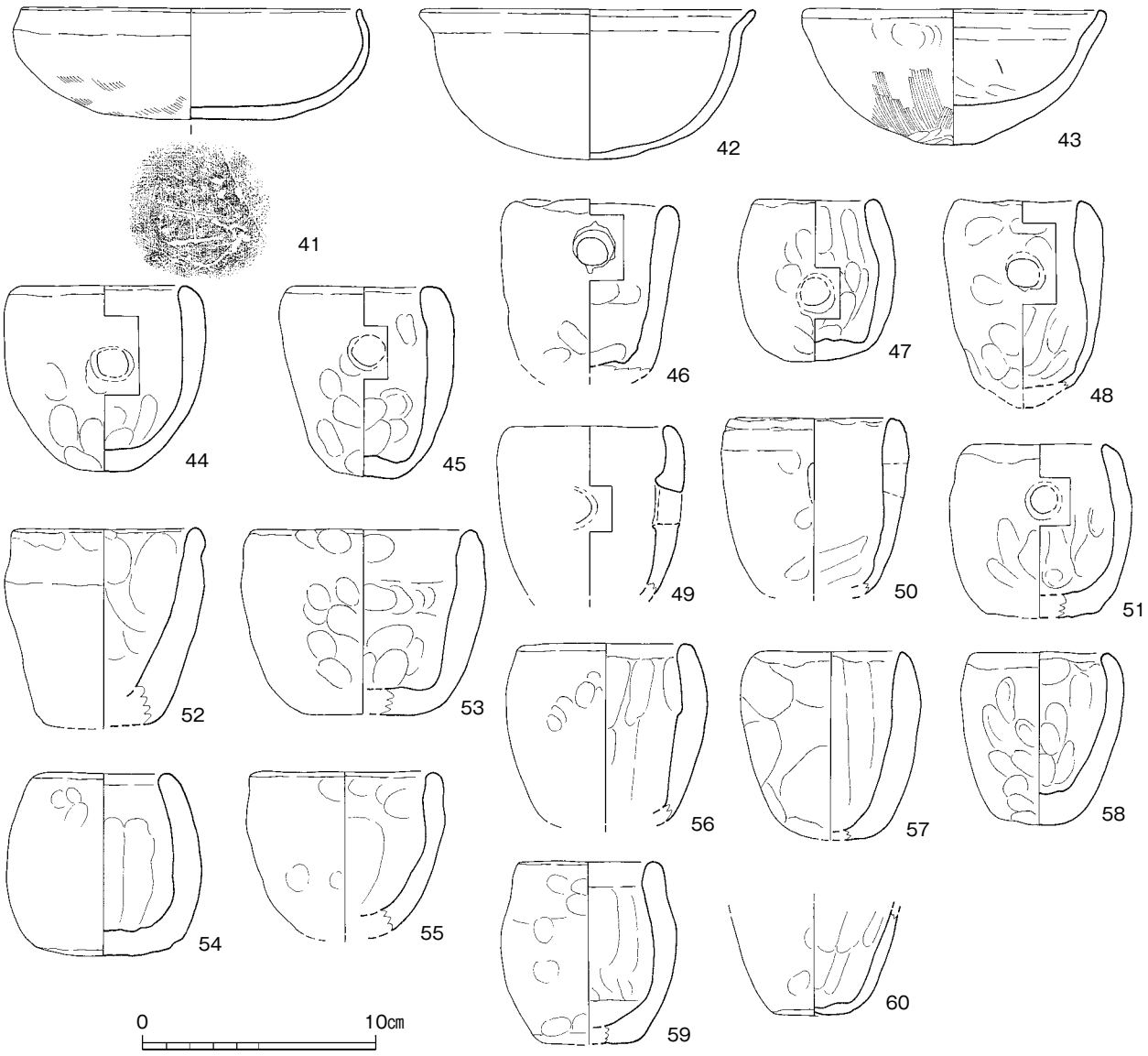


第 15 図　3 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）



第 16 図　3 号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）

ら斜め上方に体部が伸び、口縁部はそのまま伸びるもの、口縁端部付近で強く内湾するもの、弱く外反するものなどいくつかのバリエーションが認められる。ここでは器壁調整ごとにまとめて述べる。20 ～ 31 は外面・内面あるいはその双方にヘラミガキ調整痕跡が認められるものである。ミガキにより全面を丁寧に調整するものもあるが、とくに外面については体部中・上位にハケ目、底部～体部下半に板状工具ナデなどのヘラミガキ前の成形痕跡が認められるものもある。また内面調整はヘラミガキを伴わずナデ調整で仕上げるものもある。器形を見ると、24 は口縁部が強く内湾するもの、29・30 は口縁端部がわずかに外反するもので、他は丸底から口縁部へとスムーズにいたるものである。32 ～ 39 は外面・内面またはその双方にケズリあるいは強い板ナデ調整を施すものである。調整単位を詳細に観察すると、砂粒の移動が認められるものの一般的なケズリのような鋭さが感じられず、ケズリ面も明瞭ではない。おそらく生乾きの状態で板状工具でこすって器壁を整形した痕跡ではなかろうか。この調整の上からハケ調整やナデ調整を施して最終器壁調整となすものが多い。また上述のヘラミガキ調整を最終調整とするものについてもこの強い板ナデ調整をミガキの前に施す個体が認められる。器形をみると、36 は口縁端部をわずかに外反させるが、他は丸底から口縁部までゆるやかに内湾しながら伸びる。40 は摩耗により明瞭な器壁調整が看取されないものである。41 は器高が他と比べて低いものである。器壁も薄く胎土も精良で優品である。底



第 17 図　3 号竪穴住居跡出土土器実測図その③（1/3）

部にヘラ記号が認められ、須恵器模倣坏であろうか。42・43は口縁端部を短く屈曲させて外反させるもので、鉢の小形品としてもいいかもしれない。とくに43は器壁も厚く他の碗と比べて違和感がある。44～60は蛸壷である。すべて、内・外面の器壁に明瞭な指頭圧痕やナデ調整痕跡が認められ、手づくね感が強いものである。口径は6～8cm、器高は8cm前後でサイズの共通性は比較的高い。うち、44～51は体部中位に1孔を有する。52～60は孔の痕跡が認められなかったが、この中に完形品はなく、おそらく孔の部分が失われており、本来は1孔が開くのが基本形態であったと思われる。以上の土器群は1号住居跡よりも後出する様相を示し、6世紀前半頃に位置づけられよう。

なお、本住居跡からはほかに、第117図23に示した滑石製の有孔円盤、第119図6に示した鉄鏃の茎部が出土している。

4号竪穴住居跡（第14図、図版9）

3号住居跡に大半が破壊される、平面略方形の竪穴住居跡である。主軸方位は3号住居跡と同じく略東西で、西壁にL字状カマドを付設する。竪穴部の規模は東西長が4.98m、南北幅が5.04mで幅がやや広い。残存深さは20cm弱で、3号住居跡よりも浅い。(3号住居跡を含む)床面から多くのピットが見つかっているが主柱穴となり得るのは南東の1個のみで、ほかはよくわからなかった。床下からは壁溝状の掘り込みが北壁沿いで検出されたが、これが床面からの掘り込みなのか貼床の下に掘られているのかは3号住居跡の報告で記したような事情からよくわからなかった。埋土は黒褐色粘砂質土で分層できなかった。出土土器はビニール袋に1袋ほどありいずれも土師器片であるが図示できるものはない。出土土器と切り合い関係から、6世紀前半頃の遺構と考えたい。

カマド（第14図、図版10）

西壁の中央やや北寄りにL字状カマドを付設する。煙道は西壁に沿って北側に伸びる。カマドの主要部分の大半を3号住居跡によって破壊されており、左袖の20cmほどと煙道のみが残る。煙道は3.45mほどの長さを持ち、住居の北西コーナー部より住居外へと抜けるのだろう。煙道の床面は住居の床面よりも数センチ高い。床は地山が露出しており、住居の竪穴部を掘り下げる際に煙道部分はやや浅く残しているのだろう。

5号竪穴住居跡（第18図、図版10）

Ⅰ区南西寄りで検出した住居跡である。南に3･4号住居跡が隣接するが切り合わず、他の主要遺構との切り合い関係もない。平面形態は略方形で主軸方位は北北東－南南西にとり、規模は南北長が3.50m、東西幅は4.06mである。北壁の中央部に内接型のカマドを付設する。床面は南半をやや掘りすぎたが貼床が施され中心部には硬化面の形成が認められる。硬化面の上から、またはやや貼床を掘り飛ばした状態でピットを4本検出した。深さがやや浅いが位置的には主柱穴と判断してよいだろう。住居内の埋土は黒褐色粘質土で、壁の残存高は5cmである。出土土器より6世紀中葉頃に埋没した遺構と考えられる。

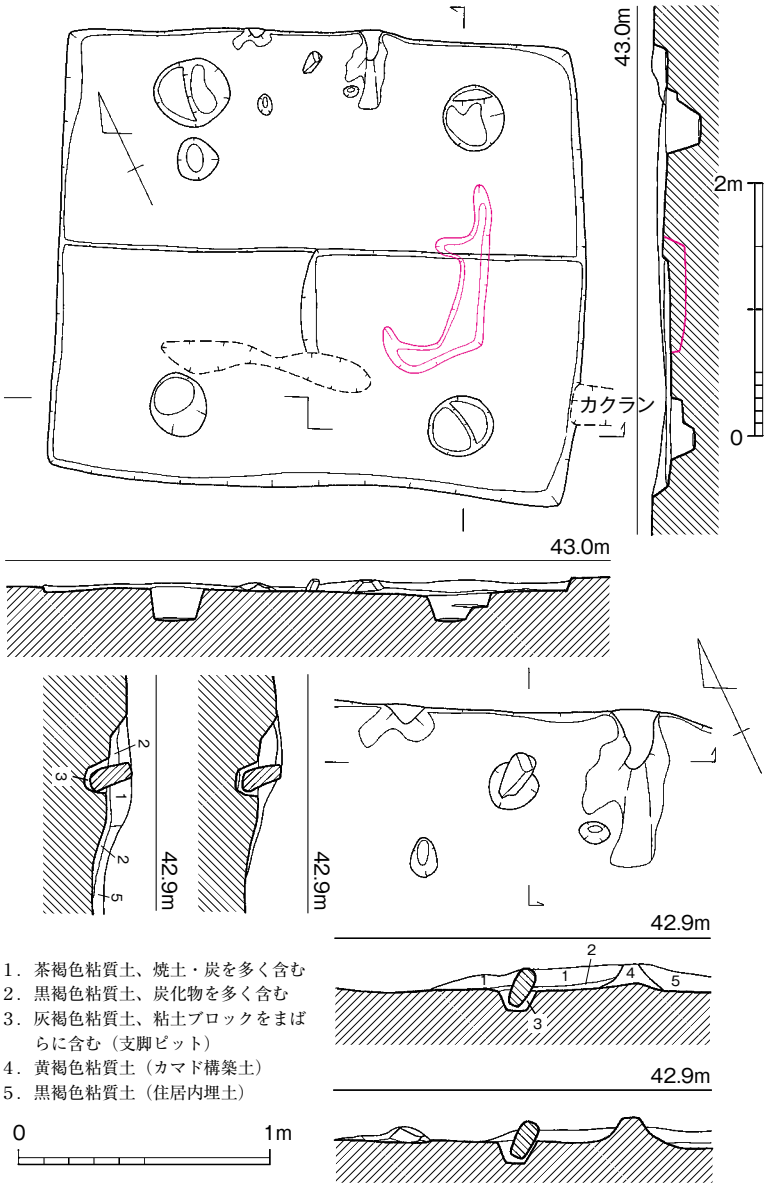
カマド（第18図、図版10）

北壁の中央部に内接型のカマドを付設する。煙道が奥壁から短く外に出るタイプである。調査時に袖を壊してしまったので残存状況は悪いが、両袖とも奥壁に直角に付いて真っすぐ伸びていたも

のであろう。右袖が残りが良く、60cm ほどを測る。両袖の先端部付近に小ピットがあり、補強石を配していたものか。袖間の内法は 75cm ほどとやや幅広い。中央部に径 20cm ほどの小ピットを掘り河原石の支脚を据える。石の長さは 15cm ほどで、うち 10cm 弱が床上に突き出る。埋土は大きく 2 層に分かれるが灰層はない。

出土遺物（第 23 図、図版 48）

土師器（1 ～ 6） 1 は小形の短頸壷であろう。丸底で、やや屈曲する頸部と短く外反する口縁部を持つ。胴部はつぶれた球形である。頸部・口縁部の内・外面に粘土紐接合痕跡を残し、全体的にナデ調整が認められる。2・3 は碗形土器である。いずれも丸底で、2 はゆるやかに湾曲しながら口縁部へいたる形状、3 は口縁部付近で強く内湾する形状を持つ。器壁調整は 2 が丁寧なヘラナデ、3 はナデ仕上げである。4・5 は須恵器模倣坏で、4 は坏蓋、5 は坏身である。4 は器壁がやや摩耗して調整が明瞭ではないが内面の一部にミガキ痕跡が看取され、5 は全体に丁寧なミガキ痕跡が残る。6 は手づくねのミニチュア土器で碗であろう。以上の土器はおおよそ 6 世紀中葉のものか。

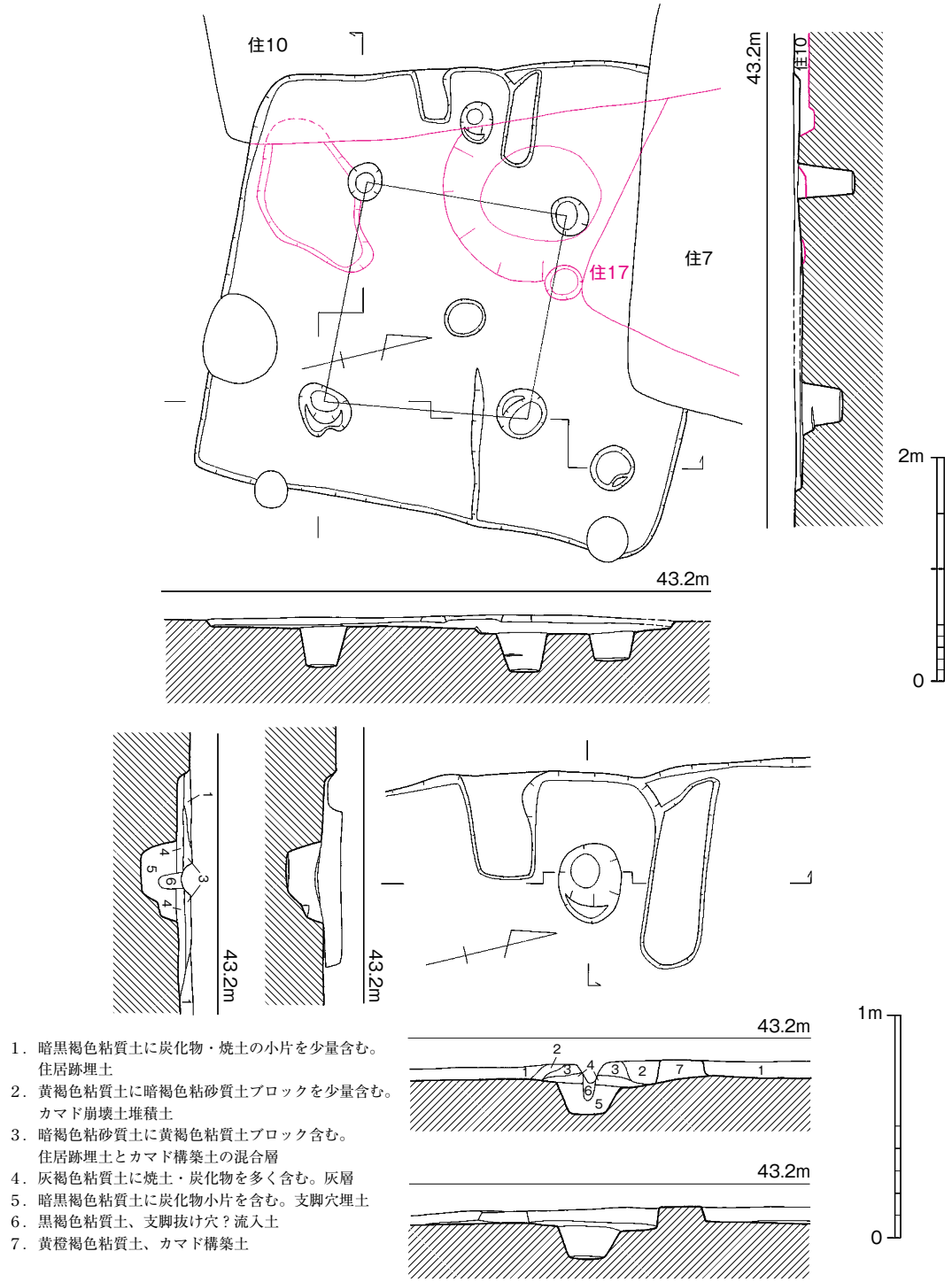


第 18 図　5 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

6 号竪穴住居跡（第 19 図、図版 11）

Ⅰ区中央部やや南東で検出した。7･10･17 号住居跡と切り合い関係にあり、10･17 号住居跡に後出し 7 号住居跡に破壊される。また、16 号住居跡とも切り合い関係を持つ位置にあるが、16 号住居跡が一部削平されていて相互の関係は不明である。

主軸を大略東西方向に持ち、西壁の中央部に内接型のカマドを付設する。住居跡の平面形はゆがんだ方形で、規模は辺の中心ではかると 4.00m × 4.20m ほどの大きさになる。床面からはいくつかのピットを検出し、特に南側では２つの主柱穴を確認できた。北側でも主柱穴の候補として２つ



第 19 図　6 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）

の柱穴を示しておく。ほかに、不定形の床下掘り込みを検出している。埋土は暗～黒褐色粘砂質土からなり分層できない。出土土器で図示できるものは手つくねのミニチュア土器１点のみで、他にビニール袋１袋分の土師器が出土した。出土土器と切り合い関係から、５世紀後半～末の遺構と判断される。

カマド（第 19 図、図版 11）

西壁のほぼ中央部に内接型のカマドを付設する。袖は住居の壁とほぼ垂直に伸び、長く残る右袖で 90cmほどをはかる。右袖の付け根が幅５～ 10cmほど住居の壁から離れており、Ｌ字状カマドの煙道入り口の可能性も考えたが、煙道構築粘土が右袖の右側に見当たらないので、ここでは内接型のカマドと判断した。北壁ラインを誤認している可能性もあろう。カマド燃焼部の内法は幅 50cmほどを測り、奥壁から約 40cm弱の部分に支脚用の小ピットを穿つ。ピットの上部にはくぼみがあり、新しく堆積した土（土層の６層）が流入していたことから、支脚石が調査直前まで立っていて、おそらく重機による表土剥ぎ時に抜けて除去されたものとみられる。

カマドの床面直上には薄く灰層が形成され、その上に住居跡埋土とカマド構築土の混合層が、さらにその上位にカマド崩落土ブロックが堆積していた。以上の堆積状況から、カマド廃棄時にはカマドの意図的な破壊がなく、ある程度竪穴部が埋積した状況で自然崩壊したことが読み取れよう。

出土遺物（第 23 図、図版 48）

土師器（7） 7 は手づくねのミニチュア土器で碗である。内・外面に指頭圧痕を多く残し、口縁部がやや波打つ。口径は 3.9cm、器高は最大 2.8cmをはかる。

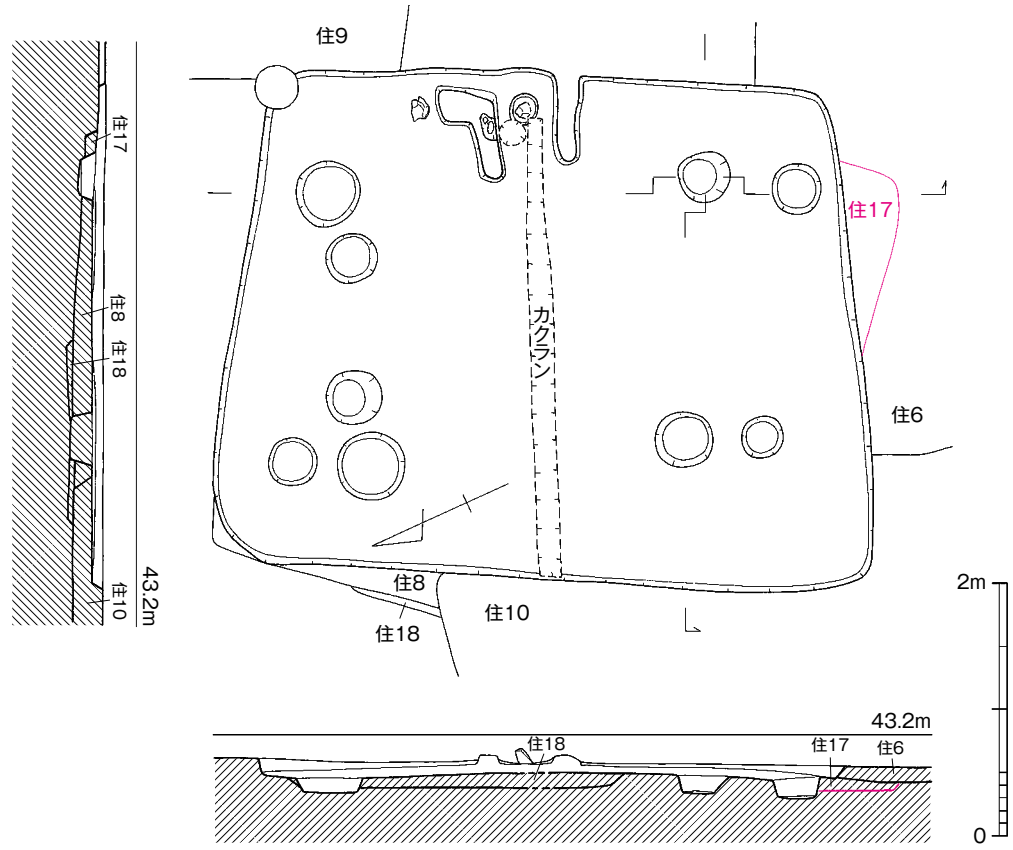
7 号竪穴住居跡（第 20 図、図版 11）

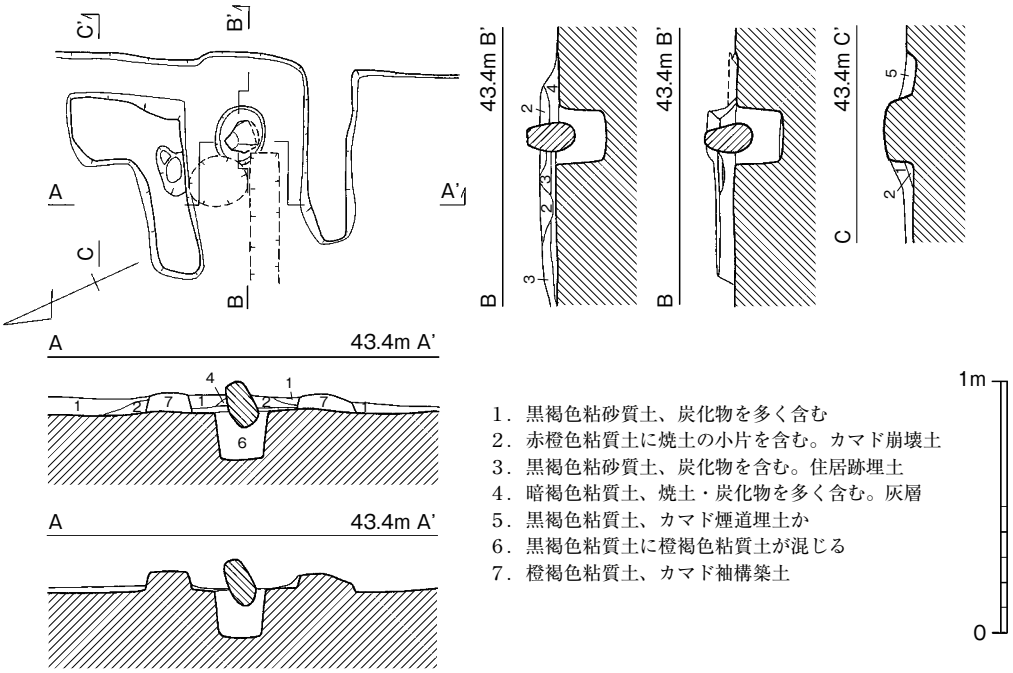
Ⅰ区中央部やや南東寄りで検出した。6･8 ～ 10･17･18 号住居跡と切り合い関係を持っており、これらすべてに後出する。この付近の住居の重複の中で最も新しく位置づけられる住居跡である。主軸を略東西方向に持ち、東壁の中央部にカマドを作り付ける。カマドはＬ字状カマドで煙道を北に伸ばす。平面形態はゆがんだ台形状を呈し、東西長は 3.92m、南北幅は東側で 4.4m、西側で 5.0m、中央部では 4.8m ほどをはかる。付近は住居跡の切り合いが著しい箇所で、平面形態についてはやや自信がない。残存深さは 10 ～ 15cmほどで比較的浅い住居跡である。

床面にはピットがいくつか検出されたが、いずれも浅くまた位置も悪く、確実に主柱穴と判断できるものはない。床面には明瞭な硬化面が観察できず、床下掘り込みについても下層に古い住居跡がいくつも重複していてこの埋土と区別をつけることができなかったので検出できていない。住居跡の埋土は黒褐色粘砂質土で細分できない。なお第 23 図 9 がカマド左より床面より浮いた状態で出土している。出土土器から５世紀後半～末頃に位置づけておきたい。

カマド（第 20 図、図版 12）

東壁のほぼ中央部にＬ字状カマドを作り付ける。袖の長さは約 70cm、袖間距離は約 40cmをはかり、奥壁から 30cmほどのところに支脚石を設ける。支脚石は全長 20cmほどの河原石で、根が 8cmほど地中に入り地上部は 12cmほどであるが、石材の頂部が欠けており（おそらく表土剥ぎ時に重機で破砕したものと思われる）本来の地上部高は 15 ～ 20cmほどあったものと推測される。煙道は奥壁に向かって左側、北に伸びるが、付近は住居の深さが浅く、また調査時の不注意もあって約 30cmほどが検出できたのみで、残りは確認できなかった。煙道の幅は約 13cm、煙道壁の幅は 20cmほど





1．黒褐色粘砂質土、炭化物を多く含む
2．赤橙色粘質土に焼土の小片を含む。カマド崩壊土
3．黒褐色粘砂質土、炭化物を含む。住居跡埋土
4．暗褐色粘質土、焼土・炭化物を多く含む。灰層
5．黒褐色粘質土、カマド煙道埋土か
6．黒褐色粘質土に橙褐色粘質土が混じる
7．橙褐色粘質土、カマド袖構築土

第 20 図　7 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

をはかる。

カマド袖、煙道ともに構築土は橙褐色粘質土で、この崩壊堆積土が住居跡埋土の下層にたまっており、住居廃棄時にカマドはある程度破壊されたと見られるが、その量が少なく徹底的な破壊ではなかったとみられる。また、カマド内部では最下層に灰層が確認できる。

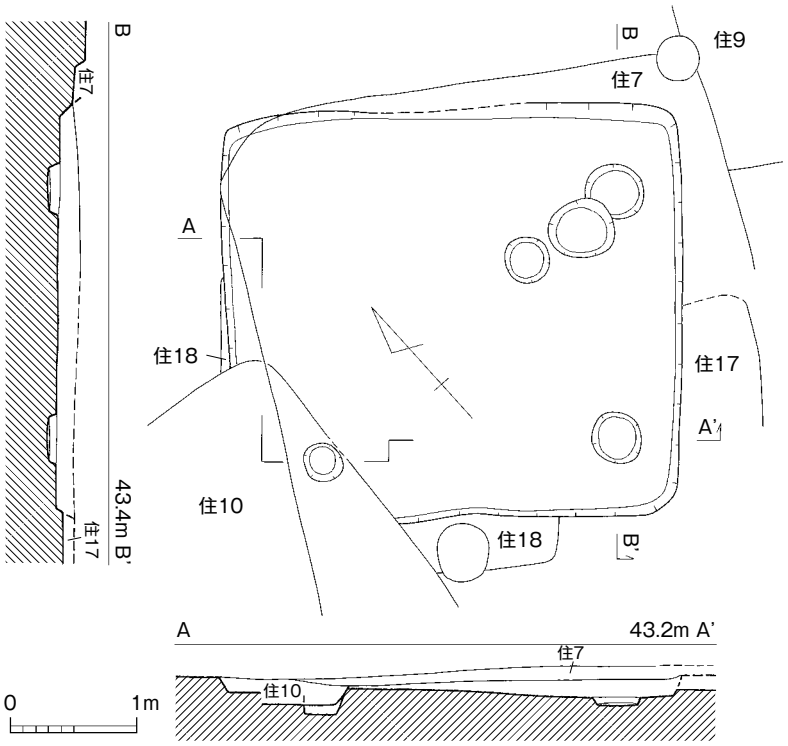
出土遺物（第 23 図、図版 48）

土師器（8 ～ 12） 8 は中形甕の口縁部片である。「く」の字に屈曲して口縁は外反し端部を四角く収める。器壁調整は内・外面ともにハケ目で口縁部付近はナデ仕上げ。やや古相を呈し混入品か。9 は小形の甕である。胴部は球形で口縁部はゆるやかに外湾しながらやや長く広がる。口縁端部をごくわずかに内湾させる。器壁調整は外面下半にケズリ痕跡が残り全体にナデ調整、内面はケズリ､口縁部付近は丁寧なナデ。10 はやや頸部のしまりが強く口縁部が長い。一応短頸壷としておく。頸部は鋭く屈曲し、口縁部は直線的に開いて端部付近をわずかに内湾させる。胴部は欠失するが球形か。11 は小形の二重口縁壷である。胴部は球形で頸部は強く屈曲し、口縁部は直立する。口縁部の屈曲がわずかに丸みを帯びる。器壁調整は外面が板状工具を用いたナデ、内面はケズリで下半に指頭圧痕が残る。12 は短頸壷である。胴部はややつぶれた球形で頸部は鋭く締まったあとわずかに外湾しつつ斜め上方に伸びる。全体に摩耗しているがナデ仕上げ痕跡が看取される。以上の土器は 11･12 の存在などからやや本調査区中ではやや古相を呈し、3 号住居跡より古く位置づけられよう。1 号住居跡と同様に 5 世紀代の中で考えておきたい。

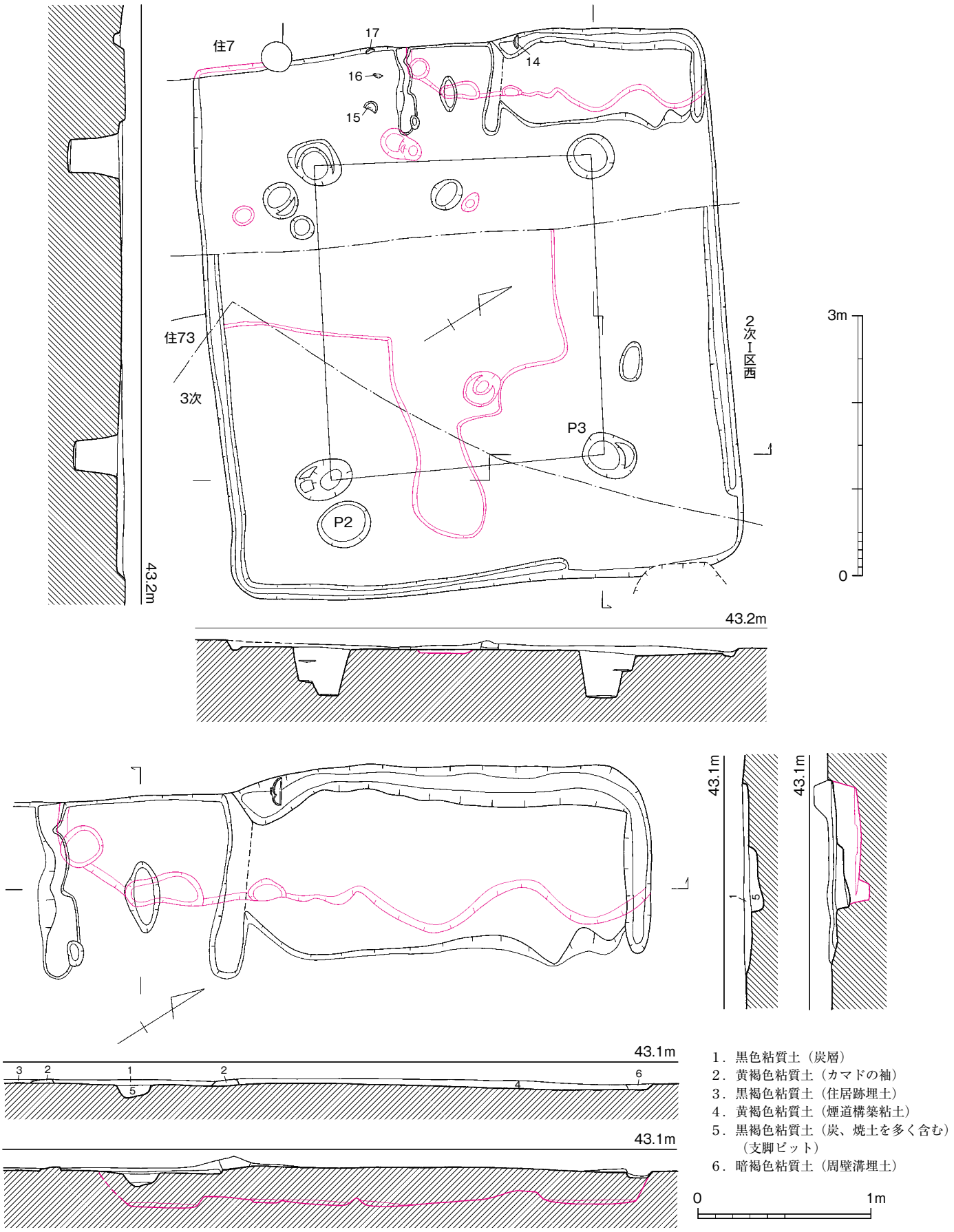
なお、ほかに第 117 図 18 に示した黒曜石製のスクレイパーが埋土中より出土している。

8 号竪穴住居跡（第 21 図、図版 12）

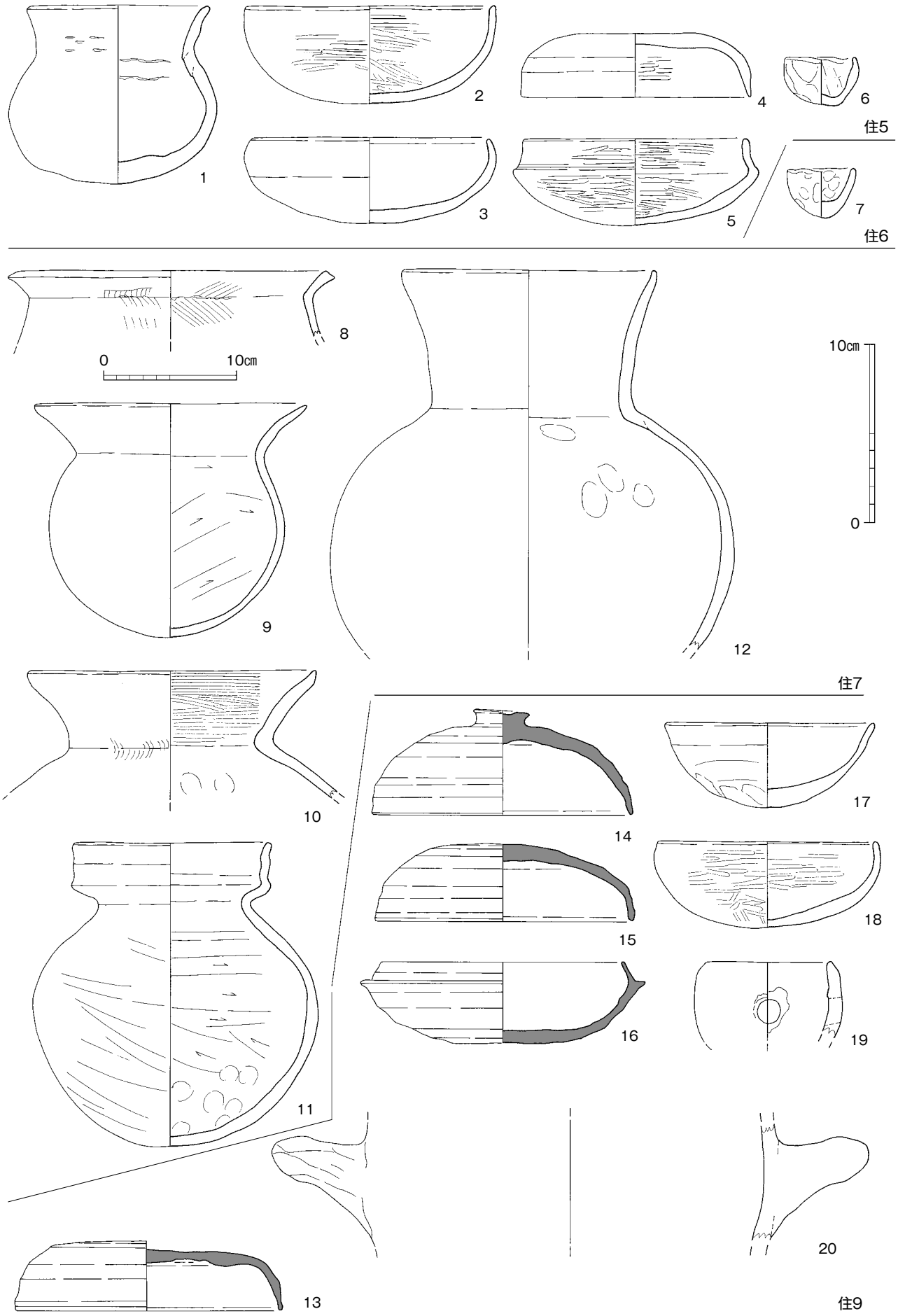
Ⅰ区中央部やや南寄りで検出した。7･10･17･18 号住居跡と切り合い関係にあり、7･10 号住居跡に切られ、17･18 号住居跡を切る。平面形は略方形で、主軸方位を北西－南東にとり、規模は 3.50m



第 21 図　8 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 22 図　9 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）



第 23 図　5 ～ 7･9 号竪穴住居跡出土土器実測図（8 は 1/4、他は 1/3）

× 3.12m をはかる。埋土は暗褐色粘砂質土で、中央部を中心に硬化面が形成されていた。床面からは多くの小ピットを検出したが、主柱穴と想定されるものは見当たらない。カマド・炉跡等も見つけられなかった。出土土器にはビニール袋 1 袋分ほどの土師器があり、図示できるものはないが、精製の小形丸底壷の頸部片と思われる物が含まれており、これを重視すれば古墳時代前期の遺構か。

9 号竪穴住居跡（第 22 図、図版 12･13）

Ⅰ区の中央東端で検出した住居跡である。東側 1/3 ほどが 3 次調査区に伸びているがすべて本報で報告する。7 号住居跡と切り合い関係にあり、本住居跡が古い。また 73 号住居跡とも切り合い、本住居跡がこれを大きく破壊する。平面形態は略方形を呈し、主軸方位は西北西－東南東、規模は南北幅が 5.86m、東西長は 6.18m をはかる。西壁の中央に L 字状カマドを付設する。床面には貼床が施され、その上には硬化面が形成されていた。硬化面上・下から多くのピットを検出したが、そのうち硬化面上から検出した 4 本を、位置や深さなどより主柱穴として図示する。また、床面には広く不整形の床下掘り込みが検出された。このほか、西壁と東壁の一部をのぞいて周壁溝が掘られていたが、Ⅰ区北側の調査時には気づかずに掘り飛ばしてしまっており、Ⅰ区東側の調査時に気づいた。出土土器には須恵器と土師器があり、完形（に近い状態）まで復元できるものも多い。うち 14 ～ 17 について平面図に出土位置を示した。調査時に見通し断面を作成しなかったため断面図には反映できないが、いずれも床面からは浮いた状態であり、住居廃棄時の埋め戻しに伴い投棄されたものであろう。なお、これらはおおよそ 5 世紀後半～末の時間幅で理解できるものが大半を占め、本住居跡の廃絶期を示すものであろう。

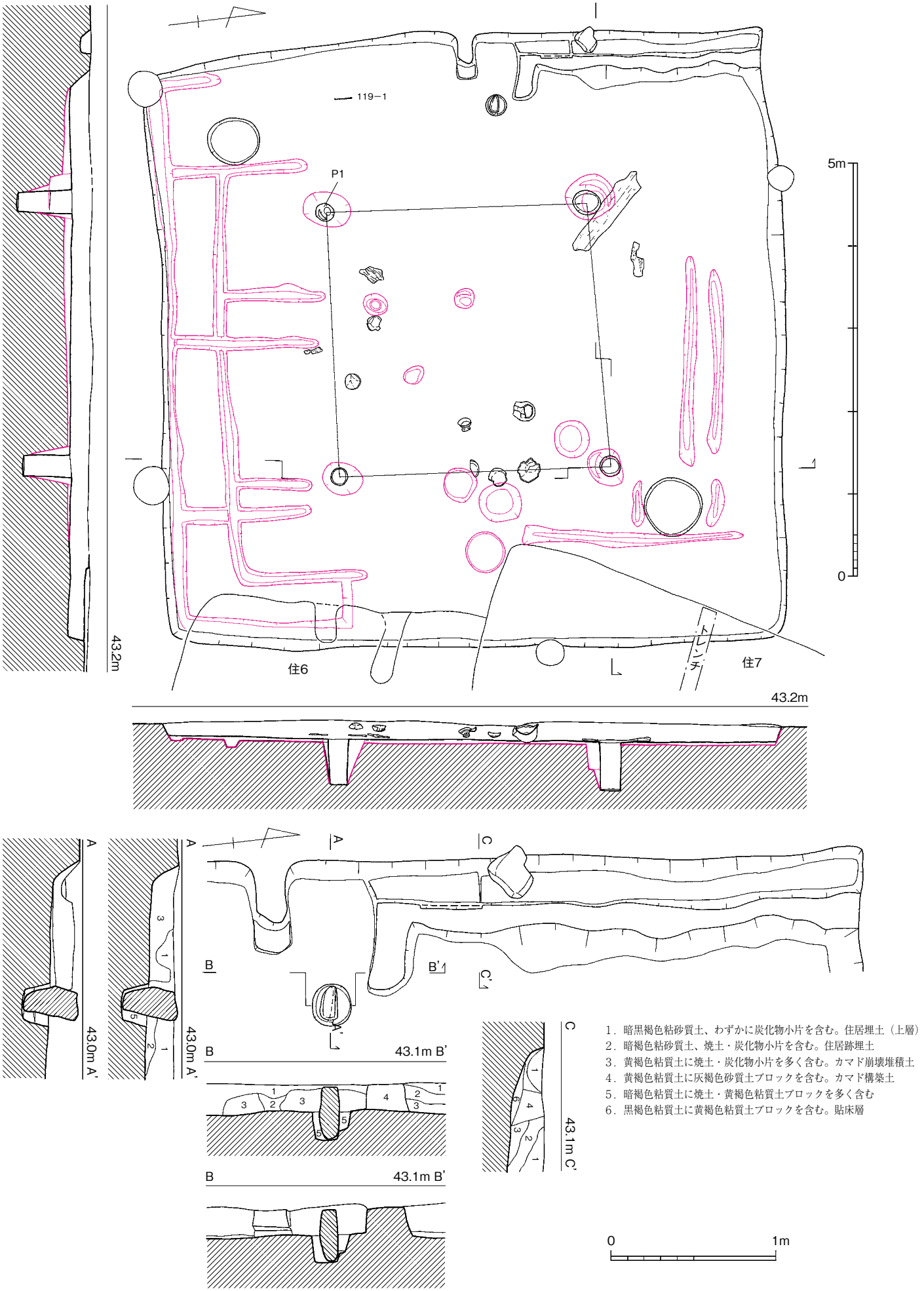
カマド（第 22 図、図版 13）

西壁中央に L 字状カマドを付設する。煙道は西壁に沿って北コーナーで南へ曲がる。煙道の幅は 23㎝、煙道壁の幅は 80㎝を測る。煙道内には黒褐色粘質土が薄く堆積していた。袖の長さは約 1m、袖間の距離は約 70㎝である。南側の袖先端部分には 15㎝× 8㎝ほどのピットが検出され、袖石の抜き取り痕跡である可能性が高い。支脚石はないが、奥壁から 40㎝ほどのところに支脚石の抜き取り痕跡と思われるピットを確認した。ピットの深さは 5㎝ほどである。カマドの残存状況はわるく 5㎝ほどしか残っていない。カマドの上部は大半が削平され埋没過程の詳細は不明である。

出土遺物（第 23 図、図版 48 ～ 49）

須恵器（13 ～ 16） 13 は坏蓋である。天井部は平坦で、強く屈曲して口縁部は垂直に近く下がる。天井部外面に回転ヘラケズリ痕が残る。口径は 15.4㎝、器高は 3.5㎝ほどをはかる。14 は高坏の蓋である。天井部は丸く、ゆるやかに湾曲して口縁部へといたる。頂部外面には直径 3㎝、高さ 1㎝ほどのつまみを付す。天井部は回転ヘラケズリ、中位より口縁部にかけてはナデ調整。内面には粘土紐成形痕跡が渦巻き状に残る。15 は坏蓋である。天井部はやや丸みを帯びてゆるやかに伸び、明瞭に屈曲して口縁部にいたる。天井部中央のみ回転ヘラケズリ、外周の半分以上に回転ナデを施す。内面には粘土紐成形痕跡が渦巻き状に残る。口径は 14.5㎝。16 は坏身である。底部は平たく、ゆるやかに屈曲して斜め上方に伸び、カエリ部はやや短く斜めに伸びる。外面調整は底部が回転ヘラケズリ、屈曲部から上はナデ。内面は底面が横ナデ、体部は回転ナデ。口径は 13.6㎝。

土師器（17 ～ 20） 17･18 は碗形土器。17 は丸底からゆるやかに内湾しつつ斜め上方に伸びるタイプで、底部がやや厚い。底部外面に板状工具ナデ痕跡があり、他はナデ仕上げ。18 は丸底から斜



第 24 図　10 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

め上方に伸びて口縁部付近をやや強く内湾させる器形で、内・外面に丁寧なヘラ磨きを施す精製品である。19は蛸壺である。体部中位に1孔を穿つ。小片のため全形は判明しない。20は甑の把手付近の破片である。残存部から判断する限り体部は球状に近いものか。胴部最大径は24cmほどをはかる。以上の土器群はおおよそ5世紀後半～末に位置づけられよう。

なお、本住居跡の埋土中から第118図25に示した砥石が出土している。合わせて参照されたい。

10号竪穴住居跡（第24図、図版14･15）

Ⅰ区中央部やや南東寄りで検出した。6～8号・18号住居跡と切り合い関係にあり、8･18号住居跡に後出し、6･7号住居跡に切られる。主軸を略東西方向に持ち、西壁の中央やや北寄りにカマドを作り付ける。L字状カマドで、煙道は北に伸びる。平面形態は略方形で、規模は東西長7.24m、南北幅7.34mをはかる。残存深さは約20cmである。東壁を6･7号住居跡により破壊されるが、10号住居跡の床面レベルが6･7号住居跡のそれより深いため西壁ラインはかろうじて残されている。

床面には中央部を中心として比較的広い範囲に硬化面が形成されていた。硬化面上からは主柱穴を4本検出した。いずれも深さ約30cmをはかるしっかりとしたもので、硬化面上における検出時には直径約20cmのピットであったが、貼床を約5～10cmほど掘り下げたところでその周囲に直径40～50cmと一回り大きなピットが姿を現したため、当初検出したピットは主柱痕で、貼床下で検出したピットが主柱穴であると判断した。また、貼床を下げたところ、その下から幅10～15cmほどの溝が不規則に走っているのが確認された。その一部は壁溝を構成している。住居内の区画とも考えたが、検出面は貼床下であり、その性格は明らかにはできなかった。

住居跡内からは比較的多くの土器、炭化木材、鉄器等が出土したがいずれも埋土中からの出土であった。特筆すべき出土遺物としては、木質の柄付きの鉄鏃がある（第119図1）。住居跡の埋土は大きく2層に分層でき、下層の中央が凹むレンズ状の堆積状況を示していた。これらの出土遺物の多くは上層からの出土であり、床面直上からの出土遺物はない。本住居跡は、出土遺物から、5世紀後半の埋没と考えられる。

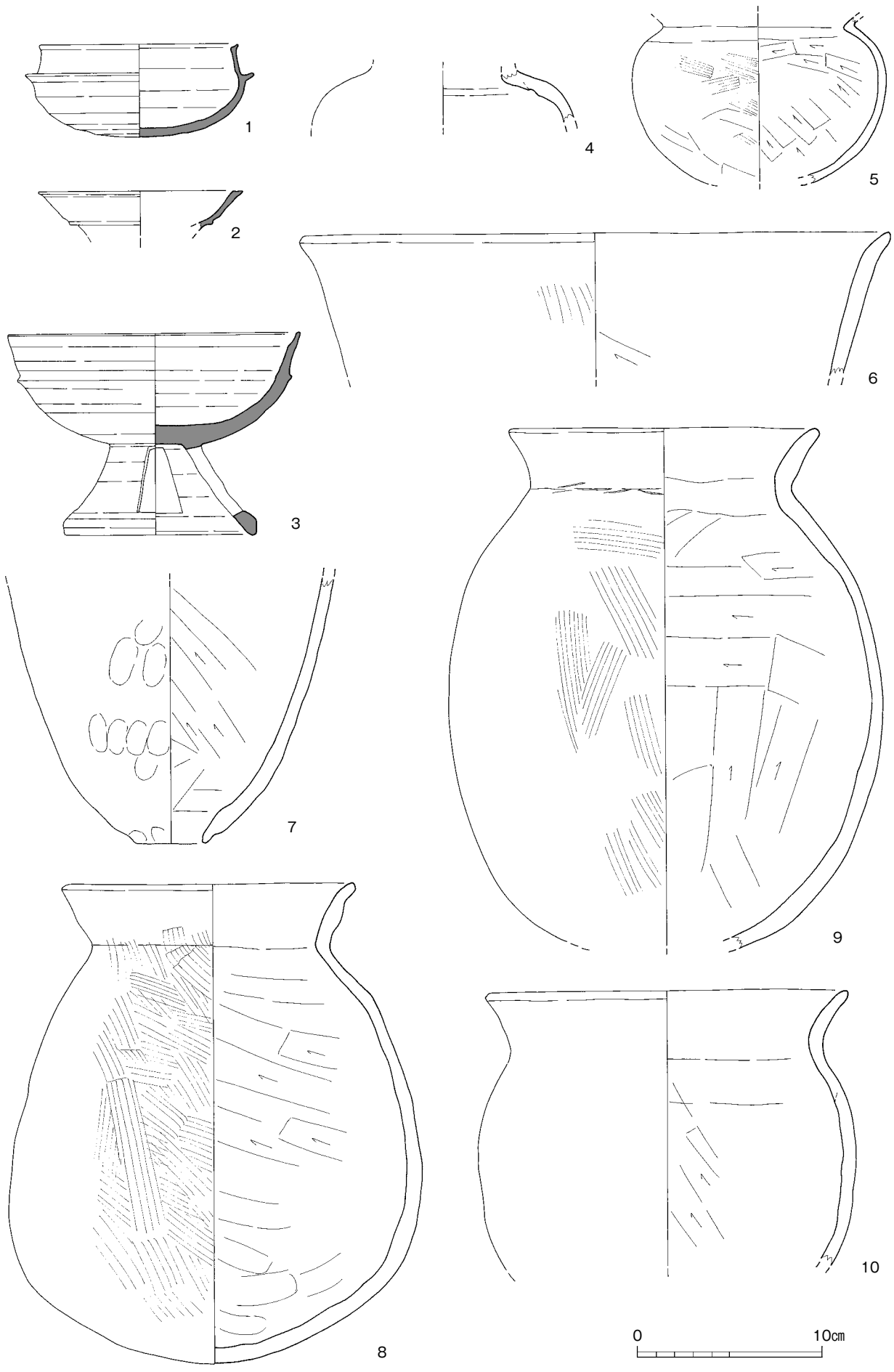
カマド（第24図、図版14）

西壁の中央やや北寄りにL字状カマドを作り付ける。煙道は北方向に伸びて北西コーナー部から竪穴外に出る。カマドの袖はわずかに弧を描き､残りのよい北側の袖で長さ70cmほどをはかるが、支脚がカマド奥壁から約70cm強の部分にあることから、本来さらに伸びていたものと考えられる。袖は黄褐色粘質土で形成される。支脚は長さ32cmほどの長楕円形の河原石で、うち15cmほどが地中に埋められている。支脚の前面が不定形に被熱して赤変し、硬化面を形成している。煙道は全長約2.8m、底部幅約20cmの規模で、カマド袖と同じく黄褐色粘質土で形成されている。

カマドの埋土は下層にカマドの崩落堆積土があり、その上に住居の埋土が2層にわたって堆積しており、住居の廃絶時にカマドがつぶされたことが推測される。明確な灰層も確認できず、住居の廃棄時に灰の掻き出しとカマドの破壊を行っている可能性が考えられる。

出土遺物（第25～26図、図版49･50）

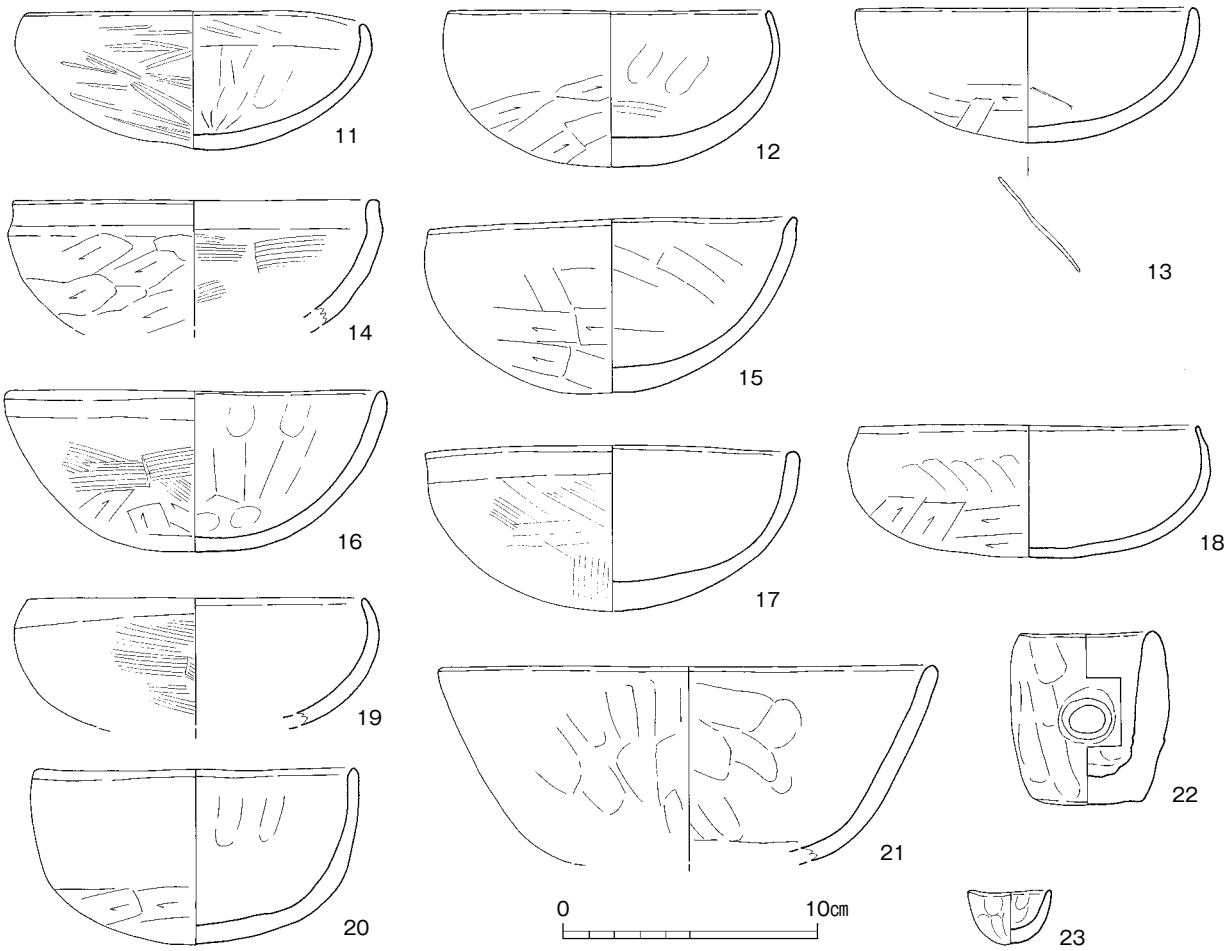
須恵器（1～3） 1は坏身である。丸底からゆるやかに湾曲しつつ斜めに伸び、カエリ部の根本でやや内に屈曲して口縁部はゆるやかに外湾しながら上に伸びる。口縁端部は外端を上方につきだし、内端も角を持つ。外面は底部から体部中ほどにかけて回転ヘラケズリ痕が残る。2は鼈の口縁部片。



第 25 図　10 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1/3）

三角突帯から斜め上方に伸びて端部は平坦にカットする。三角突帯の下に櫛描波状文をめぐらせる。3は高坏である。坏部は底部がやや丸く、ゆるやかに湾曲しながら斜め上方に伸びる。口縁端部はわずかに外反したあと内に曲がる。中位よりやや上に三角突帯を回し、その下に櫛描波状文をめぐらせる。脚部は端部を丸く収め、斜めに伸びる。台形のスカシを4箇所に入れる。

土師器（4～23） 4は壷形土器の胴部上半である。小片で全形は不明であるが小形の丸底壷か。内面に粘土帯接合痕跡が残る。5は小形の短頸壷であろう。体部はややつぶれた球形で、頸部は強く締まって屈曲し、口縁部は欠損するが短く外反するものであろう。胴部外面はハケ目、内面はケズリ痕跡が良く残る。6は広口壷の口縁部片であろうか。やや外湾しつつ斜め上方に伸びる頸－口縁部のみが残存する。7は甑である。胴部上半より上は欠失する。底部にはやや不整形な円孔を1孔開ける。胴部下半の形状はややスリムな繭形である。外面は指頭圧痕が多く残り、内面はケズリ。8～10は甕である。8・9はやや長卵形気味の球胴と短く外反する口縁部を持つ。ともに外面調整はハケ目、内面はケズリ、口縁部付近はナデ調整を施す。口縁部断面形状は中位が最も厚く先端に行くほどに薄くなり、口縁端部は丸く収める。10はややつぶれた球胴の上半から口縁部までが残存する。口縁部形状は8・9と共通する。調整は外面がナデ、内面はケズリ。11～20は碗形土器である。いずれも丸底で、ゆるやかに内湾しながら斜め上方に伸びて口縁部にいたる。口縁部形状には、急激に内湾する18や19、ごくわずかに外反する14･15などがある。器壁調整であるが、11は外面にミガキ痕跡が認められる。器壁も薄く良品である。12～18・20はおおよその成形を板状工具を用いた強いナデで行う一群である。砂粒の移動がみられるがケズリのように境界部が明瞭



第26図　10号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）

ではない。その後外面・内面あるいは双方にハケ目調整を施すのが 14・16・17 で、他はナデ調整で仕上げる。19 は外面にハケ目、内面にはナデ調整痕跡がみられる。20 は底－胴部境がやや強く屈曲するもので、外面底部に板状工具ナデ、内面にはナデ調整痕跡がみられる。21 はやや大形の碗か、高坏の坏部片であろう。直線的に斜め上方に立ち上がる口縁部のみが残存する。22 は蛸壷である。やや小形で、体部中央に 1 孔を穿つ。23 は手づくねのミニチュア土器で碗である。以上の土器群はおおよそ 5 世紀後半代に位置づけられよう。

また、第 117 図 22 に示した石製紡錘車、第 119 図 1 に示した植物質製の矢柄付きの鉄鏃、同 12 に示した鉇片が本住居跡の埋土中から出土している。いずれも床面より浮いた状態で、廃棄時に投棄されたものであろう。

そのほか、本住居跡からは炭化木材もいくつか出土している。いずれも主柱を構成するような太さではなく、出土位置もランダムで、住居の廃絶後に不要な木材を投棄して燃やしたものと考えられる。これらの一部について C14 年代測定を行っており、較正年代曲線が不安定な範囲にあたりやや絞り込みづらいもののおおよそ出土土器の編年観と合致する結果が得られている（後述）。

11 号竪穴住居跡（第 27 図、図版 15）

調査区中央やや北寄りの西側で検出した。25 号住居跡と切り合い関係を持ち 25 号住居跡が後出する。平面形態は略方形で、主軸は北西－南東にとり、北西壁の中央部にカマドを付設する。L 字状カマドで、煙道は西南に伸びる。長軸 6.62m、幅 5.58m で、やや細長い。

床面には広い範囲で硬化面が形成されており、硬化面上から 4 本の主柱痕跡（直径 25㎝程度）を検出した。硬化面の下層は平均厚さ 5㎝ほどの貼床が広がっており、貼床を除去したところ直径 50 ～ 60㎝の主柱穴を検出できた。以上から、本住居跡の廃棄時には主柱根の抜き取りを行っていないことが読み取れる。床面からはほかにいくつかの小ピットを検出したが本住居跡に伴うものかどうかは定かではない。

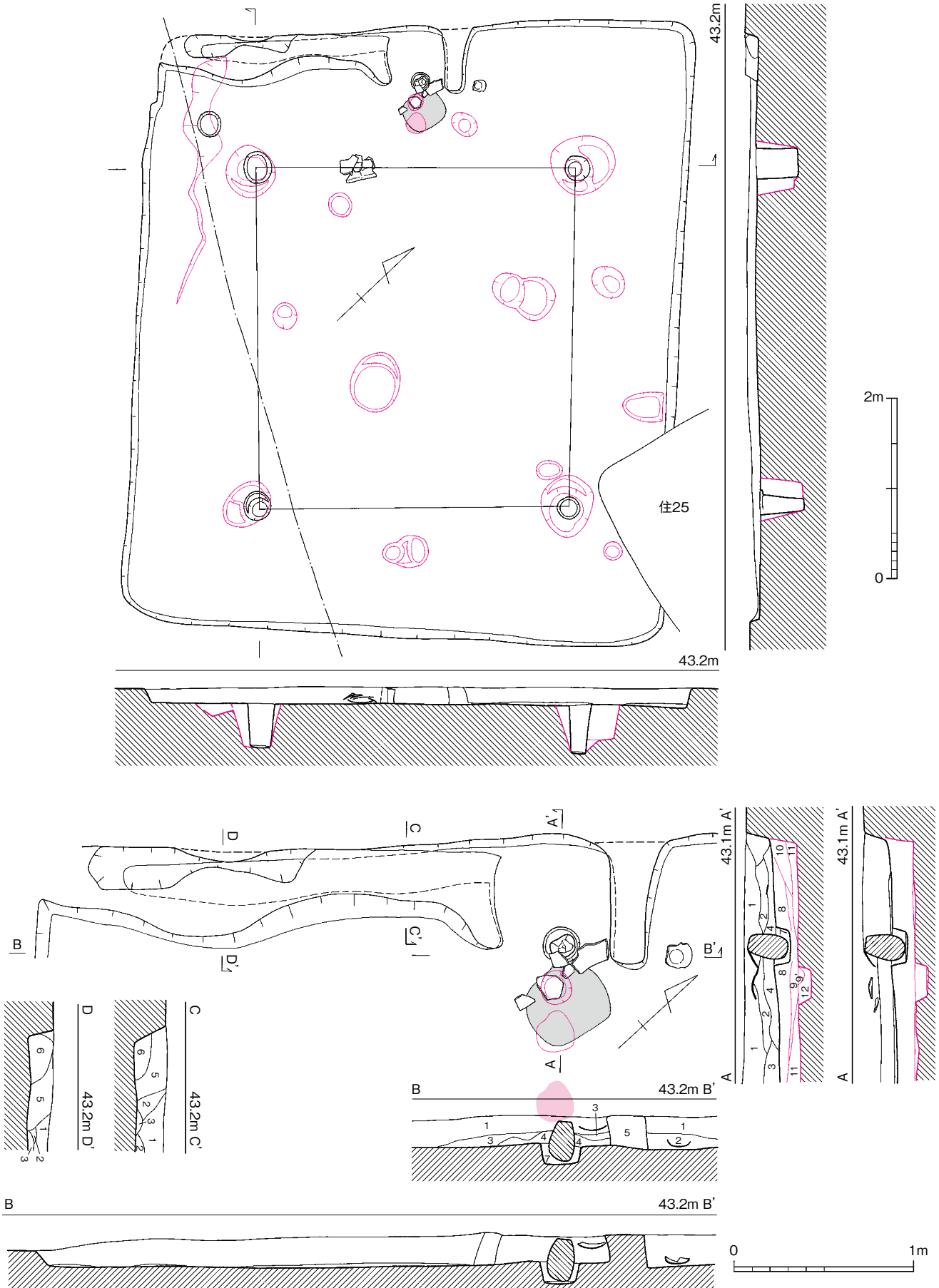
竪穴埋土は大きく 2 層に分層され、下層が黒褐色粘質土を主体とし、上層がやや明るく暗褐色粘砂質土を主体とする。埋土中からは遺物が多く出土し , うち 19 の甑はカマド左脇の床面直上より出土した。出土土器から本住居跡は 6 世紀中葉頃に廃棄され、埋没したものとみられる。

カマド（第 27 図、図版 15）

住居跡の北西壁中央部に L 字状カマドを作り付ける。燃焼部は壁から垂直に取り付けられた袖により形成されており、幅約 60㎝をはかる大型のカマドである。袖の残存長さは 70㎝弱であるが、支脚石が奥壁から 50㎝ほどの部分に埋設されており、被熱硬化面が奥壁から 110㎝の部分まで広がっていることから、カマド袖は本来奥壁より 90㎝ほどの部分までは伸びていたものと推測される。支脚石は細長い河原石が用いられ、残存長さは 24㎝ほどをはかり、現状で露出部高さは 13㎝程度だが、上部が欠けており、もう 5㎝ほど長かったものが重機で破砕された可能性もある。

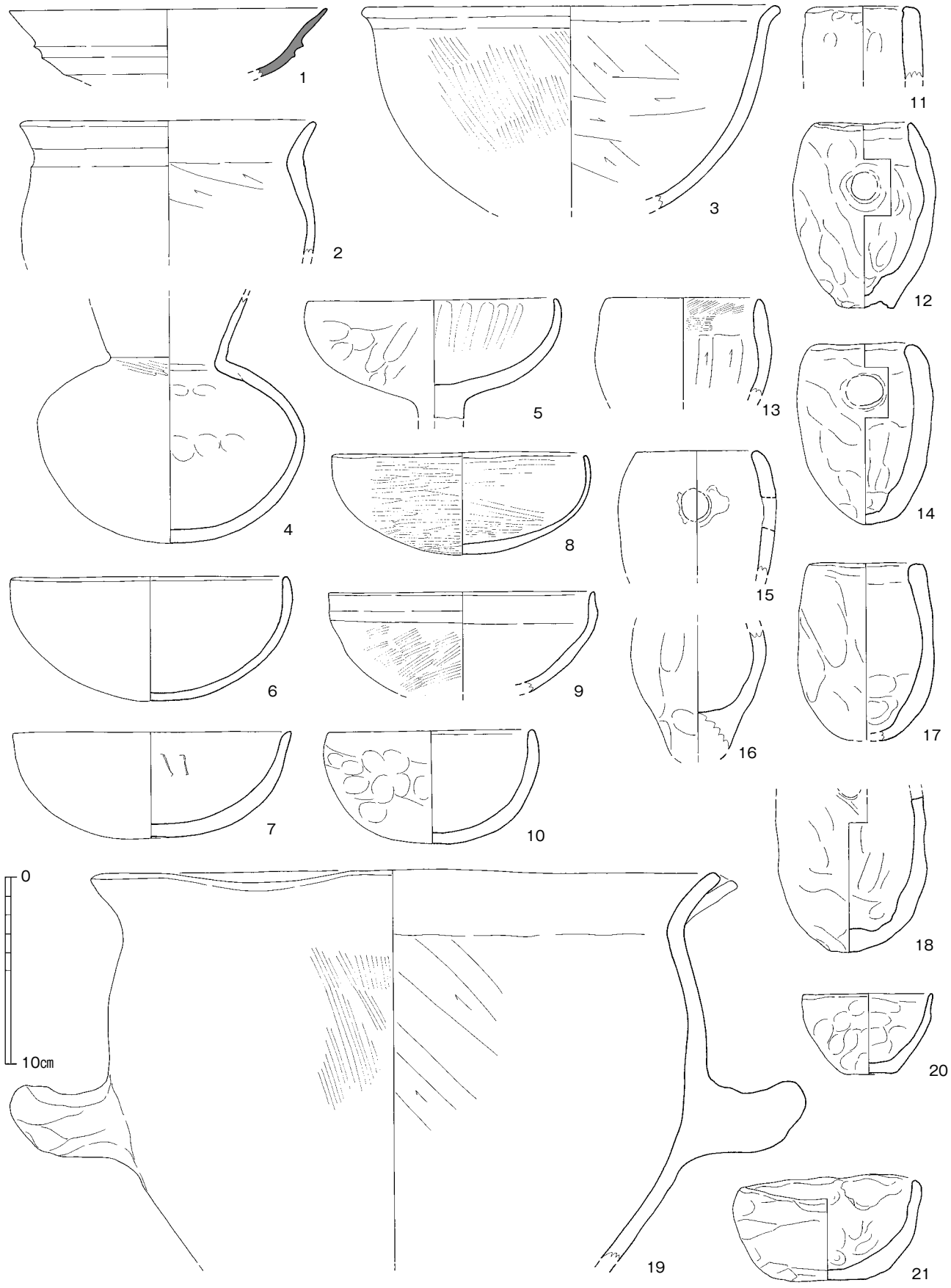
支脚石の手前に直径 40 ～ 50㎝ほどの不整円形に被熱硬化面が広がり、支脚から被熱硬化面にかけての範囲に甕形土器が破砕された状態で散らばっていた。カマドの埋土は最下層が灰層でその直上にカマド構築粘土が散らばることから、カマドの廃棄時には灰層やカマドにかけられた甕などをそのままにした状態で上からカマドを押しつぶしたものとみられる。

なお、住居の貼床除去に伴いカマドの床面を下げたところ、床面の 10㎝ほど下で被熱硬化面を



1. 暗褐色粘砂質土、住居跡埋土（上層）
2. 黄～橙褐色粘質土、カマド壁崩壊堆積土
3. 黒褐色粘質土に焼土･炭化物小片を含む、 住居跡埋土（下層）
4. 灰～黄灰褐色粘質土に焼土･炭化物の小片を多く含む、灰層
5. 暗黄褐色粘質土に黄褐色粘質土の小ブロックを含む、カマド袖構築土
6. 黒褐色粘質土にわずかに５層の小ブロックを含む、煙道埋土
7. 黒褐色粘質土に焼土ブロックを含む、支脚穴埋土
8. 黒褐色粘砂質土に黄褐色粘砂質土ブロックを含む、貼床層
9. 灰褐色粘砂質土に焼土･炭化物の小片を含む、下層カマド灰層
9'. ９層とほぼ同じ、支脚抜き跡埋土
10. 暗褐色粘砂質土に焼土･炭化物の小片を含む、下層カマド貼床か
11. 黒褐色粘砂質土に焼土･炭化物の小片を含む、下層カマド貼床か
12. 黒褐色粘砂質土に黄褐色粘砂質土小ブロックを含む、下層カマド支脚穴埋土

第 27 図　11 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）



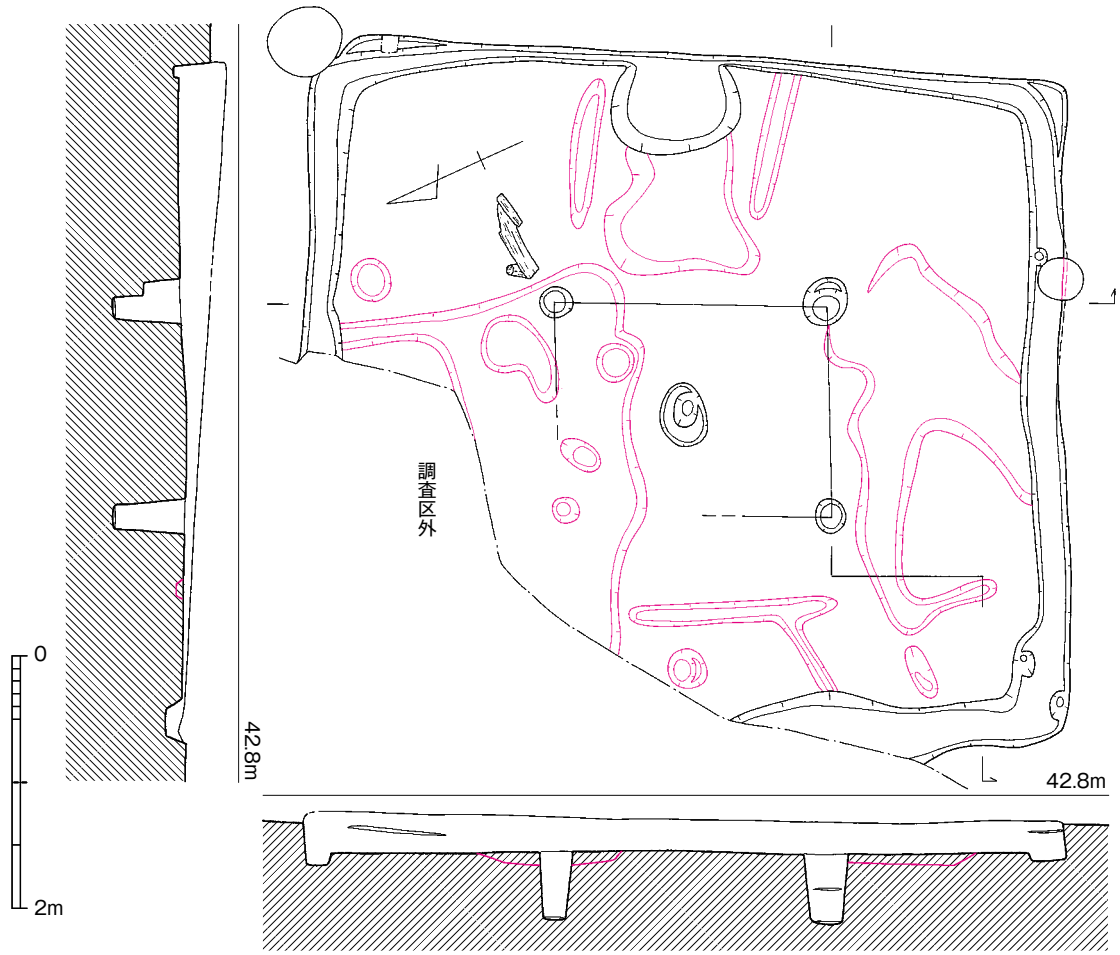
第 28 図　11 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

もう１カ所検出した。また、この被熱硬化面に接して直径 15cmほどの浅い小ピットを検出した。おそらくこれらは下層のカマドに伴うものであろう。この下層カマドに伴う別の住居跡は見つかっておらず、おそらく本住居跡に伴うものとみられる。すなわち、本住居跡は平面プランをそのままにカマドのみ作り替えを行っており、その際にカマド床面を 10cmほどかさ上げしているものとみられる。下層カマドに伴う住居の硬化面は検出されていないことから、下層カマドは住居の床面より最大 10cm程度掘り下げられていた（あるいは使用に伴い徐々に掘り下げられた）と考えたい。

出土遺物（第 28 図、図版 50･51）

須恵器（1） 1 は高坏の口縁部片。ゆるやかに内湾しながら斜め上方に伸び、最後はわずかに外に開く。中位に 2 条の三角突帯をめぐらせ、その下に櫛描波状文を配する。やや古手で混入品か。

土師器（2 ～ 21） 2 は小形の甕形土器の胴上位～口縁部片。球胴で、頸部はやや締まりがなく、口縁部は短く外湾しながら開く。3 は鉢形土器か。底部は欠失し、半球形の胴部に短く外反する口縁部を持つ。内面にはケズリ調整痕跡が多く残り、外面はハケ目。4 は小形の丸底壷である。口縁部が欠失する。ややつぶれた球状の胴部と強くくびれた頸部を持つ。口縁部は残存範囲では斜め上方に開きながらまっすぐ伸びる。器壁調整は全体に丁寧なナデで一部にミガキが施される。5 は脚付碗である。碗部は半球形で、脚との接合部までが残る。やや珍しい器形である。器壁調整は内・外面にミガキが施され、特に内面には暗文状のミガキが放射線状に配される。6 ～ 10 は碗形土器である。いずれも丸底からゆるやかに内湾しつつ立ち上がる器形で、うち 9 は口縁端部をごくわず

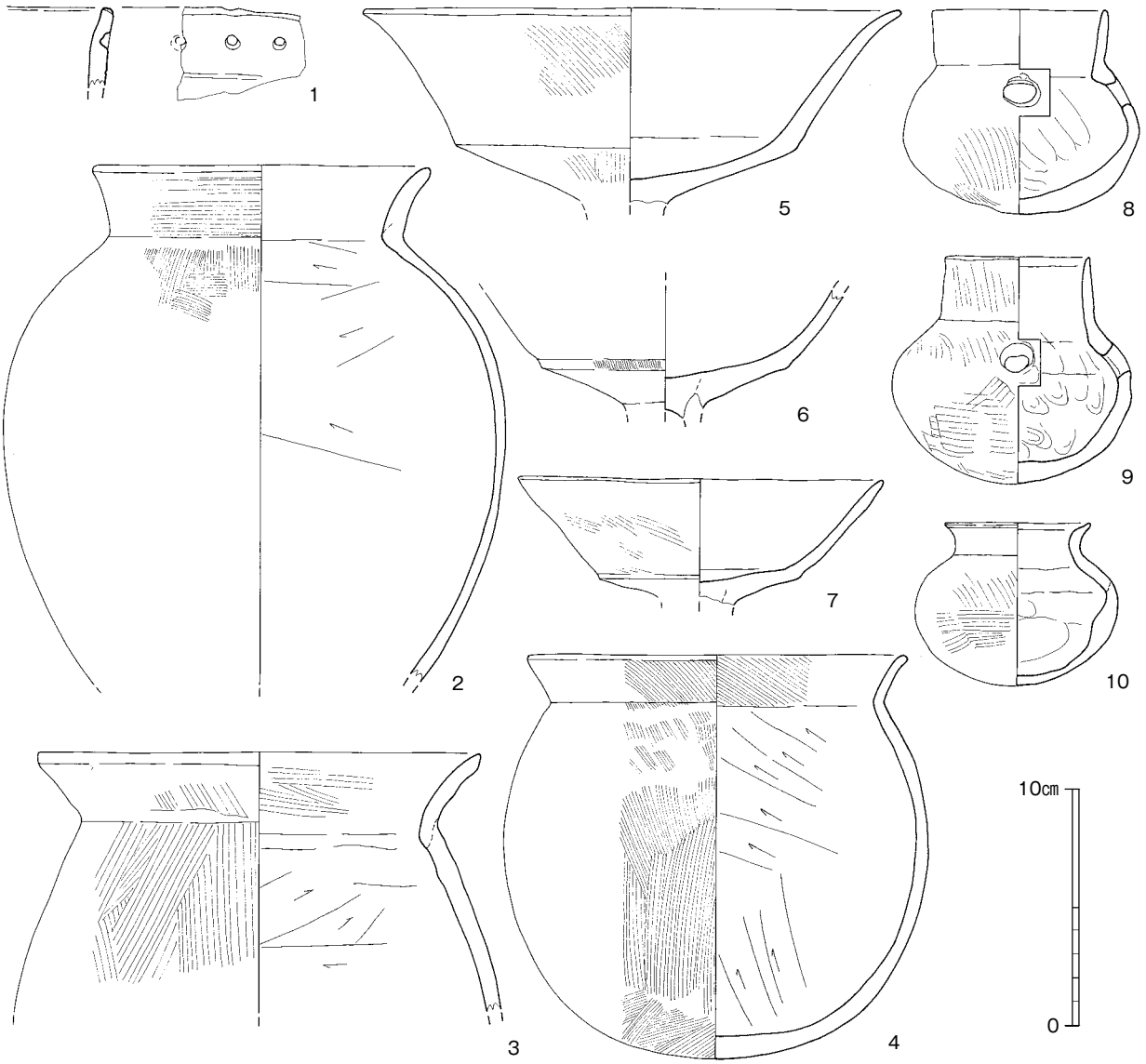


第 29 図　12 号竪穴住居跡実測図（1/60）

かに外反させる。器壁調整は8が内・外面ともにヘラミガキ、9の外面がハケ目で他はナデ調整。7の内面に板状工具の端部痕が、10の外面に指頭圧痕がそれぞれ認められる。11～18は蛸壺である。完形に復原できるものは多くないが、口径8cm内外、器高10cm内外の規格をもち、器壁調整に指頭圧痕やナデ単位を良く残す。19は把手付きの鍋か。外来系（渡来系）の要素をもつものか。球胴に短く外反する口縁部を持つ。口縁部の一部には注口状の浅い広がりがみられる。20は小形の鉢形土器。平底で内外に指頭圧痕を良く残す。21は手づくねの小形土器。鉢形のミニチュア土器か。以上の土器群は1などにやや古相を呈する土器が含まれるもののおおよそ6世紀中葉前後に位置づけられよう。なお、ほかに本住居跡埋土中からは第119図13に示した鋲具状の鉄製品、14に示した鉄製釣針が出土している。

12号竪穴住居跡（第29図、図版16）

Ⅰ区の中央西端で検出した住居跡である。平面形態は南北にやや長い長方形で、主軸方位は北北東－南南西にとり、規模は南北長が5.96m、東西幅は5.40mをはかる。床面には周壁溝がほぼ全周するほか、東壁の中央部に壁際土坑を付設する。床面状には広く薄い貼床が施され、硬化面が形成



第30図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

されていた。この硬化面上から主柱穴を 4 本検出した。また、貼床を除去した状態で、壁際土坑の両脇に東壁と直交方向の浅い溝を 2 条、また西壁から 80㎝ほどの位置に西壁と並行する短い溝が 1 条検出された。層位的には貼床の下層に位置しており、その性格は不明である。このほか、床面上からは不定形の床下掘り込みが検出された。竪穴部の埋土は黒褐色粘質土で、壁の残存高は約 40㎝と比較的深く残された住居跡である。出土土器には縄文土器も見られるが大半が布留式土器とそれに伴う在地系の土器群で、本住居跡の廃絶期は古墳時代前期に位置づけられよう。なお、埋土中から出土した炭化材を用いて C14 年代測定を行った結果、3 世紀後半～ 4 世紀という結果となった。やや幅が広いがおおよそ出土土器の編年観とも一致する結果であろう（後述）。

出土遺物（第 30 図、図版 51）

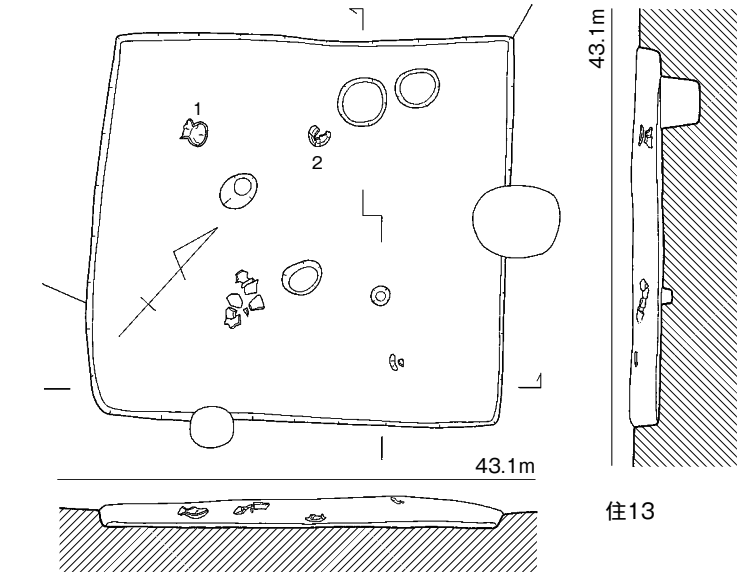
縄文土器（1） 1 は刺突文土器の口縁部片である。直立する口縁部の直下におおよそ 2㎝間隔で直径 5㎜ほどの非貫通孔を開けている。穿孔具は不明。器壁調整は内・外面ともにナデ。縄文時代早期の遺物か。混入品。

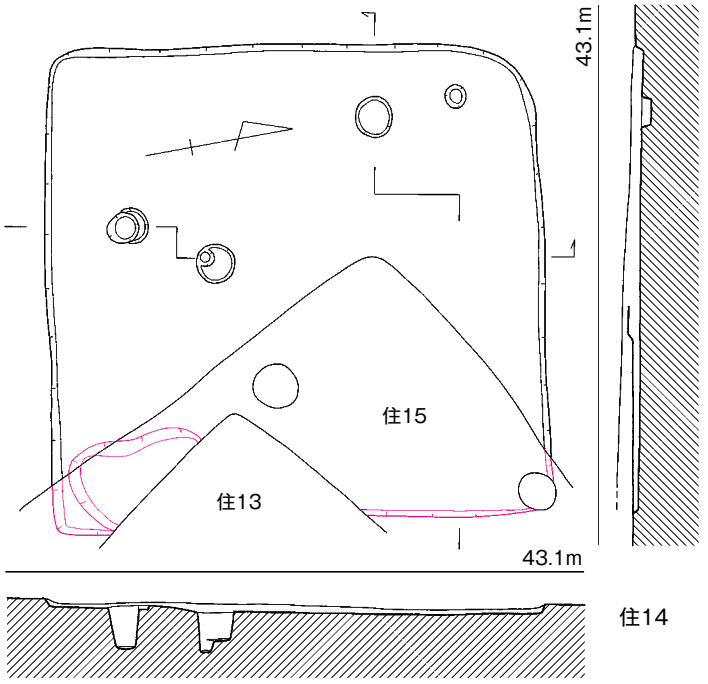
土師器（2 ～ 10） 2 ～ 4 は甕形土器である。2 はやや長胴気味の球胴と外湾しながら短く開く口縁部を持つ甕。内面をケズリ込んで器壁を薄く仕上げる。胴部外面調整は上部がハケ目、下半はナデ。3 は在地系の長胴甕の胴部上半～口縁部片であろう。「く」の字状の口縁部をもち口縁端部は斜めに切り落とす。胴部内面にはケズリ調整、外面はハケ目調整がみられる。4 は小形の球胴甕である。口縁部は短く外反し、頸部はさほどくびれない。胴部内面にはケズリ、外面にはハケ目調整が施される。5 ～ 7 は高坏の坏部片である。5 は大型の高坏で、口径は約 23.0㎝をはかる。直線的に斜めに伸びる底部と、明瞭に屈曲してわずかに外湾しながら斜め上方に長く伸びる口縁部を持ち、屈曲部外面には段は認められない。器壁調整は外面がハケ目、内面はヘラ状工具を用いた丁寧なナデ仕上げ。6 は口縁部先端を欠く資料である底－口縁部境の屈曲部外面に段を形成する。7 は小形の資料である。やはり斜めに立ち上がる底部から、屈曲してわずかに内湾しながら斜め上方に伸びる口縁部を持つ。屈曲部外面にわずかな段を形成する。8・9 は小形の丸底直口縁壺である。胴部はつぶれた球形で、頸部は明瞭に屈曲し、後円部は直線的に伸びる。胴部上半、頸部屈曲部直下に直径 1 ～ 1.5㎝程度の円孔をひとつ穿つ。口縁部形状にわずかな違いがあり、8 は直線的でわずかに開くのに対し、9 はわずかに外湾しつつ内傾しながら伸びる。器壁調整は口縁部がナデ、胴部外半はハケ目、内面は指によるナデ上げ痕が明瞭に残る。10 は小形の短頸壺である。つぶれた球胴と強くしまる頸部、短く外反する口縁部をもつ。以上の土器群は古墳時代前期に位置づけられよう。

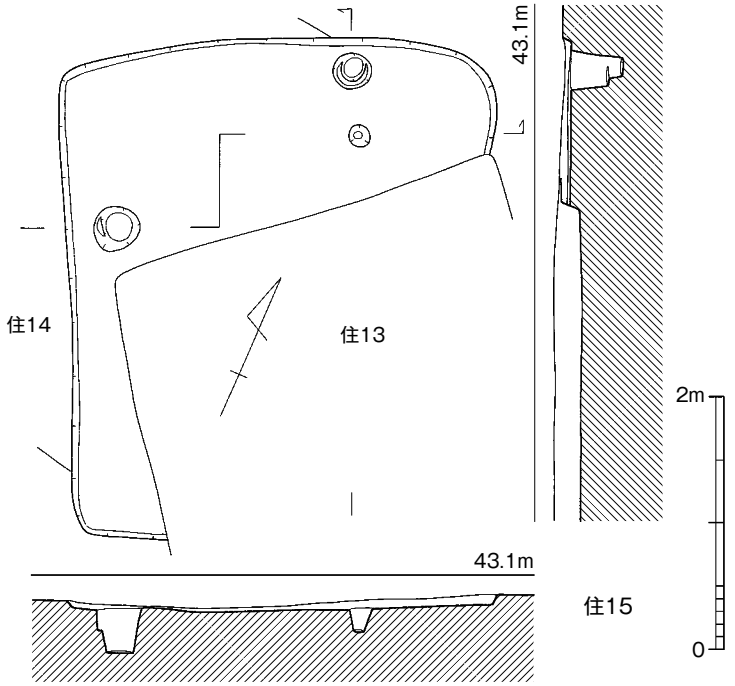
13 号竪穴住居跡（第 31 図、図版 16）

Ⅰ区のほぼ中央で検出した住居跡である。付近の検出面には、遺構埋土と思われる炭混じりの黒褐色粘質土が不整形に広がっていたが、なかなか個別の遺構を認識することができず、検出を繰り返す中でようやく 3 棟の竪穴住居跡が切り合っているものと判断したのだが、掘り下げてみるといずれも非常に浅く、カマドや炉跡、主柱穴などの竪穴住居跡にしばしば伴うような施設も見つからなかった。ここでは、一応これらを当初認識したとおり竪穴住居跡として報告するが、やや疑問も残るところではある。

13 号住居跡は 14・15 号住居跡と切り合い関係にあり、それらに後出する。平面形態は方形で主軸方位は北東－南西、規模は南北幅が 3.00m、東西長は 3.22m である。床面には小ピットが数基検







第 31 図　13 ～ 15 号竪穴住居跡実測図（1/60）

出されたが、その中で主柱穴と判断できるものはなかった。カマド・炉なども検出されなかった。埋土は黒褐色粘質土で、壁の残存高は約 20㎝である。住居跡の廃絶に伴い、投棄された土器が床面より浮いた状態で数点出土している。これらの出土土器、また 14 号住居跡との切り合い関係から、本住居跡は 5 世紀後半～末に位置づけたい。なお、床から浮いた状態で鉢や蛸壺など数点の土器が出土しているが、出土状況から見て住居廃絶時の投棄であろう。

出土遺物（第 33 図、図版 52）

土師器（1･2） 1 は球胴の直口壺である。頸部はややしまり、口縁部はわずかに外湾しながら斜め上方に開く。胴部内面はケズリ、外面と口縁部内・外面はナデ調整を施す。2 は小形の鉢である。丸底で、胴部はゆるやかに内湾しながら開き、頸部直下で急激に内湾してくびれ部を形成する。口縁部はわずかに外湾しながら強く開く。直口壺の形状が 7 号住居跡出土品と良く類似し、同様に 5 世紀後半～末の資料群と考えておきたい。なおこれらはともに出土状況を図示している。

14 号竪穴住居跡（第 31 図、図版 16）

Ⅰ区のほぼ中央で検出した。13・15 号住居跡と切り合い関係にあり、本住居跡はこれらの中で最も古く位置づけられる。平面形態は略方形で主軸方位はほぼ南北にとり、規模は南北長が 3.90m、東西幅は 3.66m である。床面には小ピットが数基検出されたが、その中で主柱穴となりうるものはなかった。カマド･炉などは検出されなかった。埋土は黒褐色粘質土で、壁の残存高は約 10㎝である。出土土器から 5 世紀後半前後に位置づけたい。

出土遺物（第 33 図、図版 52）

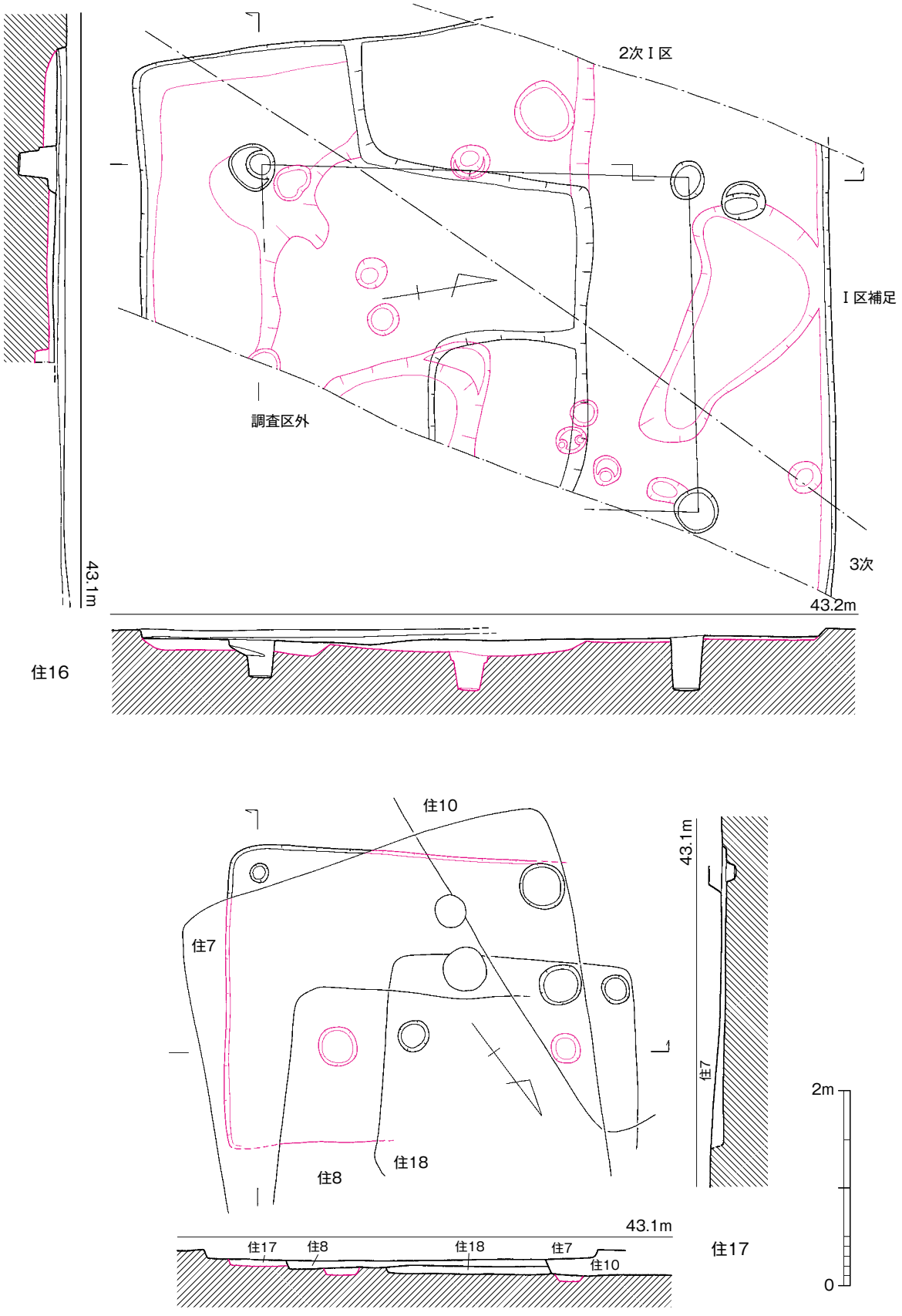
須恵器（3） 3 は瑞の胴部片。ややつぶれた小形の球状を呈する胴部の上位に径 1.5㎝ほどの円孔を穿つ。円孔とほぼ同じ高さに約 1㎝間隔で三角突帯を 2 条めぐらせて区切り、内部に櫛描波状文を充填した文様帯を配する。頸部は強く締まり、口縁部は失われる。5 世紀後半～末の資料か。

15 号竪穴住居跡（第 31 図、図版 16）

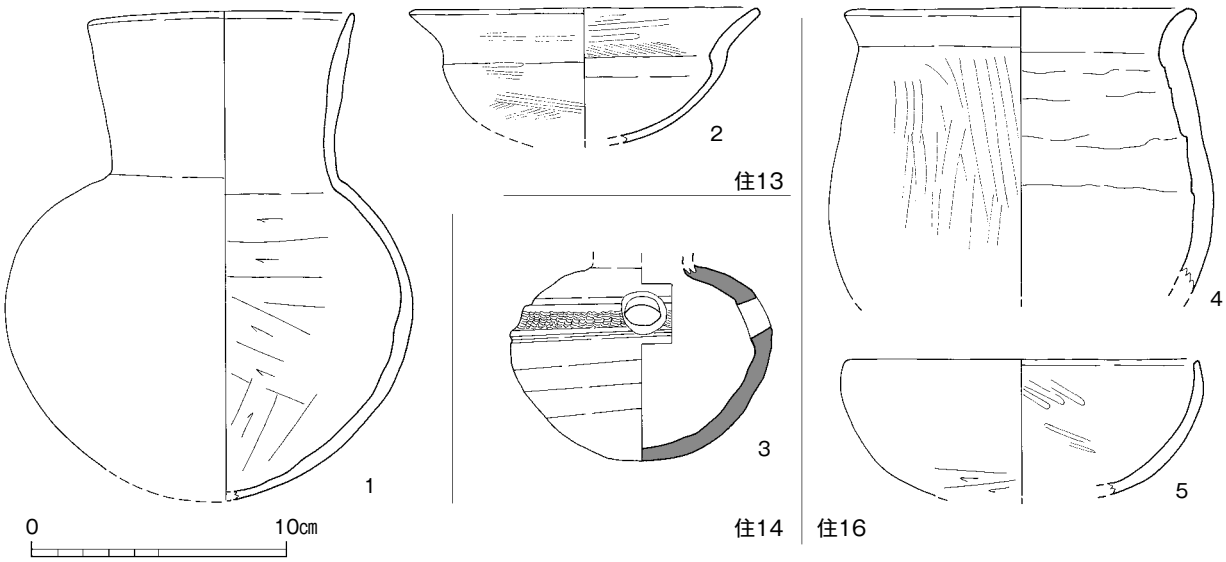
Ⅰ区のほぼ中央で検出した。13・14 号住居跡と切り合い関係にあり、13 号住居跡に破壊され、14 号住居跡を破壊する。平面形態は略方形で主軸方位は北西－南東、規模は南北が 3.76m、東西は 3.36m をはかる。床面からはいくつかの小ピットが検出されたが、主柱穴と評価できるものはない。13 号住居跡が作られる際に東半を大きく削平されておりカマド･炉などの有無も不明である。埋土は黒褐色粘質土で、壁の残存高は約 10㎝である。出土土器にはビニール袋 1 袋分の土師器片があるが図示できるものはない。切り合い関係からは 5 世紀後半～末に位置づけられよう。

16 号竪穴住居跡（第 32 図、図版 17）

調査区やや南寄りの東端で検出した。Ⅰ区調査時には遺構検出面をやや深く設定しており、北西コーナー部がごく薄く露出し、住居跡の番号は付与したが遺構として図化するまでに至らなかった。Ⅰ区補足調査の際に遺構面を数㎝上位に設定したところ、住居跡の全容を把握でき、調査に至ったものである。位置的には 6 号住居跡と切り合い関係を持つはずだが、付近での遺構の残りがきわめて悪くその関係ははっきりしない。なお本住居跡は 3 次調査区のさらに東に広がっているが、さらに東の 5 次Ⅰ区までは広がっていない。住居の平面形は（長）方形で、東半分強ほどを調査できた。



第 32 図　16·17 号竪穴住居跡実測図（1/60）

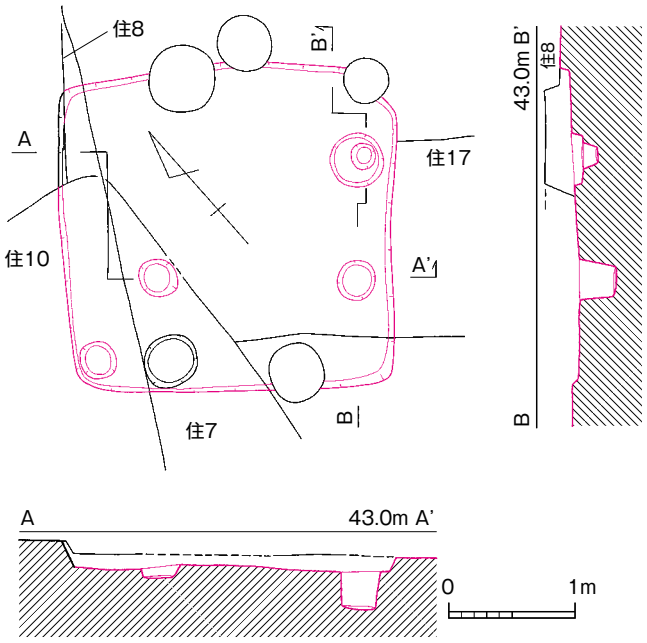


第 33 図　13･14･16 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

主軸はほぼ南北方向に向き、規模は南北のみ判明して 7.02m をはかる。西側壁の北寄りに黄褐色の粘土がみられた。壁沿いに伸びておりＬ字状カマドの煙道部と考えられるが、ちょうど調査区の境界部にあたりカマド想定部付近を十分に調査できなかった。住居跡の東側は調査区外に広がり、主柱穴の位置から考えて 5.9m 程度か。床面にはカギ状にいわゆるベッド状遺構状の高まりが掘り残されるが、住居跡の時期とはそぐわず疑問が残る。低い部分には広く硬化面が形成されており、この硬化面上から主柱穴を含むピットがいくつか検出された。また硬化面下でもいくつかのピットや床下掘り込みが検出された。出土土器から 6 世紀前半の遺構と考えられる。

出土遺物（第 33 図、図版 52）

土師器（4・5）　4 は小形の甕である。内面に粘土紐接合痕跡が明瞭に残りやや粗製感のある資料である。胴部はやや長胴気味で、底部は欠失する。口縁部はごく短く外反する。胴部外面はハケ目、内面はナデ調整。5 は碗形土器で、底部は欠失するが丸底であろう。体部はゆるやかに内湾して口



第 34 図　18 号竪穴住居跡実測図（1/60）

縁部へと素直にいたる。胴部下半外面には強い板ナデ調整痕、内面にはミガキ痕跡が認められる。やや点数が少なく時期決定は難しいが6世紀前半前後の資料群か。

17号竪穴住居跡（第32図、図版12）

調査区中央やや南寄りの竪穴住居群集中部の中に位置する。6～8·10·18号住居跡に切られる。主軸を北東－南西にとり、北西壁は7·10号住居跡によって破壊されているため東西幅は不明だが、南北幅がかろうじて判明し、3.00mをはかる。床面は本住居跡に後出する住居跡によって大きく破壊されており、本住居跡に付属する可能性のあるピット群をすべて示したが主柱穴となりうるものは見つけられなかった。出土土器にはビニール袋1袋分の土師器があるが時期を判断できる資料は乏しい。切り合い関係からは、5世紀後半～末と考えられる6·7·10号住居跡より古く位置づけられることは明らかであるがそれ以上の決め手に欠ける。8号住居跡出土の図示できない土師器小片を乏しい根拠とすれば本住居跡も古墳時代前期に属するものか。

18号竪穴住居跡（第34図、図版17）

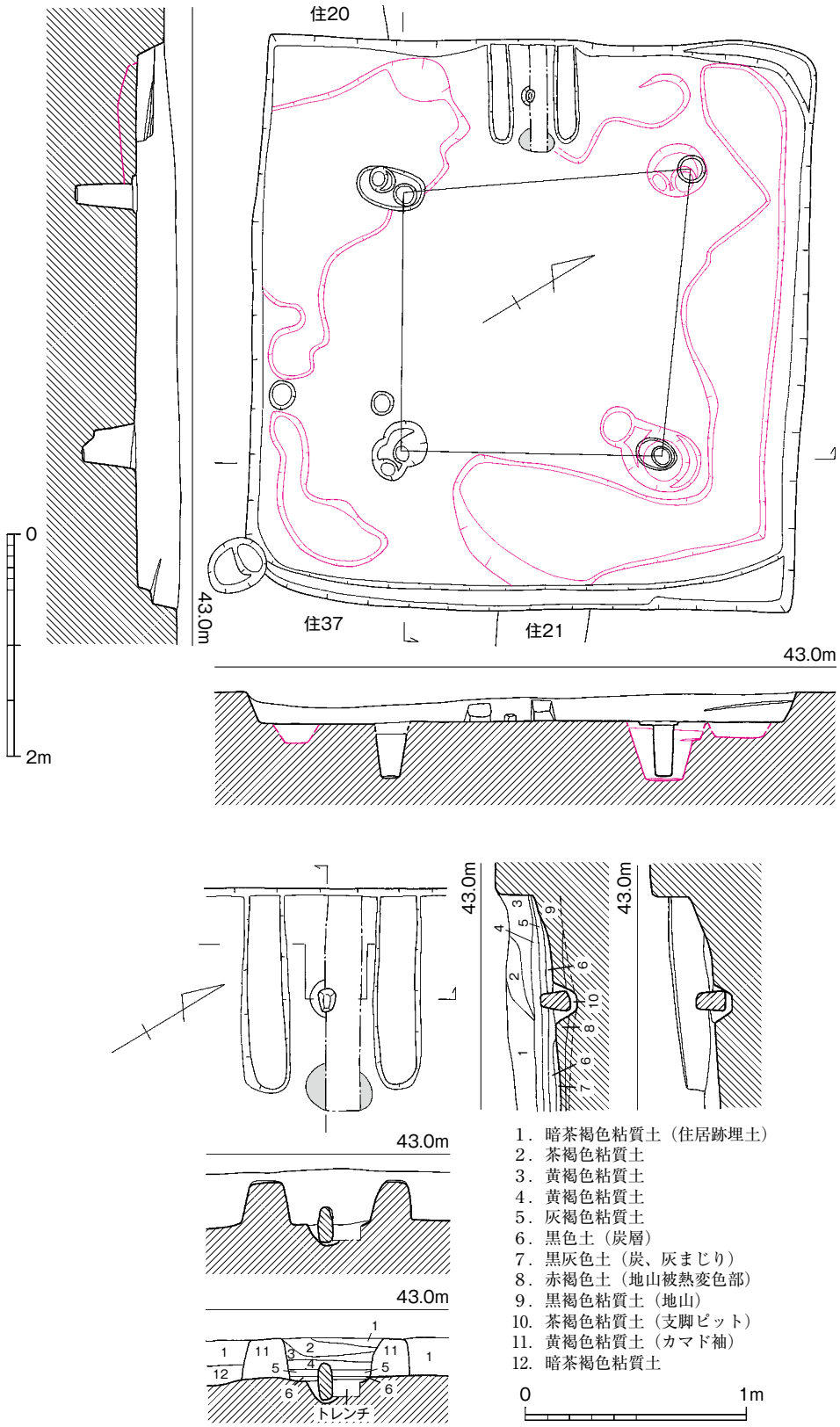
調査区の中央やや南寄りの東側でいくつかの住居跡が切り合う中にある。7·8·10·17号住居跡と切り合いを持ち、17号住居跡を破壊し、7·8·10号住居跡に先行する。主軸は北西－南東で平面形態はほぼ正方形を呈し、規模は2.50m×2.52mをはかる。竪穴部のほぼ全面を後出する住居跡が破壊しており、本来の残存深さは北西コーナー部付近にしか残されていないが、10cmほどをはかる。一方、ほぼ全面を破壊されているにもかかわらず、付近では最も深い床面レベルを持つために、床面はほぼ完存する。床面からはいくつかの小ピットを検出したが、主柱穴となり得るものを示すことはできなかった。出土土器はほとんどなく時期の比定には決め手に欠けるが、切り合い関係から古墳時代前期の可能性を考えておきたい。

19号竪穴住居跡（第35図、図版17）

Ⅰ区中央やや北寄りの西端で検出した住居跡である。20·21·36·37住居跡と切り合い関係にあり、本住居跡がこれらすべてを破壊して最も新しく作られたものである。平面形態は略方形を呈し、主軸方位は北西－南東にとる。北西壁のほぼ中央に内接型のカマドを付設する。竪穴部の規模は、南北長が5.08m、東西幅は4.82mである。床面には広く貼床が施され、その上面には硬化面が形成されていた。貼床の上からいくつかのピットを検出していたが、貼床を除去した段階で一部のピットの形状が変わっており、これを記録に残していなかったため掘方と貼床との関係が不鮮明な部分がある。ピットはいくつか見られるが、位置や深さなどからこのうちの4本を主柱穴として表示している。主柱穴4本のうち北側の2本については貼床上から検出した状態のピットを黒で、下層から検出したピット掘方を赤で表現しているが、このうち貼床上から検出したものについてはおそらく柱痕跡とみられ、直径約20cm、深さ60cm前後の規模を持つ。竪穴内の埋土は黒褐色粘質土で、壁の残存高は約50cmとかなり残りがよい。出土土器には6世紀後半～末に比定できるものが見られるが、この時期は他遺構との切り合い関係上も矛盾しない。ただし、埋土中から出土した炭化材をC14年代測定にかけたところ、これよりやや古い5世紀初頭～6世紀前半代という結果が出た。これについては木材の伐採時期と廃棄時期の差を考慮すべきであろうか（後述）。

カマド（第 35 図、図版 17）

北西壁のほぼ中央に内接型のカマドを付設する。奥壁と直角につく袖は直線的に約 90cmのび、袖間の距離は内法で約 40cmである。奥壁から 50cmほどのところに小ピットを穿ち、支脚石を立てる。支脚石は長さ 12cmほどの河原石で地中に 7cm埋め込まれ、地上部分は 5cmほど露出しているが、先

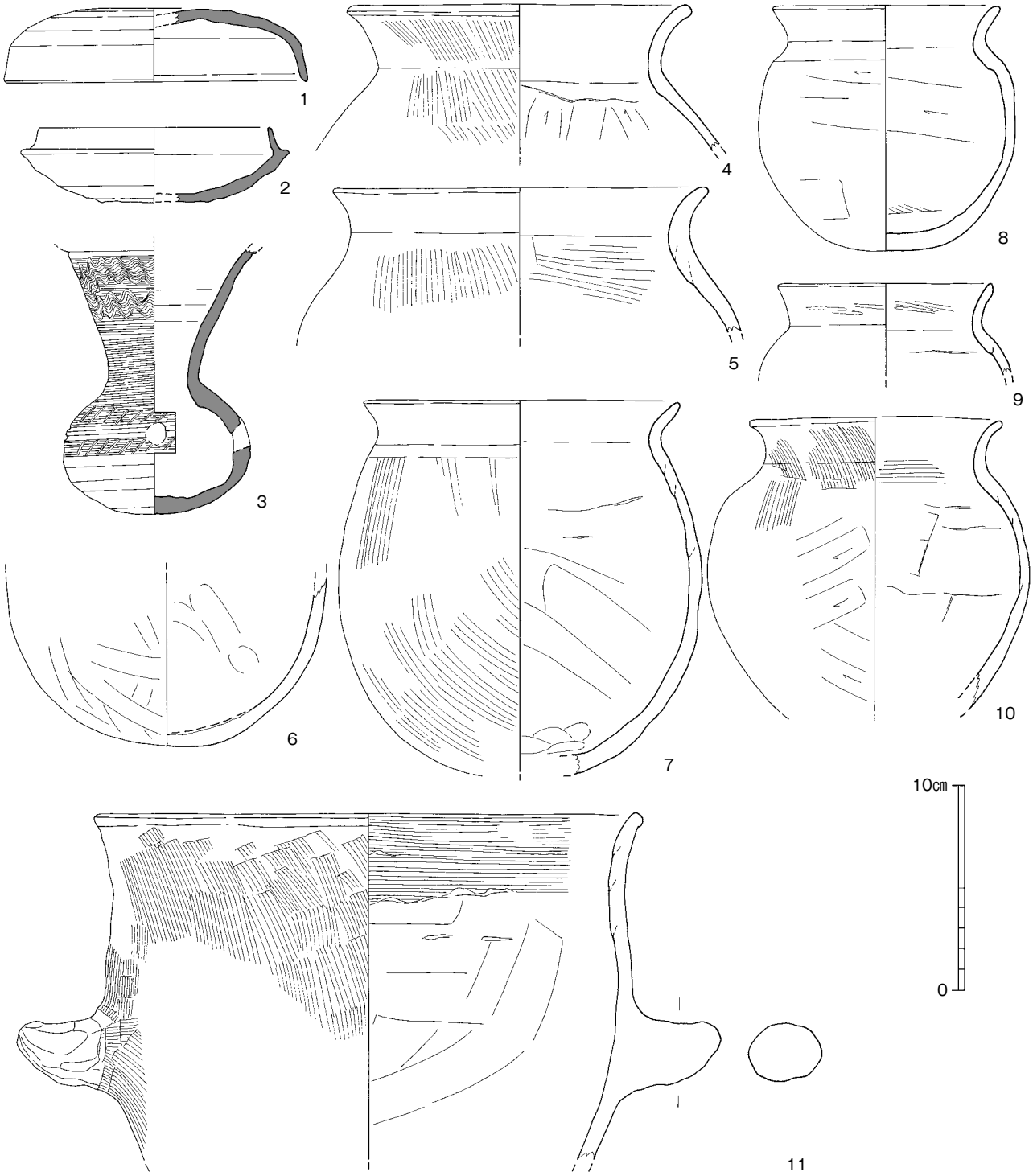


第 35 図　19 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

端は折損した状況で、おそらく破損していて本来はもう少し突出していたものとみたい。支脚石より 25cmほど離れたカマド床面には、被熱により赤変した硬化面が 20cm× 30cmの楕円形状に広がっている。埋土であるが、カマド内部は最下層に炭層、その上に薄く灰層が堆積し、崩落したカマドの土､その上に竪穴部の埋土とカマド崩落土が混じるような土が堆積している。このような状況は、住居の廃絶に伴ってカマドを破壊したがその程度は軽かったか、カマドを破壊せず住居跡が埋没するとともに自然と崩れた様相を呈している可能性がある。

出土遺物（第 36 図、図版 52）

須恵器（1 ～ 3） 1は坏蓋である。天井から体部にかけてはやや湾曲しながら伸び、口縁部境で屈



第 36 図　19 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

曲して斜め下方に伸びる。器壁調整は外面天井部が回転ヘラケズリ、体～口縁部が回転ナデ。内面は全体的に回転ナデ、天井部の狭い範囲に横ナデ。2は坏身である。底部は遺存しないがおそらく平底に近い形状で、体部はゆるやかに湾曲しながら斜め上方に伸び、カエリ部より上は反転して内傾し短く伸びる。外面の器壁調整は底部～体部下半が回転ヘラケズリ、体部上半～口縁部が回転ナデ。内面は全面的に回転ナデ。3は蓋で口縁部を欠失する。やや下膨れでつぶれた球状の胴部中位やや上に直径1.2㎜ほどの円孔を穿つ。円孔とほぼ同じ位置に3㎜間隔で沈線を2条回し、その上下に短斜線文の連続からなる文様帯を配する。頸部下端はしっかりとくびれ、頸部上位には櫛描波状文を2単位配する。波状文帯の直上に沈線が1条配され、その上が欠失する。

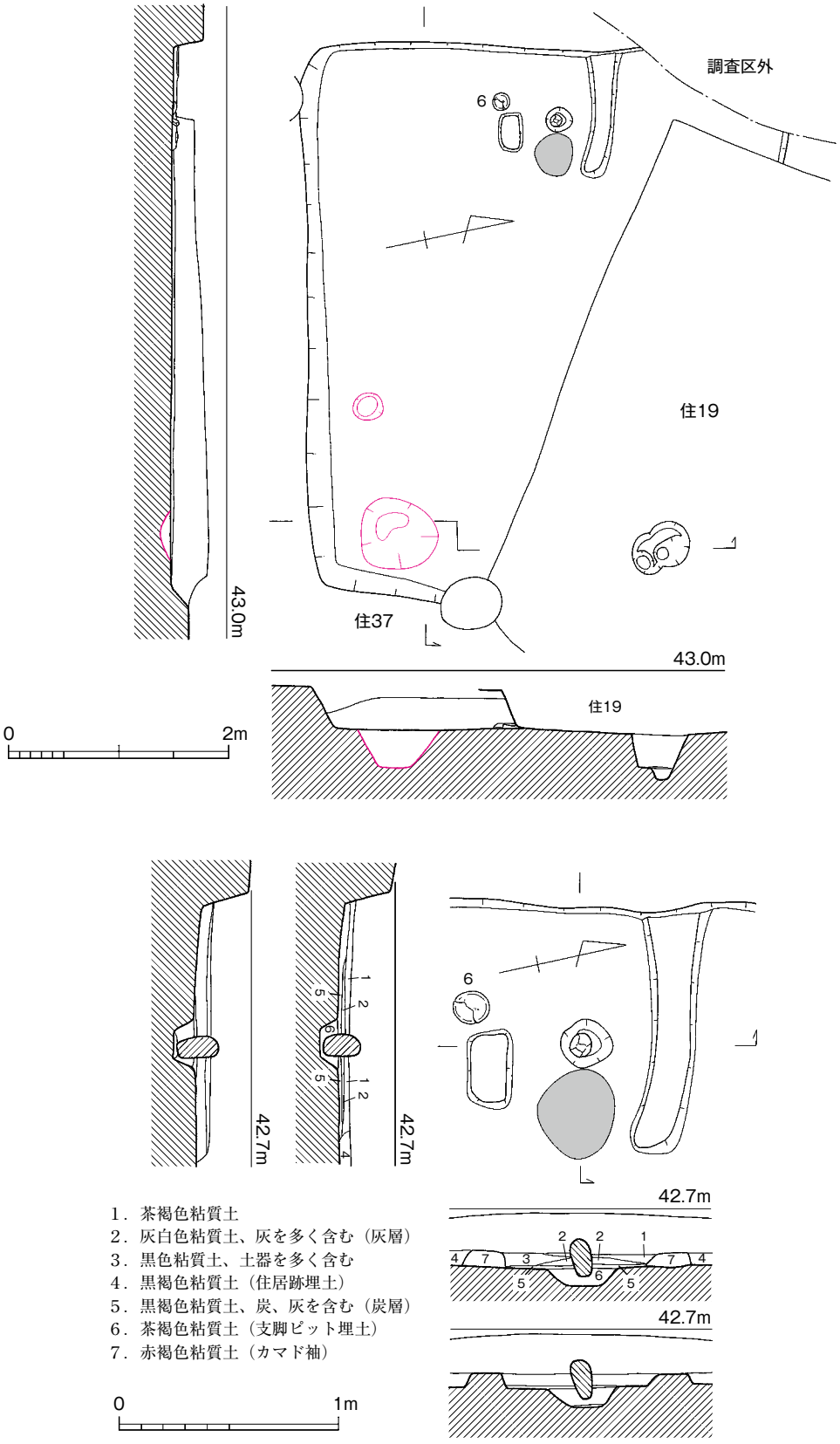
土師器（4～11）　4～10は甕形土器である。4・5は甕の胴部上半～口縁部片である。いずれも頸部のくびれはややゆるく、口縁部は如意状に外反する。口縁部の断面形状は4がほぼ同じ厚さなのに対し5は頸部付近が最も厚く先端が薄くなる形状でやや新相を呈する。6・7はやや小形の甕である。7は球状の胴部とややしまりのゆるい頸部、短く外反する口縁部を持つ資料で、おそらく6もほぼ同型であろう。器壁調整はやや異なり、6は外面が板状工具ナデ、内面が指ナデ。7は外面がハケ目、内面はケズリ。8～10は小形の甕である。やはり球状の胴部と短く外反する口縁部を持つ。口縁部はいずれも外湾する。器壁調整は胴部内面がケズリ、外面もケズリあるいは板状工具ナデで10のみハケ目調整痕が認められる。口縁部調整は8がナデ、9はミガキ、10はハケ目のちナデ仕上げである。11は甑の上半部である。胴部はゆるやかに内湾し、口縁部にかけて反転してゆるやかに外湾する。胴部中位に1対の把手を付す。器壁調整は外面がハケ目、内面はケズリである。これらの資料はいずれも6世紀後半～末に比定できよう。

20号竪穴住居跡（第37図、図版18）

Ⅰ区中央やや北寄りの西端で検出した。19・21・37号住居跡と切り合い関係にあり、21･37号住居跡に先行し、19号住居跡に大きく破壊される。平面形態は略方形で主軸方位は西北西－東南東、規模は南北幅が4.94m、東西長は4.26mである。西壁の中央部に内接型のカマドを付設する。床面にはやや厚く貼床が施されており、これを除去した状態で精査を行ったが、主柱穴と思われるものは検出されなかった。ただし、19号住居跡内から検出された南東の主柱穴が、検出面での切り合い状況こそ確認できなかったものの2つのピットがくっついたような形状をしていることから、このいずれかが20号住居跡の北東の主柱穴になる可能性はあろう。住居内の埋土は黒褐色粘質土であるが、カマド付近には黄褐色粘質土がブロック状に散らばっていた。カマドの構築粘土と考えられる。壁の残存高は約30㎝である。出土土器より本遺構は6世紀前半頃に埋没したと推測され、切り合い関係からも矛盾はない。なお第38図6の資料はカマド左袖付近から出土した略完形の甕であるが、カマド袖が本来あったはずの場所にあることから、住居の廃絶とカマドの破壊後に投棄された資料であろう。

カマド（第37図、図版18）

西壁中央に内接型のカマドを付設する。袖の長さは約1mである。左袖は奥壁から約60㎝までは大きく破壊されており、約30㎝しか残存していない。袖間の長さは60㎝である。奥壁から60㎝ほどのところに支脚石がある。支脚石は18㎝ほどの河原石で地中に6㎝埋め込まれ、地上部分は12㎝ほどである。前面には支脚石に接して被熱により赤変した硬化面が直径約40㎝の円形状に広



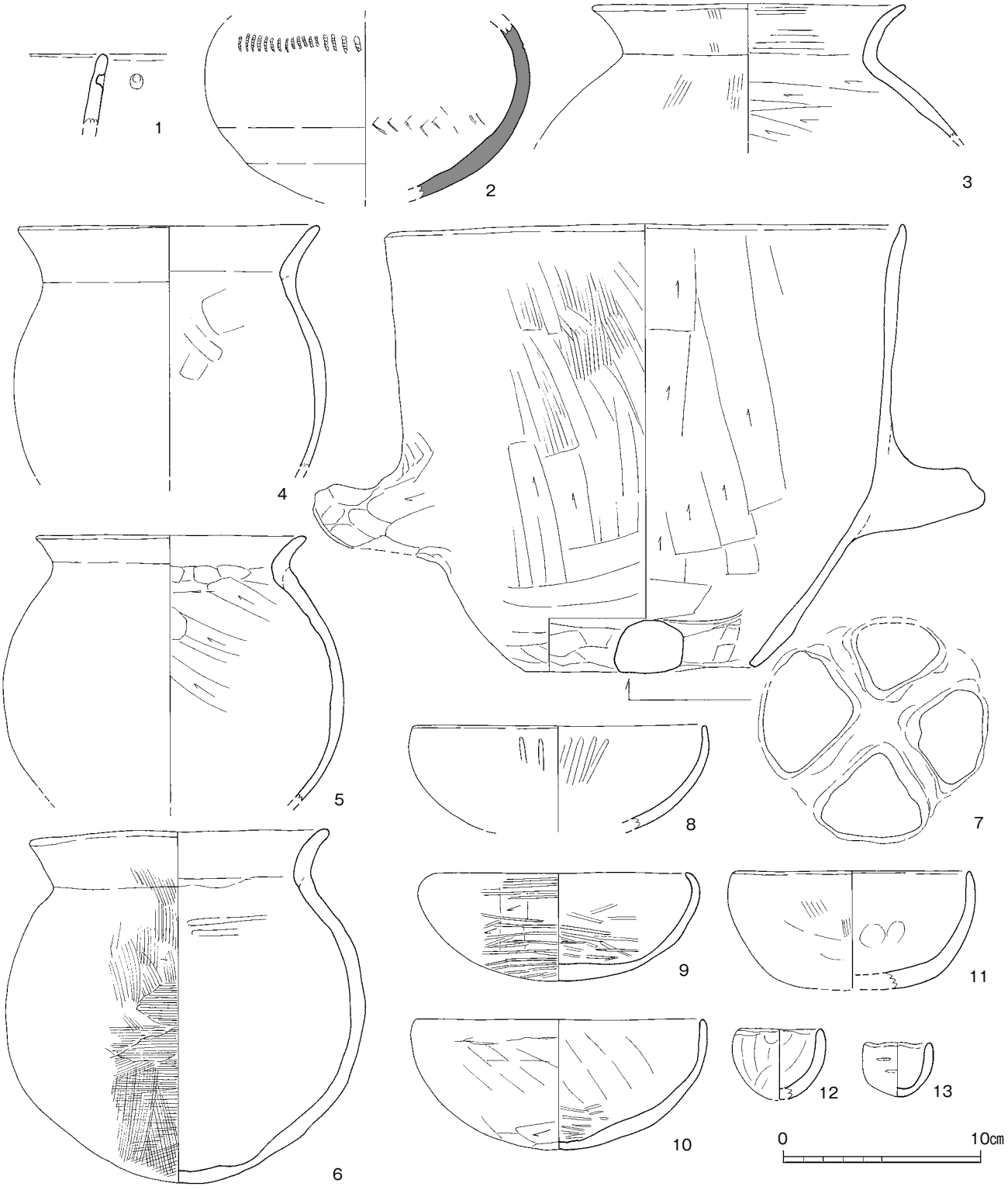
第 37 図　20 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

がっている。

カマド内部は最下層に炭層、その上に薄く灰層、その上に住居内埋土が堆積し、カマドの袖が崩落した土が検出されなかった。このような状況は、カマドを破壊する際に潰すのではなく、取り払うように大きく壊したとも考えられる。住居内にはカマド付近からカマドの崩落土が散らばって検出されたことからもその可能性が指摘できよう。

出土遺物（第 38 図、図版 52･53）

縄文土器（1） 1 は刺突文土器の口縁部片である。小片のため径や傾きは不明。内・外面ともにナ



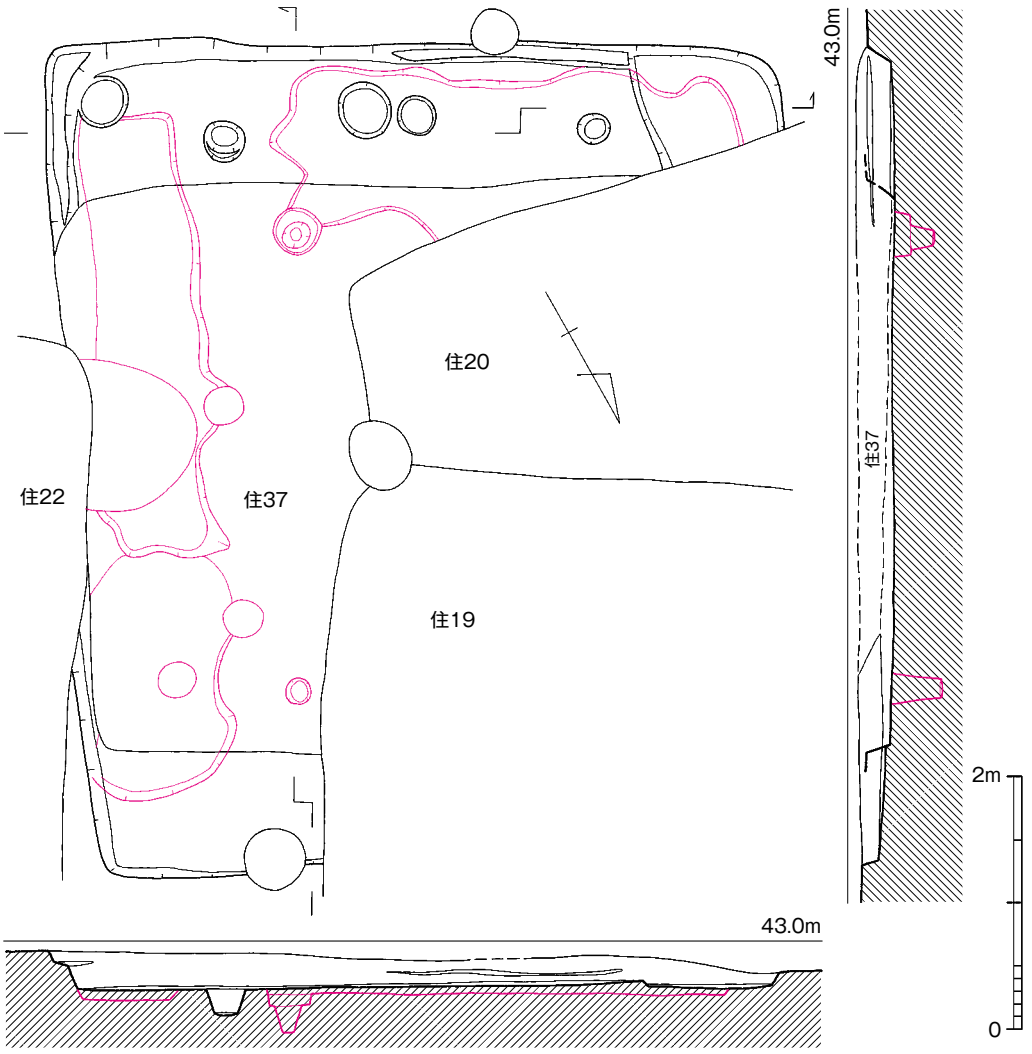
第 38 図　20 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

デ調整。混入品である。

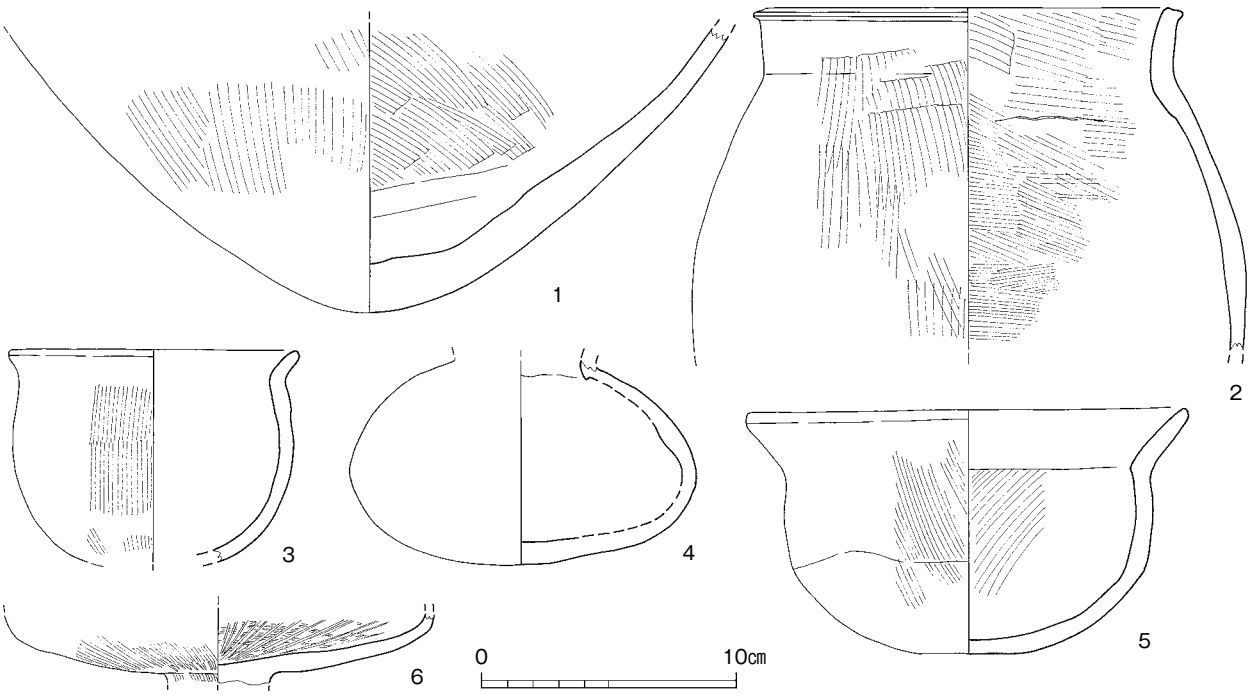
須恵器（2） 2 は甕の胴部下半であろう。胴部はやや扁平で大きく、上位に板状工具の端部を連続して押しつけることにより短斜線文を付す。内面にはヘラ状工具の端部接触痕がみられる。

土師器（3 ～ 13） 3 ～ 6 は甕である。3 は球胴の胴部上半と強くくびれた頸部、外湾しながら短く外反する口縁部を持つ。胴部内面はケズリ、外面はハケ目で調整を行う。4 ～ 6 はやや小形の甕である。いずれも球胴に短く外反する口縁部を持つ。胴部内面はケズリ､外面はハケ目あるいはナデ、口縁部は内・外面ともにナデ仕上げを行う。7 は甑である。やや寸胴なフォルムで、胴部は丸みを帯び口縁部はわずかに外反する。底部には径 11cmほどの円孔を開け、十字状に組んだ粘土紐を渡して 4 分割している。内面調整はケズリ、外面は下半がケズリで上半にはハケ目調整痕が認められる。8 ～ 11 は碗形土器である。いずれも丸底からゆるやかに立ち上がる器形で、9 のみ口縁部付近で強く内湾する。11 はやや口径が小さい。器壁調整は 8・9 が内・外面ともにミガキ、10 は内面がミガキとナデ、外面は板状工具ナデ、11 は内面がナデで外面にはハケ目調整痕が残る。12・13 は手づくねのミニチュア土器で碗か。これらの資料はいずれも 6 世紀前半前後に比定できよう。

なお、ほかに本住居跡埋土中からは第 119 図 15 に示した鉄刀子片、同 20 ～ 23 に示した鉄滓が出土している。



第 39 図　21 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 40 図　21 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

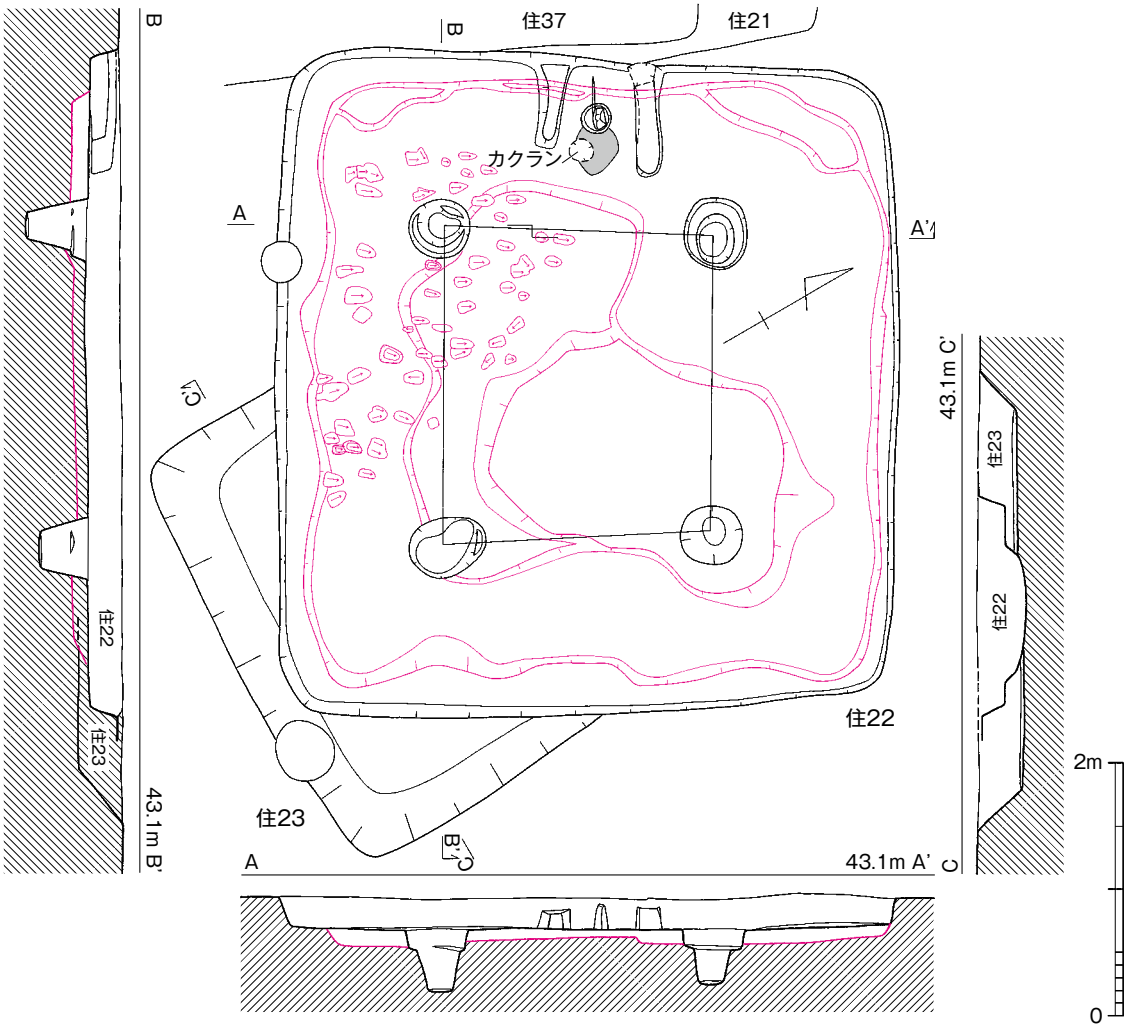
21 号竪穴住居跡（第 39 図）

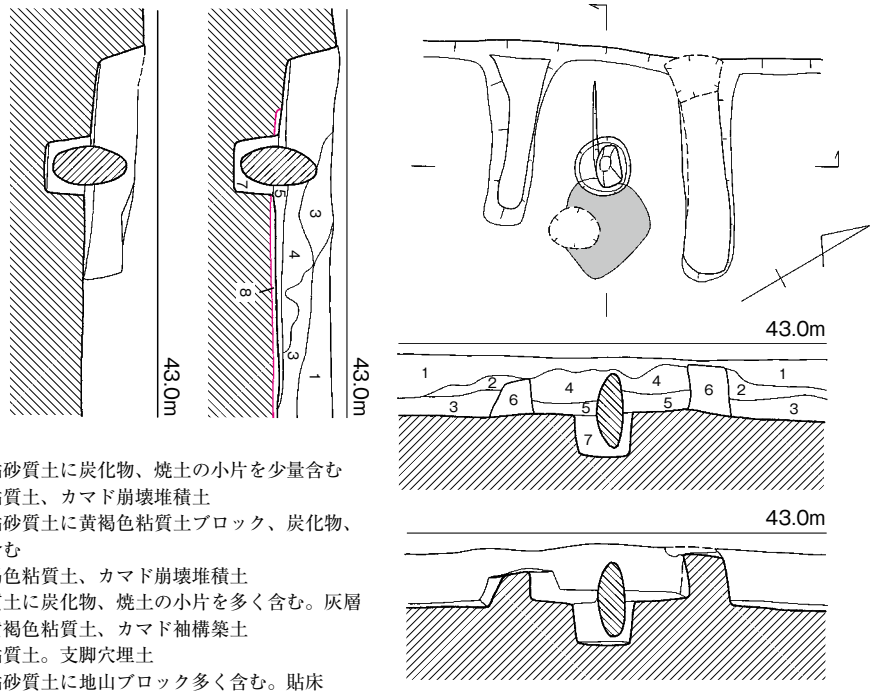
調査区の中央やや北寄りの西側で検出した。西半分を 19･20 号住居跡に、中央部を 37 号住居跡に、東壁の一部を 22 号住居跡により破壊されており、旧状をとどめるのは南壁のみである。主軸方向は北東－南西で、平面形状は長方形状を呈し、規模は長軸が 6.42m、短軸が 5.54m をはかる。カマドや炉は見つからなかった。

住居跡の西側には浅い段が形成されているが、残存部が少なくベッド状遺構かどうかはっきりしない。床面からは下層検出分も含め多くのピットが出土しており、主柱穴も二つほど候補が挙げられる。これが主柱穴であれば本来は 4 本主柱の竪穴住居跡と推測できるが、ほかの遺構により壊された範囲が広く確実ではない。床面の各所で床下掘り込みが認められる。住居跡の中央付近で硬化面も形成されていた。出土土器から、古墳時代前期に埋没した遺構と考えられ、他遺構との切り合い関係上も整合的である。

出土遺物（第 40 図）

土師器（1 ～ 6）　1 は在地系の大型甕の底部片である。尖底から斜めに開く胴部下半までが残る。器壁調整は内・外面ともにハケ目。2 もやはり在地系の長胴甕の胴部上半～口縁部片である。口縁部は短く直立する。器壁調整は内・外面ともにハケ目。3 は小形の甕か。球胴とくびれの弱い頸部、短く外反する口縁部を持つ。4 は長頸壺の胴部片であろう。やや下膨れのそろばん形を呈する。5 は鉢形土器である。平べったい半球状の底－胴部と、屈曲して短く外反する口縁部を持つ。6 は高坏の坏部片である。平坦な坏底部から急激に上方に向かって屈曲する部分までが残る。屈曲部は明瞭な段や稜を形成しておらず通有の高坏とはやや異なる。弥生時代後期にしばしばみられるいわゆる内湾系高坏の系譜を引くものか。胎土は精良で、内・外面ともに目の細かいハケ目調整を施したのちに細かいヘラミガキで仕上げており、特に内面には底部見込みに放射状に暗文状ミガキを施している。以上の土器群はおおよそ古墳時代前期に属するものであろう。





1．暗褐色粘砂質土に炭化物、焼土の小片を少量含む
2．黄褐色粘質土、カマド崩壊堆積土
3．暗褐色粘砂質土に黄褐色粘質土ブロック、炭化物、焼土を含む
4．黄～橙褐色粘質土、カマド崩壊堆積土
5．灰色粘質土に炭化物、焼土の小片を多く含む。灰層
6．黄～橙黄褐色粘質土、カマド袖構築土
7．暗褐色粘質土。支脚穴埋土
8．暗褐色粘砂質土に地山ブロック多く含む。貼床

第 41 図　22･23 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）

22 号竪穴住居跡（第 41 図、図版 18･19）

調査区の中央北寄りで検出した。西側には 19 ～ 21･37 号住居跡が密集していて、本住居跡はこのうち 21･37 号住居跡とわずかな切り合いを持ち、これを破壊している。また、東側では 23 号住居跡と大きく重複し、やはりこれに後出する。住居跡の主軸方位は北西－南東で、北西壁の中央部に内接型のカマドを作り付ける。主柱穴は 4 本が正方形に配置される。

住居跡の規模は北西－南東長が 5.04m、北東－南西幅が 4.81m の規模をはかり、残存深さは約 30㎝ほどで比較的よく残された住居跡である。床面の広い範囲に硬化面が認められ、床面の検出は比較的容易であった。硬化面の下層には深いところで 15㎝程度の面的な掘り下げが認められた。床下掘り込みは住居跡の中央部を除く広い範囲に広がっており、その床面で工具痕とみられる痕跡を多数検出した（後述）。床下掘り込みは暗褐色粘砂質土を主体とし地山の小ブロックの混じる土で埋め戻されて堅く踏みしめられていた。出土土器には須恵器や土師器があり、完形に近く復元できる資料もあるが床面直上からの出土はなくすべて埋土中からの出土である。出土土器から 6 世紀後半代に埋没した住居跡と考えられる。

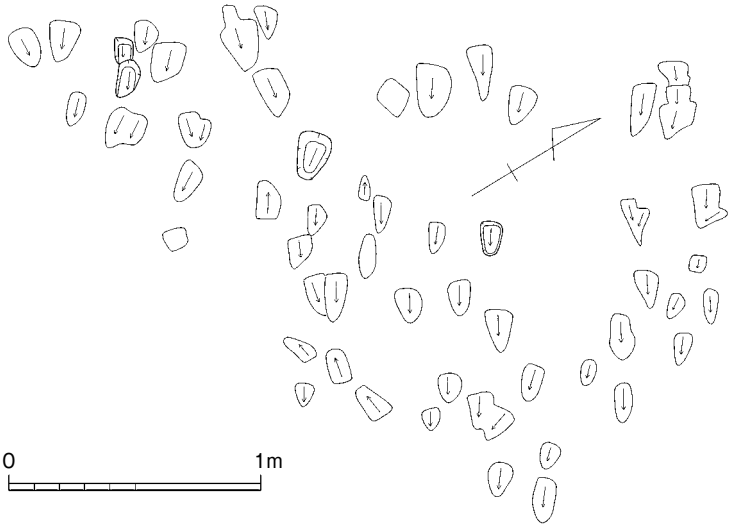
工具痕跡（第 42 図、図版 19）

住居跡の床下掘り込み南西部の床面において、幅 10 ～ 15㎝、長さ 20㎝弱の平面台形の工具痕跡を検出した。本来は床下掘り込み全面に広がっていたと思われるが、発見した付近は地山の土質が均質な黄白色砂質土で、暗褐色粘砂質土の埋土をもつ工具痕が非常によく目立ち、図化することができたものである。工具痕は住居の壁側に深く入り、中央に向かって浅く抜けていた。以上から、工具はおそらく刃部幅 10㎝程度の打鍬状の掘削具で、住居の中央部に作業者が立ち、住居の壁に顔を向けて鍬をふるって掘り下げを行ったものと推測したい。

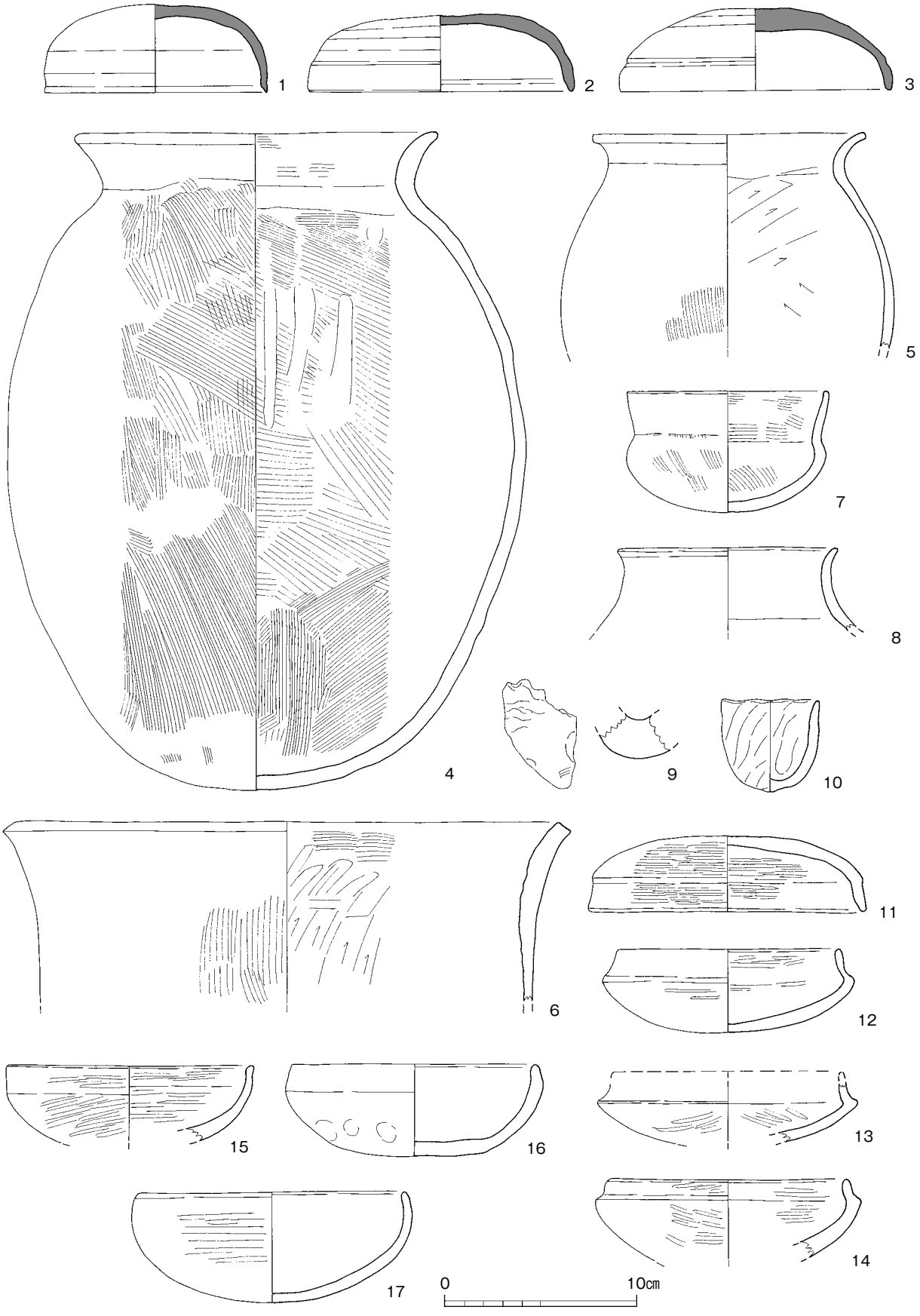
なお、同様の痕跡は本遺跡の第 2 ～ 6 次調査で検出した古墳時代後期の竪穴住居跡のいくつかで断片的に確認したが、記録に残すことはできなかった。

カマド（第 41 図、図版 18）

住居跡の北西辺中央部に内接型のカマドを作り付けている。カマドの袖は住居跡の壁に垂直に直線的に伸びていて、右袖が（おそらく）完存し約 80㎝の長さを測る。袖同士は並行しつつわずかに燃焼部に向かって開いていて、燃焼部付近の袖間は 65㎝ほどをはかる。燃焼部には直径 30㎝ほ



第 42 図　22 号竪穴住居跡掘り込み工具痕実測図（1/30）



第 43 図　22 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

どの不整楕円形の範囲に被熱硬化面が形成されており、硬化面の一部は支脚に接触している。支脚は壁から約 30cmほどの位置に立てられた全長約 30cmほどの長楕円形の円礫で、露出部高さは 18cm、地中部は 12cmほどをはかる。

カマドの埋没状況であるが、カマド内には厚く灰層が堆積しており、廃棄直前の灰の掻き出し等の行為は認められない。カマドの崩壊土は 2 回にわたり形成されており、1 度目の形成は第 4 層でカマドの廃棄時にカマド内に崩壊堆積したもの、2 回目は第 2 層で住居跡が 20cmほど埋没した後にカマドの周囲に広がるように堆積したものである。このことより、カマドは住居廃棄時につぶされ、その後住居跡の 1 度目の埋め戻しがあり、その上層でカマド崩壊土の撹乱が起きた後に、住居跡の 2 度目の埋没が起きていると解釈できる。

出土遺物（第 43 図、図版 53･54）

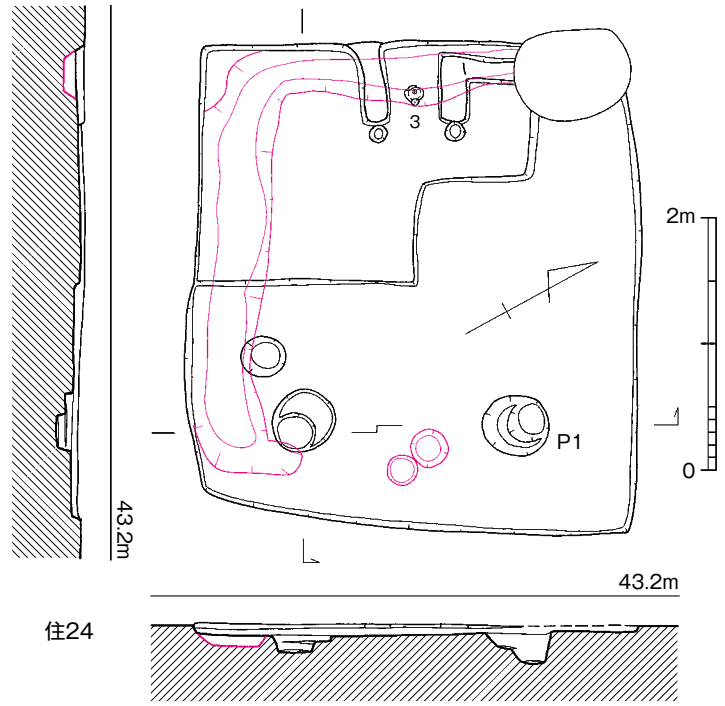
須恵器（1 ～ 3） 1 ～ 3 は坏蓋である。1 は径がやや小さく、器高が高いものである。天井部から口縁部にかけて湾曲し、体部の屈曲は比較的明瞭である。口縁端部を斜めにカットする。天井部外面が回転ヘラケズリ、口縁部と内面は回転ナデ。口縁部径は 13.8cmをはかる。2 は天井部が平坦で、ゆるやかに湾曲して口縁部にいたる。天井部の広い範囲が回転ヘラケズリ、口縁部と内面は回転ナデ。胎土が乳白色で、一見して上毛町照日窯跡群産の資料に類似する。口径は 14.0cm。3 は天井部が丸みを帯び、ゆるやかに口縁部に至る器形を持つ。天井部が回転ヘラケズリ、口縁部と内面は回転ナデ。口径は 14.2cmをはかる。

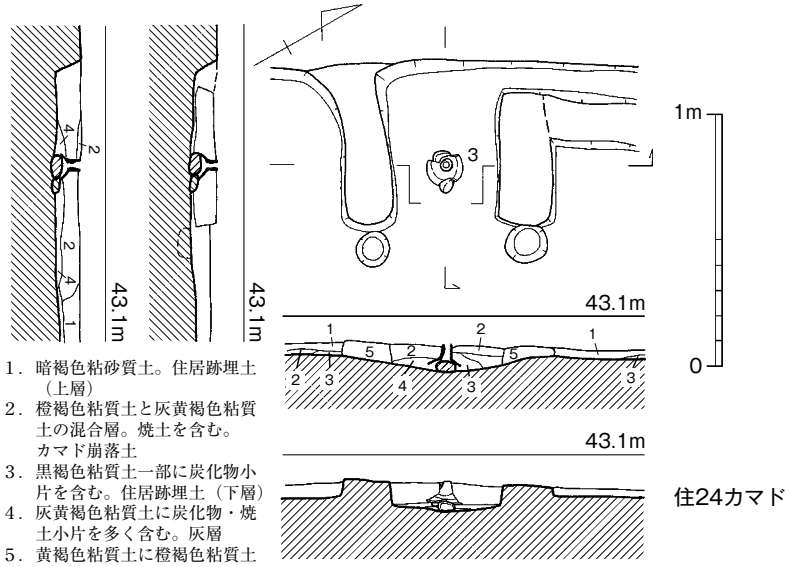
土師器（4 ～ 14） 4 は長胴の甕である。胴部は繭形で口縁部は如意状に外反する。調整は内・外面ともに胴部がハケ目、口縁部はナデ。5 は球胴の甕である。口縁部は如意状に外湾し短く外反する。調整は胴部内面がケズリ、外面はハケ目、口縁部はナデ。6 は大型の長頸壺の口部片か。やや外湾しながら上方に伸び、口縁部径は 30cmほどと大きい。内側を粗くケズる。外面はハケ目調整で、内面上部にはミガキを施す。7 は丸底の小形短頸壺である。胴部は扁平で、口縁部は短く斜め上方に伸びる。調整は、内・外面ともにハケ目。8 は球胴の短頸壺であろうか。外湾しながら直上に伸びる口縁部付近のみが残存する。頸部のくびれは弱い。9 はフイゴの羽口である。小片で全形は不明だが、外面が良く焼けている。10 は手づくねのミニチュア土器である。器種は不明。11 ～ 14 は須恵器模倣坏で 11 が坏蓋、12 ～ 14 が坏身である。いずれも内・外面に丁寧なミガキを施し、暗灰色～黒色を呈する。15 ～ 17 は碗形土器である。15 は底部が欠失する。16・17 は丸底であるがわずかに平底を志向するような形状をとっており、口縁部に向かって比較的大きく湾曲する。内面・外面あるいは両面にミガキ調整を施す。これらの土器群のうち、1 の坏蓋は明らかにやや古相を呈するが、他の多くはおおよそ 6 世紀後半代に比定できよう。

なお、本住居跡の埋土中からはほかに第 119 図 9 に示した鉄鏃の茎部片が出土している。

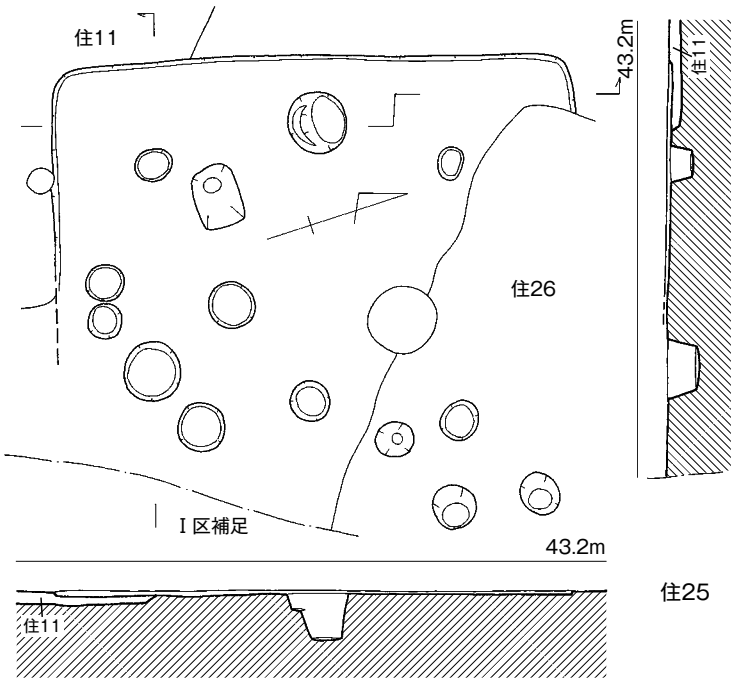
23 号竪穴住居跡（第 41 図、図版 18）

調査区の中央北寄りで検出した。22 号住居跡と切り合い関係にあり、本住居跡が先行する。主軸をほぼ南北方向に持ち、北側の大半を 22 号住居跡に破壊されていて、南壁のすべてと東西壁の半分弱ほどが残る。規模は南壁のみ判明し、一辺 2.98m の大きさをはかる。残存深さは 40cm弱でかなり深い。主柱穴は不明であった。22 号住居跡の主柱穴と重なるのかもしれない。出土土器から古墳時代前期に比定でき、切り合い関係上も矛盾がない。





1．暗褐色粘砂質土。住居跡埋土（上層）
2．橙褐色粘質土と灰黄褐色粘質土の混合層。焼土を含む。カマド崩落土
3．黒褐色粘質土一部に炭化物小片を含む。住居跡埋土（下層）
4．灰黄褐色粘質土に炭化物・焼土小片を多く含む。灰層
5．黄褐色粘質土に橙褐色粘質土の小ブロックを少し含む。カマド袖構築土



第 44 図　24･25 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）

出土遺物（第 46 図）

土師器（1･2） 1･2 は高坏の脚部である。1 は脚部上半が、2 は脚部下半が残る資料である。1 は内部が充填された脚柱部から急激に開く部分までが残る資料で、外面を丁寧にミガく精製品である。2 は開いた部分から先の接地部までが残る資料で、外面調整は内・外面ともに横ナデ。いずれも古墳時代前期の資料であろう。

24 号竪穴住居跡（第 44 図、図版 19）

調査区の中央北寄りで検出した。ほかの住居跡等と切り合い関係を持たず単独で存在する。主軸方位を北西－南東にとり、北西壁のほぼ中央部に L 字状カマドを付設する。住居跡の平面形状はほぼ正方形で、規模は主軸が 3.78m、幅が 3.52m をはかる。床面にはカマドに近い範囲を中心に硬化面が形成されていた。硬化面が形成されていない箇所についてはやや下げすぎたが本来はカマド付近の高さだったのであろう。床面からはいくつかの小ピットが検出されたが、いずれも浅く主柱穴としては物足りない。また、硬化面の下層にある貼床を外したところ南・西壁下を巡る溝状の形をした床下掘り込みが現れた。出土土器のうち図示できる資料は 3 点あり、これらより本住居跡の廃絶期を 6 世紀後半に比定したい。なお第 46 図 3 に示した高坏がカマドの支脚して転用された資料であり、本住居跡の機能時の一端を示す資料である。

カマド（第 44 図、図版 19）

北西壁のほぼ中央部に L 字状カマドを作り付けている。袖は住居壁と直交するように約 70㎝ほど伸び､その先端部に小ピットを穿つ。おそらく石や木を立ててカマドを補強していたのであろう。ピットの先端部までを含めた袖の本来の長さは 80㎝ほどをはかる。奥壁から 40㎝の位置に高坏が逆位に置かれていた。転用支脚であろう。高坏の下にはこぶし大の石が置かれていた。おそらく高さを稼ぐためではなかろうか。右袖は壁についておらず幅 10㎝ほどの空間があり、そこから右に向かって住居の壁沿いに煙道が伸びている。煙道の先端部側半分弱ほどは撹乱により破壊されているが、北西コーナー部より住居外に出るのであろう。

カマド埋土は､最下層に灰層があり住居跡埋土（下層）を挟んでカマドの崩落土が堆積していた。高坏転用支脚と灰層がそのまま残されており、カマド崩落以前に住居跡の埋土が流入していることから、本カマドはある程度形を残したまま埋め戻され、その途中で崩落したものとみられる。

出土遺物（第 46 図、図版 54）

須恵器（5） 5 は須恵器の坏身である。底面は平坦で、体部で屈曲して斜め上方に伸び、カエリ部で内側に屈曲して外湾しながら内傾しつつ短く伸びる。口径は 13.0㎝をはかるが小片でやや不安が残る。6 世紀後半の資料である。

土師器（3･4） 3 は高坏の脚部片である。脚部は長く伸び、下方でゆるやかに外湾して広がる。湾曲部外面に稜を形成する。4 は在地系の長胴甕の口縁部片であろう。口縁部は「く」の字状を呈し、端部をわずかに上方に引き上げる。胴部は下半が遺存しないがおそらく尖底で長胴であろう。内面調整はケズリ、外面調整はハケ、口縁部は内・外面ともにハケ調整である。いずれも 6 世紀後半代の資料である。

25 号竪穴住居跡（第 44 図、図版 20）

調査区北寄りの東側で検出した。南側では 11 号住居跡と切り合い関係を持ちこれを破壊する。また北側では 26 号住居跡と切り合い関係にあり、本住居跡が大きく破壊される。残存深さがきわめて浅く、東側では床面が失われている。主軸方位は東－西でやや傾き、規模は南北が判明して 4.08m、東西方向は少なくとも 1.8m 以上である。床面には地山の礫が多く露出しているが貼床の有無は不明である。また床面から小ピットが多く見つかったが、いずれも浅く主柱穴は不明である。出土土器にはいくつかの時期のものが含まれるが、本住居跡が 6 世紀中葉前後の 11 号住居跡より後出することを考慮し、6 世紀中～後葉と考えておきたい。

出土遺物（第 46 図）

須恵器（6） 6 はカエリを持つ坏身の口縁部片である。小片で径と角度はやや自信がない。体部上半から、カエリ部の根本で屈曲して外湾しながらわずかに内傾しつつ短く伸びる口縁部までが残存している。復原口径は 14.6㎝をはかる。6 世紀後半の資料であろう。

土師器（7 ～ 10） 7 は碗の口縁部片である。小片で径と傾きはやや自信がない。ゆるやかに湾曲しながら口縁部に至る器形で、外面調整がハケ目、内面にはミガキ痕跡が残る。8 は甕の口縁部片であろう。端部を四角く収めており、おそらく古墳時代前期の在地系長胴甕に見られる「く」の字口縁部分ではないか。9 はフイゴの羽口である。小片で全形は不明。外面に一部被熱痕跡が認められる。10 は甑の底部片である。平底から屈曲して斜めに立ち上がる胴部下半までが復原できる。底部穿孔は 2 孔以上である。以上の資料はやや時期的に差があるものが混在しており、また小片で全形が復元できないものが多いため明言できない。

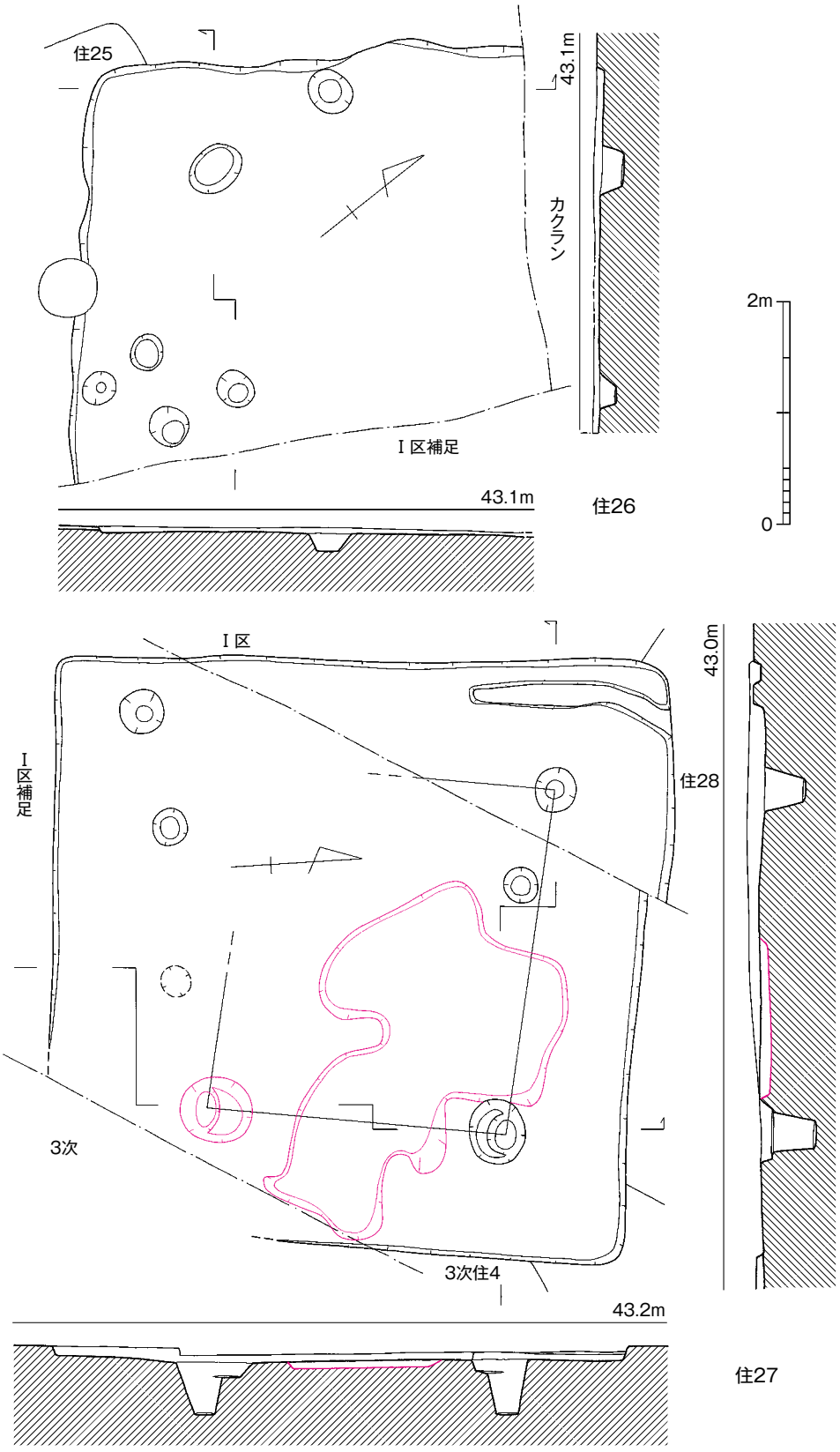
26 号竪穴住居跡（第 45 図、図版 20）

調査区北寄りの東側で検出した。25 号住居跡と切り合い関係にあり、これを破壊する。北側を撹乱溝により大きく破壊される。また、東側はⅠ区補足調査範囲に広がるが、付近の地山が少しずつ東に向けて下がっているためか、見つけられなかった。もともと残存深さが数㎝ときわめて浅く、シミ状の土を住居跡と誤認して掘ってしまった可能性もあるが、小片ながら土器が出土しており、一応住居跡として報告しておく。

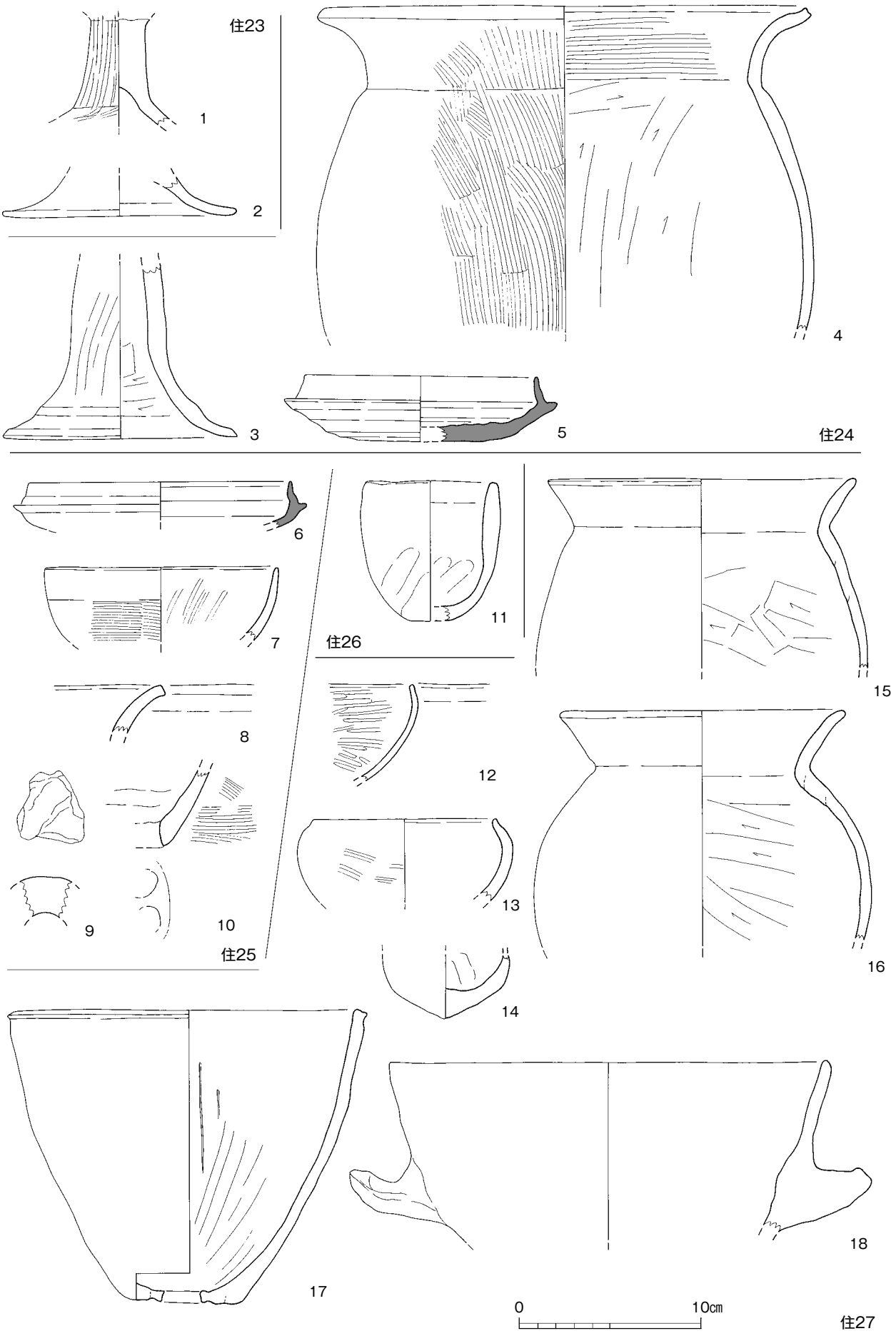
残存している部分は南西壁と北西壁のそれぞれ一部であり、主軸を北西－南東とすると、残存大きさは最大で 4.26m × 3.60m をはかる。床面からはいくつかの小ピットが見つかっているが主柱穴と断定できるものはない。出土土器は須恵器・土師器の小片がビニール袋 1 袋分ほどあり、図示できたのは蛸壺のみであるが、他に小片ではあるが須恵器の坏身でカエリを持つタイプがある。6 世紀末～ 7 世紀初頭頃に位置づけられる資料である。他遺構との切り合い関係より 6 世紀後半以降の遺構と考えれば、出土土器との大きな矛盾もない。以上から、本遺構は 6 世紀末～ 7 世紀初頭頃に位置づけておきたい。

出土遺物（第 46 図）

土師器（11） 11 は土師器の蛸壺である。小片であるがおおよそ全形を復原できた。口径 7.6㎝、器高は約 8.2㎝で、全体にゆがみが多く手づくね感がある。残存部分に孔はみられない。



第 45 図　26･27 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 46 図　23 ～ 27 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

27 号竪穴住居跡（第 45 図、図版 20）

調査区の北東隅で検出した。28 号住居跡・3 次 4 号住居跡と切り合い関係を有し、これらより後出する。主軸方位をほぼ東西にとり、東側にＬ字状カマドを作り付ける。Ⅰ区調査時には本住居跡の北西コーナー部付近を検出し、北に伸びるカマド煙道部分を調査したが、カマド本体部分は調査区端部にあって、住居跡の残存深さが数㎝しかないこともありカマドの主体部を調査することはかなわなかった。Ⅰ区補足調査時には、Ⅰ区調査よりも検出面を数㎝高く設定したため、本住居跡の残存深さは 10㎝程度となったが、すでにカマド主体部分は破壊されてしまっていた。以上のような経緯から、カマド本体を図示することはできない。また、北壁ラインがⅠ区とⅠ区補足の範囲で 20㎝ほどずれてしまっているが、上記のような経緯でⅠ区の調査時には残存深さがきわめて浅く十分な調査ができなかった結果であり、おそらく本来の住居跡の範囲はⅠ区補足調査で確認したものであろう。以上に従い本住居跡の規模を述べるならば、平面形態は略方形で東西長は 5.16m 南北幅は 5.20m の規模をはかるものと理解できる。

カマドは西壁のおそらくほぼ中央に付くＬ字状カマドとみられ、煙道は西壁に沿って北に伸ばすものであろう。煙道部の内壁は黄褐色粘質土で構築する。住居床面には硬化面が部分的に認められるが、南東コーナー部は削平により失われている。硬化面上あるいは下からいくつかのピットを検出し、位置や深さなどからうち 3 つを主柱穴候補として示した。このうち北西コーナー部に近い一つについてはやや自信がない。また、床下には不定形の掘り込みを確認した。出土土器と切り合い関係から 6 世紀前半頃に位置づけておきたい。

出土遺物（第 46 図、図版 54）

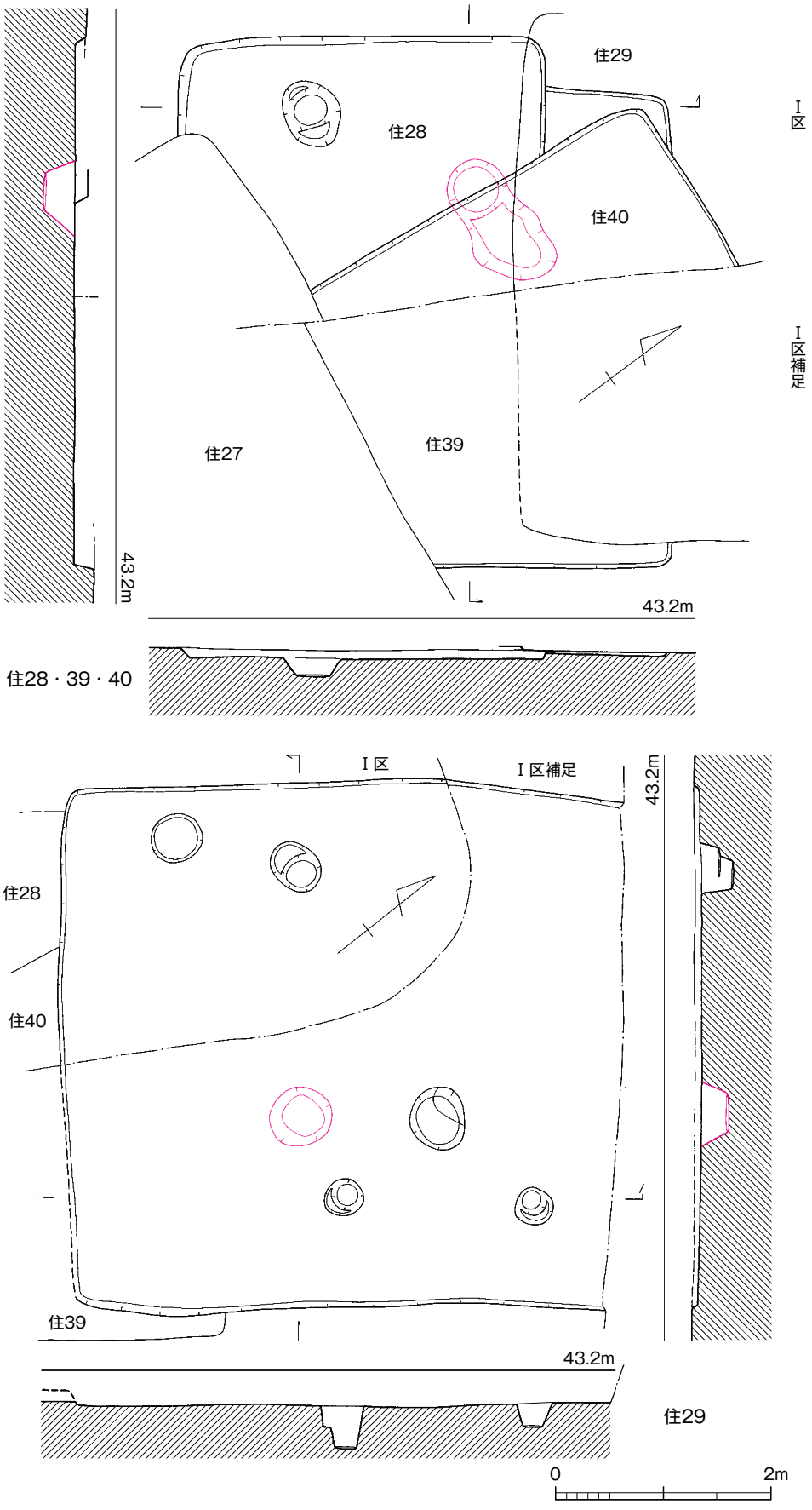
土師器（12 ～ 18） 12・13 は碗形土器の破片である。12 は器壁が薄く内面を丁寧にミガく精製品である。13 は器壁が厚く、口縁端部をわずかに外半させる。調整は外面がハケ目、内面はナデ。14 は手づくねのミニチュア土器で、口縁部を欠失する。甕形であろうか。15・16 は中形甕の胴～口縁部片である。いずれも球胴で短く外反する口縁部を有する。調整も共通し、胴部外面は板状工具ナデ、外面はケズリ。口縁部は内・外面ともにナデ。また、ともに胴部上半に粘土紐の接合痕跡を残す。頸部のくびれは 16 の方が著しい。17 は甑である。残存状況は比較的よいが、把手が確認できなかった。当初より付与されていなかった可能性が高い。底部の穿孔は 1 穴で、径 2㎝弱のゆがんだ円形を呈する。調整は胴部下半にケズリ痕がよく残り、外面全体と内面の口縁部付近はナデ仕上げ。口径は 20.0㎝、器高は 16.3㎝でやや小さい。18 は把手付の甑の胴部上半である。口縁部はまっすぐに伸び、口径は 24.6㎝をはかる。以上の資料は 6 世紀前半頃に位置づけられるか。

28 号竪穴住居跡（第 47 図、図版 20）

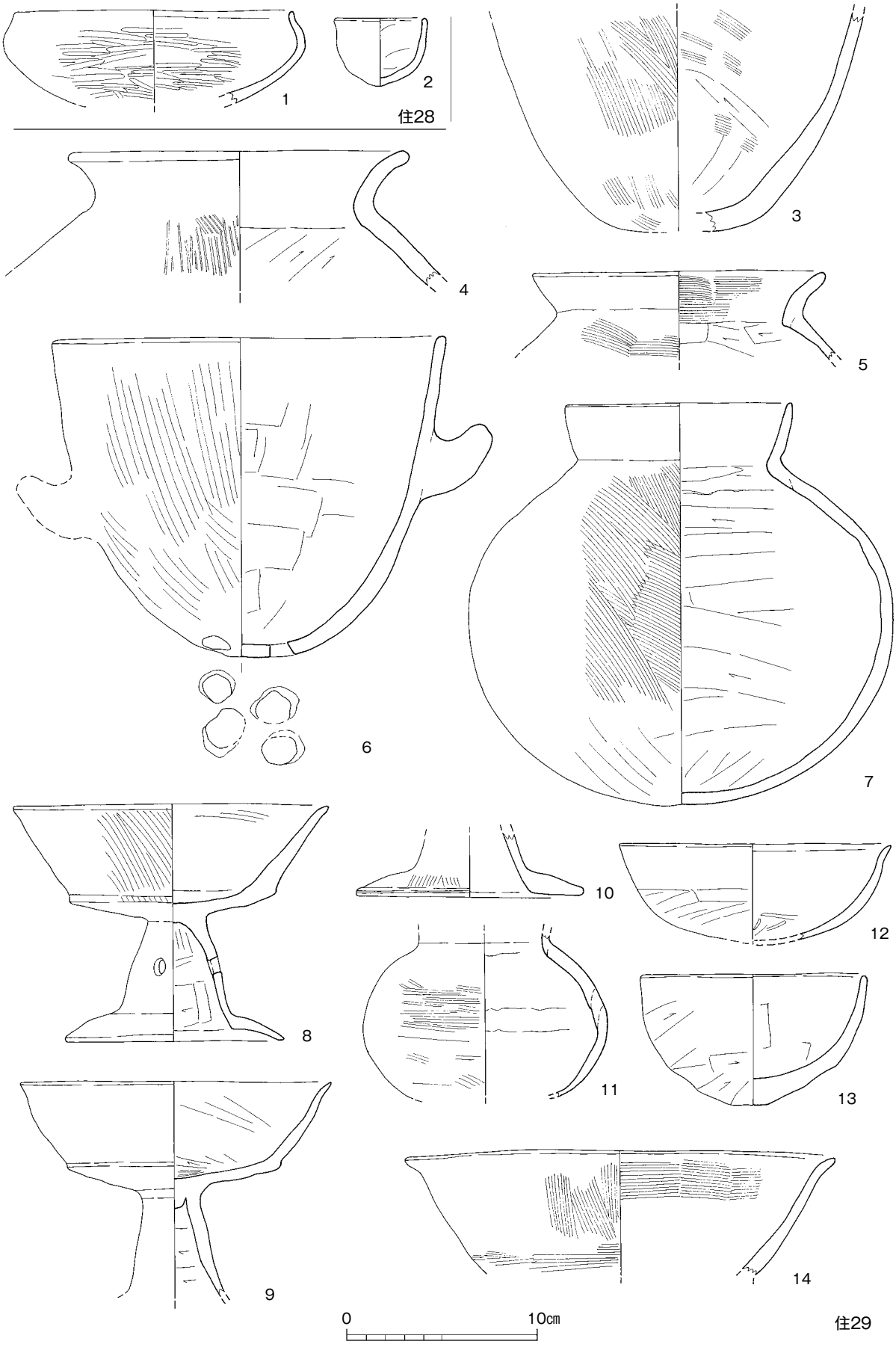
調査区北東隅で検出した。Ⅰ区・Ⅰ区補足調査範囲の境界付近にあり、27･40 号住居跡に破壊され、39 号住居跡を破壊する。主軸方位は北西－南東方向で、規模は幅のみ判明し 3.30m、長さは西壁が失われていて 2.3m ほどまでが確認できる。床面からは特に遺構は検出されない。出土遺物には図示できる資料はごく少ないが、一応 5 世紀後半の埋没と考えれば、切り合い関係上も特に矛盾なく理解できる。

出土遺物（第 48 図）

土師器（1･2） 1 は碗形土器である。底部を欠失するがおそらく丸底で、湾曲しながら斜め上方に



第 47 図　28･29･39･40 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 48 図　28・29 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

伸び、体部やや上半で強く内湾し、口縁部をわずかに外半させる。内・外面ともに丁寧なミガキ調整を施す。2はミニチュア土器の碗であろう。比較的調整痕を残さない品である。これらは主に1より5世紀後半代の資料か。

29号竪穴住居跡（第47図、図版21）

調査区北東隅で検出した。28･39･40号住居跡と切り合い、本住居跡が最も後出する。平面形態は長方形で、主軸を北東－南西にとり、北東辺は調査区外に伸びている。規模は北西－南東幅のみ判明し、中央部で4.84mをはかる。調査区内の長さは5.2mをはかる。39号住居跡との切り合い関係に悩み、南西壁の一部を誤って破壊してしまった。

床面からは複数のピットを検出しているが、主柱穴にふさわしい位置・深さにあるものは見つけられなかった。また、住居跡の中央やや北西寄りで検出した浅いピットの床面に被熱変色部分があり、炉跡とも考えられるが、住居の中央部にあるわけではなくその位置づけは確定できない。出土土器には時間的な幅があるが､切り合い関係も考慮してここでは6世紀代の遺構と考えておきたい。

出土遺物（第48図、図版54･55）

土師器（3～14） 3は長胴甕の胴～底部片である。おそらく胴部形態は長卵形になろう。内・外面ともにハケ目のちナデ調整仕上げ。4は甕の口縁部片である。如意状に外反しており、おそらく長胴甕に対応するものか。これらの資料は古墳時代後期6世紀代の資料であろう。5は球胴甕の口縁部片である。頸部がしっかりと屈曲し、口縁部は外湾しながら短く伸びる。胴部上半の調整は内面がヘラケズリ、外面がハケ目、口縁部は内面がハケ目、外面はナデ仕上げ。7も球胴の甕形土器である。やや扁平な胴部は内面がケズリ、外面はハケ目調整仕上げ。口縁部はわずかに内湾しながら伸び、内・外面ともにナデ仕上げ。6は丸底の甑である。底部～口縁部へはゆるやかに内湾しつつひろがっていく。底部には4つの孔を不整形に配する。体部調整は内面が板ナデ､外面はハケ目。これらは5世紀後半～6世紀前半に位置づけられる資料であろう。8～10は高坏である。8は全形が復元できる資料である｡坏部は平坦な底部～明瞭に屈曲してわずかに外湾しつつ口縁部にいたる。脚部は内湾しながら下方に伸び､明瞭に屈曲して外に強く開く。脚上位に径1cmほどの円孔を穿つ。おそらく3孔であろう。9は8とほぼ同様の坏部形態を持つ。脚部形状はやや異なり、わずかに外湾しながら下方に伸びるが接地部は失われており不明。10は接地部付近のみの資料で、8と同様に明瞭に屈曲する。以上の資料は5世紀後半代前後のものか。11は小形の壷形土器の胴部片である。ややつぶれた球胴で、内面には数カ所に粘土紐接合痕跡が認められる。12･13は碗形土器である。12は器壁が薄く内面に磨き痕跡が残る精製品である。口縁端部をわずかに外半させる。13は底部が厚く口径がやや小さい。外面はケズリに近い強い板状工具ナデ、内面は弱い板状工具ナデで仕上げる｡14は高坏の口縁部片か｡坏胴部の屈曲より上位が遺存するもので､全形は不明｡以上のように、本住居跡出土遺物は主体を5c代後半～6c代に持つがやや幅があり、住居跡群の切り合いを誤認している可能性も否定できない。

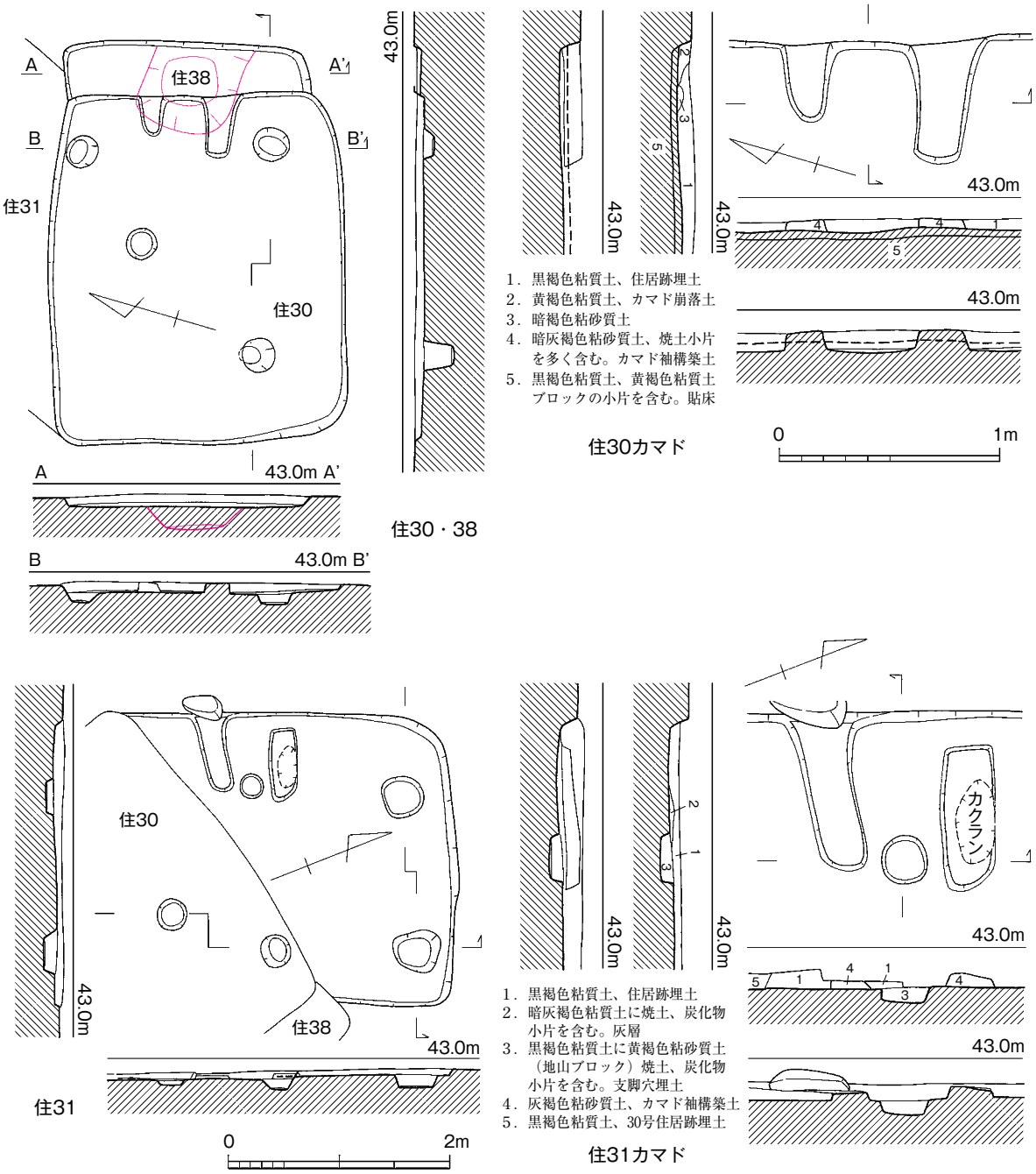
30号竪穴住居跡（第49図、図版21）

調査区の北側中央部で検出した。31･38号住居跡と切り合い関係を持ち、本住居跡が最も新しい。主軸を略東西方向に持ち、東壁の中央部に内接型のカマドを作り付ける。住居跡の規模は東西長が

3.04m、南北幅が 2.62m をはかり、やや細長い方形状を呈する小型の住居跡である。残存深さは 10cm弱できわめて浅い。床面からはいくつかの小ピットを検出したが、浅いものが多く主柱穴になるかどうかは不明である。出土土器と切り合い関係から、6 世紀中葉前後に位置づけておきたい。

カマド（第 49 図、図版 22）

東壁の中央部に内接型のカマドを付設する。袖の残存長さは、よく残る右袖で約 50cmをはかり、袖間の距離は 40cm程度をはかる。本来の残存深さは約 5 ～ 6cm程度であったが、貼床部分を掘り下げてしまったため図示した深さは 10cm弱ほどとなっている。カマドの埋土は貼床の直上にカマド構築粘土の崩落が堆積し、その上に住居跡の埋土である黒褐色粘質土が見られる。明確な灰層は見られない。また、支脚も確認できない。



第 49 図　30･31･38 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

出土遺物（第 51 図、図版 55）

土師器（1･2） 1 は壷形土器の口縁部片である。ゆるやかに外湾しつつ上方に伸び、口縁端部を平坦に処理する。器壁調整は内・外面ともにハケ目。2 は碗形土器である。やや深めの器形で体部の湾曲が強い。調整は外面がハケ目、内面はナデ。これらの土器の時期比定はこれらのみからはやや困難を伴うが、おおよそ 5 世紀後半～ 6 世紀中葉の中で収まるものとみたい。

なお、本住居跡からはほかに、第 118 図 26 に示した砥石様石製品が出土している。

31 号竪穴住居跡（第 49 図、図版 22）

調査区北の中央やや東寄り、1 号建物跡の東隣で検出した。30・38 号住居跡と切り合い関係を持ち、本住居跡が先行する。両住居跡により本住居跡の南側 1/3 ほどが破壊される。北西－南東方向に主軸を持ち、北西壁にカマドを作り付ける。南西壁が失われていて全体形状は不明だが、やや幅広の長方形状を呈するか。残存規模は主軸長が 2.54m、幅が 3.0m 以上をはかる。南西コーナー部の形状から見て、幅は 3.4m 以下の範囲に収まるものとみたい。削平が著しく残存深さは数cmときわめて浅い。主柱穴を探したがそれらしいものは見当たらず、地山のシミ状のものを 10cmほど掘り下げたが柱穴ではない。出土土器から、6 世紀前半～中葉に位置づけておきたい。

カマド（第 49 図、図版 22）

住居跡の北西壁にカマドを作り付ける。削平が著しく構造については不明瞭な部分もあり、特に右袖が住居壁に付かずＬ字状カマドの煙道口付近と同様の形状を呈するため、本カマドがＬ字状カマドなのか否かを断定することができないが、Ｌ字状カマドであれば煙道が伸びるはずの付近のカマド構築土の散布が認められないので、ここでは一応内接型のカマドと評価しておきたい。

右袖は前述のとおり壁から 15cmほど離れた箇所から、住居壁に直角に東に向かって 60cmほど伸びており、一部を撹乱によって破壊されている。左袖はややカマド内側方向を向いて斜めに伸びており、カマドの内法は幅 40cm、長さ 75cmほどをはかる。奥壁から 55cmほどのカマド中央部に小ピットがあり、おそらく支脚穴であろう。住居内におけるカマドの位置は住居跡が完存しないため不明瞭ではあるが、北西壁の中央よりやや南側によった場所に付設されており、やや新しい様相を呈する。カマドの埋土は薄い灰層が残され、カマド崩落土が多く見られないことから、埋没時に大きな破壊を受けていないものとみられる。

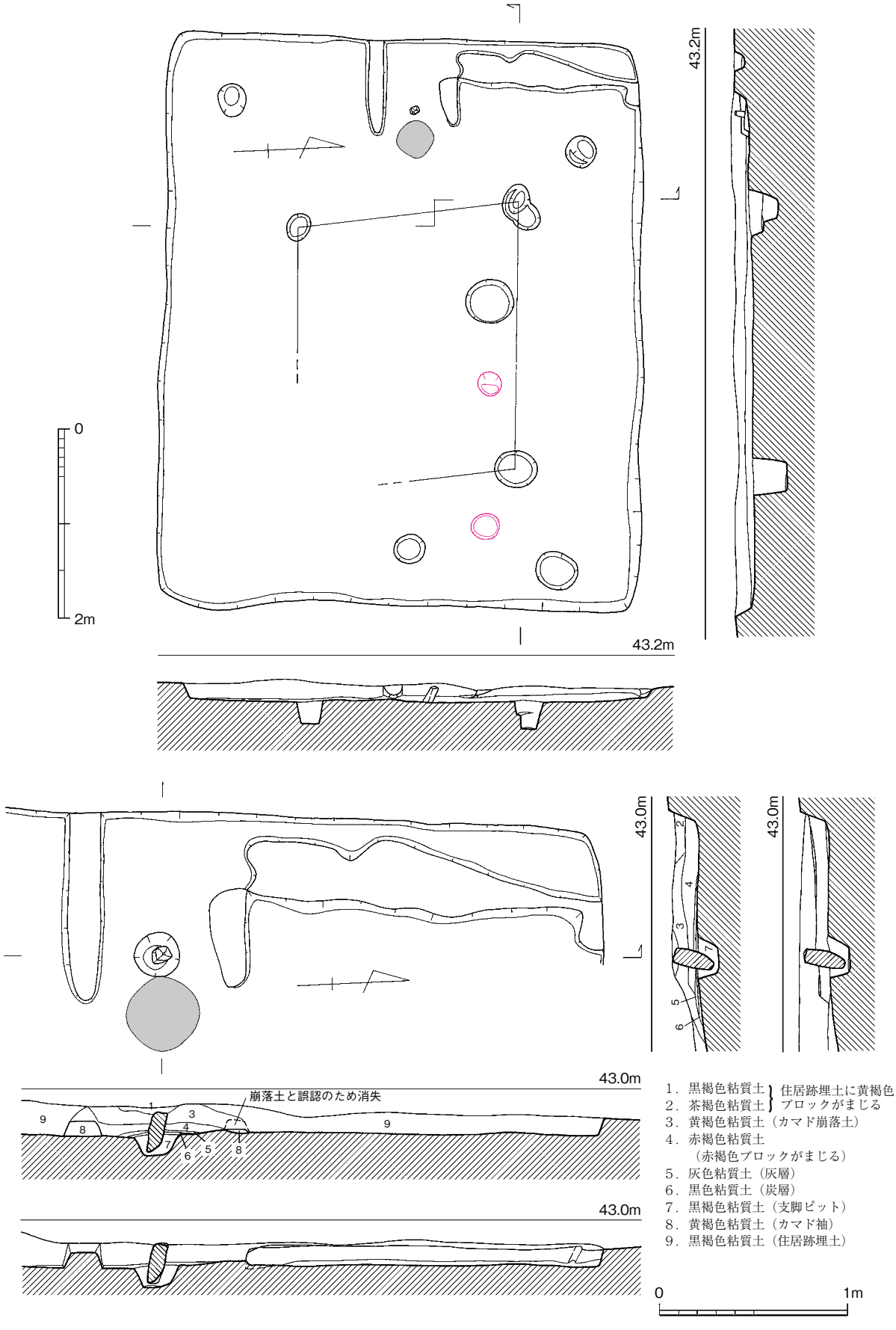
出土遺物（第 51 図、図版 55）

弥生土器（3） 1 は弥生土器の壷の底部片であろう。小さな平底から斜めに立ち上がる器形で、後期後葉に比定できる。混入品か。

土師器（4 ～ 6）4･5 は甕の口縁部片である。小片で径は復元できない。いずれも器壁が薄い。古墳時代前期のものか。6 は高坏の坏部片である。底部から斜めに立ち上がり、体部は明瞭に屈曲して口縁部は斜め上方にやや直線的に伸び、端部を外湾させる。体部屈曲部の断面に粘土帯接合痕跡が認められる。器壁調整は内・外面ともにハケ目を主体とし、内面にはミガキ仕上げを施す。6 世紀前半～中葉の資料か。

32 号竪穴住居跡（第 50 図、図版 23）

Ⅰ区北寄りのほぼ中央部で検出した。東に 1 号建物跡が、南に 6 号土坑が隣接するが、住居跡自

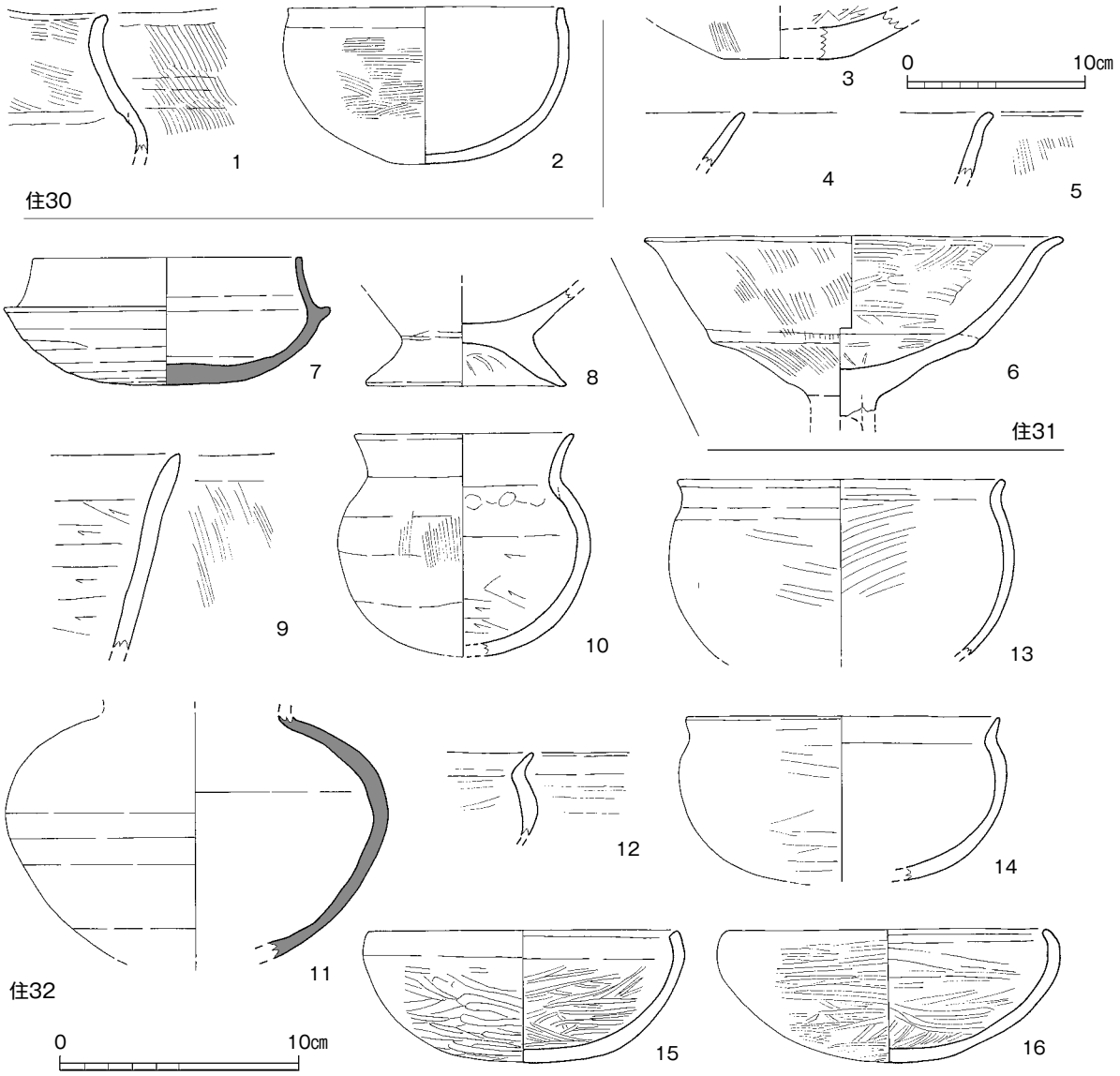


第 50 図　32 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

体は単独で存在していて他の主な遺構との切り合い関係はない。主軸方位は略東西方向で、平面形態は東西にやや長い長方形を呈し、規模は東西長が 5.94m、南北幅は 5.04m をはかる。西壁中央にL字状カマドを付設する。床面を精査した結果、深さや位置などから主柱穴と考えられるピットを3基検出した。唯一、南東側の主柱穴のみ検出できなかった。また、そのほか小ピットが数基見られた。付近の地山は小礫を多く含み、床面にはこれらの礫を覆うように薄く貼床が施され、硬化面の形成も認められた。埋土は黒褐色粘質土で、壁の残存高は 10cm内外である。出土土器から、5世紀後半～末の遺構と位置づけられよう。

カマド（第 50 図、図版 23）

西壁のほぼ中央に内接型のL字状カマドを付設する。煙道は西壁に沿って北壁まで伸びる。煙道の幅は広いところで 25cm、狭い部分で 12cm、煙道壁の幅は 35m を測る。煙道内には黒褐色粘質土が薄く堆積していた。左袖は奥壁から直角に約 1m 伸び、袖間の距離は約 60cmをはかる。袖の一部は調査時に不注意により壊してしまっているが、高さ約 10cm残存している。奥壁から 80cmほどの床面中央部に支脚石がある。支脚石は長さ 22cmほどの河原石で小ピットを穿って地中に 10cm埋め込まれ、地上部分は 12cmほどである。前面には支脚石に接して被熱により赤変した硬化面



第 51 図　30 ～ 32 号竪穴住居跡出土土器実測図（3 は 1/4、他は 1/3）

が直径約 40cmの円形状に広がっている。カマド内部は最下層に炭層、その上に薄く灰層が堆積し、崩落したカマドの土、その上に竪穴部埋土とカマド崩落土が混じるような土が堆積している。このような状況は、住居跡の廃絶に伴ってカマドを破壊することなく、住居跡とともに自然に崩れながら埋没した様相と言えるかもしれない。

出土遺物（第 51 図、図版 55）

須恵器（7･11） 7 は坏身である。底部から体部へはゆるやかに湾曲しながら続き、カエリは水平方向に突出し、カエリ基部で明瞭に屈曲して口縁部へといたる。口縁部はやや外湾しつつ内傾しながら伸び、端部は四角く収める。11 は甕の胴部片である。やや上ぶくれの形状で胴部最大径は 16.4cmをはかる。これらは 5 世紀後半～末の資料であろう。

土師器（8 ～ 10･12 ～ 16） 8 は脚付碗の脚部であろう。脚は短く広がり端部を細らせる。碗底部は丸く収める。9 は甑の口縁部片である。直線的に斜めに立ち上がっており、口縁端部は丸く収める。内面にはケズリ、外面にはハケ目調整が施される。10 は小形の甕である。胴部ははやや扁平で頸部は明瞭にくびれ、口縁部は外湾しながら短く広がる。内面下半はケズリ、上半は指ナデ、外面にはハケ目が施されたのちナデ消される。12 ～ 14 は小形の鉢形土器である。12 は口縁部片である。扁平な胴部上半と短く広がる口縁部が残る。13･14 は底部以外が復原できる資料で、胴部は扁平な半球状で頸部はややしまり、口縁部は短く外反する。器壁調整はともにヘラミガキである。15･16 は碗である。ともに丸底からゆるやかに湾曲しつつ立ち上がり口縁部直下でやや強く内湾するもので、内・外面ともに丁寧なミガキ調整を施す。底面のミガキにやや相違点があり、15 は平行方向にミガキを加えるのに対し、16 は 3 方向から直線的にミガキをかけて痕跡が三角形状をなす。これらはおおよそ 5 世紀代に収まる資料であろう。

33 号竪穴住居跡（第 52 図、図版 24）

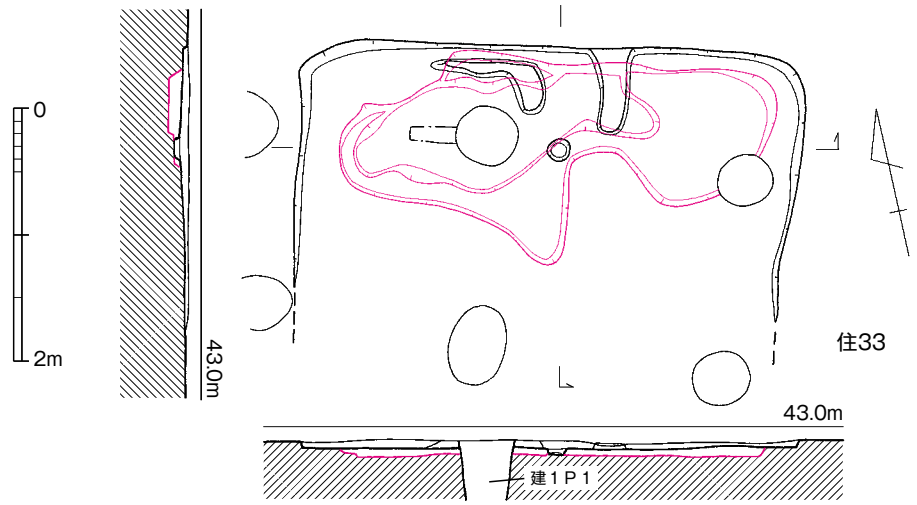
調査区の北側ほぼ中央部で検出した。1 号建物跡と切り合いを持ち、本住居跡が先行する。主軸を略南北に持ち、北壁の中央部に L 字状カマドを付設する。残存深さはきわめて浅く、南側半分ほどは削平により失われる。住居跡の規模は東西幅のみ判明し、3.88m をはかる。埋土は単層で黒褐色粘砂質土を主体とする。床面からは主柱穴と評価できるようなピットは発見できなかった。出土遺物から、5 世紀後半～末の遺構と考えておきたい。

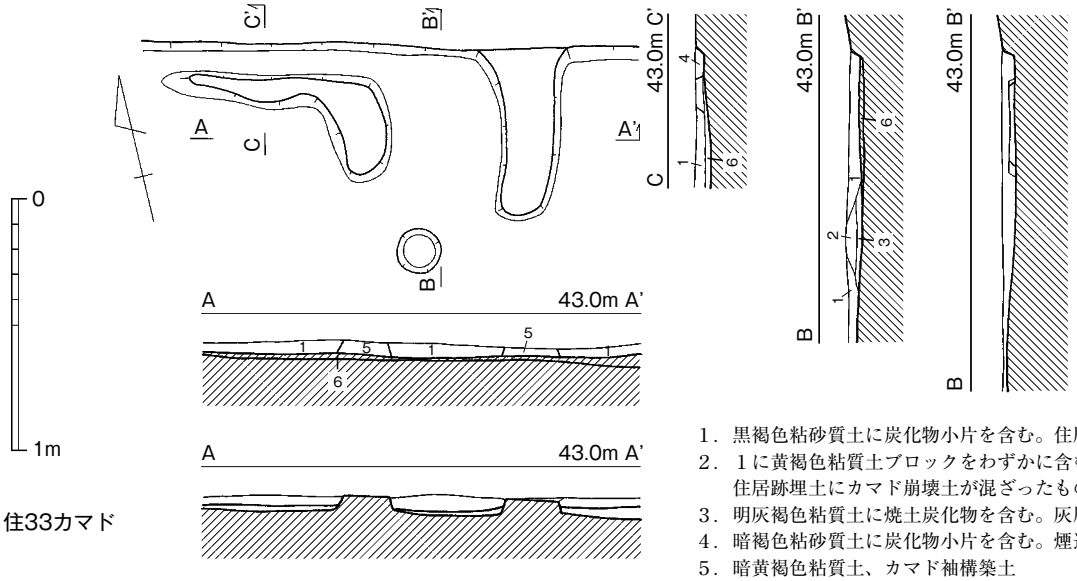
カマド（第 52 図、図版 24）

北壁の中央部に L 字状カマドを付設する。煙道は西に伸びるが途中までしか検出できなかった。袖は壁に直交して作られ、右袖はわずかに内湾するように 65cmほど伸びる。左袖は壁から 10cmほどのところで屈曲して煙道内壁となる。袖間の距離は約 40cmである。袖間のちょうど中位に、奥壁から約 80cm離れて小ピットが検出された。支脚穴とみられる。支脚穴の位置から、袖の本来の長さは 100cm程度はあったものと見られる。煙道は北壁に沿って西に伸びるが半分ほどしか残っていなかった。カマドの埋土は灰層とカマド崩落土、住居埋土が順に堆積しているが、カマド崩落土の量が少なく、カマドはほとんど破壊されることなく埋没したものとみられる。

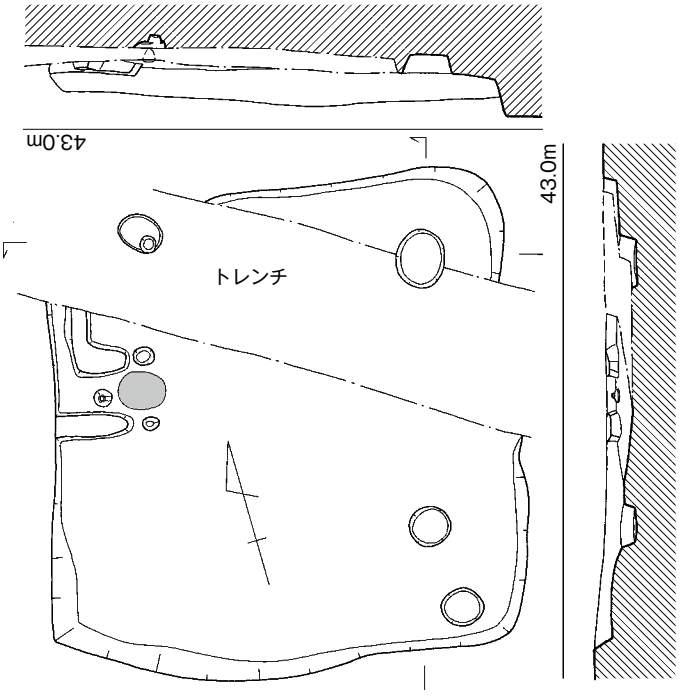
出土遺物（第 53 図、図版 43･55）

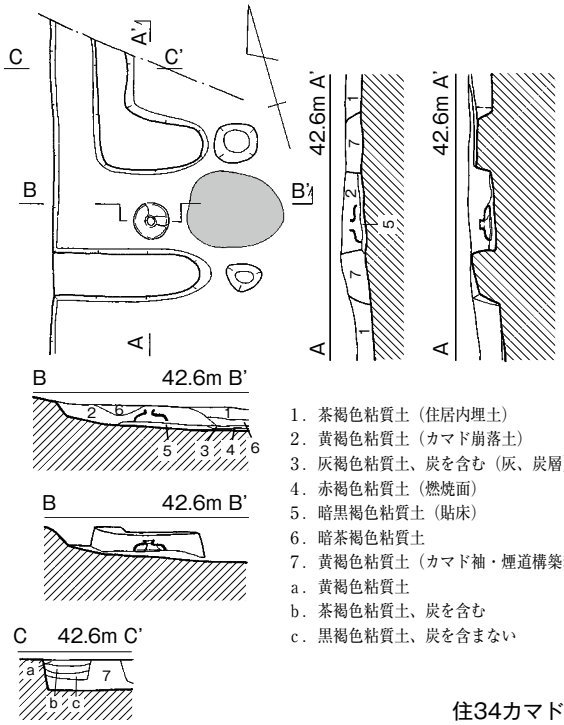
土師器（1 ～ 7） 1 は甑の口縁部片である。ゆるやかに外湾し、端部を丸く収める。器壁調整は内面がヘラケズリ、外面はハケ目。2 は小形の鉢形土器の口縁部片。扁平な胴部上半から頸部でやや





1．黒褐色粘砂質土に炭化物小片を含む。住居跡埋土
2．1に黄褐色粘質土ブロックをわずかに含む。
　住居跡埋土にカマド崩壊土が混ざったもの
3．明灰褐色粘質土に焼土炭化物を含む。灰層
4．暗褐色粘砂質土に炭化物小片を含む。煙道埋土
5．暗黄褐色粘質土、カマド袖構築土
6．地山





1．茶褐色粘質土（住居内埋土）
2．黄褐色粘質土（カマド崩落土）
3．灰褐色粘質土、炭を含む（灰、炭層）
4．赤褐色粘質土（燃焼面）
5．暗黒褐色粘質土（貼床）
6．暗茶褐色粘質土
7．黄褐色粘質土（カマド袖・煙道構築粘土）
a．黄褐色粘質土
b．茶褐色粘質土、炭を含む
c．黒褐色粘質土、炭を含まない

第 52 図　33･34 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

すぼまり、口縁部は反転して短く伸びる。3は甕の胴部上半～口縁部片。やや長胴気味の胴部内面はヘラケズリ、外面はナデ調整。頸部はやや強くすぼまり、口縁部は反転して外湾しつつ伸びる。4は甑である。底部は平底ぎみでおそらく半月形の2孔であろう。胴部下半はゆるやかに内湾し、中位に1対2個の把手を付す。口縁部はゆるやかに外湾しながら直立気味に立ち上がり、端部は四角く収める。内面にはケズリ、外面にはハケ目調整痕が良く残る。5～7は碗である。5は底部を欠失し、ゆるやかに内湾しながら口縁部へと立ち上がる。内面はナデ、外面は板状工具による強いナデ。6と7は丸底からゆるやかに立ち上がり口縁直下でやや強く内湾する。ともに、内面にヘラミガキ、外面は板状工具ナデ。以上の資料は5世紀後半～末に比定できよう。

34号竪穴住居跡（第52図、図版24）

Ⅰ区北寄りの西端で検出した住居跡である。南に19号住居跡が近接するが切り合い関係にはない。36号住居跡と切り合い関係にあり、これを破壊している。試掘調査時のトレンチにより中央部を大きく破壊されている。平面形態は略方形で主軸方位を西北西－東南東にとり、規模は南北幅3.62m、東西長は3.64mをはかる。西壁の中央にL字状カマドを付設する。床面にて精査を行ったが、主柱穴と思われるピットは検出されなかった。埋土は茶褐色粘質土で、壁の残存高は5cmである。出土土器には5世紀後半前後の資料が多く見られ、特に第53図17に示した高坏の脚部片はカマドの支脚として用いられていたもので本住居の機能していた時期の一端を示す好例である。

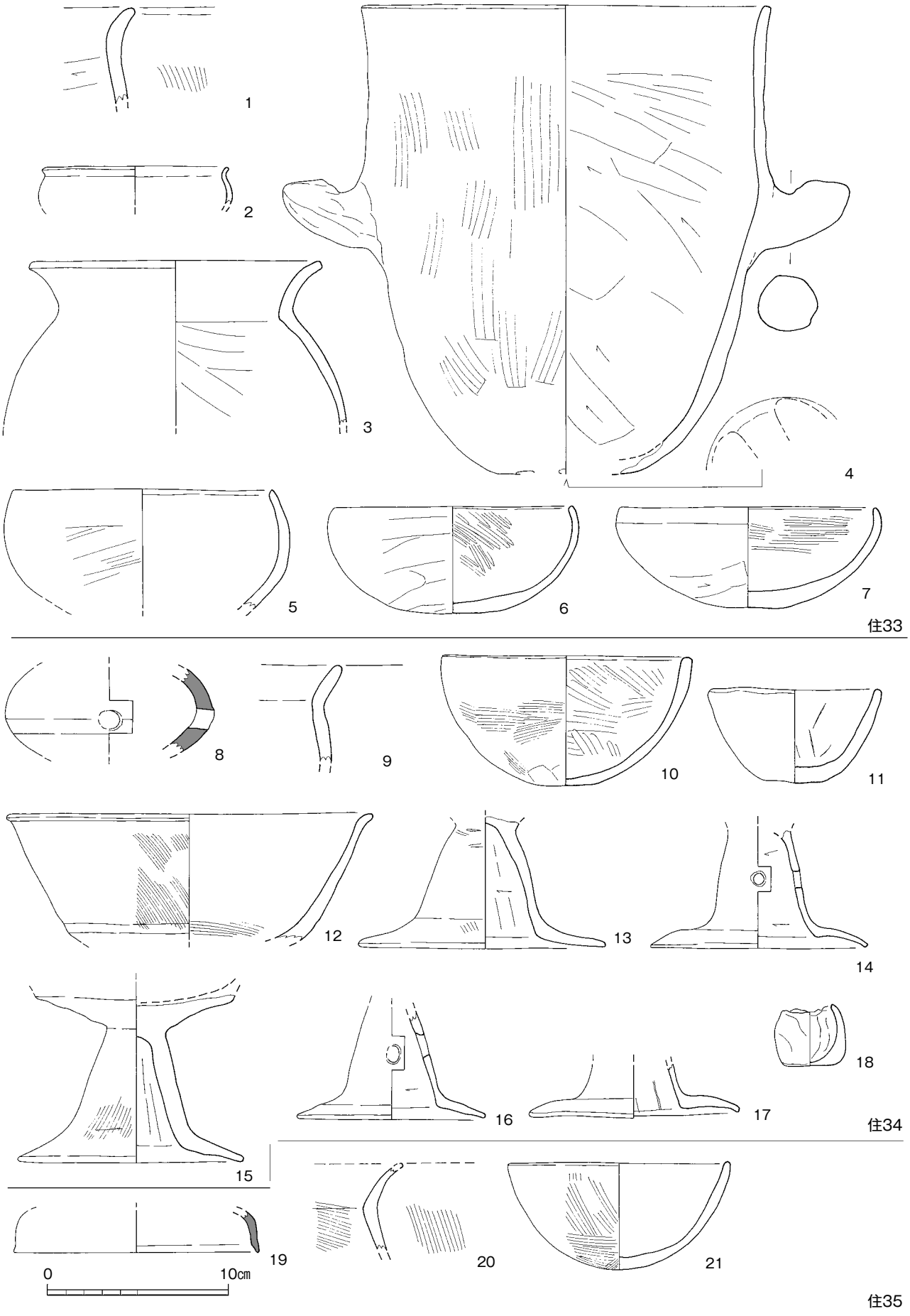
カマド（第52図、図版25）

西壁中央にL字状カマドを付設する。煙道は削平されており北壁に沿って東壁まで伸びると考えられるが、詳細は不明である。煙道および煙道壁幅は残存部分でともに20cmを測る。袖の長さは約60cm、袖間の距離は約30cmである。袖部の先端には両袖ともに袖石の抜き取り痕跡が見られる。奥壁から35cmほどのところに高坏の脚部が検出された。支脚として転用したものと考えられる。奥壁から約50cm程のところには被熱により赤変した硬化面が直径約45cm×30cmの楕円形状に広がっている。カマド内部は最下層に灰混じりの炭層、その上に崩落したカマドの土が堆積している。このような状況は、住居の廃絶に伴ってカマドを破壊しなかったか、あるいは破壊も軽いものであったと考えられる。

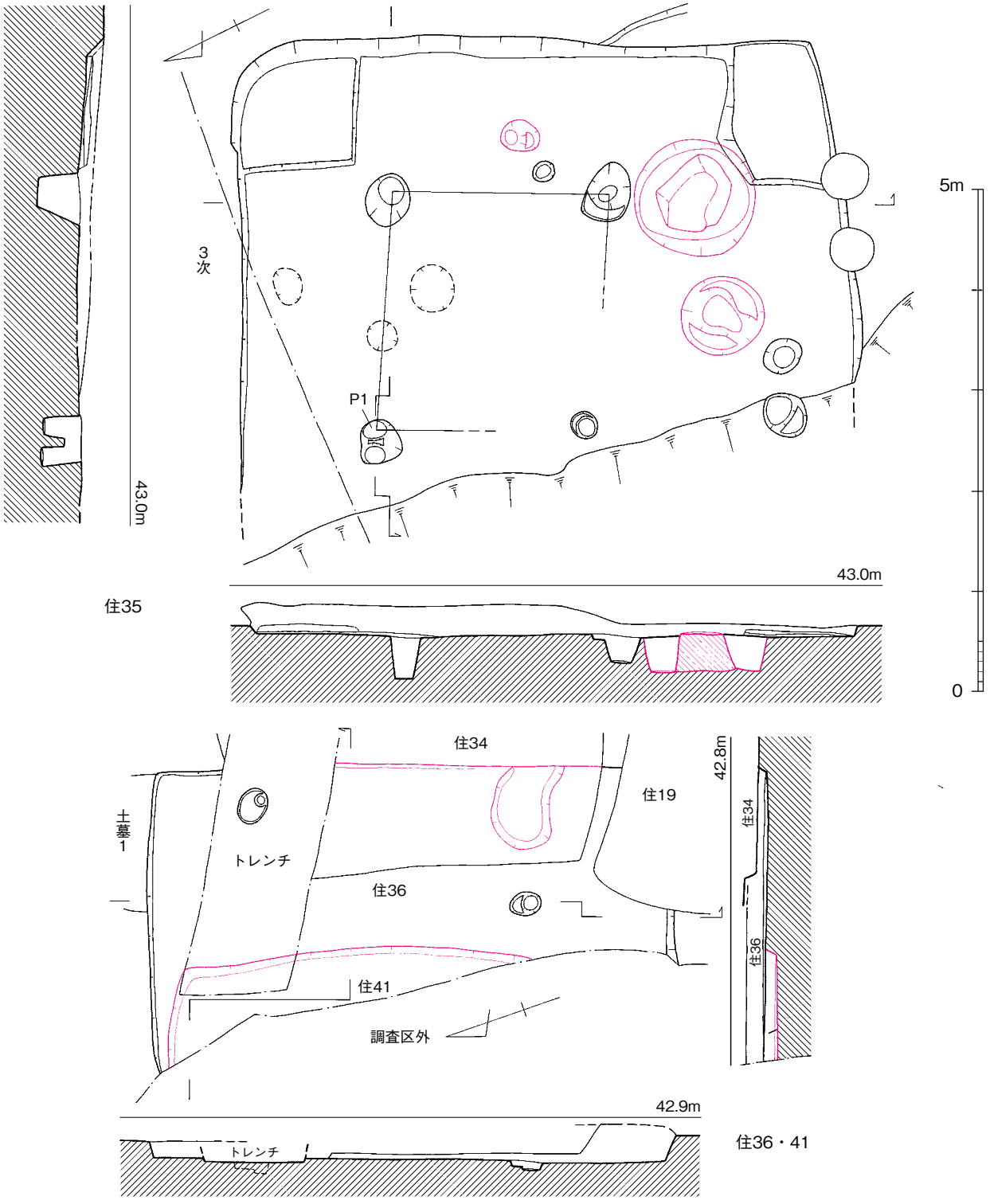
出土遺物（第53図、図版55･56）

須恵器（8） 8は瓶の胴部片である。つぶれた球胴の中位やや下に1孔を穿つ。6世紀代の資料で，小片であり混入品であろう。

土師器（9～18） 9は甕の口縁部片である。小片で径は不明。10は碗形土器である。丸底からゆるやかに湾曲して口縁部は四角く収める。やや深めの形状である。11は小形の鉢で手づくね土器であろう。12は高坏の坏部片である。底部は欠失し、体部屈曲部よりわずかに内湾しつつ立ち上がり、端部が外湾する口縁部が残る。内・外面ともにハケ目調整。13～17は同じく高坏の脚部片である。いずれも直線的あるいはわずかに内湾しながらゆるやかに広がり、下半で強く屈曲して外に急激に開く器形を持つ。14･15･17は屈曲部以下が内湾し、うち14･15は中位に穿孔を穿つ（14は推定4箇所、16は推定3箇所）。18は手づくねのミニチュア土器で碗か。これらの大半が5世紀後半代に比定できよう。



第 53 図　33 ～ 35 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第 54 図　35･36･41 号竪穴住居跡実測図（1/60）

35 号竪穴住居跡（第 54 図、図版 25）

Ⅰ区北西隅で検出した住居跡である。水田造成に伴う段落ちに遺構の西側を大きく破壊されている。平面形態はおそらく略方形とみられ、主軸方位は北北東－南南西、規模は南北長が 6.02m、東西幅は残存部分で最大 4.34m をはかる。床面からは、深さ 30 ～ 40㎝ほどの深さを持つピットを 3 基検出し、位置から考えても主柱穴の可能性が考えられる。おそらく本来は 4 本主柱だったのだろう。北、南隅にそれぞれ幅・長さともに 1m ほどの規模のベッド状遺構を有する。床面には硬化面が形成され、その下層には薄く貼床が認められた。貼床を除去したところ、内部に大きな石が埋まった直径 1m ほどのピットが出土した。おそらく、竪穴住居を掘削する際に出てきた石材が大きすぎて動かせなかったために、その下に深い穴を掘って落とし込んだものであろう。住居内埋土は黒褐色粘質土で、壁の残存高は約 40㎝である。出土遺物には大きく古墳時代前期と後期の 2 時期の遺物が見られるが、本住居跡がベッド状遺構を有することから、ここでは古墳時代前期前半の遺物を本住居跡に伴うものとして報告しておくこととしたい。

出土遺物（第 53 図）

須恵器（19） 19 は坏蓋の口縁部片である。ほぼ垂直に 2㎝ほど伸びておりわずかに外湾する。口縁部径は 13.8㎝に復元したが小片で自信はない。7 世紀前半頃の資料か。上層からの混入品であろう。

土師器（20･21） 20 は甕形土器の口縁部片である。小片で径も復元できずやや判断に苦しむが、在地系の長胴甕か。21 は碗形土器である。やや尖底気味で体部の湾曲もゆるやかである。器壁調整は内面がナデ、外面がハケ目。これらはいずれも古墳時代前期前半に属する資料であろう。

36 号竪穴住居跡（第 54 図）

Ⅰ区北寄りの西端部で検出した。東壁を 34 号住居跡に、南東コーナー部を 19 号住居跡に破壊され、41 号住居跡の上層に広がっていてこれに後出する。また、北壁で 1 号土壙墓を破壊している。東側は調査区外に広がっていて全形は不明である。規模は南北が 5.10m、東西は調査区内で検出できた範囲で 3.0m ほどを測る。遺構面からの残存深さは最も良好に残る北壁と南壁の一部で 25㎝ほどを測る。床面からは小さなピットが数基検出されたが深さがきわめて浅く本遺構に伴うものとは考えがたい。図示できる出土遺物は少ないが、古墳時代前期後半の遺構と考えたい。

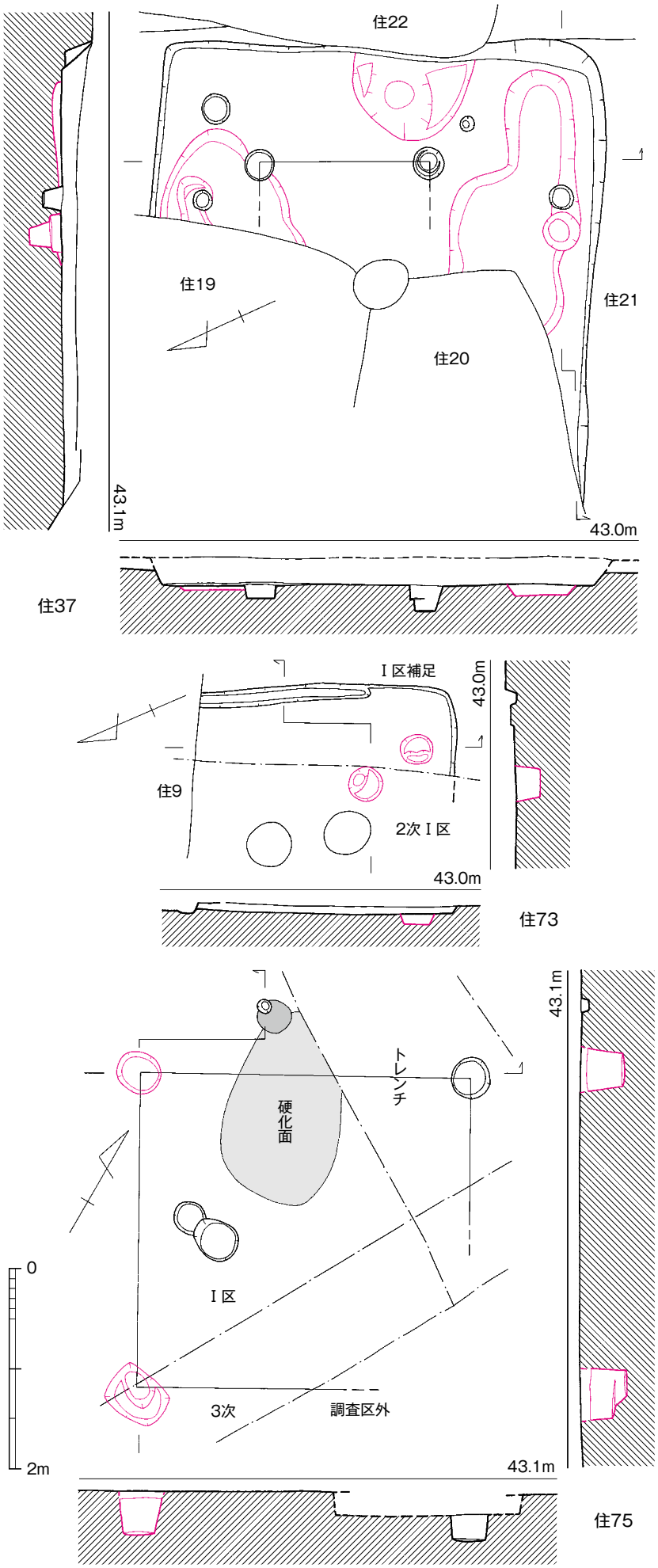
出土遺物（第 56 図）

須恵器（1） 1 は坏身の口縁部片である。小片で径・傾きには自信がない。カエリを有する坏身で口縁はごく短い。7 世紀代の資料で、混入品か。

土師器（2 ～ 4） 2 ～ 4 は土師器である。2 は大型の二重口縁壺の口縁部片である。屈曲部は外にしっかりと突き出し、口縁はわずかに内湾しながらほぼ垂直に上方に伸びる。3 は在地系の長胴甕の口縁部片か。断面ほぼ中位に粘土帯の接合痕跡が認められる。4 は器台の上半部である。口縁部に向かって強く開く。これらはいずれも古墳時代前期の資料である。

37 号竪穴住居跡（第 55 図）

調査区の中央やや北寄りの西側で検出した。21 号住居跡と大きく重複してこれを破壊しているほか、19･20･22 号住居跡によって切られている。21 号住居跡の中にすっぽりと入っており、検出当初は本住居跡に気づかなかったが、21 号住居跡を半分ほど掘り下げた段階で本住居跡の切り合



第 55 図　37·73·75 号竪穴住居跡実測図（1/60）

いに気づいたものであり、その時点ですでに本住居跡の壁の一部は失われてしまっていた。残存している壁の高さは15cm弱だが本来の残存深さは25cm程度と見られる。また、西側半分を19･20号住居跡によって破壊されてほぼ完全に失われている。主軸方位は北西－南東で、規模は北西－南東軸が4.2m以上､北東－南西軸は4.32mをはかる｡床面からはいくつかの小ピットがみつかっており、そのうち2つを主柱穴の候補として示したが、位置がやや偏っていて疑問は残る。また、床下掘り込みを3つ図示したが、そのうち南東壁の中央部に接する1つはおそらく壁際土坑であろう。床面には広く硬化面が認められたがこの付近のみ硬化面が確認できず、おそらく本来硬化面上から掘り込まれていたものとみられる。出土遺物から古墳時代前期に属する遺構と考えられ、切り合い関係からも整合的である。

出土遺物（第56図）

土師器（5～7） 5は在地系の長胴甕の口縁部片であろう。胴部上半の膨らみがやや乏しい。6は碗である。尖底気味で径は小さい。7は脚付鉢あるいは碗の脚部であろう。末広がりに広がる脚部が残存する。器壁は比較的薄い。以上の資料は古墳時代前期に属するものである。

38号竪穴住居跡（第49図）

調査区の北側やや東寄りで確認した。30号住居跡に大きく破壊され、また31号住居跡を一部破壊している。主軸は30号住居跡と同じく略東西方向にとり､平面形は不明で幅のみ判明し､約2.10mをはかる。東壁の中央部に壁際土坑が確認できるが、検出面は床下層であり本住居跡に伴うものかどうかやや自信がない。残存深さはきわめて浅く数cmほどしかない。出土土器から、古墳時代前期に属する遺構であろう。

出土遺物（第56図）

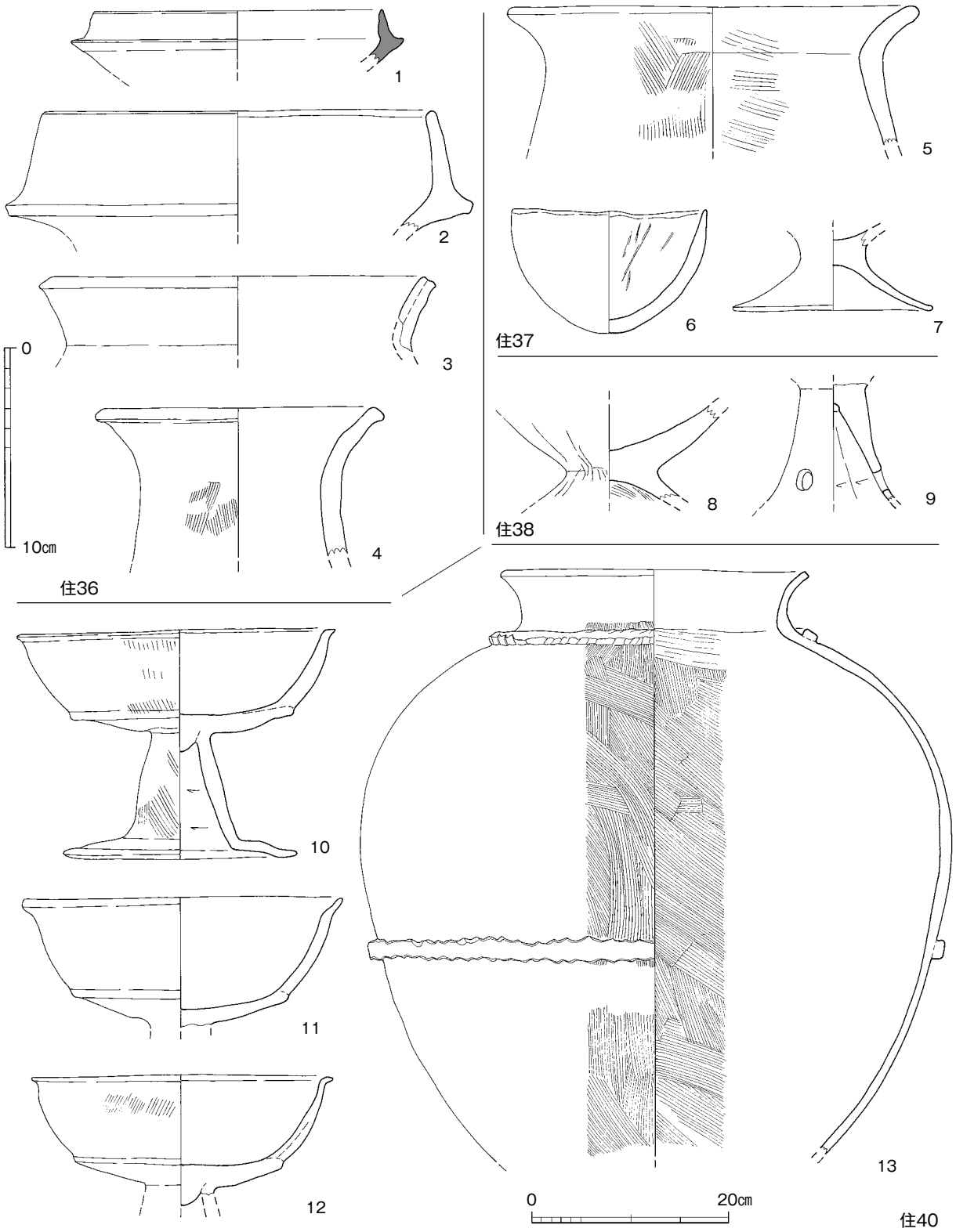
土師器（8･9） 8は脚付器種の底部である。底部の厚さからみて比較的大型の器種と考えられ、甕であろうか。9は高坏の脚部片である。下方に向かって外反しながら開き、穿孔を有する。以上の資料は古墳時代前期のものとみられる。

39号竪穴住居跡（第47図）

調査区北側の東端で多くの住居跡が切り合ううちの一つである。西側の半分ほどがⅠ区の、東側の半分ほどがⅠ区補足調査の範囲で確認された。Ⅰ区の調査時に、27～29･40号住居跡のすべてに切られる最も下層の住居跡として検出したが、住居跡が著しく重複している範囲で、やや自信がなかった。その後Ⅰ区の補足調査時に、Ⅰ区で線引きしたものにほぼ対応する場所に住居の断片が現れたため、これを一体の住居跡として報告するものである。本住居跡は切り合い関係の最下層にあって大半をほかの住居跡によって破壊されているため全容はつかみがたいが、主軸を北西－南東にとる略方形の住居跡で、一辺の長さのみ判明し4.36mの規模を持つと考えられる。残存深さはきわめて浅く深い箇所でも10cm弱しか残されていない。床面からは主柱穴となり得るピットは検出できなかった。出土土器には土師器がビニール袋1袋ほどあるが、図示できるものはない。切り合い関係から、古墳時代前期の遺構と考えておきたい。

40 号竪穴住居跡（第 47 図、図版 20）

調査区北側の東端で検出した。27 ～ 29･39 号住居跡と切り合い関係を持ち、27･29 号住居跡に破壊され、28･39 号住居跡を切る。Ⅰ区の調査時にこの付近はちょうど調査区境界部に当たり、付近には遺構埋土と思われる暗褐色土が広がっていた。このため、幾度となく検出を繰り返してようやく図示したような形で住居跡を検出した。しかしその後、Ⅰ区補足調査で東側において遺構検出を行うと、Ⅰ区で 40 号住居跡とした遺構の広がりをどうしても確認することができなかった。Ⅰ区



第 56 図　36 ～ 38･40 号竪穴住居跡出土土器実測図（13 は 1/6、他は 1/3）

の調査時には遺構面をやや深く設定しており、その結果を踏まえてⅠ区補足調査では遺構面を数㎝高く設定することができたので、Ⅰ区補足調査のみ削平により検出できないということは考えがたい。従って、本住居跡は誤認である可能性があるが、ほかの遺構との関係から、報告を省略することができず、念のためここで報告しておく。

方位は略南北方向を向き、規模は残存する範囲で南北が 3.5m、東西方向が 1.8m ほどをはかる。遺構の深さは約 10㎝と比較的深く、床面レベルは 28･39 号住居跡の床面レベルと共通する。床面からはピット等の遺構は検出できなかった。出土遺物はいずれも古墳時代前期の資料である。28 号住居跡との切り合い関係に矛盾が生じるが、上記の通り本住居跡については検出時にやや問題があったと考えており、切り合い関係が逆であった（本住居跡が 28 号住居跡よりも古い）可能性が高い。以上から、ここでは一応古墳時代前期の竪穴住居跡であったとしておきたい。

出土遺物（第 56 図、図版 56）

土師器（10 ～ 13） 10 ～ 12 は高坏である。10 はほぼ完形に復原できたものである。坏部は底面がやや湾曲し、底部と口縁部は粘土帯接合により形成されるため破断面に接合面が看取できる。接合部外側には明瞭な段が形成される。口縁部はゆるやかに内湾しながら斜め上方に伸び、端部は短く外半させる。脚は直線的に開き、接地部直前で外に屈曲して水平に伸びる。11･12 は坏部片であるが、おおよそ 10 と同様の形状を呈する。器壁調整は 12 の内面にミガキ痕跡が認められる他はハケ目のちナデ仕上げである。13 は大型の短頸壷である。胴部はやや上ぶくれの球形で底部は欠失する。胴部中程やや下寄りと頸部に上下端を波状に仕上げた太い断面台形の突帯をそれぞれ 1 条配する。頸部は強くくびれ、口縁部は強く外湾しながら短く外に開く。器壁調整は胴部が内・外面ともにハケ目、口縁部はナデ。これらはいずれも古墳時代前期の資料である。

41 号竪穴住居跡（第 54 図）

Ⅰ区北寄りの西端部で検出した住居跡である。36 号住居跡の下層に広がっていて、これよりも古い。東側の大半が調査区外に広がっており、調査区内においては北西コーナー部付近が確認できたのみである。主軸方位が 36 号住居跡と一致しており、36 号住居跡の一部を構成する（ベッド状遺構の下段の）可能性も考えたが、北側の検出ラインが 36 号住居跡の壁から 20㎝ほどの位置にあるためやや整合的ではなく、ここでは下層遺構として報告する。検出状況での規模は、最大で南北 3.4m ×東西 1.1m ほどを測り、残存深さは 10 ～ 15㎝ほどである。床面から特に報告すべき遺構は検出されていない。出土遺物には土師器の小片が数点あるのみで、出土遺物から時期を判断することはできない。他遺構との切り合い関係から、36 号住居跡に先行し、古墳時代前期の遺構と考えておきたい。

73 号竪穴住居跡（第 55 図）

調査区中央部の西端で確認した。Ⅰ区西側の補足調査範囲で出土した。9 号住居跡と切り合いを持ち、これに大半を破壊される。本住居跡は残存深さが 5㎝前後と非常に浅い。Ⅰ区の表土剥ぎ時には、遺構面をやや深めに設定したために、本住居跡はおそらく失われたものとみられる。Ⅰ区補足調査時には、Ⅰ区の調査成果に基づき表土剥ぎ時の遺構面をやや高めに設定したため、かろうじて本住居跡を検出することができたもので、住居のごく一部のみを調査したに過ぎない。主軸方位

は南北でやや傾きをもち、残存大きさは 2.6m × 0.8m である。東壁の一部に周壁溝が見られるほか、床面・下層からいくつかのピットが検出されている。主柱穴かどうかは不明である。出土土器は土師器の小片がビニール袋 1 袋ほどあるが、図示できる資料はない。ただし、5 世紀後半～ 6 世紀代に属するとみられる甕の口縁部などが含まれ、9 号住居跡に先行し、これとほとんど差がない時期の遺構と考えたい。

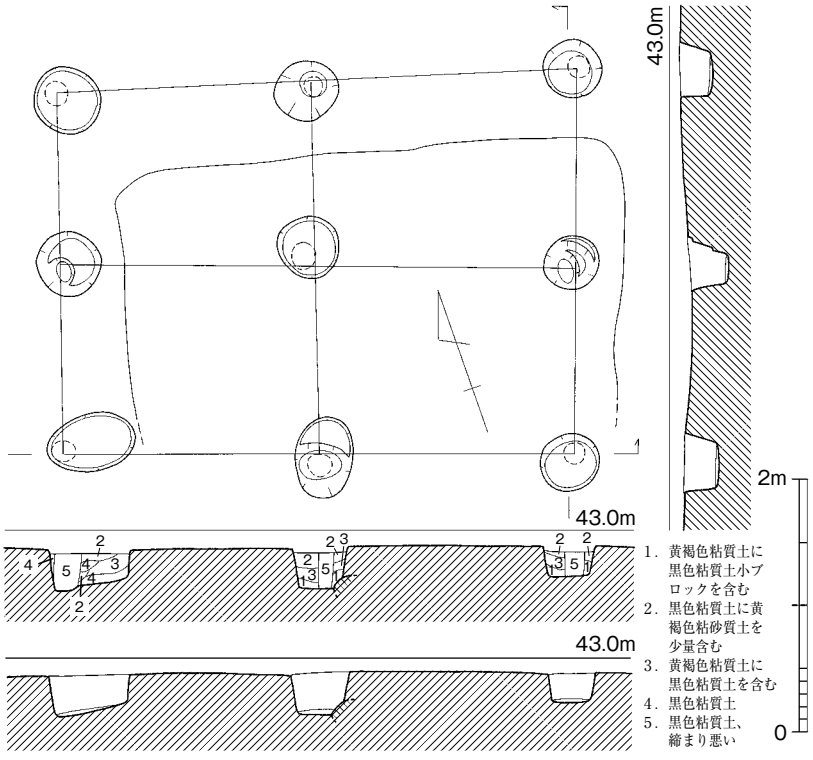
75 号竪穴住居跡（第 55 図）

調査区北寄りの東端で検出した住居跡である。付近には遺構検出面に竪穴住居床面にしばしば認められる硬化面が不整形に広がっており、また被熱硬化面を伴う小ピット（支脚穴と考えられる）が存在したことから、付近にカマドを伴う竪穴住居跡が存在した可能性が高いとみて、硬化面とその周囲を掘り下げたところ、一段下げた段階で 2 基のピットを確認した。また、試掘トレンチ内（遺構面より 20㎝ほど掘り下げている）の底面からの 1 基のピットを検出し、これら 3 基のピット群と被熱硬化面を伴う小ピット・不整形の硬化面の位置関係から、ここに竪穴住居跡を想定するにいたったものである。南東の主柱穴は調査区外に位置するとみられ検出できなかった。住居跡の規模は、主柱穴間の距離が芯－芯で 3.1 ～ 3.3m であること、支脚穴の位置から、一辺 6m 前後の方形の竪穴住居跡と推測される。出土遺物はなく、時期は不明だが、カマドを有することから 5 世紀後半以降の住居跡であろう。

（3）掘立柱建物跡

1 号掘立柱建物跡（第 57 図、図版 25）

Ⅰ区北側の中央部で検出した。33 号住居跡と重複し、これに後出する。2 間× 2 間の総柱建物で、東西方向にやや細長く、これを桁行として報告する。建物の規模であるが、桁行長は南側柱筋



第 57 図　1 号掘立柱建物跡実測図（1/60）

が 4.6m、北側が 5.2m をはかる。柱間距離は 2.02 ～ 2.08m をはかる。梁行長は東側が 3.06m、西側が 2.88m をはかり、柱間距離は 1.40 ～ 1.58m である。柱穴の土層には柱痕が明瞭に残されていた。各柱穴からそれぞれ少量の土師器・須恵器小片が出土しており、うち 4 点を図示する。これらの出土遺物から本遺構は 6 世紀前半代の遺構と考えられよう。

出土遺物（第 60 図）

須恵器（1･2） 1･2 は須恵器の坏蓋である。いずれも口縁部付近の小片で､2 は径を復元できなかった。1 は口縁端部をやや肥厚させ、肩にかけてゆるやかに湾曲するもので、肩部に一条の沈線を巡らせる。2 は口縁部を鋭くとがらせつつ外に開くもので､やはり肩部に 1 条の沈線が巡る。ともに、器壁調整は内・外面ともにナデ。

土師器（3･4） 3 は小形の鉢形土器である。底部は欠失する。器壁表面に成形時の指ナデ痕跡が残り、手づくね感がある。胴部はつぶれた半球形で、口縁部はわずかに外に引き伸ばすが、口縁部形状は場所によってかなり変化があり､引き伸ばした端部がつぶれて肥厚した状態になる部分もある。4 は碗の口縁部片である。底部は欠失する。口縁部はゆるやかに内湾しつつ強く広がる。

以上の資料はおおよそ 6 世紀代前半に比定できよう。

（4）土坑

1 号土坑（第 58 図、図版 26）

Ⅰ区南東よりで検出した。2 号住居跡と切り合い、これに後出する。平面形状はややゆがんだ長楕円形で、底部は平坦、壁はやや斜めに立ち上がる。規模は長径が約 1.3m、短径が 1.0m ほどをはかり､残存深さは 15㎝ほどである。埋土は黒褐色粘砂質土を主体とし､レンズ状堆積の様相を示す。出土遺物は土師器の小片がビニール袋 1 袋分あり、うち甕の小片を 2 点示す。これらと他遺構との切り合い関係から、古墳時代前期の遺構と考えられよう。

出土遺物（第 60 図）

土師器（5･6） 5･6 はいずれも布留式古段階の甕の口縁部片である。頸部は鋭く屈曲し、口縁部は直線的に開き、口縁部をわずかに内湾させるか内・外面に強いナデを施して凹凸を形成する。口縁端部は四角く収める。古墳時代前期前半の資料である。

2 号土坑（第 58 図、図版 26）

Ⅰ区南西寄りで検出した。3 号土坑の東に並んで位置する。付近は基盤層である黄～白褐色砂礫土が遺構面に露出しており、本土坑はかなり著しく削平を受けているものと推測される。土坑は不整形をしているが底部付近のみが残されたものと考えられ、本来の形状は不明である。底部形状は不規則な形だが、基盤層に含まれる礫の影響もあり本来図示したような形状であったかは不明である。規模は長軸 1.6m、短軸 1.4m をはかり、残存深さは 15㎝ほどときわめて浅い。埋土は褐色粘砂質土の単層で下層ほど砂質分が強い。出土遺物としては小さなビニール袋 1 袋分の土師器の小片があるが、図示に耐えるものや時期を判断できるものはなく、本遺構の所属時期は不明。

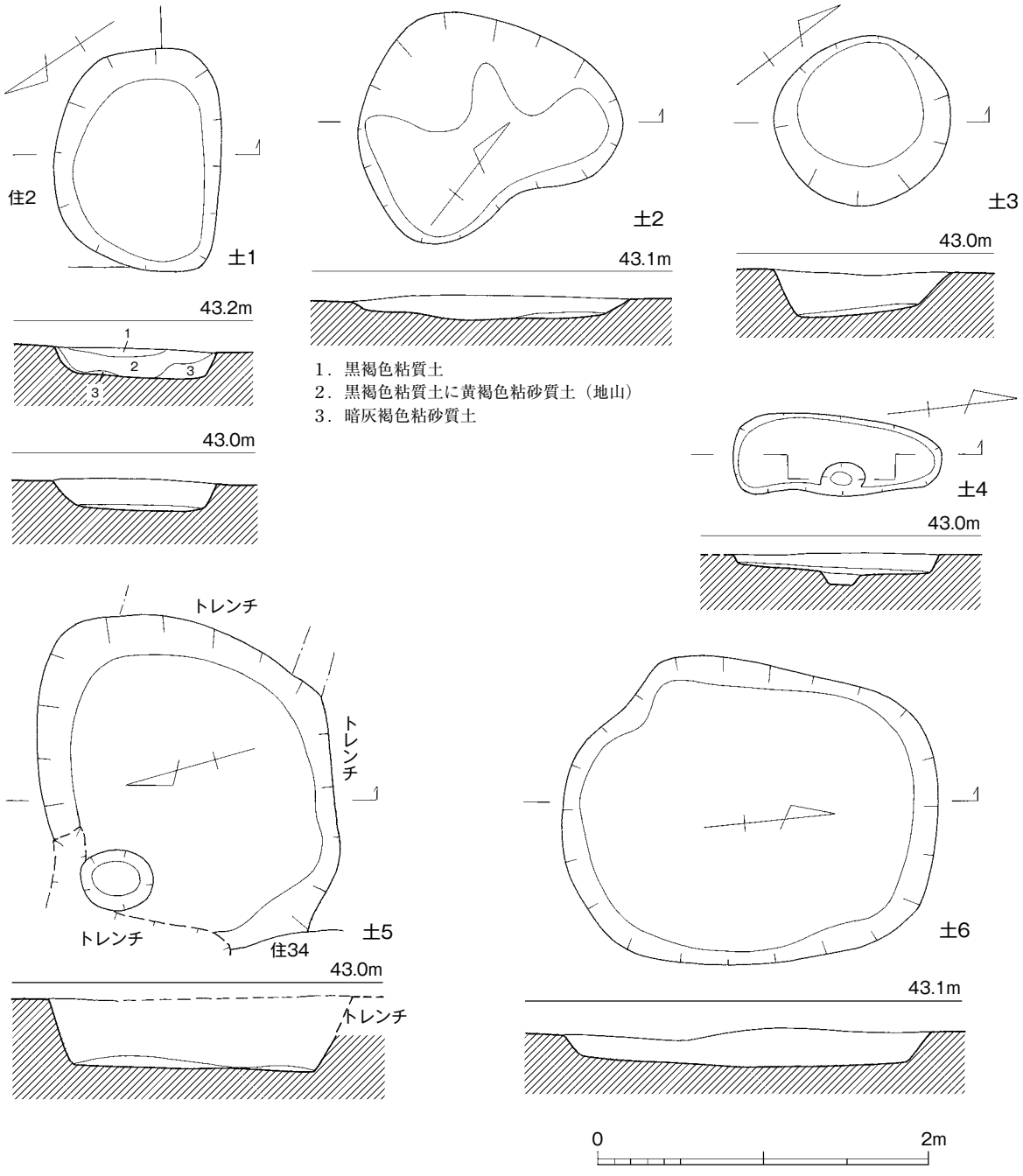
3 号土坑（第 58 図、図版 26）

Ⅰ区南西寄りで 2 号土坑の西に並んで位置する土坑である。砂礫土からなる基盤層に掘り込まれ

ているが比較的形状はしっかりしており、平面形状は略円形で直径 1.1m ほど、深さは 25㎝ほどが残り底面は平坦である。埋土は暗褐色粘砂質土の単層である。出土遺物はなく、時期は不明。

4 号土坑（第 58 図、図版 27）

Ⅰ区北寄りで検出した。5･6 号土坑の間に挟まれて並ぶ。平面形状は不整長楕円形で規模は長軸が 1.25m、幅は 0.45m ほどをはかり、深さは 15㎝ほどが残る。埋土は暗褐色粘質土の単層である。出土遺物としては土師器片が 1 点あるのみで、所属時期は不明である。



第 58 図　1 ～ 6 号土坑実測図（1/40）

5 号土坑（第 58 図、図版 27）

Ⅰ区北西よりで検出した。34 号住居跡と切り合い関係にあり、本土坑が後出する。中心部を試掘トレンチにより大きく破壊されて、旧状をとどめる部分は少ないが、残存部分から推測すると平面形状は不整隅丸方形で規模は一辺約 1.6m ほどをはかり、底面は平坦で壁は直立に近く深さは 40 cmほどが残存している。埋土は黒褐色粘砂質土で均質であった。出土遺物にはビニール袋 1 袋ほどの土師器片があり、うち 3 点を図化した。これらの遺物と切り合い関係を合わせて考えると、本遺構は古墳時代前期後半に属するものと考えられる。

出土遺物（第 60 図）

土師器（7 ～ 9） 7 は短頸壷の口縁部片か。胴部は欠失する。口縁部は強く広がりながら短く伸び、口縁端部を四角く収める。口縁部外面下半にハケ目調整痕が残る。8 は小形の壷の口縁部片である。ややいびつな形状で手づくね感がある。胴部下半以下は欠失する。頸部はやや強くくびれて肥厚する。口縁部はごく短く、強く外湾しながら開く。9 は碗である。底部は欠失し、やや強く内湾しつつ上方に立ち上がる口縁部が残る。これらの資料はやや時期の決め手に欠けるが古墳時代前期に収まるものか。

6 号土坑（第 58 図、図版 27）

Ⅰ区北寄りで検出した。4 号土坑の東側に並ぶ。平面形状は不整長楕円形を呈し、規模はやや大きく長軸 2.2m、短軸 1.9m ほどをはかる。底面は平坦で壁はやや斜めに立ち上がり、埋土は暗褐色粘砂質土の単層からなる。出土土器は大きなビニール袋に 1 袋ほどありいずれも土師器片であった。いずれも小片であったがうち 7 点を図示した。これらより、本遺構は古墳時代前期後半に位置づけられよう。

出土遺物（第 60 図）

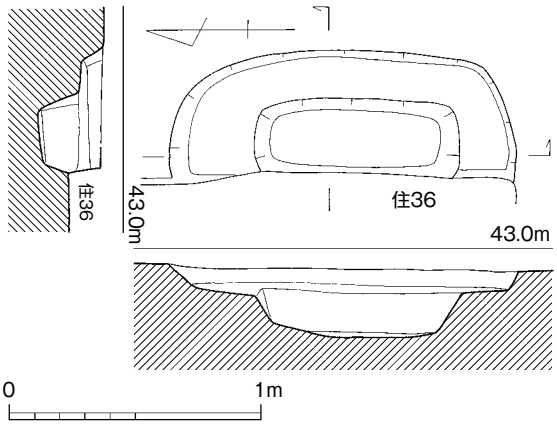
弥生土器（10） 10 は平底の甕または壷の底部片である。やや古い形状で、混入品か。

土師器（11 ～ 16） 11･12 は布留式の甕の口縁部片である。いずれも頸部屈曲部より上が残る。頸部は強く開きつつ短く伸び、口縁部中位で屈曲してさらに外に開く。端部付近上面に強いナデを施し、わずかに内湾させる。13 は高坏の脚部片である。脚端部・上部を欠失しており、脚中位の屈曲部のみ残る。14 ～ 16 は碗である。14 は器壁がごく薄い資料で、口縁端部で強く内湾する。15 は器壁が特に厚い資料で、丸底からやや強く内湾しつつ立ち上がり、口縁端部を短く外反させる。16 はわずかに内湾しながら上方に立ち上がる口縁部のみが残る資料である。これらの資料はおおよそ古墳時代前期後半に比定できよう。

（5）土壙墓

1 号土壙墓（第 59 図、図版 28）

Ⅰ区北西寄りで検出した。36 号住居跡と切り合い関係にあり、これに南壁を破壊されている。平面形態は隅丸長方形で、２段掘りとなっていて、規模は長軸が 2.6m をはかる。出土遺物としては、土師器の



第 59 図　1 号土壙墓実測図（1/40）

小片がビニール袋2袋ほど出土し、うち2点を図示した。また、床面直上に堆積した埋土中から粉状のベンガラが出土した。本遺構に後出することが明らかな36号住居跡は古墳時代前期後半に属すると考えられ、本遺構はこれより古い時期のものであることが明らかである。出土遺物からは弥生時代後期～古墳時代前期の枠内と判断できるが、付近では最も古い遺構が古墳時代前期初頭～前半の12･35号住居跡、1号溝であることから、本土壙墓はこれらと36号住居跡の属する前期後半の時間幅の中で理解すべきであろう。

出土遺物（第60図）

土師器（17･18） 17は高坏の口縁部片であろう。体部屈曲部が外面にわずかに観察される。口縁部は緩やかに外湾しながら広がり、端部を四角く収める。18は甕の口縁端部片であろう。わずかに外湾しながら強く開き、口縁端部を肥厚させて四角く収める。以上の資料は古墳時代前期の中に位置づけられよう。

（6）溝

1号溝（第6図、図版4）

調査区の西側をSX－02（谷状落ち部）に沿って略南北方向に伸びる溝である。幅は広いところで2m弱、平均的な箇所ではおおよそ80㎝前後、深さは比較的浅く深いところでも30㎝程度、断面形状は地山の状況によりやや異なり、地山に堅固な砂礫層が露出している調査区南部では深く掘り避けることが難しいために浅い逆台形状を呈し、北側で地山が比較的柔らかい粘砂質土からなる部分ではV字状を呈する。湧水が著しく土層の検討を詳細に行うことはできなかったが、埋土は黒褐色粘砂質土で単層からなるものと思われる。調査区内での全長は35mほどをはかるが、おそらく谷状遺構に並行して伸びて集落の東側を画するのであろう。出土土器から古墳時代前期の遺構と考えられる。

出土遺物（第60図、図版56）

弥生土器(19) 19は平底長胴甕の胴部下半片である。底部は小さな平底で、底胴部境のくびれはなく、器壁調整は内・外面ともにハケ目である。

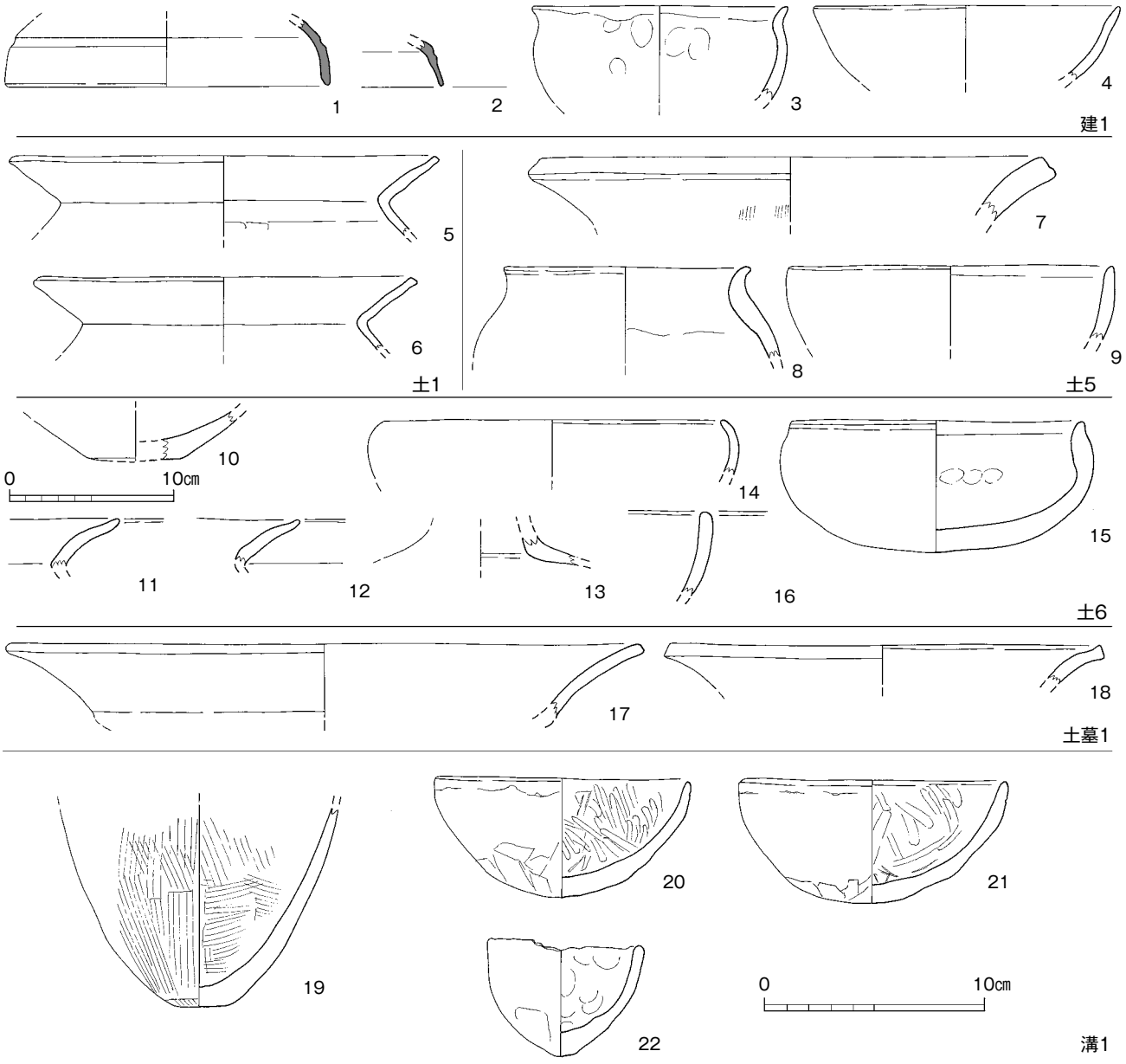
土師器（20～22） 20･21は碗である。いずれもやや尖底気味の丸底からやや直線的に立ち上がって口縁部へといたる器形を持つ。器壁はやや厚い。調整は内面にヘラミガキ痕跡がみられ、外面は底面付近が強い板ナデ、口縁部はナデ仕上げ。22は手づくねの鉢形土器である。尖底で、やや器高が高い。これらの資料はいずれも古墳時代前期の早い段階に位置づけられよう。

なお、本遺構中からは第118図27に示した砥石も出土している。合わせて参照されたい。

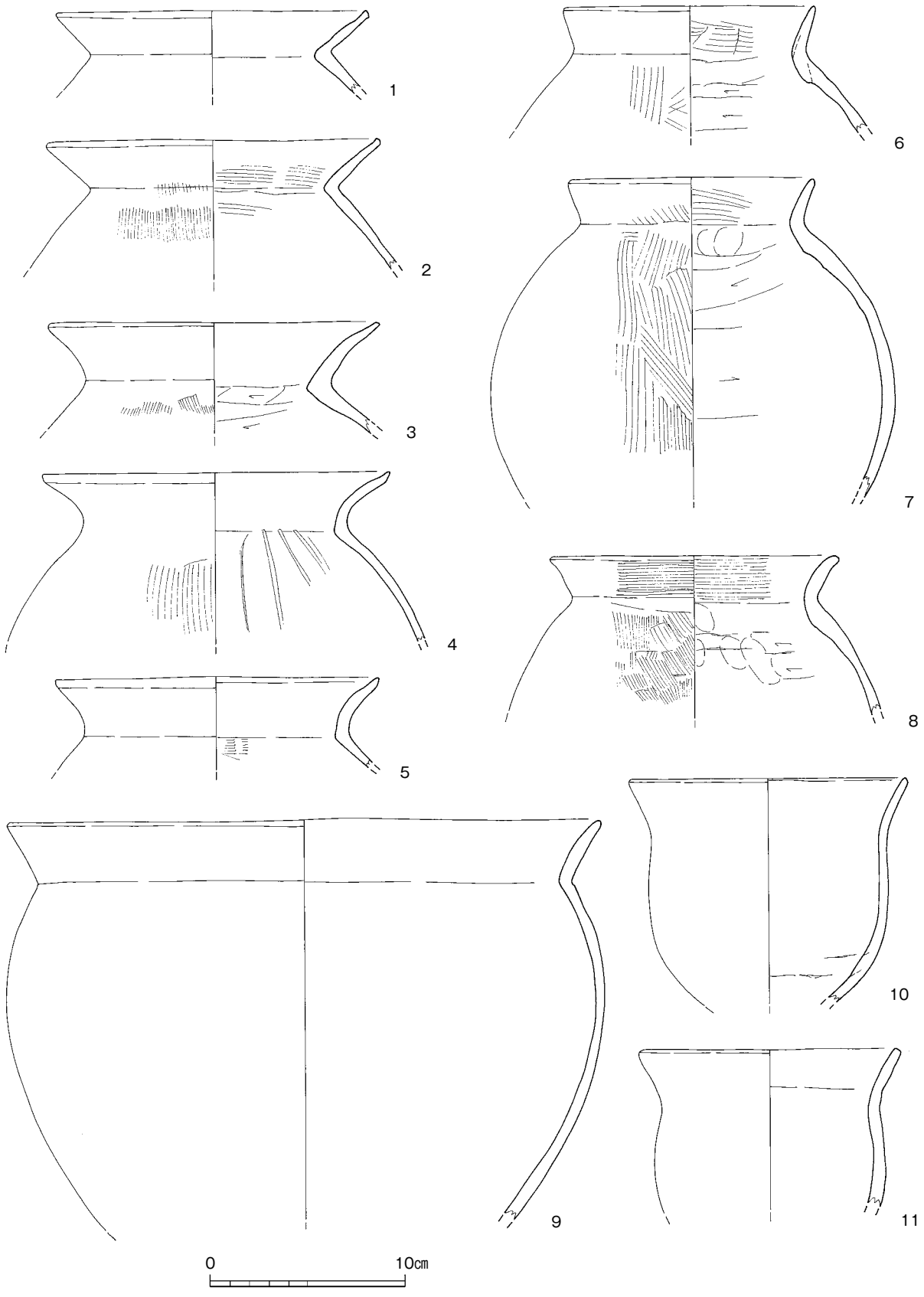
（7）谷状落ち込み

調査区は西側1/3ほどの範囲が徐々に西に向かって下がるゆるやかな傾斜をなしており、1号溝よりも西側では地山の傾斜の上に暗～黒褐色粘質土の堆積が見られた。堆積物の厚さは1号溝の脇ではごく薄いが、調査区端部では約60㎝～1mほどの厚さとなっていて、土器を大量に包含していた。そこで、できる限りこれを掘りあげようと試みたが、埋土が著しく粘性を持つこと、また調査区内が常時湧水していることなどの悪条件が重なり、すべてを完掘することはできなかった。なお、調査時にはこの堆積物についてSX－02という遺構名を付けており、ここでもこれに従うが、

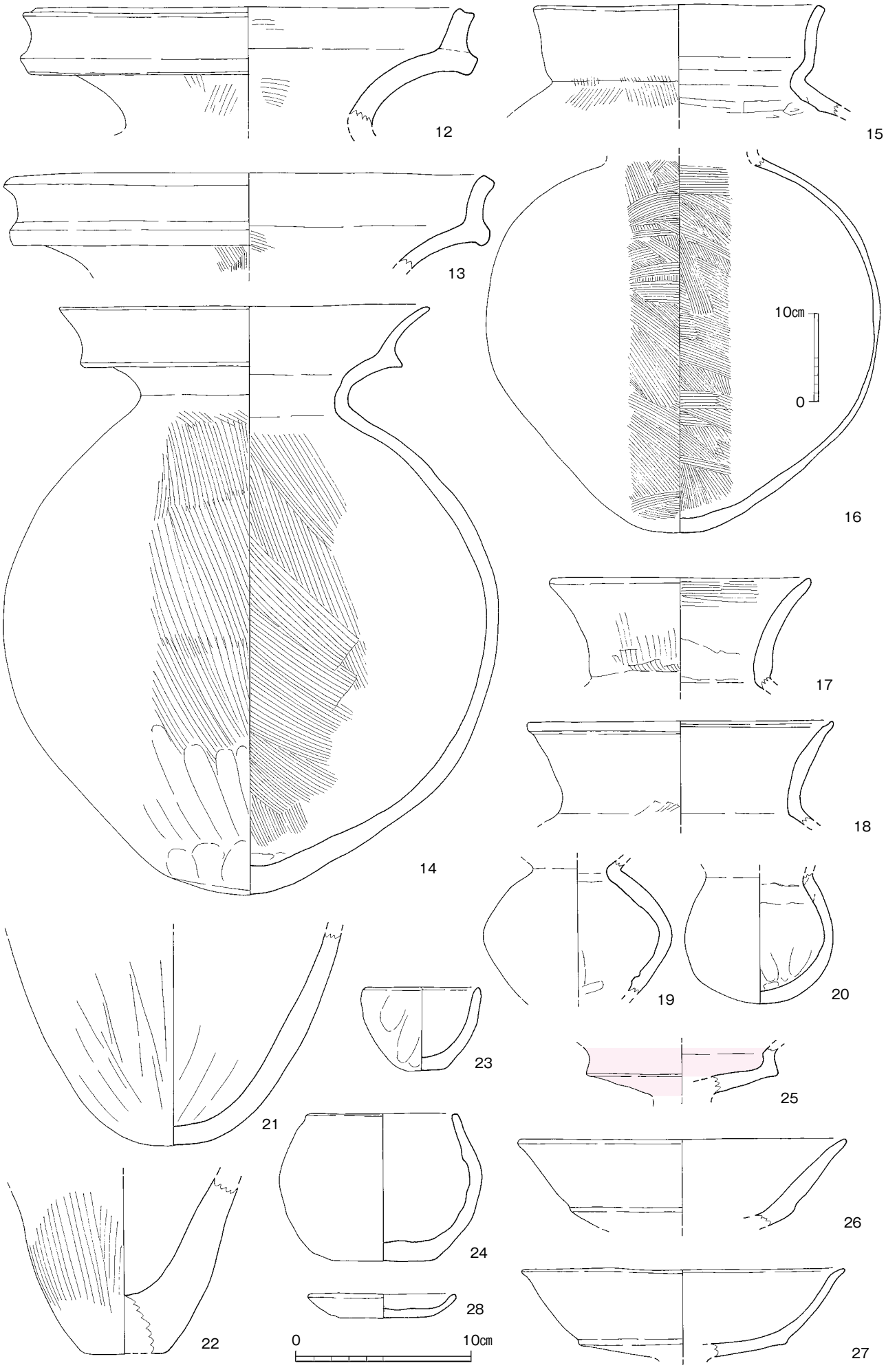
遺構の実態は自然流路（谷状落ち込み）である。また、Ⅰ区北西部で同様の落ち込みを調査しており（SX － 03)、その位置や埋土の類似性から、両者は本来一体の遺構（旧地形）であったと判断している。



第 60 図　1 号掘立柱建物跡、1･5･6 号土坑、1 号土壙墓、1 号溝出土土器実測図（10 は 1/4、他は 1/3）



第 61 図　SX － 02 谷状落ち込み出土土器実測図その①（1/3）



第 62 図　SX － 02 谷状落ち込み出土土器実測図その②（16 は 1/6、他は 1/3）

SX － 02·03（第 6 図、図版 5·28）

調査区の西側で南北に広がる谷状の落ち込みである。調査区の西側には用水路が流れているが、その用水路におおよそ沿う形で、およそ南から北に向かって蛇行しながら伸びる。調査時には、調査区南側から中央部までの遺構を SX － 02、北西端部で検出された遺構を SX － 03 としたが、埋土が共通しており整理段階において一連の谷部と判断した。したがって、土器は別個に取り上げている。また、詳しくは後述するがⅡ・Ⅲ区で検出した SX － 04 についても、一連の谷状落ち込みと判断している。埋土は上層が黒褐色粘質土層、下層が暗黒灰色粘質土層（礫混）からなり、特に上層に多くの土器を包含する。両者の色調はよく似ており、また湧水が著しく調査が難航したことから、土層に対応させながら土器を取り上げることはできなかった。出土土器の大半は古墳時代前期～後期のもので、一部古代・中世の遺物が見られるが少量であることから、この谷状落ち込み遺構はおよそ古墳時代後期末期までにほぼ埋没していると理解できよう。

SX － 02 出土遺物（第 61·62 図、図版 57）

土師器（1 ～ 28） 1 ～ 5 は布留式（派生含む）甕である。いずれも胴部下半が欠失しているが、上半部の形状から球胴とみられる。頸部は鋭く屈曲し、口縁部は外に開く。1·2 は典型的な布留（古）式甕で、口縁部上半がわずかに内湾して上面が波打ち、端部を四角く収める。3 ～ 5 はやや新相を呈し、口縁端部の内湾傾向がほぼ失われ、口縁部下半で外に大きく屈曲する。器壁調整は胴部内面がケズリ、胴部上位～口縁部はハケ目のちナデ。外面にはハケ目調整がみられるものが多い。6 ～ 8 は 5 世紀後半～ 6 世紀代の甕形土器である。胴部下半～底部が欠失するが、球胴で、短く斜め上方に伸びる口縁部を持つ。8 は口縁部が外湾し、やや新相を呈するか。器壁調整は胴部内面がケズリ、外面と口縁部内面はハケ目。9 は大形の鉢である。「く」の字に外反する口縁部とやや浅い胴部をもち、底部は欠失する。10·11 は小形の鉢である。胴部は球形に近いが頸部の締まりがほとんどなく、ゆるやかに外湾して口縁部にいたる。6 世紀代の資料か。12 ～ 15 は二重口縁壺である。14 は完形に復原でき、他は口縁部片である。12·13 は在地系で口縁部の屈曲が明瞭で口縁部はやや上方に伸び、屈曲部外面が強く外に突き出す。14 は布留系で口縁部が強く外に広がる。15 は山陰系で口縁屈曲部外面が突き出さず頸部がごく短い。14 の底部にはレンズ底の影響が認められる。16 は大型壺の胴部片で、頸部が良く締まり二重口縁壺の胴部か。14 と器形が類似する。17·18 は直口壺の口縁部片である。強く締まる頸部から、斜め上方に外湾しながら立ち上がる口縁部までの資料である。19·20 は小形の壺形土器の胴部片である。器種は不明。23 は小形の鉢形土器で手づくね感がある。24 も手づくね土器である。25 は有段高坏の坏部片で内・外面に赤色顔料を塗布している。26·27 は高坏の坏部片である。底－口縁部境の外面に明瞭な段をもち、口縁部はわずかに外湾しながら斜め上方に伸びる。以上の資料は古墳時代前期のものか。21·22 は長胴の甕の底部片であろうか。21 は丸底で、6 世紀後半以降の資料とみたい。22 は底部が小さく器壁が分厚い。28 は中世の土師皿である。底部には糸切り痕が認められる。

SX － 03 出土遺物（第 63 図）

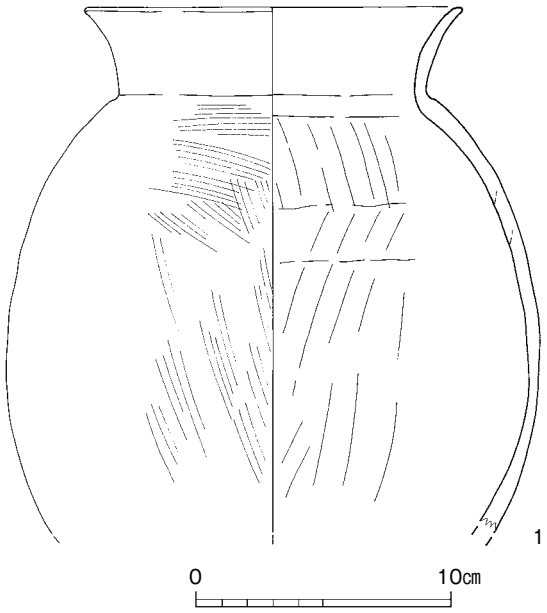
土師器（1） 1 は在地系の長胴壺であろう。長胴で頸部が強くくびれ、口縁部は外湾しながらやや長く伸びる。古墳時代前期の資料である。

なお、ほかに本遺構埋土中からは第 119 図 11 に示した鉇片が出土している。

（8）性格不明遺構

SX－01（第 64 図、図版 28）

調査区の南側中央部で検出した。3･4 号住居跡の北、5 号住居跡の東に隣接する。検出時が大略正方形を呈し、当初は小型の竪穴住居跡の可能性を考えていたが、底面に凹凸が見られ、主柱穴もはっきりしないこと、規模が南北・東西ともに約 2.8m と、ほかの竪穴住居跡と比べて小型すぎること、平面形状が不整形を呈することなどから、性格不明遺構として報告する。埋土は暗褐色粘砂質土で分層できない。出土土器はなく時期は不明。



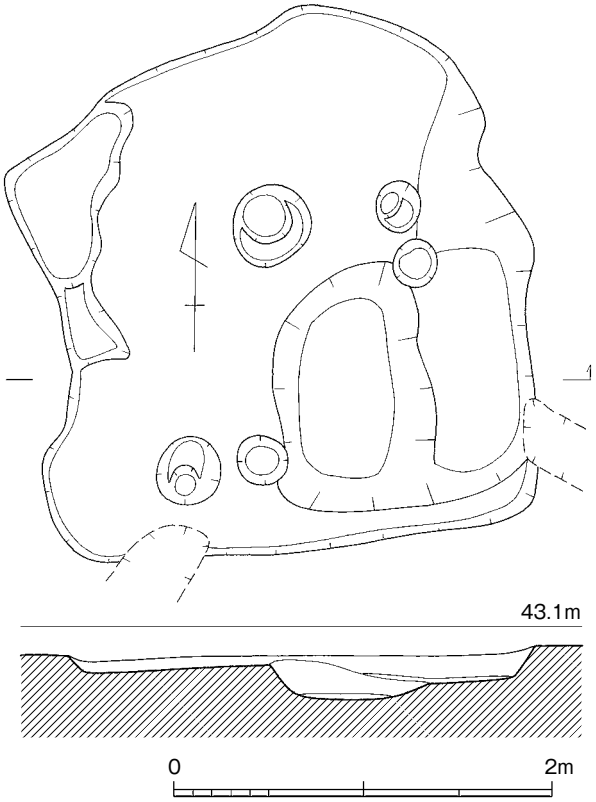
第 63 図　SX－03 谷状落ち込み
出土土器実測図（1/3）

（9）その他の出土遺物

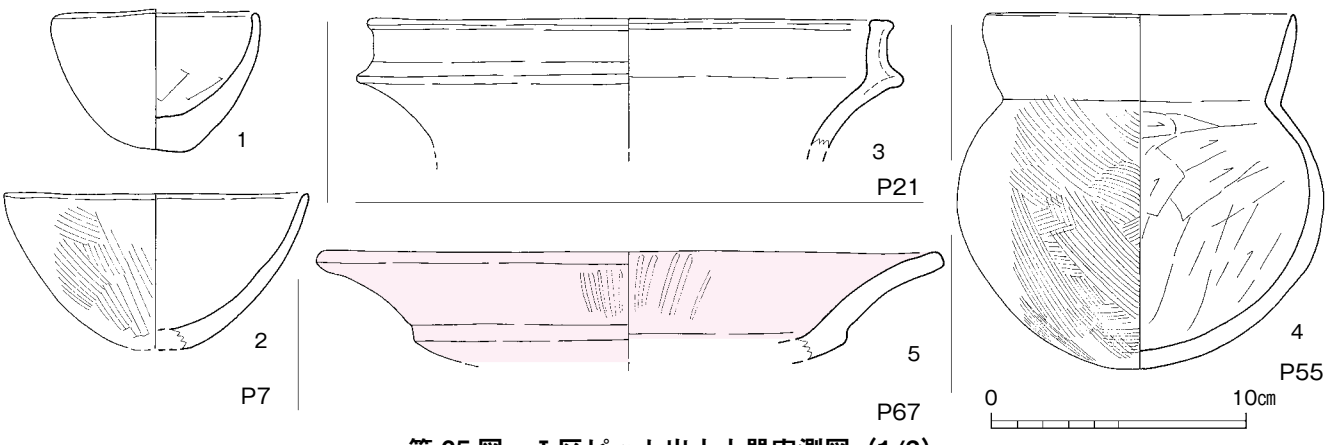
ピット出土遺物（第 65 図、図版 57）

Ⅰ区では、遺構に伴わないピットを調査区の全域から多数検出した。本来は何らかの建物等を構成するものであったと考えられるが、調査でこれを把握することはできなかった。いくつかのピット内部からは土器が出土しており、ここではその中から図示に耐える大きさの遺物を紹介したい。

土師器（1 ～ 5）　1 は小形の碗である。尖底気味で器壁が厚い。2 も碗形土器で、やはり尖底であるが 1 より大きい。いずれも Pit7 出土。3 は在地系の二重口縁壷の口縁部片である。頸部は強く開き、屈曲部外面が突き出して口縁部はわずかに斜め上方に短く伸びる。Pit21 出土。4 は小形の短頸丸底壷である。球胴で、頸部は強くくびれ、口縁部はわずかに内湾しながら外に開く。器壁調整は外面がハケ目、内面はケズリ。Pit55 出土。5



第 64 図　SX－01 実測図（1/40）



第 65 図　Ⅰ区ピット出土土器実測図（1/3）

は高坏の口縁部片である。体部屈曲部以上が残存し、口縁部はわずかに外湾しながら開く。内・外面ともに赤色顔料を塗布する。Pit67 出土。これらの資料はいずれも古墳時代前期のものであろう。

Ⅰ区遺構検出時等の出土遺物（第 66 図、図版 57･58）

Ⅰ区の調査においては、重機で表土を除去したあと人力で少しずつ掘り下げながら遺構の検出を行った。その際に出土した遺物を中心に、表土剥ぎ時などの採集遺物をあわせて報告したい。

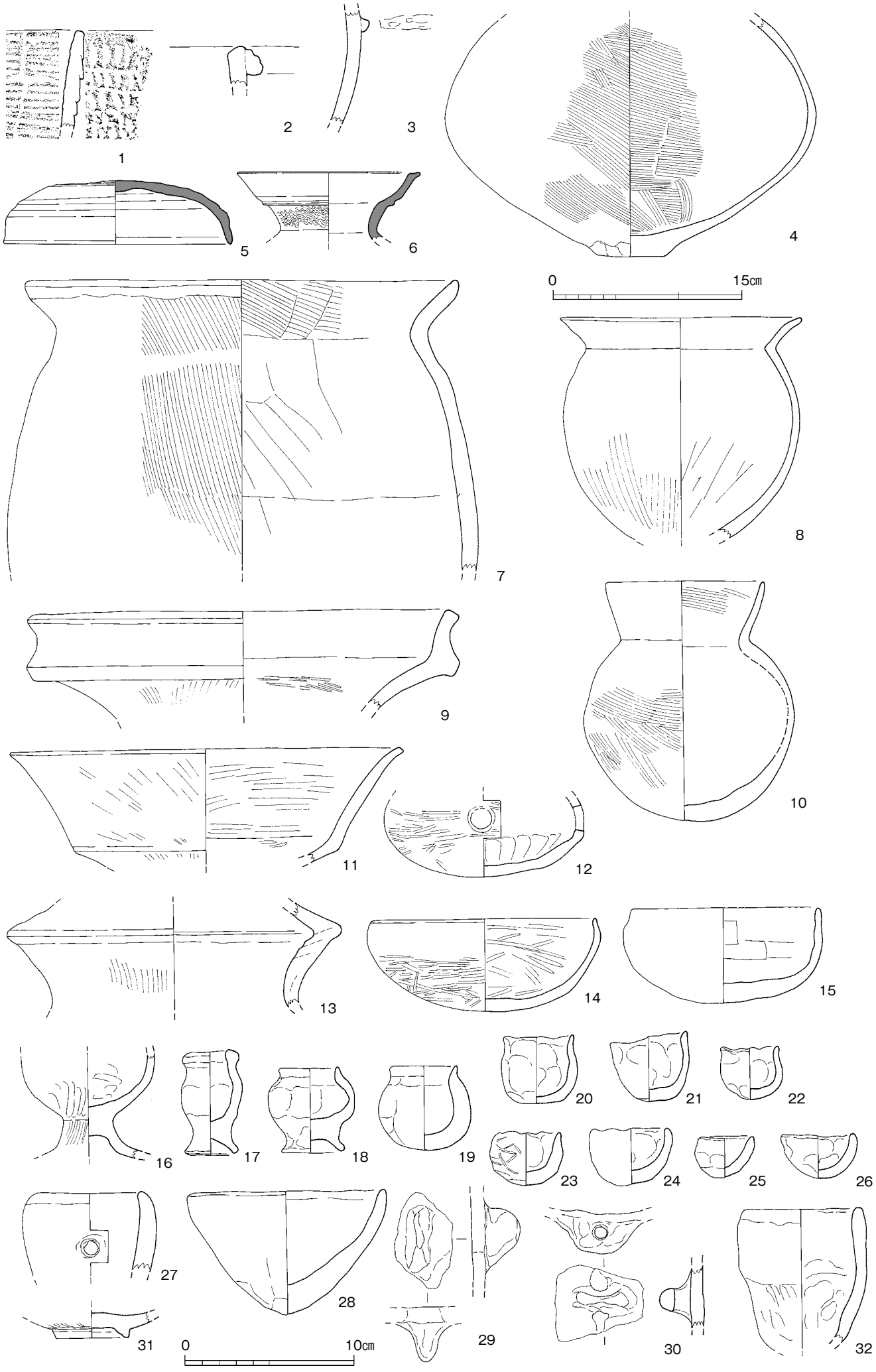
縄文土器（1･2）1 は幅 1cmほどの櫛状具を用いた縦列の施文を連続させる土器である。内面調整は貝殻条痕。2 は粘土紐を貼り付けて文様となすものであるが小片で文様の全体像は不明。

弥生土器（3･4） 3 は刻目突帯文甕の胴部片である。おそらく口縁部よりも下に全周させた突帯部分付近が残り、胴部屈曲はない。弥生時代早期の資料か。4 は壷の胴部片。底部は小さな平底で、胴部は強く張りやや下膨れである。器壁は内・外面ともにハケ目。後期中葉～後葉の資料。

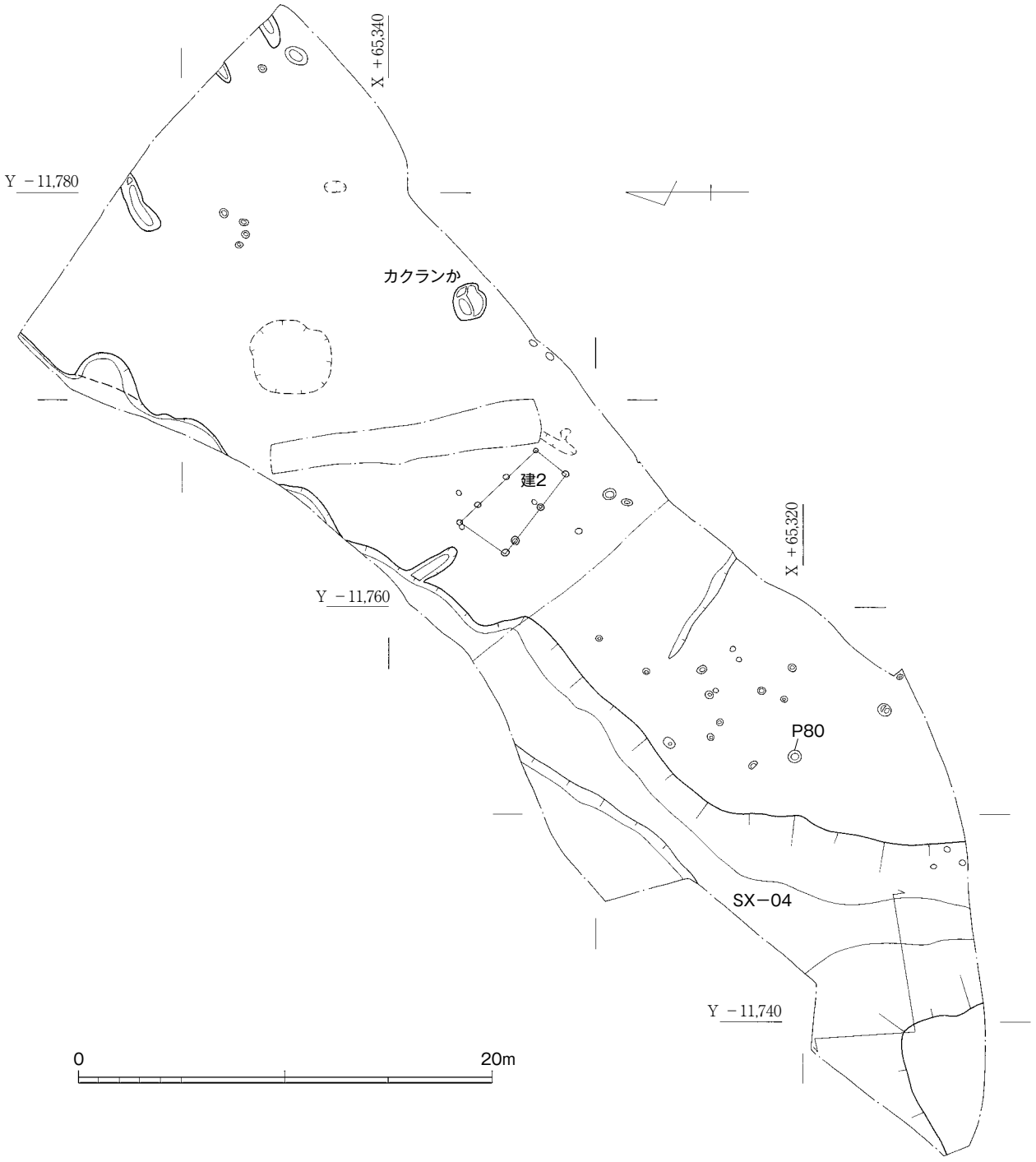
須恵器（5･6） 5 は坏蓋である。天井部は平坦で、体部がやや強く屈曲して口縁部はやや斜めに下がる。7 世紀前葉～中葉の資料。6 は甕の口縁部片である。胴部は欠失し、頸部は短く外反、口縁部境で一度外に屈曲し口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。端部は水平。径－口縁部境に 1 条の三角突帯を付し、その下に櫛描波状文をめぐらせる。5 世紀後半～ 6 世紀前半の資料である。

土師器（7 ～ 32） 7 は大型の甕である。おそらく在地系の長胴甕であろう。胴部下半以下を欠失する。口縁部は「く」の字に外反し、頸部はややくびれる。器壁調整は胴部内面がケズリ、外面はハケ目。口縁部は内・外面ともにハケ目。8 は小形の甕である。球胴で頸部は鋭く屈曲し、口縁部は外湾しながら斜めに開く。胴部内面はケズリ、外面はハケ目。9 は二重口縁壷の口縁部片である。頸部は強く湾曲して広がり、口縁部は屈曲したのち外湾しつつやや広がる。10 は小形の丸底直口壷である。球胴で頸部は締まり口縁部はわずかに内湾しながら広がる。調整は胴部内面がナデ、外面はハケ目。11 は高坏の坏部片である。体部は明瞭に屈曲し、口縁部はゆるやかに外湾しながら広がる。調整は内・外面にミガキ痕跡が残る。12 は小形の丸底壷の胴部か。中位に径 1cmほどの円孔を穿つ。外面は丁寧に磨き、内面下部は放射状に工具を用いたナデを施す。13 は二重口縁壷か。下半部は欠失する。胴部上位は強く湾曲しつつ広がり、口縁部境で内側に屈曲する。以上の資料はおおよそ古墳時代前期のものであろう。14･15 は碗である。いずれも丸底で､15 の器高がやや高い。14 は内・外面ともにミガキ調整、15 は外面がナデ、内面もナデで一部に工具痕跡が残る。16 は脚付碗の坏底部～脚上部片である。脚は強く外湾しながら広がり、坏部は小さい。17 ～ 26 は手づくねのミニチュア土器である。17･18 は脚付の器種で、17 は脚付杯、18 は脚付甕か。19 ～ 22 は甕形か。23 ～ 26 は碗形か.いずれも指頭圧痕やナデ痕跡がよく残る。27･32 は蛸壷の口縁部片である。27 は口縁部径は 7cm弱で、底部は欠失する。胴部中位に 1 孔を穿つ。32 は口径が 7cm強で、孔は認められないが欠失する部分にある可能性が高い。28 は製塩土器であろうか。断面逆三角形状で底部が厚い。被熱・剥離等はみられない。以上は古墳時代中～後期の資料であろう。

その他の土器(29 ～ 31） 29 は器種が不明であるが把手である。30 は中世の湯釜の把手であろうか。31 は白磁碗の底部片である。底部は平坦で、高台はやや細身の五角形状を呈し、高台外面は露胎で内側に砂目が認められる。釉はごく薄く、白色を呈する。中世の資料である。



第 66 図　Ⅰ区検出時、その他出土土器実測図（4 は 1/4、他は 1/3）



第 67 図　塔田琵琶田遺跡第 2 次調査Ⅱ区遺構配置図（1/300）

3　Ⅱ区の調査成果

（1）概要

調査区の位置　Ⅱ区は調査範囲の中央西側にあたる約 800㎡の範囲である。Ⅰ区の南側に接しており、また東側には細い用水路を挟んで第 2 次調査Ⅲ区と第 4 次調査Ⅱ区が広がっている。塔田琵琶田遺跡の広がりの中でもおおよそ中央部西側にあたる。付近の旧地形は、西に行くにつれて標高が下がっていて、調査区の西端を流れる用水路の付近が小さな谷地形を形成していた。従って、東側に隣接する第 2 次調査Ⅲ区付近よりも一段低い土地となっていたようである（第 3 図参照）。

土質　Ⅱ区の旧状は、宅地であった。もともとⅡ区の範囲は水田であったが、付近の圃場整備が行われる以前（1990 年代初頭）に宅地としての造成がなされ、そのときに水田の耕作土と床土を除去し、ついで高さ 2m 前後の分厚い盛り土を施したようである。従って、付近の基本土層は、グラウンドレベルより約 2 ～ 2.5m ほどが人工的な盛り土で、その直下に遺構面が残されていたことになる。

地山は付近の基盤土層である黄～白褐色砂礫土を主体とし、一部にその上層である黄褐色粘砂質土層が残されていた。付近の自然地形が南に向かって徐々に標高を上げていくにもかかわらず、遺構面のレベルはⅠ区とほぼ同じであり、Ⅱ区は全域にわたって著しい削平を受けていたことが容易に推測されるが、これに従って地山も基盤層深くまで削平されたものであり、遺構の残りは極めて悪い（第 67 図）。

遺構埋土　遺構の埋土は、黒褐色粘砂質土からなる。本来の生活面が大幅に失われたため遺構の残りは極めて悪く、特に堅固な砂礫層からなる基盤土層が広がる範囲にはほとんど遺構は見られない。遺構はわずかに残された黄褐色粘砂質土層が広がる範囲に集中しており、掘立柱建物が 1 棟とわずかなピット群を検出したほかは、集落の西を区切る谷状の落ち込み（SX － 04）をⅠ区に引き続き調査したのみであった。他に調査区北東端で溝状の掘り込みも掘出したが、調査中に風倒木痕と判明した。以下、個別の遺構について詳細を述べる。

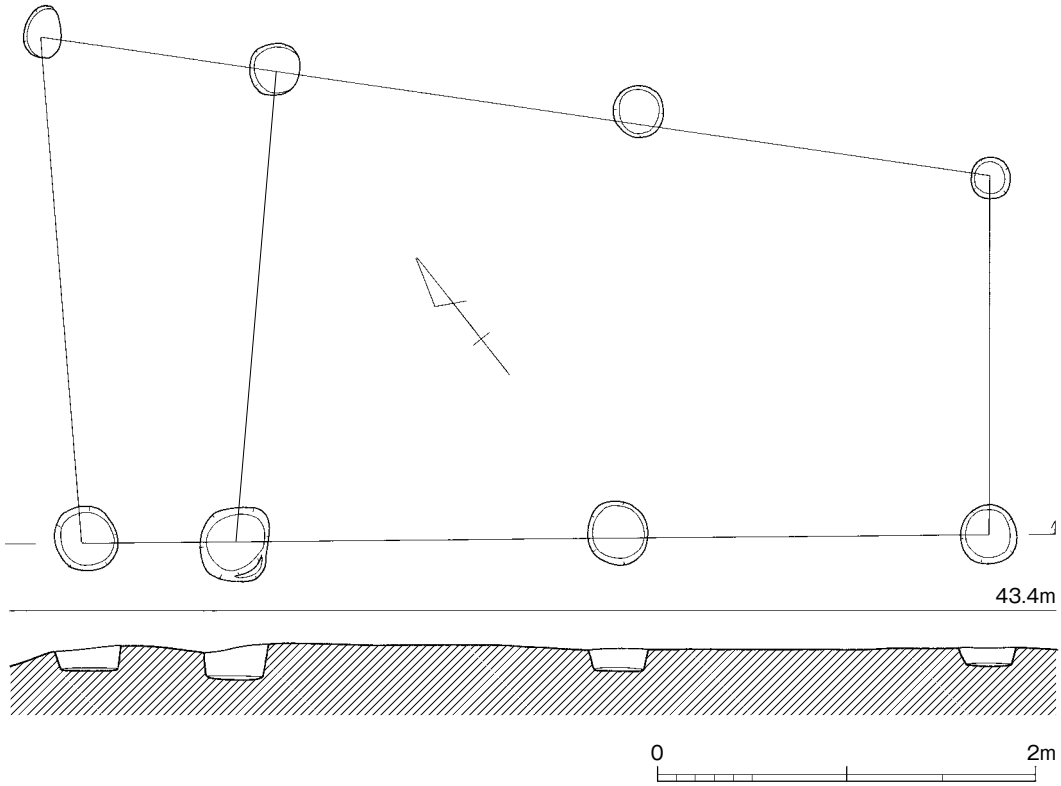
（2）掘立柱建物跡

2 号掘立柱建物跡（第 68 図）

Ⅱ区中央部やや南寄りで検出した。1 間× 2 間の北西－南東棟で北西側（妻側）に庇が付く建物と考えたが、東側の梁行柱間距離が 1.9m なのに対し、西側の梁行柱間距離が 2.5m をはかり、桁行方向の柱列が並行せずに北西方向に向かってやや開いていくので、本当に建物を構成する柱穴群なのか不安が残るところである。桁行の柱間距離は南側の柱列で 1.94m ～ 2m、北側で 1.90 ～ 1.92m と、桁行方向の柱間距離は比較的一定である。庇とした柱穴の身舎柱穴からの距離も南側が 0.82m なのに対し北側は 1.24m とやや広く、これも本当にこの建物に付属する柱穴なのか確定的ではない。柱穴の深さはどれも 10 ～ 20㎝とかなり浅い。出土遺物はなく所属時期は不明である。

（3）谷状落ち込み

調査区の西側を、Ⅰ区から南側に向かってつづく落ち込み状の遺構が伸びていた。調査区が途切れるため念のため遺構名を新たに SX － 04 と付けなおした。ただし、この落ち込み状遺構は後述するⅢ区にもその続きが検出されており、Ⅱ区の遺構名をそのまま踏襲して SX － 04 としている



第 68 図　2 号掘立柱建物跡実測図（1/40）

ので注意されたい。

SX － 04（第 67･69 図、図版 5）

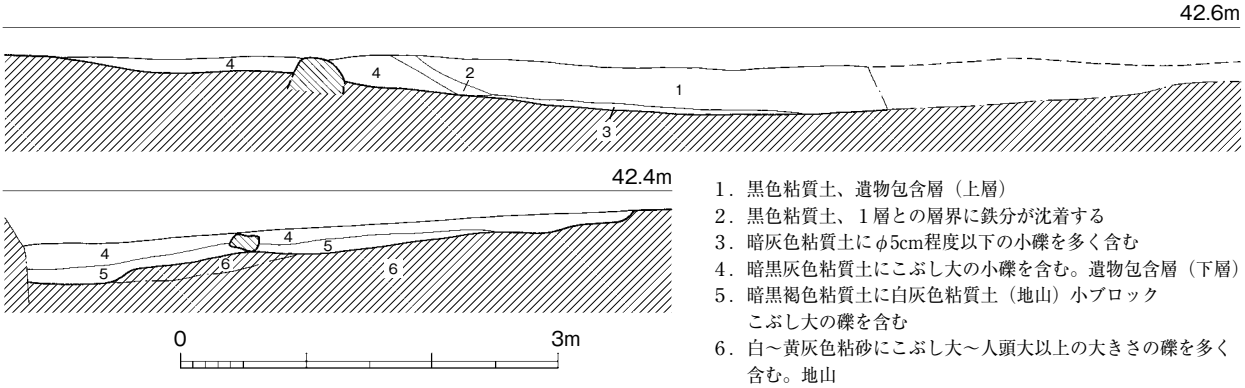
Ⅱ区西側を南北方向に伸びる谷状の落ち込み遺構。Ⅰ区 SX － 02・SX － 03 と一連のもので、塔田琵琶田遺跡の西側を区切る浅い谷の東岸部分に堆積した黒色粘質土が埋土の主体となる。Ⅱ区の南側では、この谷状遺構が東側に枝分かれしてⅢ区に向かって伸びており、その延長はⅢ区の南西部を通り平成 24 年度第 4 次調査Ⅰ区にまで及んでいる。

谷部の横断土層を第 69 図に示す。上層の黒色粘質土層（1 層）は比較的大きな土器の破片を多く含む遺物包含層で、下層の暗黒灰色粘質土（礫混）はやや小さめの土器片を含む遺物包含層である。両者の色調はよく似ており平面的には区別できなかったので、層ごとの遺物取り上げはできなかったが、上層には須恵器が含まれるのに対し下層にはほとんど含まれず、上層がおおよそ古墳時代後期以降の堆積、下層はそれ以前の堆積と考えられる。なお、この層序はⅠ区 SX － 02･03、Ⅲ区 SX － 04（Ⅱ区の続き）、第 4 次調査Ⅰ区 SX － 01 のいずれとも共通している。下層にいくにつれ基盤層に含まれる礫が多く混じるが、基本的には粘性の高い土で埋積されており、比較的静かな環境下で徐々に埋没したことがうかがえよう。

出土遺物（第 70 ～ 76 図、図版 59･60）

縄文土器（1･2）　1 は深鉢の口縁部片である。口縁端部に刻目を施し波状口縁とする。中期阿高式系の土器である。2 も深鉢の口縁部片であろう。内傾しながら伸びて端部を強く外半させ、外面には渦文と三角文を配する。口縁端部には斜線文を、口縁部内面には列点文を施す。後期鐘崎式の資料である。

弥生土器（3 ～ 20）　3 ～ 5 は複合口縁壺の口縁部片である。3･4 は頸部が強く湾曲して開き、口縁部は外湾しながらやや内傾気味に立ち上がる。5 は頸部が短く張らないもので、口縁部屈曲は弱い。

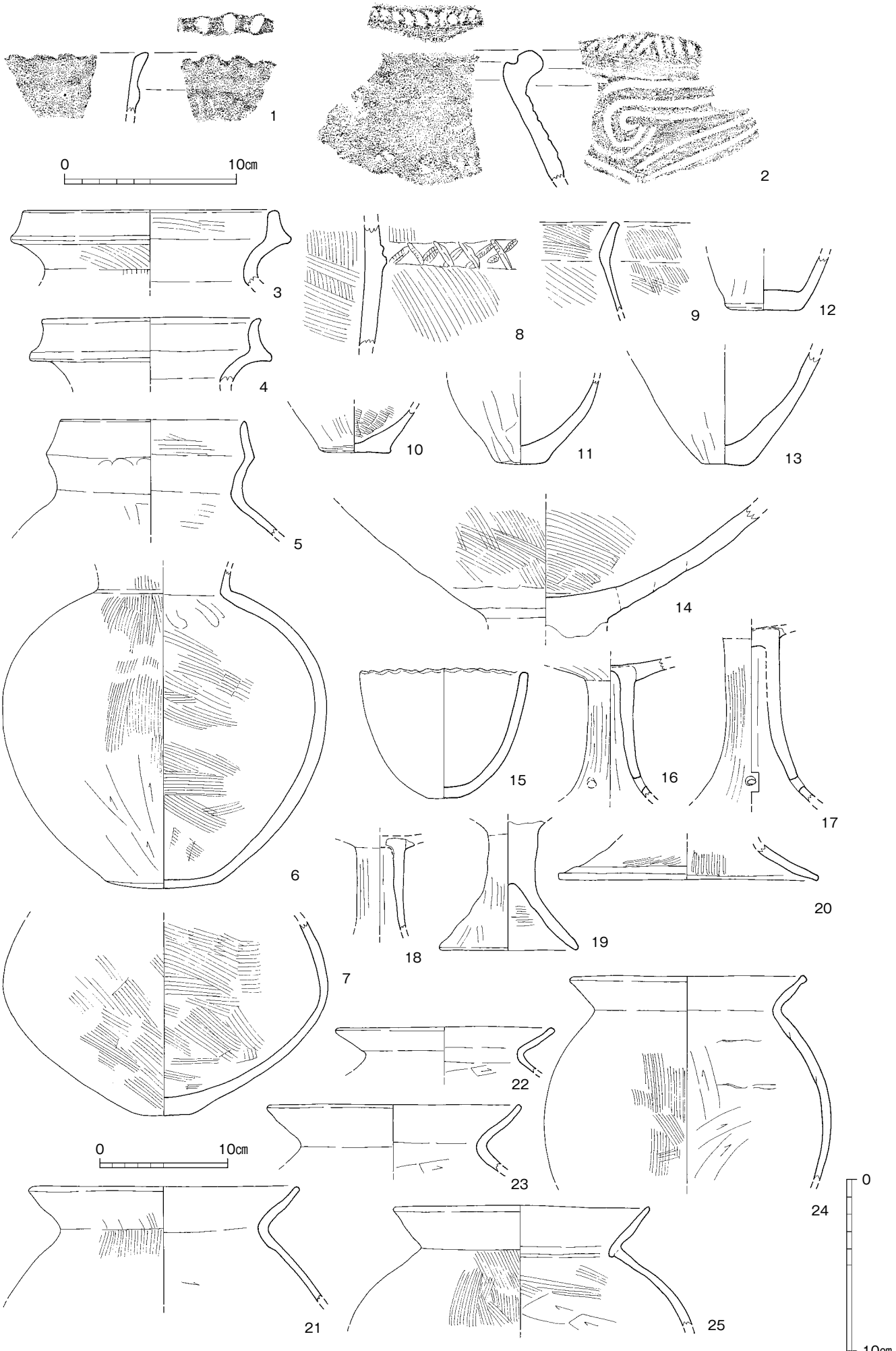


第 69 図　Ⅱ区 SX － 04 谷状落ち込み土層図（1/60）

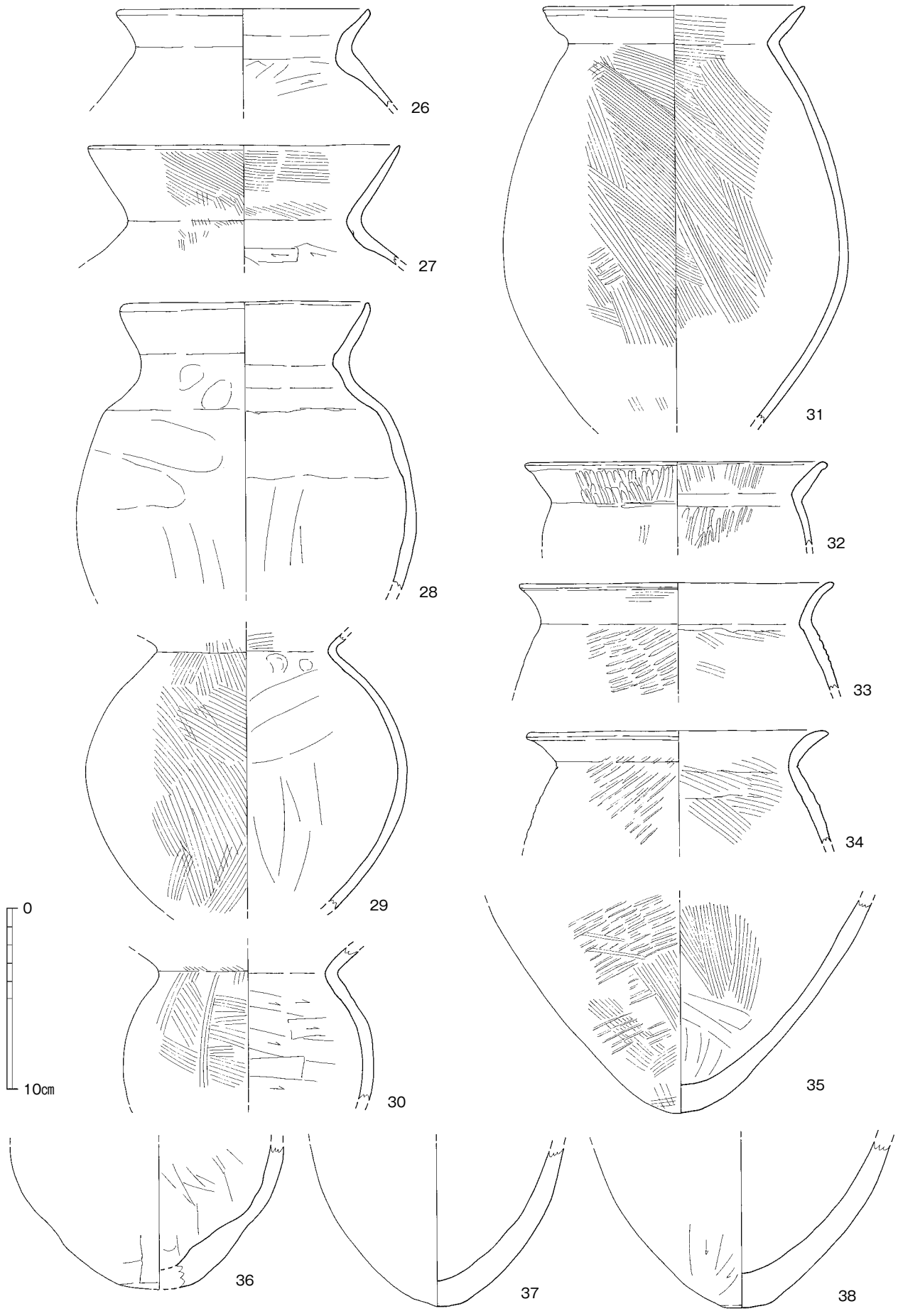
いずれも後期末の資料である。6･7 は壷の胴部片である。6 は底部がレンズ状で胴部形状はやや上膨れ、頸部は強く締まる。胴部外面中位やや上に沈線を波状に回す。胴部下半が強い板状ナデ、上半はハケ目。内面はハケ目で上位に指頭圧痕を残す。7 は底部が小さく胴部が強く張るものである。上半より上は欠失する。器壁調整は内・外面ともにハケ目。ともに後期後葉の資料であろう。8 は甕の胴部片であろう。断面台形の突帯に板状工具で×状の刻目を付す。9 は「く」の字状口縁部甕の口縁部片である。10 は平底の甕の底部で、中後期の資料か。11 ～ 13 ははややレンズ状の底部を持つ甕で、後期中葉前後の資料であろう。14 は大型の壷の底部片か。底部下面が未調整で凹凸が著しい。15 は鉢形土器である。底部は丸底に近いレンズ状底で口縁部は波形に仕上げる。16 ～ 20 は高坏の脚部片である。16 ～ 18 は脚の上～中位が残る。いずれも内部が中空で内面に絞り痕を良く残し、外面はハケ目仕上げ。19 は脚上位に粘土を充填する資料である。下位は「八」の字状に広がる。20 は脚の端部片である。「八」の字状に強く広がる。内・外面ともにミガキを施す。以上の資料は時期決定の決め手がないものが多いが弥生時代後期のものが大半を占めるか。

土師器（21 ～ 116）　21 ～ 25 は布留（古）式の甕である。口縁部片を中心としており全形が判明するものはない。いずれも、強く屈曲する頸部と短く外側に広がる口縁部を有し、口縁部はわずかに内湾する。口縁端部は 25 がやや斜めに処理するが他は四角くまとめる。器壁調整は胴部内面がケズリ､外面はハケ目のちナデ､口縁部は内・外面ともにナデ。26 ～ 30 は布留（新）式の甕である。26･27 は口縁部片である。26 は頸部がすぼまり、口縁部はやや立ち気味に伸びて中位で屈曲して開く。27 は口縁部が直線的に長く伸びる。28 は胴部中位以下まで残存する資料である。胴部がやや長胴気味で口縁部はわずかに内湾しながら伸びる。内・外面に指頭圧痕が残り器壁の凹凸が著しい。29･30 は胴部から頸部までの資料である。ともに胴部は球状で内面がケズリ、外面はハケ目。31 は在地系の長胴甕である。口縁部は「く」の字状を呈し端部は尖らせる。胴部はやや下膨れで底部は欠失する。器壁調整は内・外面ともにハケ目。32 は甕形土器の口縁部片であろうが、内・外面にミガキ調整がみられやや特異である。短頸壷の可能性もある。33･34 もおそらく在地系の長胴甕であろう。いずれも口縁部のみ残存している。頸部は比較的明瞭に屈曲し、口縁部は如意状に外反する。胴部外面にタタキ痕跡が認められる。35 ～ 38 は在地系の長胴甕の底部片である。いずれも尖底で底部が厚い。器壁調整はバリエーションがあり、35 は外面がタタキのちハケ目、内面はハケ目のち工具ナデ。36 は内面が工具ナデ、外面はナデ。37 は内・外面ともにナデ。38 は底部外面が工具ナデ、内面はナデ。以上の資料はおおよそ古墳時代前期のものであろう。

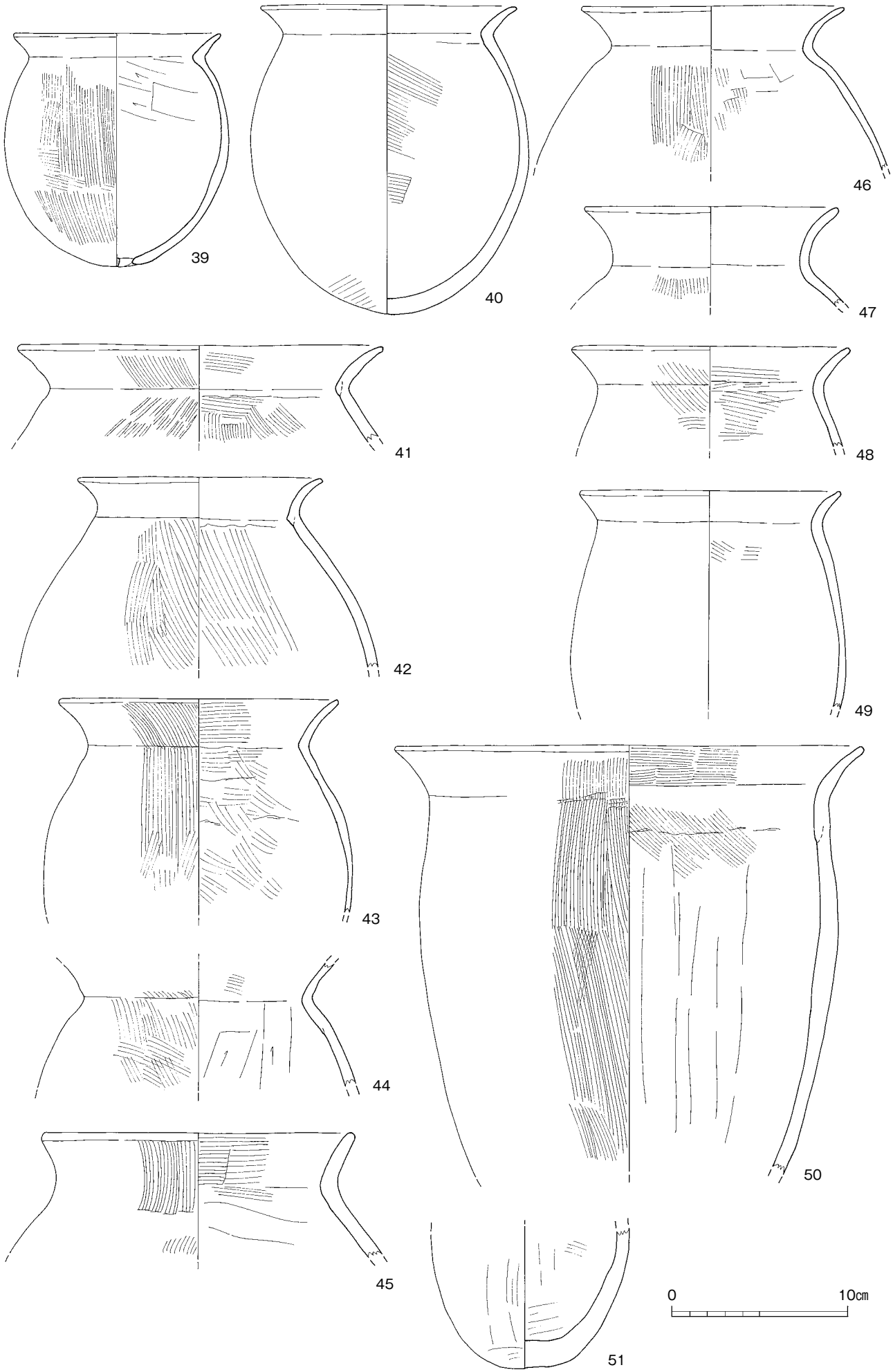
39 ～ 47 は、頸部を強く屈曲させる（おそらく球胴の）甕である。うち、39 は小形、40･42 ～



第 70 図　Ⅱ区 SX － 04 谷状落ち込み出土土器実測図その①（3 ～ 20 は 1/4、他は 1/3）



第 71 図　Ⅱ区 SX － 04 谷状落ち込み出土土器実測図その②（1/3）

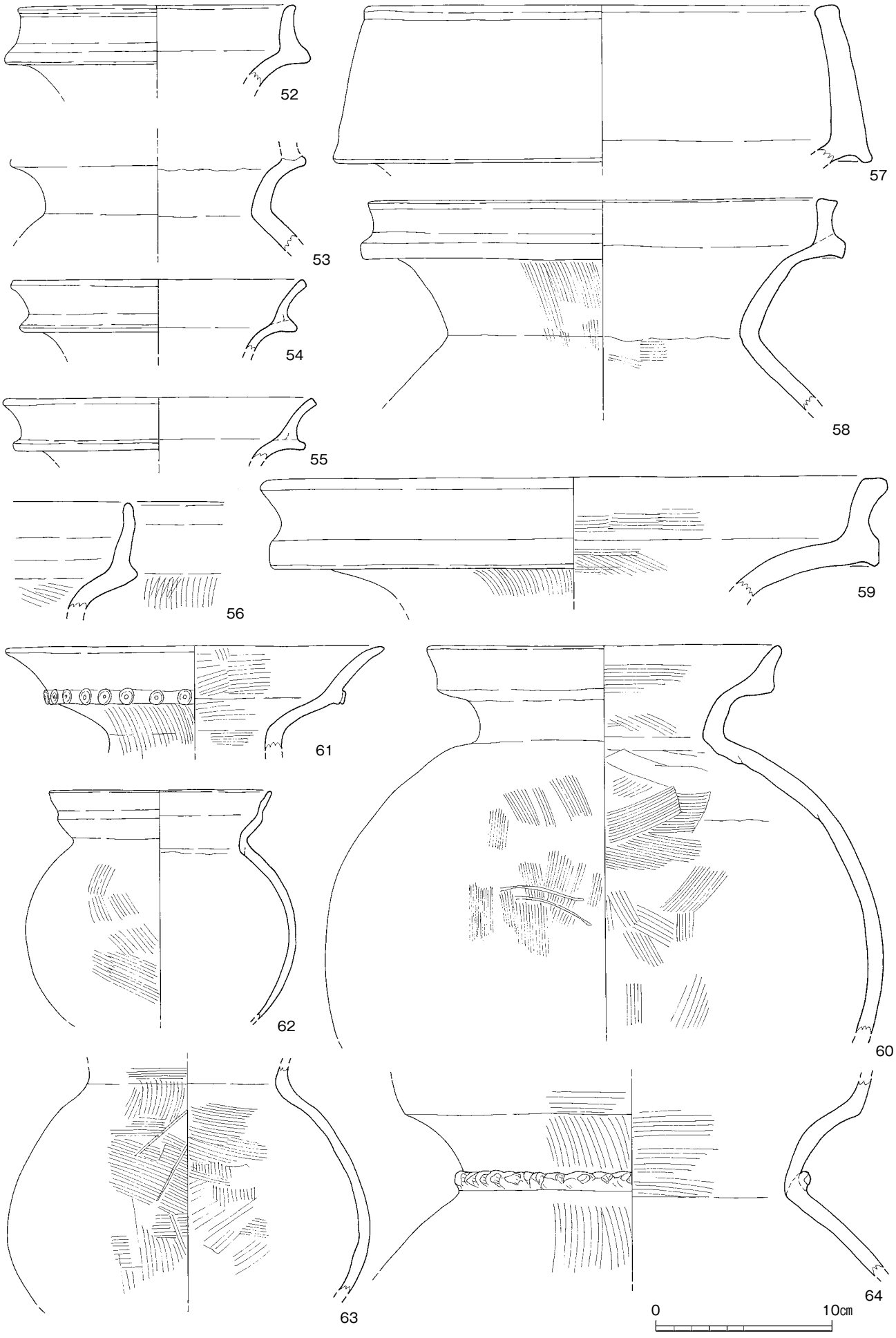


第 72 図　Ⅱ区 SX － 04 谷状落ち込み出土土器実測図その③（1/3）

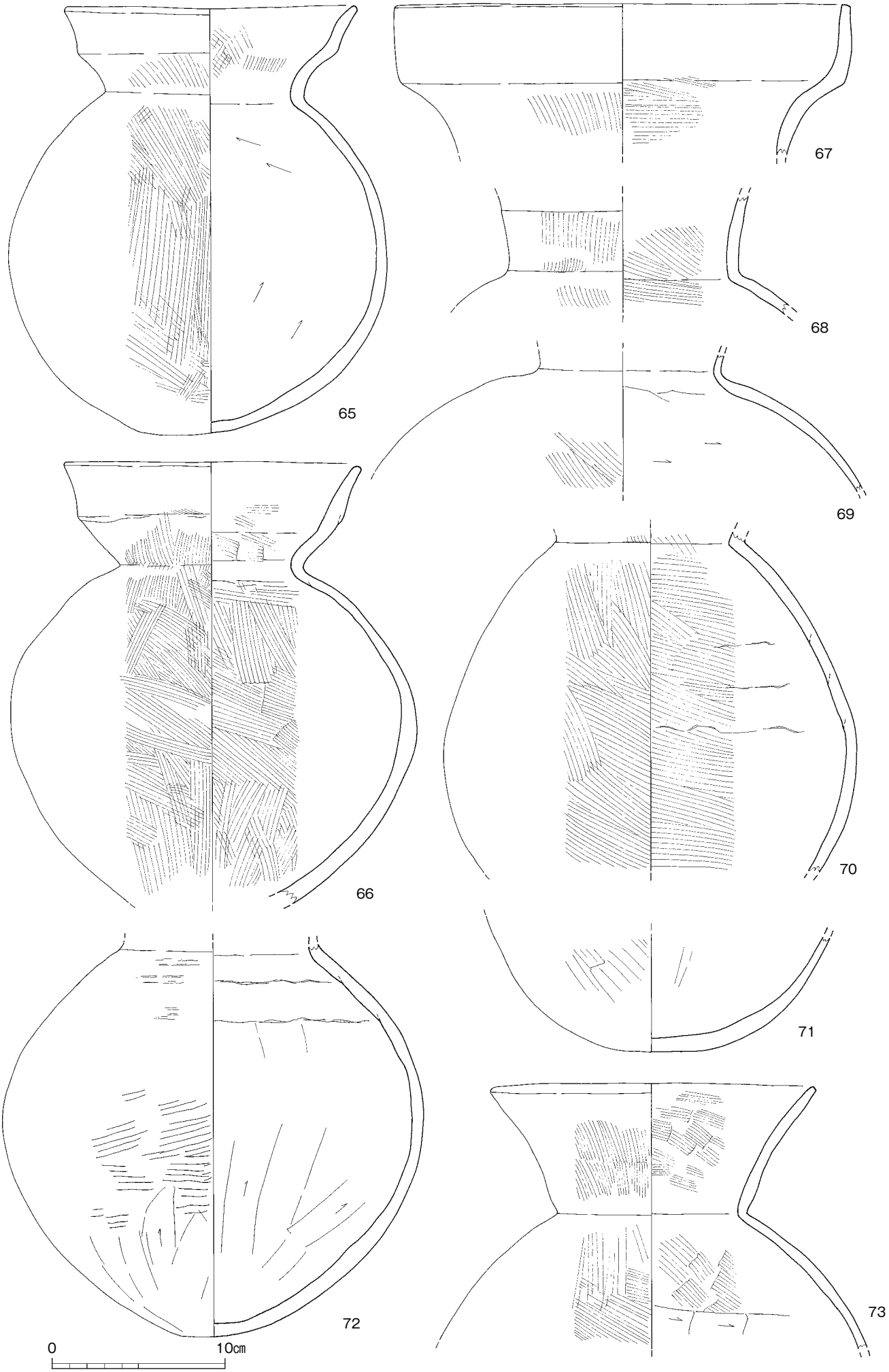
45·47 が中型、他は大型品である。胴部（上半部のみも含む）が残存するものはいずれも球状を呈し、器壁調整は内面が（ケズリのち部分的に）ハケ目、外面はハケ目調整である。頸部は 45·47 を除いて強く締まり、鋭く屈曲してゆるやかに外湾しながら外反する。45·47 は頸部屈曲がややゆるく、口縁部の立ち上がりがやや直立気味になる。器壁調整は一部に内・外ともにハケ目を残すものもあるが基本的にナデ仕上げである。48 ～ 50 はやや長胴気味の胴部を持つもので、前段階の在地系長胴甕の残存か。50 は大型品、ほかは小～中形である。いずれも頸部はやや緩く締まり強く外湾する。器壁調整は内・外面ともにハケ目。51 は小形長胴甕の胴部片か。器壁が分厚い。これらはおおよそ古墳時代中期に該当する資料であろう。

52 ～ 62、64 ～ 67 は二重口縁壺である。形状からいくつかに分けることができる。52 ～ 56·58 ～ 60 は、頸部上位が強く外湾し、二重口縁屈曲部外面が強く外に突き出し、口縁部はやや外湾しながら斜め上方に伸びる資料である。52 ～ 55 は小形品、56 ～ 60 は中・大形品である。うち、52·53·56·58·59 は二重口縁屈曲部が直角に近く曲がり、口縁部が上方に伸びるもので比較的古手の資料である。一方 54·55·60 は口縁部が強く開いて斜め上方に伸びるもので、比較的新しい資料である。57 は口縁部をやや内湾させながら内傾気味に立ち上げるもので、大形品である。胴部が残るものは 60 のみであるが球胴で内・外面をハケ目調整により仕上げる。61 は口縁部をとくに強く開き、二重口縁屈曲部外側に直径 1㎝内外の円形浮文を連続して貼り付ける装飾性の高いものである。62 は球胴で頸部は強く締まり、頸部上半が短いものである。二重口縁屈曲部が明瞭でなく、わずかに外湾しながら短く立ち上がるものでやや新しい様相を示す。64 は二重口縁壺の胴部上位から頸部までが残る資料。頸部は強く締まって外反し、やや長く伸びる。二重口縁屈曲部は鋭さがなく、おそらくやや内湾しつつ開くものか。頸部外面に突帯をめぐらせ、刻目を付す。63 は球状の胴部のみが残り、頸部形状や内面器壁調整（ハケ目）から壺の胴部と判断したが二重口縁を持つかどうかは不明。65·66 は、ともに球胴で頸部は強く締まってから短く外反する。二重口縁屈曲部はともに鋭さがみられず、退化している。68 ～ 72 は口縁部を欠失する壺形土器である。いずれも球胴で、頸部は強く締まる。器壁調整は内面がケズリあるいはハケ目後ナデ、外面はハケ目のものが多い。70·72 は内面（特に上位）に粘土帯接合痕跡を良く残す。うち 68 は頸部下半が残っており、その形状から直口壺か二重口縁壺とみられるが他は器種の判断がつかない。73 は直口壺の胴部上半～口縁部片である。胴部はおそらく球状で、頸部は強く締まり、口縁部はわずかに外湾しながら斜めに開く。74 ～ 76 は直口壺の口縁部片であろう。いずれも鋭く屈曲する頸部以上が残っており、74 は頸部が直立するが他は斜めに開く。77 はややつぶれた球胴で、おそらく壺の胴部片であろう。78·79 は短頸壺の口縁部片か。ともに頸部は良く締まり、屈曲はゆるやかで、口縁部は短く如意状に外反する。80 は小形丸底直口壺の口縁部片である。口縁部はわずかに内湾しながら強く開く。81 ～ 84 は小形の壺形土器である。うち 81 は口縁部が短く上に伸びる小形丸底壺のやや新相の資料、82 は口縁部がごく短い短頸壺の一種か。83·84 は口縁部が残っておらず器種は不明。以上の資料はおおよそ古墳時代前期に収まるものであろう。

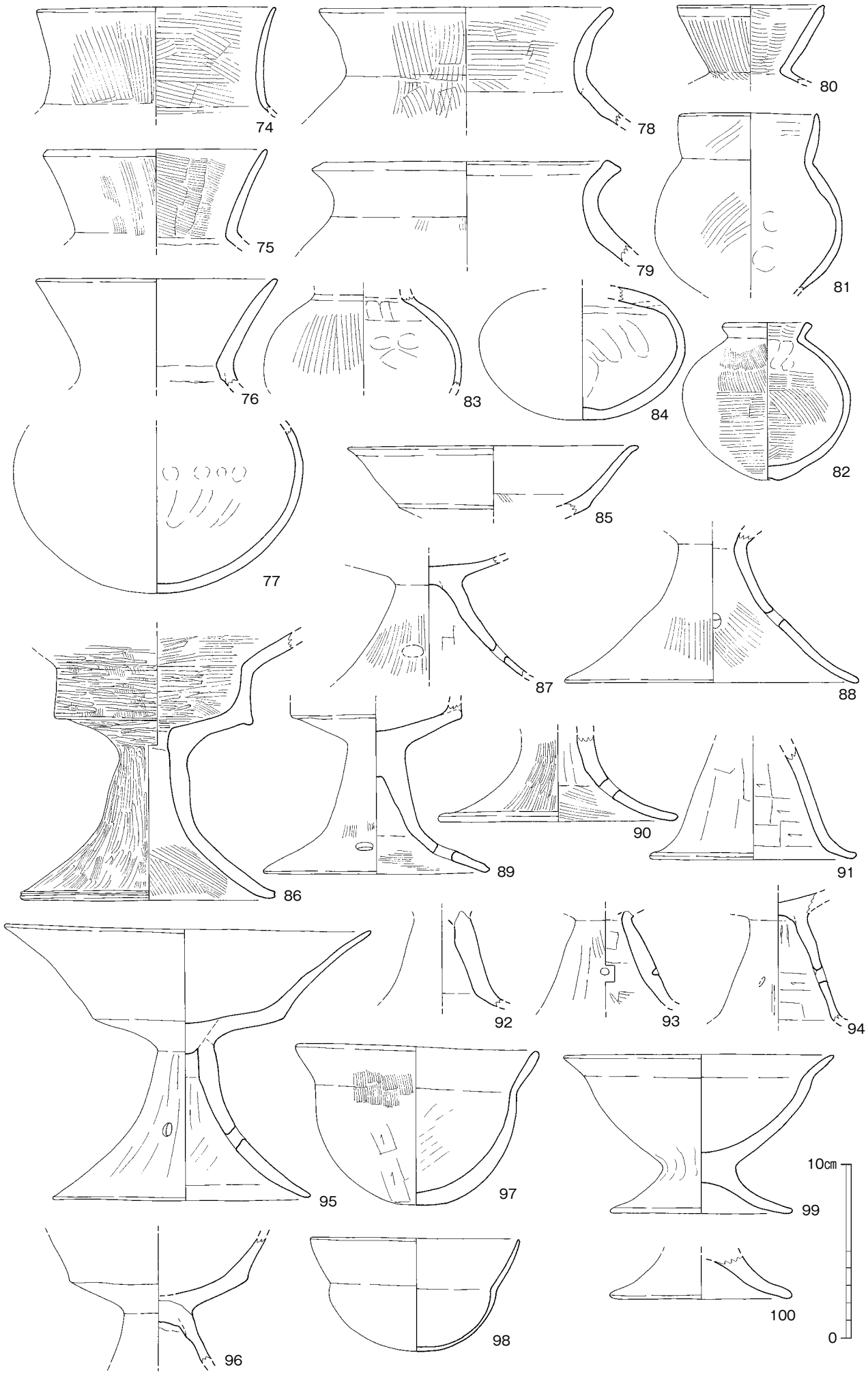
85 ～ 94 は高坏である。85 は坏部片である。胴部屈曲部から直線的に開く端部はわずかに外湾する。86 は坏胴部が直立し口縁部が開く外来系の高坏である。底部中央に直径 1.5㎝ほどの円孔を穿ち、脚部は「八」の字に強く開く。坏部内・外面、脚部外面を丁寧なミガキ調整で仕上げる精製品である。89 も同じ器種の可能性がある。87 ～ 94 は脚部片である。うち、87 ～ 90 は脚部がスムーズに「八」の字状に開くもので、すべて脚部に穿孔を穿つ。穿孔の数が判断できるものは、88 が 3 孔、89 は



第 73 図　Ⅱ区 SX － 04 谷状落ち込み出土土器実測図その④（1/3）



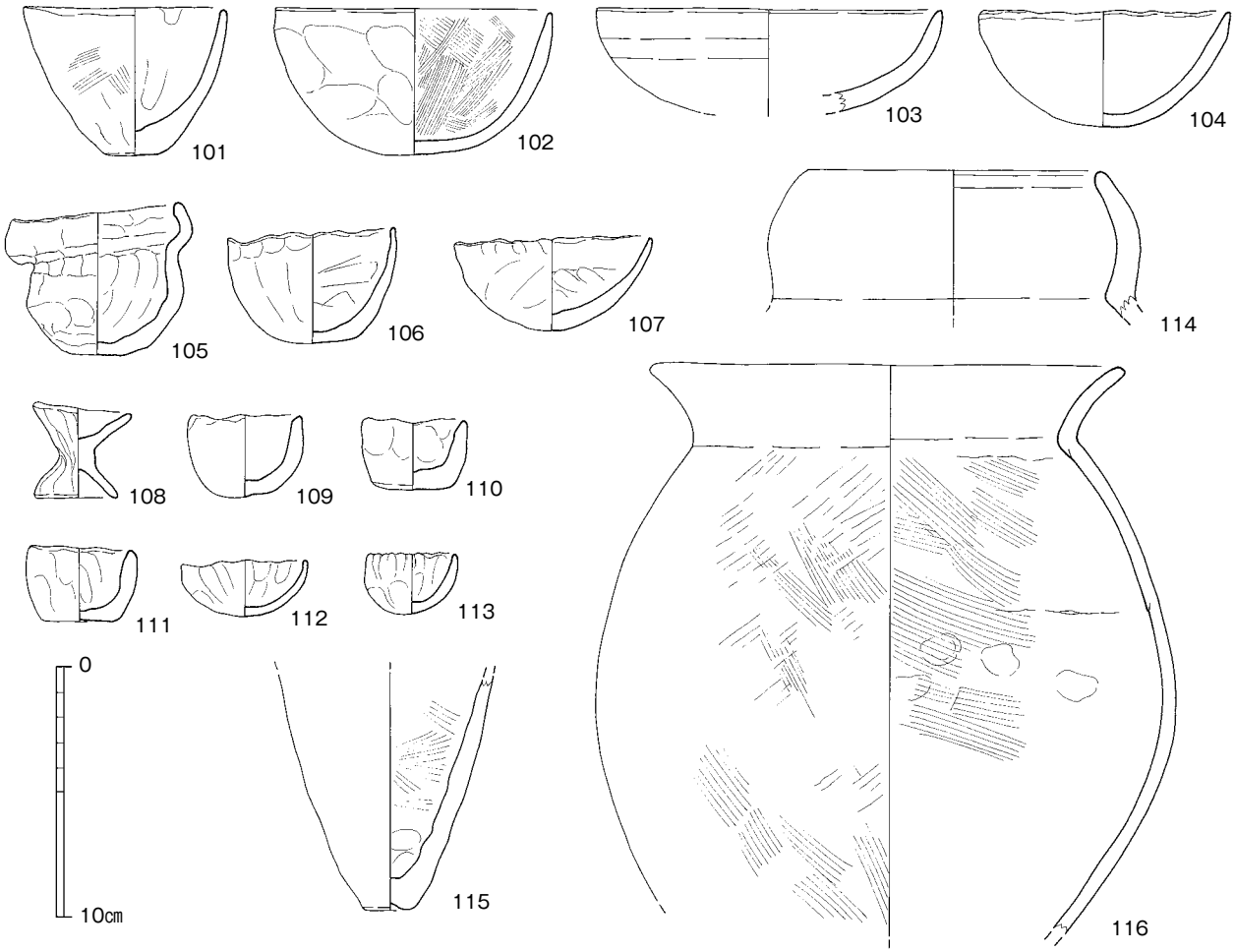
第 74 図　Ⅱ区 SX － 04 谷状落ち込み出土土器実測図その⑤（1/3）



第 75 図　Ⅱ区 SX － 04 谷状落ち込み出土土器実測図その⑥（1/3）

4孔である。器壁調整は87･89が脚内面に工具を用いたナデを施すほかは内・外面ともにハケ目調整（のちナデ）である。91～94は脚端部が強く屈曲して開くものである。うち94は3箇所に穿孔をもち、93は未貫通の孔を1つ持つ。95は完形の高坏である。坏底部はわずかに立ち上がりを有し、胴部が明瞭に屈曲して口縁部はわずかに外湾しながら強く開く。脚部は「八」の字状にゆるやかに開き中位に穿孔を持つ。器壁調整は摩耗しており不明瞭であるが部分的にミガキ痕跡が認められる。96は口縁・脚端部を欠損する資料である。坏胴部屈曲はやや顕著である。97･98は小形の鉢である。ともにやや扁平な半球形の胴部をもち、頸部は明瞭に屈曲して口縁部はわずかに内湾しながら強く開く。器壁は摩耗しており調整痕跡は不明瞭だが97の内・外面に板状工具ナデ痕跡が、98は内・外面にナデ痕跡が認められる。99･100は脚付鉢である。99は全形が、100は脚部が残る。脚は「八」の字状に開き、坏部は浅いお碗状で、口縁部は短く外反する。101～104は碗形土器である。101はやや深く底部が平底気味の資料である。他と比べて口縁部径が小さい。以上の資料の大半は古墳時代前期のものである。

102～104は浅い半球形状の碗で、底部は丸底で口縁部にかけてゆるやかに屈曲しながら立ち上がる。器壁調整は外面に工具ナデが、内面はハケ目あるいはナデ調整痕跡がみられる。105～113は手づくねのミニチュア土器で、うち105～107はやや大きい。105が二重口縁壷、106･107は碗。108は器台あるいは脚付鉢、109～113は碗である。いずれも指頭圧痕が明瞭に残り器壁は概して厚い。114は二重口縁壷の口縁部片か、または器台であろうか。ゆるやかに内湾しながら上に伸びる口縁部付近と、明瞭に屈曲して外に開く頸部が残る。全体形状は不明である。115は製塩土器か。



第76図　Ⅱ区SX－04谷状落ち込み出土土器実測図その⑦（1/3）

底部は小さな平底で、胴部は直線的に開く。口縁部は欠失する。被熱痕跡は認められない。116は甕である。底部を欠失するが、球状の胴部とやや強く締まる頸部、緩やかに外湾しながら開く口縁部が残る。器壁調整は外面がタタキのちハケ目・ナデ、内面がハケ目のちナデ。

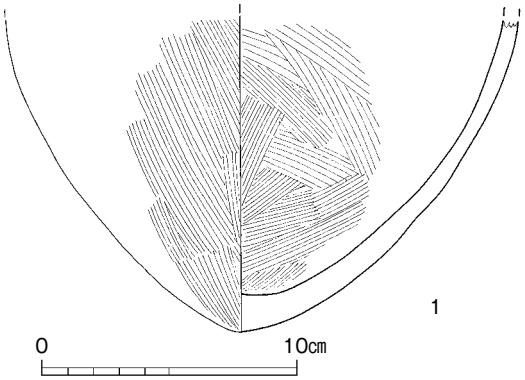
なお、ほかに第117図14に示した石錐、同15に示した石匙、第119図5に示した鉄鏃が埋土中より出土している。

（4）その他の出土遺物

ピット出土遺物（第77図）

Ⅱ区では、調査区の南側に偏って遺構に伴わない数基のピットを検出した。これは北側の遺構検出面が本来の地山からかなり大きく削平されて大半の遺構が失われていたためとみられる。これらの独立したピットは、本来は何らかの建物等を構成するものであったと考えられるが、調査でこれを把握することはできなかった。いくつかのピット内部からは土器が出土しており、ここではその中から図示に耐える大きさの遺物を紹介したい。

土師器（1） 1は長胴の尖底甕の底部である。内・外面にハケ目を施す。弥生時代末～古墳時代前期の遺物であろう。Pit80からの出土。



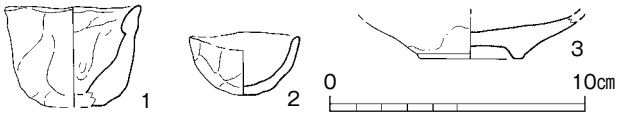
第77図　Ⅱ区ピット出土土器実測図（1/3）

Ⅱ区遺構検出時等の出土遺物（第78図）

Ⅱ区でも、厚さ最大2.5mにも及ぶ盛土とその下にある旧表土からなる表土層を重機を用いて除去したのち、人力で遺構検出を行った。ここでは、これらの作業中に出土した遺物を報告する。

土師器（1･2） 1･2は手づくねのミニチュア土器である。1は甕、2は碗を模したものか。ともに指頭圧痕がよく残り器壁の凹凸が著しい。

陶磁器（3） 3は近世の陶器で、唐津焼の小皿の底部であろう。底部内面はわずかに湾曲するが平坦で、高台外面は胴部よりスムーズに遷移し、高台内面は露胎である。露胎部は暗灰色、施釉部は淡灰緑色を呈する。17世紀前半の資料であろう。



第78図　Ⅱ区検出中等出土土器実測図（1/3）

4　Ⅲ区の調査成果

（1）概要

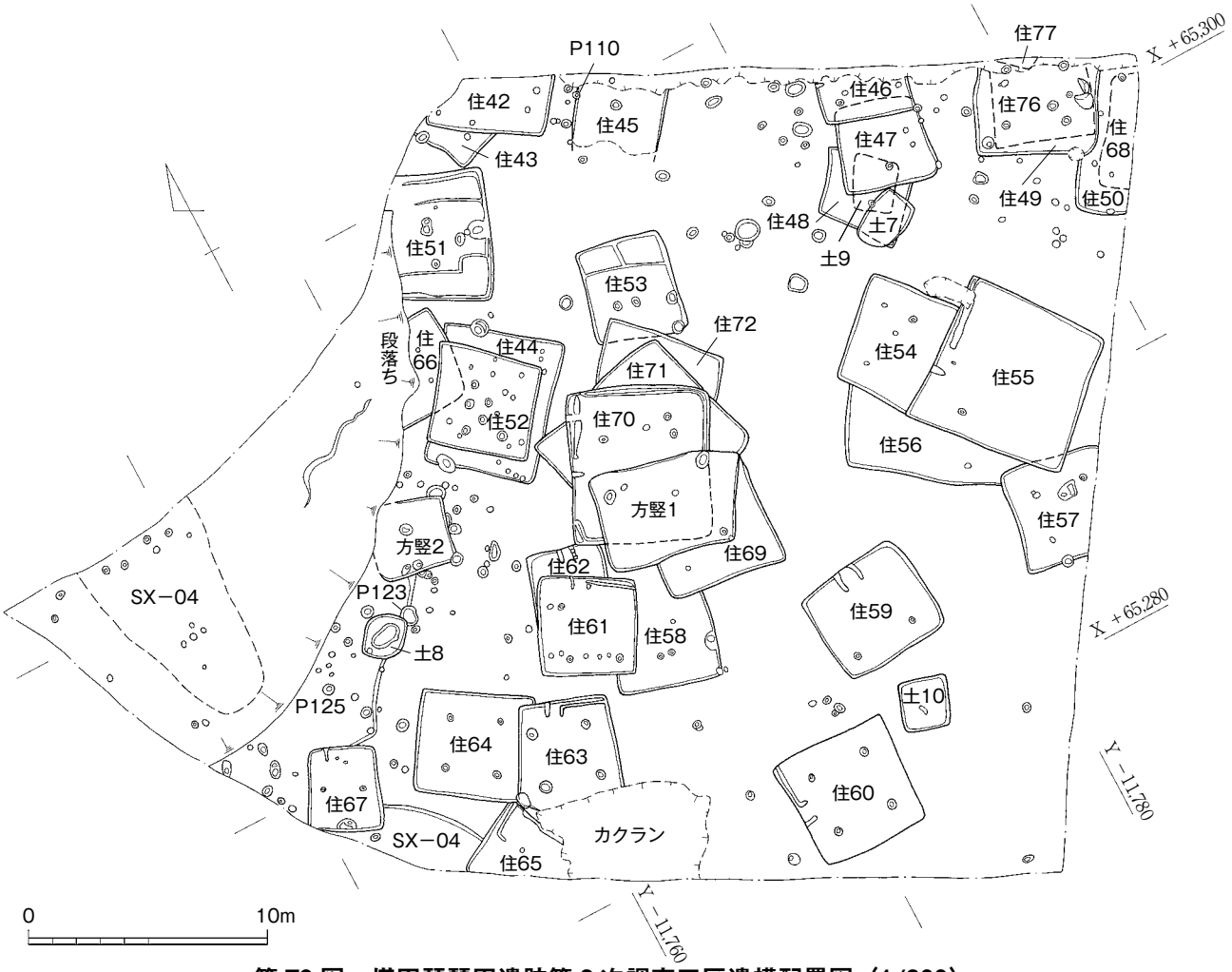
調査区の位置　Ⅲ区は調査範囲の中央東半分にあたる約 1,000㎡の範囲である。用水路を挟んでⅡ区の東側に隣接しており、南には第４次Ⅰ区が、また北には第４次Ⅱ区が隣接する。塔田琵琶田遺跡の広がりの中ではほぼ中央部やや南寄りの位置を占める。

付近の旧地形は、調査区の東寄りが最も遺構面の標高が高くなる位置となっていて、西側に向かってわずかに下がる地形を形成していたようである（第３図参照）。

土質　Ⅲ区の旧状は一枚の大きな水田であった。水田の形状は圃場整備時にわずかに変更されていたが圃場整備前と大きな違いはなく（第 2･3 図）、試掘時には全域にわたって遺構が良好に保存されていると期待されたが、重機により遺構面を露出させてみると、西側約 1/4 程はもと一段低い別の水田面であったようで、東側 3/4 程の範囲と比べ遺構面が約 50 ～ 80㎝ほど下がっており、この範囲の遺構の残りは悪かった。

付近の基本土層はⅠ区と基本的に共通しており、最上層に水田耕作土があり、その下層に粘性土からなる水田床土が貼られていた。この粘性土の下に遺構面が広がっていた。

遺構面の地山は火山灰堆積層からなり、深部の未風化部分は黄褐色粘砂質土によって形成されているが、上層に行くに従い漸移的に黒ボク化していく。海側にあたる北側・旧地形が下がる西側ほど水田耕作にともなう削平が及んでおらず、黒ボク土が広く残される一方、南側・東側では黒ボク土のみならず一部では粘性土までもが削平され、基盤層である下層砂礫土層が露出する。



第 79 図　塔田琵琶田遺跡第２次調査Ⅲ区遺構配置図（1/300）

遺構埋土　遺構の埋土は、黒褐色粘砂質土から形成されている。色調は地山である黒ボク土と類似しており、黒ボク土が削平から免れて広く展開する部分では遺構と地山との境界が不明瞭で区別が付けがたい。一方、遺構面が深く削平された部分では下層の色調の明るい土質との区別は明瞭である。また遺構の所属時期には、古墳時代前期・後期の大きく2時期があるが、一見して埋土による区別は付けがたい。

検出遺構　Ⅲ区で検出した主な遺構は、竪穴住居跡34棟、方形竪穴遺構2基、土坑4基である。このほか、多数の柱穴などを調査した（第79図）。これらの所属時期は古墳時代前期・後期を主とする。また調査区の南西端ではⅡ区から伸びてきて本調査区内を大略北西から南東に抜ける浅い谷状の地形の落ち込み（SX－04）を検出した。以下、個別の遺構について詳細を述べていこう。

（2）竪穴住居跡

調査区の全域にまたがって、計34基の竪穴住居跡を調査した。うち、古墳時代前期に属するものが17基、同後期に属するものが16基である。また、カマドを有するものが11基、うちL字状カマドを持つものが6基ある。

竪穴住居跡は全体に削平を受けていて残存状況は悪く、とくに古墳時代後期のものは浅い傾向がある。また、竪穴住居跡の床面に形成された硬化面とみられる地山表面の変化が何ヶ所かで確認されたため、付近を精査したが、主柱穴配置が判明せず住居跡としての調査を断念したものがある。また、同時並行で行っていたⅠ区東側の調査においてあらたに検出された竪穴住居跡の番号を、本調査区の番号の付与と同時並行で付与した部分があり、本調査区の住居番号のいくつかが欠番あるいは抜けているので注意されたい。以下、竪穴住居跡について説明していく。

42号竪穴住居跡（第80図、図版29）

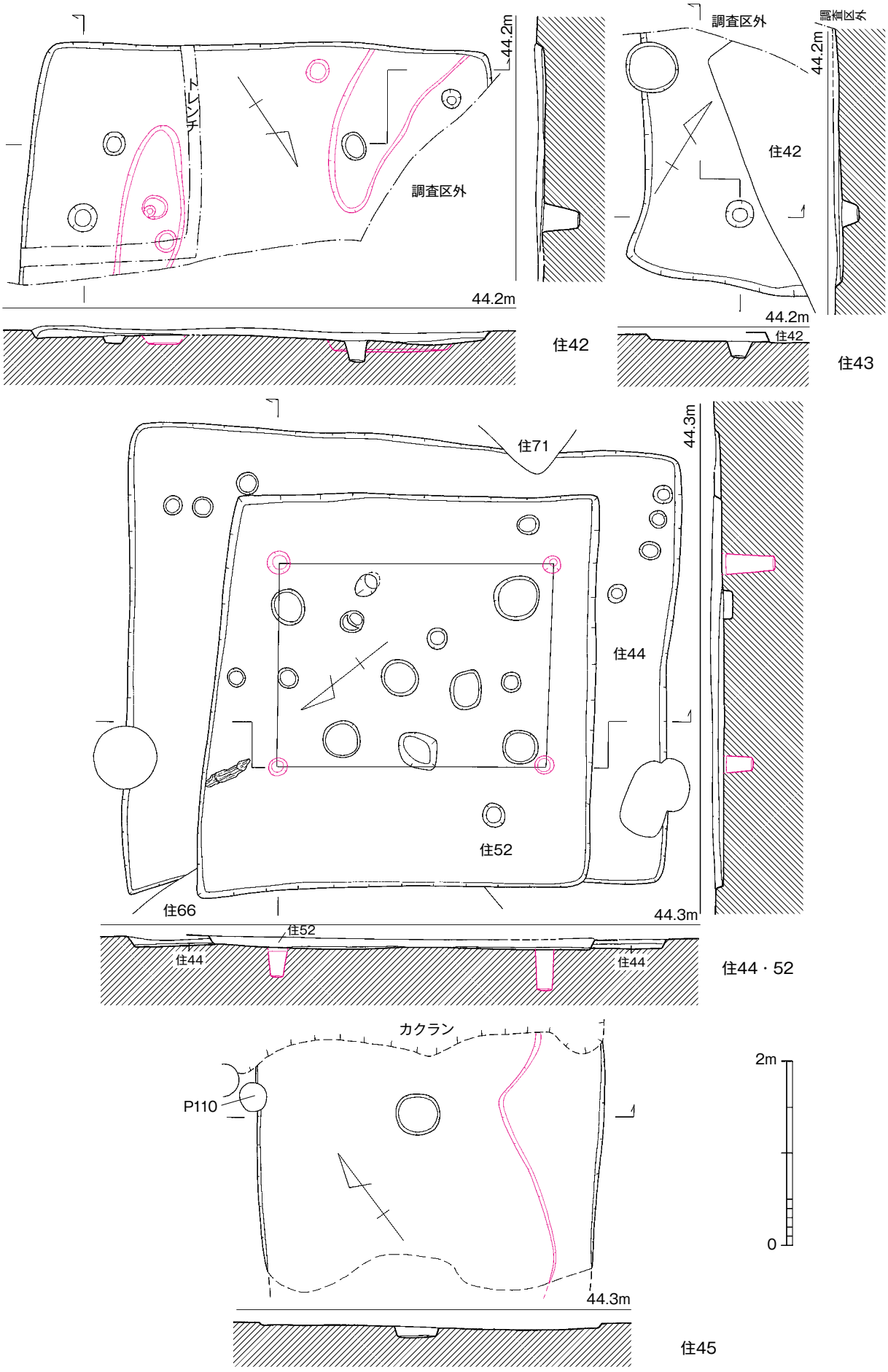
Ⅲ区北端のコーナー部付近で検出した住居跡である。43号住居跡と切り合い関係にあり、本住居跡はそれに後出する。北壁が調査区外にひろがっており、平面形態は不明であるがおそらく長方形を呈するものとみられる。主軸方位は北東－南西で、規模は東西幅のみ判明し、4.84mをはかる。南北長は調査区内で2.4m以上である。カマド・炉等はない。床面からは小ピットをいくつか検出したが、いずれも深さに乏しく主柱穴とは評価できない。住居跡の埋土は黒褐色粘質土で、壁の残存高は5㎝程度である。図示できる出土土器は1点のみであったが、他にビニール袋1袋分ほどの土師器の小片が出土しており、これらから考えて本住居跡は前期後半頃に位置づけたい。

出土遺物（第82図、図版60）

土師器（1）　1は甕形土器の胴部片であろう。球胴で頸部のくびれはややゆるい。器壁調整は内・外面調整ともにハケ目で、ケズリの痕跡が認められない。器壁はかなり厚く凹凸が著しい。

43号竪穴住居跡（第80図、図版29）

Ⅲ区北端のコーナー部付近で検出した。42号住居跡と切り合い、東半が大きく破壊される。また、北壁は北側の調査区外にひろがっていて、調査区内で確認できるのは南・西壁のそれぞれ一部ずつで全体形状は不明である。主軸方位は北東－南西で、残存規模は南北長2.72m以上、東西幅1.2m以上である。床面において小ピットを検出したが、主柱穴かどうかは不明である。住居跡の埋土は黒褐色粘質土で壁の残存高は5㎝程度である。出土土器はわずかに土師器の小片が2点あるのみで、



第 80 図　42 ～ 45･52 号竪穴住居跡実測図（1/60）

図示できるものはない。切り合い関係から古墳時代前期後半以降と考えられ、埋土や住居跡の構造などから42号住居跡を大きく下るものではなく前期の範疇でとらえられるものとみたい。

44号竪穴住居跡（第80図、図版29）

Ⅲ区北西寄りで検出した住居跡である。52・66・71号住居跡と切り合い関係にあり、本住居跡はそれらのすべてに先行する。平面形態は長方形で、主軸方位は略北東－南西にとり、規模は南北幅5.84m、東西幅4.62mをはかる。中央部を主軸方位を同じくする52号住居跡によって大きく破壊されており、本住居跡の深さがきわめて浅かったこともあって、52号住居跡のベッド状遺構を誤認した可能性も考えたが、ここでは66号住居跡との切り合い関係を重視して別個の遺構として取り扱うこととした。ただし、第Ⅳ章で後述するように52号住居跡内から出土した炭化物の年代測定結果はこれと異なる解釈を示唆しており、本住居跡が66号住居跡に先行する52号住居跡の中心部を構成していた可能性も否定できない。主柱穴は中央部を大きく破壊する52号住居跡の床面から4本検出した。深さや大きさがやや不揃いであることが気に掛かるが、配置的には適切であろう。カマド・炉等は検出されなかった。出土土器はビニール袋1袋ほどあり、いずれも土師器の小片であった。図示できるものはないが、切り合い関係より古墳時代前期後半以前と考えられ、出土土器からも矛盾はない。後述する52号住居跡出土の長胴甕が本来この住居跡に属する遺物であったと考えれば、古墳時代前期前半に位置づけられようか。

45号竪穴住居跡（第80図、図版29）

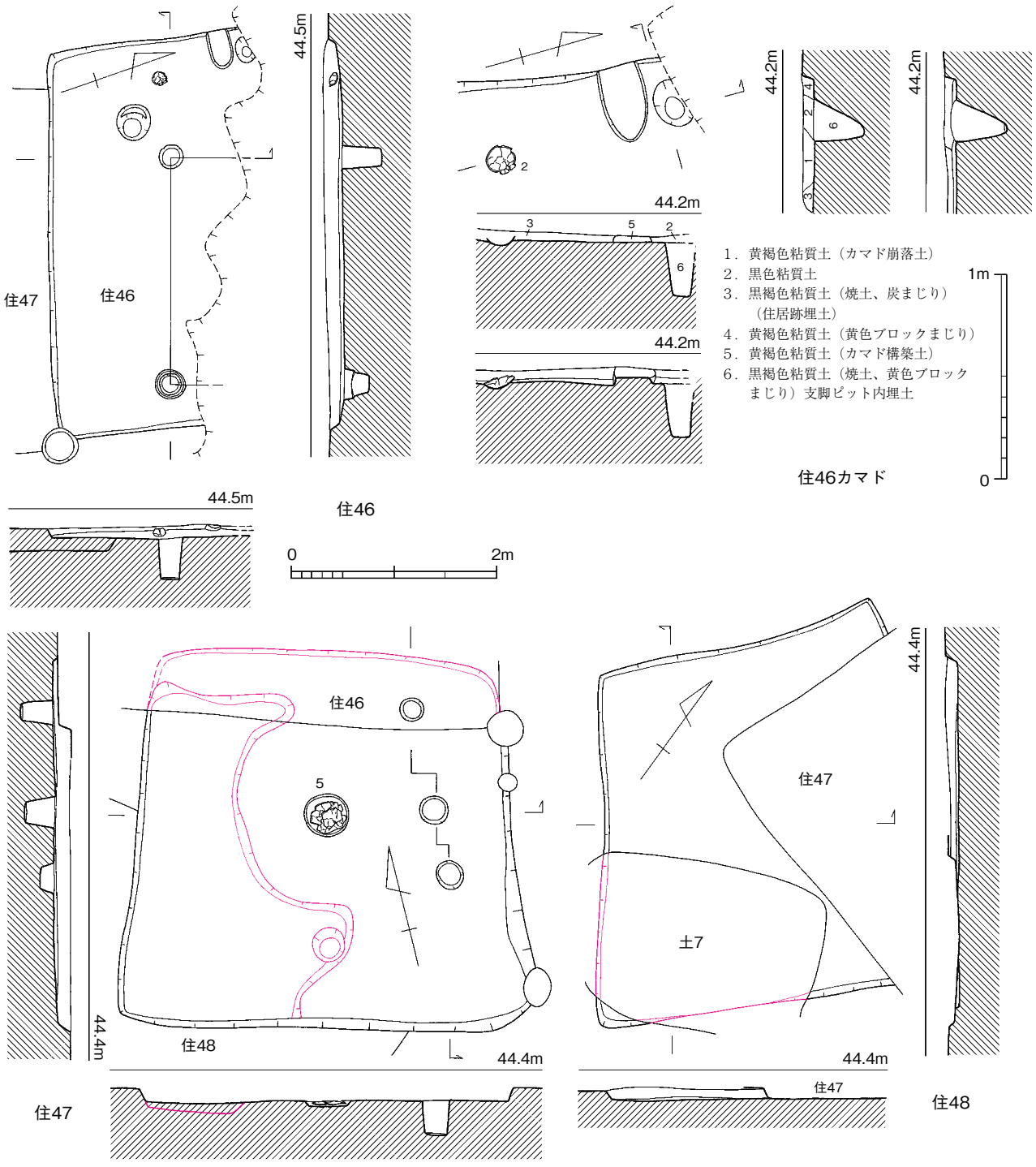
調査区中央北端で検出した。西には42･43号住居跡が、南には53号住居跡が隣接するが他の遺構とは切り合わない。著しく削平され残存深さは平均で5㎝以下で、南壁は削平により失われているほか、北壁も水田造成の影響で破壊され、東西壁の一部が残るのみである。主軸方位は北東－南西方向、規模は東西幅が3.54m、南北長は残存部分で最大2.8mをはかる。床面からは浅いピットが1基検出されたが性格は不明である。また東壁沿いに不整形の床下掘り込み遺構を検出した。出土土器は土師器の小片ばかりビニール袋半分ほどがあるが、図示できる資料はない。従って時期の決定できる資料に欠けるが、埋土や構造の特徴からみて古墳時代前期の可能性を考えておきたい。

46号竪穴住居跡（第81図、図版30）

Ⅲ区北側の東寄りで検出した住居跡である。47号住居跡の北壁を大きく破壊して作られている。住居跡の北側は後世の水田造成の影響を受け大きく破壊されており、さらに調査区外に伸びるものとみられ詳細は不明である。主軸方位は西北西－東南東にとり、規模は東西長が3.82m、南北は残存状況で2.04mをはかる。西壁にカマドを付設し、これが西壁の中央に付設されていたとして折り返すと、南北幅は推定で3.8mほどとなり、略方形の住居跡となろう。主柱穴は床面にて2本確認された。検出された2本の柱の位置から考えて4本柱を持つ住居跡である可能性が高い。住居跡内埋土は黒褐色粘質土で、床面までの壁の残存高は約10㎝である。出土土器として図示できるものは床面直上から出土した甕1点のみである。この資料からだけでは5～6世紀代の範囲の中で絞り込むことは難しいが、カマドを有することから5世紀後半以降に位置づけておきたい。他の出土遺物はビニール袋1袋ほどで、有段高坏や布留新式の甕の口縁部などがあり、前期のものが多い印象ではあるが、本住居跡の下層にある47号住居跡のものが混入した可能性が考えられようか。

カマド（第 81 図、図版 30）

西壁に内接型のカマドを作りつけている。L 字状カマドとなる可能性もあるが北側（右袖）が遺存しておらず不明である。残存している左袖は奥壁と直交方向に 40cm弱ほど伸びる。支脚石は見られず、奥壁から 13cmのところでピットを検出した。ピットの深さは 25cmであり、支脚石を埋設するものとしては少々深過ぎるように思うが、場所から考えて支脚石の抜き取り痕跡と捉えたい。この小ピットの中心で折り返すと、カマド燃焼部の幅は内法で 25 ～ 30cmほどとなり、小型のカマドが復元できる。カマド内部では住居跡内埋土の上にカマドの崩落土が堆積している。土の堆積が少ないため断定はできないが、住居の廃絶に伴ってカマドの破壊が行われなかった可能性が指摘できる。カマド左袖脇の（床面に埋没しているような図となっているが）床面直上より小形の壺が出



第 81 図　46 ～ 48 号竪穴住居跡実測図（1/60）

土しており、本住居の廃絶に直接伴う資料であろう。

出土遺物（第 82 図、図版 60）

土師器（2） 2 は小形の甕である。球胴で、頸部はやや強く締まり、頸部屈曲はやや丸みを帯びる。口縁部は外湾しながら短く開く。器壁調整は胴部内面がヘラケズリ、外面がハケ目。口縁部は外面がハケ目のちナデ、内面はナデ。古墳時代中～後期のものか。

47 号竪穴住居跡（第 81 図、図版 30）

Ⅲ区北側の東寄りで検出した住居跡である。48 号住居跡・9 号土坑を破壊し、46 号住居跡に破壊される。平面形態はややゆがんだ方形で、主軸方位は北北東－南南西、規模は南北幅が 3.54m、東西幅 3.84m である。床面からは小ピットが数基検出されたが、主柱穴となりうるものはなかった。竪穴部のほぼ中央に皿状の浅いピットがあり、第 82 図 5 に示した甕形土器の破片が敷き詰められていて、その上に炭化物混じりの土が堆積しており、これを炉跡と判断した。出土土器から古墳時代前期の遺構と考えられ、他遺構との切り合い関係上も矛盾はない。

出土遺物（第 82 図、図版 60･61）

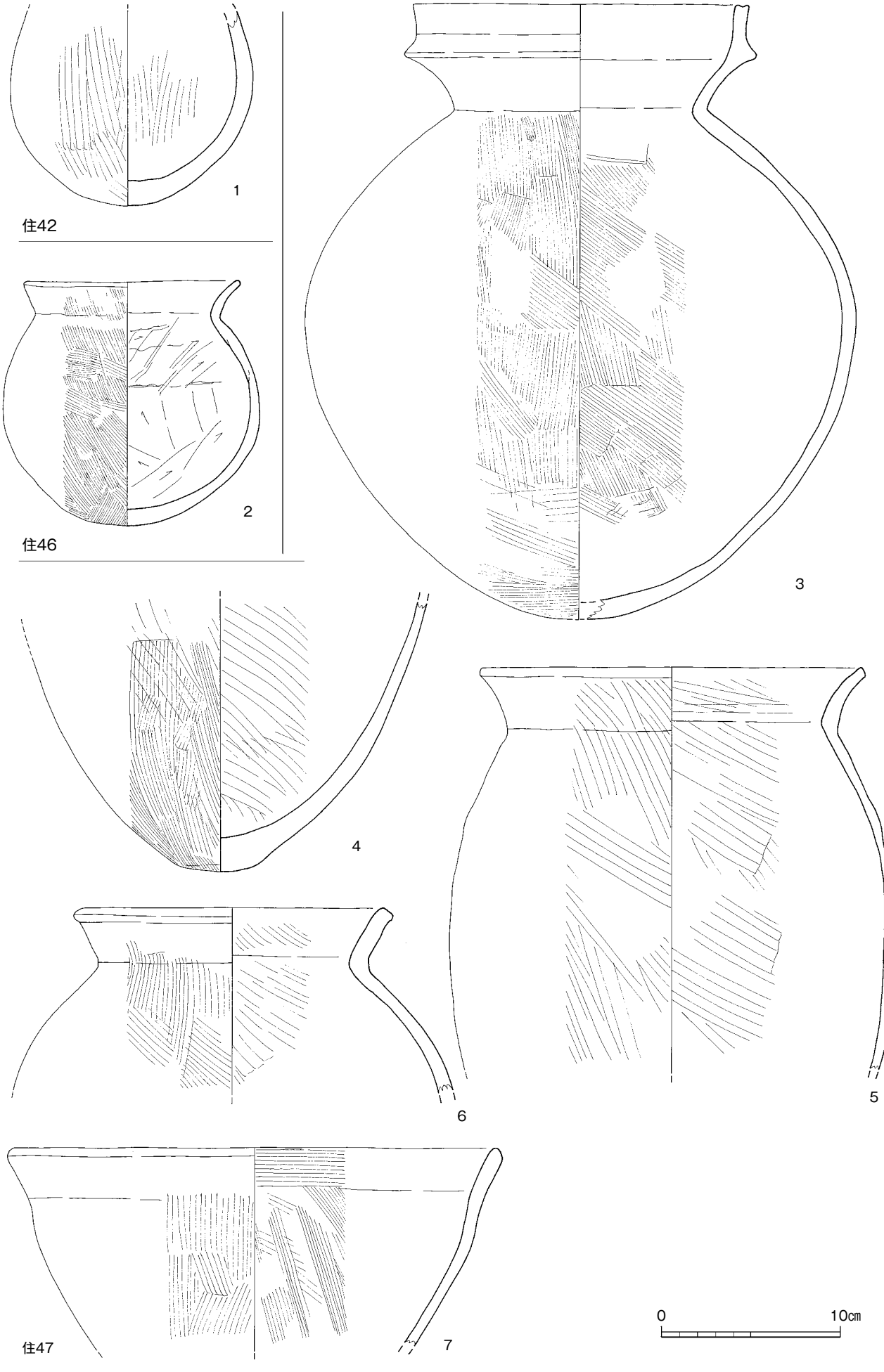
土師器（3 ～ 7） 3 は二重口縁甕である。胴部は球胴で頸部は強く締まって鋭く外反し、二重口縁部屈曲外面は外に強く突出するが内面の段は退化している。口縁部はわずかに外湾しながらほぼ直立する。器壁調整は胴部が内・外面ともにハケ目、口縁部はナデ。4･5 は在地系の長胴甕で、4 は底～胴部下半片である。底部は尖底状を呈し、胴部はゆるやかに内湾しながらきつく立ち上がる。器壁調整は内面が粗い目のハケ目、外面は下半が細かい目のハケ目、胴部中位には細かい目のハケの上から粗い目のハケ目調整を施す。5 は胴部下半～口縁部片である。胴部上半は繭状に膨らみ、頸部は鋭く「く」の字に屈曲・反転する。口縁部は外湾しながら広がり、端部は四角く収める。器壁調整は内・外面ともにハケ目。6 は短頸壺であろうか。球胴の上半部と、強く締まり短く外反する口縁部が残る。器壁はやや厚く、調整は内・外面ともにハケ目、口縁部付近のみナデを加える。7 は鉢である。底部が欠損する。胴部はやや直線的に開き、頸部はほとんどくびれず、口縁部は短く開く。器壁調整は内・外面ともにハケ目。いずれも古墳時代前期の資料であろう。

48 号竪穴住居跡（第 81 図、図版 30）

Ⅲ区北側の東寄りで検出した住居跡である。47 号住居跡、7・9 号土坑と切り合い、7 号土坑に破壊され、47 号住居跡 ･9 号土坑を破壊する。9 号土坑とはほぼ完全に重複する。主軸方位を北東－南西にとり、北壁を 47 号住居跡によって大きく破壊されているが、平面形状は歪んだ方形を呈すると考えられる。規模は南北幅が 2.80m、東西幅 3.44m をはかる。床面からは本住居跡に伴うと考えられるピットを検出することはできず、主柱穴は判然としない。また、カマド・炉跡なども見られないことから、本遺構を竪穴住居跡としてよいものかどうかやや不安が残る。他遺構との切り合い関係から古墳時代前期後半以降に位置づけられよう。出土土器には土師器が数点あるのみで図示できるものはないが、乏しい出土土器からあえて位置づけるならば前期段階の中で理解すべきか。

49 号竪穴住居跡（第 83 図、図版 31）

Ⅲ区北東部で検出した住居跡である。50 号住居跡の西壁を本住居跡が大きく破壊しているほか、本住居跡の下層から 76･77 号住居跡が検出されており、付近では最も新しい住居跡ということにな

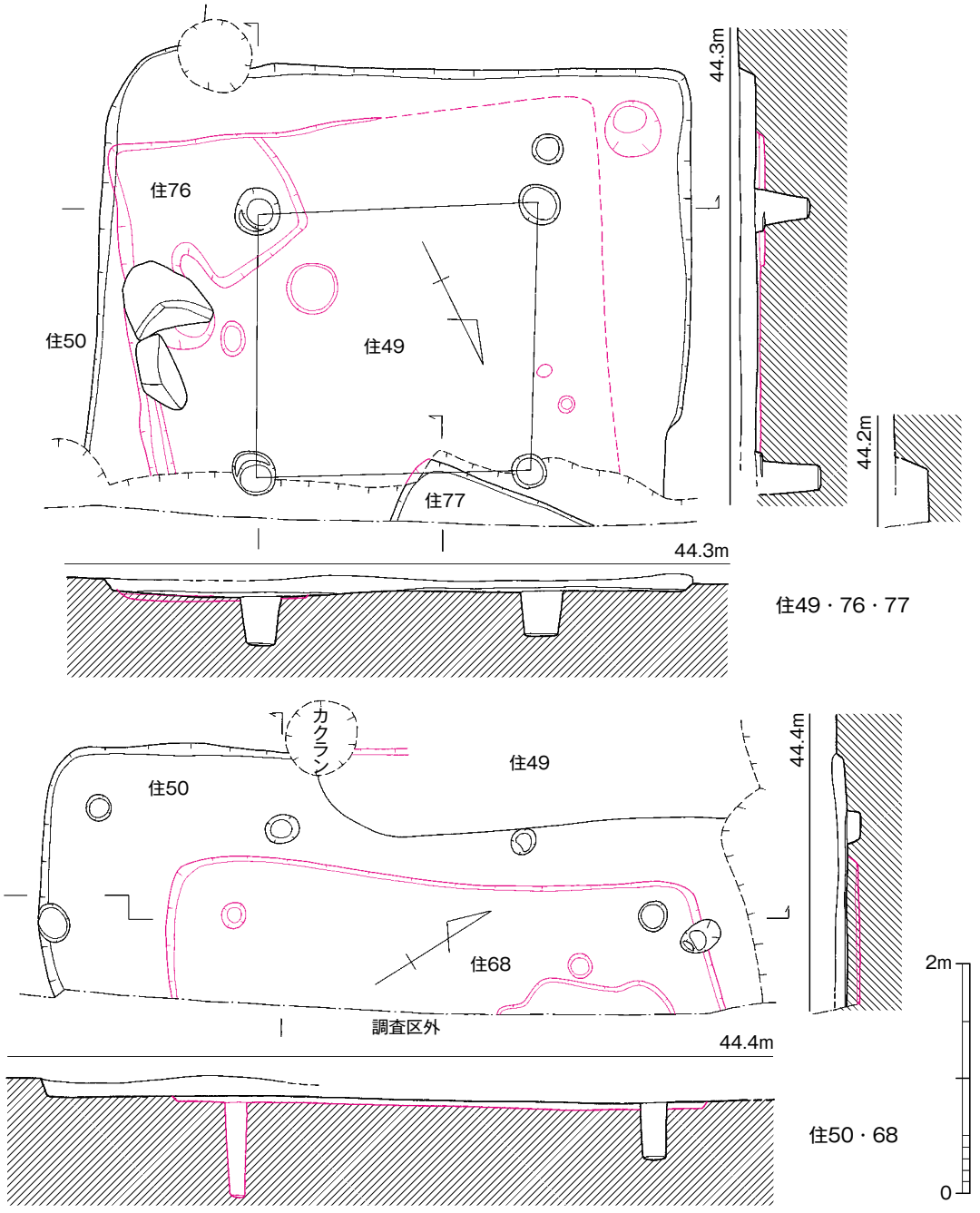


第 82 図　42・46・47 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

る。北側は後世の水田造成の影響で失われており、またおそらく調査区外へと広がるものとみられ、平面形態の詳細は不明であるが、おそらく方形を呈するものであろう。規模は残存状況で南北幅 3.7m 以上、東西は完存しており幅 5.02m をはかる。床面からは 4 本の主柱穴が検出された。いずれも深さ 40 ～ 50cmとしっかりした掘方を持っている。カマド・炉等は検出されなかった。出土土器はおおよそ古墳時代中期に属するもので、本遺構の位置付けを示すものであろう。

出土遺物（第 85 図）

土師器（1 ～ 3） 1･2 は甕の口縁部片か。いずれも、外湾しながら短く外に開く口縁部が残る。頸部は鋭く屈曲する。器壁調整は口縁部内・外面ともにハケ目のちナデ、胴部上位が残る 2 は胴部内面がケズリ、外面がハケ目。3 は高坏である。坏中位の屈曲部が残存する。屈曲部は外面に明瞭な段を形成する。以上の資料は古墳時代中期のものであろう。



第 83 図　49･50･68･76･77 号竪穴住居跡実測図（1/60）

なお、ほかに本住居跡埋土中から第 120 図 6 に示したガラス製の小玉が出土している。

50 号竪穴住居跡（第 83 図、図版 31）

Ⅲ区北東隅で検出した住居跡である。49 号住居跡と切り合い関係にあり、本住居跡の西壁を大きく破壊されている。また、本住居跡の下層からは 68 号住居跡が検出されている。住居跡の北側は後世の水田造成の影響で破壊されているほか、東側は調査区外に広がっており、南西隅のみ検出できた。そのため平面形態の詳細は不明である。おそらく方形を呈すると考えられる。検出状況での規模は、南北幅 6.3m 以上、東西幅 2.2m 以上である。床面からは小ピットが数基検出されたが主柱穴になりうるものは見られなかった。カマド・炉等の有無は不明である。竪穴部の深さは約 10㎝、出土土器は 1 点を図示した。古墳時代前期の資料で、本住居跡も古墳時代前期に属するものであろう。

出土遺物（第 85 図）

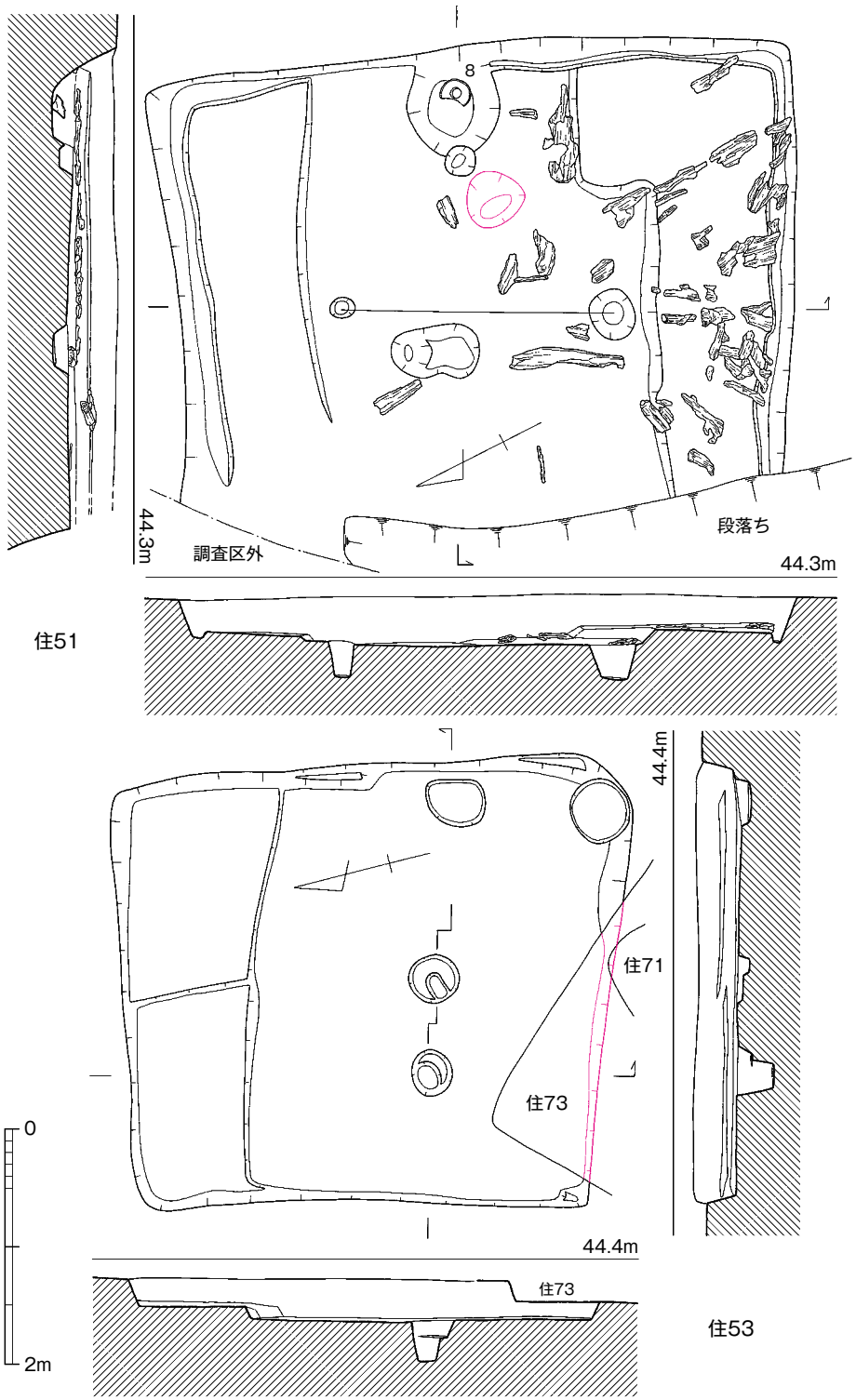
土師器（4） 4 は甕の胴上半～口縁部片か。頸部は強く締まらず、口縁部は如意状に外反する。口縁端部は四角く収める。胴部の膨らみは小さい。古墳時代前期の資料か。

51 号竪穴住居跡（第 84 図、図版 31）

Ⅲ区の北隅で検出した住居跡である。住居跡の西壁側は後世の水田開削により形成された段落ちによって削平を受けて失われており、全体形状は定かではないが、残存部分から推測すればおそらく長方形を呈すると考えられ、その規模は南北長 5.10m、東西幅は 4.1m 以上をはかる。主軸は北北東－南南西にとり、北壁と南壁のそれぞれに沿って幅 1m 前後のベッド状遺構を削り出す。南壁沿いのベッド状遺構は、東壁に沿って曲がり 70㎝ほど北に伸びる。ベッド状遺構と住居壁の間には周壁溝が掘られる。東壁の中央部には壁際土坑が付設され、中からは第 85 図 8 に示した高坏の坏部片が出土したが、完形資料ではなく、廃絶時に投棄されたものであろう。床面には主柱穴が 2 本掘られている。住居の中心には、明確に図示できてはいないが、浅いくぼみが確認できた。周囲には被熱の痕跡等は残存してはいないが、炉である可能性が高い。住居跡内の埋土は黒褐色粘質土で壁の残存高は 30㎝前後である。住居のとくに南壁沿いから中央にかけては多数の炭化材が出土した。これらはおおよそ南壁から住居跡の中央部に向かって収束するように並んでおり、おそらく垂木材とみられる。ただし、主柱となるような大型の炭化材は認められず、また柱穴には柱痕も認められなかったことから、柱を抜き取ったあとで主に南側の垂木材を屋根とともに燃やした可能性が考えられる。出土土器には壷・甕・高坏があり、やや時間的な幅があるが、その中でも新しい時期に当たる古墳時代前期後半に廃絶期を求めたい。

出土遺物（第 85 図、図版 61）

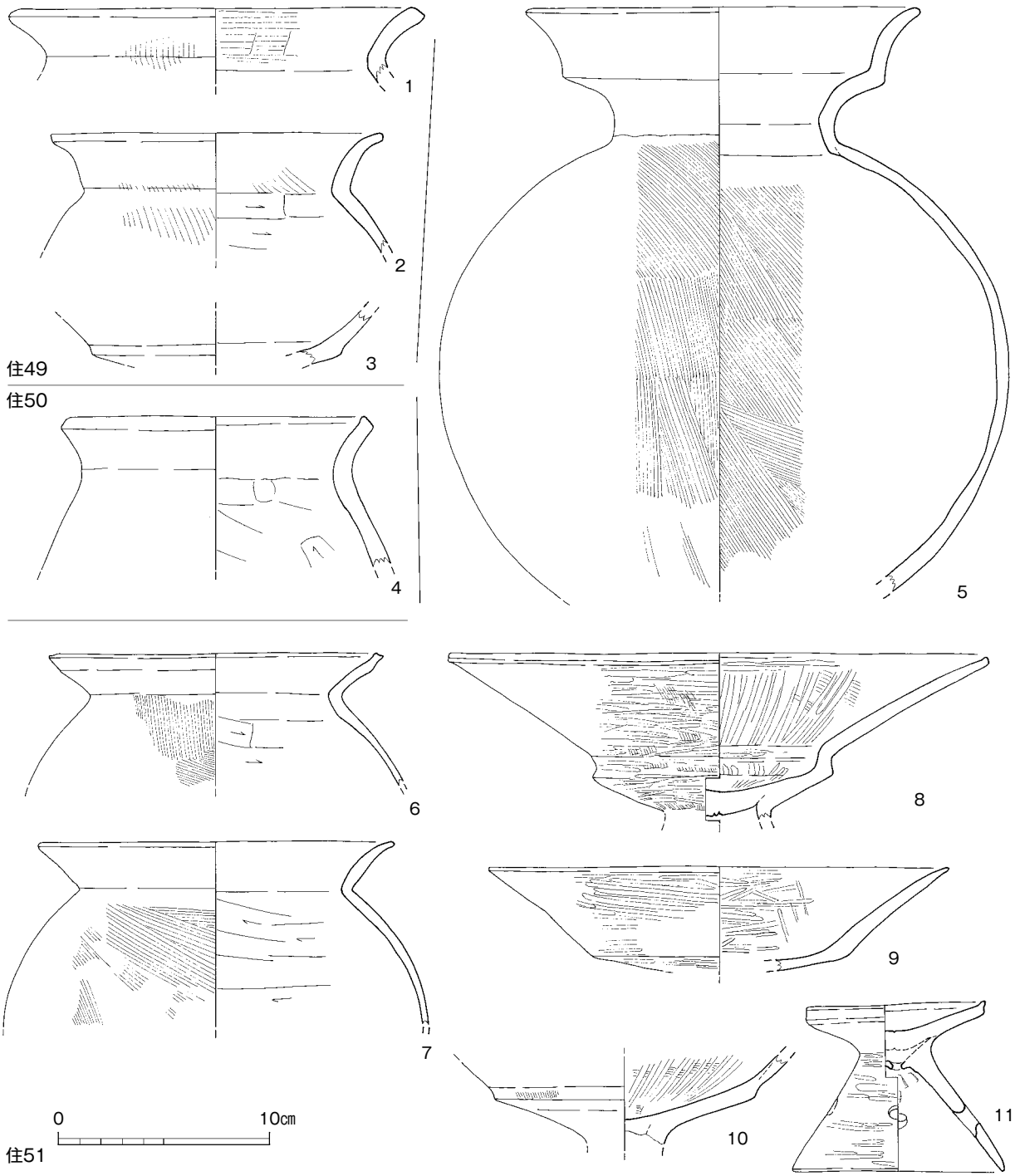
土師器（5 ～ 11） 5 は二重口縁壷で底部以外が残る。球胴で、頸部は強く締まってから短く急激に外湾する。口縁屈曲部内面には段を有し、口縁は広く開く。口縁部は内・外面ともにナデ、胴部はハケ目。6･7 は甕形土器の胴上半～口縁部片である。胴部は球状で内面を良くケズり器壁を薄くする。外面はハケ目調整。頸部はともに良く締まり、口縁部は 6 が布留古式の様相を示し直線的に外反して端部を内湾させる。7 はやや新しい様相を示し、ゆるやかに外湾する。8 ～ 10 は高坏である。8 は坏胴部に段を持つ。底部はゆるやかに湾曲し、体部で一度屈曲して短く上方に伸びたのち、再び屈曲して直線的に外に開く。内・外面ともに丁寧なミガキを施す精製品である。9 は体部が一



第 84 図　51･53 号竪穴住居跡実測図（1/60）

度屈曲するタイプである。底部はゆるやかに湾曲し、体部で広角に屈曲して口縁部はわずかに外湾しながら長く伸びる。内・外面ともにミガキ調整を施す。10 は坏屈曲部のみが残存する資料である。屈曲部外面には明瞭な段を形成する。坏内面は放射状のミガキ、外面はハケ目のちナデ仕上げ。11 は布留系の小型器台である。脚部は直線的に強く開き、坏部は広がって端部を短く上方に引き上げる。脚部中位に 4 孔を穿つ。器壁調整は摩耗により観察しがたいが坏・脚部外面にミガキの痕跡が認められる。以上の資料は布留（古～新）式に該当し、古墳時代前期に位置づけられる。

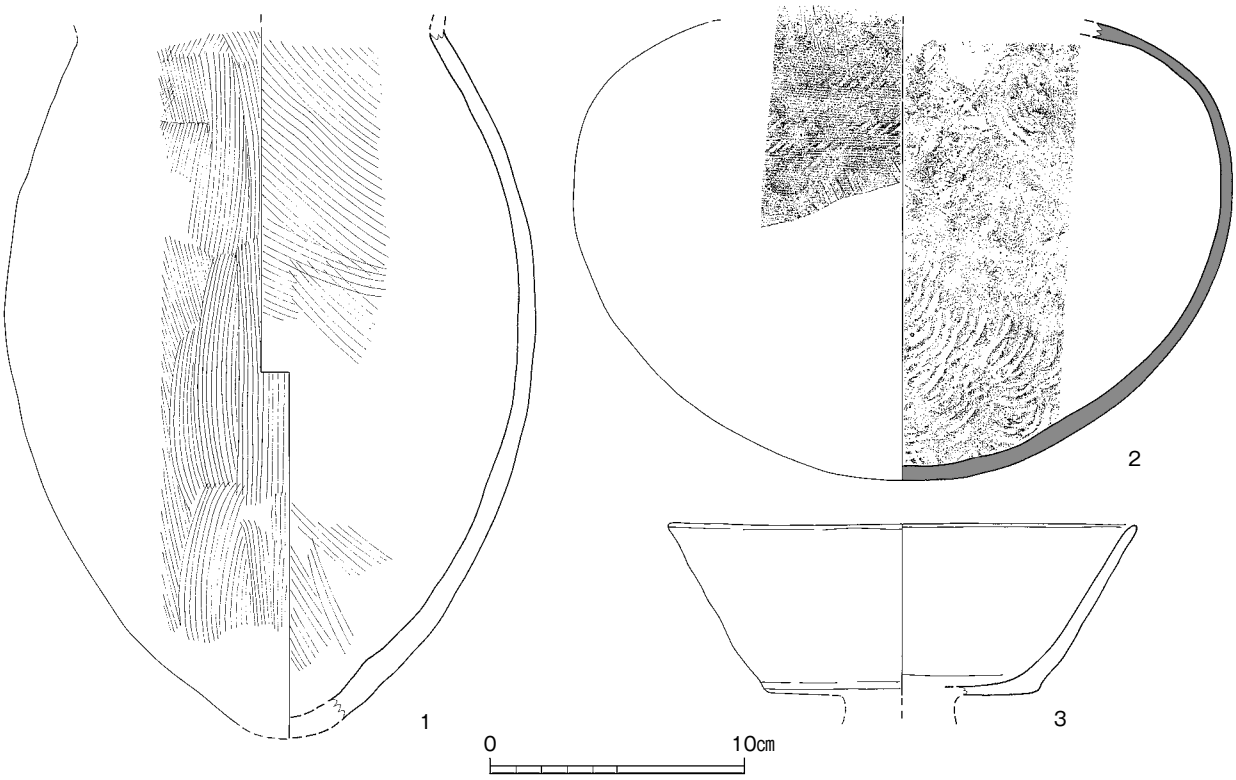
なお、ほかに第 117 図 11 に示した打製石鏃が埋土中から出土している。



第 85 図　49 ～ 51 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

52 号竪穴住居跡（第 80 図、図版 32）

調査区の北西寄りで検出した。44 号住居跡と軸を同じくして重複し、これを大きく破壊するほか、66 号住居跡の一部も破壊する住居として報告するが疑問も残る（詳しくは 44 号住居跡の報告と第Ⅳ章－ 2 を参照されたい）。主軸方位は略北西－南東、平面形状はややゆがんだ方形で、規模は東西幅が 4.14m、南北長が最大 4.20m をはかる。遺存深さは浅く、深いところでも 10㎝内外である。床面からは数多くの小ピットが検出されたが、主柱穴と評価できるものはない。出土土器には古墳時代前期・6 世紀代の 2 者があり、切り合い関係から本住居跡は 6 世紀代に位置づけたい。



第 86 図　52 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物（第 86 図）

須恵器（2）　2 は壷の胴部片である。やや扁平につぶれた球状を呈し、内面には青海波文が明瞭に残る。外面は並行タタキのちカキメを施す。

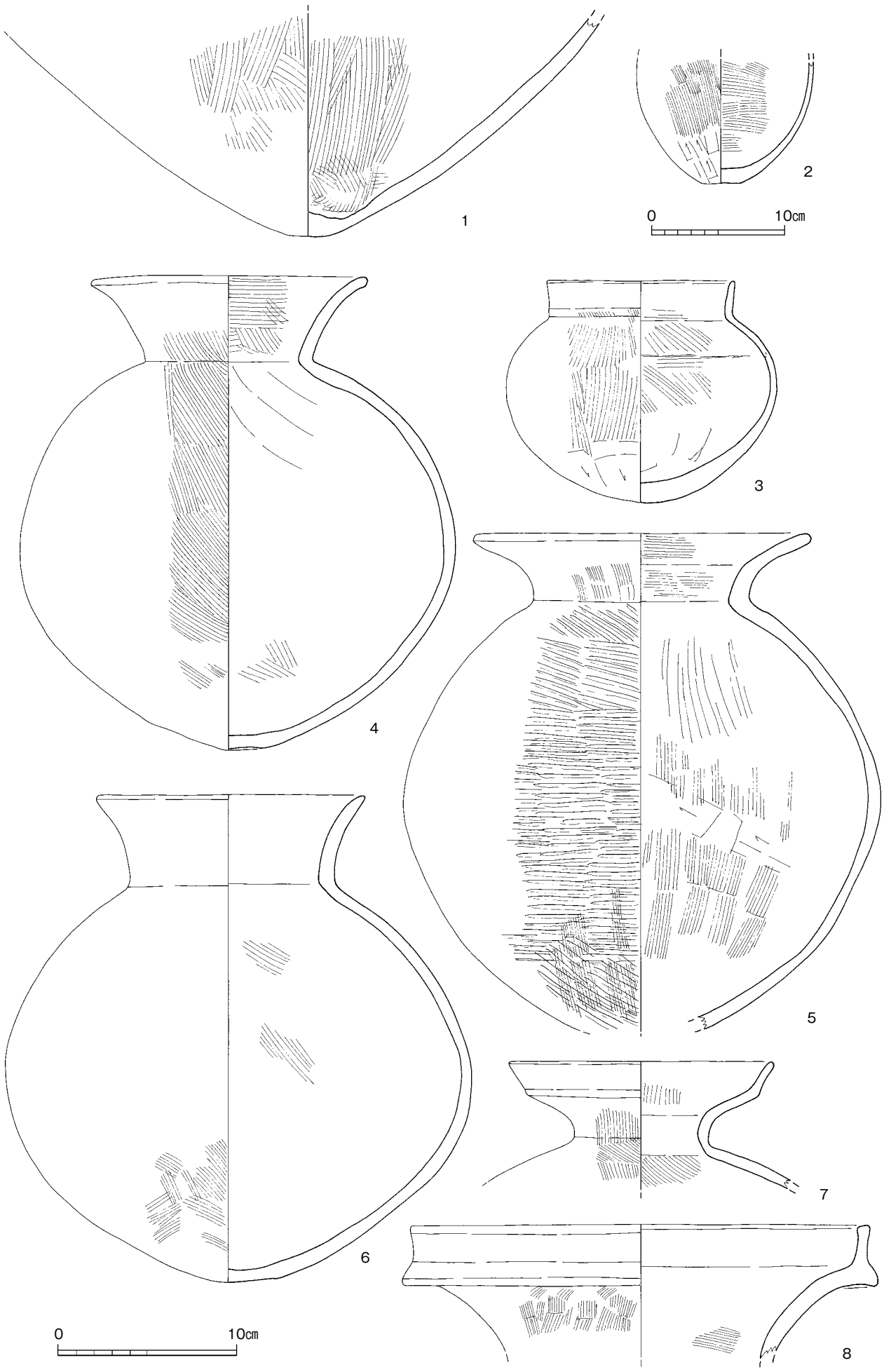
土師器（1･3）　1 は在地系長胴甕の胴部片である。底部は欠失するがおそらく尖底、胴部は長卵形で内・外面にハケ目を施す。口縁部も欠損する。3 は高坏の坏部片か。底部はほぼ平坦で、体部で鋭く屈曲し、口縁部は斜め上方に直線的に伸びる。

53 号竪穴住居跡（第 84 図、図版 32）

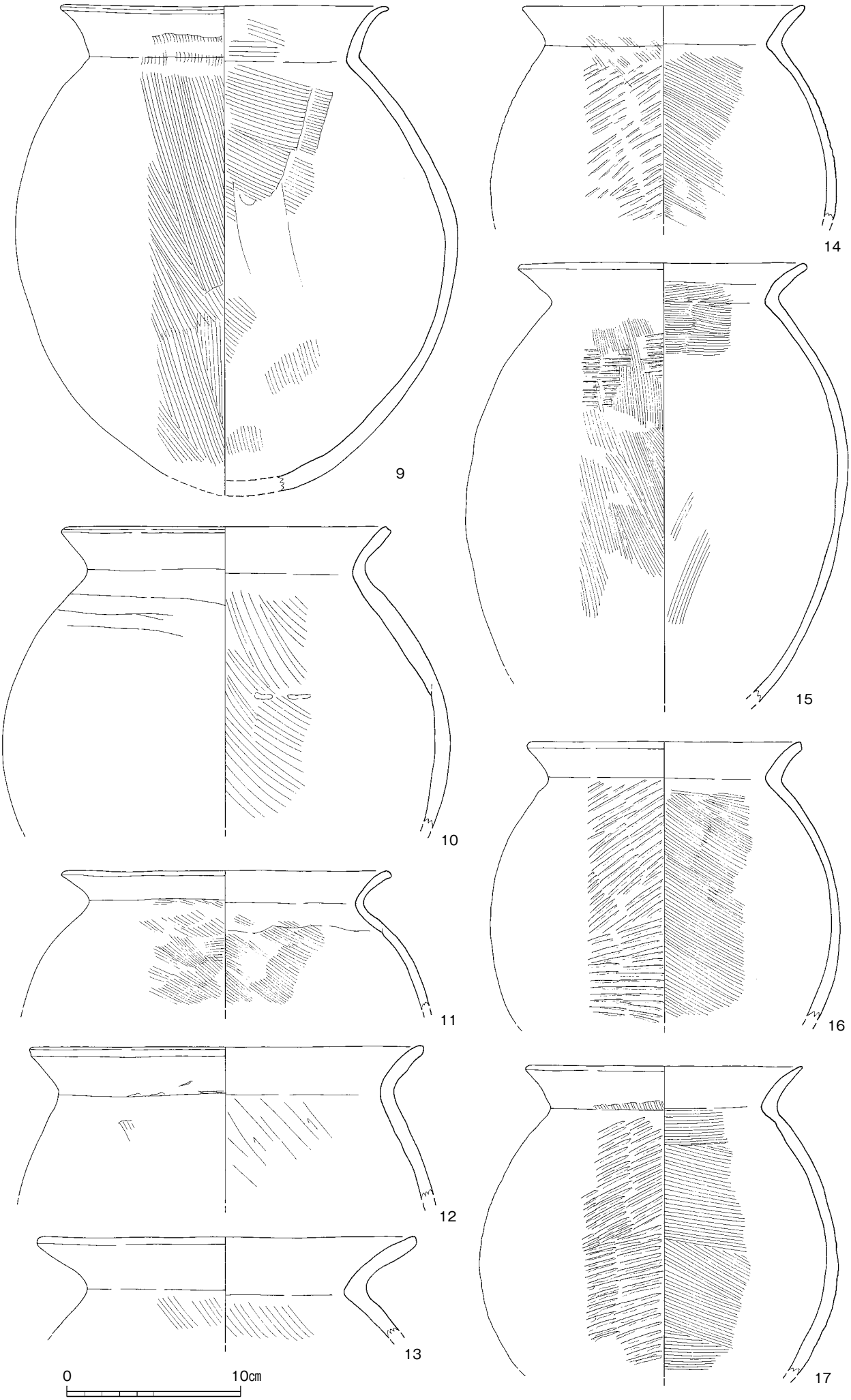
Ⅲ区中央北寄りで検出した住居跡である。南に隣接する 71･73 号住居跡と切り合い関係にあり、本住居跡の南壁を大きく破壊されている。平面形態はわずかに南北方向に長い長方形でゆがみが大きく、主軸は北北東－南南西にとり、規模は南北長が最大 4.08m、東西幅が最大 3.66m である。北壁沿いに、幅 1m 前後のベッド状遺構が付設されており、さらに中央から東側が一段高くなっている。床面からは小ピットを数基検出したが、主柱穴と評価できる位置には確認できなかった。また､炉跡も検出されなかった｡住居内の埋土は黒褐色粘質土で壁の残存高は 30㎝前後とかなり深い。なお、住居跡内からは多数の土器が出土したがいずれも床面からは浮いた状態であり、竪穴部中央付近がやや深く、周囲がやや浅い位置で出土することから、竪穴部内がレンズ状に半分ほど埋没した状態で周囲から土器が投棄されたものと推測される。これらの出土土器の時期はやや幅があるが古墳時代前期の中で収まり、本住居跡の埋没時期は古墳時代前期後半に位置づけたい。

出土遺物（第 87 ～ 90 図、図版 61 ～ 63）

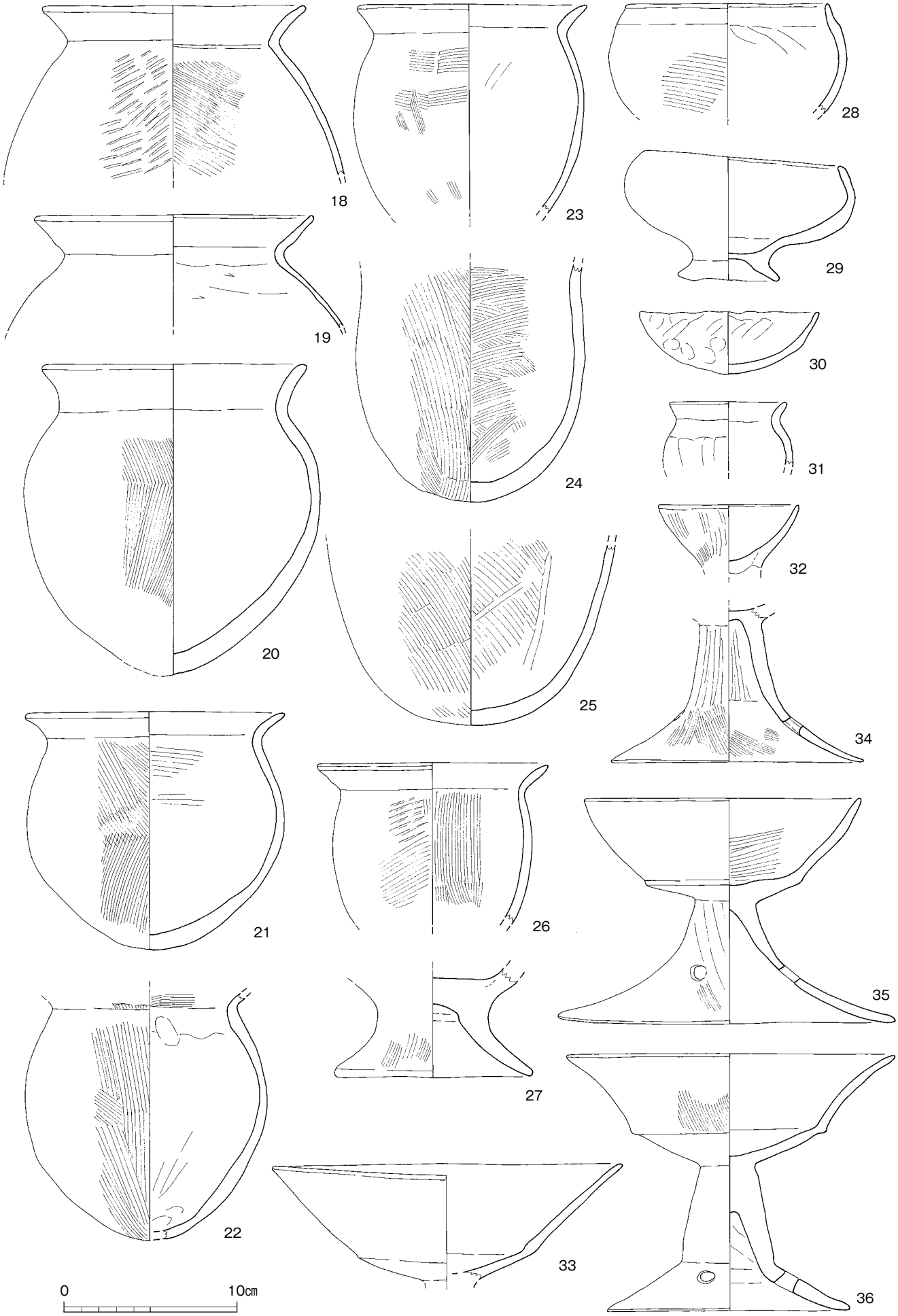
弥生土器（1･2）　1･2 は弥生土器と判断した。1 は小さなレンズ状底の底部でおそらく壷であろう。底部から直線的に開く胴下半までの資料で、器壁調整は内・外面ともにハケ目。2 は小さな平底を



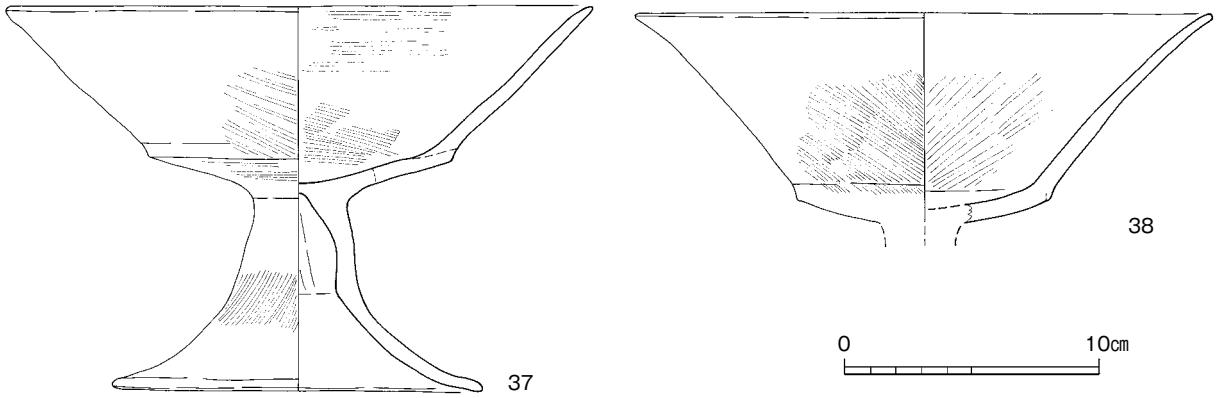
第 87 図　53 号竪穴住居跡出土土器実測図その①（1・2 は 1/4、他は 1/3）



第 88 図　53 号竪穴住居跡出土土器実測図その②（1/3）



第 89 図　53 号竪穴住居跡出土土器実測図その③（1/3）



第 90 図　53 号竪穴住居跡出土土器実測図その④（1/3）

持つ長胴甕の胴部片か。小形品である。器壁調整は外部下半が板状工具ナデ、上半はハケ目、内面は横位のハケ目。ともに古墳時代前期まで残存する可能性はある。

土師器（3 ～ 38）　3 は小形の短頸壷である。胴はややつぶれた球状で、頸部はしっかりとくびれ、口縁部は短く直立する。調整は胴部内・外面ともに下半が板状工具ナデ、上半がハケ目。4 ～ 6 は短頸広口壷である。いずれも球胴で、頸部は強くくびれ、口縁部は外湾しながら斜め上方に開く。口縁部の開きは 5 が最も開き、6 が最も狭い。器壁調整は、4･6 が内・外面ともに丁寧なハケ目とナデで仕上げる一方、5 は胴部外面にタタキ、内面にはヘラケズリ痕跡を残し、ハケ目とヘラナデにより仕上げを行う。7･8 は二重口縁壷の胴上位～口縁部片である。7 は頸部が強く締まったのち急激に湾曲しつつ開き、口縁部は斜め上方に短く開く。二重口縁屈曲部は鋭いが外面突出はない。8 は強く開く頸部上半～口縁部までの資料である。二重口縁屈曲部は鋭く、外面は強く突出する。口縁部は直上に短く伸びる。調整は胴部が内・外面ともにハケ目、口縁部はナデ。9 ～ 23･26 は球状あるいは長卵形の胴部を持つ甕である。9･22 はやや長胴気味､15 は長胴､他はほぼ球胴であろう。12 を除き頸部は鋭く屈曲する。12 の頸部はやや締まりが悪く、如意状に屈曲する。口縁部はほとんどが短く外湾しながら外反するが、19 は先端部にかけてわずかに内湾し布留式の古い段階、28 も口縁端部のみわずかに内湾傾向を示し古い要素が残存する。器壁調整は、大半が内面がケズリでまれに上位にナデやハケ目を施す。外面はハケ目で一部にタタキ痕跡を残し、口縁部は内・外面ともにナデ調整。9 ～ 13･15 は大形品、14･16 ～ 19 は中形品、20 ～ 23･26 は小形品である。24･25 は胴部が長卵形の甕の底～胴部片である。底部は丸底で、胴部上半は遺存しない。器壁調整は内・外面ともにハケ目。27 は脚付鉢の脚部であろう。脚は強く湾曲しながら「八」の字に開く。鉢底部はやや平底状を呈する。28 は碗である。底部は欠損する。胴部が強く湾曲し、口縁端部をわずかに外湾させる。29 は脚付碗である。脚は小さく、短い。碗部は胴中位で強く内湾する。30 は碗で、指頭圧痕が多く残り手づくね感のある資料である。31 はミニチュア土器の甕で、手づくねの資料である。32 は布留系の脚付杯の坏部である。外面がミガキ、内面は丁寧なナデ調整で仕上げる精良な資料である。33 ～ 38 は高坏である。33･38 は坏部、34 は脚部が残り、他は全形が復元できる資料である。坏部形状は、33 が体部屈曲の角度が鈍角でやや古い様相を示し、他は比較的明瞭に屈曲して外面に段を形成する。口縁部形状は 33･37 が直線的に長く伸び、35 がわずかに内湾、36･38 が外湾しながら伸びる。脚部形状は、34･35 がゆるやかに「八」の字状に湾曲しながら開き、36 は脚下位、37 は脚上位で明瞭に屈曲して開く。脚中位の穿孔は、34 が 2 孔、35･36 は 3 孔、37

は遺存部に穿孔が認められない。器壁調整は、34 の脚部上位と 35 の坏部内面にミガキ、他はハケ目とナデ調整を施す。以上の資料はやや時期的な幅があるが古墳時代前期の中で理解できよう。

なお、ほかに本住居跡埋土中からは第 119 図 10 に示した鉇片が出土している。

54 号竪穴住居跡（第 91 図、図版 32）

Ⅲ区中央東端で切り合う住居跡群のうちの 1 つである。55・56 号住居跡と切り合い関係にあり、55 号住居跡よりも古く、56 号住居跡よりも新しい。平面形態は方形を呈すると思われるが、南壁が 55 号住居跡により完全に破壊されているために不明である。主軸方位を北東－南西にとり、規模は南北長 3.9m 以上、東西幅 4.86m である。床面において小ピットを検出した。うち主柱穴になりうるものはない。住居跡の埋土は黒褐色粘質土で壁の残存高は 3㎝程度である。出土土器や切り合い関係から古墳時代前期の遺構と考えられる。

出土遺物（第 94 図、図版 64）

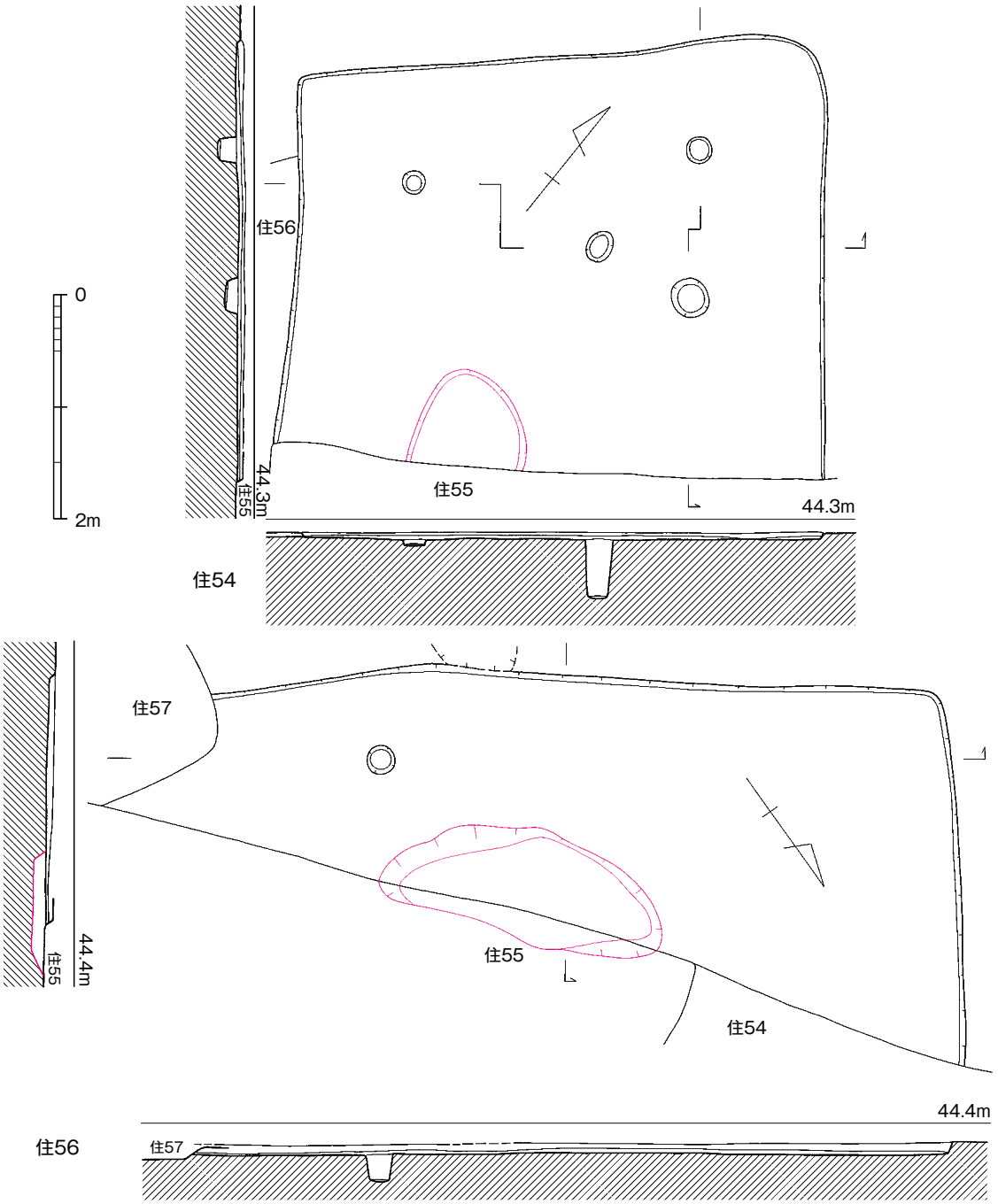
土師器（1 ～ 3） 1･2 は甕形土器の口縁部片か。1 は在地系長胴甕の系譜に位置づけられる長胴甕の口縁部片であろう。胴部の膨らみは乏しく口縁部は短く外反する。器壁調整は内・外面ともにハケ目。2 も長胴甕の口縁部片か。頸部屈曲はゆるく、口縁部は如意状に外反する。小片で径が復原できず、傾きも自信がない。3 は壷の底部片か。丸底に円盤を貼り付けたような形状である。器壁は薄く小形品か。以上の資料はやや位置づけが難しいが古墳時代前期の中で考えられるか。

55 号竪穴住居跡（第 92 図、図版 32）

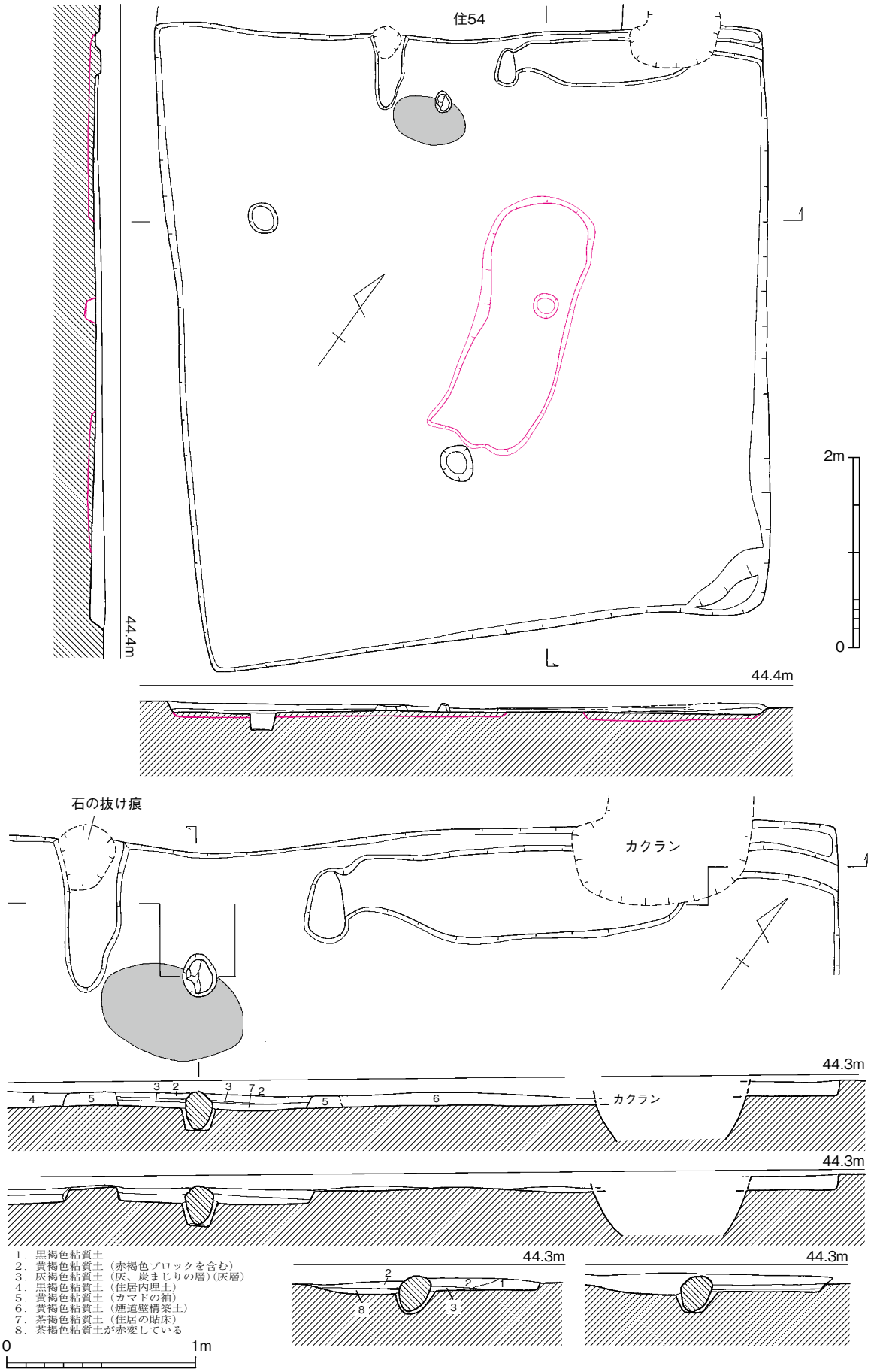
Ⅲ区の中央東端で切り合いを持つ住居群のうちの 1 つで、最も新しい住居跡である。54・56・57 号住居跡と切り合い、本住居跡がそれらより後出する。平面形態はややゆがみのある方形で主軸を北西－南東方向にもち、規模は南北長が最大 6.76m、東西幅が同じく 6.36m である。西壁の中央に L 字状カマドを付設する。床面からは小ピットをいくつか検出したが、どれも主柱穴とするには困難であり、主柱穴については判然としない。床面の広い範囲に硬化面が形成されており、これを除去したところ 5㎝ほどの厚さの貼床が広い範囲に施されていた。住居跡の残存状況はよくなく、壁の遺存高は 10㎝前後で、埋土は黒褐色粘質土であった。出土土器は 5 世紀後半～ 6 世紀前半代に該当し、切り合い関係も勘案して本遺構の埋没時期を 6 世紀代の早い段階に求めておきたい。

カマド（第 92 図、図版 33）

住居跡の北壁中央部に内接型の L 字状カマドを付設する。煙道は北壁に沿って東側に伸びる。煙道の幅は 10㎝、煙道壁の幅はもっとも厚い部分で 45㎝を測る。煙道内には茶褐色粘質土が 5㎝ほど堆積している。袖の残りはかなり悪く、住居跡北壁より直角に伸びる左袖は長さ約 80㎝程が確認されたが、煙道壁より直角に曲がって南に伸びる右袖は 35㎝程度しか残されていなかった。後述する被熱赤変部の範囲から考えて、本来の袖の長さは奥壁から 1m 以上あったものとみたい。なお、袖間の距離は内法で約 1.2m であり、この点からも本カマドが大型のものであったことがわかる。奥壁から 60㎝ほどの床面中央に小ピットを穿ち、長さ約 18㎝の河原石が支脚石として埋設されている。支脚石は根が 10㎝地中に入り、地上部は 8㎝程度であるが、破損しており、おそらく本来はさらに地上に突出していたものであろう。両袖間の支脚前庭部には 75㎝× 45㎝の楕円形状に被熱で住居床が赤変した硬化面が確認できる。カマド内部には薄く灰層が堆積し、その直上にカマド崩落土をブロック状に含む土が堆積している。住居廃絶時に伴ってカマドは破壊したが、灰の



第 91 図　54･56 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 92 図　55 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）

掻き出しは行わなかったと考えられる。

出土遺物（第 94 図、図版 63）

土師器（4 ～ 12） 4 は甑の胴～口縁部片である。胴下半はゆるやかに内湾し、口縁部に向かって直線的に立ち上がる。外面中位に把手の接合痕跡が認められる。底部は欠失する。器壁調整は外面と内面上位がハケ目、内面中位以下はケズリ。5 ～ 9 は球胴の甕であろう。5 は胴部中位より上が遺存する。頸部屈曲はゆるやかで、口縁部は外湾しながら短く開く。6 ～ 9 は口縁部付近のみ残存する資料である。いずれも頸部内面に明瞭な稜を形成し、口縁部は 8 がやや直線的に伸びるが他は先端に向かって細くなりながら外湾する。器壁調整は胴部が遺存する資料は内面がケズリ、外面はハケ目。口縁部はハケ目のちナデ仕上げ。5 ～ 7 は中形、8･9 は大形の資料である。10 は碗の口縁部片である。底部は欠失し、口縁部直下で強く内湾する。内・外面ともにミガキ調整を施す。11 は小形の短頸壺か。短く外反する口縁部と、扁平な胴部上半が残る。12 は蛸壺である。口径 6.6㎝、器高 9.2㎝ほどをはかり底部がすぼまる。胴部中位に 1 孔を穿つ。以上は 5 世紀後半～ 6 世紀前半の資料であろう。

なお、ほかに第 117 図 21 に示した磨製石包丁が本住居跡の床下掘り込み調査中に、また第 119 図 8 に示した鉄鏃の茎部片が竪穴部埋土中から出土した。

56 号竪穴住居跡（第 91 図、図版 32）

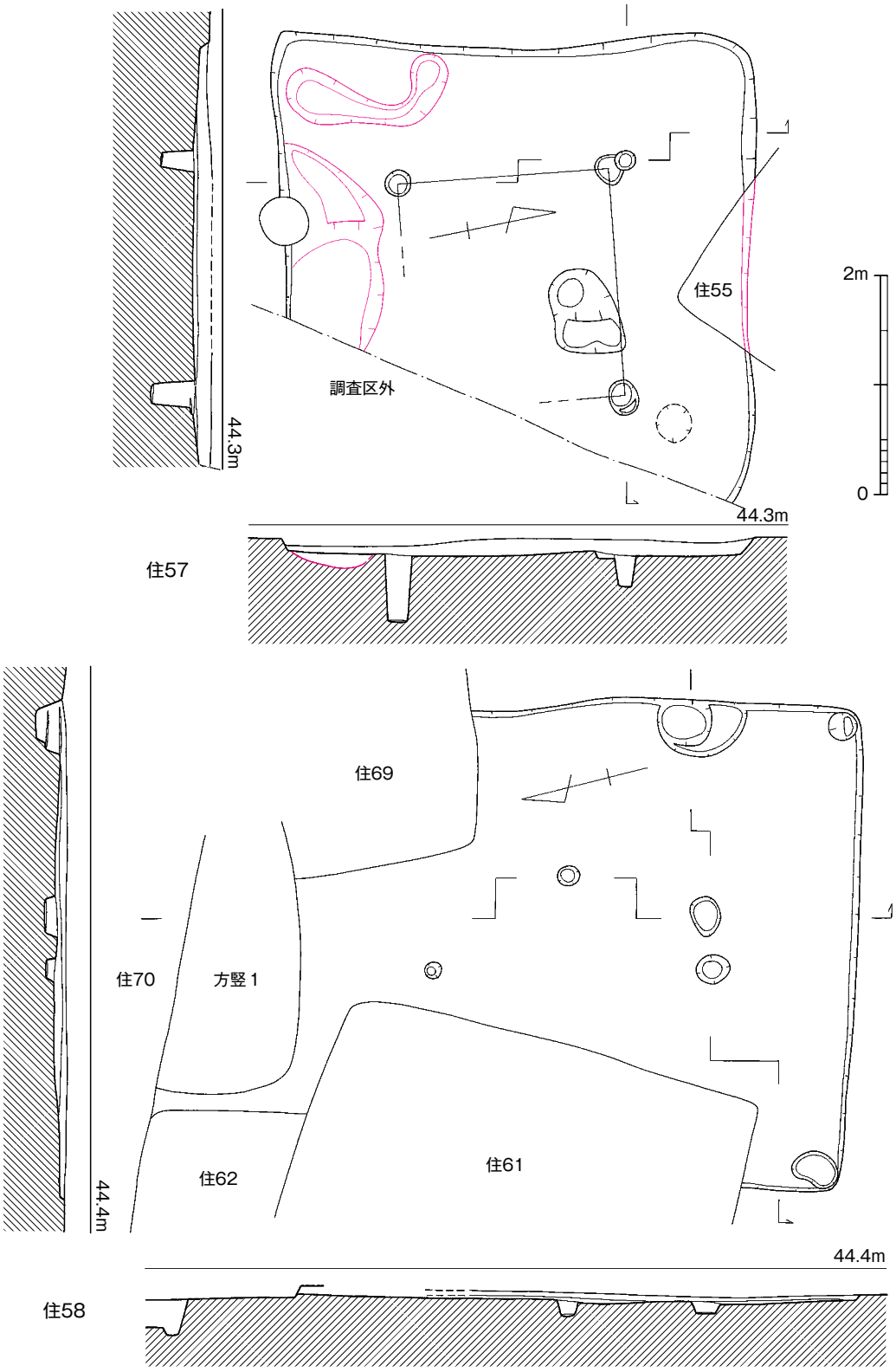
Ⅲ区の中央東端で切り合う住居跡群の 1 つである。54・55 号住居跡と切り合い関係にあり、本住居跡はそれに先行する。南東コーナー部付近は、削平によりほとんど失われているため判然としないが、57 号住居跡の付近まで広がる可能性があり、そうであれば 57 号住居跡とも切り合い関係を持ち本住居跡が先行することになろう。平面形態は（長）方形を呈すると思われるが、北壁と東壁が 54･55 号住居跡により破壊されているために不明である。主軸を西北西－東南東にとり、規模は南北幅 3.2m 以上、東西長 6.5m 以上である。床面において小ピットを 1 基検出したが、主柱穴かどうかは不明である。住居跡の埋土は黒褐色粘質土で、壁の残存高は 5㎝程度である。出土土器には図示できる資料はないが、ビニール袋に 1 袋分ほどの土師器が出土しており、中には布留式の比較的新しい様相を示す甕の口縁部が数点含まれることから、前期中～後半の幅で考えておきたい。

57 号竪穴住居跡（第 93 図、図版 33）

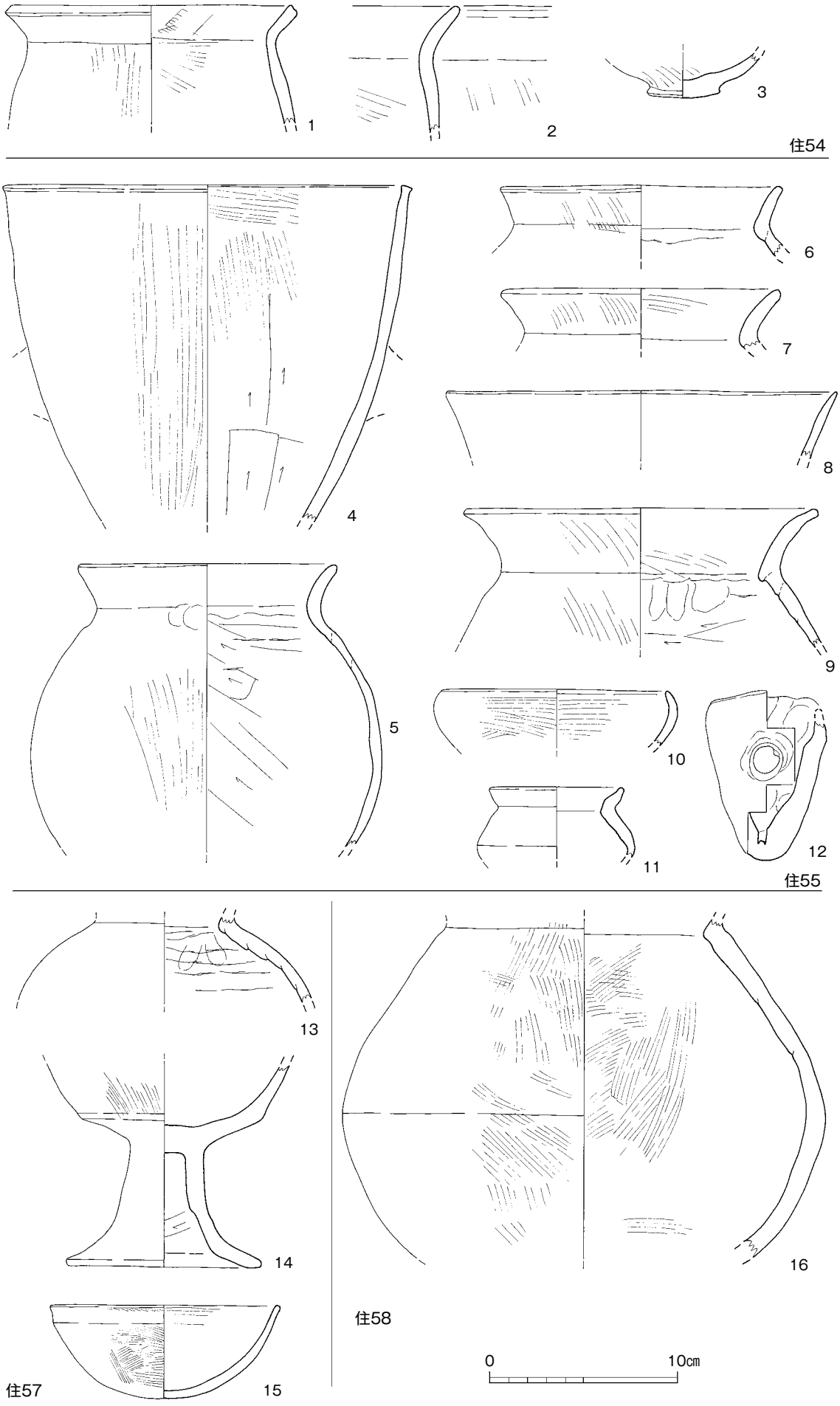
Ⅲ区中央やや南寄りの東端で検出した住居跡である。南東コーナー部が東側の調査区外に広がる。55 号住居跡と切り合い関係にあり、本住居跡はそれに先行する。また、削平されていて判然としない面もあるが、56 号住居跡とも切り合い関係にある可能性がある。切り合い関係にあるとすれば本住居跡が後出する。平面形態は方形を呈し、主軸方位は大略南北方向、規模は南北長 4.18m、東西幅 4.2m 程度である。床面から主柱穴が 3 本確認された。これらの配置から、4 本柱の構造を持つものと推測される。住居跡の埋土は黒褐色粘質土で残存高は 10㎝程度である。出土土器から本遺構は 6 世紀代前半に位置づけられよう。

出土遺物（第 94 図、図版 33）

土師器（13 ～ 15） 13 は壺の胴部上半であろう。胴部最大径が 16㎝弱の中形品である。やや扁平な球胴で、頸部は強くすぼまり屈曲する。内面には粘土紐接合痕跡が良く残る。14 は高坏である。口縁部が欠損する。坏部は体部中位で明瞭に屈曲し、外面の段はやや不明瞭である。脚部はゆるや



第 93 図　57･58 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 94 図　54･55･57･58 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

かに外湾しながら開き、接地部やや上位で屈曲して強く外反する。外面は被熱により赤変する。15は碗である。半球形で口縁部にむかってゆるやかに湾曲しながら立ち上がる。以上の資料はやや断片的ながら6世紀代前半に位置づけられるものか。

58号竪穴住居跡（第93図）

Ⅲ区中央やや南寄りで検出した住居跡である。Ⅲ区中央部で多数の大型遺構が複雑に重複する一群の中で最も南側に位置し、61･69号住居跡と切り合い関係にあって、これらに破壊される。また、残存深さがきわめて浅く北壁の位置が判明しないが、これが70号住居跡付近まで伸びているとすれば、70号住居跡･1号方形竪穴状遺構とも切り合い関係にあることとなり、これらにも破壊される可能性がある。平面形態は長方形を呈すると思われるが、上述のように削平によりとくに北壁の位置が不明確であり、よくわからない。規模は南北長が5m以上、東西幅4.36mである。カマド・炉等は検出されなかった。東壁沿いのやや南寄りの位置に屋内土坑の可能性のある掘り込みが見られるが確実ではない。床面からは小ピットがいくつか検出されたが、主柱穴になりうるものは見つからなかった。住居跡の埋土は黒褐色粘質土で残存高は5㎝程度である。出土した土器は土師器のみでビニール袋1袋ほどあるが、図示できる出土土器は1点しかない。やや時期比定に困惑する資料であるが、図示できなかった小片の中に器壁がよくケズリ込まれて薄い甕の胴部片などがあり、古墳時代前期の中で考えるべきであろうか。

出土遺物（第94図）

土師器（16） 16は壷形土器の胴部か。やや下膨れの器形で、口縁部と底部は欠失する。器壁はやや厚く、調整は内・外面ともにハケ目である。内面に粘土帯の接合痕跡が良く残る。

59号竪穴住居跡（第95図、図版34）

Ⅲ区の南東寄りで検出した。南には60号住居跡が隣接し、両住居跡の間には住居跡の床面の可能性のある硬化面が不整形に広がっていたが、明確な主柱痕跡が確認できず住居跡としては調査していない。59号住居跡はこれを破壊している。主軸方位は略南北にとり、平面形態は略方形を呈する。北壁のほぼ中央部に内接型のカマドを付設する。規模は、南北長4.10m、東西幅4.62mをはかる。床面からはいくつかのピットを検出し、うち2基を主柱穴の候補として図示する。これらの位置から考えて、本来は4本主柱の住居跡であったと推測されるが、痕跡を確認することはできなかった。住居跡内の埋土は黒褐色粘質土で、床面までの残存高は約20㎝である。出土土器は比較的多いが位置づけが難しいものが多く、ここでは5世紀後半～6世紀前半と幅を持たせておきたい。

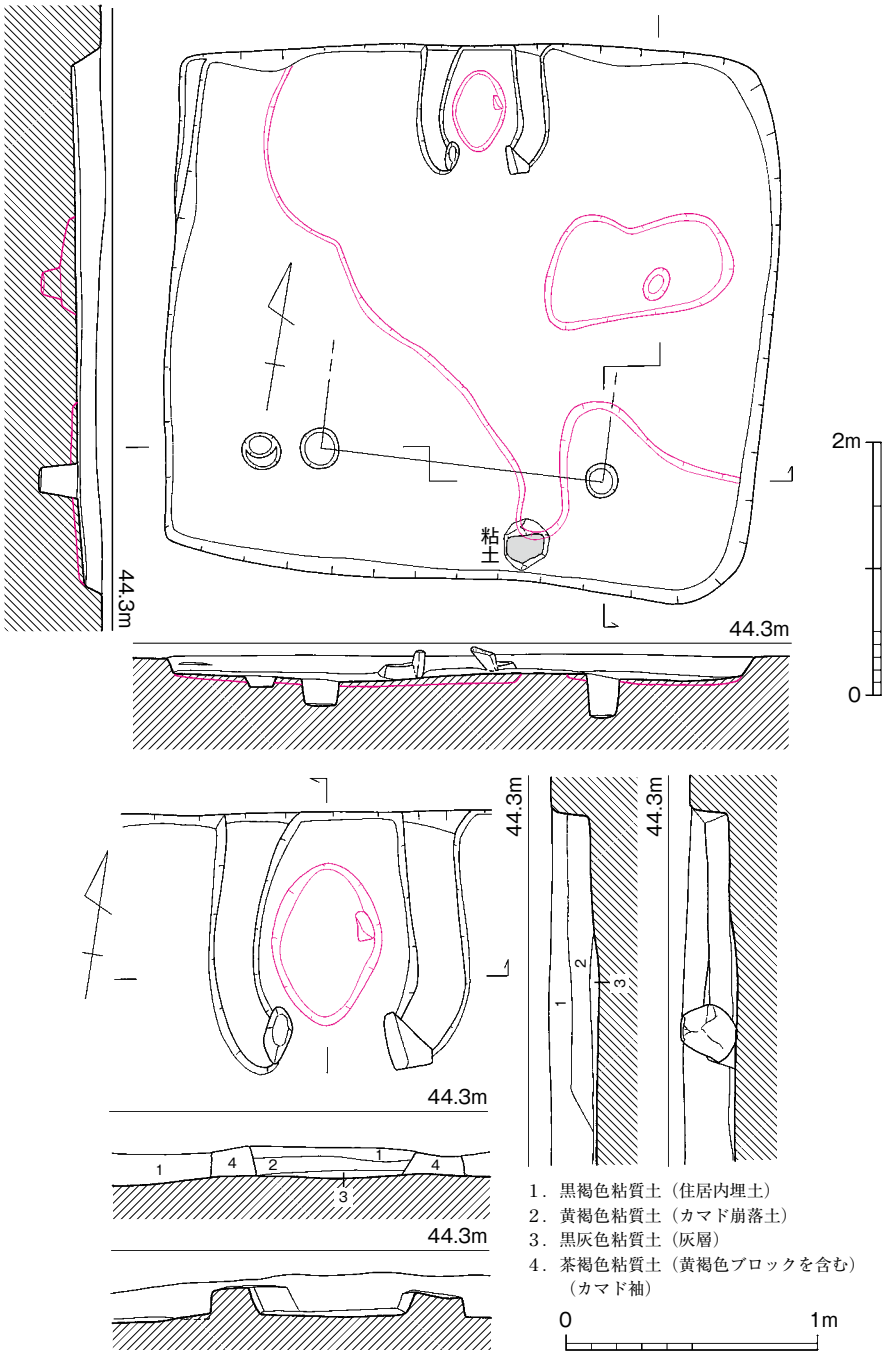
カマド（第95図、図版64）

北壁の中央部に内接型のカマドを作りつける。袖は北壁より直角に伸びて先端部をわずかに内側に丸めており、長さは約1mを測る。両袖の先端部には、長さ約20㎝の河原石を埋め込んで袖石とし、いずれも内側にやや傾いている。袖間の距離は内法で最大60㎝、最小部分は石材が配された先端部で約35㎝を測る。支脚石は見られず、支脚石の抜き取り痕跡も確認できなかった。カマド内の床面の下から40㎝×60㎝で深さ3㎝の楕円状掘りこみが検出された。掘り込み内には黒褐色粘質土が堆積していた。除湿を促す機能があったとも考えられるが、カマドに伴うものかどうか証明する手がかりは得られなかった。カマド内部の最下層には灰層、その上層にカマド崩落土、さらにその上に住居内埋土と同様の土の堆積が確認できた。このことから、カマドを廃絶する直前に灰の掻

き出し等を行わずに破壊されたが、破壊の程度は比較的軽かったのではないかと考えられる。

出土遺物（第 97 図、図版 64）

土師器（1 ～ 9） 1 ～ 3 は甕形土器である。1･2 は球胴で、頸部が強く屈曲し、口縁部はやや直立気味で端部を内湾させる。器壁調整は 1 の内面が工具ナデの他はすべてにハケ目痕跡が認められる。3 は頸部の締まりが緩いものである。口縁部は如意状に短く外反する。器壁調整は内面がケズリ、外面はハケ目。4･5 は小形の短頸丸底壷である。4 はやや扁平な胴部、5 は球胴である。頸部はともに強く締まってはっきりと屈曲し、口縁部は 4 がわずかに外湾、5 はわずかに内湾しながら斜め上方に開く。6 は高坏である。全形がわかる資料である。坏部は体部で明瞭に屈曲し、外側に小さな段を形成する。口縁部は直線的に外反する。脚部は直線的に下方に伸び、屈曲して短く開く。調



第 95 図　59 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）

整は全体にナデ仕上げ。7～9は碗形土器である。7･8は丸底で口縁部に向かってやや強く湾曲する。7は内面がミガキ、外面は板ナデ。8は内面がナデ、外面上位にハケ目を施す。9はわずかに平底傾向をもつ碗である。器壁が厚い。以上の資料はやや位置づけが難しいが5世紀後半～6世紀前半か。なお、ほかに第117図3に示した打製石鏃が埋土中から出土している。

60号竪穴住居跡（第96図、図版34）

Ⅲ区南東端で検出した住居跡である。北東に59号住居跡が隣接するほか、59号住居跡との間には住居跡の床面と思われる硬化面が不整形に広がっており、当初これを78号住居跡としたが、明確な主柱穴が検出できなかったことから最終的には欠番としている。この硬化面を本住居跡が破壊している。平面形態は方形で主軸方位は略東西にとり、西壁の中央やや東寄りにL字状カマドを付設する。竪穴部の規模は南北幅が4.94m、東西長が4.72mをはかる。床面からは4つのピットを検出したが、方形に配置されいずれも深さが60cm前後あって掘方もしっかりしており、主柱穴と評価できよう。なお、これらのピットのうち南西の1つを除く3つは、床面においては直径15～20cm程度の黒褐色の埋土として検出した。その後、床面に広く形成された硬化面を除去し、床下掘り込みを検出・掘削する段階で、これらの小ピットの周囲に一回り広い柱穴掘方が検出された。以上の点から、本住居跡は主柱の柱根が残された状態で廃棄されたものとみて大過ない。住居跡内から建築部材などの炭化材が出土せず、おそらく床面直上で柱を切り取ったものと推測される。住居跡の残りは悪く、深さ5cm程度が残るのみであった。埋土中からは土師器が多く出土し、うち12点を図示した。なお、第97図11･12･15･16･18はカマド右袖の右横の床面直上よりまとまって出土し、これらより本住居跡の廃絶期を6世紀前半に比定できよう。

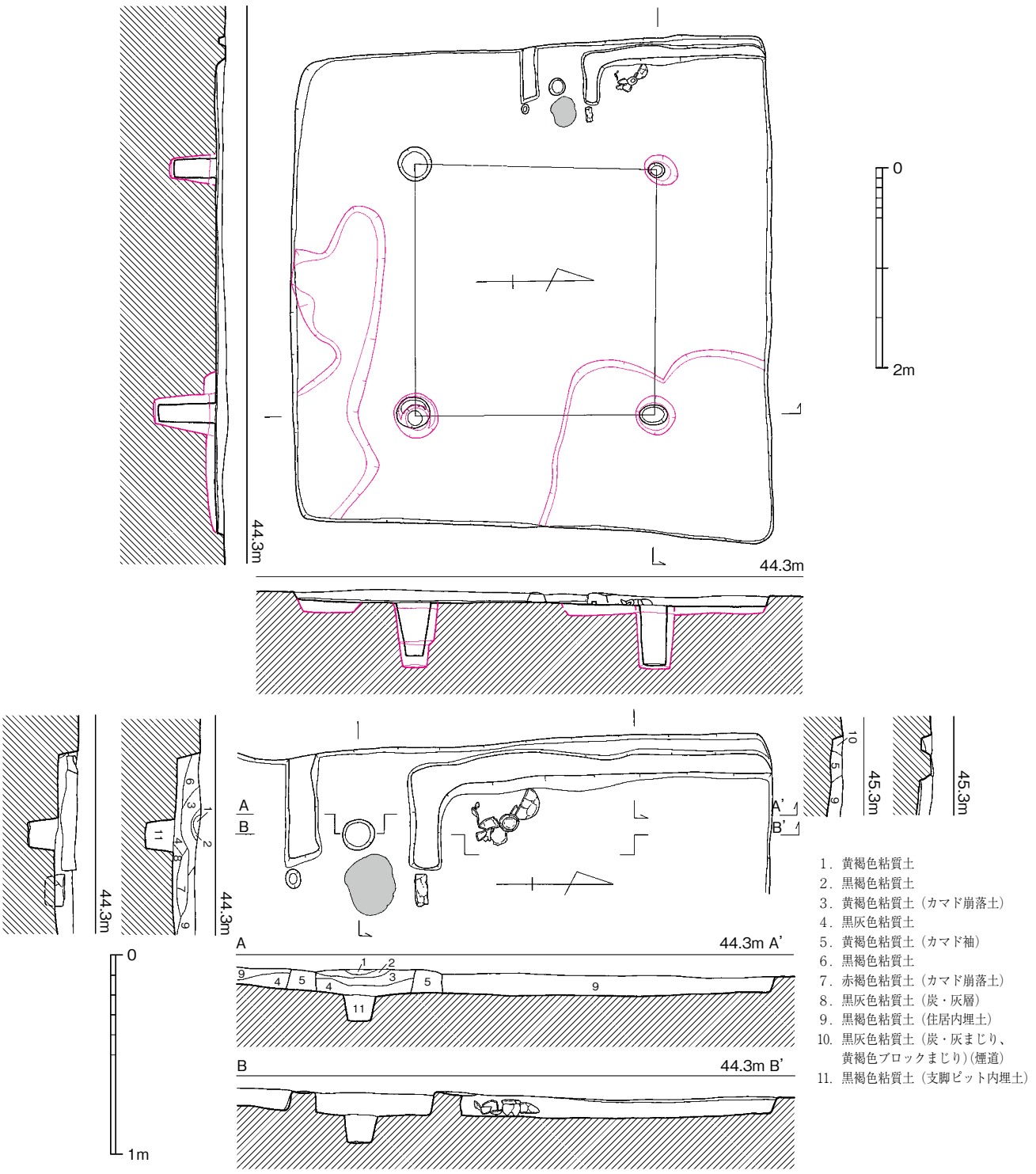
カマド（第96図、図版35）

西壁中央に内接型のL字状カマドを付設する。煙道は西壁に沿って北側に伸び、北壁に接する。煙道の幅は10cm、煙道壁の幅は15cm前後を測る。左袖は住居跡の西壁から直角に伸び、長さは約50cmをはかる。一方右袖は南北に伸びる煙道壁から直角に曲がって50cmほど伸びる。後述する支脚の位置から判断して、両袖ともほぼ当時の長さを保っているものとみられる。袖間の距離は内法で約45cmをはかる。右袖の先端部には長さ15cmほどの石材が埋められていた。地上露出部は数cm程度だが、おそらく破損しており本来は20cm程度地上に露出してカマドの天井を構成する庇石を支えていたのであろう。左袖の先端部にも小ピットが穿たれており、石材が抜かれた跡と考えられる。奥壁から40cmほどの床面中央部に支脚石の抜き取り痕跡と思われるピットを確認した。ピットの深さは15cmほどであり、30cm近い長さの石材を支脚石として用いていたのであろう。支脚前庭部は、被熱で赤変し硬く焼けしまった面が見られる。カマド内部には炭混じりの灰層、その直上に被熱痕跡のあるカマド崩落土をブロック状に含む土、さらにその上層には住居内埋土とカマドの崩落土が堆積している。このような状況はカマドが自然に埋没した状況を示しており、住居廃絶時におけるカマドの破壊はされておらず、住居の埋没過程で自然に壊れていった可能性が高い。

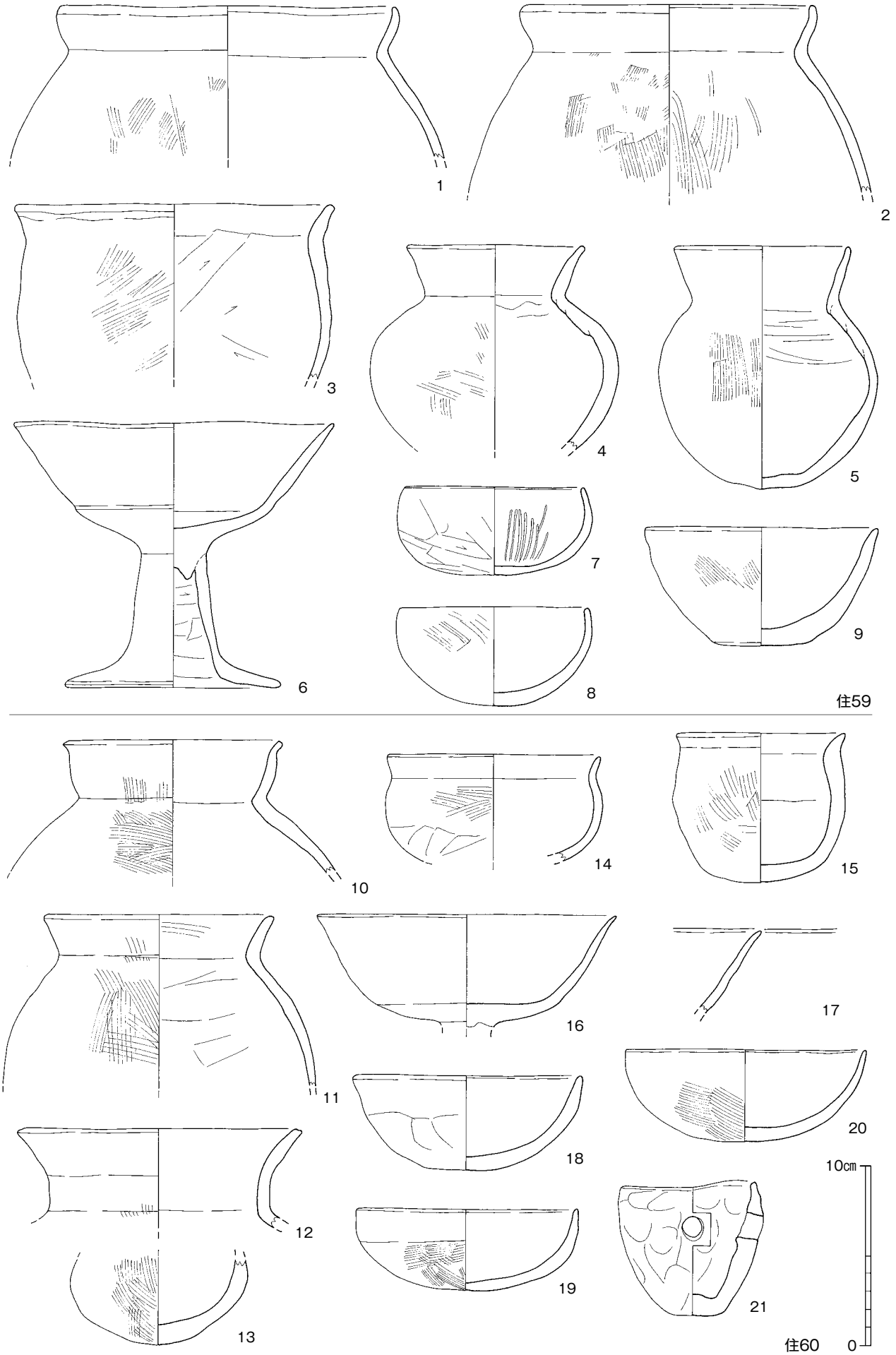
出土遺物（第97図、図版64）

土師器（10～21） 10･11は甕の胴部上半～口縁部片である。胴は球形で、内面に10はナデ、11はケズリを施す。口縁部は短く開くように立ち上がり、10は内湾するが、11は外湾する。12は短頸壺の口縁部か。頸部は強く締まり、口縁部は外湾しながら外に伸びる。13は小形壺の胴～底部片である。器壁はやや厚く、外面にハケ目調整を施す。14は碗形土器である。底部は欠失する。

胴部は強く内湾し、口縁部はごく短く外反する。15 は小形の甕形土器である。器壁に凹凸が著しく手づくねのミニチュア土器の範疇か。16·17 は高坏である。16 は坏部のみが残る。体部で屈曲し、口縁部はわずかに内湾しながら開く。17 は口縁部のみの小片で、径は復元できない。直線的に伸びて端部付近がわずかに外湾する。18 ～ 20 は碗形土器である。いずれも丸底で、口縁部にかけてゆるやかに内湾しながら伸びる。器壁は 18 の外面が板状工具ナデ、19·20 はハケ目、内面はいずれもナデ。21 は蛸壺である。器壁には指頭圧痕がよく残り凹凸が著しい。体部中位やや上に 1 孔



第 96 図　60 号竪穴住居跡·カマド実測図（1/60·1/30）

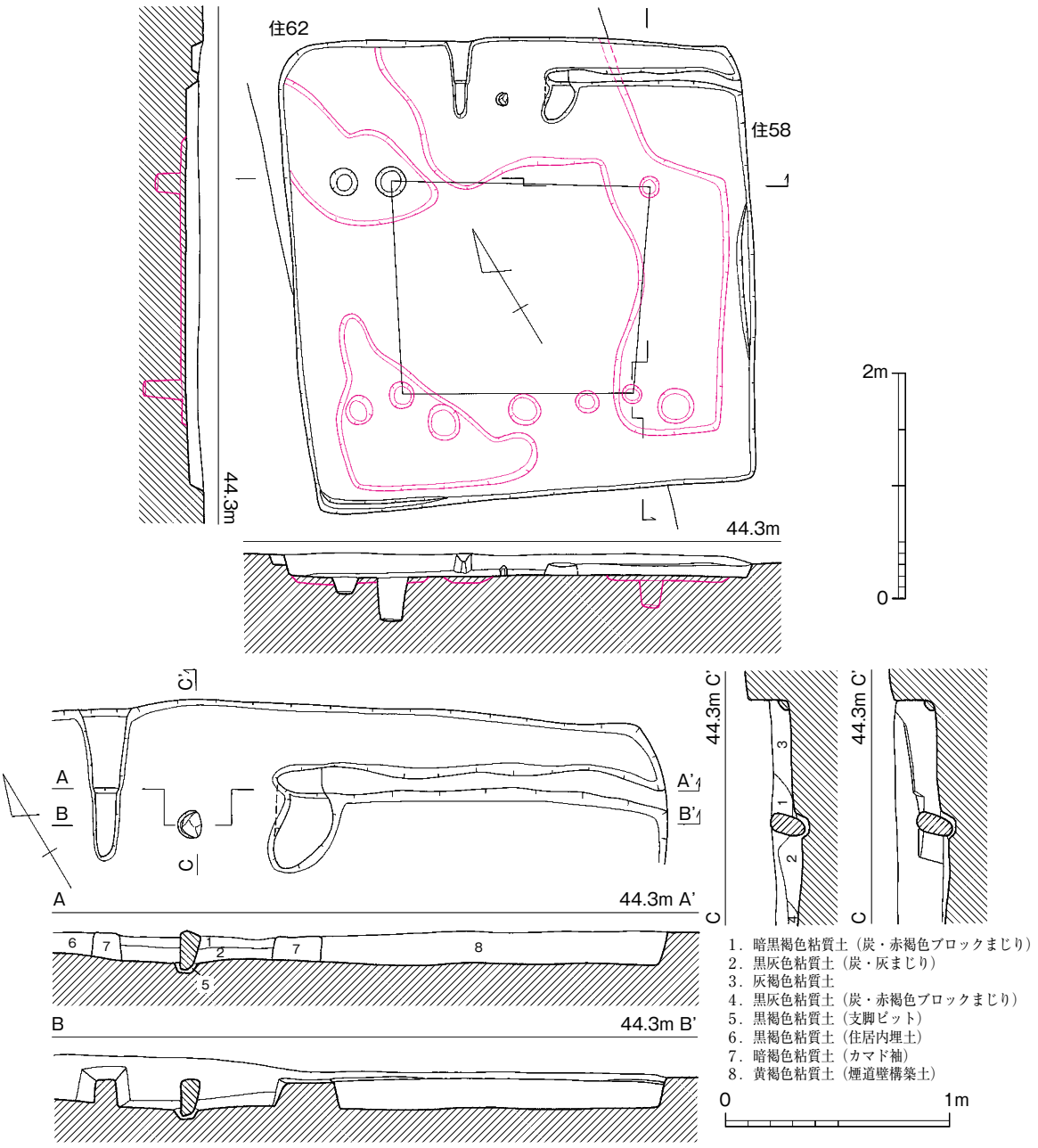


第 97 図　59･60 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

を穿つ。これらの資料はおおよそ 6 世紀前半に位置づけられよう。

61 号竪穴住居跡（第 98 図、図版 35）

Ⅲ区中央やや南西寄りに位置する。63 号住居跡の北側に隣接して検出した。58･62 号住居跡と切り合い関係にあり、本住居跡が後出する。平面形態は方形で主軸方位は北北東－南南西にもち、北壁のほぼ中央に L 字状カマドを付設する。規模は南北長が 4.04m、東西幅 4.08m をはかる。床面や下層からは、本住居跡に破壊された 58･61 号住居跡の主柱穴候補となるものも含めいくつかのピットを検出したが、そのうち位置や形状などから 4 つを主柱穴候補として図示した。うち、北西の 1 つを除く 3 つは、床面に形成された硬化面の除去後に確認している。柱抜き跡なども確認できず、整合性のある解釈を提示できないが、おそらく貼床に紛れて抜き跡を見つけられなかったものか。出土遺物には土師器がビニール袋 1 袋分ほどあるが、図示できたのは碗形土器 1 点のみである。や



第 98 図　61 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）

や時期比定は困難を伴うが、6 世紀前半前後であろうか。

カマド（第 98 図、図版 36）

北壁中央に内接型のＬ字状カマドを付設する。煙道は北壁に沿って東側に伸びる。煙道の幅は 23㎝、煙道壁の幅は 10㎝を測る。西袖は北壁と直角につき、長さは約 65㎝をはかる。東袖は煙道構築粘土から直角に曲がって長く伸びる。袖間の距離は内法で約 70㎝である。奥壁から 60㎝ほどの床面中央部に小ピットを穿ち支脚石を設ける。支脚石は全長 20㎝ほどの河原石で、根が 5㎝地中に入り、地上部は 15㎝である。カマド床面上には厚く灰混じりの炭層が堆積し、上面は乱されている。その直上に被熱痕跡のあるカマド崩落土をブロック状に含む土が堆積していることから、カマドの廃絶以前に大雑把に灰の掻き出しを行ったのちにカマドを壊していると考えられる。

出土遺物（第 101 図、図版 64）

土師器（1） 1 は碗形土器である。丸底からゆるやかに内湾して口縁部にいたり、口縁端部をわずかに外半させる。器壁調整は外面が板状工具ナデ、内面は指ナデ。6 世紀前半前後の資料か。

62 号竪穴住居跡（第 99 図、図版 35）

Ⅲ区中央やや南西寄りで検出した。61・70 号住居跡と切り合い関係にあり、両者に破壊されている。とくに､61 号住居跡は本住居跡の南半を大きく破壊している。主軸は北北東－南南西にとり、南壁が遺存しないため平面プランは不明だがおそらく方形プランであろう。規模は東西幅のみ判明し、3.04 ｍほどをはかる。南北長は遺存している分で 3.0 ｍほどをはかる。北壁の中央やや東寄りにカマドを付設する。床面からはピット棟は検出されず、本住居跡を破壊する 61 号住居跡の下層から本住居跡の南西主柱穴となる可能性のあるピットを 1 基検出したのみである。出土遺物は少なく時期比定は困難を伴うが、6 世紀前半前後であろうか。

カマド（第 99 図、図版 36）

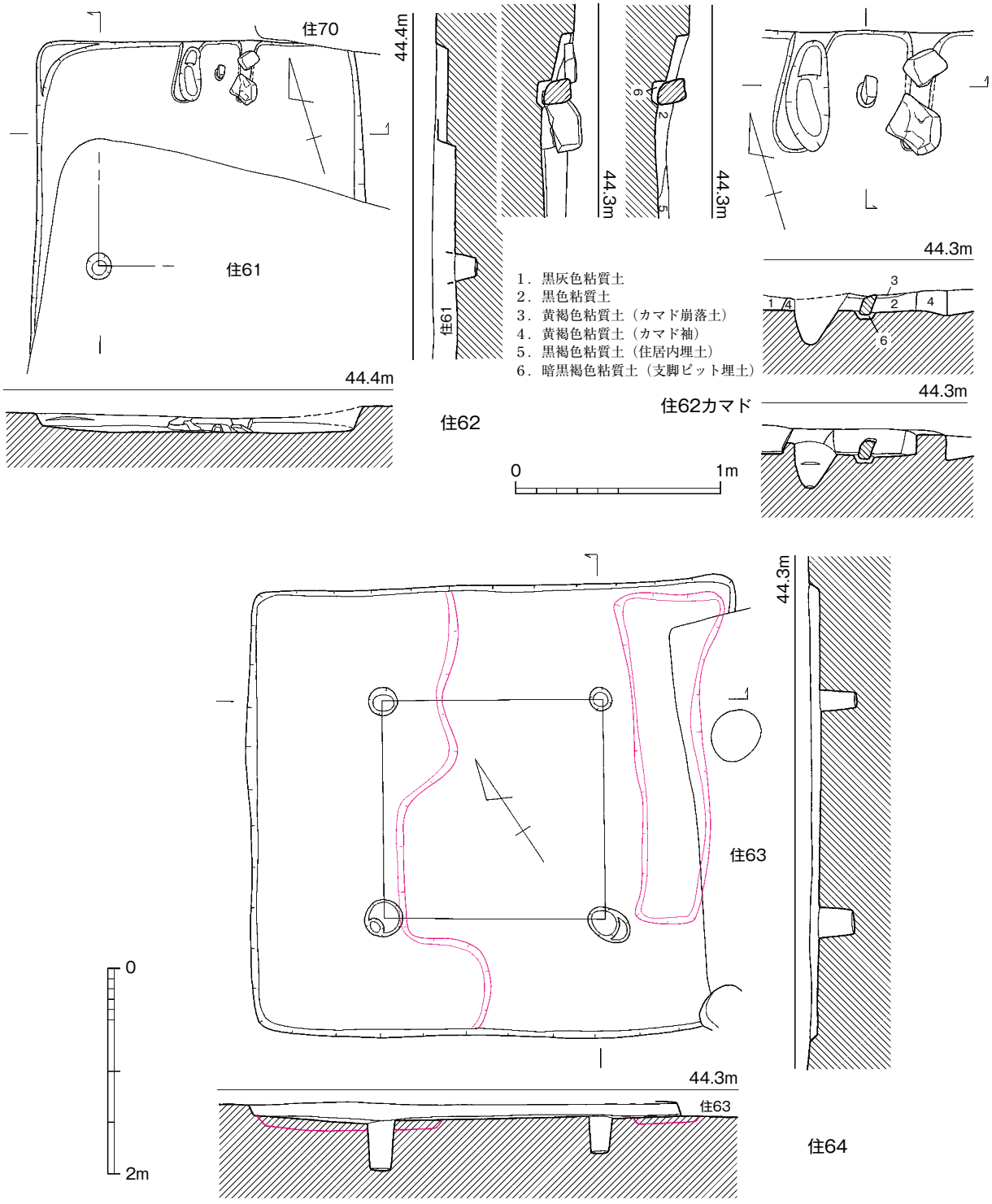
北壁の中央やや東寄りに内接型のカマドを付設する。袖の遺存長さは約 55㎝、袖間の距離は平均で 40㎝ほどをはかる。東側の袖には長さ 20㎝程度の河原石 2 石を用いて袖を構築している。反対側の袖には石こそないが､2 石分程の幅を持つピットが確認された。おそらく補強石材を抜き取った痕跡と思われる。奥壁から 35㎝ほどの床面中央には支脚石を立てている。支脚石は全長 15㎝ほどの角礫で、根が 5㎝地中に入り、地上部は 10㎝ほどが残されているが、おそらく頂部は重機による表土剥ぎ時に破損したものとみられ、本来はもう少し長く突き出ていたものであろう。カマド内部には炭層が分厚く堆積しており､その直上にカマド崩落土をブロック状に含む土が堆積している。住居廃絶時に伴ってカマドを破壊し、埋め戻していると考えられる。

出土遺物（第 101 図、図版 64･65）

土師器（2 ～ 4） 2･3 は碗である。ともに、底部が平底でゆるやかに内湾しつつ口縁部にいたる。3 は底部が大きくやや平底気味となる。器壁調整は、2 の外面がハケ目、3 の外面底部付近が板状工具ナデ、そのほかの部位はナデ仕上げ。4 は大形の甕である。球胴で、頸部が良く締まり、口縁部は短く開く。頸部内面の稜は明瞭ではない。器壁調整は胴部外面がハケ目、内面がケズリ。以上の資料は 6 世紀前半前後に比定されよう。

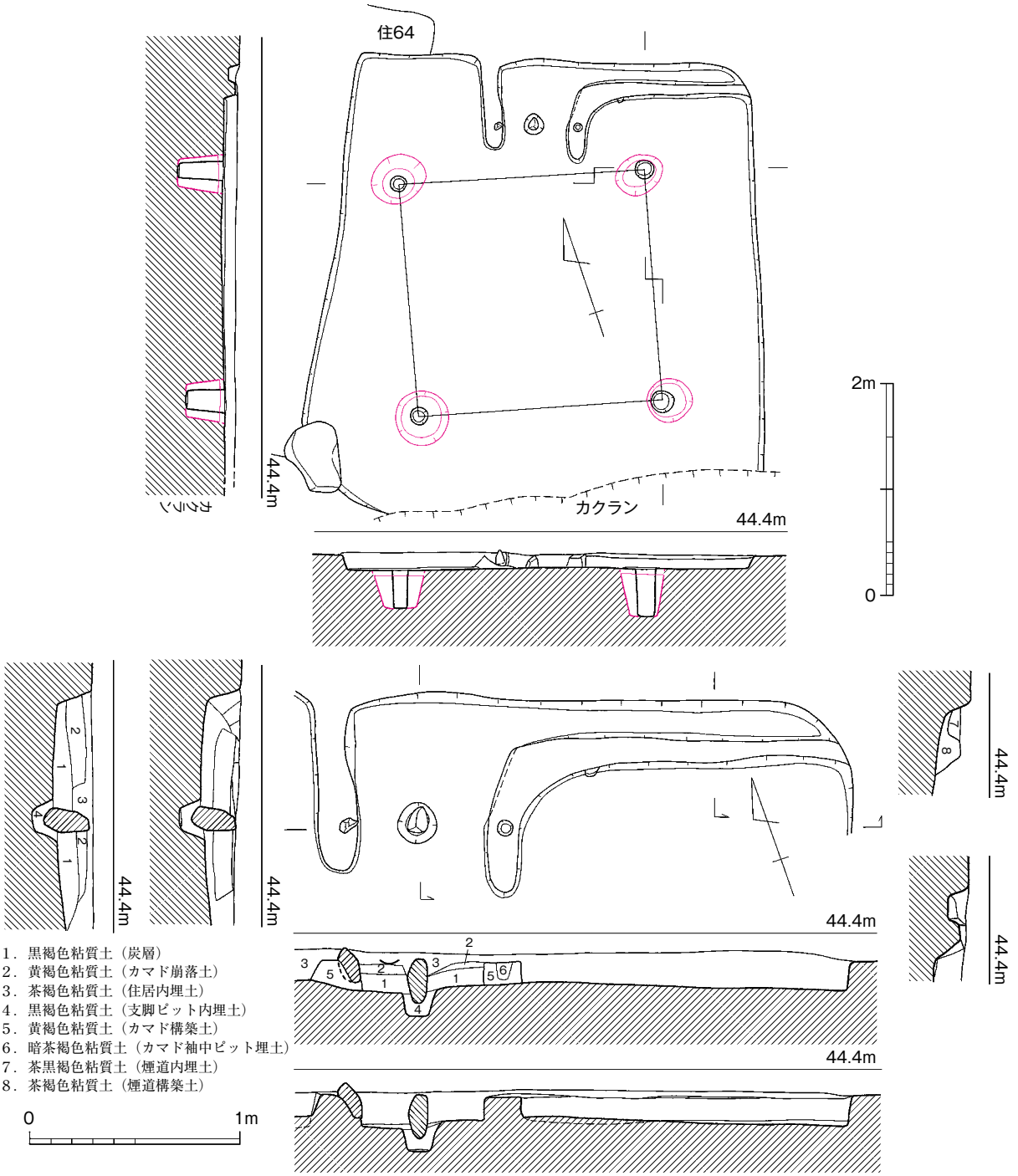
63 号竪穴住居跡（第 100 図、図版 37）

Ⅲ区中央やや西側の南寄りで検出した。南西に 65 号住居跡、北東に 61 号住居跡が隣接し、また

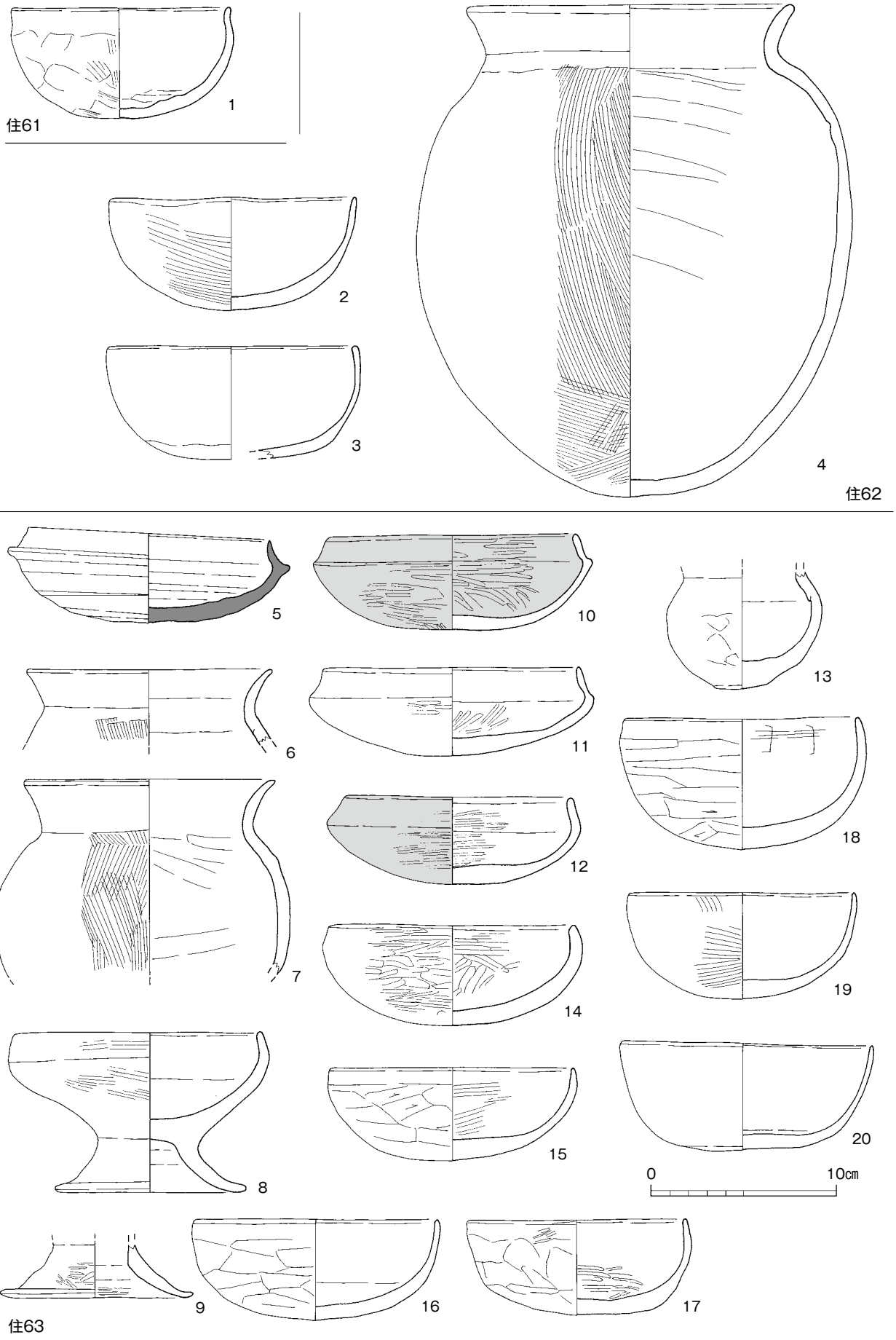


第 99 図　62･64 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）

西の 64 号住居跡と切り合い関係にあって本住居跡が後出する。南壁は大半が撹乱により破壊されているが全形は判明し、主軸を北北東－南南西にとるややゆがんだ方形の平面プランを持つ。規模は南北長 4.24m、東西幅 4.28m である。北壁の中央に L 字状カマドを付設する。主柱穴は床面より４本確認されたが、いずれも床面上では直径 15cmほどの柱痕を検出し、厚さ３～ 5cmの貼床を除去したのちにピットの掘方を検出したものであり、柱材が抜き取られない状態で廃棄され、埋没した住居跡であることがわかる。埋土中から建築部材などの炭化材が出土していないことから、おそらく柱は床面より上で切り取られ除去されたものであろう。なお、貼床下からは主柱穴のピット以外に本遺構に伴う遺構は検出されなかった。出土土器や切り合い関係から、6 世紀中葉に比定される。



第 100 図　63 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）



第 101 図　61 ～ 63 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

カマド（第 100 図、図版 37）

北壁の中央部に内接型のＬ字状カマドを付設する。煙道は北壁に沿って東側に伸びる。煙道の幅は 20㎝、煙道壁の幅は 15㎝を測る。袖は奥壁より直角につき、長さは約 70㎝をはかる。袖間の距離は約 60㎝である。西袖部には、奥壁から 50㎝ほどのところに長さ約 15㎝の河原石が縦位に埋設されている。東袖部には石材は確認されないが、同様の位置にピット状の掘込みが見られ、石の抜き取り痕跡と考えられる。これらの石材はカマド袖を補強するものであった可能性があるが、他の例は大半が袖の先端に配されており､本例は根入れも浅く､やや異なる。カマド内部には灰層はなく、炭層が分厚く堆積しており、その直上にカマド崩落土をブロック状に含む土、その上には住居内埋土が堆積している。住居廃絶時にカマドを破壊し、住居跡とともに埋め戻していると考えられる。

出土遺物（第 101 図、図版 64･65）

須恵器（5） 1 は口縁部外面にカエリを有する坏身である。底部は丸く、体部はゆるやかに立ち上がり、カエリのつく部分で屈曲して内傾する。口縁部は外湾しながら内側に伸びる。器壁調整は外面の底～体部下半は回転ヘラケズリ、そのほかは回転ナデ。

土師器（6 ～ 20） 6･7 は小形の甕である。胴部を一部欠失するが丸底球胴であろう。頸部はややゆるやかに屈曲し内面の稜は不明瞭である。口縁部は外湾しながら短く広がる。器壁調整は胴部内面がケズリ、外面がハケ目、口縁部はナデ。8 は脚付碗である。脚は強く広がり「八」の字状を呈する。坏は底部が丸く体部はゆるやかに湾曲し、口縁直下でやや強く内湾する。器壁調整は碗部外面にハケ目痕が残り、他はナデか。9 も脚付器種（おそらく脚付碗）の脚部で、8 同様強く外湾しながら広がる。内・外面に細かいヘラナデを施す。10 ～ 12 は須恵器模倣坏の坏身である。いずれも丸底で、体部はゆるやかに立ち上がり、10･11 は口縁部下で内側に屈曲して口縁部は外湾しながら内傾する。12 は口縁部下の屈曲が明瞭でない。いずれも内・外面ともに細かいヘラミガキを施して光沢を出し、また 12 は外面に黒色顔料を塗布する。13 は小形の壷の胴部であろう。手づくねで指頭圧痕がみられゆがみもある。器種は特定できない。14 ～ 20 は碗である。17 を除き、底部は丸底で体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部へといたる。14 は口縁部下でやや強く内湾する。18 は他よりも体部の湾曲が強く､口縁部はやや内側に入る。17･20 は底部がやや広く平底気味となる。器壁調整であるが、14 は内・外面がヘラミガキ、15 ～ 18 は外面が板状工具ナデでうち 15･17 は内面がミガキ。19 は外面がハケ目である。以上の資料は 6 世紀中葉に比定できよう。

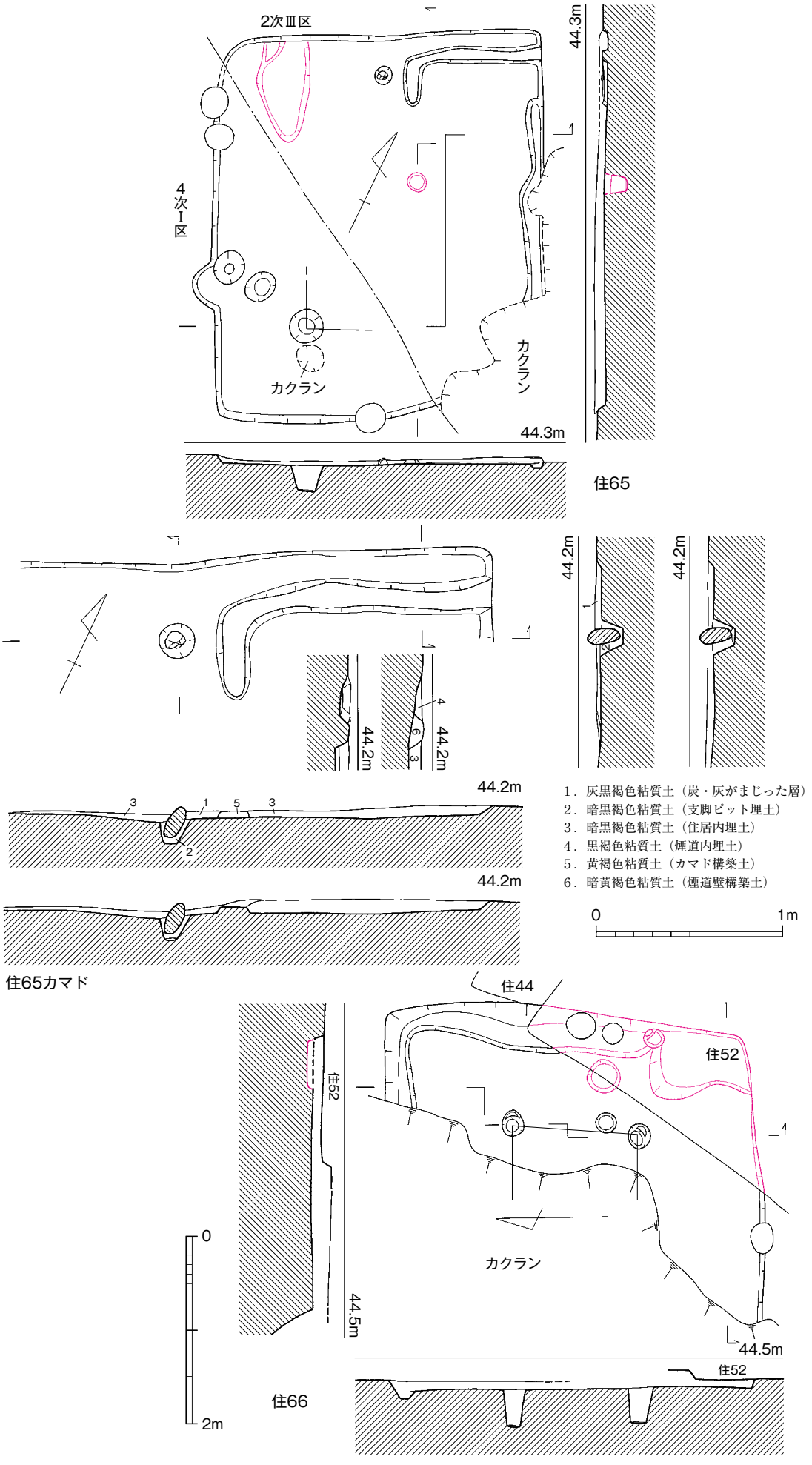
なお、ほかに第 117 図 5 に示した打製石鏃が埋土中から出土している。

64 号竪穴住居跡（第 99 図、図版 38）

Ⅲ区南端の西寄りで検出した住居跡である。西には 67 号住居跡が、南には 65 号住居跡が隣接する。63 号住居跡に東壁の大半を破壊される。平面形態は略方形で、主軸は北東－南西方向にもち、規模は南北長 4.24m、東西幅 4.62m をはかる。床面より 4 つの方形に配置されるピットを検出した。いずれも、深さが 40㎝前後あってしっかりした掘方をもち、本住居跡の主柱穴と判断できる。床面には広く硬化面が形成され、これを除去したところ東西に不整形の床下掘り込みを認めた。住居内埋土は黒褐色粘質土で、壁の残存高は 10㎝前後である。出土土器から 6 世紀前半に比定でき、切り合い関係とも齟齬はない。

出土遺物（第 103 図）

土師器（1･2） 1 は甕とするには口縁部の締まりがゆるく、鉢の深いものとしておく。底部は丸底



第 102 図　65･66 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）

で頸部の締まりはゆるく、口縁部は如意状に外反する。胴部内面はケズリ、外面はハケ目。口縁部は内・外ともにナデ。2は碗である。底部は丸底で、体部から口縁部にかけてゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部を短く外半させる。器壁調整は内面がミガキ、外面は底部付近が板状工具ナデ、口縁部付近はハケ目。6世紀前半前後の資料か。

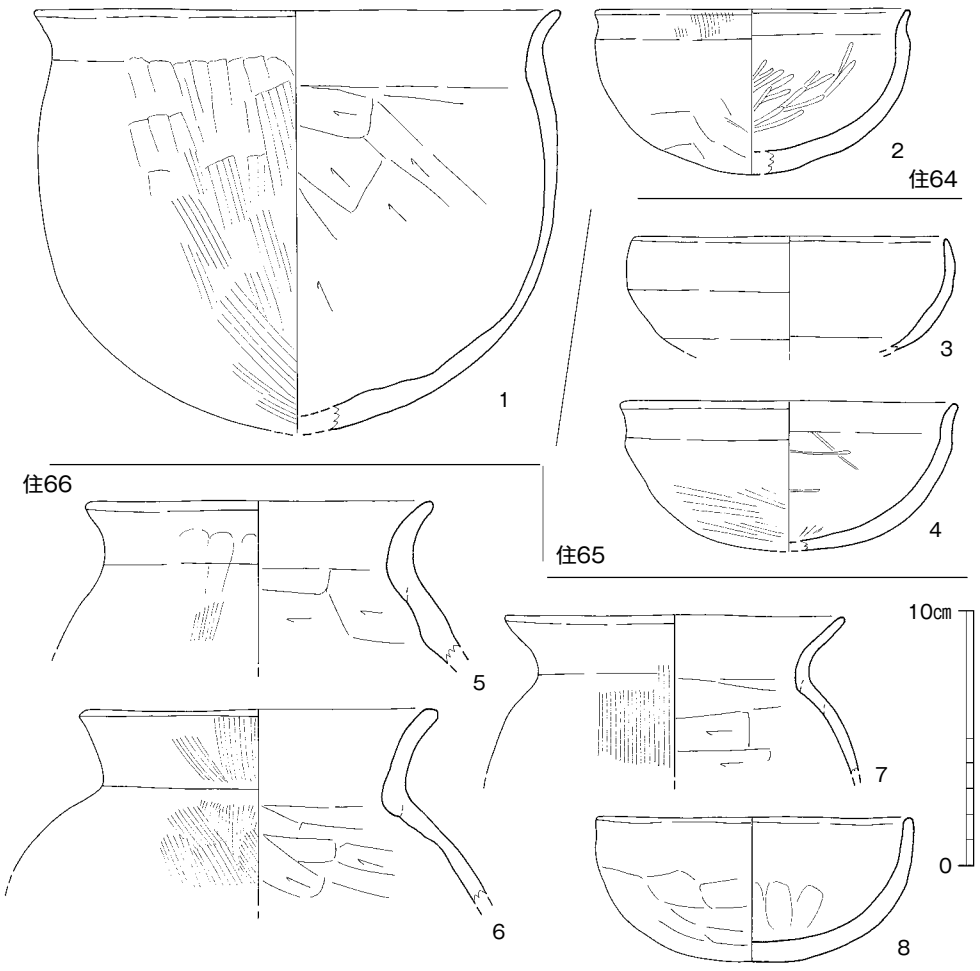
なお、本住居跡の埋土中からはほかに第119図3に示した鉄鏃も出土している。

65号竪穴住居跡（第102図、図版38）

Ⅲ区西寄りの南端で検出した住居跡である。南側1/3ほどが調査区外に広がっていたが、第4次調査時に残りを検出できたため、ここであわせて報告する。南東コーナー部付近が撹乱により破壊されるほかは全形が把握でき、平面形態は主軸を北北西－南南東にとるやや細長い方形、規模は南北長3.98m、東西幅3.44mをはかる。北壁の中央部にL字状カマドを付設する。床面からはいくつかのピットを検出し、そのうち1基は主柱穴と評価してもよい位置・深さであるが、ほかに見当たらないため評価が難しい。残存状況は西側にいくほど悪く､厚みにして1cm程度しか確認できなかった箇所もある。埋土は黒褐色粘質土である。出土土器から6世紀前半頃に比定できよう。

カマド（第102図、図版38）

北壁の中央部に内接型のL字状カマドを付設する。煙道は北西壁に沿って南東側に伸びる。煙道の幅は23cm、煙道壁の幅は10cmを測る。袖の長さは約75cmで、煙道が取りついていない西側の袖は壊されて残存していない。奥壁から40cmほどのところに支脚石を設ける。支脚石は全長20cmほどの河原石で、根が10cm地中に入り、地上部は10cmほどで、煙道側に傾いている。支脚石を中心にとって折り返すと、燃焼部の幅は40cmほどとなろう。カマド内の埋土は最下層の灰層のみが遺存する状況であった。



第103図　64～66号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物（第103図）

土師器（3･4）　3･4は碗である。3は底部を欠失するが、おそらくともに丸底で

体部はゆるやかに湾曲しながら伸びるものであろう。3 は口縁部下でやや急激に内湾し、4 は口縁端部を外半させる。断片的な資料であるが、ほかにビニール袋 1 袋分ほどの土師器の小片が出土しており、それらと合わせて考えると 6 世紀前半前後に位置づけられようか。

66 号竪穴住居跡（第 102 図）

Ⅲ区北寄りの西側で検出した。西側の半分以上が段落ちに掛かり削平されている。また、44・52 号住居跡と切り合い関係にあり、44 号住居跡を破壊し、52 号住居跡により破壊される。平面形態は略方形と思われるが全形は不明である。主軸方位は略南北で、規模は全形が判明する南北幅が 3.76m、東西幅は最大で 3.1m ほどが残存している。床面からは 2 本の主柱穴と考えられるピットを検出した。いずれも深さが 40㎝ほどありしっかりとした掘方を持つ。その柱穴の位置から考えると、本住居跡は 4 本柱の構造を持つものと推測される。北・東壁際には最大深さ 10㎝ほどの周壁溝が検出されたが、東壁の途中で途絶えている。壁は約 20㎝遺存しており、埋土は黒褐色粘質土である。南隅より内行花文鏡の破片が出土している。出土深さは床面より 15㎝ほど高い埋土中である。住居跡の時期は出土土器から古墳時代前期末、4 世紀後半前後に位置づけられよう。

出土遺物（第 103 図、図版 65）

土師器（5 ～ 8） 5 ～ 7 は甕の胴部上半～口縁部片である。5 はややゆがみがあり、器壁が厚く胴部内面に粘土帯接合痕跡がみられる資料である。頸部は湾曲していて口縁部は短く外に開く。6 は胴部が球状で頸部は湾曲し、口縁部はやや長く開くものである。口縁端部はわずかに内湾する。7 も球胴に外反する口縁部を持つ。いずれも、胴部内面はケズリ、外面はハケ目、口縁部はハケ目のちナデ仕上げである。8 は碗である。半球形の器形を持ち、器壁がやや厚めである。調整は内・外面ともに板状工具を用いたナデを施し、口縁部付近は横ナデ。これらの資料は 4 世紀後半前後に位置づけられるものか。

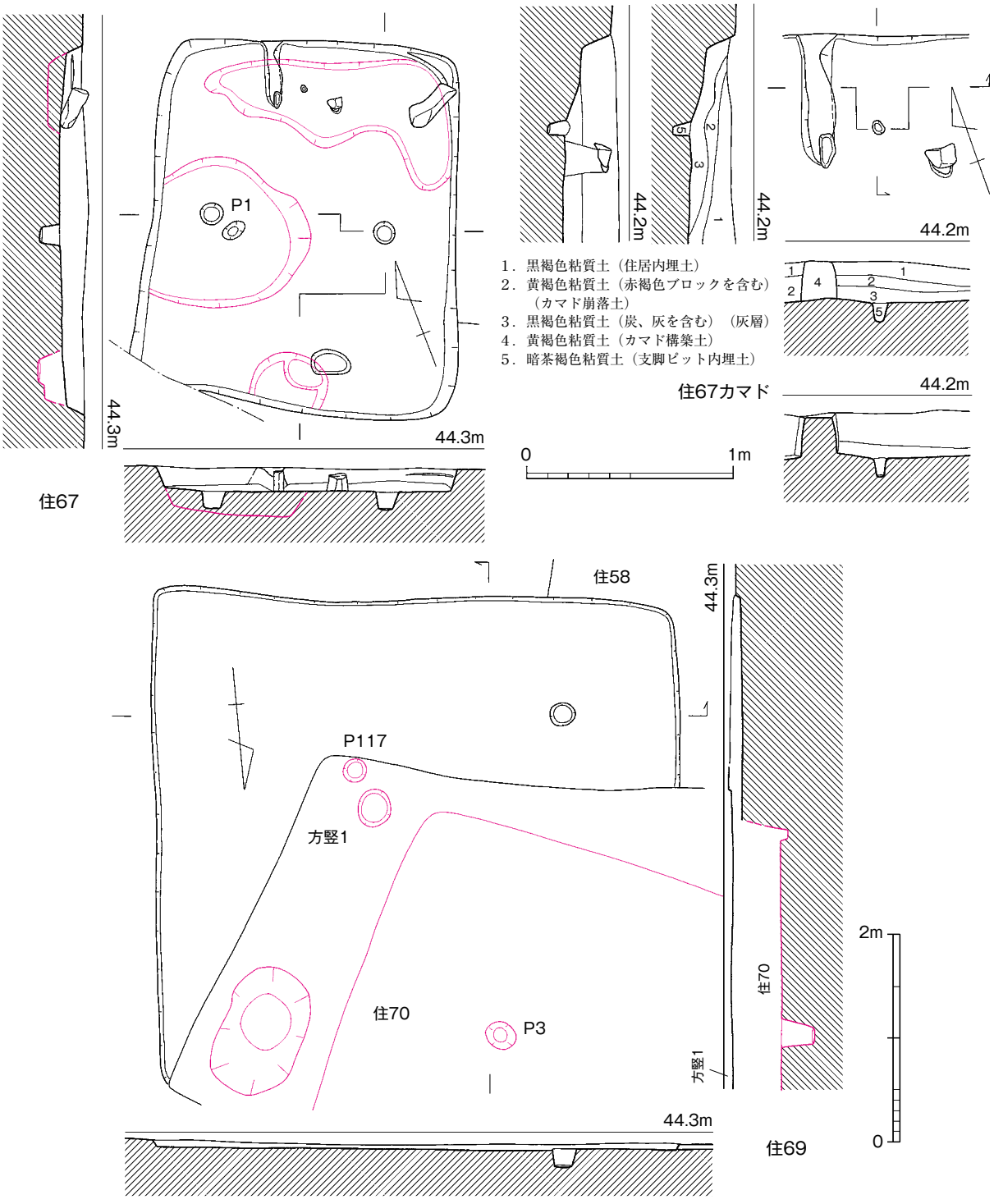
この他、前述のように内行花文鏡の破鏡（第 119 図 24）が 1 点出土しているほか、やはり埋土中から第 119 図 4 に示した鉄鏃も出土した。

67 号竪穴住居跡（第 104 図、図版 39）

Ⅲ区南西の調査区隅で検出した住居跡である。他の遺構と切り合い関係になく単独で存在する。南西コーナー部が南側の調査区外に伸びているがほぼ全形を把握できた。平面形態は長方形を呈し、主軸方位は北北東－南南西をとる。規模は、南北長が 3.50m、東西幅が 2.82m をはかる。北壁のほぼ中央部に内接型カマドを付設する。床面からは 4 つの小ピットが検出され、そのうち 2 本が中央部で東西に並んでいて、これが主柱穴の可能性があるが、規模が小さく深さもさほどないので、やや不安が残る。また、南壁のほぼ中央部に深さ 20㎝ほどの不整形の掘り込みを検出した。床面下層を検出している際に発見したもので、住居として機能している段階に存在したものかは微妙であるが、そうであるならば壁際土坑の可能性がある。他に 2 箇所で不整形の床下掘り込みを検出した。竪穴部の埋土は黒褐色粘質土であるが、北東隅付近では黄褐色粘質土がブロック状に堆積していた。カマドの構築土に由来するものであろうか。出土土器には図示できるものはない。カマドを有することから、5 世紀後半以降の住居跡と考えたい。

カマド（第 104 図、図版 39）

北壁中央に内接型のカマドを作りつけている。袖の長さは約 60㎝を測り、両袖に長さ約 20㎝の



第 104 図　67･69 号竪穴住居跡･カマド実測図（1/60･1/30）

河原石を縦位に埋め込み袖石としている。東袖は壊れており残存していなかった。袖石間の距離は約 40㎝を測り、奥壁から 45㎝ほどのところに支脚石の抜き取り痕跡と思われるピットを確認した。ピットは幅 6㎝、深さは 6㎝ほどであるため、最低でも高さ 10㎝近く幅 6㎝前後の小ぶりの石材を支脚石として用いていたものと考えられる。また、住居跡の北東コーナー部付近で長さ 50㎝ほどの細長い河原石が出土しており、これがカマドに用いられた石材である可能性がある。カマド内部は灰が少量混じる炭層が床直上に認められるのだが、この層は東袖が本来構築されていたであろう部分にも堆積している。この層の上には一部被熱で赤変したカマドの崩落土が堆積している。この住居跡の北東隅からはカマドの構築土と考えられる黄褐色土が見られたことを合わせて考えると、67 号住居跡のカマドは北東方向に向かって壊され、そのときに灰層が本来より広く飛び散ったものとみることができよう。

68 号竪穴住居跡（第 83 図）

Ⅲ区北東隅で検出した住居跡である。50 号住居跡の下層で検出されたもので、位置的には 50 号住居跡がベッド状遺構となるようにも見えるが、50 号住居跡の床面全体に形成されていた硬化面を除去した下層から検出した遺構であり、別の住居跡と判断した。住居跡の東側の大半が調査区外にひろがっており、検出できたのは西壁と南北壁のそれぞれ 1m 前後分のみである。検出状況での規模は南北幅が 4.72m をはかり、東西は幅 1.3m 程度が調査できた。床面からは小ピットが数基検出されたが主柱穴になりうるものは見られなかった。カマド・炉等の有無は不明である。出土土器は乏しく、図示した甕のほかは土師器が数点あるのみである。図示した資料は古墳時代前期の早い段階の資料であり、切り合い関係とも齟齬はない。

出土遺物（第 106 図）

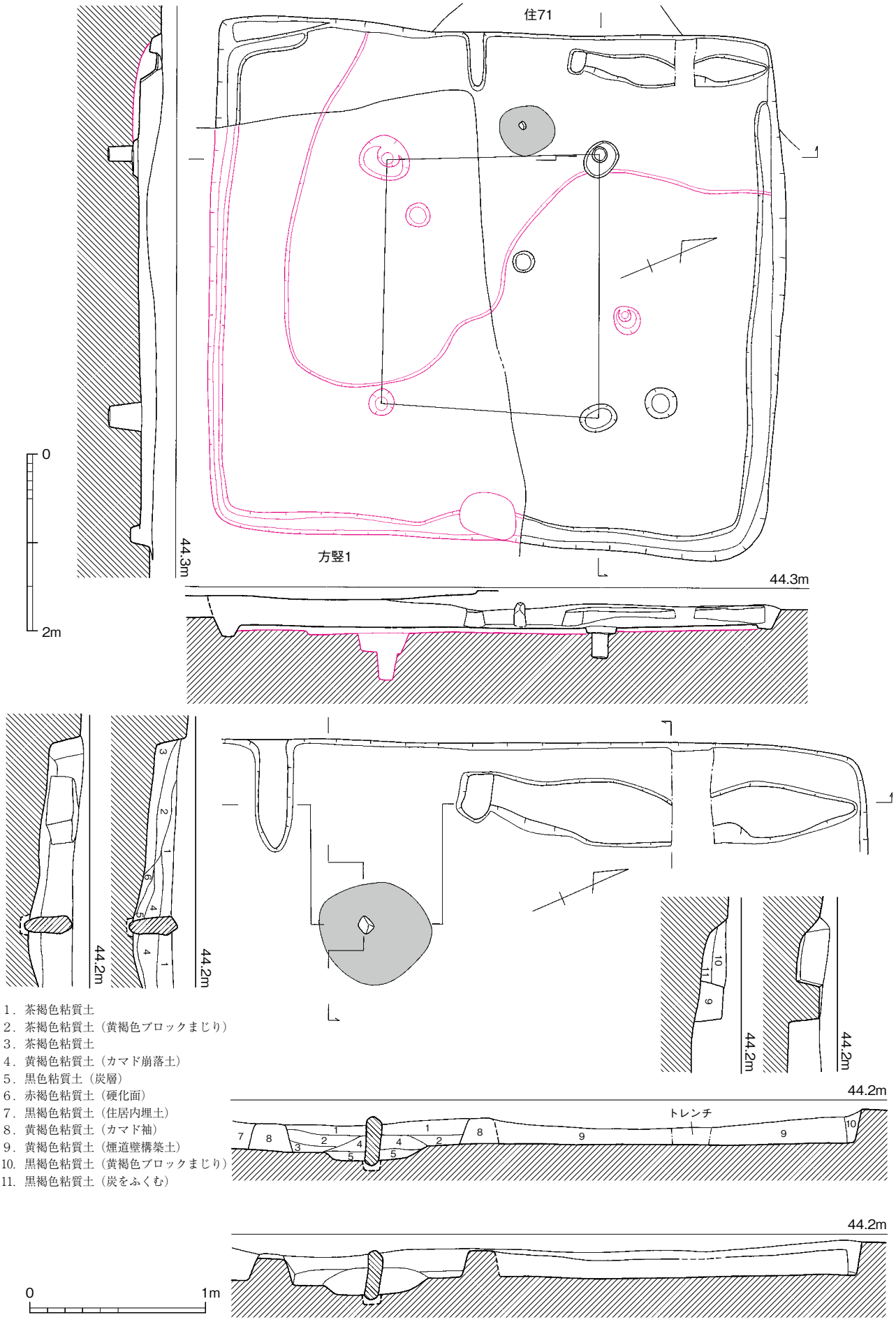
土師器（1） 1 は在地系の長胴甕の底～胴部片である。尖底で胴部は縦に長い。器壁調整は内・外面ともにハケ目で、内面下半は指ナデ。古墳時代前期の資料である。

69 号竪穴住居跡（第 104 図、図版 40）

Ⅲ区中央付近で、多くの遺構が切り合う中にあり、その中でも南側に位置する遺構である。北半を 1 号方形竪穴状遺構に大きく破壊されるほか、70 号住居跡とも重複していてこれに破壊されている。一方、南東コーナー部付近で 58 号住居跡とも重複しており、これを破壊している。平面形状は、北側が大きく削平されているが残存部分から考えれば略方形を呈すると思われる。主軸は大略南北方向にとり、規模は南北が残存状況で 4.7m ほど、東西は 5.04m をはかる。床面からはピットがいくつか検出されたが、主柱穴と判断できるような位置・規模のものはない。また、カマドや炉跡なども検出できていない。竪穴部の埋土は黒褐色粘質土からなり、壁の残存高さは 5㎝ほど戸ごく浅い。出土土器には図示できるものはないが、切り合い関係から古墳時代前期の中に位置づけておきたい。

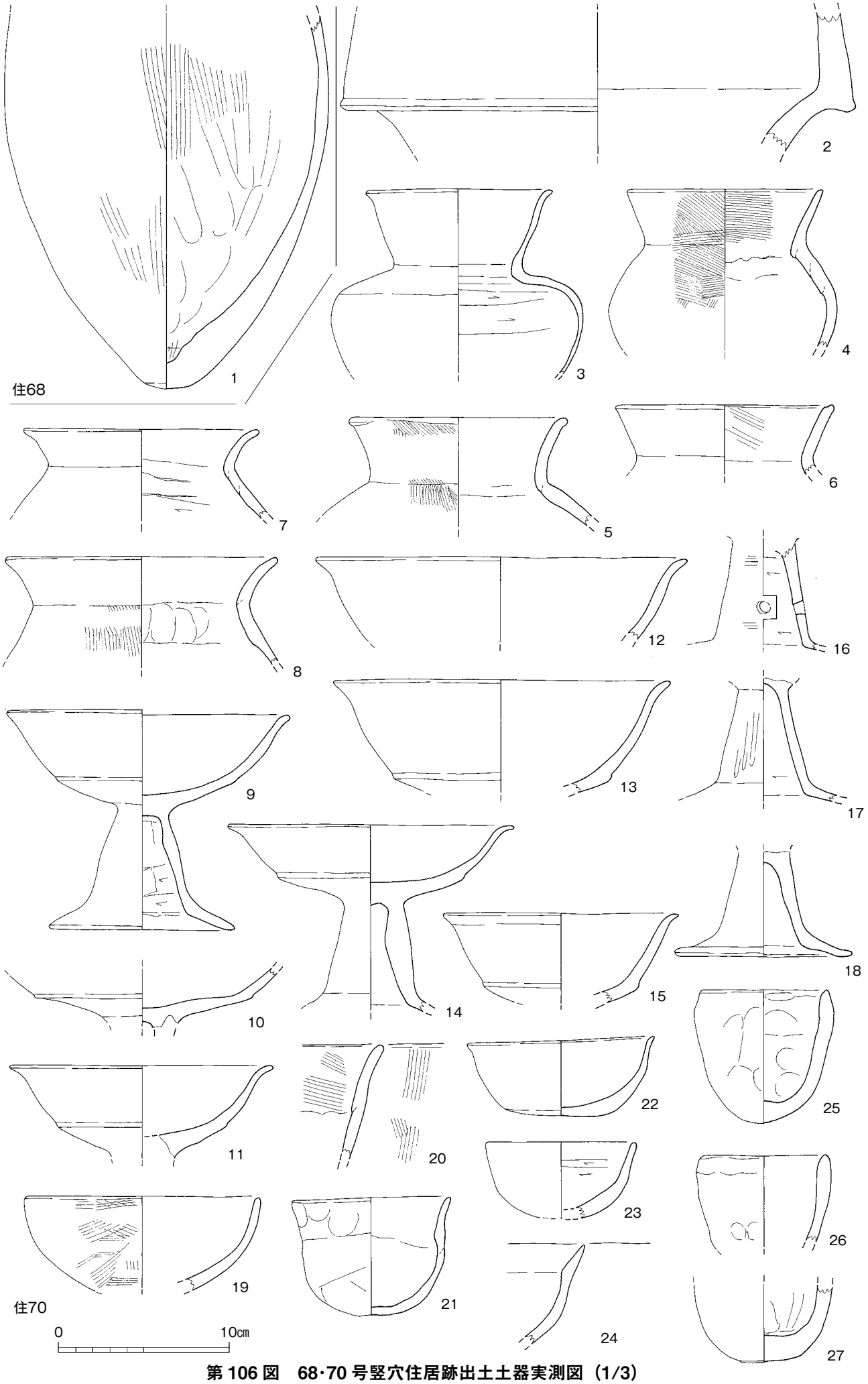
70 号竪穴住居跡（第 105 図、図版 40）

Ⅲ区の中央付近で複数の大型遺構が切り合っている中の 1 つである。1 号方形竪穴状遺構に南半部を大きく破壊される一方、71 号住居跡を大きく破壊している。また 71 号住居跡を介して 73 号住居跡とも重複関係にあるが直接的な切り合い関係はない。平面形態は略方形で主軸を西北西－東



1．茶褐色粘質土
2．茶褐色粘質土（黄褐色ブロックまじり）
3．茶褐色粘質土
4．黄褐色粘質土（カマド崩落土）
5．黒色粘質土（炭層）
6．赤褐色粘質土（硬化面）
7．黒褐色粘質土（住居内埋土）
8．黄褐色粘質土（カマド袖）
9．黄褐色粘質土（煙道壁構築土）
10．黒褐色粘質土（黄褐色ブロックまじり）
11．黒褐色粘質土（炭をふくむ）

第 105 図　70 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）



第 106 図　68·70 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

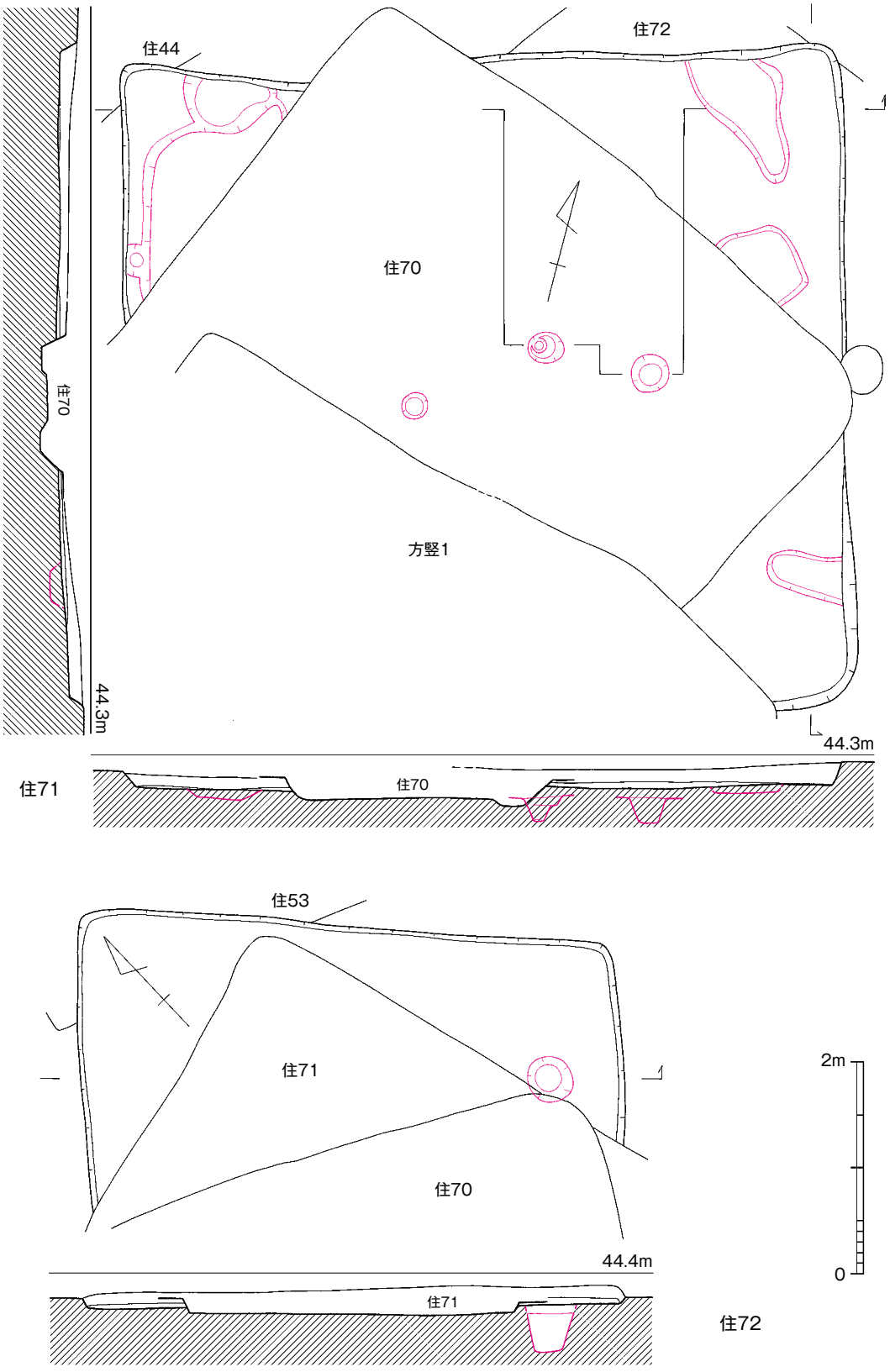
南東にとり、西壁のほぼ中央にＬ字状カマドを付設する。また、床面からは西を除く各辺沿いに周壁溝を持つほか、4 本の主柱穴、不定形の床下掘り込みが検出された。とくに 4 本の主柱穴は深さがいずれも 30㎝以上あってしっかりしたものであった。竪穴部の規模は東西長が 5.46m、南北幅は 6.32m をはかる。残存状況は比較的良く、最大 40㎝ほどの深さが遺存していた。出土遺物にはやや時期幅がみられ、大きく古墳時代前期後半と 6 世紀代前後のものがあるが、切り合い関係も考慮し、5 世紀後半から 6 世紀前半の時間幅の中で考えておきたい。

カマド（第 105 図、図版 41）

西壁の中央わずかに北寄りに、内接型のＬ字状カマドを付設する。煙道は西壁に沿って北側に伸びる。いずれも検出状況で、煙道の幅は約 25㎝、煙道壁の幅は約 35㎝を測る。カマド壁体部分は残存状態が悪く、南側の袖部は 60㎝、北側袖部は 20㎝ほどの長さで検出できたが、支脚石の位置から考えると、本来は 1m 以上の長さがあったものとみられる。袖間の距離は約 115㎝をはかり、この点からみてもかなり大型のカマドと考えられる。奥壁から 105㎝ほどのところに支脚石を設ける。支脚石を中心に直径 55㎝ほどの範囲で床面が被熱赤変し、硬化面が形成されている。支脚石は全長 30㎝ほどの河原石である。調査時の不手際で、支脚ピットは検出していない。カマド内部には、最下層に炭層、その直上にカマド崩落土をブロック状に含む土、その上には竪穴部埋土とカマドの崩落土の混在したような土の堆積が確認できた。このことから住居の廃絶に伴ってカマドを破壊したが、その破壊の程度は比較的軽く済ませ、その後放置されたために住居跡とともに自然と埋没したと考えたい。

出土遺物（第 106 図、図版 66）

土師器（2 ～ 27） 2 は大形の二重口縁壺の頸上部～口縁部片である。頸部は強く湾曲して開き、二重口縁屈曲部から内湾しつつ上に立ち上がる。口縁端部は欠損する。3 ～ 6 は小形の丸底直口壺であろう。3･4 は底部を欠損するがおおよその形はわかる資料で、胴部は扁平な球状で、頸部は強くくびれ、口縁部は斜めに開く。5 はやや胴部が大きく口縁部が短い。6 は胴部形状は不明だが口縁部が斜めに短く伸びる。7･8 は中形甕の胴上位～口縁部片である。ともに、胴部上位は直線的に頸部に向かってすぼまり、頸部はやや丸みを帯びて外に屈曲する。口縁部はわずかに外湾しながら外に開く。胴部内面にはケズリ、外面にはハケ目。9 ～ 18 は高坏である。破片資料が多く、全形が判明するのは 9 のみである。9 は坏体部の屈曲が明瞭ではなく、屈曲部外面に段が形成され、口縁部はわずかに内湾しながら斜めに伸びて口縁端部を短く外に開く。脚部は直線的に開き下半で強く屈曲して外に急激に開く。10 ～ 15 は坏部付近が残る資料である。体部が遺存しない 12 を除き、体部が屈曲するが、11 はやや不明瞭である。いずれも屈曲部外面に段が形成される。口縁部は遺存しない 10 を除き短く外に外湾する。調整はいずれもナデ。16 ～ 18 は脚部が残る資料である。いずれも上位から下位に向かって直線的に開き、下半で明確に屈曲して外に広がる。16 の脚中位には穿孔がみられる。17 の脚外面にはミガキ調整痕跡がみられる。19･22･23 は小形の碗である。ともに底部は丸底で、22 は口縁部がわずかに外反する。20 は甑の口縁部片か。21 は手づくね土器で、ミニチュアの甕形土器か。24 は鉢の口縁部片である。小片で径は復原できず傾きも自信がない。25 ～ 27 は蛸壺である。いずれも小片で、残存部分に穿孔は認められない。器壁には指頭圧痕が多く認められる。以上の資料は一部に古いものもあるが、その多くが古墳時代中期に位置づけられよう。



第 107 図　71･72 号竪穴住居跡実測図（1/60）

71 号竪穴住居跡（第 107 図、図版 40）

Ⅲ区の中央付近で検出した。70 号住居跡・1 号方形竪穴状遺構により竪穴部の中央部分を大きく破壊され、72 号住居跡を大きく破壊する。従って残存状況はかなり悪く、とくに南壁は大半が失われている。平面形状や規模は残存部分よりかろうじて判断でき、南北長 6.12m、東西幅 6.70m ほどをはかる略方形プランの竪穴住居跡であろう。床面からはいくつかのピットを検出したが、主柱穴と評価できるような位置には検出できなかった。また北西コーナー部付近に不定形の床下掘り込みが検出された。出土土器としてやや位置づけの難しい資料を 1 点図示したが、ほかに土師器ばかりビニール袋 1 袋ほどが出土しており、布留式の比較的新しい様相を示す甕の口縁部片などがあることから、古墳時代前期後半頃に位置づけることができよう。

出土遺物（第 108 図）

土師器（1） 小形の壷形土器の底～胴部片である。やや扁平な球胴と強く締まる頸部をもち、口縁部は遺存しない。器壁調整は外面全体にヘラミガキを施し内面には指ナデ痕が良く残る。

72 号竪穴住居跡（第 107 図、図版 40）

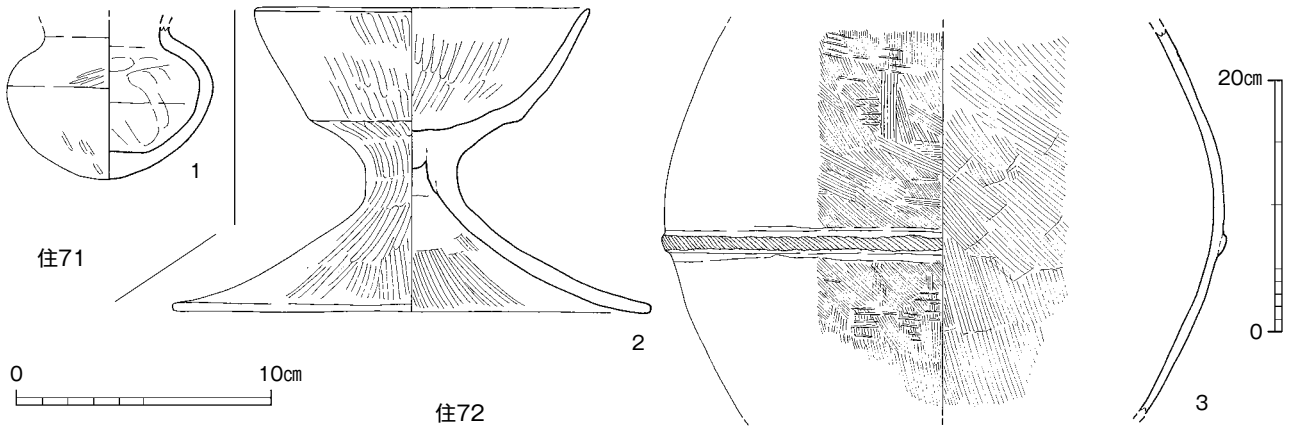
Ⅲ区のほぼ中央付近で検出した。70・71 号住居跡に破壊され、53 号住居跡を破壊する。後出する住居跡に南側の半分以上を破壊されていて全形や規模は不明で、ただ北壁の全長と東西壁の一部が残るのみである。北壁の長さは 5.02m をはかる。残存状況は悪く、残存深さは 10cm弱である。床面からはピットを 1 基検出しているが、主柱穴とするにはやや壁に寄りすぎるきらいもあり判然としない。出土土器や切り合い関係などから判断して、古墳時代前期後半に位置づけておきたい。

出土遺物（第 108 図）

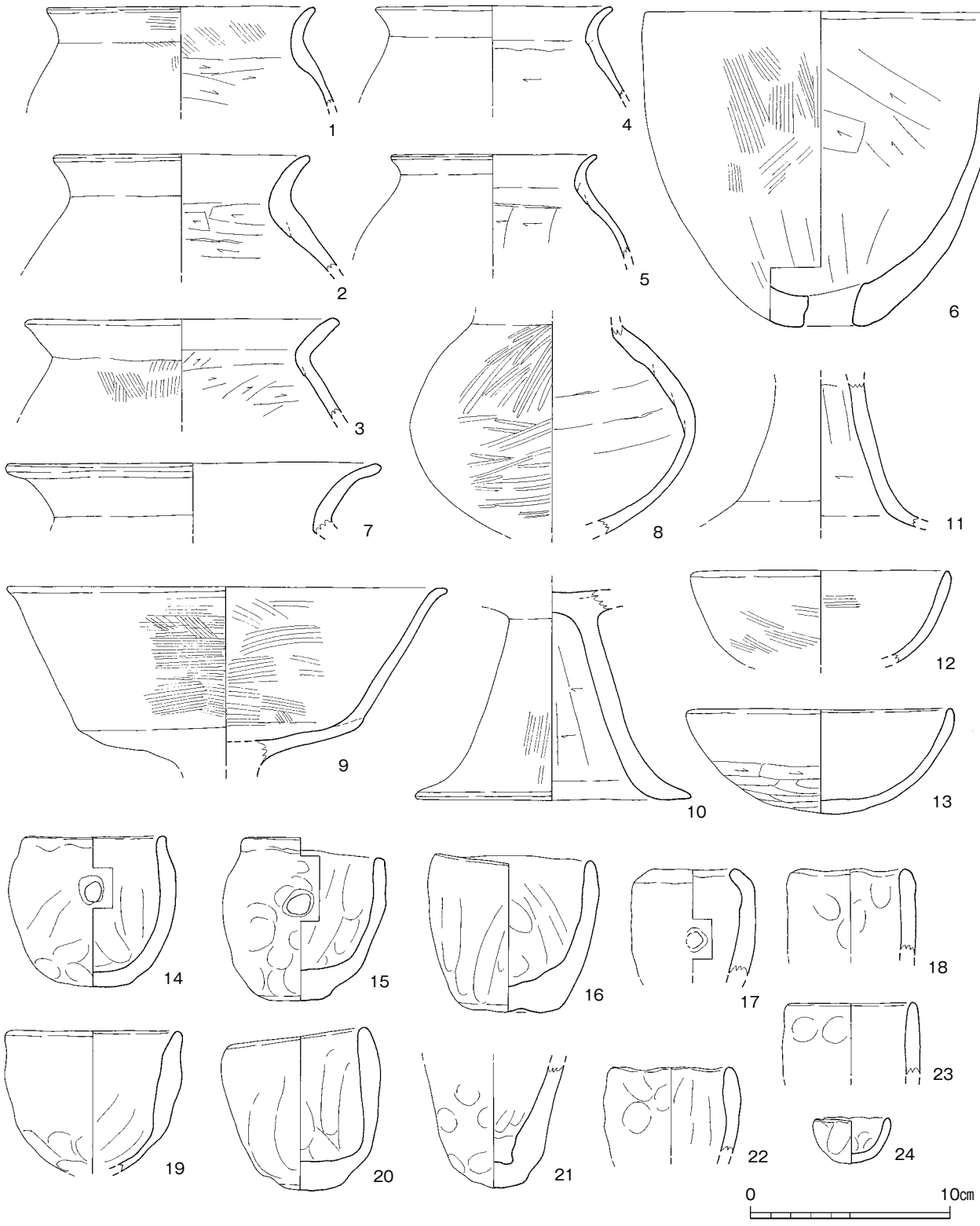
土師器（2･3） 2 は高坏である。坏部は体部に明瞭な屈曲をもち、屈曲部外面に段はなく、口縁部はわずかに内湾しながら開く。脚はスムーズに強く開き、脚部径が口径よりも大きい。坏部内・外面に丁寧なミガキ、脚部内面はハケ目、外面はハケ目のちミガキで仕上げる精製器種。3 は大形の甕形土器の胴部片である。胴部最大径は 48.2cmをはかり、中位わずかに下に断面台形の突帯を回し斜めに刻目を入れる。器壁調整は内・外面ともにハケ目。古墳時代前期の中で収まる資料であろう。

70 ～ 72 号竪穴住居跡、1 号長方形竪穴遺構集中部の遺構検出時出土遺物

Ⅲ区中央部やや西寄りでは、上記のように 69 ～ 72 号竪穴住居跡 ･1 号方形竪穴状遺構が相互に



第 108 図　71･72 号竪穴住居跡出土土器実測図（3 は 1/6、他は 1/3）



第 109 図　70 ～ 72 号竪穴住居跡、1 号方形竪穴状遺構検出時出土遺物実測図（1/3）

切り合いながら集中し、特に69号住居跡を除く遺構群については、埋土が非常によく似ていて、当初設定した遺構検出面において相互の切り合い関係を把握することが困難な状況であった。そこで、この範囲についてはおおよその外郭線を設定してその範囲を少しずつ掘り下げては遺構検出を行うという作業を繰り返した結果、場所によっては当初の遺構面よりも10cm以上下げた状態で遺構の切り合い関係を確定できた。この掘り下げ作業中に、埋土中から多量の土器が出土したが、切り合い関係が確定しない状況下での出土であり、これらの土器がどの遺構に伴うものかを明確にすることができなかったため、一括して検出中出土という取り扱いをすることとした。

なお、切り合い関係の確定後に出土した土器より、72号住居跡が古墳時代前期に比定できることが判明している。71号住居跡についても、やや消極的ではあるが平面プランやカマドを伴わないことなどから72号住居跡に近い時期に比定できる。従って、ここで報告する遺物の大半を占める6世紀代前半の遺物についてはこれを70号住居跡からの出土遺物と推定することができよう。

出土遺物（第109図、図版66）

土師器（1～24）　1～5は甕形土器である。いずれも胴部上半以上の資料でおそらく球胴であろう。頸部はやや強く締まって湾曲し、頸部内面の稜は明瞭ではない。頸部屈曲部で器壁の厚さが最大となり、口縁部は外湾しながら先端にかけて細る。器壁調整は胴部内面がケズリ、外面はハケ目のちナデ。口縁部付近は内・外面ともにナデで一部にハケ目痕が残る。6は甑である。底部は丸底に近い小さな平底で、胴部から口縁部にかけてゆるやかに内湾しながら広がり、口縁部付近は直立する。底部に直径2cmほどのゆがんだ円孔を1つ穿つ。器壁は底部付近がやや厚く、残存部分に把手の痕跡は認められないが、残存破片は小さく把手がついた可能性は否定できない。器壁調整は内面上位がケズリ、下位は工具ナデ、外面上位がハケ目、下位が工具ナデ。7は甕の口縁部片であろうか。頸部は鋭く屈曲し、口縁部は外湾しながらやや長く伸びる。やや古手の資料であろう。8は小形の壷の胴部片である。底部は欠失するが丸底であろう。内面には粗い指ナデを施すが粘土帯接合痕跡がのこる。外面は丁寧なヘラミガキで仕上げる。9は高坏の坏部片である。体部屈曲部は明瞭で外面に段を形成する。口縁部は直線的に長く伸び、端部をわずかに外湾させる。器壁調整は内・外面ともにハケ目。10は高坏の脚部片である。直線的に開き、下半部でゆるやかに湾曲して外に開く。12･13は碗である。底部は丸く、ゆるやかに内湾しながら開いて口縁部にいたる。器壁調整は12が内・外面ともにハケ目のちナデ、13は外面下半が板状工具ナデ、他はナデ。14～23は蛸壷である。いずれも手づくね土器で器壁には指頭圧痕が良く残る。大きさは口径8～9㎝、器高8㎝内外の一群と、口径が一回り小さく6～7㎝の一群に分けられるが、後者は底部まで残る資料がなく器高は不明。残りのよい資料は体部中位に1孔を穿っている。24は手づくねのミニチュア土器で碗である。以上の資料は一部に古い資料も混じるがおおよそ6世紀前半～中葉に比定できよう。

76号竪穴住居跡（第83図）

Ⅲ区北東隅で検出した。49号住居跡の下層にあり、わずかに軸をずらしながらほぼ重複する形で検出した。主軸は北東－南西にとり、北壁は調査区隅の撹乱によって破壊されていて不明である。また、西壁と南壁の一部は49号住居跡により削平されてほぼ失われていたが、硬化面の広がりからおおよその範囲を推定して点線で示している。これによれば、規模は南北が3.2m以上、東西は4.12mほどをはかる。床面からはいくつかの小ピットを検出したが、主柱穴になり得るものはない。また、不整形の床下掘り込みも認められた。出土土器には土師器ばかり小さなビニール袋に1袋ほ

どがあるが、図示できる資料はない。出土土器には古墳時代中期の雰囲気を持つものが多い。

77 号竪穴住居跡（第 83 図）

Ⅲ区北西隅で検出した。49 号住居跡と切り合っており、その下層から検出された。住居跡の大半は北側の調査区外にひろがっている。北側は 4 次調査Ⅱ区にあたるが、両調査区の間は水田の畦畔や仮設水路などがあって調査できない間隔が 5m ほど開いており、本住居跡の続きを 4 次調査Ⅱ区で検出することはできなかった。本調査区内において検出したのは住居跡の南東コーナー部のみであり、全形は不明である。遺存しているのは東西 1.6m ×南北 0.8m ほどの範囲で、深さは検出面から 25㎝ほどとかなり遺存状況がよい。出土土器に図示できるものはないが、やや薄手の器壁で平行タタキの施された須恵器の甕の小片がある。上層の 49 号住居跡からの混入の可能性もあるが、一応これを手がかりに古墳時代中期後半前後に位置づけたい。

（3）土坑

調査区の各所で土坑を計 4 基検出している。いずれもそれほど大きなものではなく、比較的規格的な形状を持つものである。うち、1 基が古墳時代前期に属し、残りの 3 基は時期を決定する手がかりが乏しく所属時期が不明である。

7 号土坑（第 110 図、図版 42）

Ⅲ区の北東側で検出した。48 号住居跡と切り合い関係にあり、これを破壊するほか、9 号土坑とも 48 号住居跡を介して重複する位置にある。主軸を東北東－西南西にとり、平面形状は略長方形で、西側の壁が丸みを帯びているが、削平により本来の壁が失われてこのような形状を呈するものとみられる。残存規模は長軸 2.44m、短軸 1.52m である。遺構の残存状況は西側ほど悪く、壁の立ち上がりはほとんど残されていない。東側の壁の残存高は 10㎝程度である。出土土器はないが、他遺構との切り合い関係から古墳時代前期後半以降に位置づけられよう。

8 号土坑（第 110 図、図版 42）

Ⅲ区の南西部、西側の段落ちにほど近い高位遺構面で検出した。北東に 2 号方形竪穴状遺構が隣接するが、切り合い関係を持つ遺構はない。平面形状は歪んだ隅丸長方形で、中心に最大深さ 25㎝ほどの不整楕円形の掘り込みを有する。長軸は北東－南西方向にとり、規模は長軸 1.80m、短軸 1.62m である。壁の残存高は 15㎝程度であるが、付近の遺構の残存状況から見ておそらくかなり削平されているものとみられる。出土土器に図示できるものはなく、所属時期は不明。

9 号土坑（第 110 図）

Ⅲ区の北東寄りで検出した。47･48 号住居跡、7 号土坑と切り合い関係にあり、これらのすべてに先行する。このため、全体に削平が著しいが、平面形状はおおよそ旧状を保っているとみられ、長軸を北東－南西にとり略長方形状を呈する。床面はおおよそ平坦で不規則な位置に 2 つの小ピットを持つ。壁はやや直線的に斜め上方に立ち上がり、残存高さは 15㎝程度である。出土遺物はビニール袋 1 袋ほどあり、いずれも土師器の小片であった。うち、高坏・甕を示す。古墳時代前期の資料

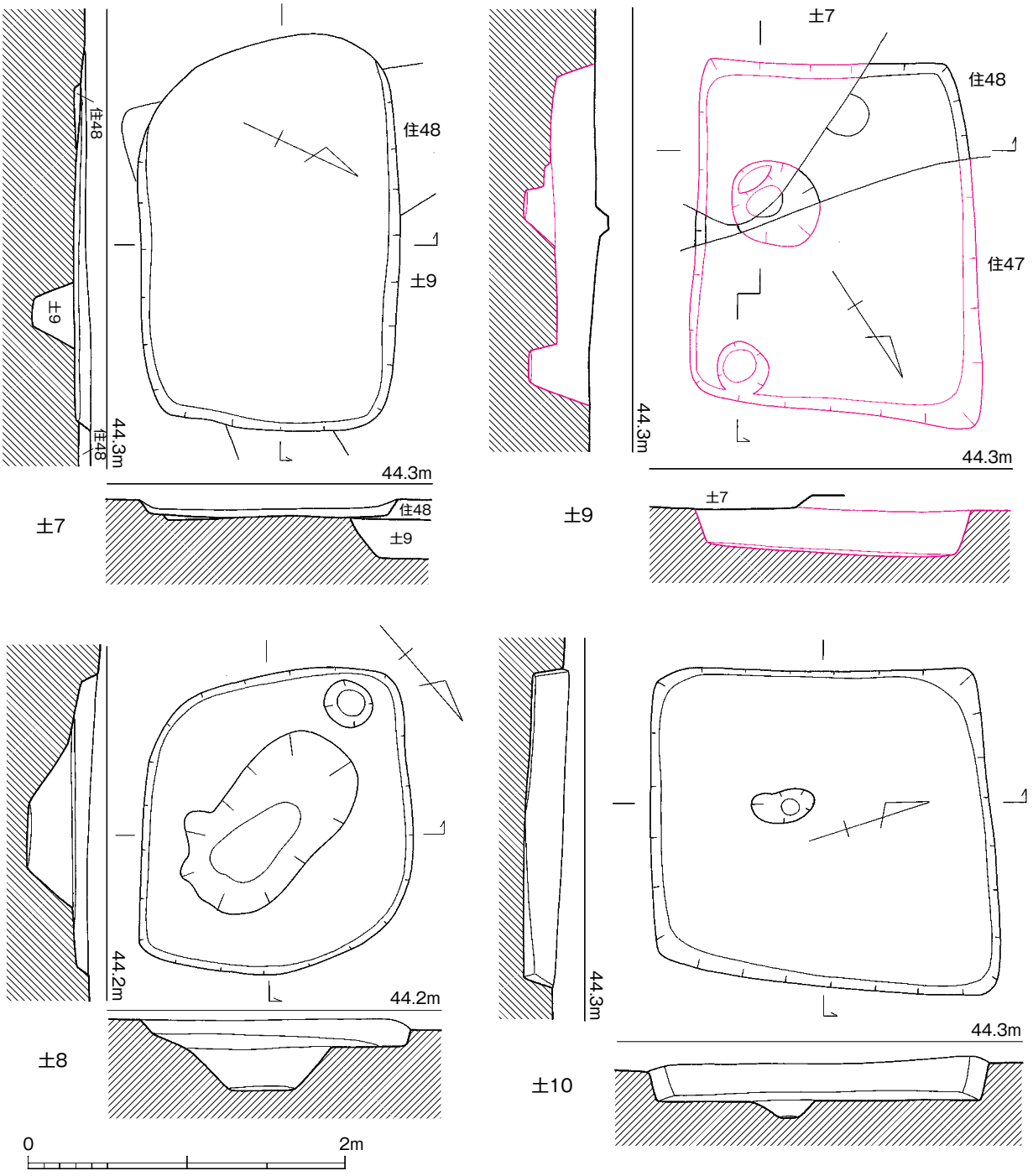
である。切り合い関係とも矛盾はなく、本遺構の所属時期は古墳時代前期に想定できよう。

出土遺物（第 111 図）

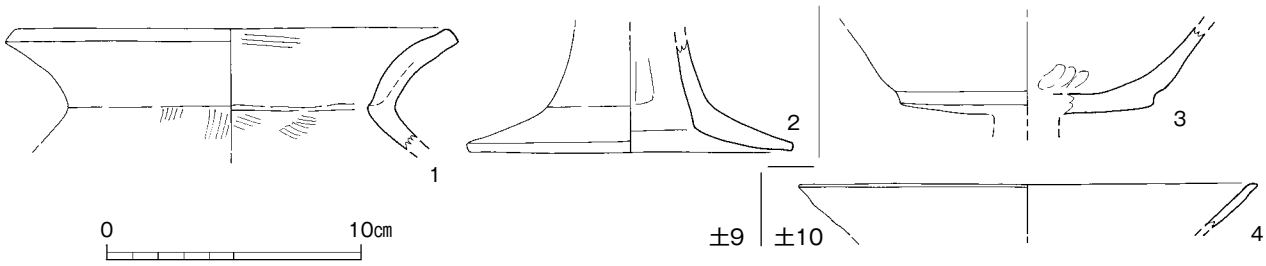
土師器（1･2） 1 は短頸壺の口縁部片であろう。胴部以下は欠失する。頸部は鋭く締まって内面に明瞭な稜を形成し、口縁部は強く外湾しながら短く開く。内・外面にハケ目調整のちナデ仕上げを施す。2 は高坏の脚部片である。脚上位は直線的にのび、下位で明瞭に屈曲して開く。脚端部は四角く収める。以上の資料はおおよそ古墳時代前期に位置づけられよう。

10 号土坑（第 110 図、図版 42）

Ⅲ区南東部で検出した。北に 59 号住居跡が、西に 60 号住居跡が隣接する。平面形態はわずかに



第 110 図　7 ～ 10 号土坑実測図（1/40）



第 111 図　9･10 号土坑出土土器実測図（1/3）

歪んだ正方形で、わずかに南北軸が長く、規模は南北が 2.06m、東西が 1.92m をはかる。床面の中央に浅いピットを持つ。残存深さは比較的あって 20cmほどをはかるが、付近の遺構群の状況から見て、本来の深さからはかなり削平されているものとみられる。出土土器は土師器の小片がビニール袋 1 袋ほど出土し、うち 2 点を図示した。これらから、古墳時代前期前半の遺構と考えられよう。

出土遺物（第 111 図）

土師器（3･4）　3 は布留式甕の口縁部片であろう。わずかに内湾しながら強く開く。端部は水平に収める。4 は高坏の坏部片である。体部外面に明瞭な稜を形成する。脚部と口縁端部は欠失する。これらはいずれも布留式古段階に位置づけられよう。

（4）方形竪穴状遺構

調査区内で検出された大型の（長）方形遺構のうち、主柱穴や炉跡、カマドなどがともなわず、形状も通常の竪穴住居跡とは異なっていて、竪穴住居跡ではない可能性が高いと考えられる遺構について、本稿では「方形竪穴状遺構」として報告することとした。調査区内からは 2 基が検出されているが、形状における共通性は少ない。いずれも、その性格は今のところ不明とせざるを得ない。

1 号方形状竪穴遺構（第 112 図、図版 41）

Ⅲ区中央付近で検出した。69 ～ 71 号住居跡と切り合い関係にあり、それらに後出する。平面形態は歪んだ長方形で規模は南北長が最大 6.24m、東西幅が同じく 4.12m をはかる。付近は竪穴住居跡が数多く切り合いながら広がる地点で、遺構同士の切り合い関係を把握するのが困難で、検出面を幾度となく精査するうちに本遺構を著しく削平してしまったため、残存状況はきわめて悪く、壁は最大でも 5cm程度しか残っていない。床面から、本遺構に伴うと考えられる明確な柱穴を検出することができず、平面形態も独特で、炉跡やカマドなども伴わないことから、竪穴住居跡とは異なる遺構と考えて、方形竪穴状遺構としたが、その性格は不明である。出土遺物にはビニール袋 1 袋ほどの土師器の小片があるが、図示できる資料はない。切り合い関係からは一応、古墳時代中期後半以降と考えられるが、上述のとおり検出時に遺構の切り合いの把握に非常に苦労した地点であり、正しく把握できているか自信はない。

2 号方形竪穴状遺構（第 112 図）

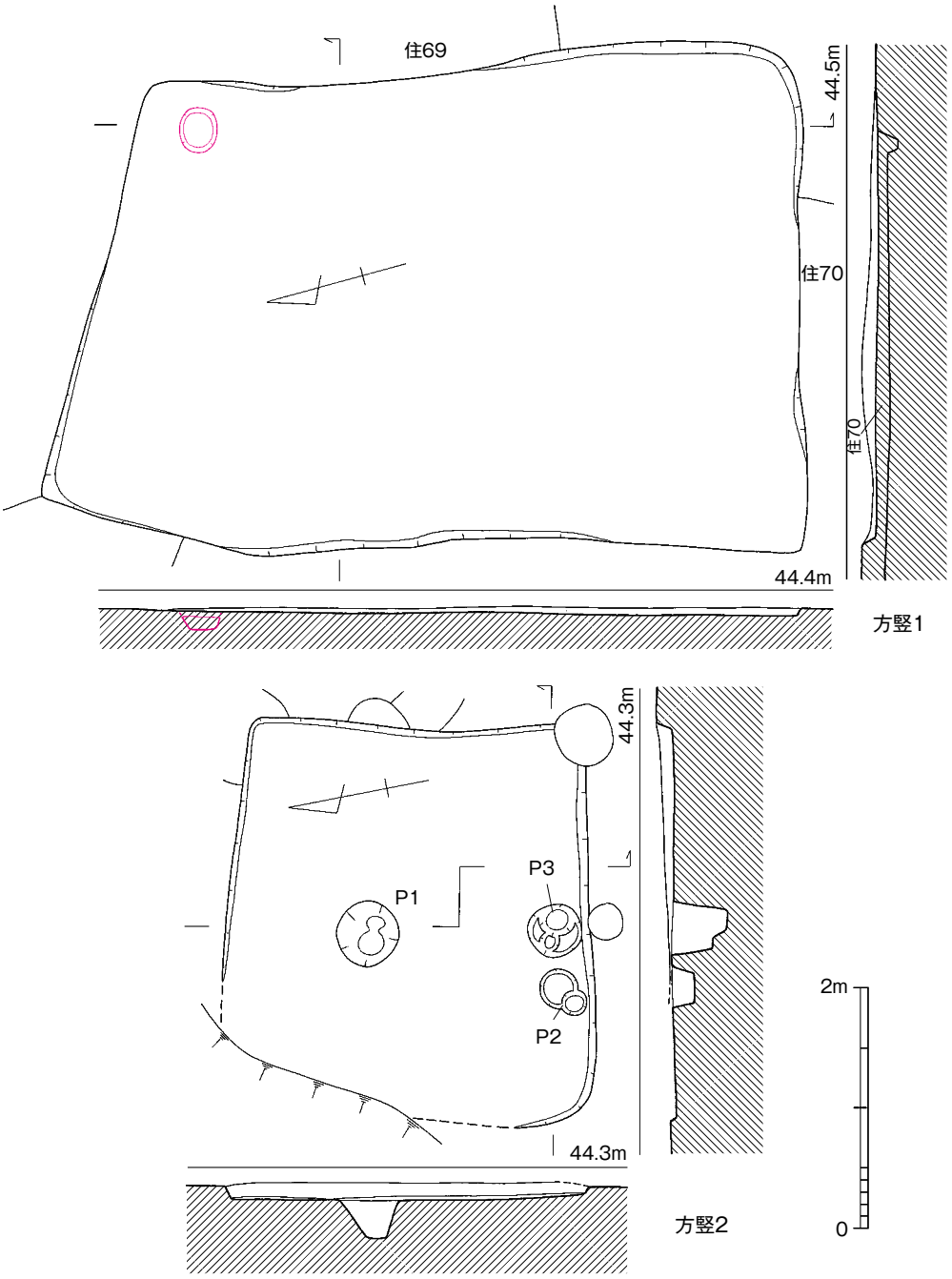
Ⅲ区西側の段落ち部に接する高位遺構面で検出した。小さなピットとは切り合い関係を持つが大型の遺構との切り合い関係はない。平面形態はやや歪んだ正方形で長軸を略東西方向にとる。全体に大きな削平を受けているものとみられ、壁の残存高さは最大でも 10cm程度と残りは悪く、とくに西壁は大きく削平されていてほとんど残されていない。残存部分より規模を推定すると、南北幅

は 3.02m、東西長は 3.26m ほどとなろう。規模が小さく、明確な主柱穴を持たず、カマドや炉などを伴わないため、竪穴住居跡として報告するのはためらわれ、方形竪穴状遺構としたが、遺構の性格は不明である。出土土器はなく時期は不明である。

なお、本遺構の埋土中から、第 120 図 5 に示した滑石製の臼玉が出土している。

（5）谷状落ち込み

Ⅱ区で検出された谷状落ち込みのうち、Ⅱ区南部で枝分かれして南東方向に伸びる谷状落ち込みが、Ⅲ区の南西部を西から南東に向かって伸びていた。この落ち込みを、Ⅱ区の SX － 04 の続きの遺構ということで、Ⅲ区においても SX － 04 として掘りあげている。



第 112 図　1･2 号方形竪穴状遺構実測図（1/60）

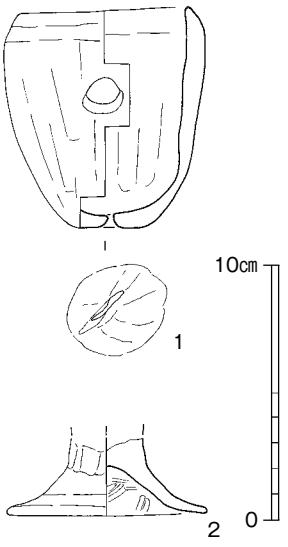
SX － 04（第 79 図）

調査区西壁の南寄りから現れ、南壁の中央部に向かって伸びる浅い谷状遺構である。平成 24 年度に調査した 4 次調査Ⅰ区から、この谷状落ち込みの続きが検出されている。本調査区では、西側の遺構面が一段低い部分から現れ、付近の最大深さは 20㎝ほどと比較的浅い。東に伸びて遺構面が一段高い付近に至ると最大深さは 50㎝ほどとなるが、徐々に東に向かって浅くなる。断面は浅い皿状を呈し、削平を受けている西側の段落ち部分では最大幅が 6m ほどとそれほど大きくないが、東側の遺構面が高い部分では最大幅 15m 程度と広がる。古墳時代後期の遺構がこの谷状落ち込みの埋土の上から掘り込まれており、これより前に埋没したことが分かる。出土土器は少なく、2 点が図示できたのみである。

出土遺物（第 113 図）

土師器（1･2） 1 はほぼ完形の蛸壺。底部から胴部下半にかけては強く湾曲し、口縁部はわずかに内湾しながら上に伸びる。胴部の中位に 1 孔を穿つ。ま底部中央部には細い溝がみられ、一部が内面まで貫通している。水抜き孔の可能性もあるが類例がなく、むしろ成形時の粘土の合わせ目が残ったものとも理解できようか。2 は脚付碗（または鉢）の脚部片である。脚は短く、強く「鉢」の字状に広がる。器壁調整は外面が板状工具ナデのちナデ（一部にミガキ）、内面はハケ目のちミガキ。

なお、ほかに第 117 図 10 に示した打製石鏃が埋土中から出土している。



第 113 図　Ⅲ区 SX － 04 谷状落ち込み出土土器実測図（1/3）

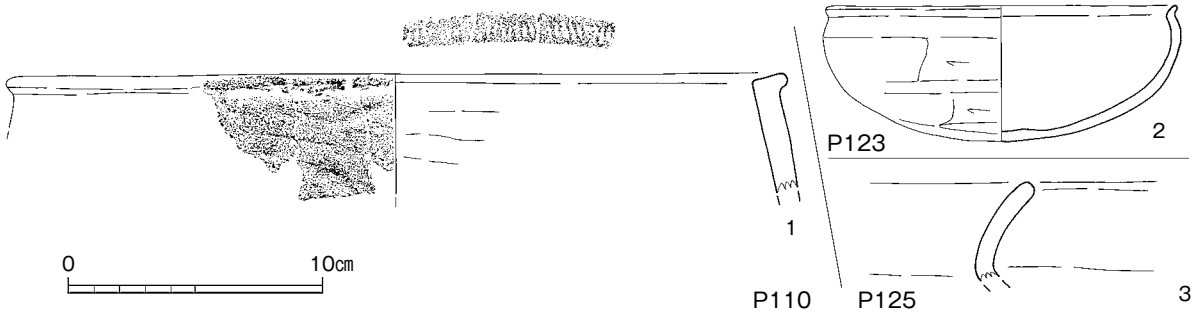
（6）その他の出土遺物

ピット出土遺物（第 114 図）

Ⅲ区でも、遺構に伴わないピットを多数検出した。本来は何らかの建物等を構成するものであったと考えられるが、調査でこれを把握することはできなかった。いくつかのピット内部からは土器が出土しており、ここではその中から図示に耐える大きさの遺物を紹介したい。

縄文土器（1） 1 は深鉢の口縁部片か。わずかに内傾気味に立ち、口縁端部外面を肥厚させる。口縁部上面には 3㎜ほどの間隔を開けてごく浅い刻目を放射線状に施す。器壁調整は内・外面ともにナデ。Pit110 出土。

土師器（2･3） 2 は碗である。丸底からゆるやかに立ち上がり、口縁部下でややきつく内湾し、口縁端部を短く外半させる。器壁調整は内面がミガキ、外面はヘラ状工具ナデか。器壁を薄く仕上げ



第 114 図　Ⅲ区ピット出土土器実測図（1/3）

る精製品である。Pit123 出土。3 は甕の口縁部片である。小片であり径は復原できない。頸部はやや鋭く屈曲し、口縁部は外湾しながら外に開く。器壁調整は内・外面ともにナデ。Pit125 出土。

Ⅲ区遺構検出時等の出土遺物（第 115 図、図版 67）

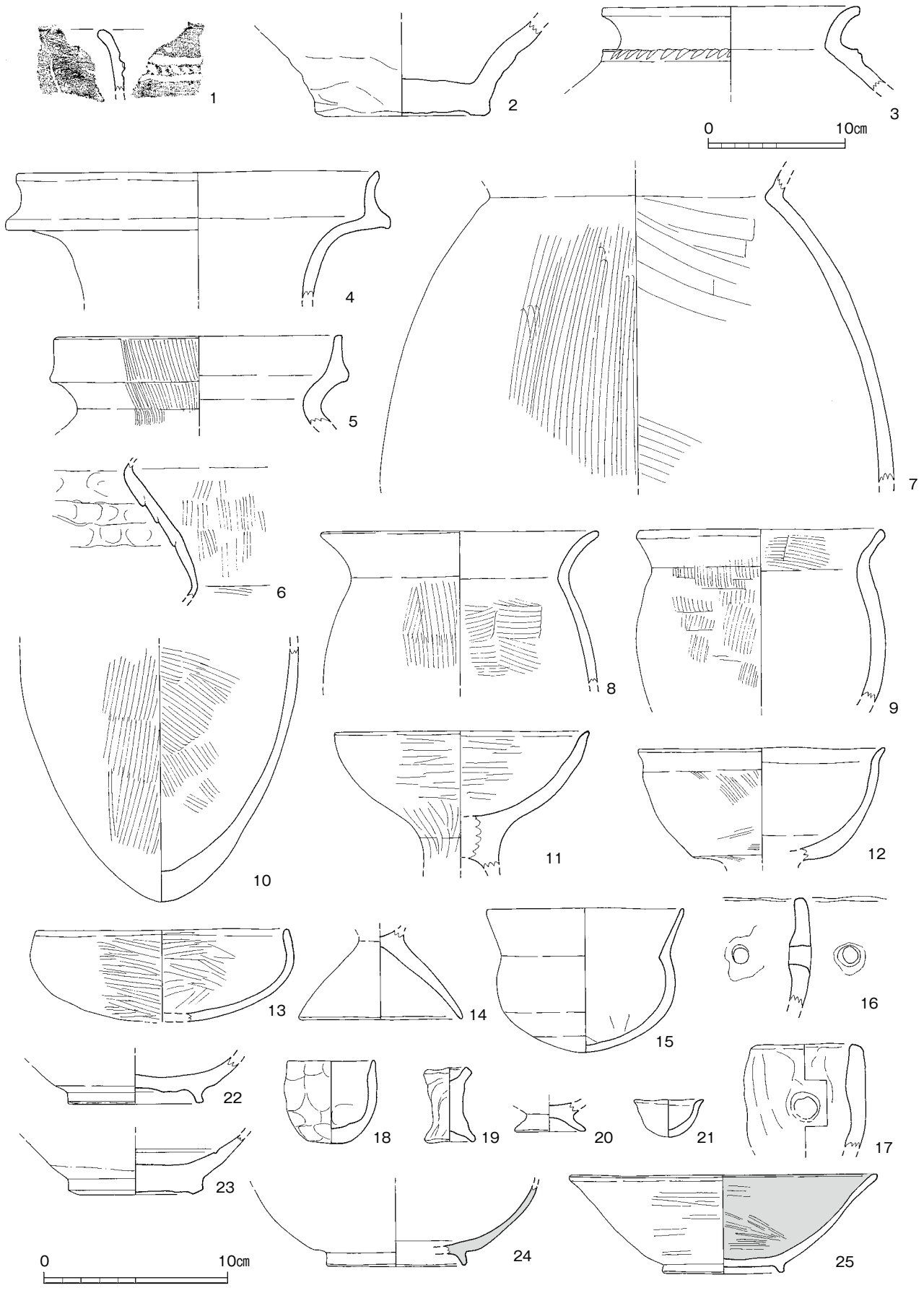
Ⅲ区の調査でも、水田耕作土と床土から構成される表土を重機で除去し、人力で遺構検出を行った際に、多くの土器が採集され、出土した。以下、これらの資料について簡単に見たい。

縄文土器（1･2） 1 は鉢の口縁部片か。小片で径は不明、傾きも自信がない。直立気味に立ち上がり端部を内湾させる。外面には二条の沈線をめぐらせ、その間に列点文を施す。器壁調整は内・外面ともにナデ。後期磨消縄文土器か。2 は深鉢の底部片である。平底で、わずかに高台状を呈する。胴部はくびれながら斜め上方に開く。器壁調整はナデ。阿高式系か。

弥生土器（3） 3 は大形の短頸壷の口縁部片である。頸部は強くくびれて内面に明瞭な稜を形成する。口縁部は反転して強く外湾し短く開く。頸部やや下の外面に断面三角形の突帯をめぐらせ、斜めに刻目を入れる。口縁部は四角く収める。後期後葉～末の土器であろう。

土師器（4 ～ 21） 4･5 は二重口縁壷の頸～口縁部片である。4 は頸部がやや長く、強く広がり、二重口縁屈曲部外面が明瞭に突出する。口縁部は強く外湾しながら上方に伸びる。5 は頸部が短く、強く湾曲する。二重口縁屈曲部内面の段が不明瞭で、口縁部は短く直線的に伸びる。6 は壷形土器の胴部か。やや扁平な球胴か。内面には粘土帯接合痕跡と明瞭な指頭圧痕が残り、外面はハケ目調整。7 は長胴甕の胴部上半部である。頸部は明瞭にくびれ、内面が突出する。器壁調整は内、外面ともにハケ目で、内面上半は板状工具を使用したナデ状の痕跡が残る。8･9 は小形の球胴甕の胴～口縁部片。ともに頸部の締まりはややゆるく口縁部は短く外反する。内・外面にハケ目調整痕跡を持つ。10 は長胴甕の胴下部～底部片。尖底で厚い底を持つ。器壁調整は内・外面ともにハケ目。以上のうち 4･5･7･10 は古墳時代前期の資料である。8･9 はやや新しく 6 世紀代前後か。11･12 は高坏であろう。いずれもやや珍しい器種で、11 は坏部が半球状の碗形を呈する。器壁調整は内・外面ともにやや雑なヘラミガキを施す。12 は平坦な底部から屈曲して内湾しながら立ち上がり、口縁端部を短く外半させるもので脚部は遺存しない。13 は碗。深さがやや浅く、口縁部下でやや強く内湾し、胴部最大径が口縁部径よりも大きくなる。器壁調整は全面にミガキを施し、器壁が薄い精製器種である。14 は布留系の小形器台の脚部。スカート状にわずかに内湾しながら広がる。全面に丁寧なナデを施す。15 は小形の短頸丸底壷である。体部は扁平な球状で、頸部ははっきりと屈曲し内面に明瞭な稜を形成する。口縁部はごくわずかに内湾しながら斜めに開く。全体に丁寧なナデを施す。16･17 は蛸壷である。いずれも断片的な資料で、16 は小片で径は不明、17 は底部を欠失する。ともに器壁に指頭圧痕がよく残り、体部中央に 1 孔を穿つ。18 ～ 21 は手づくねのミニチュア土器である。18 は甕形か。19 は器台、20 は脚付鉢か。21 は碗であろう。いずれも指頭圧痕を残す。

陶磁器ほか（22 ～ 25） 22 は青磁碗である。高台はやや細く高い。全面に灰緑色の釉をかけ、貫入が生じている。内面底部に目土の跡が認められる。23 は白磁碗である。高台内面のケズリがきわめて浅いもので、外面下位から高台にかけては露胎となる。内面全体と外面の上半に白濁色の釉を部分的にやや厚くかける。24 は瓦質の碗である。体部はゆるやかに湾曲して半球形をなし、高台部は細く高い。25 は黒色土器 a 類で内面を黒色に仕上げる。高台は断面がゆがんだ台形状でやや高く、体部は斜めに伸びて口縁端部を丸く収める。いずれも中世の資料であろう。



第 115 図　Ⅲ区検出時、その他出土土器実測図（3 は 1/4、他は 1/3）

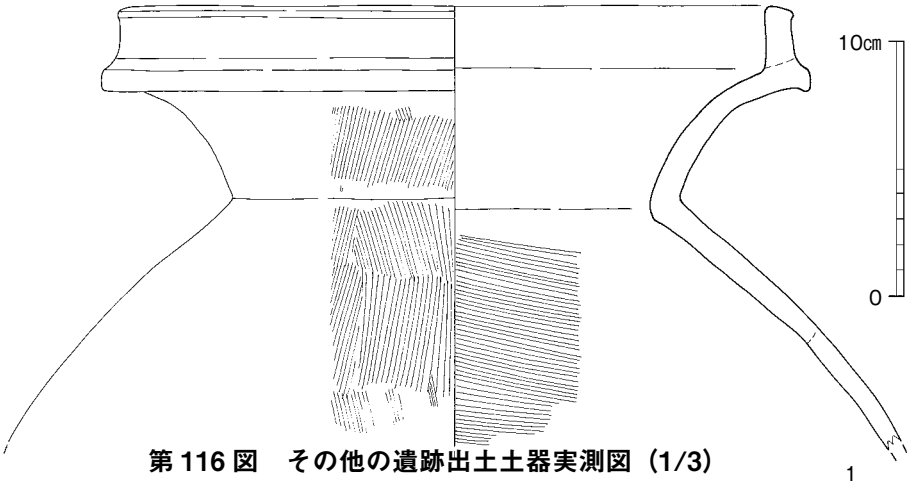
5　その他の出土遺物

（1）出土地不明の土器

調査時のラベル記入の不備で出土遺構が分からなくなったり、整理までの間にラベルの文字が劣化して消滅したりするなどのアクシデントに見舞われ、出土地点が分からなくなってしまった資料が数点存在することは遺憾なことである。以下ではこれらのうち実測できたものについて紹介したい。

出土遺物（第 116 図、図版 17）

土師器（1）　1 は二重口縁壺の胴部上半以上が残る資料である。頸部は強くくびれて明瞭に屈曲し、頸部は外湾しながら斜めに開く。二重口縁屈曲部は内面に明瞭な段を形成して外面は突出する。口縁部は上方に短く伸びる。古墳時代前期の資料である。整理中にラベルを紛失しており出土地は不明。



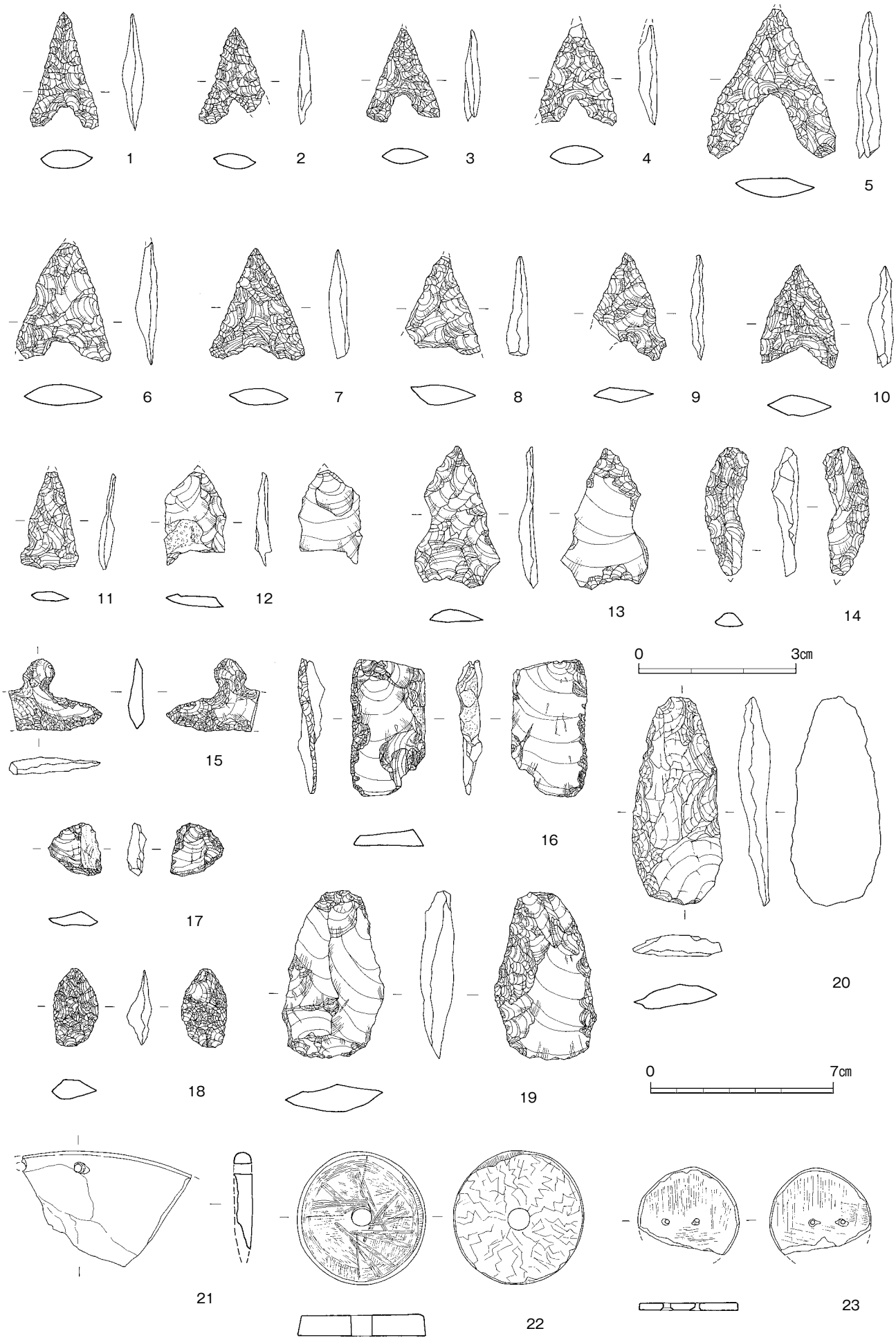
第 116 図　その他の遺跡出土土器実測図（1/3）

（2）土器以外の出土遺物

各調査区からは、検出中、あるいは遺構に伴って、土製品、石器・石製品、鉄器、玉類、鏡片などの土器以外の各種の遺物が出土した。以下ではこれらの遺物についてまとめて報告する。なお、各遺構に伴って出土したものについては遺構の報告の項でも記述しているので、必要に応じて参照されたい。

出土石器・石製品（第 117･118 図、図版 67･68）

打製石器（1 ～ 20）　1 ～ 13 は打製石鏃である。1 ～ 9 は凹基式鏃である。うち 1 ～ 4 は平面形状がやや縦長で抉りが比較的深く入るものである。1 はとくに細長く、全長 4.2cm、幅 2.3cm、重さ 0.6g をはかる。姫島産黒曜石製。Ⅰ区検出中の出土。2 は片方の脚部を欠失する。全長 1.8cm、復原幅 1.4cm、残存重さ 0.3g をはかる。姫島産黒曜石製で、Ⅰ区検出中の出土。3 は脚部付け根から先端まで太さを一定に仕上げたもの。切っ先をわずかに欠失する。復原長さ 1.8cm、幅 1.4cm、残存重さ 0.4g をはかる。腰岳産黒曜石製で、Ⅲ区 59 号住居跡出土。4 は脚部外側を下方に伸ばすもの。切っ先と片方の脚先端部を欠失する。復原長さ 1.9cm、復原幅 1.5cm、残存重さ 0.7g をはかる。姫島産黒曜石製で、Ⅲ区検出中の出土。5 はやや大型で脚の長い石鏃である。平面形状はほぼ正三角形状で、抉りが深く入り脚が長い。切っ先がごくわずかに欠失するが、復原長さは 2.8cm、幅 2.4cm、残存重さ 1.5g をはかる。姫島産黒曜石製で、Ⅲ区 63 号住居跡からの出土。6 ～ 10 は平面形状が比較的正三角形に近い形状を呈するものである。6 は切っ先と片側の脚の一部をわずかに欠失する。復原長が 2.4cm、復原幅は 1.8cm、残存重さは 1.1g をはかる。姫島産黒曜石製で、Ⅰ区検出中の出土。7 は完存資料である。全長 2.2cm、幅 1.7cm でわずかに幅が狭い。重さは 0.9g をはかる。腰岳産黒曜石製で、



第 117 図　遺跡出土石器・石製品実測図その①（1 ～ 14 は 1/1、他は 1/2）

Ⅰ区検出中の出土。8 もやや全長より幅が狭い資料で、切っ先と片脚を欠失する資料である。復原全長は 1.9cm、復原幅は 1.4cm、残存重さは 0.7g をはかる。姫島産黒曜石製で、Ⅲ区検出中の出土。9 はやや薄手の資料である。片脚がほぼ完全に欠損しており、完存する側の側面にやや湾曲の大きな抉りがみられるが意図的なものかどうかは判断できない。全長 2.1cm、復原幅 1.4cm、残存重さ 0.4g をはかる。腰岳産黒曜石製で、Ⅲ区検出中の出土。10 は両側面の脚の付け根にあたる部分に屈曲があり、五角形鏃とも理解できそうな資料である。完形で、長さ 2.0cm、幅 1.5cm、重さ 0.4g をはかる。腰岳産黒曜石製で、Ⅲ区 SX － 04 からの出土。11 は平基式の石鏃である。やや細長い形状で、切っ先がわずかに欠失し、復原長さ 1.8cm、幅 1.2cm、残存重さ 0.4g をはかる。姫島産黒曜石製で、Ⅲ区 51 号住居跡からの出土。12･13 は剥片を利用して成形した鏃である。12 は平面形状が五角形状を呈する。両面ともに大きな剥離面があり、片側面のみ小さな剥離により刃部を成形する。切っ先がわずかに欠失し、復原長は 1.9cm、幅 1.2cm、残存重さ 0.4g をはかる。姫島産黒曜石製で、Ⅲ区検出中の出土。13 は細長い三角形状の凹基族の形態を志向するが片側面が剥片の形状に規制されて大きく湾曲する剥片鏃である。片面が一枚の大きな剥離により形成され先端部のみ小剥離により刃部を成形する。反対面は細かな剥離を繰り返して全体を成形している。ほぼ完形とみられ、全長 2.7cm、幅 1.6cm、重さ 0.9g をはかる。姫島産黒曜石製で、Ⅲ区検出中の出土である。14 は石錐として報告するが、刃部と推測される部分が欠失している。全体的に細く、湾曲している。残存長は 2.5cm、幅 0.8cm、重さ 0.6g をはかる。腰岳産黒曜石製で、Ⅱ区 SX － 04 からの出土。15 は石匙である。1/3 ほどが欠失しており、つまみ部と刃部の半分強が残っている。刃部の残存幅が 3.5cm、残存重さは 4.4g をはかる。暗灰色の安山岩製で、Ⅱ区 SX － 04 からの出土。16 はナイフ型石器である。平面形状は略長方形で片方の長辺に小さな剥離を連続で施して刃部を成形する。両面ともに大きな剥離で全体形状を作り出している。幅 2.8cm、長さ 5.3cm、重さ 10.8g をはかる。姫島産黒曜石製で、Ⅰ区検出中の出土。17 ～ 19 はスクレイパーとして報告する。17 は平面三角形状の剥片の一辺に刃部を作り出すものである。全長 2.0cm、幅 2.0cm、重さ 2.2g と小型である。腰岳産黒曜石製で、Ⅰ区検出中の出土。18 はやや縦長で全体に細かい剥離を施して成形したもので、長辺の一辺に刃部を作り出す。長さ 3.6cm、幅 1.7cm、重さ 3.3cmをはかる。姫島産黒曜石製で、Ⅰ区 7 号住居跡からの出土。19 は大型のスクレイパーである。打製石斧のような平面形状をしているが、片方の長辺に片面より細かい剥離を施して刃部を形成しておりスクレイパーと判断した。厚さが比較的厚く最大 1.3cmをはかる。長さ 6.4cm、幅 3.9cm、重さ 23.9g をはかる。姫島産黒曜石製で、Ⅰ区検出中の出土。20 は打製石斧である。長卵形で全体に細かい剥離を用いて成形し、短辺に刃部を形成する。全長 9.9cm、幅 3.4cm、重さ 27.9 をはかり、灰白色の安山岩製でⅢ区検出中の出土。

なお、ほかに調査区内から多数の黒曜石・安山岩の剥片が出土している。出土位置と点数、重量、石材（推定産地）について一覧表で示すので参照されたい（第 3 表）。

磨製石器（21） 21 は石包丁である。後背部の中央付近のみが残存しており、大きく湾曲する点が特徴的である。2 孔を開けた痕跡が確認でき、孔の断面は直線的である。厚さは 0.8cmほどである。輝緑凝灰岩製で、Ⅲ区 55 号住居跡の床下掘り込みより出土した。

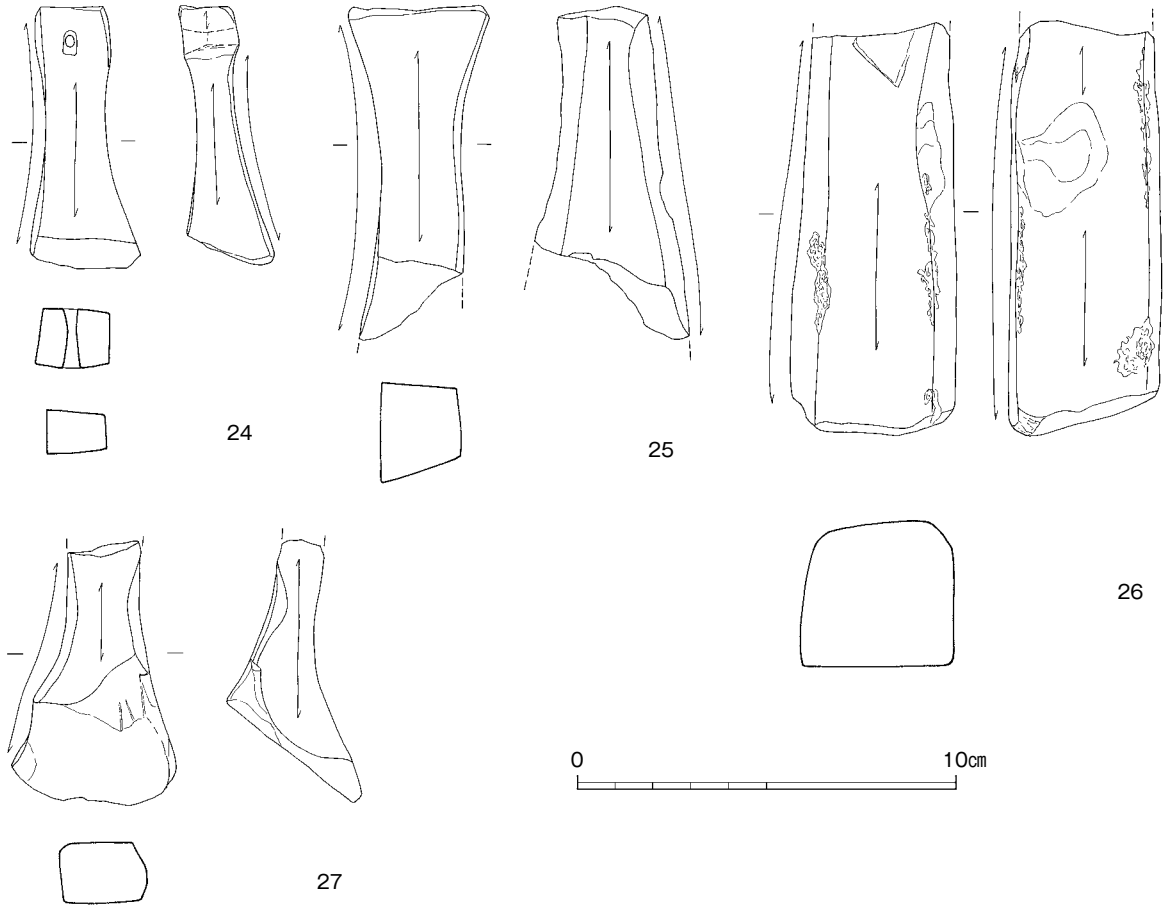
磨製石製品（22・23） 22 は滑石製の紡錘車である。厚さが 0.8cmと比較的薄く、上面に向かってやや狭まる形状を持っていて、上面径が 4.7cm、下面径が 4.9cmをはかる。中央に直径 0.8cmの円孔を穿つ。上面には細かい擦痕が残り、その上からヘラ状工具による不定方向のミガキ痕跡が認めら

れる。下面には鋸刃文状のごく細い沈線（ひっかき傷に近い状態の線）を放射線状に不定的に配する。Ⅰ区10号住居跡より出土した。23は滑石製の円盤形石製品である。厚さは0.3cmと薄く、直径は3.8cmで、ややゆがんだ円形を呈し、ややずれた位置に2孔を穿つ。孔径は2mmほどで、孔間距離は1cmほどである。Ⅰ区3号住居跡より出土した。

砥石（24 ～ 27） 24 ～ 27は砥石である。24はほぼ完存するもので、全長6.9cm、最大幅2.8cm、最大厚さ2.2cmをはかる。4面を研ぎ面として使っており、かなり使い減りしているがもとは細長い立方体であったものだろう。頭部に計3mmほどの円孔があいており、両側からの穿孔であることが断面形状から読み取れる。石材はアプライトで目が細かい。Ⅰ区遺構検出中の出土。25はやや幅の広い立方体の4面を研ぎ面として用いたもので、かなり使い減りしているほか下端部が欠けているが、残存大きさは最大長7.8cm、最大幅4.1cm、最大厚さ3.7cmをはかる。硬質砂岩製の仕上げ砥

調査区	出土遺構	石材	点数	合計重量（g）	備考
Ⅰ区	1号住居跡	姫島産	1	8.9	
Ⅰ区	1号住居跡	姫島産	1	3.3	
Ⅰ区	1号住居跡	姫島産	1	3.2	
Ⅰ区	1号住居跡	姫島産	2	1.6	
Ⅰ区	2号住居跡下層土坑	腰岳産	1	1.6	
Ⅰ区	6号住居跡	姫島産	1	3.4	
Ⅰ区	10号住居跡	姫島産	1	2.8	
Ⅰ区	10号住居跡	姫島産	3	9.5	
Ⅰ区	10号住居跡	その他黒曜石	1	1.3	
Ⅰ区	12号住居跡	姫島産	1	0.8	
Ⅰ区	20号住居跡	その他黒曜石	2	15.0	
Ⅰ区	22号住居跡	その他黒曜石	1	2.6	
Ⅰ区	1号溝	姫島産	1	5.1	
Ⅰ区	P57	その他黒曜石	1	6.8	
Ⅰ区	SX－02	その他黒曜石	1	3.5	
Ⅰ区	SX－02	姫島産	1	10.6	
Ⅰ区	検出中	姫島産	1	2.2	
Ⅰ区	検出中	姫島産	4	10.7	
Ⅰ区	検出中	姫島産	1	2.0	
Ⅰ区	検出中	その他黒曜石	1	1.0	
Ⅰ区	検出中	その他黒曜石	2	4.5	
Ⅰ区	検出中	姫島産	1	13.4	
Ⅰ区	検出中	姫島産	2	4.1	
Ⅰ区	検出中	その他黒曜石	1	0.9	
Ⅰ区	検出中	その他黒曜石	2	3.6	
Ⅰ区	検出中	姫島産	1	9.3	
Ⅰ区	検出中	姫島産	1	0.7	
Ⅰ区	検出中	腰岳産	1	0.1	
Ⅰ区	検出中	姫島産	1	1.4	
Ⅰ区	検出中	その他黒曜石	1	0.9	
Ⅰ区	検出中	その他黒曜石	1	1.4	
Ⅰ区	検出中	姫島産	2	0.8	
Ⅰ区	検出中	姫島産	1	1.8	
Ⅰ区	検出中	腰岳産	1	7.1	
Ⅰ区	検出中	姫島産	1	1.8	
Ⅰ区	検出中	姫島産	1	0.6	
Ⅰ区	検出中	姫島産	1	1.2	
Ⅰ区	検出中	姫島産	1	0.6	
Ⅱ区	SX－04	姫島産	3	8.0	
Ⅱ区	SX－04	腰岳産	1	6.4	
Ⅱ区	SX－04	腰岳産	1	7.7	
Ⅱ区	SX－04	姫島産	2	18.7	
Ⅱ区	SX－04	その他黒曜石	1	1.4	
Ⅱ区	検出中	姫島産	5	20.5	
Ⅲ区	42号住居跡	姫島産	1	1.7	
Ⅲ区	42号住居跡	腰岳産	1	0.7	
Ⅲ区	49号住居跡	その他黒曜石	1	4.6	
Ⅲ区	50号住居跡	姫島産	1	1.4	
Ⅲ区	51号住居跡	姫島産	5	10.4	
Ⅲ区	51号住居跡	腰岳産	3	16.4	
Ⅲ区	52号住居跡	その他黒曜石	1	6.0	
Ⅲ区	52号住居跡下層	腰岳産	1	0.6	
Ⅲ区	53号住居跡	その他黒曜石	1	3.4	
Ⅲ区	53号住居跡	姫島産	1	8.2	
Ⅲ区	63号住居跡	姫島産	1	6.8	
Ⅲ区	67号住居跡P1	腰岳産	1	0.5	
Ⅲ区	70号住居跡	姫島産	1	1.9	
Ⅲ区	76号住居跡下層	姫島産	1	12.6	
Ⅲ区	SX－04	姫島産	2	12.9	
Ⅲ区	検出中	その他黒曜石	5	11.6	
Ⅲ区	検出中	その他黒曜石	3	20.9	
Ⅲ区	検出中	その他黒曜石	1	1.5	
Ⅲ区	検出中	腰岳産	2	12.5	
Ⅲ区	検出中	姫島産	7	42.0	30.1ｇの大片あり
Ⅲ区	検出中	その他黒曜石	1	1.6	
Ⅲ区	検出中	腰岳産	1	5.6	
Ⅲ区	検出中	姫島産	4	14.0	
Ⅲ区	検出中	その他黒曜石	1	2.0	
Ⅲ区	検出中	腰岳産	1	0.6	
Ⅲ区	検出中	その他黒曜石	1	2.1	
Ⅲ区	検出中	腰岳産	1	3.0	
Ⅲ区	検出中	その他黒曜石	1	0.7	
Ⅲ区	検出中	姫島産	1	2.1	
Ⅲ区	検出中	腰岳産	1	1.5	
Ⅲ区	検出中	姫島産	2	3.0	
Ⅲ区	検出中	姫島産	1	4.0	
Ⅲ区	検出中	腰岳産	1	0.6	
Ⅲ区	検出中	姫島産	2	12.2	
Ⅲ区	検出中	姫島産	1	3.0	
合計		姫島産	73	283.2	平均重量3.88g
合計		腰岳産	18	64.9	平均重量3.61g
合計		その他黒曜石	31	97.3	平均重量3.14g
※石材の識別は肉眼観察による。また、同一遺構中からの出土分については便宜上出土日ごとに分けている。					

第3表　遺跡出土黒曜石等剥片一覧

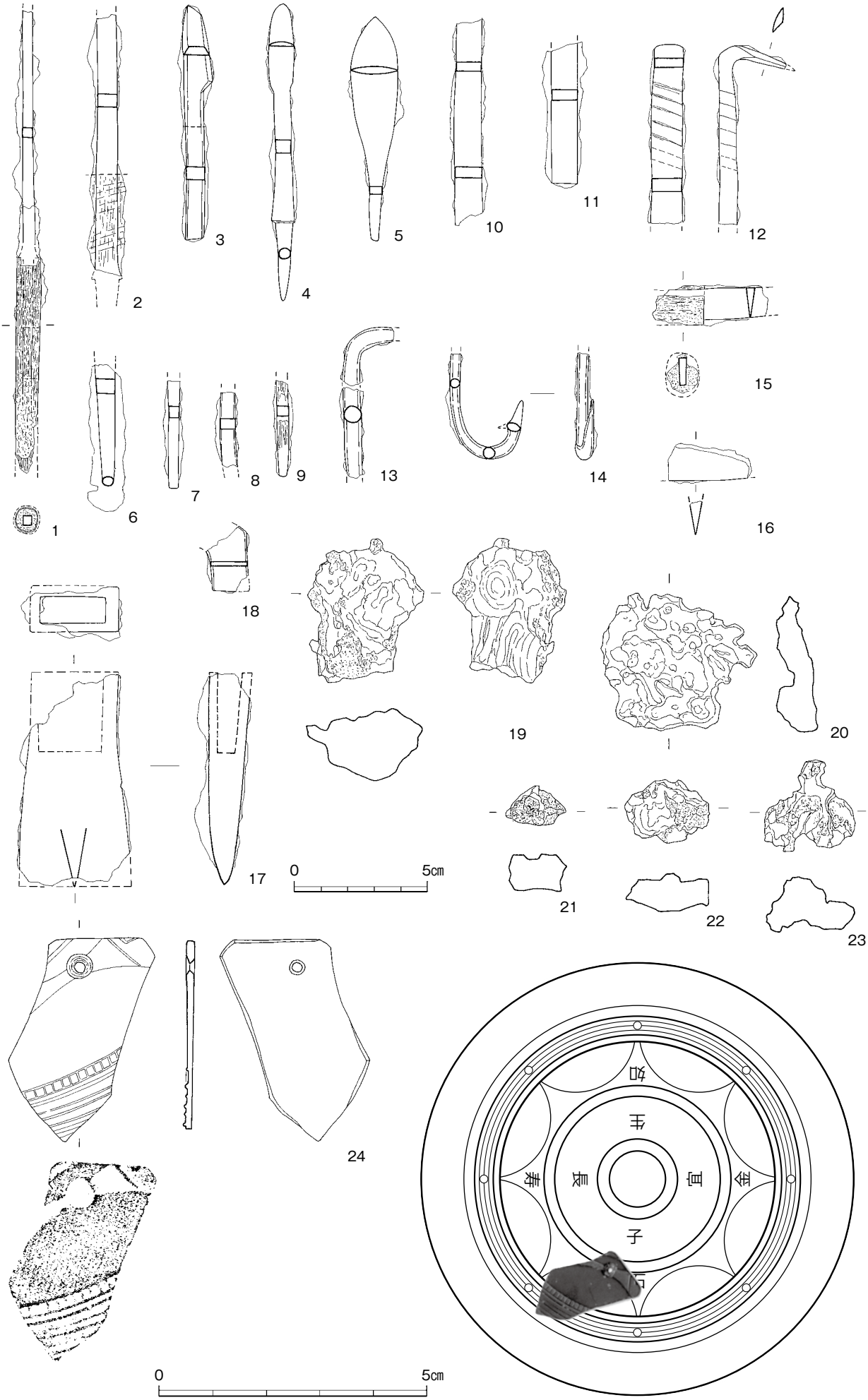


第 118 図　遺跡出土石器・石製品実測図その②（1/2）

石でⅠ区 9 号住居跡からの出土。26 はやや目の粗い花崗岩製の棒状製品で、砥石とするには違和感も残るが、4 面に平坦面を形成しており擦痕もあるためここでは砥石として報告する。全形は残存長 10.9cm、幅 4.9cm、厚さ 4.0cmをはかり、断面形状はほぼ正方形で、Ⅰ区 30 号住居跡からの出土。27 も大きく使い減りし、欠損している砥石である。残存長は 6.0cm、最大幅 4.5cm、残存厚さ 3.4cm の立方体で､長側面の 4 面を使用する。アプライト製の仕上げ砥石である。Ⅰ区 1 号溝からの出土。

金属器（第 119 図、図版 68 ～ 70）

鉄器（1 ～ 18）　1 ～ 9 は鉄鏃である。1 は鏃身部が欠損しており、茎部が植物質の矢柄に刺さった状態で出土した長頸鏃である。矢柄は 7cmほどが遺存しており、その内部に断面が一辺 5㎜ほどの正方形状を呈する茎が 5cmほどの長さにわたって遺存していた。茎から篦被関部を介して頸部へはスムーズにつながっており、矢柄が切断されている箇所で関部を推定できる。頸部は 8.5cmほどが遺存しており、断面形状は全体的に同一で一辺 5㎜弱の正方形状を呈する。Ⅰ区 10 号住居跡の埋土中から出土した。2 も鏃身部が欠損した長頸鏃である。頸部は断面形状が太さ 8㎜、厚さ 5㎜ほどをはかるしっかりしたもので、6cmほどが遺存する。頸部は幅 1cm、厚さ 2㎜ほどの平坦な形状をしており、遺存長さは 4cm弱をはかる。全体に木質のようなもので覆われているが錆がひどく判然としない。Ⅰ区遺構検出中の出土。3 は短茎の片切刃鏃でほぼ完存している。鏃身部は長さ 3cm、最大幅 1cmをはかり、厚さが 3㎜ほどあってやや厚い。茎部は断面形状が 5 × 8㎜の正方形状でしっかりした作りである。Ⅲ区 64 号住居跡からの出土。4･5 は柳葉型鏃である。4 は完存品で、茎部は



第 119 図　遺跡出土金属器実測図（24 の実測図・拓本は 1/1、他は 1/2）

長さ3㎝で下部に行くほど細い円錐形状を呈する。篦被関部には段が形成され、そこから鏃身部へやや細くなりながら続く。頸部は断面形状が6×5㎜の長方形状でしっかりした作りで、長さ4.5㎝ほどをはかる。鏃身部はゆるやかに膨らんでから尖る形状で、片面にのみ鎬を作りだす。鏃身部の大きさは幅9㎜、長さ3㎝ほどをはかり、全体の長さは11.0㎝をはかる。Ⅲ区66号住居跡からの出土。5は篦被関部・鏃身関部ともにはっきり作り出さないもので、茎部の長さは約2.5㎝、断面形状は5×3㎜の正方形状を呈する。鏃身部はゆるやかに膨らんでから尖り、幅1.8㎜、長さ5.5㎝ほどをはかる。Ⅱ区SX－04からの出土。6～9は茎部のみが遺存する資料である。6は茎部の先端が円筒状、関部に向かって断面形状が方形となる資料である。太さは4～8㎜、遺存長さは5.5㎝ほどをはかる。Ⅰ区3号住居跡からの出土。7～9は断面が一辺4～6㎜の方形状を呈するものである。遺存長さは7が4.1㎝、8が2.8㎝、9が3.6㎝ほどをはかる。7はⅠ区遺構検出中の出土、8はⅢ区55号住居跡からの出土、9はⅠ区22号住居跡からの出土。10～12は鉇である。10･11は基部のみが遺存する資料である。いずれも断面形状は厚さ3～4㎜、幅1㎝ほどの長方形を呈し、まっすぐに伸びる。遺存長さは10が6.8㎝､11が5.3㎝をはかる。10がⅢ区53号住居跡からの出土、11はⅠ区SX－02からの出土。12は先端部が折り曲げられた状態で出土した。基部が欠損しており遺存長さは7.8㎝ほどをはかる。基部の断面形状は5×10㎜の長方形を呈し、先端部は薄い三角形状を呈する。形状から、あるいは鏃かとも考えたが、先端部の形状から鉇として報告する。Ⅰ区10号住居跡からの出土。13は鉸具片か。断面形状は直径7㎜ほどの円形で、接合しない2片からなり、うち一つがゆるやかに90°屈曲する。Ⅰ区11号住居跡からの出土。14は釣り針である。基部が欠損しているほかは良く残り、全長4㎝、幅2.7㎝ほどをはかる。断面形状は直径4㎜ほどの円形で、針先端部がややゆがみ、カエシを有する。Ⅰ区11号住居跡からの出土。15･16は刀子の小片である。15は基部から刃部の一部までが遺存する。基部は断面形状が3×11㎜の長方形状を呈し、鹿角製とみられる柄が一部遺存している。刃部は鋭く尖る。遺存長さは4.4㎝をはかり、うち刃部が2.4㎝ほどを占める。Ⅰ区20号住居跡からの出土。16は刃部片である。やはり断面形状は三角形状に鋭く尖る。遺存長さは3.1㎝をはかる。Ⅰ区1号住居跡からの出土。17は鋳造鉄斧である。基部は断面長方形状で1.7×3.3㎝をはかり、厚さ3㎜の壁に囲まれて袋部を形成する。袋部の深さは残存状況で2.9㎝をはかる。基部から刃部にかけては中位以下でやや太くなる。刃部は推定幅で4.2㎝ほどをはかり、わずかに片刃状に偏っていて鋭く尖る。遺存長は7.9㎝をはかる。Ⅲ区遺構検出中の出土。18は不明鉄器である。厚さが1㎜ほどの板状の鉄器で、一部欠損するが不整五角形状を呈するものか。Ⅰ区1号住居跡からの出土。19～23は鉄滓である。いずれも不定形で、重さは19が42.3g、20が52.1g、21が1.4g、22が7.7g、23が15.0gをはかる。なかでも21は軽く、内部にスサ混じりの土塊を含んでいることから､炉壁片の可能性があろう。19はⅢ区遺構検出中の出土で、他はいずれもⅠ区20号住居跡埋土中からの出土である。

青銅器（24） 24は青銅鏡の破片である。内区・外区文様帯にかけての部分が残されていた。残存部分より、文様構成は内区が平頂圏文の外側に八弁の内行花文、外区が内側から櫛目文、雲雷文帯には二条の隆線に区切られた内部に3条の平行線文となっていることがわかる。内行花文の横には陽刻の文字が一部分のみ残存している。この文字の断片を手がかりとして近隣の出土例より類例をさがすと、田川郡香春町宮原遺跡第3号石棺墓出土の大型の内行花文鏡をあげることができる。宮原遺跡出土例は「長生宜子」「寿如金石」銘の八弁の内行花文鏡で、直径19.5㎝をはかるもので、

宮原例を参考に本鏡片に残存している文字は「石」の一部と判断した。本鏡片の残存部分にみられる文様構成も、宮原例ときわめて類似しており、宮原例を参考にしつつ本鏡片の全形を復原すると、宮原例より一回り小さい直径約 16.0㎝の「長生宜子」銘内行花文鏡と判断できよう。

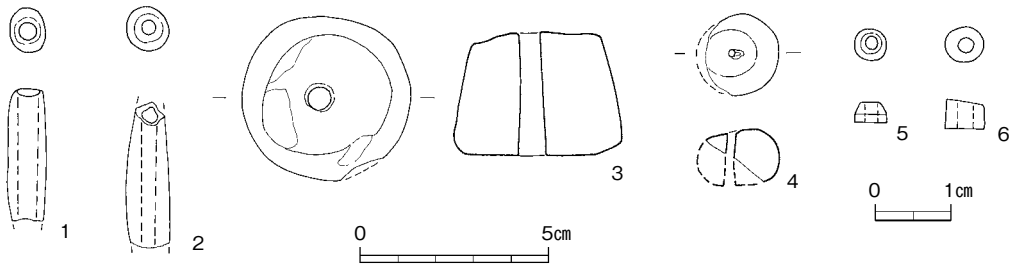
本鏡片は、鏡背面実測図の上・右・左側の三方の破断面を磨いており、とくに上・左側は丁寧に仕上げている。また、内行花文の最も膨らむ部分に鏡面・鏡背面の両方から穿孔を施して直径 2㎜ほどの小孔を穿っている。これらから、本鏡片はいわゆる破鏡と判断できる。出土状況であるが、Ⅲ区 66 号住居跡の埋土中、検出面にほど近いところにわずかに斜めになって埋没していた。床面からは約 15㎝浮いた状態で出土しており、住居跡の埋没に伴って投棄されたものと考えられる。出土遺物から 66 号住居跡は古墳時代前期後半～中期初頭に属すると考えられ、本鏡式が一般的に後漢期の製作であることを考えると、埋没までにしばらくの期間の伝世が見込まれる点が注目される。

66 号住居跡内破鏡出土状況写真

土製品・玉類（第 120 図、図版 70）

土製品（1 ～ 3） 1･2 は土錘である。ともに一部が欠損しており本来のサイズは分からないが、いずれも中央部がやや膨らむ円筒状を呈し、器壁には指ナデ痕跡が残る。1 は器壁が灰白色を呈し、残存長さ 3.5㎝、胴部最大幅 1.1㎝で、Ⅱ区検出中の出土。2 は器壁が黒褐色を呈し、残存長さ 3.9㎝、胴部最大幅 1.1㎝で、Ⅲ区検出中の出土。3 は土製の紡錘車である。平面形状は円形、断面形状は台形をしており、直径は下面が 4.5㎝、上面が 3.5㎝をはかる。高さは 3.2㎝である。中央に直径 0.6 ～ 0.8㎝の円孔が貫通している。Ⅰ区遺構検出中の出土。

玉類（4 ～ 6） 4 は土玉である。ややつぶれた球状を呈しており、一部が欠失しているが、平面形状は直径 2.2㎝のほぼ円形状、高さは 1.5㎝ほどに復元できる。中央に直径 2㎜の円孔が貫通する。Ⅲ区遺構検出中の出土。5 は滑石製の臼玉である。平面形状は直径 4㎜の正円、断面形状は高さ 3㎜の六角形状を呈し、孔径は 2㎜をはかる。Ⅲ区 2 号方形竪穴状遺構からの出土。6 はガラス製の小玉である。濃い紺色を呈し、直径 5㎜、高さ 4㎜、孔径 2㎜をはかる。引き延ばし切断技法により製作されたものとみられる。Ⅲ区 49 号住居跡からの出土。



第 120 図　遺跡出土土製品･玉類実測図（1･2 は 1/2、他は 1/1）

Ⅳ　総括

1　遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定

（1）塔田琵琶田遺跡における放射性炭素年代測定

①はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約６万年前までの年代測定が可能である。

ここでは、塔田琵琶田遺跡で検出された住居跡の構築年代を明らかにする目的で、住居跡より出土した炭化物を対象に放射性炭素年代測定を行った。

②試料と方法

測定試料は、塔田琵琶田遺跡のⅠ区とⅢ区の住居跡で出土した炭化材 11 点である。測定試料の情報、調製データは第 4 表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

試料名	試料の詳細	種類	前処理・調整	測定法
No.1	Ⅰ区２号住居跡	炭化材（薄板材）	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
No.2	Ⅰ区 10 号住居跡	炭化材（薄板材）	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
No.3	Ⅰ区 10 号住居跡	炭化材（薄板材）	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
No.4	Ⅰ区 10 号住居跡	炭化材（板材）	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
No.5	Ⅰ区 12 号住居跡	炭化材（角または丸材）	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
No.6	Ⅰ区 12 号住居跡	炭化材（角または丸材）	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
No.7	Ⅰ区 19 号住居跡	炭化材（丸材か）	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
No.8	Ⅰ区 34 号住居跡	炭化材（薄板材）	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
No.9	Ⅲ区 47 号住居跡	炭化材（角または丸材）	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
No.10	Ⅲ区 51 号住居跡	炭化材（角または丸材）	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
No.11	Ⅲ区 52 号住居跡	炭化材（板材）	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
※ AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法				

第 4 表　放射性炭素年代測定試料および処理

③測定結果

第 5 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。また、図 121･122 には暦年較正結果を示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用

試料名	測定No. (PED-)	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (年 BP)	^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代（西暦）	
					1 σ（68.2%確率）	2 σ（95.4%確率）
No.1	27140	-25.32 ± 0.11	165723	1655 ± 25	AD356-366（ 8.7%） AD381-418（59.5%）	AD336-426（95.4%）
No.2	27141	-26.85 ± 0.18	1565 ± 23	1565 ± 25	AD430-493（56.4%） AD512-517（ 4.4%） AD529-538（ 7.4%）	AD423-547（95.4%）
No.3	27142	-27.52 ± 0.19	1623 ± 23	1625 ± 25	AD395-429（53.8%） AD495-508（10.4%） AD521-527（ 4.0%）	AD383-475（66.8%） AD485-535（28.6%）
No.4	27143	-26.63 ± 0.12	1623 ± 22	1625 ± 20	AD395-429（55.7%） AD495-507（ 9.6%） AD522-526（ 2.9%）	AD384-474（67.6%） AD485-535（27.8%）
No.5	27144	-28.45 ± 0.12	1731 ± 23	1730 ± 25	AD254-302（43.8%） AD316-344（24.4%）	AD248-382（95.4%）
No.6	27145	-26.27 ± 0.12	1683 ± 24	1685 ± 25	AD342-395（68.2%）	AD260-280（ 6.7%） AD325-416（88.7%）
No.7	27146	-27.11 ± 0.15	1593 ± 23	1595 ± 25	AD419-434（13.2%） AD454-470（11.2%） AD487-534（43.8%）	AD412-538（95.4%）
No.8	27147	-27.76 ± 0.23	1694 ± 23	1695 ± 25	AD336-391（68.2%）	AD258-285（12.1%） AD290-295（ 0.9%） AD321-405（82.4%）
No.9	27148	-28.22 ± 0.11	1868 ± 22	1870 ± 20	AD85-142（50.5%） AD155-168（ 8.0%） AD195-209（ 9.7%）	AD79-219（95.4%）
No.10	27149	-27.94 ± 0.11	1810 ± 22	1810 ± 20	AD142-156（10.9%） AD167-195（23.9%） AD209-241（33.4%）	AD131-254（92.7%） AD302-315（ 2.7%）
No.11	27150	-27.25 ± 0.11	1859 ± 22	1860 ± 20	AD93-97（ 3.0%） AD125-179（44.7%） AD187-213（20.5%）	AD85-224（95.4%）

BP：Before Physics（Present）、AD：紀元

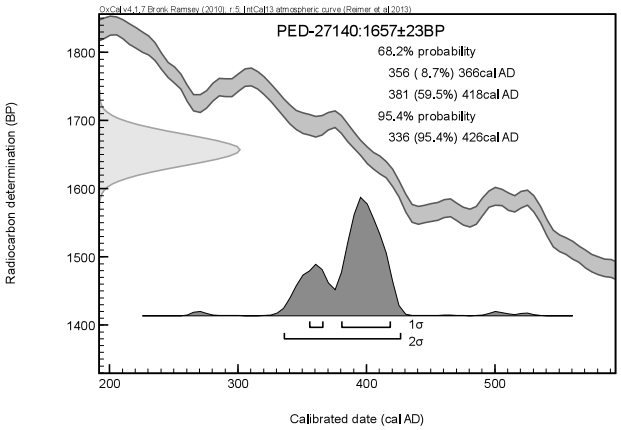
第 5 表　放射性炭素年代測定結果

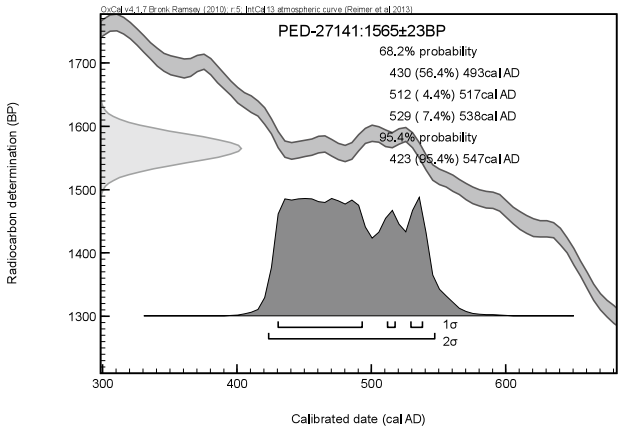
いて暦年較正を行うために記載した。

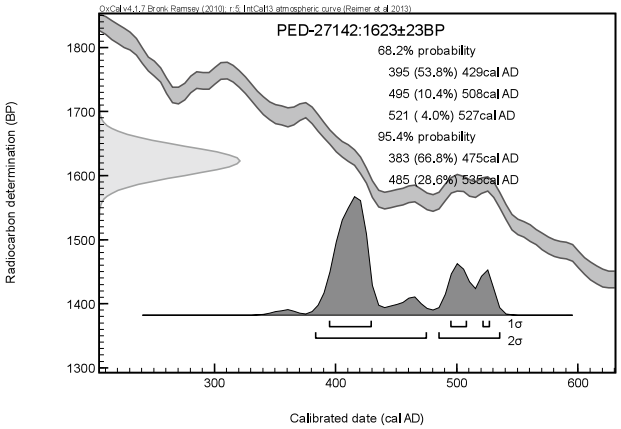
^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（年 BP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示すものである。なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

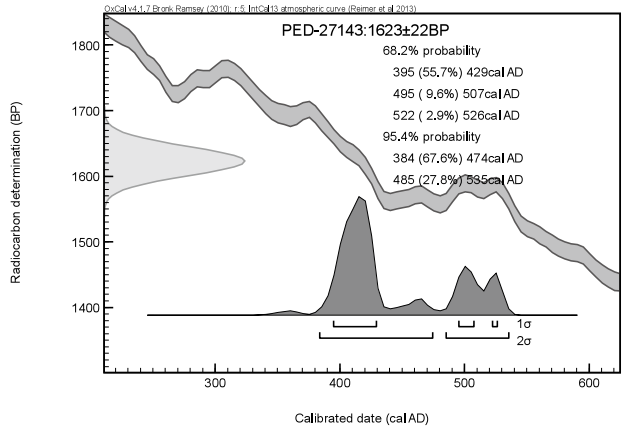
暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

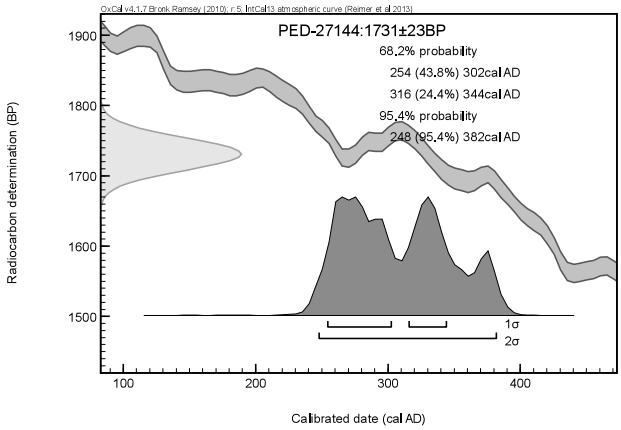
^{14}C 年代の暦年較正には OxCal3.10（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、

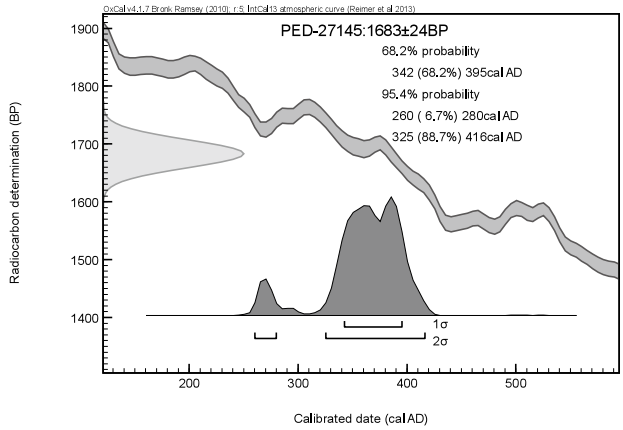


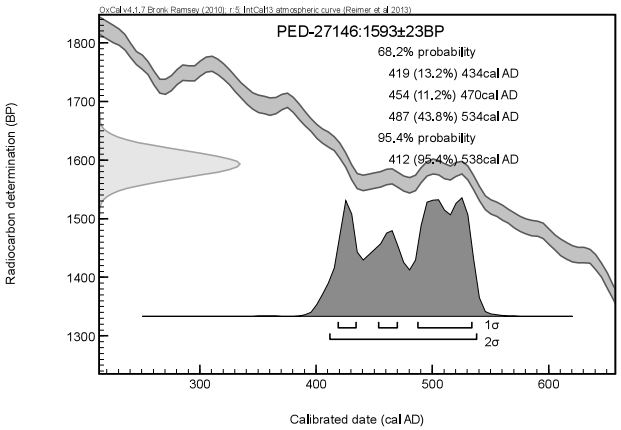


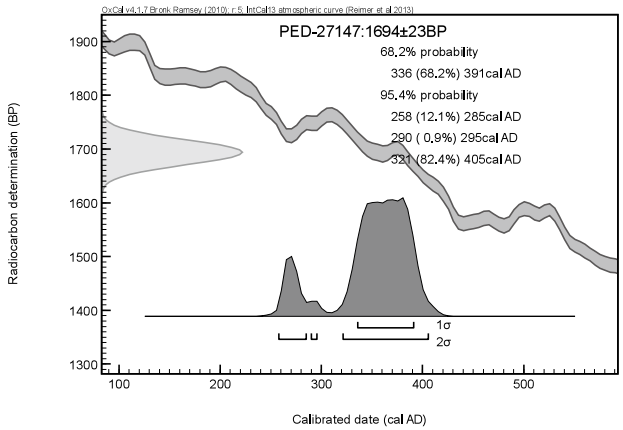






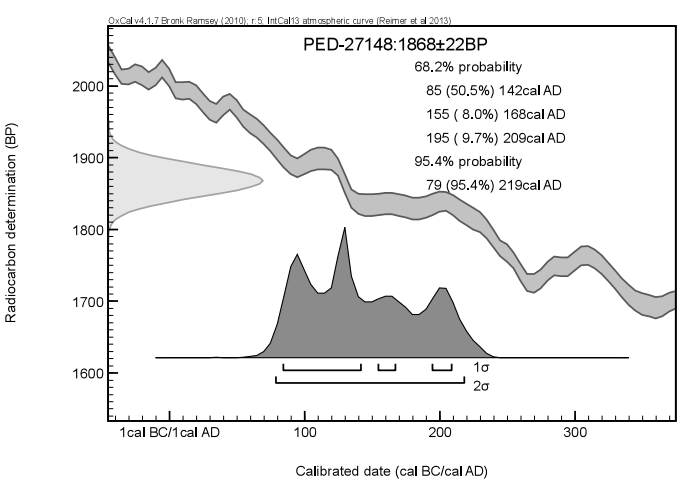






第 121 図　暦年較正結果その①

その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。



第 122 図　暦年較正結果その②

④所見

塔田琵琶田遺跡で検出された住居跡の埋没年代について、住居跡より出土した炭化材を対象に加速器質量分析法（AMS 法）により放射性炭素年代測定を行った。その結果、Ⅰ区２号住居跡出土の炭化材は、1655 ± 25 年 BP（２σの暦年代で AD336 ～ 426 年）、Ⅰ区 10 号住居跡出土の炭化材のうちサンプル№１は、1565 ± 25 年 BP（２σの暦年代で AD423 ～ 547 年）、サンプル№２は、1625 ± 25 年 BP（２σの暦年代で AD383 ～ 475 年、AD485 ～ 535 年）、サンプル№３は、1625 ± 20 年 BP（２σの暦年代で AD384 ～ 474 年、AD485 ～ 535 年）、Ⅰ区 12 号住居跡出土の炭化材のうちサンプル№１は、1730 ± 25 年 BP（２σの暦年代で AD248 ～ 382 年）、サンプル№２は、1685 ± 25 年 BP（２σの暦年代で AD260 ～ 280 年、AD325 ～ 416 年）、Ⅰ区 19 号住居跡出土の炭化材は、1595 ± 25 年 BP（２σの暦年代で AD412 ～ 538 年）、Ⅰ区 34 号住居跡出土の炭化材は、1695 ± 25 年 BP（２σの暦年代で AD258 ～ 285 年、AD290 ～ 295 年、AD321 ～ 405 年）、Ⅲ区 47 号住居跡出土の炭化材は、1870 ± 20 年 BP（２σの暦年代で AD79 ～ 219 年）、Ⅲ区 51 号住居跡出土の炭化材は、1810 ± 20 年 BP（２σの暦年代で AD131 ～ 254 年、AD302 ～ 315 年）、Ⅲ区 52 号住居跡出土の炭化材は、1860 ± 20 年 BP（２σの暦年代で AD85 ～ 224 年）の年代値が得られた。

【参考文献】

Bronk Ramsey, C.（1995）Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎 . 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会 .

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の 14C 年代 , 3-20.

尾嵜大真（2005）INTCAL98 から IntCal04 へ．学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジア№３－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－、p.14-15.

Paula J Reimer et al.,（2004）IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E.（2009）IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

（2）放射性炭素年代測定結果の評価

①はじめに

塔田琵琶田遺跡第2次調査において竪穴住居跡の埋土中から出土した炭化材について、上記の通り放射性炭素年代測定を行った。以下においては、試料の出土状況を再確認するとともに共伴した土器資料について検討し、測定結果について若干の検討と評価を行いたい。

②測定結果と出土遺物からみた年代観との比較

測定結果と各試料が出土した遺構の詳細について、第6表に示した。以下、この表に掲載した順に従いながら、各試料から得られた暦年代と共伴土器の示す年代について比較していきたい。

2号住居跡は、Ⅰ区南寄りで検出したL字状カマドを伴う竪穴住居跡である。炭化物は住居跡内の埋土中、床面よりやや浮いた状態で出土した。比較的大きな薄い板材であった。顕微鏡による組織観察では樹種同定できなかった。測定の結果、本試料は2σで4世紀前半～5世紀前半という成果が示された。較正曲線が不安定な時期に当たり、1σでは二つの山を含み込む。中でも4世紀後半～5世紀初頭の年代を持つ可能性が60%を占め、強いていえばこの時期の資料である可能性が高い。

一方、住居跡の埋土中からは、床面からやや浮いた状態で完形に比較的近い土器が多く出土した。やはり、住居の廃棄時に竪穴部の埋め戻しに伴って不要となった土器を投棄したものと考えられる。これらの土器群については、形状から6世紀前半頃のものと判断される。

本試料の場合、木片から得られた年代と共伴土器群の示す年代が約100年程度乖離するという結果となった。このことは、木片が本遺構またはそれと時期的に併存する施設に用いられたものではない可能性が高いことを示す。特に、本調査区では木片の示す古墳時代前期の集落と土器群の示す古墳時代後期の集落との間に継続性が認められず、5世紀初頭から後半までの数十年間のあいだ生活が途切れていることから、前代の集落から継続して用いられた木片ではないと推測される。おそらく、住居を埋め戻す際に用いられた土の中に、前代の遺構埋土が含まれており、木片はその中に包含されていたのであろう。ただし、木片は比較的大きな破片であり、やや気に掛かる。

10号住居跡は、Ⅰ区中央やや南側で検出した、L字状カマドを伴う住居跡である。炭化物は、住居内のやや中央寄りの各所に散乱しており、いずれも床面から浮いた状態で出土した。出土状況については第24図に示した。試料はNo.2～No.4の計3点である。いずれも板材で、No.4はやや厚く、ほかは薄板材である。顕微鏡による組織観察では、No.2が広葉樹（アカメガシワか）、No.3が同定不能、No.4がシイ属と判定された。測定の結果、No.3とNo.4がほぼ同じ年代観を示し、2σで4世紀後半～5世紀後半（70%弱）・5世紀後半～6世紀前半（30%弱）という結果となった。No.2は、2σで5世紀前半～6世紀中葉（95.4%）、1σでは5世紀前半～末が56.4%という年代を示した。

一方、住居跡の埋土中からは、炭化材と同様に床面からやや浮いた状態で完形に近く復原できる土器が多く出土した。住居跡がかなり深く、床面に近い層位からも多くの土器が出土したが、完全に復原できる資料はほとんどないことから、廃棄時にすでに一部が欠けていた可能性が高い。また、出土状況は竪穴部の中央がやや深い位置で、周辺部ではやや浅い位置から出土しており、これらより竪穴部を埋め戻す際に周辺部から土を埋め戻しつつ合わせて土器を投棄した状況がうかがえる。これらの土器群は、やや時期的な幅があるもののおおよそ5世紀後半頃の年代を持つ。

以上から、10号住居跡から出土した木片は、放射性炭素年代測定によっておおよそ共伴土器群

の示す年代と同じような時期を示すという成果が得られたといえ、10号住居あるいはこれとほぼ同時併存するほかの施設に用いられた板材を住居の廃棄時に土器とともに投棄したと理解できる。樹種が多様なこともこの見方を補強しよう。

12号住居跡は、Ⅰ区中央やや北寄りの西端で検出した方形住居跡である。カマドを持たず、壁際土坑らしき遺構を持つ、古墳時代前期の遺構である。試料No.5･6は、床面から比較的浮いた状態で出土した炭化材である。いずれも直径5～8㎝ほどの細い枝状の部材であった。顕微鏡による組織観察ではNo.5がツバキ属、No.6がアワブキ属と判断される。年代測定の結果であるが、No.5が2σで3世紀中葉～4世紀末（95.4%）、1σでは3世紀中葉～4世紀初頭（43.8%）･4世紀初頭～中葉（24.4%）となった。

本住居跡内からは、炭化材のほかにいくつかの土器が出土した。いずれも床面からわずかに浮いた状態で出土し、比較的完形に近く復元できるものが多い。出土位置に特定の傾向を読み取ることはできず、床面から浮くことから、住居の廃棄時に埋め戻しの初期段階で投棄されたものと考えられる。土器群は布留式の古段階に属するものが大半を占め、古墳時代前期前半に位置づけられる。

以上、12号住居跡から出土した炭化物は、共伴土器群とおおよそ同じ年代を示す成果が得られた。

19号住居跡は、Ⅰ区中央北西寄りで検出したカマドを持つ方形住居跡である。炭化材の出土状況は記録しておらず不明である。分析試料はNo.7の丸材で、顕微鏡による樹種同定はできなかった。年代測定の結果であるが、2σでは95.4%の確率で5世紀初頭～6世紀前半、1σでは3つの山に

試料名	出土遺構	種類	材質	暦年代		出土土器の年代観
				1σ（68.2%確率）	2σ（95.4%確率）	
No.1	Ⅰ区2号住居跡	炭化材（薄板材）		AD356-366（8.7%） AD381-418（59.5%）	AD336-426（95.4%）	6世紀前半
No.2	Ⅰ区10号住居跡	炭化材（薄板材）		AD430-493（56.4%） AD512-517（4.4%） AD529-538（7.4%）	AD423-547（95.4%）	5世紀後半
No.3	Ⅰ区10号住居跡	炭化材（薄板材）		AD395-429（53.8%） AD495-508（10.4%） AD521-527（4.0%）	AD383-475（66.8%） AD485-535（28.6%）	
No.4	Ⅰ区10号住居跡	炭化材（板材）		AD395-429（55.7%） AD495-507（9.6%） AD522-526（2.9%）	AD384-474（67.6%） AD485-535（27.8%）	
No.5	Ⅰ区12号住居跡	炭化材（角または丸材）		AD254-302（43.8%） AD316-344（24.4%）	AD248-382（95.4%）	3世紀後半
No.6	Ⅰ区12号住居跡	炭化材（角または丸材）		AD342-395（68.2%）	AD260-280（6.7%） AD325-416（88.7%）	
No.7	Ⅰ区19号住居跡	炭化材（丸材か）		AD419-434（13.2%） AD454-470（11.2%） AD487-534（43.8%）	AD412-538（95.4%）	6世紀後半～末
No.8	Ⅰ区34号住居跡	炭化材（薄板材）		AD336-391（68.2%）	AD258-285（12.1%） AD290-295（0.9%） AD321-405（82.4%）	5世紀後半
No.9	Ⅲ区47号住居跡	炭化材（角または丸材）		AD85-142（50.5%） AD155-168（8.0%） AD195-209（9.7%）	AD79-219（95.4%）	4世紀代
No.10	Ⅲ区51号住居跡	炭化材（角または丸材）		AD142-156（10.9%） AD167-195（23.9%） AD209-241（33.4%）	AD131-254（92.7%） AD302-315（2.7%）	4世紀後半
No.11	Ⅲ区52号住居跡	炭化材（板材）		AD93-97（3.0%） AD125-179（44.7%） AD187-213（20.5%）	AD85-224（95.4%）	6世紀代か

第6表　放射性炭素年代測定結果と共伴遺物の年代観

分かれるが最も確率の高いところが43.8％の確率で5世紀末～6世紀前半である。

本遺構から出土した土器資料であるが、出土状況の記録がなく不明な部分が多いが、記憶によれば床面直上から出土した資料はなくいずれも埋土中からの出土であった。土器群は比較的時期的なまとまりを持ち、おおよそ6世紀後半～末に比定できる。

従って、19号住居跡から出土した炭化材と土器群の示す時期にはやや齟齬があり、この炭化材は竪穴部の埋没時に周辺から古いものが混入した可能性が高いと判断される。19号住居跡の周囲には多くの竪穴住居跡が切り合っており、その多くは5世紀後半～6世紀前半に比定される。これらの遺構の埋土中に含まれていた炭化材が埋め戻し時に混入したものであろう。

34号住居跡は、Ⅰ区北西寄りで検出したカマドを持つ方形竪穴住居跡である。本遺構からはNo.8の試料を年代測定に供した。出土位置や層位の記録はないが、記憶によれば床面からやや浮いた状態で出土しており、部材の形状は薄板材で、顕微鏡による組織観察では広葉樹類と判定された。年代測定結果であるが、2σでは3つの山に分かれるが最も確率が高いのが4世紀初頭～5世紀初頭の82.4％、1σで絞り込むと68.2％の確率で4世紀前葉～末という結果となった。

一方共伴する土器資料であるが、小片が多く完形に復原できるものはほとんどないが、多くがカマド付近の床面やや上より出土しており、住居跡の埋め戻し初期に投棄された土器群が大半を占める。中でも第53図17の高坏はカマドの支脚として用いられていたもので、本住居の機能時の一部を知ることができる好資料である。これらの土器群はおおよそ5世紀後半代に比定できる。

以上より、試料No.8より得られた年代は共伴土器より100年前後古いものであることが分かる。本試料のもととなった炭化物は、付近の（たとえば36･41号といった）古い時代の竪穴住居跡の埋土中より、本住居の埋め戻し時に混入した可能性が高いと判断される。

試料No.9は、47号竪穴住居跡から採取された。47号住居跡はⅢ区中央北端で検出された方形住居跡である。炭化材は太さのある枝材で、住居竪穴部埋土中からの採取である。顕微鏡による組織観察ではウツギ属と判断された。年代測定の結果は、2σで1世紀後葉～3世紀初頭、1σでは3つの山に分かれるが最も確率が高いのが1世紀後葉～2世紀中葉で50.5％を占める。

一方住居跡内から出土した土器は、いずれも床面から浮いた状態ではあるが比較的完形に近い大型土器が出土しており、竪穴部埋没時に投棄されたものとみられる。いずれも古墳時代前期の資料である。従って、炭化物と共伴土器の示す年代が大きく食い違う結果となった。調査区内には炭化物が示す年代である弥生時代後期前～中葉の遺構はなく、この炭化物が何に由来するのか疑問も残るが、本調査区の100mほど西側の丘陵上にある西ノ原・大西遺跡群では弥生時代後期中葉～末の集落が調査されており、付近から混入したものであろうか。

試料No.10は、Ⅲ区北西端部の51号住居跡内から出土した炭化材である。厚みのある材で、顕微鏡による組織観察ではシイ属と判定された。本住居跡は一部を段落ちにより破壊されるほかは比較的残りのよい住居跡で､内部からは多量の炭化材と土器が出土した｡炭化材の出土状況は南東コーナー部付近を中心にして一見垂木が位置を保ったまま崩落したかのような配列を持ち、床面にかなり近いレベルにまとまっていたため、調査時には建築部材の一部が位置を保ったまま崩壊・埋没した可能性も考えられた。ただし、主柱材たり得るものは認められなかった。

年代測定結果であるが、2σでは2つの山があるが2世紀前葉～3世紀中葉（92.7％）の確率がほとんどを占める結果となった。ところが、出土土器をみると、完形に近く復元できる大型の土器

が多く出土しており、これらは4世紀後半に比定できる資料である。住居跡の構造も、2本主柱で壁際土坑とベッド状遺構をもち方形に近いプランを持つ点から、土器の示す時期と考えて大きな齟齬がない。なにより、本調査区からは弥生時代の遺構は全く出土していない。

以上の結果から、二つの可能性が考えられよう。一つは、炭化材が本住居跡の建築に用いられた構造材だと考え、これを別の集落から搬入して、伐採より100年以上使い回したとみるもの、もう一つは古い時期の木材の混入とみるものである。今回年代測定にかけた資料はたくさんある中の1点のみであり、もちろんこれだけがたまたま古い資料であった可能性もあろう。機会があればほかの採取試料も年代測定に供して、再検討を行いたい。

52号住居跡からは試料No.11を分析に供した。52号住居跡は、Ⅲ区北西寄りで段落ち付近に位置する方形住居跡である。残存状況は悪く、深さ10㎝程度しか残されていなかった。炭化物の出土状況の記録は不十分であるが､住居跡中央部の埋土中から出土しており､床面に近いレベルであったとみられる。年代測定結果であるが、2σの確率で1世紀後葉～3世紀前葉となった。一方出土土器にはやや時期差がみられ、古墳時代前期と後期の2時期に属する遺物が少量出土している。本住居跡の下層には古墳時代前期の住居跡が存在することから、報告では古い時期の遺物を下層遺構に由来するものと考えた。しかし、この結果から見れば新しい遺物は混入であり、本遺構は主軸を同じくして下層にあると判断した44号住居跡と同一の遺構を構成する－すなわち、報告で44号住居跡としたものが実は本住居跡のベッド状遺構を形成する一体の遺構であった可能性も捨てきれない。なお、その場合66号住居跡との切り合い関係は報告の中で示したものとは逆となろうが、今となっては確かめるすべはない。本書では一応、竪穴住居跡の報告の中で述べた理解が正しいとする立場をとるが、遺憾ながら、ここで述べたような可能性も存在するということである(1)。

③小結

以上、竪穴住居跡から出土した炭化物の年代測定結果について、出土遺物・遺構の時期比定との関係を整理しつつその評価を試みた。その結果、明らかに時期が異なり炭化物が混入した可能性があるものもあれば、ある程度同じ時期幅の中で理解できるものもあるという結果となった。前者については、放射性炭素年代測定を行う意義について再度考慮しなければならないだろう。炭化物や共伴遺物の出土状況については今後ますます注意を払い、意味のある分析となるよう努力していく必要があろう。

一方、51号住居跡出土炭化物の測定年代と出土遺物の時間差についてはやや問題を残す結果となった。炭化物の出土状況が良好であることから、機会を得て再度分析を行い、再検討したい。また、52号住居跡出土炭化物の測定年代からは、調査結果とはやや異なる可能性を示唆するに至った｡調査時の理解を覆すには不十分ではあるとはいえ､分析からこのような可能性を考慮するに至ったことについてはそれなりの意義があろう。ただし、遺構の残存状況が不良だったとはいえ調査時点において自信を持った解釈を得るに至らなかった不備についてはひとえに報告者に責があるもので、大変遺憾であった。今後は調査精度を高めて十分に責を果たしたい。

【註】

(1) すなわち、44号住居跡は欠番、52号住居跡が古墳時代前期で先行し、66号住居跡が古墳時代前期後半～末で後出する可能性である。調査担当者2名の中で見解が分かれ、最終的には小澤が本文中で報告したような切り合い関係と判断したもので、判断についての責任は小澤にある。

2　検出遺構の検討

（1）集落動態の概要

今次調査では主に古墳時代前期（3 世紀中葉～ 4 世紀末）と中期後半～後期（5 世紀後半～ 7 世紀初頭）の 2 時期の竪穴住居跡から構成される集落を検出した。両期の間にあたる古墳時代中期前半～後半（5 世紀初頭～後半）については遺構・遺物ともに出土しておらず、集落はこの時期一度断絶しているものとみられる。

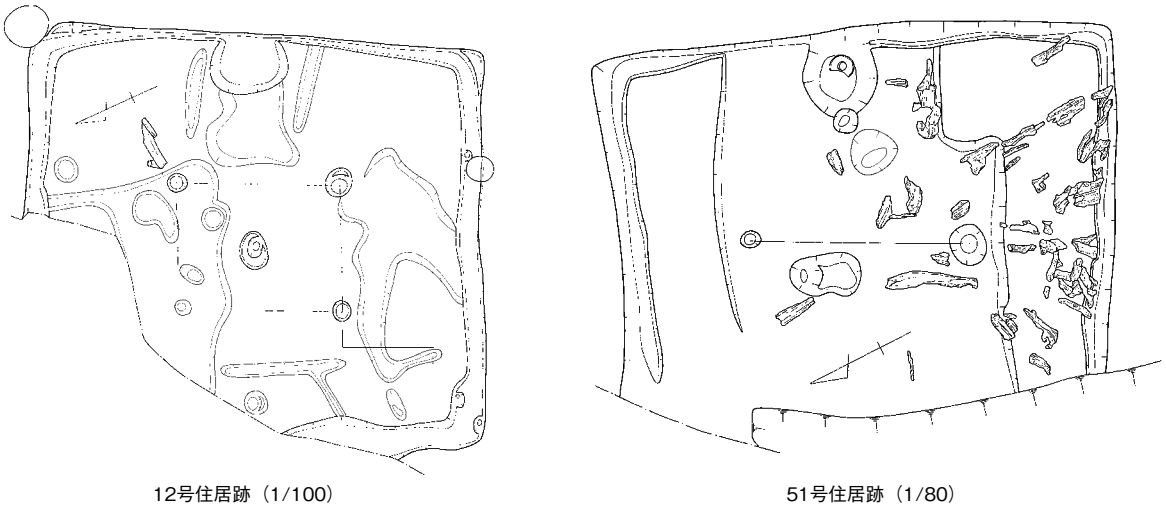
塔田琵琶田遺跡の発掘調査は現在第 6 次まで行われているほか、同一の埋没低台地上において西ノ原遺跡第 5 次、時末遺跡第 1･2 次調査がそれぞれ行われており、これらの範囲にも塔田琵琶田遺跡の古墳時代集落が広がっている。本書では塔田琵琶田遺跡第 2 次調査の成果について述べてきたが、それは塔田琵琶田遺跡の古墳時代集落のごく一部を構成するに過ぎない。未報告の調査成果については平成 27 年度末におおよそが報告される予定であることから、遺跡の全体的な様相についてはその時点で改めて報告することとしたい。以下、本書で報告した内容をもとに、簡単にまとめを行っておく。

（2）古墳時代前期の竪穴住居跡と集落

今次調査で調査した竪穴住居跡について、一覧表を作成した（第 6 表）。まず、前期の竪穴住居跡について概観したい。

古墳時代前期の住居構造　古墳時代前期の竪穴住居跡は、Ⅰ区で 13 棟、Ⅲ区で 17 棟の計 30 棟が出土した。しかし、大半が上層から切り込んだ古墳時代中～後期の遺構群に破壊されていて残りは悪く、その構造が明らかな資料は少ない。そのような中で典型的な形状を示すものの一つとしてⅠ区 12 号住居跡・Ⅲ区 51 号住居跡が挙げられよう（第 123 図）。両者はともに方形に近い長方形の全体形状をしており、西壁に壁際土坑をもうける。51 号住居跡は 2 本主柱で両短辺に沿ってベッド状遺構を作り付け、12 号住居跡は 4 本主柱でベッド状遺構を持たない。床面の中央には素掘りの炉を備えつける。

ほかの住居跡について構造をみると、主柱穴が検出できたものは少ないが 2 本主柱と 4 本主柱のものがあり、ベッド状遺構や壁際土坑、周壁溝なども持つものと持たないものがあるようである。



12号住居跡（1/100）　　51号住居跡（1/80）

第 123 図　古墳時代前期の竪穴住居跡

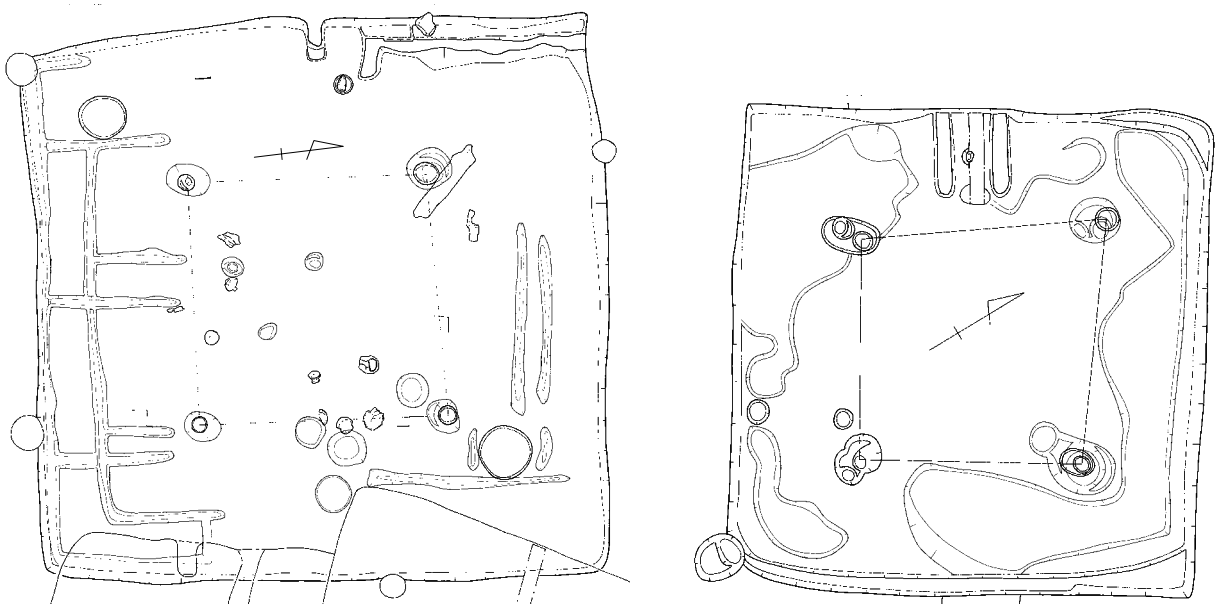
ただ、後代の遺構に破壊されたものが多く、構造については検討に十分な資料を得られたとは言いがたい。なお、平面形状についてははっきりとした傾向があり、基本的に方形に近い長方形状を呈し、短辺は長辺の90%ほどの長さとなるようである（第125図左）。竪穴部の規模は、一辺3m未満のものから6mを越えるものまであり、一辺5mを境に大きく2群に分けられるようにも見えるが、資料がやや不足している感は否めない。

古墳時代前期の遺構分布　第126図に各期の主要遺構分布を示した。古墳時代前期の竪穴住居跡をみると、主軸方位は北北東－南南西～北東－南西をとるものがほとんどを占め、Ⅰ区北側とⅢ区に大きく分かれて分布しているように見える。Ⅰ区北側は強い削平を受けており、本来存在した遺構が失われている可能性は否定できないが、前期の遺構よりも概して浅い傾向にある中～後期の遺構がいくつか残っていることから、もとより前期の住居跡が作られていなかった可能性は指摘できる。この場合、少なくとも2群の住居跡の集合が存在することになるが、Ⅰ区の東、Ⅱ区の北側にあたる4～6次調査成果を合わせて考えなければ本来の傾向を指摘することは難しいだろう。従ってここではこれ以上の検討はしない。

（3）古墳時代中～後期の竪穴住居跡と集落

古墳時代中～後期の住居構造　古墳時代中～後期の竪穴住居跡は、Ⅰ区で28棟、Ⅱ区で18棟の計46棟が出土した。前代の住居跡より浅いものが多く、削平により部分的に損なわれている場合が多かったが、基本的な構造についてはおおよそ把握できる。残存状況のいい遺構を例に挙げてみてみよう。（第124図）

Ⅰ区10号住居跡は「L字状カマド」を、またⅠ区19号住居跡は通常の内接型カマドを持つ竪穴住居跡である。ともに平面形状は略方形状を呈し、カマドを西辺に付設する。床面には4本の主柱穴を持ち、壁際土坑やベッド状遺構は伴わない。これが塔田琵琶田遺跡の古墳時代中～後期におけ



10号住居跡（1/100）　　19号住居跡（1/80）

第124図　古墳時代中～後期の竪穴住居跡

調査区	番号	住居内施設	主軸方位（カマドがある場合はカマドを主軸とする）	規模 長さ（長軸）	規模 幅（短軸）	時期	備考
Ⅰ区	1号住居跡	L字状カマド（北壁）	北北東－南南西	5.96m	6.00m	5世紀後半	
Ⅰ区	2号住居跡	L字状カマド（北西壁）	北西－南東	4.16m	3.66m	6世紀前半	カマド支脚に石材使用
Ⅰ区	3号住居跡	カマド（西壁）	西－東	4.24m	4.20m	6世紀前半	カマド支脚に石材使用
Ⅰ区	4号住居跡	L字状カマド（西壁）	西－東	4.98m	5.04m	6世紀前半	
Ⅰ区	5号住居跡	カマド（北壁）	北北東－南南西	3.50m	4.06m	6世紀中葉	
Ⅰ区	6号住居跡	カマド（東壁）	東－西	4.00m	4.20m	5世紀後半～末	カマド支脚穴あり
Ⅰ区	7号住居跡	L字状カマド（東壁）	東－西	3.92m	4.65m	5世紀後半	カマド支脚に石材使用
Ⅰ区	8号住居跡		北西－南東	3.50m	3.12m	古墳時代前期後半	
Ⅰ区	9号住居跡	L字状カマド（西壁）	西北西－東南東	6.14m	5.78m	5世紀末	カマド支脚穴あり、袖先端に補強石
Ⅰ区	10号住居跡	L字状カマド（西壁）	西－東	7.24m	7.34m	5世紀後半	カマド支脚に石材使用
Ⅰ区	11号住居跡	L字状カマド（北西壁）	北西－南東	6.62m	5.58m	6世紀中葉	カマド支脚に石材使用、カマド作り替え痕跡
Ⅰ区	12号住居跡	炉跡？	北北東－南南西	5.96m	5.40m	古墳時代前期前半	壁際土坑あり
Ⅰ区	13号住居跡		北東－南西	3.22m	3.00m	5世紀後半～末	
Ⅰ区	14号住居跡		北北東－南南西	3.90m	3.66m	5世紀後半	
Ⅰ区	15号住居跡		北西－南東	3.76m	3.36m	5世紀後半～末	
Ⅰ区	16号住居跡	L字状カマドか（西壁）	西－東	7.02m	(7.4m)	6世紀前半	削平により大きく損なわれる
Ⅰ区	17号住居跡		北東－南西	3.00m	3.4m+	古墳時代前期か	
Ⅰ区	18号住居跡		北西－南東	2.52m	2.50m	古墳時代前期か	
Ⅰ区	19号住居跡	カマド（西壁）	西北西－東南東	5.08m	4.82m	6世紀後半～末	カマド支脚に石材使用
Ⅰ区	20号住居跡	カマド（西壁）	西南西－東北東	4.94m	4.26m	6世紀前半	カマド支脚に石材使用
Ⅰ区	21号住居跡		北東－南西	6.42m	5.54m	古墳時代前期	
Ⅰ区	22号住居跡	カマド（西壁）	西北西－東南東	5.04m	4.81m	6世紀後半	住居床面に工具痕跡、カマド支脚に石材使用
Ⅰ区	23号住居跡		北－南	1.4m+	2.98m	古墳時代前期	
Ⅰ区	24号住居跡	L字状カマド（西壁）	西北西－東南東	3.78m	3.52m	6世紀後半	カマド支脚は土器転用
Ⅰ区	25号住居跡		東－西	1.8m+	4.08m	6世紀中～後葉か	
Ⅰ区	26号住居跡		北西－南東	4.3m+	3.6m+	6世紀末～7世紀初	
Ⅰ区	27号住居跡	L字状カマド（東壁）	東－西	5.16m	5.20m	6世紀前半	
Ⅰ区	28号住居跡			2.3m+	3.30m	5世紀後半か	
Ⅰ区	29号住居跡		北東－南西	5.2m+	4.84m	6世紀代か	
Ⅰ区	30号住居跡	カマド（東壁）	東－西	3.04m	2.62m	6世紀中葉	
Ⅰ区	31号住居跡	カマド（北壁）	西北西－東南東	2.5m+	3.0m+	6世紀前～中葉	カマド支脚穴あり
Ⅰ区	32号住居跡	L字状カマド（西壁）	西－東	5.94m	5.04m	5世紀後半～末	カマド支脚に石材使用
Ⅰ区	33号住居跡	L字状カマド（北壁）	北－南	2.2m+	3.88m	5世紀後半～末	カマド支脚穴あり
Ⅰ区	34号住居跡	L字状カマド（西壁）	西北西－東南東	3.64m	3.62m	5世紀後半	カマド支脚は土器転用、袖先端に補強石
Ⅰ区	35号住居跡		北北東－南南西	6.02m	4.34m	古墳時代前期前半	
Ⅰ区	36号住居跡		東－西	3.0m+	5.10m	古墳時代前期後半	
Ⅰ区	37号住居跡		北西－南東	4.2m+	4.32m	古墳時代前期	
Ⅰ区	38号住居跡		東－西	0.5m+	2.10m	古墳時代前期	
Ⅰ区	39号住居跡		北－南	4.38m	2.2m+	古墳時代前期	
Ⅰ区	40号住居跡		北－南	3.5m+	1.8m+	古墳時代前期	
Ⅰ区	41号住居跡		東－西	1.1m+	3.4m+	古墳時代前期	
Ⅱ区	42号住居跡		北北東－南南西	2.4m+	4.84m	古墳時代前期後半	
Ⅱ区	43号住居跡		北東－南西	2.7m+	1.9m+	古墳時代前期か	
Ⅱ区	44号住居跡		北東－南西	5.84m	4.62m	古墳時代前期前半か	
Ⅱ区	45号住居跡		北北東－南南西	3.54m	2.8m+	古墳時代前期か	
Ⅱ区	46号住居跡	カマド（西壁）	西北西－東南東	3.82m	(3.8m)	5世紀後半～6世紀代	L字状かどうか不明、カマド支脚穴あり
Ⅱ区	47号住居跡	炉跡（土器敷）	北北東－南南西	3.84m	3.54m	古墳時代前期	
Ⅱ区	48号住居跡		北西－南東	3.44m	2.80m	古墳時代前期後半～末	
Ⅱ区	49号住居跡		北北東－南南西	5.02m	(4.5m)	古墳時代中期	
Ⅱ区	50号住居跡		北東－南西	6.3m+	2.2m+	古墳時代前期	
Ⅱ区	51号住居跡		北北東－南南西	5.10m	(4.6m)	古墳時代前期後半	
Ⅱ区	52号住居跡		北西－南東	4.20m	4.14m	6世紀代か	
Ⅱ区	53号住居跡	ベッド状遺構	北北東－南南西	4.08m	3.66m	古墳時代前期後半	
Ⅱ区	54号住居跡		北西－南東	4.86m	3.9m+	古墳時代前期	
Ⅱ区	55号住居跡	L字状カマド（北西壁）	北西－南東	6.76m	6.36m	6世紀前半	カマド支脚に石材使用
Ⅱ区	56号住居跡		北北東－南南西	6.5m+	3.2m+	古墳時代前期中葉～後葉	
Ⅱ区	57号住居跡		北－南	4.20m	4.18m	6世紀前半	
Ⅱ区	58号住居跡		北北東－南南東	5.0m+	4.36m	古墳時代前期	
Ⅱ区	59号住居跡	カマド（北壁）	北－南	4.10m	4.62m	5世紀後半～6世紀前半	袖先端に補強石
Ⅱ区	60号住居跡	L字状カマド（西壁）	西－東	4.72m	4.94m	6世紀前半	カマド支脚に石材使用、袖先端に補強石
Ⅱ区	61号住居跡	L字状カマド（北壁）	北北東－南南西	4.04m	4.08m	6世紀前半	カマド支脚に石材使用
Ⅱ区	62号住居跡	カマド（北壁）	北北東－南南西	(3.0m)	3.04m	6世紀前半	カマド支脚に石材使用、袖先端に補強石
Ⅱ区	63号住居跡	L字状カマド（北壁）	北－南	4.24m	4.28m	6世紀中葉	カマド支脚に石材使用、袖中に補強石か
Ⅱ区	64号住居跡		北東－南西	4.24m	4.62m	6世紀前半	
Ⅱ区	65号住居跡	L字状カマド（北壁）	北北西－南南東	3.98m	3.44m	6世紀前半	カマド支脚に石材使用
Ⅱ区	66号住居跡		北－南	3.76m	3.1m+	古墳時代前期末	
Ⅱ区	67号住居跡	カマド（北壁）	北北東－南南西	3.50m	2.82m	5世紀後半以降	カマド支脚穴あり、袖先端に補強石
Ⅱ区	68号住居跡		北東－南西	4.72m	1.3m+	古墳時代前期	
Ⅱ区	69号住居跡		北－南	5.04m	4.70m	古墳時代前期	
Ⅱ区	70号住居跡	L字状カマド（西壁）	西南西－東北東	5.46m	6.32m	5世紀後半～6世紀前半	カマド支脚に石材使用
Ⅱ区	71号住居跡		北北西－南南東	6.70m	6.12m	古墳時代前期後半	
Ⅱ区	72号住居跡		北北東－南南西	5.02m	2.6m+	古墳時代前期後半	
Ⅰ区	73号住居跡		北－南	2.6m+	0.8m+	5世紀後半	
欠番	74号住居跡						
Ⅰ区	75号住居跡	カマド（西壁）	西－東	(6.0m)	(6.0m)	5世紀後半以降	主柱穴・カマド床面のみ、カマド支脚穴あり
Ⅱ区	76号住居跡		北北東－南南西	4.12m	3.2m+	古墳時代中期か	
Ⅱ区	77号住居跡		北－南	1.6m+	0.8m+	古墳時代中期後半か	

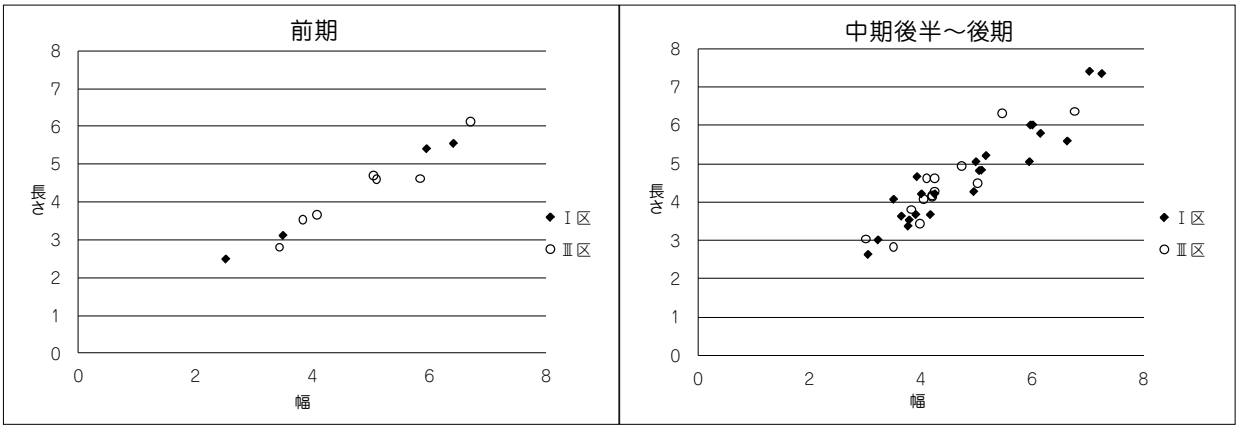
第6表　塔田琵琶田遺跡第2次調査出土竪穴住居跡一覧

る基本的な住居構造である。

竪穴部の構造についてみよう。カマドの中心線を主軸とすると、主軸が幅より長いものと短いものがみられるが、長さと幅が極端に異なるものはなく平面形状は基本的に正方形を志向していたといえる（第 125 図右）。竪穴部の大きさは、大きくみると一辺 5.5m 以上と以下で 2 群に分けられ、小形の方はさらに一辺 4.5m を境に二つに分けられるように見える。Ⅰ区とⅢ区の双方に、それぞれの大きさの住居跡がみられるが、Ⅲ区の方が小形の住居跡が多い傾向にある。

竪穴住居跡の主軸方位は、東－西～北西－南東をとるものが主体を占め、カマドは西～北辺に付設するものが大半である。ほぼすべてが辺の中央に設ける。いずれも、燃焼部が完全に竪穴部内に収まる「内接型」で、煙道が奥壁に沿ってコーナー部まで伸びるいわゆる「L 字状カマド」となるものが 19 例と、カマドを有する竪穴住居跡計 32 棟のうちの約 60％を占める。

古墳時代中～後期の遺構分布　住居跡の分布をみると（第 126 図）、おおよそ調査区全域にまんべんなく広がる傾向がうかがえる。また、大型の竪穴住居が各所に点在する様相が垣間見える。しかしこれもⅠ区の東、Ⅲ区の北に隣接する 4 ～ 6 次調査成果を合わせて考える必要があり、ここではこれ以上検討しないでおきたい。



第 125 図　竪穴住居跡の規模

（4）カマドの構造

L 字状カマドについて　古墳時代中～後期の竪穴住居跡における大きな特徴として、L 字状カマドを挙げることができる。片袖の基部を竪穴部の壁から離して空間を設け、そこを煙道の口とする。袖構築粘土を直角に曲げて、奥壁と平行に配し、奥壁との間に幅 20㎝ほどの空間を設ける。そのままコーナー部まで空間を設けて住居の側壁にぶつけ、これを煙道とする。朝鮮半島に由来を求められる特徴的なカマドの形態である。本地域では 5 世紀前半にみやこ町京ヶ辻遺跡などで出現し、7 世紀以降まで継続的に採用されるが、全国的に見ると比較的まれなタイプのカマドである。今次調査区では通常の内接型カマドを持つ住居跡と共存し、全体の 6 割ほどを占める。ただし、袖の形状や、支脚に石や転用土器（しばしば高坏）を用いたり、袖の先端部に補強石材を配するなどの特徴は、通常の内接型カマドと何ら変わるところはなく、ただ煙道の付き方だけが異なるのみであるため、L 字状カマドについて必要以上に特殊な遺構としての扱いをすることにはややためらいを覚える。来年度報告予定の第 3 ～ 6 次調査においても L 字状カマド・通常のカマドともに大量に出土している。従って、L 字状カマドに対する本格的な分析についてはこれらの報告を待って行うこととし、本書では紹介にとどめておくこととしたい。

第 126 図　時期別の竪穴住居跡分布（1/600）

3　まとめ

最後に、今次調査で得られた成果について、総花的にではあるがまとめを行っておきたい。

今回の調査で検出された遺構を調査区毎に見ておく。Ⅰ区では、竪穴住居跡計43棟を調査した。うち、古墳時代前期に属するものが13棟、古墳時代中～後期（5世紀後半～7世紀初頭）が30棟を占める。後者のうち、カマドを付設するものは22棟あり、そのうち「L字状カマド」であったものが13棟存在した。また、2×2間の総柱の掘立柱建物跡が1棟、土坑が6基、土壙墓が1基、溝が1条調査された。これらの所属時期は、土坑のうち3基と土壙墓1基、溝1条が古墳時代前期に属し、掘立柱建物跡1棟は古墳時代後期、土坑のうち3基は所属時期が不明である。また、調査区の西側を区画する自然流路（谷地形）と考えられる落ち込み（SX－02･3）を調査した。

Ⅱ区では、時期不明の掘立柱建物1棟と、調査区西側を区画する谷地形の続きと考えられるSX－04を調査した。

Ⅲ区では、竪穴住居跡33棟を調査し、うち古墳時代前期に属するものが17棟、古墳時代中～後期に属するものが16棟であった。さらに、後者のうち削平や調査区外に広がるなどでカマドの有無が判断できなかったものを除く11棟のうち、明らかに「L字状カマド」となるものが6棟、通常のカマドであるものが4棟、一部が壊されていてどちらか判断がつかなかったものが1棟存在した。住居跡のほかには、土坑4基、方形竪穴状遺構2基を調査し、このうち土坑2基が古墳時代前期、方形竪穴状遺構1基が古墳時代後期以降で、ほかは所属時期が不明である。また、Ⅱ区で検出した谷状落ち込み遺構SX－04が枝分かれして南東方向に伸びており、その続きをⅢ区でも検出している。Ⅲ区では谷状落ち込みと古墳時代後期の竪穴住居跡との切り合い関係が確認でき、古墳時代後期の竪穴住居跡が谷状落ち込みの埋土の上から切り込まれていた。

出土遺物はパンケース約250箱と多量で、その大半が土器であった。出土土器は古墳時代前期と中期後半～後期の2時期のものがほとんどを占め、縄文土器、弥生土器、古代の須恵器・土師器、中世の土師質土器・青磁・白磁、近世の陶磁器がごく少量含まれていた。これらのうち、縄文土器は本遺跡の南（上流）側に位置する永久笠田遺跡から、弥生土器は南西の西ノ原遺跡から、中～近世の土器は南の時末遺跡第2次調査Ⅱ区付近から流入したものであろう。一方古代の資料であるが、今回報告した第2次調査Ⅲ区の南において平成24年度に発掘調査を行った、塔田琵琶田遺跡第4次調査Ⅰ区において、当該期の集落を検出しており、ここから流れ込んだものと考えられる。

この他の出土遺物としては、多種多様な鉄器類が目を引く。武器類としては鉄鏃、工具類としては鉇や鉄斧などがあり、遺構に伴うものは大半が古墳時代中期後半～後期の竪穴住居跡より出土している。なお、やはり後期（6世紀前半）に属すると考えられる20号住居跡からは鉄滓も出土している。第4次調査では碗形滓も出土しており、集落内で鍛冶を行っていたのであろう。

石器としては石鏃やスクレイパーなどの打製石器が出土したが、これらは縄文土器と同様他地区からの流入であろうか。磨製石器・石製品として紡錘車のほかに滑石製臼玉や有孔円盤が出土したが、特に滑石製玉類については第4次調査で玉作り関連遺物が出土しており注目される。

繰り返しとなるが、今回は塔田琵琶田遺跡の発掘調査のごく一部の成果を報告したに過ぎない。塔田琵琶田遺跡群の調査成果については、東九州道関連の調査報告がすべて終了した時点で、あらためて総括を行い、評価することで、調査担当者の責を果たしたい。したがって本書での総括は以上のようなごく簡単なものとなることをご了承頂ければ幸いである。

図　版

1　遺跡周辺の環境
（南から）

2　遺跡周辺の土地利用
（上が北）

図版２

1　調査地上空から北をのぞむ

2　調査地上空から南をのぞむ

1　上空から千束原古墳群をのぞむ（南東から）

2　上空から求菩提山をのぞむ（北東から）

図版 4

1　Ⅰ区（合成、上が北）

１　Ⅱ区（合成、上が北）

図版６

1　Ⅲ区（上が北）

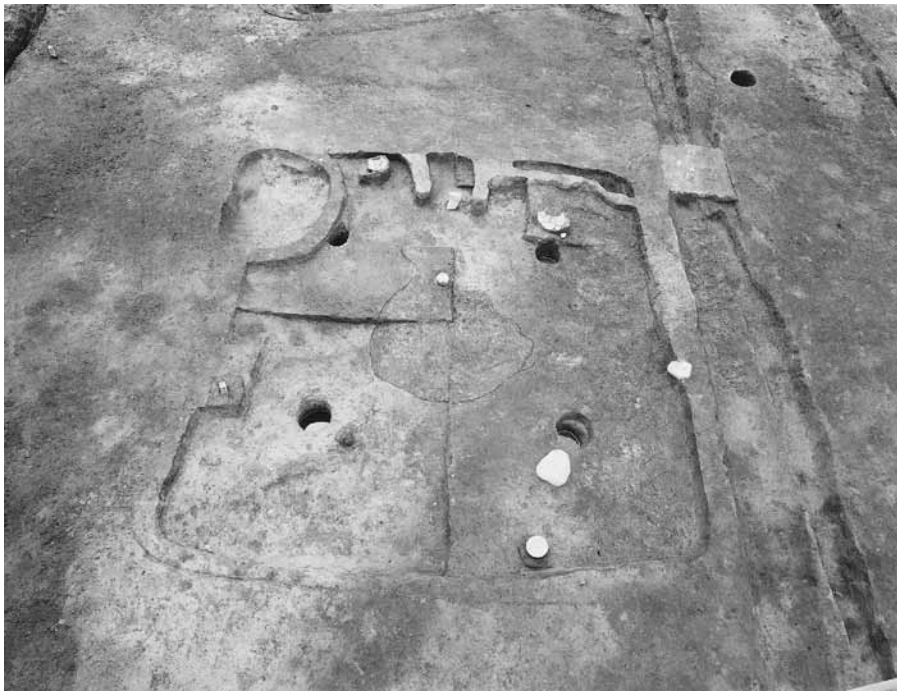
2　Ⅰ区住居集中部
（上が西）

1　1～4号竪穴住居跡（南から）

2　1号竪穴住居跡カマド（南から）

3　1号竪穴住居跡カマド・煙道（東から）

図版８

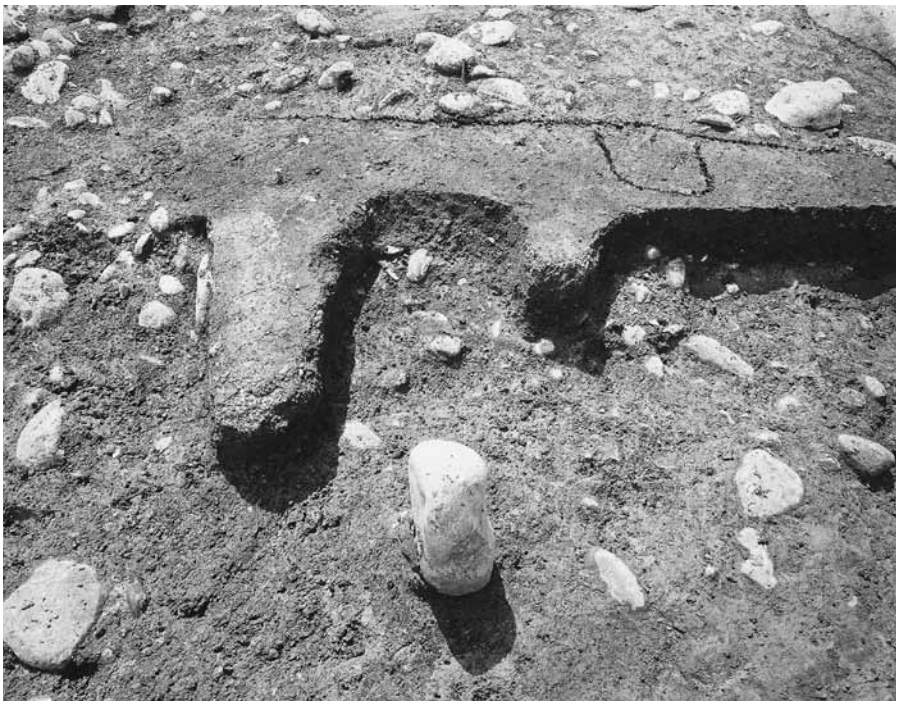


1　２号竪穴住居跡（東から）

2　２号竪穴住居跡カマド（東から）

3　２号竪穴住居跡カマド・煙道（南から）

１　３号竪穴住居跡（東から）

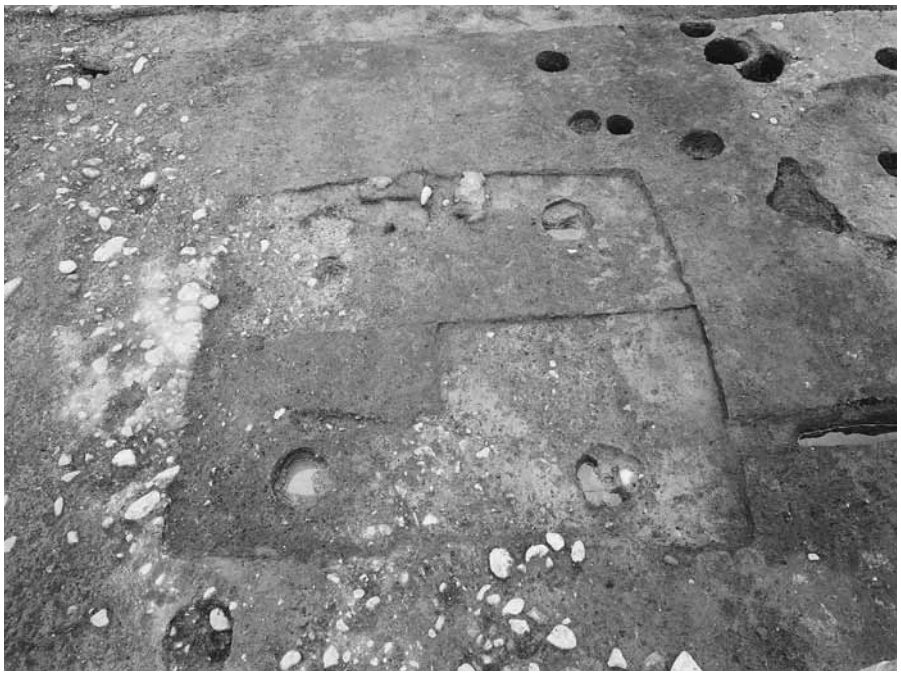


２　３号竪穴住居跡カマド（東から）

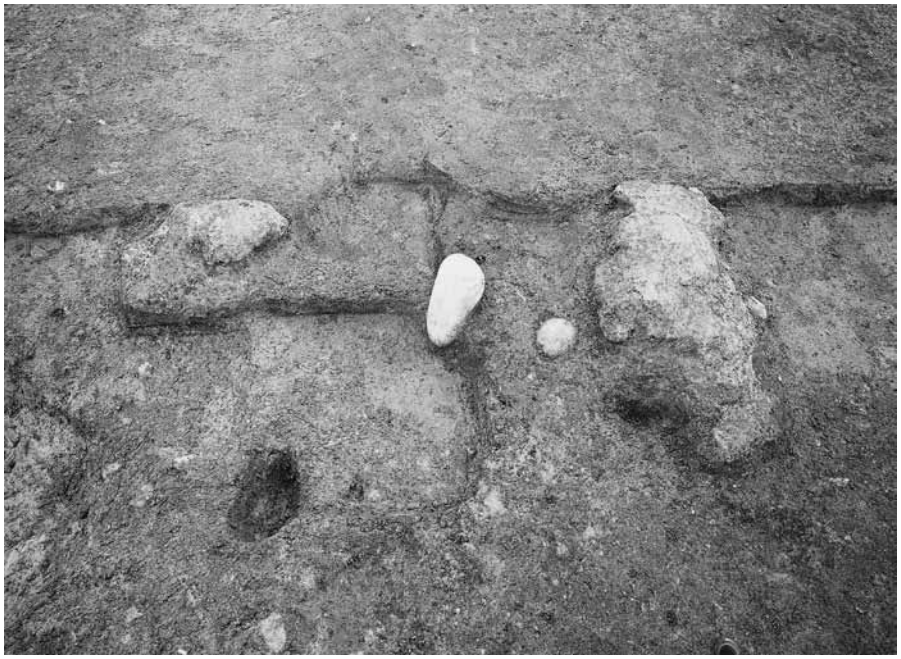
３　４号竪穴住居跡（東から）

図版 10

1　4 号竪穴住居跡カマド・煙道（南から）



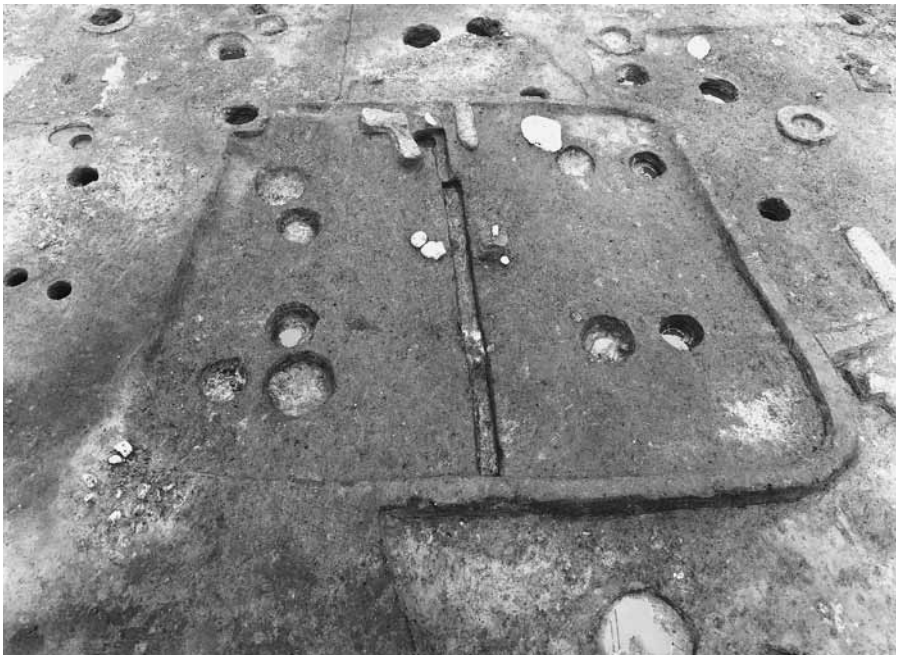
2　5 号竪穴住居跡（南から）



3　5 号竪穴住居跡カマド（南から）

1　6号竪穴住居跡（東から）

2　6号竪穴住居跡カマド（東から）



3　7号竪穴住居跡（西から）

図版 12

1　7 号竪穴住居跡カマド（南から）

2　8・17・18 号竪穴住居跡
（北西から）

3　9 号竪穴住居跡（東から）

1　9号竪穴住居跡カマド（東から）

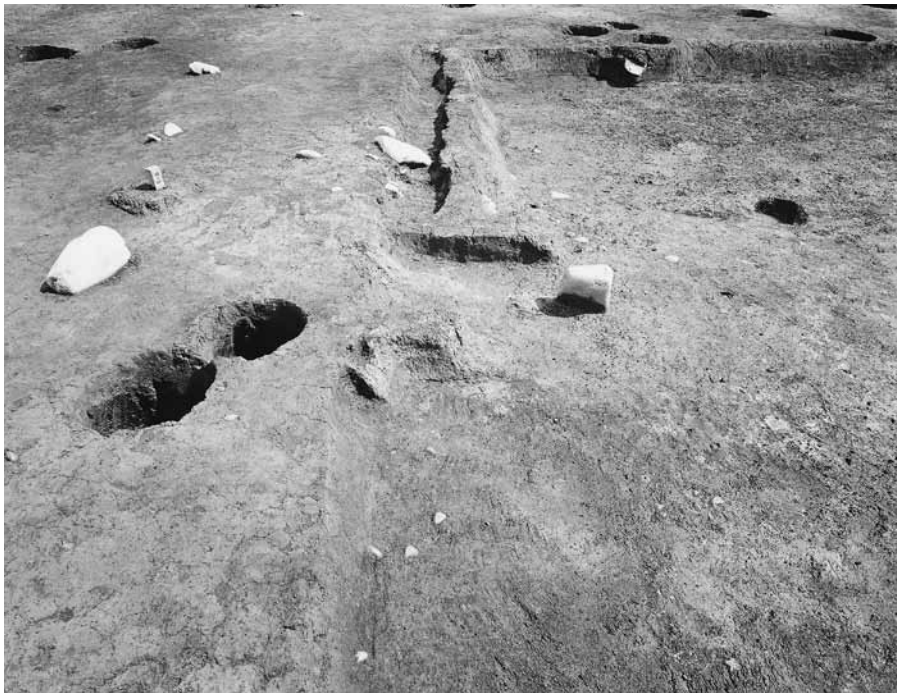
2　9号竪穴住居跡カマド・煙道
（南から）

3　9号竪穴住居跡東半
（Ⅰ区補足調査分、西から）

図版 14

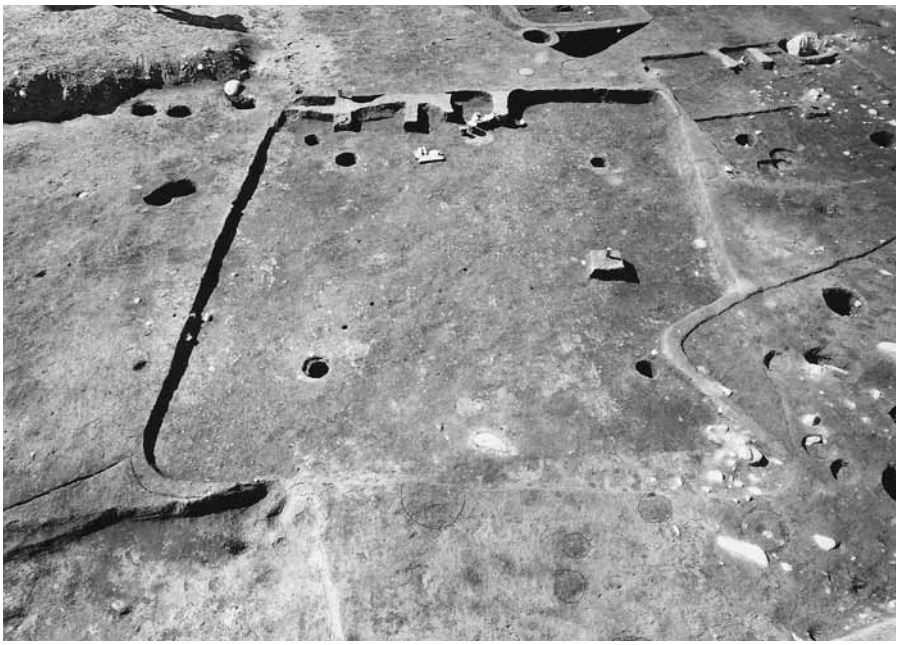
1　10 号竪穴住居跡（東から）

2　10 号竪穴住居跡カマド（東から）



3　10 号竪穴住居跡カマド煙道
（南から）

1　10 号竪穴住居跡下層掘り込み（東から）



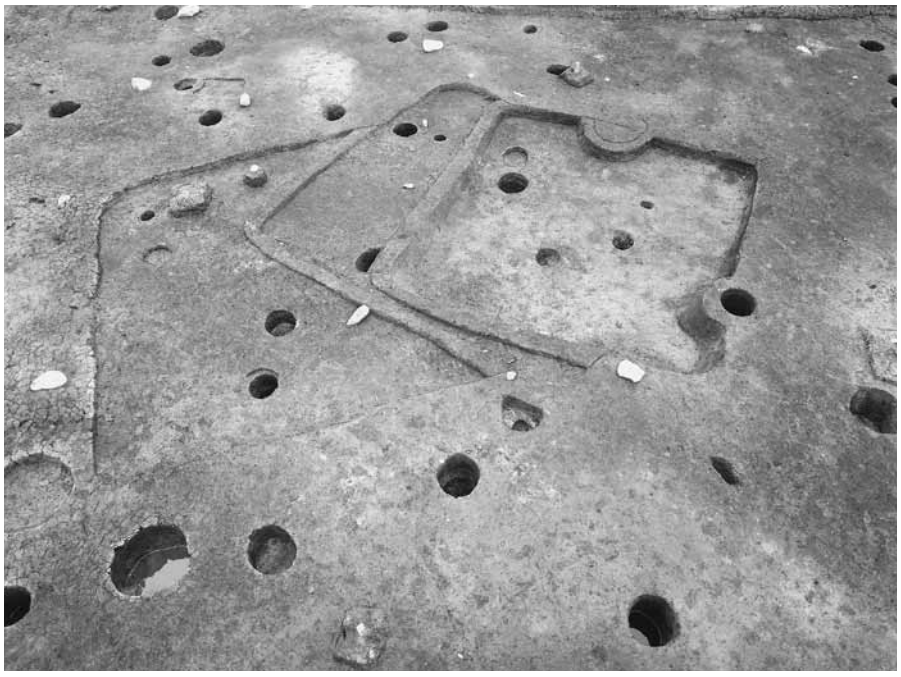
2　11 号竪穴住居跡（東から）

3　11 号竪穴住居跡カマド（東から）

図版 16

1　11 号竪穴住居跡カマド（北から）

2　12 号竪穴住居跡（北東から）



3　13 ～ 15 号竪穴住居跡（南から）

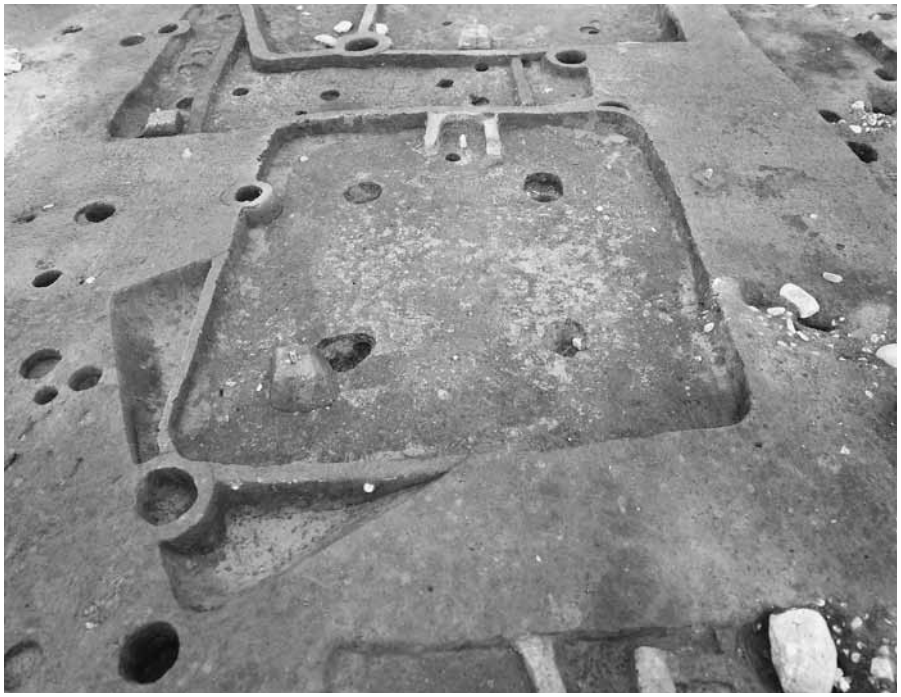
1　16 号竪穴住居跡東半
（Ⅰ区補足分、北から）

2　19 号竪穴住居跡（東から）

3　19 号竪穴住居跡カマド（東から）

図版 18

1　20 号竪穴住居跡（東から）



2　22･23 号竪穴住居跡（東から）

3　22 号竪穴住居跡カマド（東から）

1　22 号竪穴住居跡床下掘り込み
床面工具痕跡（北から）

2　24 号竪穴住居跡（東から）

3　24 号竪穴住居跡カマド（東から）

図版 20

1　25･26 号竪穴住居跡（西から）

2　27･28･40 号竪穴住居跡
（西から）

3　27 号竪穴住居跡東半
（Ⅰ区補足分、東から）

1　29 号竪穴住居跡（東から）

2　29 号竪穴住居跡
（Ⅰ区補足分、東から）

3　30 号竪穴住居跡（西から）

図版 22

1　30 号竪穴住居跡カマド
（西から）

2　31 号竪穴住居跡（東から）

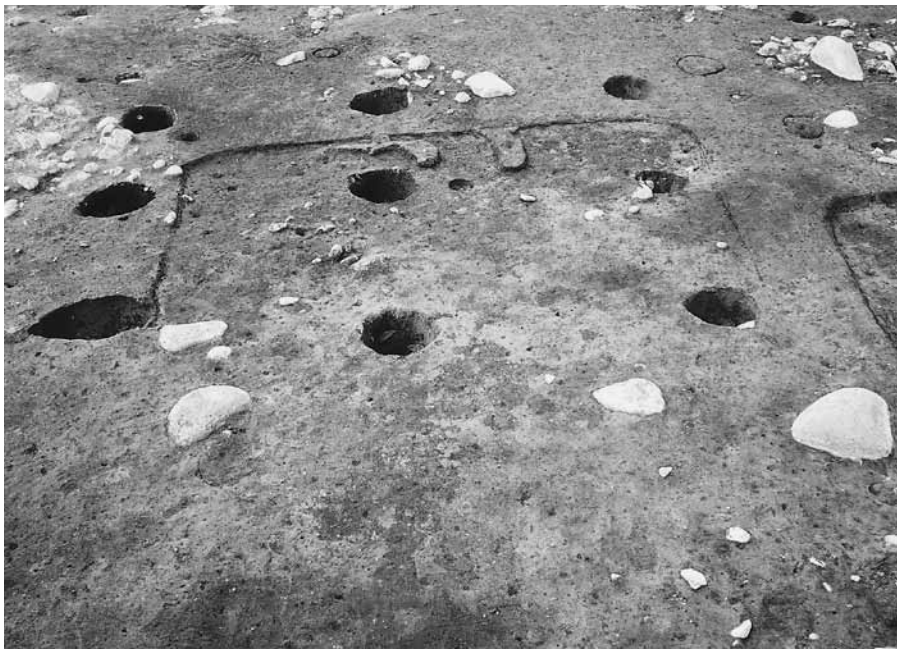
3　31 号竪穴住居跡カマド（東から）

1　32 号竪穴住居跡（東から）

2　32 号竪穴住居跡カマド（東から）

3　32 号竪穴住居跡カマド煙道
（南から）

図版 24



1　33 号竪穴住居跡（南から）

2　33 号竪穴住居跡カマド（南から）

3　34 号竪穴住居跡（東から）

1　34 号竪穴住居跡カマド（東から）

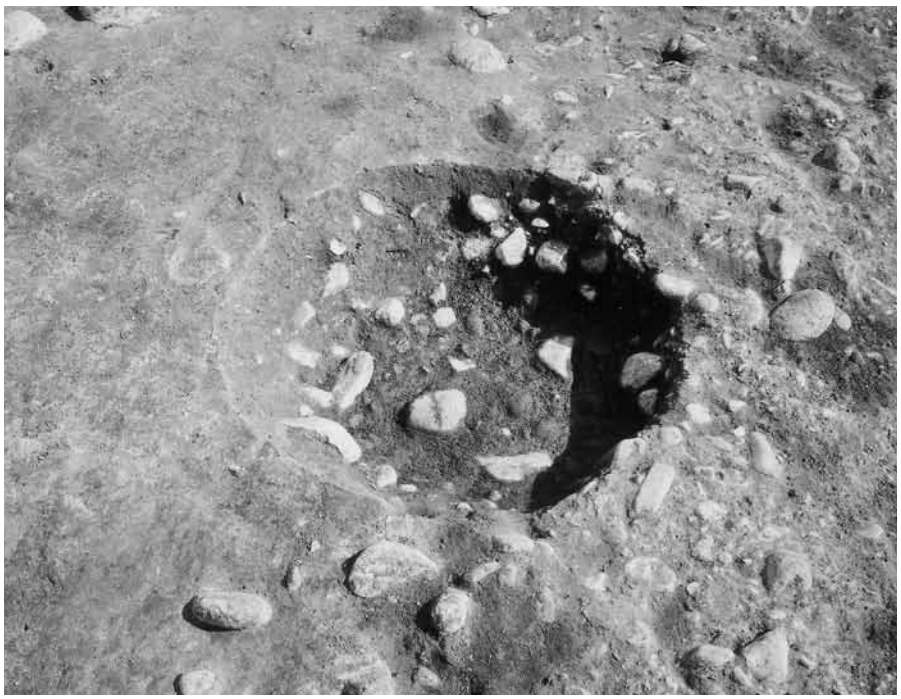
2　35 号竪穴住居跡（南から）

3　1 号掘立柱建物跡（南から）

図版 26

1　1 号土坑（北東から）

2　2 号土坑（北から）



3　3 号土坑（北から）

1　4 号土坑（東から）

2　5 号土坑（南から）

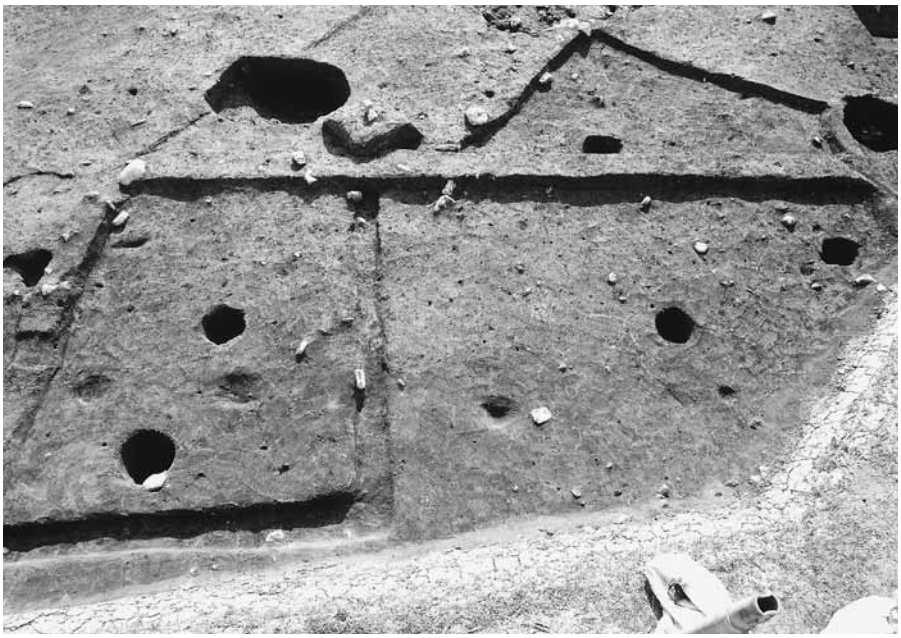
3　6 号土坑　（東から）

図版 28

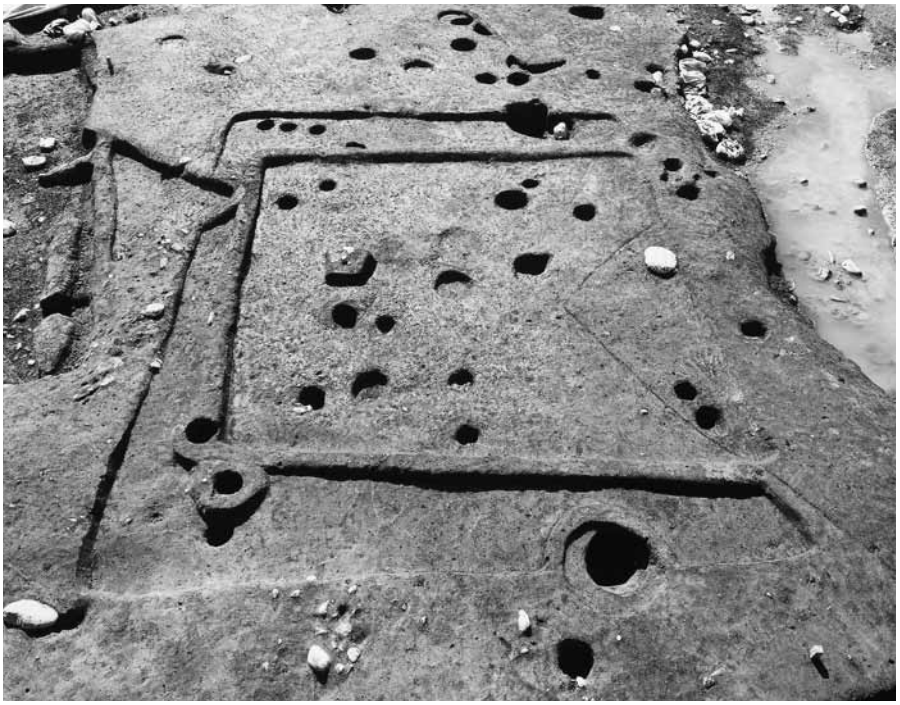
1　SX ― 01（南から）

2　SX ― 03（南東から）

3　1 号土壙墓（南から）



1　42･43 号竪穴住居跡（北から）



2　44･52 号竪穴住居跡（北から）

3　45 号竪穴住居跡（北から）

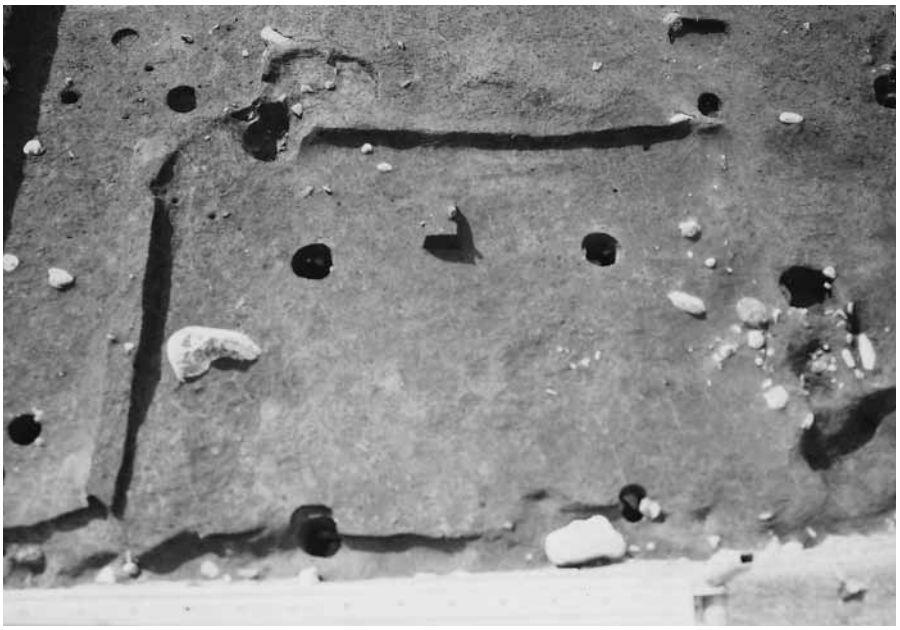
図版 30

1　46 ～ 48 号竪穴住居跡（東から）

2　46 号竪穴住居跡カマド（西から）

3　47 号竪穴住居跡炉跡（南から）

1　49 号竪穴住居跡（北から）

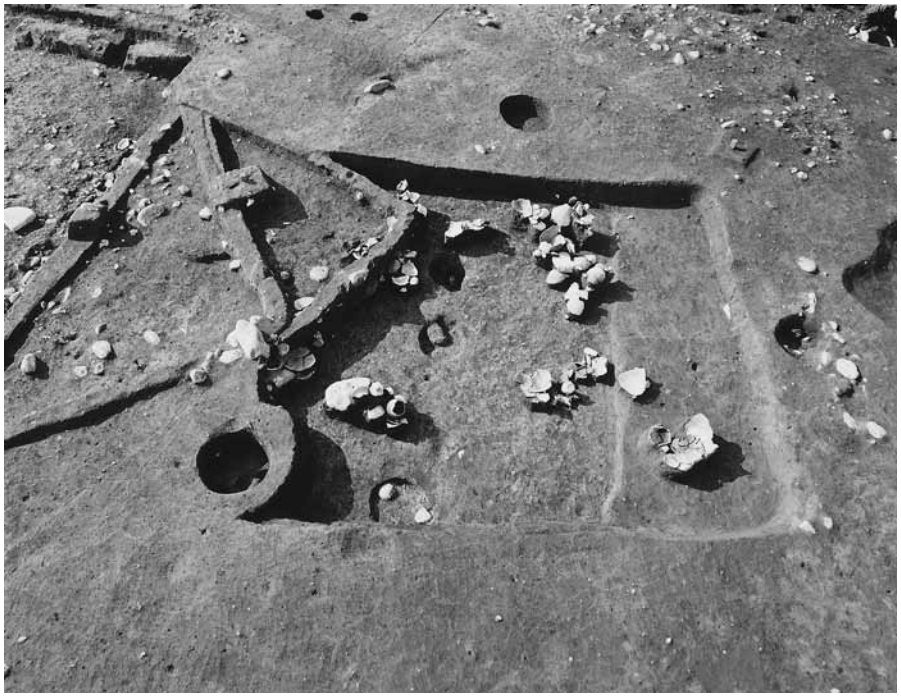


2　50 号竪穴住居跡（北から）

3　51 号竪穴住居跡（西から）

図版 32

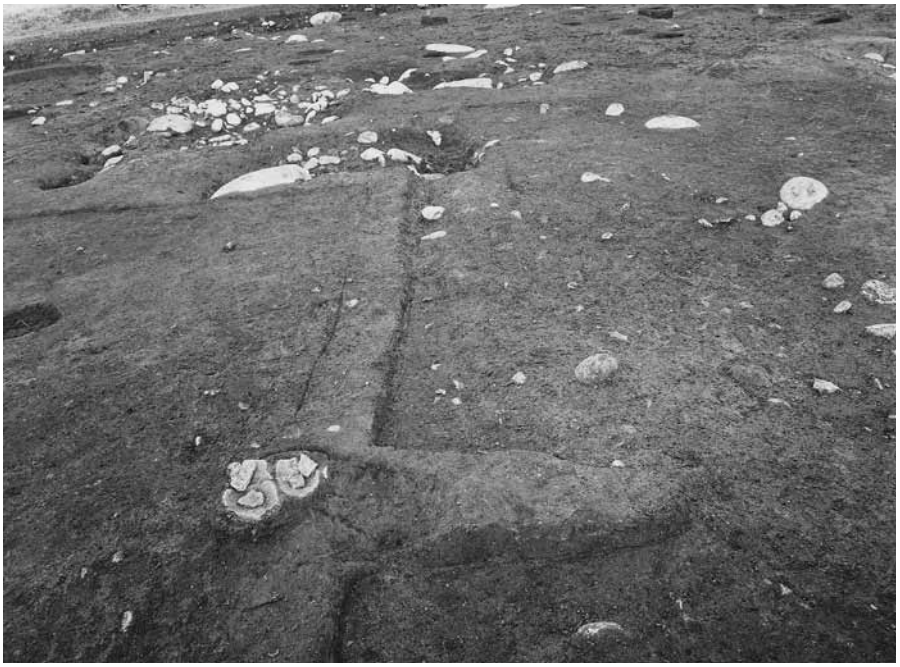
1　52 号竪穴住居跡（西から）



2　53 号竪穴住居跡（南から）

3　54 ～ 56 号竪穴住居跡（東から）

1　55 号竪穴住居跡カマド（東から）



2　55 号竪穴住居跡カマド煙道
（南から）

3　57 号竪穴住居跡（北から）

図版 34

1　59 号竪穴住居跡（南から）

2　59 号竪穴住居跡カマド（南から）

3　60 号竪穴住居跡（東から）

1　60 号竪穴住居跡カマド（東から）

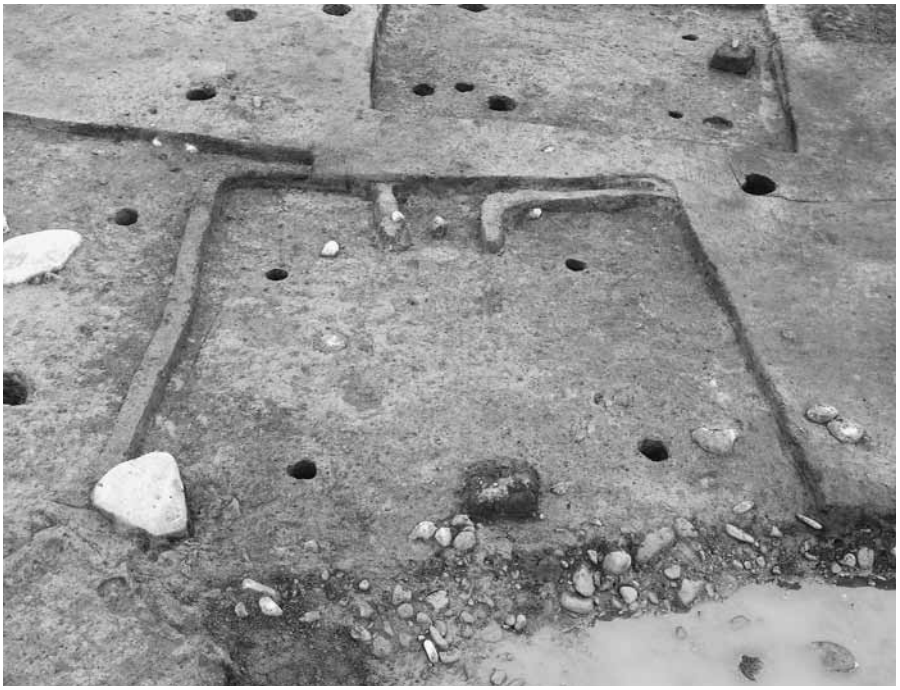
2　60 号竪穴住居跡カマド煙道（南から）

3　61･62 号竪穴住居跡（南から）

1　61 号竪穴住居跡カマド（東から）

2　61 号竪穴住居跡カマド煙道
（西から）

3　62 号竪穴住居跡カマド（南から）



1　63 号竪穴住居跡（南から）

2　63 号竪穴住居跡カマド（南から）

3　63 号竪穴住居跡カマド煙道
（西から）

1　64 号竪穴住居跡（南から）

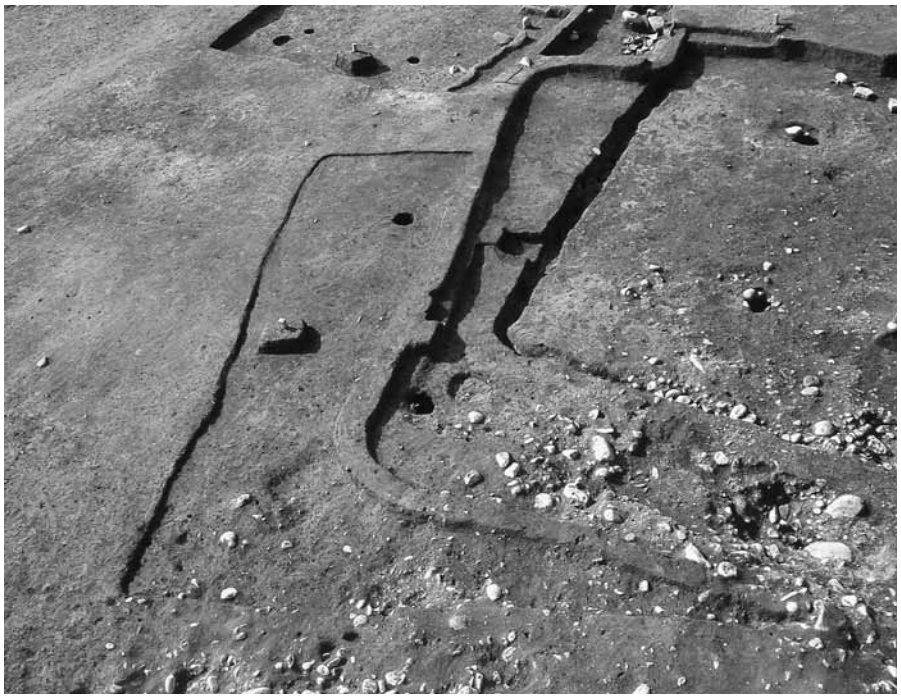
2　65 号竪穴住居跡（南東から）

3　65 号竪穴住居跡カマド（南東から）

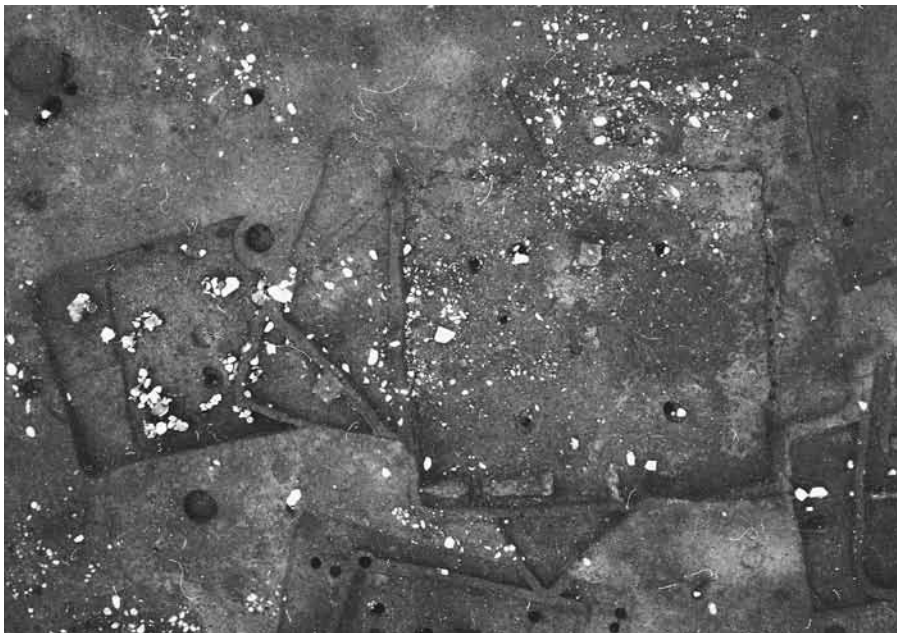
1　65 号竪穴住居跡カマド煙道
（南西から）

2　67 号竪穴住居跡（南から）

3　67 号竪穴住居跡カマド（南から）



1　69 号竪穴住居跡（東から）

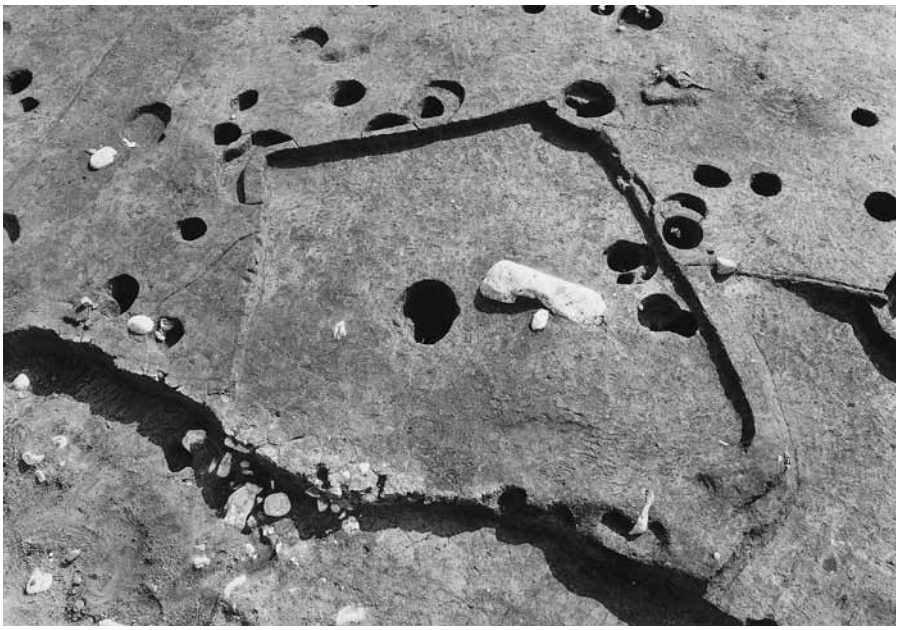


2　70･71･73･74 号竪穴住居跡（上が北）

3　70 号竪穴住居跡 ･1 号竪穴建物状遺構（東から）

1　70 号竪穴住居跡カマド（東から）

2　70 号竪穴住居跡カマド煙道
（南から）

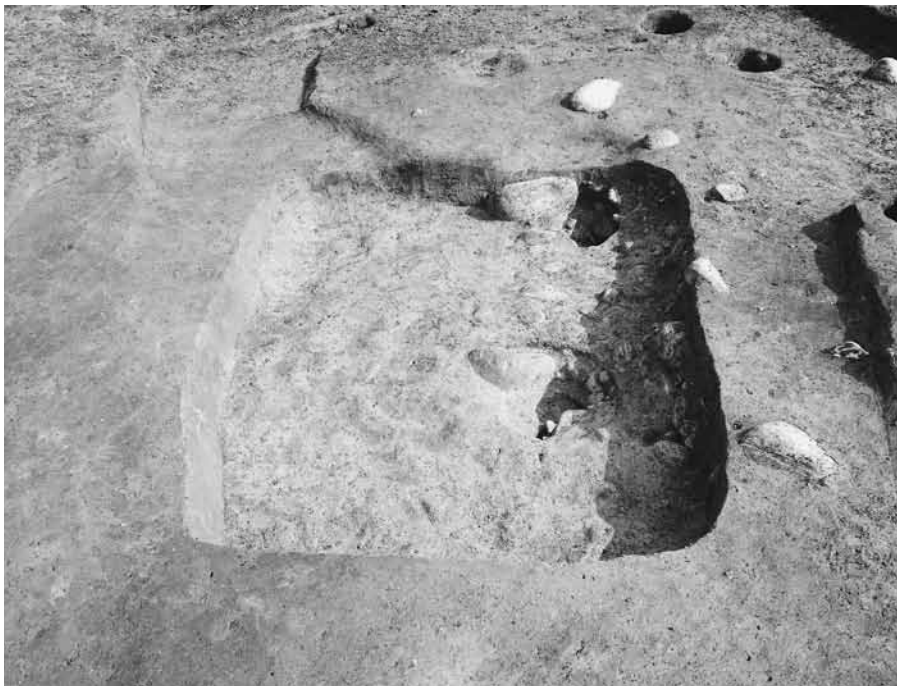


3　2 号方形竪穴状遺構（西から）

図版 42

1　7 号土坑（北から）

2　8 号土坑（北から）



3　10 号土坑（西から）

8-1

53 − 4

2

8-7

3

9-8

4

9

1 号竪穴住居跡出土土器他

9-10

16

12

10-17

13

19

18

1 号竪穴住居跡出土土器

19

13-1

11-20

2

22

3

23

4

24

5

26

7

1･2 号竪穴住居跡出土土器

15-7

11

16-16

17

19

24

26

27

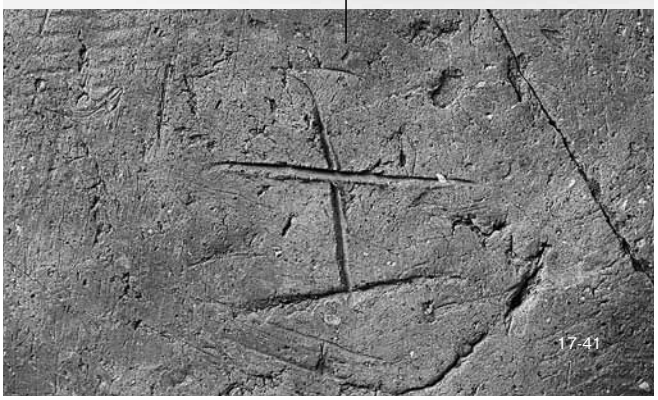
29

30

33

3 号竪穴住居跡出土土器

16-34


17-41

35

37

43

38

44

45

39

46

47

17-42

48

51

3 号竪穴住居跡出土土器

3·5 ～ 7·9 号竪穴住居跡出土土器

23-15

16

17

18

25-1

3

5

8

9

26-11

9･10 号竪穴住居跡出土土器

10･11 号竪穴住居跡出土土器

28-9

12

14

19

21

30-1

7

30-4

5

8

9

10

11･12 号竪穴住居跡出土土器

33-1

3

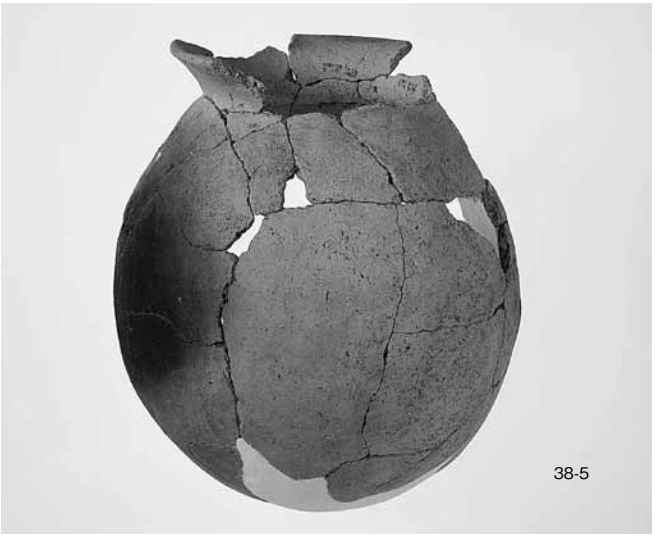
5

36-2

3

7

8


38-5

6

13·14·16·19·20 号竪穴住居跡出土土器

38-7

9

10

13

40-3

4

5

43-1

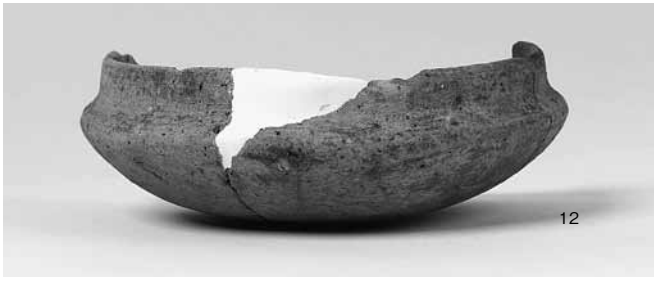
2

3

20･22 号竪穴住居跡出土土器

43-4

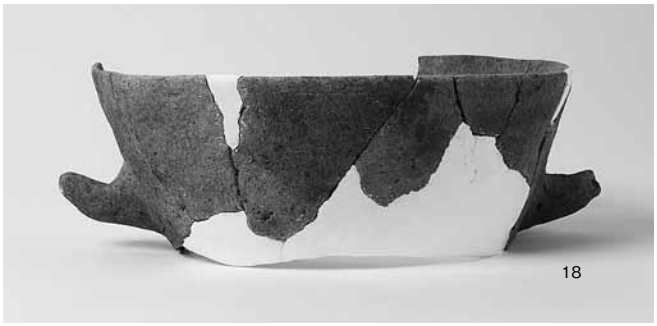
7


12

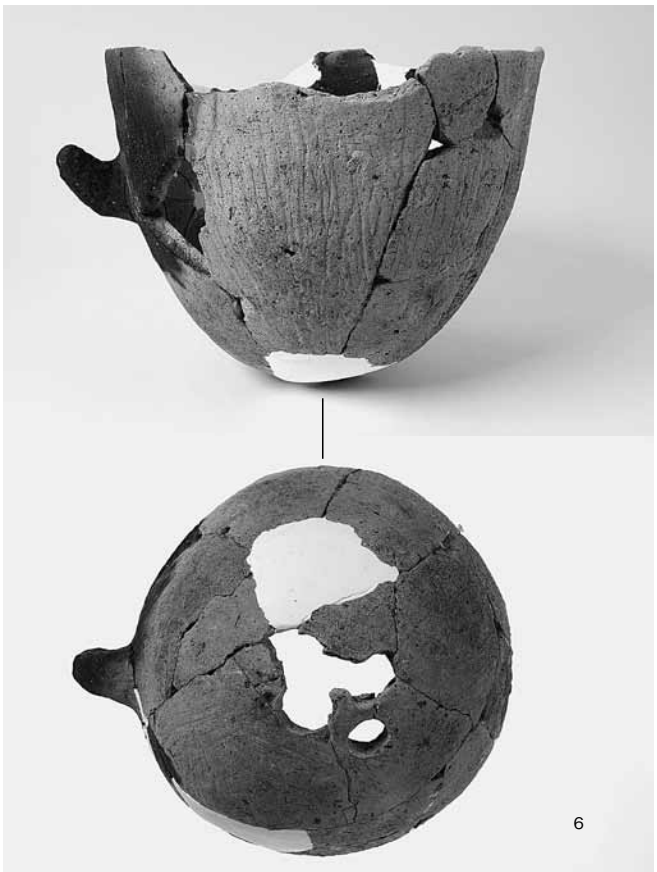
16

46-3

17


18

48-4


6

22･24･27･29 号竪穴住居跡出土土器

48-7

7

10

8

15

12

16

51-2

53-7

6

10

29 ～ 34 号竪穴住居跡出土土器

53-13

14

15

18

56-10

11

12

13

60-21

20

34·40 号竪穴住居跡 ·1 号溝出土土器

62-14

65-1

4

16

66-1

28

10

I 区 SX － 02 谷状落ち込み・ピット・検出時その他出土土器

図版 58

66-12

14

15

17

18

19

20

21

22

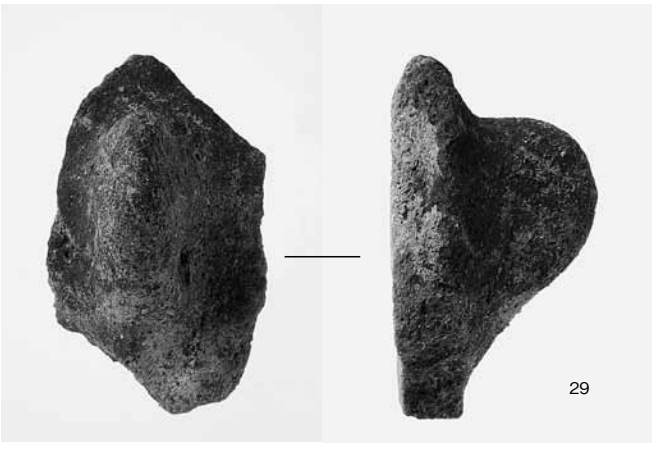
23

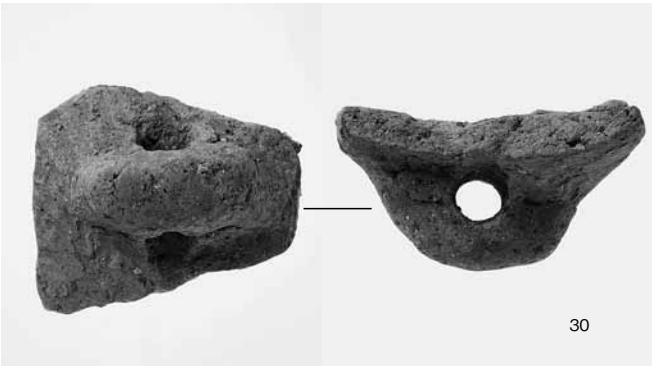
24

25

26

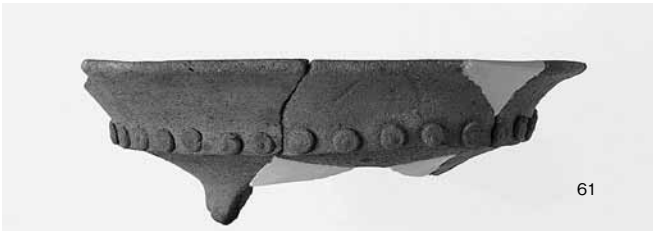
28


29


30

Ⅰ区検出時・その他出土土器

70-2


61

74-65

72-39

66

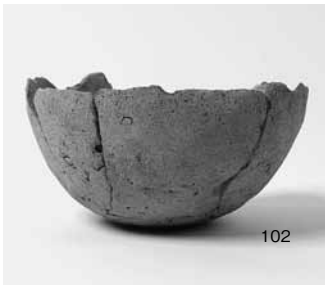
42

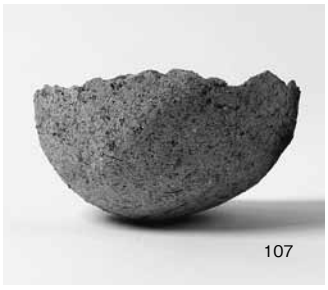
72

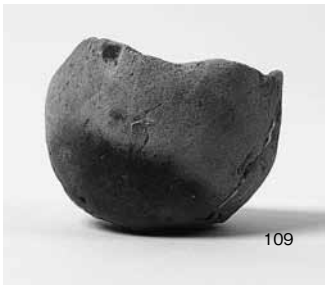
73-60

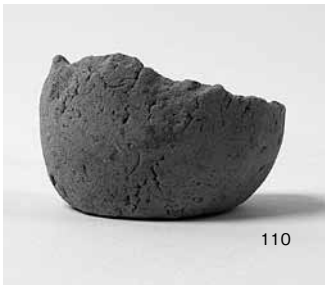
Ⅱ区 SX － 04 谷状落ち込み出土土器

図版 60









Ⅱ区 SX － 04 谷状落ち込み、42･46･47 号竪穴住居跡出土土器

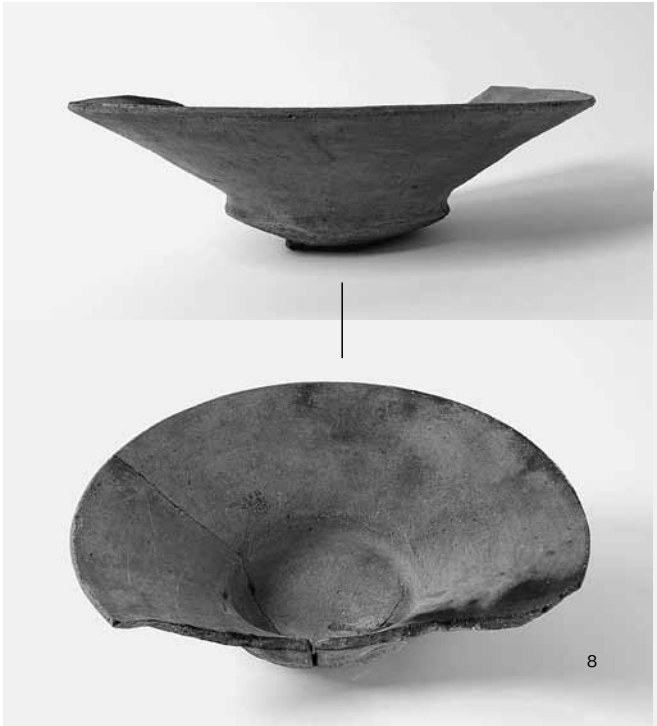
82-5

11

86-1

85-5

87-3


8

4

47·51 ～ 53 号竪穴住居跡出土土器

87-6

7

88-9

10

15

17

89-20

21

53 号竪穴住居跡出土土器

89-22

35

23

36

24

90-37

29

94-5

33

53･55 号竪穴住居跡出土土器

図版 64

94-12

14

97-15

15

8

97-2

9

21

101-1

5

3

7

5

54･57･59 ～ 63 号竪穴住居跡出土土器

101-4

7

8

10

12

14

15

17

18

19

103-6

8

62･63･66 号竪穴住居跡出土土器

106-3

9

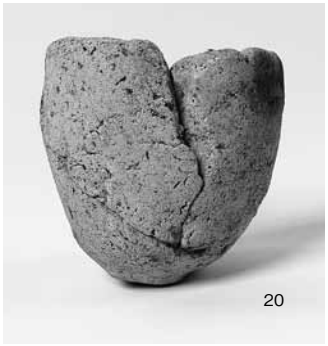
21

22

109-9

15

16


20

24

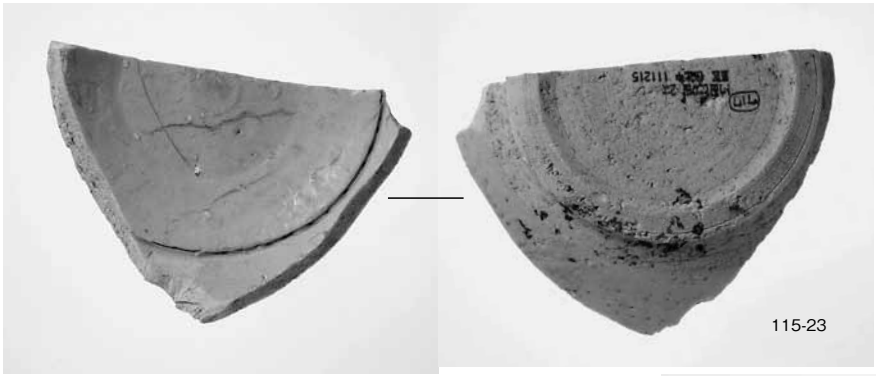
113-1

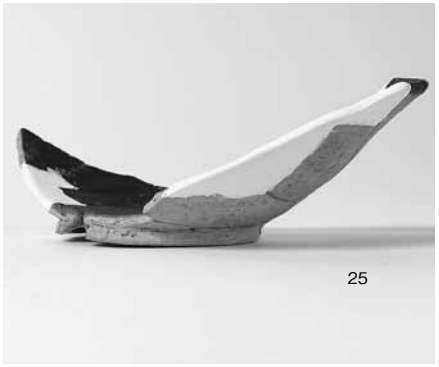
115-1

18

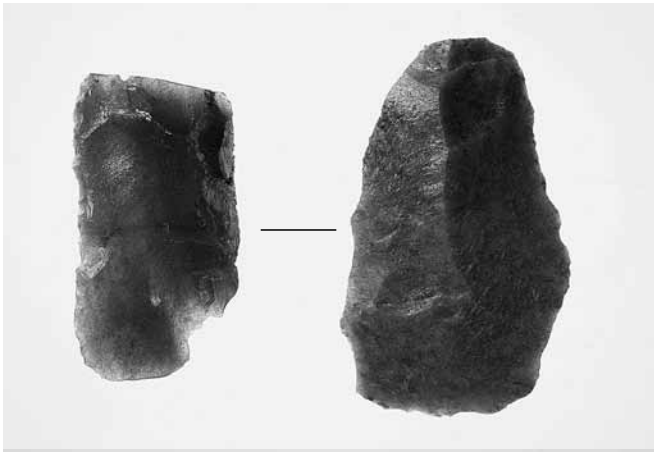
15

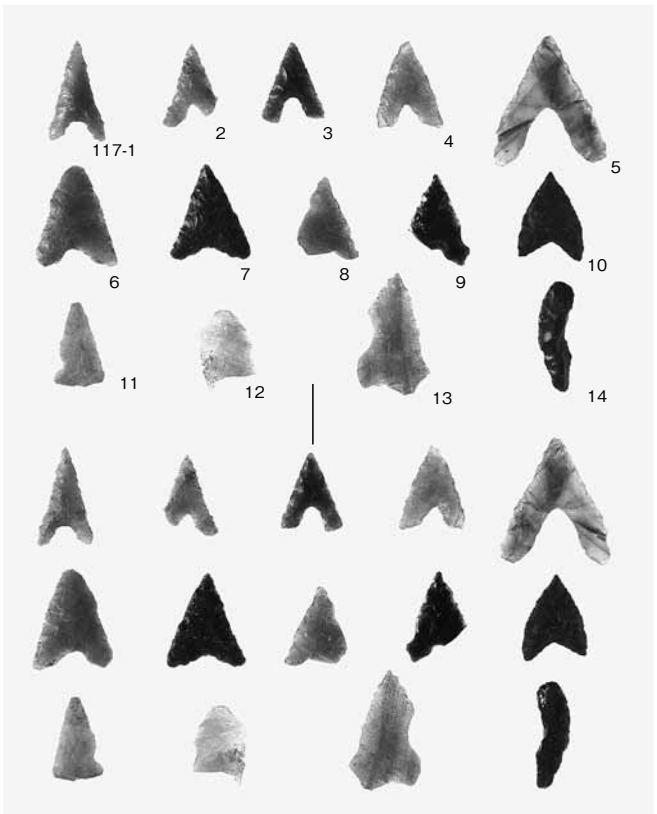
70 号竪穴住居跡出土土器、Ⅲ区遺構集中部検出中出土土器、Ⅲ区検出時・その他出土土器

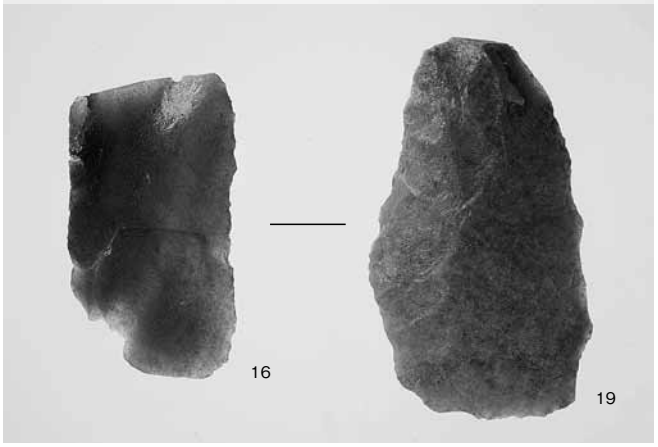

115-23

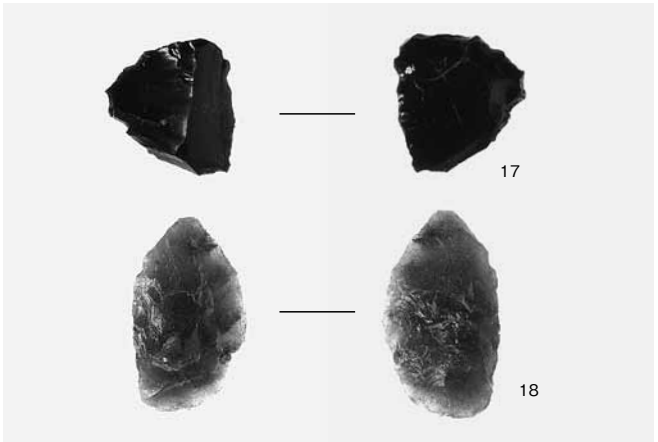

25

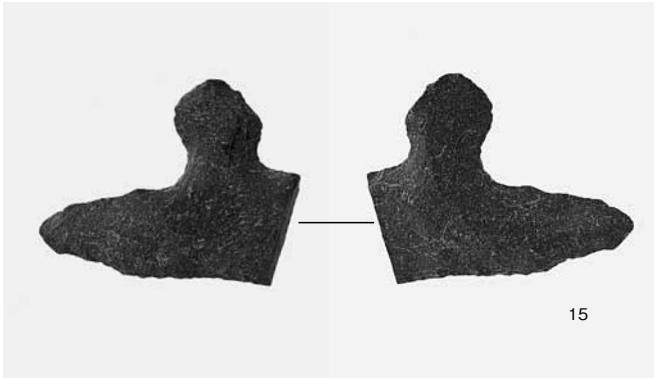
116-1

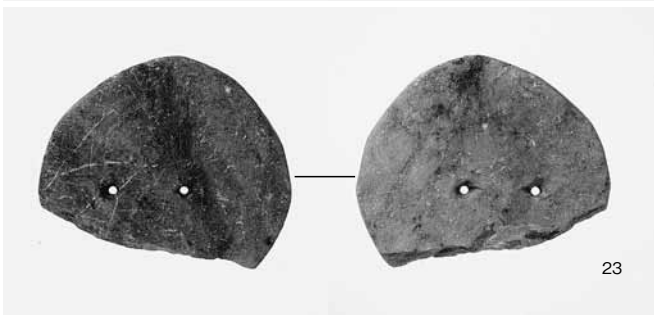



117-1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14

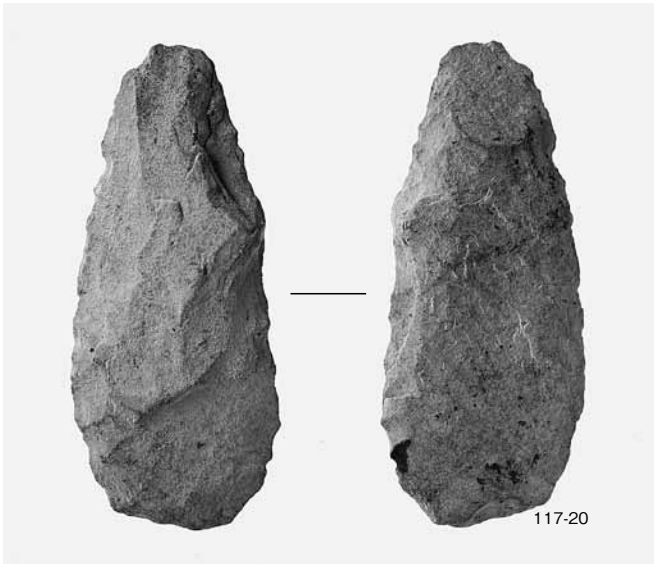

16
19

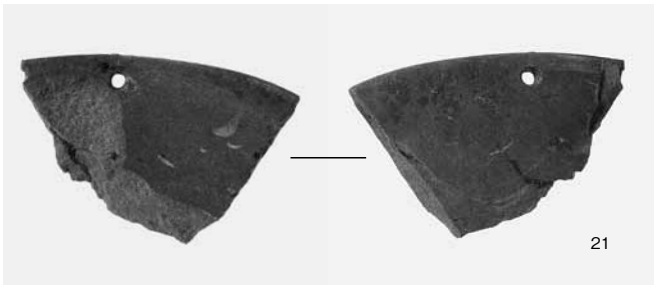

17
18

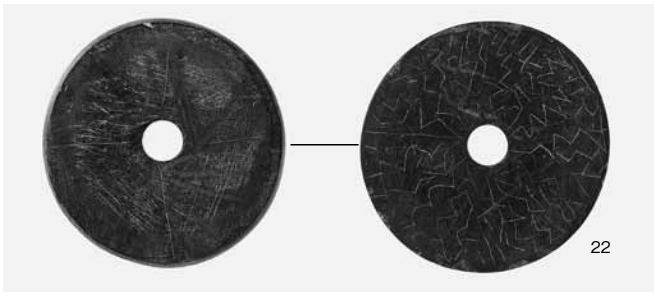

15

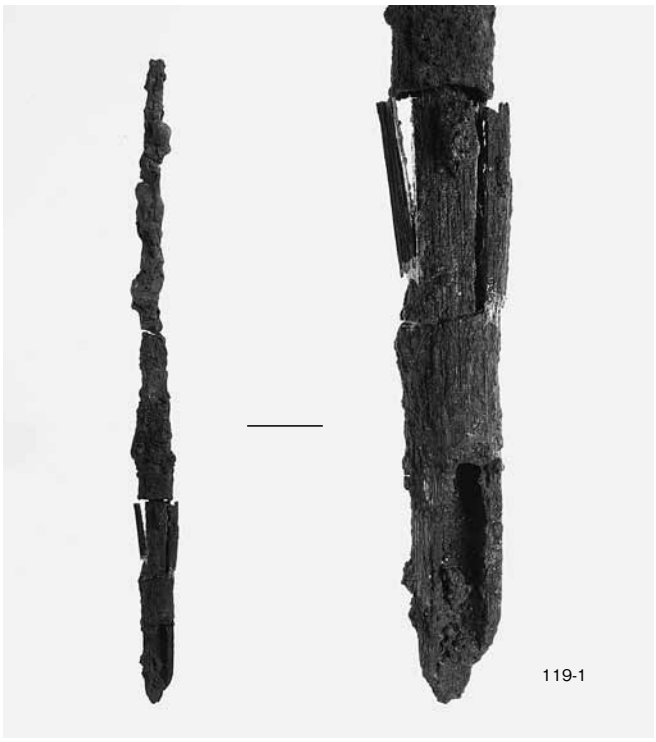

23

Ⅲ区検出時・その他出土土器、その他の遺跡出土土器・石器・石製品


117-20


21


22


119-1

13

14

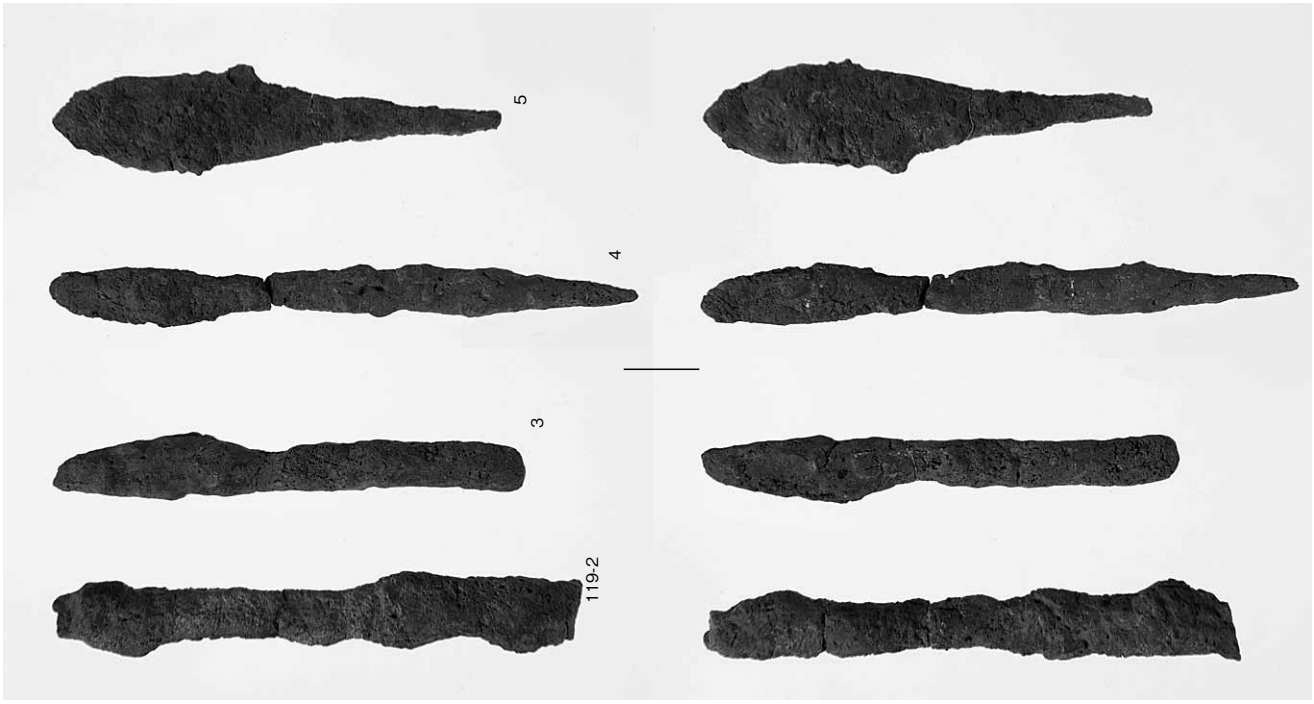
118-24

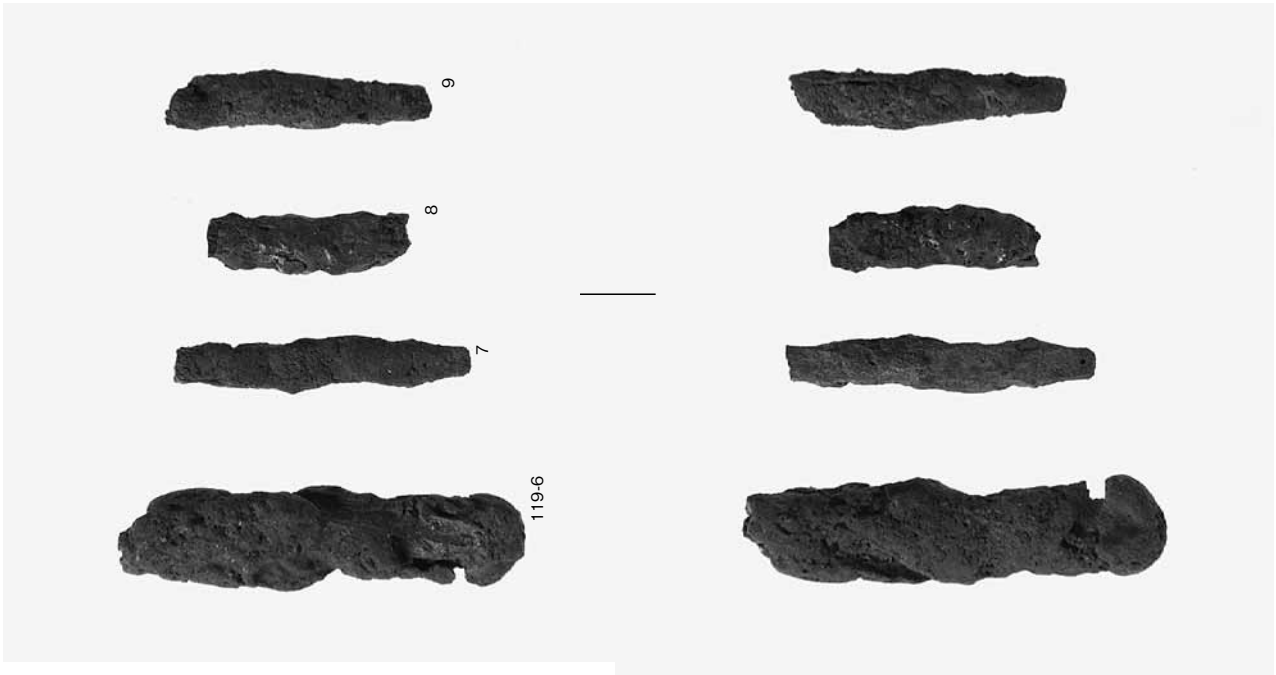
25

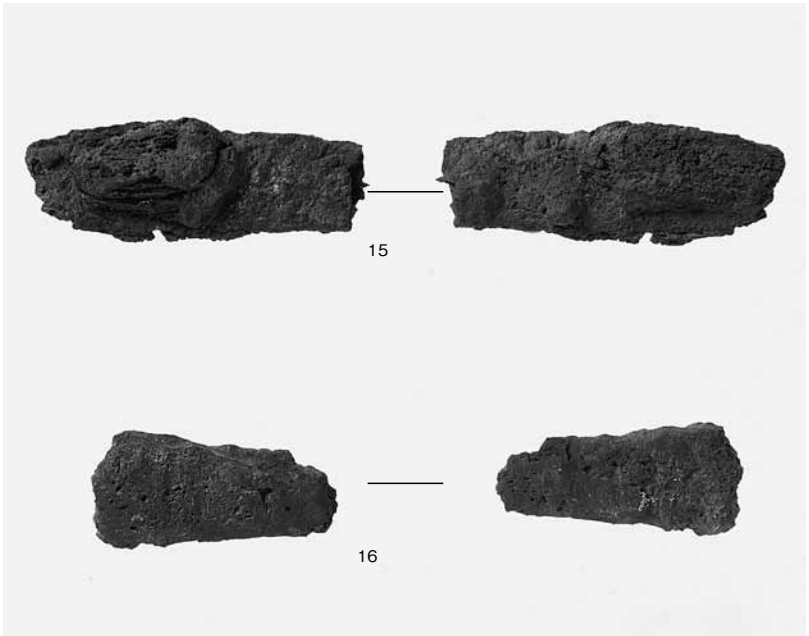
26

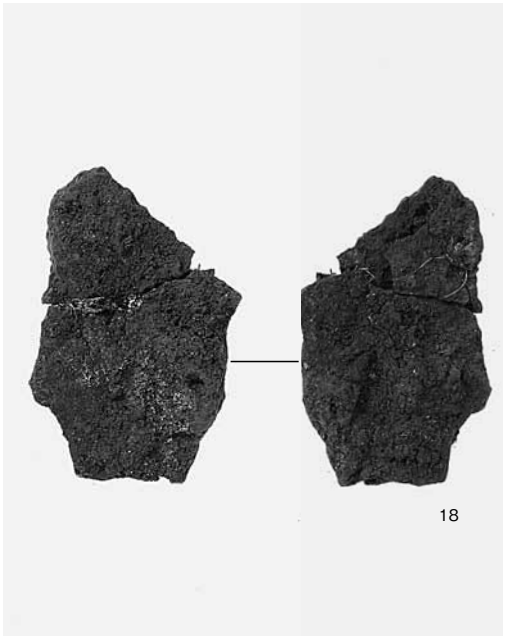
27

遺跡出土石器・石製品・鉄器



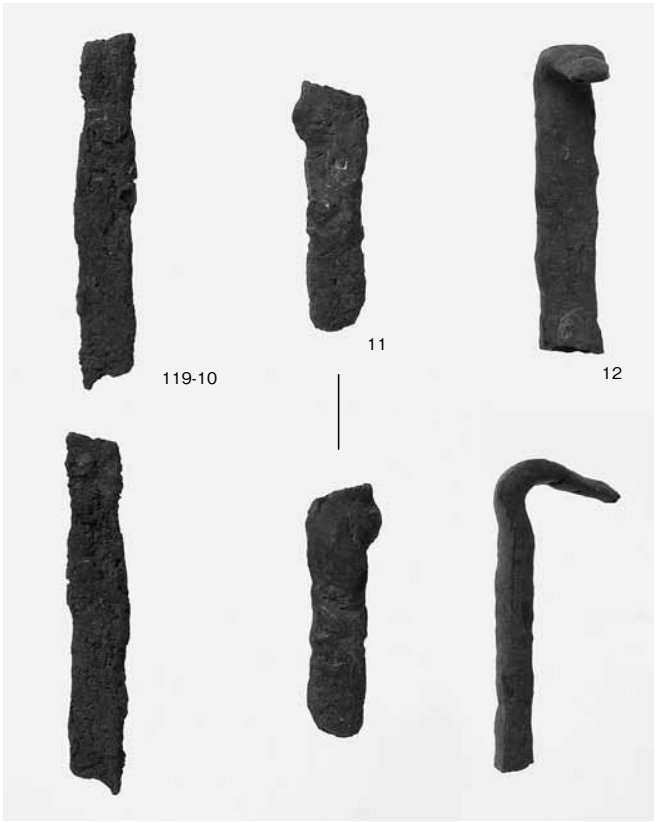


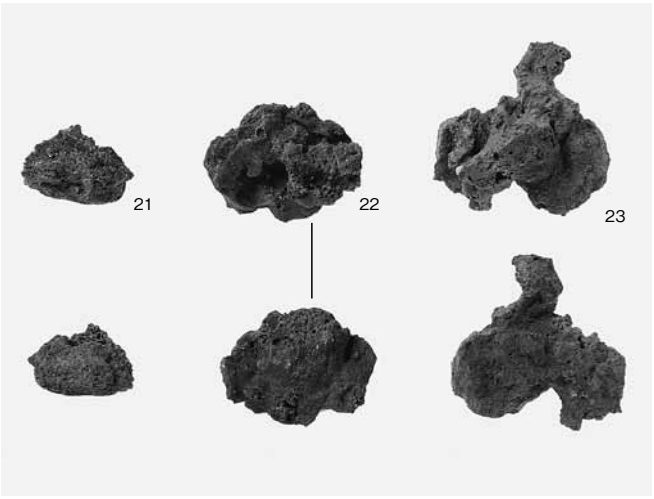


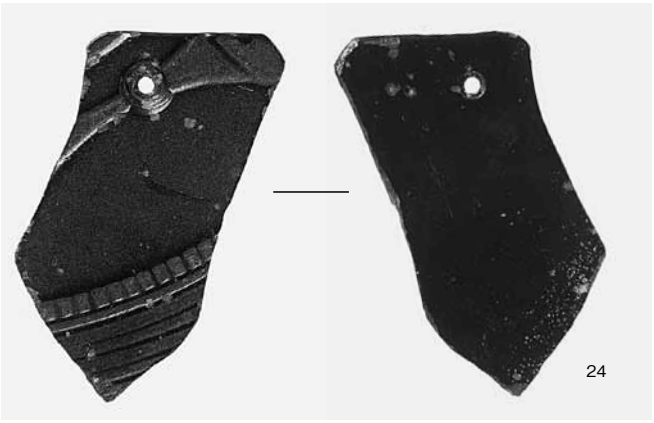


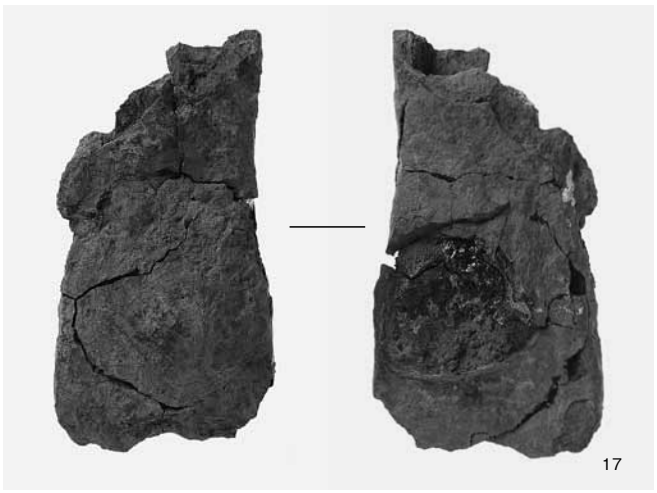
遺跡出土鉄器

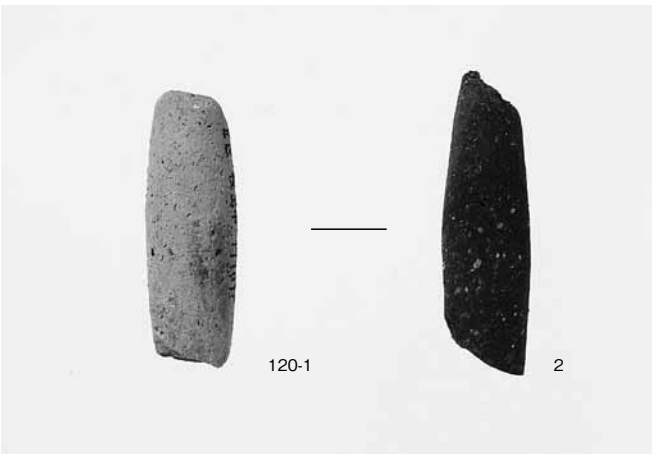
図版 70

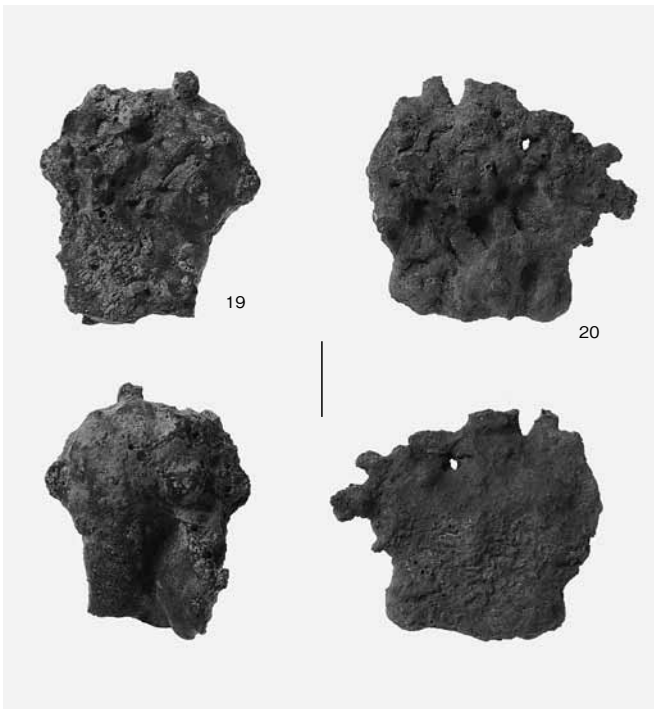


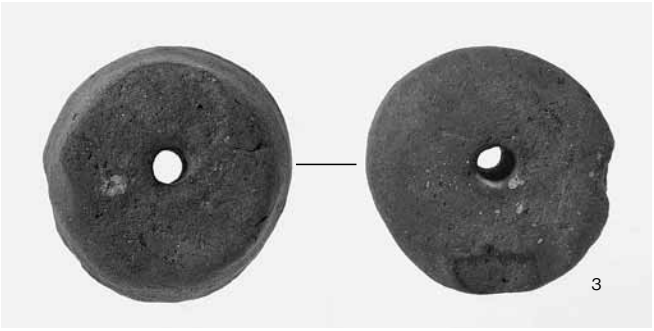


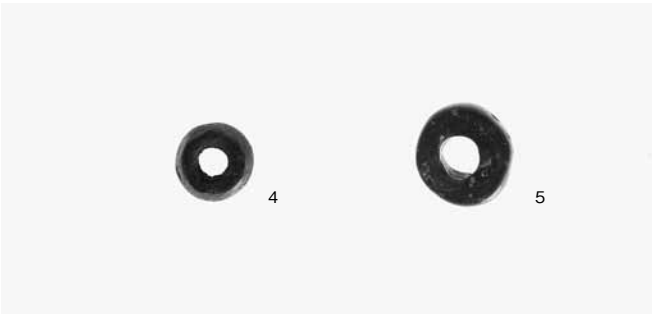












遺跡出土鉄器・鉄滓・青銅器・土製品・玉類

報告書抄録

ふりがな	とうだびわたいせきだい２じ
書名	塔田琵琶田遺跡第２次
副書名	福岡県豊前市久路土所在遺跡の調査
シリーズ名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	22
編著者名	小澤佳憲（編）、大森真衣子、（株）古環境研究所
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒838 − 0106　福岡県小郡市三沢 5208 − 3 （Tel：0942-75-9575、Fax：0942-75-7834） HP：http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/
発刊年月日	2015 年（平成 27 年）3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
とうだびわたいせきだい２じ 塔田琵琶田遺跡第２次	ぶぜんしおおあざきゅうろつち 豊前市大字久路土 90-1、91-1 ～ 3、92-1 ～ 3、93-1･2、113	40214	150156	33° 35’ 21″	131° 7’ 37″	20110412 ～ 20120327	38000㎡	高速道路建設

所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項
塔田琵琶田遺跡第２次	集落	古墳時代前期	竪穴住居跡 30 棟 土坑 5 基 土壙墓 1 基	土師器・鉄器・ 石器・破鏡	L 字状カマド
		古墳時代後期	竪穴住居跡 46 棟 掘立柱建物跡 1 棟 方形竪穴状遺構 1 基	土師器・ 須恵器・鉄器	
		時期不明	掘立柱建物跡 1 棟 土坑 5 基 方形竪穴状遺構 1 基		

調査の概要	塔田琵琶田遺跡は、平野中の微高地（埋没低台地）上に営まれた古墳時代の集落跡である。集落の存続した時期は古墳時代前期と中期後半～後期で、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑などから構成される。特徴的な遺構として、L 字状カマドが挙げられる。カマドを持つ竪穴住居跡の約 6 割、計 19 基が L 字状カマドを備えていた。そのほか、多種多様な鉄器類なども出土しており注目される。 なお、隣接地について、本次調査に引き続き第 3 ～ 6 次調査を実施しており、順次報告していく予定である。

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2117104
登録年度 26	登録番号 017

塔田琵琶田遺跡第２次

－福岡県豊前市久路土所在遺跡の調査－

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告－ 22 －

平成 27 年 3 月 31 日

発行　　九州歴史資料館

〒 838-0106　福岡県小郡市三沢 5208-3

印刷　　大同印刷株式会社

〒 849-0902　佐賀市久保泉町大字上和泉 1848-20